

# SIREN2 (サイレン2) / 小説

ドラ麦茶

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大型客船消失や全島民失踪事件など、不可解な事件が多発している日本近海の離島・夜見島。

ミステリー科学雑誌『アトランティス』の取材で島を目指す見習い編集者の一樹守は、航行中の船の上で怪異に巻き込まれる。

襲い来る赤い津波、鳴り響くサイレン、海から来る穢れ、よみがえる死者、そして、帰還する『鳩』。

一樹は、島で出会った美しい少女・岸田百合の願いで、島に囚われているという彼女の母の救出へ向かう。

一方、何かに導かれるようにしてこの島へ上陸した人々も、それぞれの目的のために行動を始めた。

昭和八十年八月三日、深夜〇時。

島に、サイレンが、鳴り響く――。

☆

PS2用ゲームソフト『SIREN2（サイレン2）』の小説です。

ストーリーは原作に沿って進行します。

目次

第一話	『慘劇』	三上脩	蒼ノ久集落／三上家二階	— 3 : 4 5 : 1
2				1
第二話	『怪異』	一樹守	夜見島沖／翔星丸	— 7 : 0 0 : 0 7
7				
第三話	『遭遇』	一樹守	夜見島港／ドルフィン棧橋	— 3 : 5 0 :
5 2				16
第四話	『不時着』	永井頼人	夜見島／碑足岬	— 2 : 2 4 : 2 7
29				
第五話	『実戦』	永井頼人	夜見島遊園／管理小屋	— 1 : 5 9 : 5
3				33
第六話	『懇願』	一樹守	夜見島／四鳴山林道	— 2 : 2 4 : 3 2
41				
第七話	『予兆』	藤田茂	夜見島金鉈採掘所	— 5 : 2 6 : 5 1
44				
第八話	『疑惑』	一樹守	夜見島／瓜生ヶ森	— 0 0 : 0 1 : 4 4
51				
第九話	『幻視』	一樹守	夜見島／瓜生ヶ森	— 0 : 0 1 : 0 8
56				
第十話	『過去視』	喜代田章子	夜見島／蒼ノ久漁港	— 1 : 0 0 :
1 1				69
第十一話	『邂逅』	三上脩	夜見島／蒼ノ久集落	— 2 : 2 5 : 1 0
				78
第十二話	『不信』	一樹守	夜見島／瓜生ヶ森	— 0 : 3 9 : 5 1
88				

第十三話 『違和感』 喜代田章子 夜見島／崩谷 0：40：38

91

第十四話 『悪夢』 三沢岳明 夜見島／瓜生ヶ森 1：09：57

104

第十五話 『迷道』 一樹守 夜見島遊園／コーヒーカーップ 3：4

5：28

108

第十六話 『咆吼』 一樹守 冥府 5：40：39

116

第十七話 『予兆』 藤田茂 夜見島金鉱採掘所 | 5：26：51

終了条件2

124

第十八話 『感応』 岸田百合 夜見島／瓜生ヶ森 1：40：07

127

第十九話 『喪失』 矢倉市子 ブライトウイン／貨物室 1：20：

19

129

第二十話 『違和感』 喜代田章子 夜見島／崩谷 0：40：38

終了条件2

140

第二十一話 『闖入者』 喜代田章子 東京／夢魅の館 | 29：0

4：06

147

第二十二話 『不協和』 永井頼人 ブライトウイン／左舷通路 2：

34：02

158

第二十三話 『実戦』 永井頼人 夜見島遊園／管理小屋 | 1：5

9：53

166

第二十四話 『幻影』 三沢岳明 夜見島金鉱社宅 4：42：40

177

第二十五話 『邂逅』 三上脩 夜見島／蒼ノ久集落 | 2：25：1

0 終了条件2

181

第二十六話 『代役』	阿部倉司	夜見島／第1砲台跡	3 : 4 7 : 0
8			186
第二十七話 『喪失』	矢倉市子	ブライトウイン／貨物室	1 : 2
0 : 1 9	終了条件2		191
第二十八話 『悔恨』	藤田茂	蒼ノ久集落／三上家居間	2 : 4 9 :
1 1			196
第二十九話 『再会』	藤田茂	夜見島／第1砲台跡	5 : 1 4 : 5 5
199			
第三十話 『不協和』	永井頼人	ブライトウイン／左舷通路	2 : 3
4 : 0 2	終了条件2		207
第三十一話 『破綻』	永井頼人	夜見島／瓜生ヶ森	3 : 0 0 : 5 9
213			
第三十二話 『幻影』	三沢岳明	夜見島金鉱社宅	4 : 4 2 : 4 0
終了条件2			216
第三十三話 『呪詛』	三沢岳明	羽生蛇村／土砂災害現場	2年前
224			
第三十四話 『迷道』	一樹守	夜見島遊園／コーヒーカップ	3 : 4
5 : 2 8	終了条件2		229
第三十五話 『代役』	阿部倉司	夜見島／第1砲台跡	3 : 4 7 : 0
8	終了条件2		233
第三十六話 『奇憶』	三上脩	夜見島遊園／時計広場	4 : 0 3 : 5
7			241
第三十七話 『鳩の帰還』	岸田百合	冥府	6 : 0 0 : 0 0
243			
第三十八話 『漂着』	加奈江	夜見島港／岩場	2 9年前
253			
第三十九話 『脱出』	木船郁子	冥府	8 : 5 9 : 0 7
256			

第四十話 『呪縛』 木船郁子 夜見島港／岩場 2：13：33

264

第四十一話 『脱出』 木船郁子 冥府 8：59：07 終了条件2

271

第四十二話 『別離』 木船郁子 蒼ノ久集落／三上家居間 11：4

8：46 281

第四十三話 『畏怖』 阿部倉司 夜見島／四鳴山林道 12：58：

10 287

第四十四話 『共鳴』 多河柳子 東京／河合荘203号室 31：

59：04 300

第四十五話 『彷徨』 喜代田章子 夜見島／蒼ノ久集落 15：3

1：58 307

第四十六話 『決起』 太田常雄 蒼ノ久集落／太田家大広間 4：

00：09 322

第四十七話 『惨劇』 三上脩 蒼ノ久集落／三上家二階 3：4

5：12 終了条件2 327

第四十八話 『畏怖』 阿部倉司 夜見島／四鳴山林道 12：58：

10 終了条件2 337

第四十九話 『記念日』 喜代田章子 夜見島港 14：01：10

349

第五十話 『逃亡』 加奈江 夜見島港／旧道 1：50：46

353

第五十一話 『消失』 太田ともえ 夜見島灯台 0：00：47

359

第五十二話 『既視感』 木船郁子 夜見島／瓜生ヶ森 15：31：

	07
第五十三話 『彷徨』 喜代田章子 夜見島／蒼ノ久集落	15:3
1:58 終了条件2	366
第五十四話 『覚醒』 喜代田章子 蒼ノ久集落／三上家玄関	17:
41:33	372
第五十五話 『狭間』 三上脩	——／——
コ殍…」从:久ゴ	
377	
第五十六話 『再会』 藤田茂 夜見島／第1砲台跡	5:14:55
終了条件2	380
第五十七話 『孤影』 矢倉市子 夜見島／潮降浜	8:50:32
384	
第五十八話 『虚無』 三沢岳明 夜見島／第1砲台跡	13:00:
27	391
第五十九話 『憎悪』 一樹守 ブライトウイン／甲板	15:04:
44	394
第六十話 『闇人』 木船郁子 四鳴山／離島線4号基鉄塔	20:1
9:42	401
第六十一話 『模倣体』 矢倉市子 海中	00:51:08
416	
第六十二話 『孤影』 矢倉市子 夜見島／潮降浜	8:50:32
終了条件2	419
第六十三話 『虚無』 三沢岳明 夜見島／第1砲台跡	13:00:
27 終了条件2	425
第六十四話 『暴発』 永井頼人 夜見島／蒼ノ久集落	14:00:
45	432

第六十五話 『奪還』	永井頼人	夜見島金鉱社宅／ハ棟102号室	14:45:29	437
第六十六話 『真実』	矢倉市子	夜見島／第2砲台跡	5:54:5	446
第六十七話 『幻視』	一樹守	夜見島／瓜生ヶ森	0:01:08	453
終了条件2				
第六十八話 『断末魔』	太田ともえ	夜見島／蒼ノ久集落	1:1	458
7:46				
第六十九話 『憎悪』	一樹守	ブライトウイン／甲板	15:04:	461
44	終了条件2			
第七十話 『反抗』	一樹守	ブライトウイン／操舵室	16:58:	465
59				
第七十一話 『苦悶』	阿部倉司	夜見島金鉱採掘所	19:28:1	479
7				
第七十二話 『共闘』	永井頼人	四鳴山／離島線4号基鉄塔	18:	490
05:01				
第七十三話 『奪還』	永井頼人	夜見島金鉱社宅／ハ棟102号室		512
14:45:29	終了条件2			
第七十四話 『共闘』	永井頼人	四鳴山／離島線4号基鉄塔	18:	515
05:01	終了条件2			
第七十五話 『闇人』	木船郁子	四鳴山／離島線4号基鉄塔	20:	520
19:42	終了条件2			
第七十六話 『和解』	木船郁子	四鳴山／離島線4号基鉄塔	21:	529
39:01				
第七十七話 『苦悶』	阿部倉司	夜見島金鉱採掘所	19:28:1	





55	第九十四話 『失われた世界』	阿部倉司	夜見島灯台	24:45:	673
669	第九十三話 『奪われた世界』	永井頼人	不明	24:32:22	664
9:59	第九十二話 『収束する世界』	一樹守	四鳴山／離島線4号基鉄塔	23:5	661
9:27	第九十一話 『終焉』	一樹守	四鳴山／離島線4号基鉄塔	23:5	643

第一話 『惨劇』 三上脩 蒼ノ久集落／三上家二階

—3：45：12

夕方に降り始めた雨は、七時を過ぎた頃に激しさを増し、叩きつけるような雨音を響かせていた。

明日の保育園の支度を終え、お気に入りのロケット柄のパジャマに着替えた三上脩みかみしゆうは、窓に張りつくようにして空を眺めていた。明日はずっと雨が降る、と、お父さんは言っていた。脩の友達は、「お外で遊べないから雨は嫌い」と言う。ほとんどの子供はそうかもしれない。だが、脩は違った。窓越しに空を見上げている脩の顔には笑みが浮かんでいる。まるで、雨が降るのが嬉しくてたまらないかのようだ。実際、嬉しいのだ。脩は雨が好きだった。ずっと雨が降ってくればいいのに、とさえ思っている。雨が降ると、お姉ちゃんとお外で遊べるから。

「——脩、もう寝る時間だぞ?」

部屋に布団を敷いていたお父さんが優しい口調で言った。時刻は夜の八時十五分。八時には布団に入る約束だから、少し時間を過ぎていくことになる。脩は、「はあい」と素直に返事をし、カーテンを閉め、布団の中に入った。お父さんは掛け布団を整えると、脩の頭を撫でた。脩は少しくすぐったげに目を閉じた後、「ねえ、お父さん」と言って、父の顔を見た。

「ん? なんだ?」

「お父さんのお仕事は、宝探しでしょ?」

お父さんはわずかに目を丸くした後、ははは、と笑った。「宝探しか。まあ、そうだな」

「僕も宝探し得意だよ? 今日も、いっぱい見つけたんだ」

「そうか。それはすごいな。じゃあ、今度の日曜に、お父さんと一緒に探そうか?」

「うん!」

元氣よく返事をする脩の頭を、お父さんはもう一度撫でる。

脩はさらに言う。「お姉ちゃんも、一緒に宝探しできるといいね」  
お父さんは、もう一度笑ってくれる——そう思っていたが。  
お父さんの顔から、急に笑みが消えた。

「……ああ、そうだな……」  
目を逸らし、声も暗くなる。

何か、いけないことを言っただろうか？ 怒られるかもしれない。  
怒った時のお父さんは怖い。先に謝った方がいいのだろうか？ 悪いことをしても、素直に謝ると、お父さんは許してくれる。でも、何が悪いのか判らないまま謝ったときは、許してくれない。残念ながら、今どうしてお父さんが怒っているのかは判らない。

だが、お父さんはすぐに元の笑顔に戻ると、「じゃあ、お休み」と言っ  
て、立ち上がった。良かった。お父さんは別に怒っていなかったんだ。そう思い、脩は、「うん、おやすみなさい」と、笑顔で答えた。

お父さんは明かりを消し、部屋を出た。足音が遠ざかり、やがて聞こえなくなる。部屋は、雨音が響くだけになった。

——あしたは、お姉ちゃんと一緒に、また宝探しできるといいな。  
脩は明日も雨が降っていることを願いつつ、眠りについた。

日本近海にある小さな島・夜見島。三上脩は、夜見島の西部にある  
蒼ノ久あおのくという集落で、父親と二人暮らしをしている少年だ。母親は、  
脩が生まれて間もなく事故で亡くなった。兄弟はいない。脩が「お姉  
ちゃん」と慕う少女は、彼と血のつながりはなかった。近所に住む年  
上の少女——というわけでもない。この「お姉ちゃん」の存在は、か  
なり特殊だった。三ヶ月前、蒼ノ久集落から少し南へ行ったところ  
にある灯台付近の岩場に倒れていたところを、脩と父が見つけたのだ。  
以来、少女は三上家で暮らしている。早くに母親を亡くし、兄弟もい  
ない脩は、少女のことを本当の姉のように慕い、懐いていた。

——お姉ちゃんは、人魚姫。

脩は、そう信じている。

美しい人魚の少女が、人間の王子に恋をし、魔女から貰った薬で人間となって王子の元へ向かう、世界的に有名な童話だ。脩のお気に入りの絵本でもある。岩場の波打ち際に倒れていた少女は、海から来たに違いない。少女は生まれて一度も陽の光を浴びたことがないので、と思うほど、真つ白な肌をしていた。その肌を守るかのように、少女は陽の光にあたるのを嫌った。日中は家に閉じこもっており、外に出るのは夜や雨の日など、太陽が見えない時に限られた。家にいる時も、カーテンは閉め切り、電気さえ点けない暗い部屋で過ごしていた。そういう普通の人と違った行動をする点も、海の底に住んでいた人魚だから、と、脩は思っている。

脩はまだ四歳の子供だ。人魚が実在すると思っけていても不思議はない。童話のような出来事が実際に起きると信じていても、子供ならごく普通のことだ。だから、行き倒れの少女を警察にも届けず一緒に暮らし始めたことにも、何の疑問も抱いていない。そういうものだと思っけていたのだ。

そして。

なぜ、お姉ちゃんは雨の日や夜でないと外に出ないのか、なぜ、お姉ちゃんの話をするとう父が渋い顔をするのか。

その理由を考えることもない。そういうものだとう、なんとなく思っけていた。

お父さんの悲鳴が聞こえた——ような気がした。

初めは、夢を見ていると思っけた。ぼんやりとした意識の中で、いろいろな音が聞こえてくる。玄関の戸を激しくたたいた音。「開けろー」「出てこいー」と数人の男が怒鳴る声。無理矢理戸をこじ開けるような音。驚く声。そして、がちゃん、と、ガラスが割れる音。

そこで、脩はようやく目を覚ました。いま聞っけていた音や声は、夢だっただのか、現実だっただのか、すぐには判らなかつた。

だが、部屋の外から、「奥だ！」「逃がすな！」「追え！」と、何人も男の人の声が聞こえ、夢ではないと気がついた。

この部屋の下、一階の玄関だろう。男たちの怒声と共に、がたがたと荒々しく床を踏みしめる音がした。

だが、しばらくすると急に静かになった。屋根と窓に降る雨の音が響くのみである。さっきの声の人たちは、出ていったのだろうか？

脩は、ゆっくりと布団から出ると、襖を開けた。部屋を出てすぐに階段があり、下りた先が玄関だ。廊下に出て、一階の様子をそつとうかがう。玄関の明かりは点いている。人の気配は、ない。

「——お父さん？ お姉ちゃん？」

一階にいるであろう二人を、恐る恐る呼んでみるが、返事は無かった。

どうしよう？ と、脩は考えた。なんだかすごく怖い感じがする。脩はまだ四歳だが、一人で寝ることができるし、夜中に一人でトイレに行くこともできる。どちらも、お姉ちゃんと暮らしはじめてからできるようになった。それまではお父さんがそばにいないと眠れず、一緒でないとトイレにも行けなかったが、お姉ちゃんに、「男の子なら、それくらい一人でできなきゃダメよ？」と言われ、やらなきゃいけないと思った。お姉ちゃんに言われると、不思議と勇気が湧いてきた。もう、一人で眠るのも、一人でトイレに行くのも、怖くない。だが、いま階段を下りて行くことは、ものすごく怖いことのように思えた。このまま布団に戻り、眠ってしまえば、朝には何事もなく目が覚め、お父さんとお姉ちゃんと一緒に朝ごはんを食べ、保育園に行ってみなと遊べるかもしれない。

いや。

なぜだろう？ 脩は、もうそんないつもの一日は来ないんじゃないかという気がした。

——脩、勇気を出して。

お姉ちゃんの声が聞こえた気がした。

脩は、勇気を出して、階段を下りて行った。

普段から、階段を下りる時は急いではいけない、と、お父さんから

言われている。急ぐと、転んで怪我をするから。だから、手すりをしつかりと持って、いつも以上に気を付けて、下りて行く。

——めいふくだり。

ふと、その言葉を思い出す。

少し前の雨の日、お姉ちゃんと外で宝探しをしていたとき、そう言っていた。宝物を全部見つけたら、めいふくだりをするの、と。意味は判らなかつたけれど、なんだかすごく怖い言葉だった。きつと、今みたいに恐ろしい場所へ向かうことを、めいふくだりと言うのだろう。そんなことを思う。

脩は、一段一段しっかりと階段を踏みしめ、一階まで下りた。

そこに、お父さんがいた。

玄関に頭を向け、仰向けで、大きく目を見開いたとても怖い顔で、倒れていた。胸や腹が赤く染まつている。床には、同じ色の水溜りが広がっている。あれは、血だろうか？　たくさん血が流れると死ぬ、ということ、脩はまだ知らない。ただ、転んだりして怪我をすると、血が出て、とても痛い、ということは知っていた。あんなにたくさん血が出たらものすごく痛い、ということは判った。

「お父さん。大丈夫？」

返事はない。だから、もう一度声をかけた。今度は腕を持って揺すってみた。それでも、お父さんは返事をしない。

「お父さん、起きてよ。お父さん」

何度も呼びかけ、何度も揺する。日曜の朝、お父さんはなかなか起きない。また、お酒をたくさん飲んだ日は、布団に入らずそのまま寝てしまうこともある。そんなときでも、お父さんと呼んで、腕を揺らせば、すぐに目を覚まして、返事をしてくれた。

でも、今は。

「お父さん！　お父さん！　お父さん！！」

どんなに声をかけても、どんなに腕を揺すっても、お父さんは怖い顔のまま返事をしない。たくさん血を流したまま動かない。それがとても恐ろしくて、怖くて、何度も何度もお父さんと呼び、腕を揺する。

ふと、玄関に、誰かいることに気がついた。  
見ると、大きな犬を連れた知らない男の人が立っていた。  
脩は――。



――お姉ちゃん！ 助けて！

とつさに、お姉ちゃんがいる奥の部屋へ向かって逃げ出した。



第二話 『怪異』 一樹守 夜見島沖／翔星丸 — 7 :

00:07

四開地方・中迂半島の沖合約三十キロの海域に、総面積約四キロ平方メートル、海岸線長約十六キロメートルの小さな島がある。上空から見ると飛び立つ鳩を思わせる形をしたその島は、正式名称を『夜見島』という。夜を見る島——美しい響きだ。この名から、満天に光る星々、あるいは、煌々と輝く月を思い浮かべる人も多いだろう。

だが、島外の者は、その美しい呼び名を使わない。『忌み島』『黄泉島』などと呼ぶ。どちらも『夜見島』のような美しい響きはなく、どこか不吉なものを感じさせる呼び名だ。あるいは、そのような遠回しな言い方ではなく、はつきりとその不吉さを言い表すために、『呪われた島』と呼ぶ者もいた。

なぜ、島外の人間からはそのような名で呼ばれるようになったのか。理由は明白だ。昔から、夜見島及びその近海では、奇妙な事件・事故が多いのだ。航行する船が座礁、転覆、遭難することは決して珍しくない。さらには、常識では考えられないような事件も多発していた。

例えば。

昭和五十一年八月二日深夜、水深三百メートルの地点にある電力供給用の海底ケーブルが何者かによって切断された『海底ケーブル切断事件』。

昭和六十一年八月三日、付近を航行中の旅客船・ブライトウィン号が忽然と姿を消した『ブライトウィン号消失事件』。

極めつきは、海底ケーブル切断事件と同時に起こった『夜見島島民消失事件』である。昭和五十一年八月三日。ケーブル切断の調査をするため島へ上陸した電力会社の職員が、島民の姿が見えないため警察に通報。駆け付けた警察は島全域を搜索するも、誰一人として発見することはできず、全島民が失踪扱いとなった。このとき失踪した島民は、二十九年経った昭和八十年八月二日現在も、全員消息不明のまま

である。

このような出来事が多発しているため、四開地方の人間は夜見島を露骨に忌み嫌う。港を発着する船は島近くの航行を避け、時間をかけてでも大きく迂回する航路を取るものがほとんどだった。現在夜見島への上陸は条例により禁止されている。もともと、今は誰も住んでいないこの不吉な島へわざわざ上陸しようという住民など皆無なのだ。

ただし。

夜見島の奇妙な噂話を聞きつけて、興味本位で島へ渡ろうとする部外者は、後を絶たなかった。

☆

夜見島へと向かう小さな釣り船の船室で、一樹いつきまもる守は何とも言えない気まずい空気に困り果てていた。一〇平米にも満たないであろう狭い船室に、四人の男女と一匹の大型犬が乗り合わせている。皆、一樹とはほんの数時間前に港で会ったばかりだ。お互い自己紹介でもすれば会話のつかかりが掴めるかもしれない。しかし、ここにいる者は皆、本来なら上陸が禁止される島へ向かっている人間だ。各々なんらかの事情を抱えているのは明白であり、あれこれと詮索されたくないだろう。だから、誰も会話をしようとしなない。すでに三十分以上、この気まずい沈黙が続いている。

一樹の隣に座るのは、スーツ姿の三十歳前後の男だった。白い杖を持ち、室内でもサングラスをかけていることから、視覚障害者であると思われる。大型犬を連れてくるのはこの男だ。一樹は犬には詳しくないが、警察犬でよく見る犬種だった。男のすぐそばにおとなしく伏せており、初めての場所、初めての人ばかりであるにもかかわらず、ここまで一度も吠えたり、あるいは興奮してじゃれ付いたりすることも無かった。盲導犬としての訓練を受けているのかもしれない。

一樹の正面には二十代と思われる二人組の男女が座っている。男の方は、リーゼントの髪型、黒のデニムジャケットにズボン、二列に

穴が空いた幅広のベルトにはチェーンを付け、首には十字架のネックレスを下げている。いかにもヤンキーと言った格好の男だ。その隣に座る女は、クリーム色のつば広帽子を目深にかぶり、まん丸のサングラス、地味な紺色のジャケットを羽織っている。だが、ジャケットの下は対照的にピンクと白の派手な柄のキャミソール、首には赤青色など様々な色の小さな石を繋ぎ合わせたネックレスをふたつと、シルバーとゴールドのチェーンネックレスもふたつして、両腕にもじやらじやらとたくさんのブレスレットを付けている。派手にしたいのか地味にしたいのか、よく判らない格好だ。この二人は知り合いらしく、時折会話をしているのだが、あからさまに声を潜め、こちらからの視線を遮るように常に顔を手で覆っている。顔を見られたくないのかもしれないが、それらの不審な行動がかえって目立っていた。

沈黙に耐えかねた一樹は、「あの——」と、隣のスーツの男に声をかけた。「船、乗せていただき、ありがとうございます」

男は一樹の方を見ることも無く、「構いませんよ。たまたま目的地が同じだっただけです」と、そっけない口調で答えた。それで、会話は途絶えてしまう。

何を話したものと考える一樹。ひとつだけ訊いてみたいことがあるのだが、はたしてそれを口にして良いものか判らない。一樹は、港でこの男と会った時から、どこかで見た覚えがあつたのだ。少し前にそれを思い出した。作家の三上脩だ。二〇〇二年、文芸誌に初掲載された作品が話題になり、翌年、同作品で第四四回塵芥賞ちりあくたを受賞。今年刊行された長編小説『人魚の涙』がベストセラーとなった人気作家だ。本好きはもちろん、最近はテレビや雑誌などに多数出演しているため、普段本を読まないような人にも知られている有名人である。そんな彼が、なぜ上陸を禁じられている島へ向かっているのだろうか。しばらく悩んだ一樹だったが、結局訊くのはやめた。恐らくそのような詮索はされたくないだろう。一樹自身も島へ向かっている理由はあまり話したくないし、船に乗せてもらった恩もある。

一樹は三上に話しかけるのをやめ、正面の二人を見た。相変わらず手で顔を隠しており、話しかけるような雰囲気ではない。

一樹は小さくため息をつく、そのまま黙って船の揺れに身を任せた。

一樹守は、超科学編集社という雑誌社に勤める二十歳の編集員だ。担当はミステリー科学雑誌『アトランティス』。「現実と非現実の境を飛び越える！ 謎解明マガジン」をキャッチコピーとし、心霊現象、UFO、UMA、超能力、都市伝説など、あらゆるオカルトを扱う雑誌だ。先月末に発売された最新号では、『宇宙は無限に分裂・増殖しているとする多世界解釈』や、『恐竜よりも太古の時代に存在した人類』、『レコード業界を席卷した大ヒット曲には人類滅亡のキーワードが秘められていた』、などの特集記事を組んだ。どれも見るからに怪しげな内容で、一般人からは見向きもされれないが、そのテのマニアへの人気は高い。創刊は昭和五十一年六月。来年三十周年を迎える老舗雑誌である。一樹も子供の頃から愛読しており、それがきっかけで専門学校時代にアルバイトとして勤務することになった。そして、その時の働きぶりが評価され、専門学校卒業と同時に正社員として採用されたのである。とは言えまだ見習いの身であり、主な業務はバイト時代とあまり変わらない編集のアシスタントだった。

一樹が夜見島へ向かっているのは、この『アトランティス』に関する仕事だった。先日の会議で、夜見島で起こったさまざまな怪事件を特集することが決まったのである。残念ながらその担当は一樹ではなくベテランの編集者が行うことになった。一樹はアシスタントとして、まず現地の簡単な事前調査を任されたのである。主な目的は、島への上陸手段の確保だった。現在夜見島への上陸は条例により禁止されており、当然、定期船などは出ていない。もし島へ上陸できなければ企画自体中止になりかねないので、重要な仕事とも言えた。

中迂半島の三逗港さんずへとやってきた一樹はさっそく調査を始めたが、思っていたよりも難航した。港の者は皆、夜見島の名を聞いただけで露骨に顔をしかめ、口を閉ざす。定期船は出ていないので島へ渡るに

は船をチャーターするしかないのだが、どこに頼んでもけんもほろろに追い返された。それでも粘り強く調査を進めた一樹は、『翔星丸』しやうせいまるという釣り船の船長と交渉することができた。船長は「百万払うなら連れて行ってやってもいい」と言う。冗談とも本気ともつかないが、他の人は話すらまともに聞こうとしなかった為、この男に頼るしかなかった。しかし、釣り船のチャーターは一万円前後が相場であり、いくらなんでも高すぎる。編集長がそのような費用を認めるとは思えない。困り果てていたところで偶然出会ったのが、大型犬を連れたサングラスの男——三上脩だった。彼も一樹と同じく夜見島へ向かう手段を探しているという。一樹が翔星丸の話をする、三上は船長と交渉し、島へ向かうことを了承させたのだ。どのように交渉したのかは判らないが、もしかしたら本当に百万円払ったのかもしれない。

翔星丸は準備ができ次第すぐに出港するという。一樹は考えた。編集長が百万円もの費用を出すとは思えない。この機を逃すと、二度と島へは渡れないかもしれない。今回の夜見島の記事を担当する先輩編集者を呼ぶ時間はない。ならば、今ここで自分が取材するしかないだろう。幸い、カメラやボイスレコーダーなど最低限取材に必要な物は持っている。自分の能力をアピールするチャンスにもなる。そう思った一樹は、三上に同行をお願いした。無茶なお願いだとは思ったのだが、三上は意外にもあっさり承諾した。目が見えないためちやうど同行者を探していたようだった。一樹としては、それくらいで船に乗せてもらえるならありがたい話だった。

一樹と三上は早速夜見島へ向かおうとしたのだが、出港直前、怪しげな格好の男女二人組がやってきて、自分たちも乗せてくれと頼んできた。二人は乗せろ乗せないで船長と押し問答になったが、時間を惜しんだ三上が認めたため、同乗することになった。

こうして、奇妙なメンバーが小さな釣り船に乗り合わせるこゝになつたのである。

会話を諦めた一樹は、船の揺れに身を任せながらぼんやりと正面の窓を眺めていた。窓の向こう側を人影が移動する。この船には、いま部屋にいる四人と船を操縦している船長以外にもう一人乗っている。港で働く女性で、船長からは木船きふねと呼ばれていた。歳は一樹と同じくらい。港で働く女性にしては随分若いので印象に残っている。

女は船の後部甲板へ移動する。後部側のドアには丸窓があり、そこから黄色いパーカーの背中が見えた。何か作業を始めたようだった。視線を戻し、これからのことを考える一樹。今回の特集記事のメインは、やはり昭和五十一年の八月二日深夜に発生した島民消失事件だろう。一晩で島民全員が失踪し、いまだ誰一人見つかっていないなど、常識では考えられないことだった。また、海底ケーブル切断や旅客船失踪事件も実に興味深い。それら大きな事件の他にも、ヤミピカリヤーという未確認生物の目撃談や、葬儀で死者に木の枝を刺すという島独自の奇妙な風習など、小さなネタも数多い。これらをどう紹介するか——調査をすれば真相が判るかもしれないが、雑誌『アトランティス』において、不可思議な現象・事件を科学的に説明するような記事はあまり好まれない。むしろ逆、なんでもないありふれた現象・事件をいかに不可思議なものに仕上げるかがカギだった。この辺りが編集者としての腕の見せ所だろう。正社員になって半年。一樹にとっては見習いの身から昇格するチャンスかもしれない。

遠くで、サイレンが鳴っていた。

事故が起こったか、あるいは、何かの警告だろうか？ 一瞬そう思ったが、そうとも限らないかと思ひ直した。海辺の集落では、潮の干満時、あるいは、朝昼夕に、サイレンを鳴らす所もある。近年は警報と区別するため危機感の無い明るい音楽へ変える地域が多いが、地方ではまだ古くからのサイレンを鳴らしている所もあると聞く。だから、一樹はあまり気にしないのだが。

不意に、それまで三上のそばでおとなしく伏せていた犬が顔をあげた。窓を見つめ、歯をむき出しにし、低い唸り声をあげる。

——なんだ？

一樹が窓を見ると、外を、大きな影が横切った。

同時に、船が大きく揺れる。危うく倒れそうになったが、なんとか椅子にしがみつく。

今の影は誰だ？ 一樹は後部甲板を見た。木船という女はまだそこで作業をしている。残る乗員の船長は、当然船の操縦をしている。他に乗員・乗客はいないはずだ。海鳥でも飛んだのだろうか？ それにしてはかなり大きな影だったように思う。

サイレンは鳴り続けている。心なしか、さつきより大きくなっていくように思う。

また、船が大きく揺れた。先ほどまでは比較的穏やかに航行していたのだが、海が荒れて来たのだろうか。そう思った瞬間、さらに大きく揺れはじめた。とても座ってられないほどの揺れだ。隣の三上が、正面に座る二人組の方へ投げ出された。幸い女の方が三上を支えたため、大事には至らなかった。揺れは治まらない。ますます激しくなり、今にも転覆しそうだった。

「これ、大丈夫なのかよ!？」

リーゼントの男が声を上げる。船はまるで遊園地にある絶叫マシンのように激しく揺れる。無論、絶叫マシンと違い安全バーやベルトといった物は無い。

サイレンは鳴り続けている。音はさらに大きくなり、船のすぐそばで鳴っているかのようだ。それはどこか調子の外れた音だった。壊れたスピーカーから流れているような、あるいは、擦り切れたカセットテープで再生しているかのような、濁った音。

外で女の悲鳴が聞こえた。後部甲板を見る一樹。さつきの女の姿が無い。海へ落ちたのだろうか？ なんとか椅子から立ち上がり、ドアを開けて外へ出た。

——何だこれは!？」

その光景に、一樹は息を飲んだ。

先ほどまで晴れ渡っていた空が、一転して黒雲に覆われている。陽の光さえ届かないような厚い雲が、空一面を覆っているのだ。それだけでもあり得ないことだが、さらにあり得ないのが海だ。大きく波うつ海が、真っ赤に染まっていた。あまりにも深い赤——まるで血のよ

うな色である。

「おい！　これ、どうなってんだよ!？」

後を追うように出てきたリーゼントの男も驚いて声を上げた。どうなっているのかなど、一樹に判るはずもない。

サイレンが鳴り響く。

それは耳の奥を引き裂かんばかりの大きさになっていた。あまりの大きさに、頭が割れるかのような痛みに襲われる。相変わらず濁った音をしており、それがさらに不快な気持ちにさせる。

甲板の柵に両手でしがみついた女の姿を見て、一樹は我に返った。投げ出されたものの、海に落ちずにはすんだようだ。すぐに駆け寄ろうとするが、あまりにも揺れが激しく、まともに立つこともできない。リーゼントの男も同様だ。自分が海に投げ出されないよう、柵にしがみつくので精いっぱいである。それでも、一樹はなんとか女の元へ進む。

「掴まれ！」

手を伸ばした。

女は一樹の手を取ろうと右手を伸ばすが、揺れが激しいせいか、なかなか掴めない。

「――」

女の左手が柵から離れた。女は海へ落ち、あつという間に赤い波に飲み込まれた。

「おい！　大丈夫か！　どこだ!？」

海に向かって声を上げるが、返事は無く、姿も見えない。助けられなかった――一樹は悔やみ、膝をつく。

その時、船の揺れが治まった。

海が穏やかになったのか、と、一瞬思ったが。

「……………おいおい……………マジかよ……………」

リーゼントの男が震えた声で言った。

一樹が顔を上げると、後方から、大きな波が迫っていた。見上げるような高さだ。一樹の背丈の何倍もある、巨大な壁のような赤い波。濁ったサイレンは、鳴り続ける。



天地がひっくり返り、同時に、全身を引き裂くような激しい痛み。

一樹たちは、船ごと波に飲み込まれた。

第三話 『遭遇』 一樹守 夜見島港／ドルフィン棧  
橋 — 3 : 50 : 52

冬山で凍えるかのような寒さと、全身を巨大な鉄板で押し潰されるかのような強烈な痛みで、一樹守は意識を取り戻した。

石造りの階段に伏せる形で倒れていた。顔を上げようとするが、全身を強烈な痛みが駆け抜け、再び意識を失いそうになる。なんとか意識を保ち、目だけを動かして周囲を確認する。まず見えたのは波だった。低い波が次々と押し寄せ、時折やや高い波が押し寄せてくる。波が押し寄せるたび、一樹の身体は水に浸かった。このままでは波にのまれてしまうかもしれない。しばらくじっとしていたら痛みが引いてきたので、ゆっくりと身体を起こした。周囲を見回す。どうやら、海辺の石段に倒れていたらしい。なぜこんなことになったのか、少し考え、思い出した。船が転覆したのだ。赤い高波に飲み込まれて。

はっとして、もう一度よく海を見る。墨のように真っ黒な海が広がっている。陽が落ち、光を失った海は、不気味ではあるものの、特におかしな点はない。多少波は高いが船が転覆するほどでもない。あの、血のように真っ赤な荒れ狂う海は、一体なんだったのか？ そして、サイレンの音は？

いや、今はそんなことを考えている場合ではない。三上や他の人たちはどうなったのだろうか？ 一樹は全身の痛みをこらえてなんとか立ち上がった。まず持ち物を確認する。幸い、財布や携帯電話、デジタルカメラなど、所持品は全てウエストポーチに入れていたので、何も無くしていなかった。一樹はポーチから愛用の眼鏡を取り出してかけると、石段が上がった。どこかの港の棧橋のようだった。腕時計で時間を確認する。夜の九時少し前だった。空には月も星も出ておらず、分厚い雲が広がっているようだ。遠くで雷鳴も聞こえる。すぐに雨が降り始めるかもしれない。

一樹はポーチの中から懐中電灯を取り出し、周囲を照らした。すぐそばに街灯が立っていたが、明かりは点いていない。ライトで上部を

照らすと、止まっていた海鳥が驚いて飛び去っていった。さらに周囲を照らす。海と反対側、陸地があると思われる方を見るが、小さな明かりひとつ見つけられなかった。

——ここは……夜見島か……？

そう思った。港の周辺で明かりひとつ無いなど、誰も住んでいないとしか考えられない。夜見島は昭和五十一年の海底ケーブル切断事件以降、無人の島と化している。電力の供給も断たれたままのはずだ。間違いないだろう。

まずはどうにかして助けを呼ばなければならぬ。わずかな望みをかけ携帯電話を取り出して確認するも、やはり圏外だった。島で電話を探すか？ 昔ながらの黒電話や公衆電話なら電力が無くても使用できるが、電話線も切断されていたら意味が無い。なんとか他の方法で救助を要請しなければならぬ。とにかく島へ向かおう。一樹は足元をライトで照らし、陸の方へ向かおうとした。

足元を、黒い影が横切った。

驚いて声を上げ、飛び退く一樹。

改めて足元を照らす、そこには何も無かった。なんだったのだろうか？ 小動物ではないように思った。そうだった、はつきりとした形があるものではなく、煙の塊のようなものに見えた。あるいは、蠢く闇。

——いや。

ただの見間違いだろう。そう思い直した。少し神経が参っているのかもしれない。危うく命を落としかけたのだから、無理もない。

気を取り直し、栈橋を進む。すぐに堤防が見えた。一樹の背丈の三倍はありそうな、まるで城壁のような高さだった。堤防に沿って進むとまた石段があり、それを上がった先に門が見えた。幸い閉ざされてはいなかった。門をくぐり、島へと上陸する。

そこは、鉄筋コンクリート造りのビルが立ち並ぶ街だった。島が栄えていた頃は、かなり近代的な街並みだったのだろう。もっとも今は、そのすべての建物が崩壊しかけている。外壁はいたるところで崩れ落ち、ほとんどの窓ガラスは割れ、道はそれらの瓦礫で溢れていた。

まさに廃墟だ。

一樹は場所を確認するため、ポーチから夜見島の地図を取り出した。

夜見島は、上空から見ると飛び立つ鳩の形をしており、南西が頭部、北が右翼、南が左翼、北東が尾と見立てることができる。島にはふたつの港がある。ひとつは蒼ノ久という集落で、島の南西、鳩の形で例えると、後頭の部分に位置する。ここは、古くからの住人が住んでいた小さな漁港だ。昔ながらの日本家屋が立ち並び、島本来の姿をとどめた集落である。

もうひとつが夜見島港だ。同じく島の南西に位置するが、鳩の形で例えると喉の部分に位置する。蒼ノ久とは対照的に、近代的な鉄筋コンクリート製のビルが建ち並び地域である。今、一樹がいる港は、この夜見島港と見て間違いないだろう。

古くから外部と関わるのを避け、極めて閉鎖的な島だったこの夜見島だが、太平洋戦争が終わり、高度成長期へ突入した頃を境に、大きく姿を変えることになる。まず、昭和三十五年。夜見島に入った資源調査団が、島の中央の瓜生ヶ森うりゆうがもりに、金脈があることを突き止めた。当時、瓜生ヶ森などの人が住まない地域は国の所有地だったが、金脈が発見されたことで世界的に有名な企業がこの一帯を買い取り、金を発掘するための『夜見島金鉱株式会社』が設立された。夜見島金鉱株式会社は、まず島で最も高い山である四鳴山しなりやまの頂上に鉄塔を建設しインフラを整備すると、瓜生ヶ森に採掘所を建設し、鉱員を募った。これにより、一獲千金を夢見た多くの人間が島外から押し寄せることになった。島の人口は一気に増え、夜見島金鉱は島の各地に社宅を建設。さらに、採掘した金を本土へ運ぶため、大型船発着用の港も建設したので。それが、この夜見島港である。

夜見島港最大の特徴は、本来は丘陵の斜面だった場所に無理矢理近代的なビルを建築したことにある。高低差が激しく、斜面に張りつくように作られた街並みなのだ。

一樹はライトで周囲を照らした。近代的なビルといっても昭和三十年代後半の話である。その頃は日本の桃源郷と呼ばれるほど多く

の人が集まり、会社や居住区だけでなく映画館や遊園地などの娯楽施設まで作られたが、昭和四十二年を境に金の採掘量が減り始め、四十五年には枯渇。徐々に人も減り始め、四十八年に金鉱は完全に閉鎖された。夜見島金鉱株式会社も撤退し、乱立された施設だけが残った。以来、三十年もの間雨と強い潮風にさらされ、完全に廃墟と化したのである。

一樹は周囲を見回した。左手側に急勾配の長い階段が見える。夜見島港の中央にある『地獄段』という長い階段だ。続いて、地図で地獄段の周辺を調べる。階段とは反対側へしばらく歩いたところに灯台があるのが確認できた。そこからなら、沖を航行する船に何かしらの合図を送ることができるかもしれない。一樹は灯台へ向かってみることにした。

しかし、少し進むとすぐに行き止まりになった。地図を確認するが、地図上では道が続いている。よく調べてみると、堤防の上が道になっていくようだ。上にあがるための埋め込み式の梯子も見つけたが、下段が崩れ落ちているため上がれなかった。堤防はどこどころ亀裂が入っている。そこに鉄パイプのようなものを挿し込めば、それを足場にして上がれるかもしれない。そう考え、周辺を探してみる。コンクリートやガラスの破片は無数に散らばっているものの、足場に使えそうなものは何も落ちていなかった。このルートを通るのは諦めるしかなさそうだ。恐らく道は一本ではないだろう。そう思って地図を調べ直すと、一度地獄段を上がり、その先の広場にあるトンネルを下りて向うルートを見つけた。かなりの遠回りになるが仕方ないだろう。一樹は来た道に戻ると、地獄段を上がった。

地獄段は、その呼び名にふさわしい急勾配の長い階段だ。夜見島金鉱株式会社のビルに挟まれた位置にあり、階段の途中からビルの二階、三階へ渡ることもできた。そのビルから連絡橋を通りさらに隣のビルへ渡ることもできる。ビルの各階が多く、連絡橋で繋がる姿は、丘の斜面に無理矢理作った夜見島港の街並みを象徴する光景と言えた。

階段を中ほどまで上がったところで弱い雨が降り始めた。雨具は

持っていないため濡れるしかない。もつとも、海に落ちたためすでにびしょ濡れなのであまり気にすることも無いのだが。

階段は、右へ左へとうねるように続いている。近くのホテルから崩れ落ちた瓦礫が散乱し、階段自体もところどころ崩れ落ちているため、足を滑らさないよう慎重に進む必要があった。

——うん？

なんとか階段を登りきったところで、一樹は足を止めた。

そこに、人が倒れていたのだ。

中年の男だった。頭から血を流し、うつ伏せに倒れている。

一樹はゆっくりと近づき、男の顔をライトで照らした。血の気を失ったどす黒い顔。光を当てても、全く反応しなかった。息もしていないように見える。ごくりと息を飲む一樹。いやな予感がした。それを確認するため、そつと、男の喉に触れてみた。男の喉は、何の反応も無い。つまり、脈が止まっている。思わず後退りする一樹。どうやら死んでいるようだ。注意して見ると、男のそばに落ちていた大きなコンクリートの欠片に血が付着していた。崩れ落ちた瓦礫で頭を打ったのかもしれない。だが、これは誰だ？ 顔に見覚えはなく、一緒に船に乗っていた者ではない。そして、この島には二十九年前から人は住んでいないはずだ。無論、二十九年前に死んだ者が放置されていたということもあり得ない。それほど長く放置されていたならば骨化しているはずだ。死体は、腐敗すら始まっておらず、コンクリート片に付着した血はまだ乾いてもいない。恐らく死んで数時間とたったところだろう。たまたま一樹と同時期に別の船で島に来たというところだろうか？ あるいは、人知れずこの島に住んでいたのか。判らない。ここであれこれ考えているだけでは何も判らないだろう。とにかく今は、助けを呼ぶことが先決だ。一樹は死体をそのままにして、灯台へ向かおうとした。

足元を、また、煙の塊——あるいは蠢く闇——のようなものが横切った。

とつさにライトを照らす。棧橋で見た時は見間違いかとも思ったが、今度は違う。確かに、そこにいる。まるで地を這う生き物のよ

うに、倒れている男の方へ向かっていく。しかも、ライトを当てると、悲鳴のような甲高い鳴き声まで上げた。

——なんだ、あれは？

訳も判らず呆然とそれを見つめる一樹。蠢く闇は悲鳴を上げながらも倒れている男の元へ行き、そして、男の体内へ吸い込まれるように消えた。あるいは、ライトから逃れるように男の体内へ隠れたようにも見えた。

あり得ないことが起こった。

男の身体がびくと震えたかと思うと、ゆつくりと、身体を起こし始めたのである。

良かった、無事だった——とは思わなかった。先ほど一樹は、男に脈が無いことを確認している。一樹に専門的な医療の知識は無いが、確実に死んでいたはずだ。無論、一度心臓が止まっても心臓マッサージや電気ショック等で再び動き出すこともあるだろうが、一樹はそのような蘇生術は行っていないし、なにより、起き上がった男は血の気を失ったどす黒い顔色のままで、生き返ったというよりは、死体が動きはじめたという方が的確に思えた。

一樹の心臓が、まるで警鐘を鳴らすかのように大きく鼓動し始めた。このままでは危険だ。そう感じた一樹は、とっさにライトを消し、物陰に身を隠した。そのまま様子を窺う。

起き上がった男は、緩慢な動きで首を回し、肩を回し、足を踏み鳴らした。まるで、各部位の動作の確認をしているかのようなのである。しばらくその場でのろのろと動いていた男は、一度獣のような咆哮をあげた後、足を引きずりながら通路の奥へと進んでいった。道は途中で左に枝分かれしている。男はそこを曲がると、姿が見えなくなった。

……何だったのだろうか？ 判らないが、とても追いかけて行って声をかける気にはなれなかった。関わらない方が賢明なように思う。早々に立ち去った方がいい。一樹は音を立てないよう息を殺して通路を進み、枝分かれしている通路の前を静かに駆け抜け、そのまま真っ直ぐ進んだ。しばらく進むと、警告するかのような心臓の鼓動は治まった。ひとまず安堵の息を吐く一樹。

一体あれはなんだったのか？ 蠢く闇が男の死体の中に入り込み、動き出した。それはまるで、映画やマンガなどに登場する動く死体・ゾンビのようだった。

——そう言えば。

一樹はこの地を訪れる前に、インターネットで夜見島に関することを簡単に調べていた。島民消失やケーブル切断などの大きな事件、島に伝わる伝承や奇妙な風習、遭難・失踪事件など、多数の情報を得ることができたが、その中に、『屍霊』というのがあった。屍の霊——あの動き出した死体と、何か関係があるように思える。記憶を探る一樹。確か、海から来る穢れとか、そのようなことが書かれてあったように思う。だが、他の事件と比べてインパクトが弱い話で、雑誌で取り上げることはないだろうと思いい、流し読みしてしまった。それ以上のことは思い出せない。

仕方がない。今はとにかく、助けを呼ぶしかない。一樹は再びライトを点け、灯台を目指してさらに進む。しばらく進むと道は鉄柵の扉によつて閉ざされていた。地図によると、扉の向こうには夜見島金鉱の資材倉庫があり、その奥に灯台へ下りるためのトンネルがあるようだ。一樹は鉄柵を持って軽く揺すってみる。鍵がかけられてあるが、長年風雨にさらされていたため、蝶番はすぐに壊れそうだった。しかし、いくら打ち捨てられた土地とはいえ、勝手に壊すのはためらわれた。何か方法はないかと周囲を探すと、近くのコンクリート製の壁に埋め込み梯子があり、そこを上れば資材倉庫の屋根の上に跳び移れそうだった。一樹は梯子を上ると、勢いをつけて倉庫の屋根の上に跳び移った。そして屋根から飛び降り、灯台へと向かおうとしたが。

——うん？

資材倉庫のドアの上部には窓が取り付けられてあり、そこから中が見えるのだが、奥に、誰か倒れているのが見えた。髪が長い女性だった。うつ伏せに倒れているため顔はよく見えないが、赤いカーディガンに白のスカート姿から、船に同乗していた奇妙な格好の女や船員の女ではなさそうだ。先ほどの動く死体のあるのでどうしたのかと迷っていた一樹だったが、女をよく見ると、わずかに肩が上下



に動いていた。息をしている。ならば、このままにしておくわけには  
いかない。中に入ろうとしたが、ドアには鍵がかけられてあり開かな  
かった。ドア越しに呼びかけてみても反応は無い。何か中に入る方  
法は無いだろうか？ 周囲を見回す。地面には廃材がたくさん散ら  
ばっている。ほとんどが朽ち果てているが、その中からまだ頑丈な物  
を選び、それを窓ガラスに打ち付けた。ガラスは簡単に割れる。そこ  
から手を入れ、内鍵を開けて中に入った。

「……おい、大丈夫か？」

一樹は倒れている女——まだ少女といつていい歳頃だ——の肩を  
揺すった。少女はわずかに声を上げ反応した。顔色も悪くない。か  
なり色白で、まるで生まれて一度も陽の光を浴びたことがないので  
と思わせるほどだが、少なくともさっきの男のようなどす黒い顔では  
ない。生きている。そう確信した一樹は、さらに呼びかけた。しばら  
く続けると、女は目を開け、ゆっくりと身体を起こした。

「……ここは……？」

置かれている状況が判らないのか、不思議そうな顔で周囲を見回  
す。

「ここは、夜見島港の、金鉱会社の倉庫だ。君、名前は？」

「名前……岸田<sup>きしだ</sup>……百合<sup>ゆり</sup>……」

「よし、岸田さん。君は、なぜこの島にいるのかな？ あ、いや、理由  
は無理に言わなくていい。いろいろと事情があるだろうからね。た  
だ、もし船があるなら使わせてほしいんだ。僕の乗っていた船が転覆  
して、乗っていた人が行方不明になっているんだ。早く警察に報告せ  
て捜索しないと——」

その時、外から獣の咆哮のような声が聞こえた。

少女が、何かを思い出したかのようにはっとした表情になった。

「……助けて、あたし、あの男に追われているの」

怯えた声で、一樹の腕にすがりつく。

あの男……さっきの動く死体のことだろうか？

「あの男のことを知っているのか？」

少女は小さく頷いた。「港であの男に脅されて、この島に来たの。」

お願い……助けて」

一樹の腕に胸を押し付けるようにして、少女は助けを請う。

「……判った。少し様子を見てくるから、ここに隠れてて」

そう言うと、少女は頷いた。一樹はライトを取り、少女を残して倉庫の外へ出た。

がしやん、と音がして、あの男が敷地内に入ってきた。体当たりで鉄柵の扉を壊したようだ。

途端に、一樹の心臓が大きく鼓動する。この男は危険だ——そう警告するように。

男と目が合った。生気の宿らぬ虚ろな目。とても生きている人間のものとは思えない。男は低い唸り声をあげながらこちらへと向かって来る。死体に襲われる！一樹の身体は、まるで石になったかのように動かない。そのまま立ち尽くすしかできない。男に組みつかれた。顔が近づいて来る。何をやる気だ？男は唸り声をあげながら大きく口を開けると、一樹の首筋に咬みついた。

——獣だ。

咬みつかれる瞬間、そんなことを思った。獲物を見つけた瞬間に襲い掛かり、首筋に喰らいつくなど、到底人間の行動ではない。こいつは獣だ。逃げなければ殺される。だが、身体は動かない。男の歯が、皮膚を裂き、肉に食い込んでくるのが判る。一樹は、死を覚悟した。

「——だめ！」

叫ぶような声と共に、少女が外に飛び出してきた。勢いをつけ、男を押し飛ばす。男はふらふらと後退りすると、尻餅を好いて倒れた。

「早く倒してー！」

少女が、一樹が持っている角材を見ながら言った。これで殴れということだろうか？そんなこと、できるわけがない。

男がのろのろとした動きで立ちあがろうとする。

「——逃げるぞー！」

一樹は少女の手を取り、走り出した。壊された鉄扉から通路に出て、急勾配の階段——地獄段を下りる。だが、途中まで下りて、このまま棧橋付近へ戻っても逃げ道がないことに気がついた。男は追っ

て来ている。一樹は地獄段の途中にある連絡通路から隣の夜見島金  
鉞のビルへ渡った。連絡通路はビルの二階へと通じている。だが、中  
へ入る扉は鍵がかかっている開かなかった。倉庫の扉と違って窓も  
無い。ここから中に入ることはできない。幸い通路の先には外階段  
あった。一階へ下りる階段は崩れていて使えなかったもので、三階へ上  
がる。三階の扉は開いていた。中へ入る。しかし、そこまですぐ  
部屋には他に出入り口が無く、隠れる場所も無い。男の唸り声が聞こ  
える。こちらへ向かって来ている。追い詰められたか……いや、部屋  
の隅、天井から床に鉄パイプが数本通っている場所。その床の一部が  
鉄格子状になっている。近づいてみると、下の階が見えていた。鉄格  
子はかなり古く、もしかしたら壊せるかもしれない。一樹は、鉄格子  
を強く蹴ってみた。



しかし、鉄格子は頑丈で、何度蹴っても壊れなかった。風雨にさら  
された外と違い、さび付いていないのだ。これでは無理だ。

扉が勢いよく開いて、男が倒れ込むように室内へ入って来た。一樹  
たちを見て低い唸り声をあげる。もう、逃げ場はない。

「お願い、戦って」

少女が言う。戦う？ あの獣のような男と戦うのか？ この角材  
で殴れというのか？ そんなこと、できるわけが――。

「――大丈夫」

少女は、一樹の両手を取り、優しく握りしめた。「あれは、生きてい  
る人間じゃないの」

生きている人間じゃない？ 確かに、生きているとは思えない。し  
かし、だからと言って角材で殴るなど、人として許される行為なのか  
？

「お願い……あたし、まだ死にたくない……」

死にたくない――その言葉で、気付かされた。あの男は、一樹の首  
筋に喰らいついていた。幸い少女が突き飛ばしてくれたため致命傷

にはならなかったが、あのままだったら首を喰いちぎられていただろう。

そう。あの男は、自分たちを殺そうとしているのだ。

死にたくない……その思いは、一樹も同じだ。

ならば、やるしかない。

男が大きく吠える。歯をむき出しにし、こちらへ向かって来る。

一樹は、角材を振り上げ、男の頭をめがけて振り下ろした。

がつん！ と、鈍い手応え。

男の首が、奇妙な角度に折れ曲がる。血が、辺りに飛び散る。男は、ふらふらと後退りする。

しかし、倒れない。首を折り曲げたまま、もう一度襲い掛かってくる。

「……ああああ!!」

一樹も、獣の咆哮をあげた。

角材を、男の頭めがけて打ち下ろす。鈍い手応えと共に、血が飛び散る。まだ倒れない。さらに角材を打ちつける。それでも倒れない。何度も、何度も、打ちつけた。男が倒れて動かなくなるまで、ただ、角材を振り下ろし続けた。

「——もう大丈夫、大丈夫よ」

少女の声で、一樹はようやく我に返った。足元には、半分頭が潰れた男が倒れていた。手には、血まみれの角材が握られている。

「うわあー」

悲鳴と共に角材を放り投げた。それでも、手のひらには生身の肉体を何度も殴った感覚が残っている。その感覚を振り払うように、両手を身体にこすり付けた。何度も何度も、こすり付けた。この忌々しい感覚を取り除きたかった。だが、何度手をこすりつけても、その感覚は消えない。もしこの場に斧か鉈のような物があれば、一樹は手首ごと斬り落としていたかもしれない。

少女が、一樹の手を取った。

「落ち着いて……大丈夫だから」

優しく握りしめ、そして、ほほ笑んだ。「あたしのために戦ってくれ

て、ありがとう。気にしないで。あれは、生きている人間じゃない……屍人しびとなの」

「……屍人？」

「ええ。屍霊と呼ばれる黒い煙の塊のようなものが人間の死体に憑りつくつくと、あれになるの」

屍霊——あの蠢く闇だ。少女の言う通り、地獄段で男の死体を見つけた時、あれが中に入って、男は動きはじめた。

「元々死んでいる人間だから、気にすることはないわ。それに——」  
少女は入口を見た。どこから現れたのか、あの蠢く闇が、部屋の中に入って来た。まっすぐ、倒れている男へ向かっていく。

「屍霊は海から来る穢れ。あれがまた憑りつけば、何度でもよみがえるの」

屍霊が男の身体の中へ消えた。すると、男の身体がびくんと震え、起き上がり始めた。

「……行きましょう」

少女に手を引かれ、一樹は外へ出た。幸い、よみがえった男に気付かれることはなかった。

一樹は少女に連れられるまま二階へ下り、連絡通路から地獄段へ戻ると、再び階段を上がった。そのまま資材倉庫のそばを通って灯台へ向かおうとした時、空気を切り裂くような音が空に響いた。

「あの音、なに？」少女は空を見上げた。

空気を切り裂く短い音がいくつも重なりあつて響いていた。それは海の方から近づいてきて、一樹たちの頭上を通り、北へ遠ざかっていった。

「ヘリコプターみたいだな」そう言った後、一樹ははっとなった。「もしかしたら、俺たちの捜索をしているのかもしれない」

一樹が島に渡るために乗った船には、他に五人の乗員がいた。誰かが救助され、船の転覆を報せて、救助隊が出動した可能性は充分考えられる。ヘリはかなり低空を飛行しているようだった。もしかしたら着陸を試みようとしているのかもしれない。

「行こう。助かるかもしれない」

一樹の言葉に、少女は頷く。  
二人は、島の北部へ向かって進んだ。

第四話 『不時着』 永井頼人 夜見島／碑足岬 |  
2:24:27

夜見島の最北東・碑足岬ひだるの森の中で、永井頼人は倒れたまま動かない沖田宏おきたひろしのそばで涙を流していた。沖田に意識は無く、口や鼻、耳から大量の出血をしている。わずかに息はあるものの、かなり危険な状態であった。

永井から少し離れた場所には、迷彩柄の大型ヘリが横倒しになっていた。自衛隊の物資輸送ヘリである。物資輸送訓練で四開地方上空を飛行していたのだが、原因不明のトラブルが発生し、先ほどこの地点に不時着したのだ。ヘリは操縦席付近こそ原形をとどめているものの、中央部から後ろは完全に大破している。爆発炎上しなかったのは幸運だったが、それも、いつ起こるか判らない。ヘリには二十一名の隊員が乗っていたが、現時点で確認できている生存者は永井と沖田、そして、三沢みさわという隊員だけだった。他の隊員の生死は不明。現在三沢がヘリ内部や周辺を搜索しているところだ。永井も搜索すべきなのだが、どうしても沖田のそばを離れることができなかった。

「……沖田さん……しっかりしてください……死なないでください……沖田さん……!!」

永井がどんなに呼びかけても、沖田にはわずかな反応すらなかった。

永井頼人は陸上自衛隊に所属する自衛官だ。階級は士長で、入隊したのは三年前。永井が十八歳のときである。

もともと永井は、特に熱意を持って自衛隊に入ったわけではない。高校在学中、特に将来の夢や目標が無かった永井は、卒業後の進路を決めかねていた。やりたい仕事があるわけでもなく、学びたいことも無い。このままでは就職も進学もせず、ただぶらぶらしているだけに

なりそうだったところを、叔父から自衛隊へ入ることを勧められたのである。もちろん、その時の永井に国防や人命救助などの使命感は無い。叔父から、「自衛隊に入ればタダで車の免許が取れる」と言われ、それならためしにやってみるか、くらいの軽い気持ちであった。両親からもあまり期待されておらず、すぐに根を上げて帰って来るのではと心配されていたのだが。

自衛隊に入った永井が、沖田宏と出会えたことは、幸運だったと言える。

沖田と出会ったことで、永井は変わった。優秀で面倒見が良い自衛官だった沖田は、特に永井のことをかわいがった。もともと勉強よりは運動の方が得意だった永井は、候補生時の訓練で優秀な成績を残していたのだが、二士となって基地へ配属され、沖田の指導を受けるようになってからは技術や精神面でも大きく成長していった。今では自衛官の使命を全うしようという心構えもできている。士長となった現在では同期の中でも頭角を現すほどで、将来が期待される若手自衛官となっていた。

だが、順調だった彼の自衛隊での生活は、今日を境に大きく狂ってしまう。

この日、早朝よりヘリによる物資輸送訓練に参加した永井は、一藤<sup>いちふじ</sup>二孝<sup>にたか</sup>陸佐以下二十一名で、都市部近郊の大型基地を飛び立ち、約千キロ西にある地方基地へ向かっていた。当初飛行は極めて順調であったが、基地を飛び立って数時間、四開地方上空に差し掛かったところでトラブルが発生する。いや、それはトラブルというよりはもはや怪異であった。上空千メートル付近を飛行中にもかかわらず突如謎のサイレンが鳴り響いたかと思うと、一瞬にして周囲に濃い霧が立ち込めた。続いて、速度計や高度計などの計器類が異常な数値を示し始め、通信機器も使用不能となり、ヘリは針路を見失う。それでも天候の回復と機器類の復帰を待ち数時間は飛行を続けたのだが、霧が晴れたところで突如操縦士が意識を失い、ヘリは完全に飛行不能な状態となった。それでも機転を利かせた一人の隊員が即座に操縦を代わり、目視で発見した陸地へ着陸を試みたのである。



こうして永井たちは、この夜見島へ不時着したのだ。

意識が戻らない沖田のそばで泣き続ける永井。その背後で、草を踏む音がした。暗闇の中から大柄な男が姿を現し、永井のそばに立つ。身長は一八〇センチ以上、体重は一〇〇キロ以上ありそうな体格だ。三等陸佐の三沢岳明<sup>たけあき</sup>だ。ヘリのトラブル発生時、意識を失ったパイロットと操縦を代わり、不時着を成功させたのがこの男だった。

三沢は永井の肩に付けられてある無線機のレシーバーを取り、スイッチを入れた。しかし、無線機は何の反応もしない。三沢は小さく舌打ちし、投げるようにレシーバーを返す。

「……永井、怪我は無いか？」

三沢は低く抑揚のない声で言った。永井は嗚咽しながらなんとか返事をする。ほとんど墜落と言っていない不時着だったが、永井がほぼ無傷で助かったのは、沖田が墜落時の衝撃から守ってくれたからだ。代わりに、沖田は胸を強く打ったようだ。ろつ骨が折れ、内臓が破裂している可能性もあった。助かる見込みは極めて低いだろう。

三沢は小さく息を吐き、続けた。「二―二三六非常事態発生。一藤陸佐他十七名の死亡を確認。一名重体、二名軽傷。今から私が緊急避難の指揮を執る。直ちに撤収」

その言葉を、永井は信じられない思いで聞いた。つい数時間前まで何事も無く訓練を行っていた二十名近い隊員のほとんどが死亡したというだけでも信じられないが、そんな状態にもかかわらず、三沢は一切感情を乱すことなく淡々と指揮権を宣言し、みんなを放置してこの場を去ろうとしているのである。永井には、それが酷く冷徹に思えた。

「……どうした士長、返事をしろ」

有無を言わせぬその口調に怒りが湧いてきたが、なんとかそれを押しとどめる永井。自衛官にとって上官の命令は絶対である――それを教えてくれたのは沖田だ。いま三沢に従わないのは沖田の教えに

背くことになる。それに、三沢の判断は冷徹にも思えるが、間違っていないことは永井にも判った。一藤隊長が死に、本部とも連絡が取れない以上、三等陸佐である三沢が指揮を執るのは当然であるし、いつ爆発するか判らないヘリのそばにいつまでもいるのは危険だ。

「立て！・永井！」

三沢の声が怒声に変わる。

永井は。

「……了<sup>りよう</sup>!!」

涙を拭って立ちあがった。

そして、二人で沖田の両脇を抱えると、すみやかにその場を離れた。

永井と三沢の前に広がる闇には、ぼんやりと、遊園地の観覧車の影が浮かび上がっていた。

☆

自衛隊に入った永井が、沖田宏と出会えたことは、幸運だったと言える。

しかし――。

この事故の後、夜見島を三沢岳明と二人で行動することになったのは、不運だったとしか言いようがない。

第五話 『実戦』 永井頼人 夜見島遊園／管理小屋

—1:59:53

夜見島の北東部・碑足地方にある夜見島遊園の管理事務所の前で、自衛官の永井頼人は声をあげて泣いていた。彼の前に倒れている沖田宏は、身動きひとつしない。ヘリ不時着時にはわずかにあった呼吸も、少し前に無くなっていった。それが何を意味するのか、考えずとも判ることだが、それを信じたくなくて、それを否定したくて、永井は泣きながら呼びかける。

「沖田さん……目を開けてください……息をしてください……沖田さん!!」

無論、沖田は目を開けないし、息もしない。それでも永井は、沖田に呼びかけ続ける。

闇の中で、白く直線的な光が揺れていた。こちらへ近づいてくる。ヘリ墜落後に指揮権を発動した三沢岳明三等陸佐だ。この夜見島遊園にたどり着いた後、永井と沖田をこの場に残し、園内を調べていたのだ。

「——園内の電話は繋がらない。ここが夜見島なら、昭和五十一年に海底ケーブルが切断され、そのままのはずだ。恐らく、どこの電話も同じだろう」

不時着したこの島が夜見島であると見当をつけたのは三沢だった。ヘリは四開地方上空を飛行中にトラブルを起こした。四開地方沖の島で遊園地があるのは夜見島だけだ。かつて金鉱発掘で栄えたこの島には多くの人が集まり、遊園地や映画館など、離島には場違いとも思える多数の娯楽施設が建設されたのだ。

「通信の方はどうだ」

低い声で訊く三沢。三沢が園内を調査している間、永井は通信機を使って本部へ連絡を試みるよう命令されていた。しかし、永井はただ沖田のそばで泣いているだけだった。

「……………」

三沢は永井の前にしゃがむと、肩にかけていた小銃を地面に置き、倒れている沖田の顔をライトで照らした。そして、少し見ただけで立ち上がると。

「——もう死んでるぞ」

冷たく言った。

その言葉に、永井の胸の奥から怒りが湧きあがる。しかし、それ以上沖田が死んだという現実を突きつけられた悲しみが上回った。だから、「行くぞ」という三沢に構わず、永井はさらに声をあげて泣いた。

「立て」

三沢に後ろ襟を掴まれ、永井は無理矢理立たされた。

「気持ちには判るけどな、これ、ドラマとかじゃねえんだ。急がないと危ないだろ」

声に静かな怒りがにじむ。だが、永井には判らない。何が危ないのか。何を急がなければいけないのか。そんなことよりも、ただ沖田が死んだことが悲しかった。三沢が手を離しても、その場に崩れ落ち、ただ泣き続ける。

三沢は大きいため息をついた。

その二人のそばを、黒い煙の塊、あるいは蠢く闇が、通り過ぎた。それは倒れている沖田へと近づいていき、身体の中に吸い込まれるようにして消えた。すると。

あれほど永井が呼びかけても何の反応も無かった沖田が、ゆっくりと起き上がり始めた。

「——沖田さん!!」

思わず叫ぶ永井。死んだ者がよみがえったことには、何の疑問も持たなかった。いや、そもそも沖田さんは死んでないなかった、死ぬなんてありえないのだ——そう思っていた。だから、立ち上がった沖田が死体と同じく黒い顔色をしていても、何もおかしいとは思わなかった。沖田が死んでいなかったことが、ただ嬉しかった。

だが、起き上がった沖田が緩慢な動きで小銃を構え、銃口を永井に

向けたところで、さすがに何かおかしいと思った。訓練中とはいえ、携行している銃は本物だ。弾も入っている。優秀な自衛官である沖田は、冗談でも人に銃口を向けたりしない。

「どうしたんですか、沖田さん？　しっかりして——」

ぱん、と、銃声が響いた。訓練で何度も聞き、すでに耳慣れた音だ。初めて銃声を聞いた時、永井は、案外軽い音なんだなと思った。子供の頃に遊んだ火薬鉄砲とあまり変わらず、少々がっかりしたのを覚えている。しかし、いま聞いた銃声は、同じ音であるはずなのに、押し潰されそうなほど重い音に聞こえた。幸い、銃弾は外れたのか、永井も三沢も無傷でその場に立っていた。いや、銃弾が外れたのではない。恐らくは空砲、あるいは銃そのものがおもちゃだったのだろう。沖田さんが、自分たちに向かって本物の銃を撃つはずがない。

「……沖田さん、冗談はやめてくださいよ」

永井が笑おうとした瞬間、さらに銃声が響いた。同時に永井のヘルメットがはじけ飛んだ。

「——ああああ!!」

両手で頭を押さえ、叫び声をあげる永井。銃弾はヘルメットを掠めただけだが、それでも大型のハンマーで殴られたような衝撃だった。暗闇に潜んでいた何者かが襲いかかってきた——そう思った。姿も見えないし気配も感じないが、見えない何かがあると考えた方が、まだ現実味があった。沖田が自分に向けて発砲したと思うよりは。

三沢が、永井の前に何か差し出してきた。

「士長、応戦だ」

応戦——その意味が判らず、永井は、三沢の顔と彼が差し出した物を交互に見る。

それは拳銃だった。三沢は銃口の方を握り、グリップの方を永井に向けている。持て、ということだろうか？

状況が把握できず永井が呆然としてみると、三沢はさらに続けた。

「危害射撃だ、撃て」

危害射撃——警告ではなく、目標に向かって本当に撃つことである。

「そんな……相手は沖田さんですよ!」永井は、信じられない思いで三沢を見る。

自衛官が武器を使用するには、当然のことながら規定がある。正当防衛または緊急避難に該当する場合だ。いまがそれに該当するといふのだろうか？

「沖田はもう死んだ」三沢は相変わらず感情の起伏のない口調で言う。「黒い塊が入るのを見ただろう。あれは沖田ではない。しびとだ」

確かに、煙の塊のようなものが沖田の中に入って行くのは永井も見ただ。しかし、しびとは、一体何のことであろうか。

「説明している暇はない」と三沢が続ける。「相手が誰であろうと発砲してきたからには応戦しろ。でなきややられるぞ。もう訓練じゃないんだ」

訓練ではない——それはつまり、これが『実戦』であることを意味している。

永井は銃を受け取ると、立ち上り、震える両手で銃を構えた。心臓は、まるで警鐘を鳴らすかのように大きく鳴り続けている。本当に撃つのか？ ためらう永井。なんの熱意も無く自衛隊に入った永井に、沖田は自衛官の知識と技術、そして、使命感を教えてください。自衛官として生きる道を示してくれたのは沖田だ。沖田がいなければ、永井は適当なところで除隊し、実家に帰って目標も無くただぶらぶらしていたことだろう。まだ二十年程度しか生きていない永井だが、沖田はまぎれもなく人生の恩人だと言えた。そんな沖田を、撃たなければならぬのか？

永井は——。

◇

永井は、沖田を見た。

のろのろとした動きで小銃の弾倉を外し、新たに取り出した弾倉を取りつけようとしている。だが、うまくいかない。よく見ると、弾倉を取りつける向きが前後反対だ。銃の扱いに慣れた者ならば間違え

ようがないし、慣れていない者でもすぐに気付くような簡単な間違いだが、沖田はそれに気付いていないのか、反対のまま何度も何度も取りつけようとしている。

「――」

永井の両手の震えが治まった。

確かに、あれは沖田さんではないかもしれない、そう思った。沖田さんは優秀な自衛官だ。小銃の弾の装填など手際よく行える。発砲してきた時もそうだ。沖田さんならこの距離で狙いを外すはずがない――そもそも沖田さんが自分に対して発砲するなどあり得ない。三沢三佐は、あれをしびとと言った。何のことは判らないが、ゾンビのようなものかもしれない。確かに今の沖田さんは、どす黒い顔色といい、のろのろとした動きといい、映画などで見るゾンビの動きそのものだ。ならば、ためらうことはない。あれは沖田さんではなく、沖田さんの身体を乗っ取って悪さをする何かなのだから。

永井の心から迷いが消えた。拳銃のトリガーを二度引く。沖田の迷彩服に小さな穴がふたつ開いた。血は流れなかった。沖田は唸るような声をあげながら、前のめりに倒れた。警鐘を鳴らすように大きく動いていた永井の心臓が、静かになった。

銃口を下ろし、倒れた沖田を見る永井。特に罪悪感はなかった。精巧な人形を撃ったかのような感覚だ。

「よし。銃を拾え」

三沢が命じた。永井は無言で頷くと、倒れている沖田から小銃を取り、弾倉を装着した。

「ここから脱出する。ついて来い」

三沢は小銃を構え、やや身を屈めた状態で先行して走る。永井は後に続いた。

管理小屋から少し進むと階段が見えた。上がった先にはこの遊園地のシンボルとも言える大観覧車がある。先行していた三沢が止まり、階段の下でしゃがんだ。永井はそのすぐ後ろに控える。階段を上がったところに人影が見えた。迷彩服にヘルメット、手には小銃を持つている。永井の心臓が、再び警鐘を鳴らし始めた。他の隊員が生

き残っていた訳ではないだろう。ここからでも、のろのろとした動きから生きている人間ではないと判る。

「あいつを撃ってみろ」

三沢が命じた。永井は頷き、小銃を構えた。階段の上まではかなり距離があるが、永井の小銃は狙撃機能も持っている。スコープを覗き、照準を合わせる。隊員の顔色は黒く、やはり先ほどの沖田と同じく動く死体と化しているようだ。永井はためらうことなくトリガーを引いた。一発目は外れた。銃音に気付いた動く死体が周囲を見回すが、距離が離れているため気付かれる可能性は低いだろう。永井は落ち着いて、二発、三発と撃った。二発目も外れたが、三発目は腹にあたった。大きくよろめいたところにもう一発撃ちこむ。動く死体は倒れた。

「よし、行くぞ」

階段を上がる三沢。永井が後に続く。三沢は倒れている隊員を一瞥することもなく静かに走り抜けた。永井もあまり見ないようにする。罪悪感は沸かないが、それでもかつては仲間だった人である。やはり見ていてあまり気持ちの良いものではない。永井も早々に走りぬげようとしたのだが、ふと、観覧車の前の看板に目が留まった。黒いスプレー塗料で、何か落書きがしてあった。いくつもの直線、あるいは三角形、四角形を組み合わせた模様だ。文字のようにも見える。

「三佐、あれは——」

永井が三沢に訊こうとしたが、三沢は足を止めることなく行ってしまった。

少し気になったものの、まあ、廃墟に落書きなど別に珍しいものではない。永井は三沢の後を追った。

この夜見島遊園は小高い丘の上に作られたもので、園内はかなり起伏がある。観覧車は敷地内で最も高い場所に建てられてある。昼間なら園内を一望することができただろうが、現在は闇に閉ざされよく見えない。

観覧車の前を通り過ぎると、今度は下り階段があり、下りたところから連絡橋が隣の丘へ続いている。向こう側にはコーヒークップの



遊具があり、かつては連絡橋を渡って行くことができたようだが、今は途中で崩れ落ち、渡ることはできなかつた。幸い高さはそれほどでもないため、飛び降りることはできた。

飛び降りたところで三沢はしやがみ、北の方向を見ていた。永井は三沢の視線の先を追う。かなり離れた場所に二体の人影が見えた。やはり死んだ隊員のようだ。さつき永井が狙撃した時よりも倍以上離れている。ここから狙撃するのは難しいな、と永井が考えていたら、三沢が静かに小銃を構え、スコープを覗くと、テンポよく二度引き金を引いた。ほぼ同時に、動く死体が二体とも倒れた。機械のように無駄のない動きと、正確な射撃だった。

三沢は、クロスカントリースキーを行いながら射撃を行う『バイアスロン競技』のアジア競技会において優勝するなど、射撃の名手として知られた男だった。永井が尊敬する沖田も三沢の銃の腕前を称賛していた。もつとも、永井自身は、愛想が無く近寄りがたい雰囲気のある三沢のことがどうも好きになれなかつたのだが。

三沢が移動し始めたので、永井は後へ続く。狙撃した二体の隊員のそばを走り抜け、遊園地の裏門までやってきた。だが、鉄格子型の門は閉ざされており、チェーンが何重にも巻き付けてあった。ちよつとやそつとでは開きそうにない。

「壁を越える」

三沢が言った。門の横に連なる遊園地の壁は、高さは三メートルほどだ。一人では到底手が届きそうにない。永井は壁の前でしやがむと、右ひざを立て、両手のひらを組んでその上に置いた。三沢がそれを踏み台にし、壁の上へ手を伸ばす。同時に永井は立ち上がり三沢を押し上げた。三沢の手が壁の上に届いた。そこから懸垂の要領でよじ登った三沢は、上から永井に手を伸ばす。永井は三沢の手を取り、引き上げられた。

訓練で何度も行っている、二人組で高い壁を乗り越える方法だ。慣れた者同士がやると簡単そうに見えるが、実際は二人の呼吸をピタリと合わせなければならず、初めてコンビを組む相手とではうまくいかないことが多い。永井は、訓練では沖田とコンビを組むことが多く、

三沢とこの壁越えを行うのは初めてだった。何度か失敗することを覚悟していたのだが、一度でうまくいった。それは、永井と三沢の呼吸が合ったというよりは、三沢が永井の呼吸に合わせたといった方が適切なように思う。かなり高い技術を持っていないとできないことだ。

「――よし、行くぞ」

壁を越え、再び先行して走る三沢。その背中が、かなり頼もしく見えた。高い射撃能力と壁越えの技術。ヘリトラブルの際、意識を失ったパイロットに代わり島への不時着を成功させた判断力。そして、死体がよみがえり襲ってくるという常識的にはあり得ない状況にも順応し、まず永井に攻撃させることで永井にも順応させた。この怪異の中、安心して命を預けることができる上官だろう。無口で無愛想な性格は好きになれそうにないが、今はこの人についていてみたい――永井はそう思い始めていた。

遊園地から脱出した二人は、南へ向かって進んだ。その先には、高い山と、その頂上に建つ鉄塔が、闇の中にぼんやりと浮かび上がっていた。

第六話 『懇願』 一樹守 夜見島／四鳴山林道 |  
2:24:32

襲い来る屍人から逃れ、夜見島港を離れた一樹守と岸田百合は、島中央部にそびえ立つ四鳴山しなりやまのふもとを通る林道を北東へ向かって歩いてきた。先ほど上空を通過したヘリを追い、島の北東部にある碑足という地域へ向かっているところだ。だがその足取りは重く、歩みはなかなか進まなかった。島で最も高い山である四鳴山へと続くこの道は起伏が激しい。当然舗装などされておらず、雨が降り始めたためかなりぬかるんでいる。坂道では滑りやすく神経を使うし、場所によつては沼のようになっていて、泥が足にまとわりつき体力を消耗する。一樹は仕事柄郊外へ取材に行くことが多く、体力にはそれなりに自信があるが、それでもかなり疲労がたまっていた。恐らく百合はさらに疲れていることだろう。一樹は、後ろを歩く百合を振り返り、ライトを向けた。

「……いや」

ライトを向けられた百合は、手をかざして光を遮り、顔をそむけた。

「あ、ごめん」

慌ててライトを下に向ける一樹。

百合は、ライトに照らされるのをやたらと嫌った。今のよう直接顔に光を当てられるのはもちろん、足元を照らされるのさえ嫌だった。少々異常とも思えるほどだ。もしかしたら、人より光を眩しく感じるのかもしれない。そういう目の疾患があることを、一樹は以前本で読んだことがあった。

「疲れたよね？ 少し休もう」

一樹は道端に手ごろな岩を見つけ、そこに二人で座った。

「ヘリを見つけたら、すぐに助けてもらえるよ。そうしたら、すぐ家に帰れるから」

一樹は百合を励ますためにそう言った。百合は視線を落としたまま、表情は暗い。あの港で襲ってきた動く死体のことを恐れているの

かもしれない。

「心配しないで。あいつは、追いかけてきてないから」

一樹はそう付け加えた。あまり根拠は無かったが、少なくとも、今のところ追いかけてくる気配はない。

百合は顔をあげ、一樹を見てほほ笑んだ。「大丈夫。もしまた襲って来ても、あなたが護ってくれるから」

そう言うと、百合は一樹の肩に頭を乗せた。一樹は少し戸惑ったが、そのまま肩を貸したままにする。どうも百合は距離感がおかしいように思う。ほんの一時前前に出会ったばかりの男に、これほど密着してくるものだろうか。もちろん、男だから悪い気はしない。しかし、少々度が過ぎているようにも思う。

……いや、死体が動き出して襲ってくる、なんて異常な状況なら、それも仕方ないかもしれない。彼女は不安なのだ。そう思うことにした。

それよりも。

あの動く死体は、一体なんだったのか？ 百合は、『屍人』と言っていた。蠢く闇——『屍霊』が死体に憑りつくことで、死体が動き始め、人を襲うという。馬鹿げた話だが、あの男が死んでいたことは一樹も確認している。蠢く闇が死体の中に入って動きはじめたところを、一樹自身目の前で見たのだ。信じられない話だが、今の一樹には百合の話を否定することができない。

「あたしのお母さん、この島に閉じ込められているの」

不意に、百合がそう言った。

「——え？」

突然の言葉に戸惑う一樹。百合はさらに続ける。

「早く助けてあげないといけないの。それである人、助けてくれるって言ったんだけど……」

あの人……さっきの襲い掛かってきた男のことだろうか？

百合は一樹の手を握り、まっすぐな視線を向けて来た。「お願い、あたしを助けて」

「ちよつと待って、落ち着いて、岸田さん」手を離そうとする一樹だっ

だが、百合は強く握ったまま離さない。

「百合って呼んで、守……」さらに身体を寄せてくる。

「百合、ちゃん、そのこと、警察には話したの？」

百合は視線を落とし、首を振った。「誰もあたしを信じてくれない。誰も助けてくれない。もう、あなたしか頼れる人はいないの。お願い守、あたしを信じて」

百合は、一樹の手を胸に押し付け、すがりつくように言った。唇が触れる寸前まで顔近づけ、うるんだ瞳で見つめる。魂を吸われるかのような、妖しい瞳だった。

母親が島に閉じ込められている……百合は、なにを言っているのだろう？ 二十九年間無人のこの島に母が囚われているなど、にわかには信じられない。普通ならば、タチの悪いイタズラか、あるいは、彼女の妄想と思うところだ。そんなことに付き合うよりも、今は助かることを考えなければならぬ。そのためには、島の北部に着陸したと思われるヘリのところへ向かうのが一番だと、一樹は考えている。

だが、百合の瞳を見ていると、一樹の頭からはそのような考えが薄れていった。百合の力になりたい——そういう思いが溢れてくる。

「お願い。あたしと一緒に、来て——」

誘惑するような百合の声に、一樹は。

「……ああ、判った」

そう頷いた。

その瞬間、百合は小さく笑ったように見えたが、恐らく気のせいだろう。

第七話 『予兆』 藤田茂 夜見島金鉱採掘所 — 5 :

26:51

「——至急至急、離島04から各署へ、繰り返す、離島04から各署へ——」

夜見島の中央、瓜生ヶ森の中にある夜見島金鉱採掘所跡で、警察官の藤田茂は携帯している無線機に向かって呼びかけていた。急ぎで県警に連絡を入れたいのだが、返事は無く、イヤホンから聞こえるのはノイズばかりである。さすがに携帯型の無線機で三十キロ以上離れた本土の県警へ連絡が取れる可能性は極めて低いだろうが、周辺の島の駐在所なら充分繋がるはずだ。どこの駐在所でもいい。繋がりさえすれば、そこから電話で県警に連絡してもらえらるだろう。

「繰り返す。離島04から各署へ。誰か聞いているなら返事をしてくれ。繰り返す。離島04から——」

さらに呼びかけてみるが、何度試しても、誰も応えてくれなかった。それどころか。

「——っ!!」

突然、耳の奥に針を刺すような大きなノイズが流れた。驚いてイヤホンを外す。しばらく耳鳴りで何も聞こえなかった。

「……なんなんだ、一体」

耳が回復するのを待ち、もう一度イヤホンを取りつけ、無線機に呼びかける。やはり返事は無い。それどころか、今度はノイズさえ聞こえなくなっていた。故障したのだろうか。藤田は大きいため息をつき、無線機を切った。署に連絡はできそうにない。このまま搜索を続けるか、一度本土に戻るか。時刻は夕方の六時半を回ったところだ。日没まではまだ三十分ほどあるはずだが、周囲はすでに暗くなり始めている。この瓜生ヶ森は四鳴山のふもとにあるため、陽はすでに山の陰に隠れている。加えて、上空はいつの間にか厚い雲に覆われていて、雨が降り始めるのも時間の問題だと思われた。藤田がこの島への上陸に使用したのは小型のモーターボートだ。周囲を航行する船に

存在を知らせるためのライト設備は、決して充分ではない。あのボートで夜の航行は危険だ。そうなると、この島で一夜を明かさなければならぬ。昼間、同僚には「パトロールへ行く」と言つて外に出た。田舎町の交番員である藤田が時間をかけて地域のパトロールをするのはいつものことなので、この時間ならばまだ騒ぎになつていないだろう。しかし、一晩も連絡が取れないときさすがに心配するはずだ。戻つたら、なんと言い訳をするか。その前に、一晩雨をしのぐ場所も見つけないければならぬ。

——やれやれ、面倒なことになった。

大きいため息をつき、藤田は周囲を見回した。すぐそばには、夜見島金鉱採掘所の建物がある。かつては多くの人が集まり、ここで金を掘つていたが、鉱量の枯渇に伴い徐々に人は減り、昭和四十八年には完全に閉鎖された。以来この建物は放置され、廃墟と化している。入口の鉄扉は開け放たれていた。あそこなら雨風をしのげそうだ、などと藤田が考えていると。

——うん？

建物のそばで、何かが動いたような気がした。

すでに周囲は薄暗く、はつきりとは確認できない。藤田はライトを取り出し、建物のそばを照らした。

そこには、黒い煙の塊のようなものがいた。

それはまるで生き物のようになうねうねと蠢いていたが、やがて光を嫌うように、建物の中へ入つて行つた。

——あれはまさか、死霊か!?

死霊とは、夜見島に古くからある伝承のひとつだ。海から来る穢れで、死体に憑りついて悪さをすると言われている。島では、死体に屍霊が憑りつかないよう、魔よけの効果がある木の枝を刺すという風習もある。島外の人間からすればおかしな風習だが、島の者はこの伝承を信じ、かたくなに守つていた。

藤田は建物の中をライトで照らしてみた。しかし、ここからでは光が充分に届かず、中の様子は判らない。屍霊の姿は見えないが、見間違いではないように思う。

あの屍霊を追いかけろべきだろうか？　だが、ここから先は廃墟とはいえ私有地だ。当然、今もどこかに所有者がいて、許可なく入ると不法侵入となる。緊急事態でもない限り、警察官がそのような行為に及ぶわけにはいかない。しかし、この夜見島で何が起こったのかを調べるためには、そういった行為も必要になってくるだろう。

藤田は、また大きくため息をつく。

「……今回は、左遷や減給じゃあすまんかもしれんなあ。やんなっちゃうなあ」

独りごち、そして、「すまんなあ、朝子」と、愛する娘に詫びた。

藤田は、屍霊を追って鉾山跡地に入った。

藤田茂は、中迂半島三逗港付近の交番に勤める警察官だ。現在五十二歳で、階級は巡査部長である。もともとは夜見島の出身であり、島に伝わる伝承や因習についてかなり詳しくかった。

夜見島には、『島で生まれた者は島で生涯を終える』という習わしがあるのだが、若い頃の藤田はこれに反発し、立身出世を夢見て中学卒業と同時に島を出た。その後は警察官となり、四開地方の県警に勤めることになる。妻をめとり、子をもうけた藤田は、がむしやらに働いた。その働きが認められ、一時は警部補まで昇進したのだが、三ヶ月前、逮捕した犯人を護送中に逃がしてしまうという失態を犯し、降格のうえ中迂半島の交番へ左遷されたのである。ずっと仕事一筋で家族など顧みなかった彼は、この左遷を機に家族に愛想をつかされた。現在は単身赴任、というよりは、ほとんど別居の状態だ。それ以降、出世は諦め、交番員として地道に勤務するつもりだったのだが。

ある日、藤田は地元の漁師から「あやしい女が夜見島へ上陸するのを見た」との相談を受けた。夜見島は昭和五十一年の島民失踪事件以降誰も住んでおらず、現在上陸は禁止されている。出入りしている者がいるならば退去を命じなければならない。とはいえ、夜見島は中迂半島からは三十キロも離れている。本来なら近隣の島に駐在する駐



在員に連絡し、対応してもらおうところだが。

藤田はこの件を誰にも報告せず、知り合いのついで小型のモーターボートを借りると、単身夜見島へ向かった。

故郷を捨てる覚悟で島を出た藤田だったが、昭和五十一年の島民失踪事件には胸を痛めていた。幸いというべきか、藤田の両親は事件前に亡くなっているので失踪はしていないが、地元の人や近所の人など、世話になった人は決して少なくない。あの日、夜見島で何があったのか？ 自分が中迂半島への赴任となったのは、それを調べるためなのでは？ 藤田は、いつしかそう思うようになっていたのだ。無論、いかに警察官とはいえ許可がなければ島へ上陸することはできない。かといって、今の状況で藤田に上陸許可が下りるとは思えない。藤田は人知れず島へ上陸し、通報があつた謎の女と、そして、昭和五十一年の島民失踪事件についての調査を始めたのである。

採掘所の建物は、森の中にアルファベットのSの字を描くようになっていている。その長さは、端から端まで実に三百メートルにも及ぶ。藤田がいるのは北東側の入口だ。むき出しの地面にレールが引かれ、いたるところに資材や金を運搬するためのトロッコが放置されてあつた。どうやら車庫のようである。周囲をライトで照らすが見える範囲に屍霊の姿は無い。藤田は慎重に奥へ進んで行った。

しばらく進むと、建物は緩やかな弧を描いて右へと曲がついていた。また、それとは逆に、左には地下へと通じるインクラインもあつた。インクラインとは、斜面に作られた専用のトロッコのことをいう。つまり、この下には金鉱があるのだ。屍霊がいるならより光の届かない地下だろう。そう考えた藤田は、インクラインに沿って設置されている階段を使い、地下へと下りて行った。

地下は、かつては多くの坑道へと通じていたのだが、現在は全ての入口が埋められており、入ることはできない。今は管理事務所があるだけだ。屍霊の姿は無い。ただ、天井には坑道内へ空気を送るための

ダクトが残されており、その中を通れば坑道内へ入れるかもしれない。無論、単身でそんなことをするのはあまりにも危険すぎるため、さすがにやめておいた。

藤田は地下を離れ、反対の右方向へ進んだ。その先は作業所へと通じている。地下から運び出された金は、ここで選鉱作業等を行っていたのだろう。しばらく進むと、今度は緩やかに左へと曲がっている。その先には南西側の出入口があるはずだ。選鉱作業を終えた金はそこから運び出され、島南西部にある夜見島港へ運ばれていたようである。

藤田は小さくため息をついた。ここまで、屍霊どころかネズミ一匹の気配さえ無かった。見間違いだっただろうか？ そう思い始めた。建物内には休憩所や倉庫などもあるが、そこまで調べることもないかもしれない。そう思い、北東側出入口へ戻ろうとしたとき。

視界の端を、何かが動いた。

すぐにライトで照らすが、何も無い。やはり見間違いか、そう思った瞬間、背後から、何者かに突き飛ばされた。転びそうになるが、なんとか踏みとどまる。振り返り、ライトで照らした。

そこに、蠢く闇——屍霊がいた。

屍霊は藤田に向かって来る。襲われる！ そう思った瞬間、屍霊は甲高い悲鳴のような音を上げ、蒸発するように消えた。どうやら光に弱いようである。ほっとしたのもつかの間、また背後から突き飛ばされた。すぐに振り返り、ライトで照らす。二体の屍霊がいたが、すぐに悲鳴を上げて消滅した。だが、今度は左側から小突かれた。思わずライトを手放してしまう。そこへ、さらに屍霊が襲ってくる。藤田はとっさに腰に携えていた警棒を抜き、振るった。相手は煙のような姿をしているが、体当たりをして来る以上、実体はあるのだろう。警棒で殴りつける。思った通りだった。水を殴ったような軽い手応えだったが、確かに実体がある。殴られた屍霊はやはり悲鳴を上げて消滅する。藤田はライトを拾い、周囲を照らす。どうやら、数十体の屍霊に囲まれているようだ。

——くそ、多いな。

屍霊は、一体一体はライトで照らしたり警棒で殴ればすぐに消滅するものの、こう数が多くては対処しきれない。何かないか？ 周囲を探す。壁にブレーカーがあるのが見えた。駆け寄り、スイッチを入れてみるが、明かりは点かない。島に電力を供給していた海底ケーブルは昭和五十一年に何者かによって切断され、今もそのままだ。この島に、電気は来ていない。

——仕方ない。

藤田はライトと警棒を無茶苦茶に振り回して屍霊の囲みから脱出すると、一目散に南西側へ走った。屍霊が追いかけて来るが、追いつかれる前に南西側出口から外へ脱出する。幸い陽はまだ沈んでおらず、周囲はうつすらと明るい。屍霊は出入口の手前で止まり、外まで追ってこなかった。藤田は、大きく安堵の息をついた。

だが、陽が完全に沈むのも時間の問題だ。そうになると、屍霊は外まで追ってくるかもしれない。早々に立ち去った方がいいだろう。藤田はその場を離れようとした。

——うん？

藤田は、南方面に広がる森の上空が、わずかに明るくなっていることに気がついた。ここから数キロ先だろうか、森の中に何か光源があり、それが空を照らしているようだ。

だが、そこは瀬礼洲せれすという地域で、藤田の記憶にある限り森が広がるだけの場所だ。もしかしたら藤田が島を出た後に開発が進み建物ができただのかもしれないが、現在島への電力は断たれている。それなのに、なぜ光が？

藤田は南の光を見つめる。ここからでは、光源が何かは見えない。もう少し高い所に登れば見えるかもしれないが——。

◇

不意に、娘の顔が思い浮かんだ。

藤田は大きく息をすると、光とは反対方向へ続く道を歩きはじめた。

この道を進んだ先には貝追崎かいおいでぎという地域があり、その浜辺にボートを停めてある。陽が落ちてから小型のボートで本土へ戻るのは危険だが、このまま島に留まるよりはましだろう。いや、本土まで戻らなくとも、近くの別の島でもいい。とにかくこの島から離れよう。今ならまだ上司に怒られるくらいですむかもしれない。最悪クビになつたとしても、命さえあればまだやり直すことは可能だ。

だが、この島で命を落とせば、もう何もやり直すことはできないのだ。その危険性が高いことを、藤田は本能的に感じていた。この島の『穢れ』は、恐らく自分ごときの手には負えない。これ以上関わらない方が賢明だ。

藤田は、貝追塚への道を急いだ。

第八話 『疑惑』 一樹守 夜見島／瓜生ヶ森 — 0

0:01:44

一樹守と岸田百合は、瓜生ヶ森の中を北へ向かって歩いていった。雨は強さを増し、足元はさらにぬかるんで歩きづらくなっている。すでに三時間近くこの森の中を歩いていた。道に迷ったのだろうか？

いや、道はずっと一本だった。迷ってはいないはずだ。しかし、ここは謎の失踪事件が多発している夜見島だ。常識では考えられない出来事が起こっても不思議ではない。ひよつとしたら、一度足を踏み入れたが最後、二度と抜けられない迷いの森なのかもしれない。

大きく首を振り、考えを振り払う。そんなのは、あまりにも非現実的だ。

オカルト雑誌『アトランティス』の編集者である一樹だが、彼自身はオカルト現象を何でもかんでも肯定しているわけではなかった。信じていないわけではないが、信じるからには徹底的に調査する必要があるとは思っている。今の段階で、ここが迷いの森などと考えるのは早計だ。島の大きさと不慣れな山道を考えれば、三時間程度で森を抜けられなくても、なんら不思議ではない。このまま進めば、きっと碑足地方へ着くはずだ。そう結論付けた。

「——きやー！」

後ろで百合が悲鳴を上げた。振り返る一樹。足を滑らせ、転びそうになった百合を支える。

「大丈夫？」

百合は、無言で頷くと、一樹の胸に顔を寄せてきた。まるで一樹の心臓の音を聞くかのように、そのまま顔を添える。

「ちよつと、百合ちゃん……？」戸惑う一樹。

「温かい……」

「え？」

「少し、このままでもいいさせて？ こうしてると、安心するから」

「……うん」

一樹は百合に言われるまま頷く。

「ずっと一人だった……一人で寂しくて、つらかった。でも、今はあなたがいる」

「あ……ああ」

「お願い、守。全てが終わったら……あたしと、ひとつになつて？」  
「え？」

一瞬なにを言われたのか判らず、一樹は何度も瞬きをする。

百合は顔をあげ、潤んだ瞳を向けた。

「ずっと守と一緒にいたい。いつまでも、一緒に」

吐息のような声で、ささやく。

「……………」

「……嫌？」

悲しげな表情になる百合。その顔を見ていると、なんとも言えない罪悪感を覚える。彼女を悲しませてはいけない。それは、男として最大の罪だ。そう思えてくる。

だから。

「……ううん、嫌じゃないよ。僕も、君と一緒にいたい」

一樹はそう答えた。

「ありがとう」

百合は、また一樹の胸に顔をうずめた。「抱きしめて、守。二度と離れないくらい、強く」

一樹は言われるまま、百合を抱きしめた。ほんの少し力を入れただけでも崩れ落ちてしまいそうな、まるでガラス細工のような華奢な身体だった。彼女を護らなければならぬと思った。なんとしてでも。突然、強い光に照らされた。目を焼かれるかと思うほどの、眩しい光だった。

「——嫌！」

光から逃れるように、一樹の背後に隠れる百合。

「誰だ!!」

一樹は光に向かって叫んだ。百合が嫌がつている。百合を護らなければと思う。自然と、感情がむき出しになる

「君こそ誰？」

一樹とは対照的に、抑揚のない無感情な声だった。「この島、立ち入り禁止だよ？　なにやってるの？」

光が足元へ下がった。目が慣れるのに少し時間がかかったが、なんとか、相手が迷彩服を着た二人組の男だということが判った。一人はかなり大柄な男で、もう一人は一樹と同じくらいの体格の男だ。二人は両手に小銃を持ち、訝<sup>いぶか</sup>しげな目でこちらを見ている。自衛官だろうか？

一樹は社員証を出し、声を改めた。「超科学編集社という雑誌社に勤める、一樹守です。船が転覆して、たまたまこの島に流れつきました」

大柄な男はライトで社員証を照らした。こちらが身分を明かしても、向こうは身分を明かそうとしない。訝しげな表情も変わらなかった。

「そちらは、自衛隊の方ですか？」

一樹が訊くと、大柄な男は、「ああ」と、そつけない返事を返した。相手の態度は気に入らなかったが、とにかく自衛官だということが判り、一樹は安堵の息を洩らした。「良かった。さっきのヘリ、やっぱり救助隊のものだったんですね」

「……………」

大柄な男は何も答えなかった。随分と無愛想な男だが、まあ、こういう気難しい人間はどこにでもいるだろう。誰であろうと、救出してくれるのならそれでいい。

一樹は百合を振り返った。「助かったよ百合ちゃん、ほら」

「嫌ー」

百合は一樹の背後に隠れたまま、男の前に出ようとしなない。それで一樹は気がついた。そうか。光がまぶしいんだ。

「…………そっちの人、どうしたの？」

大柄な男が、百合にライト向ける。

「嫌！　やめて!!」

百合は光から逃れるため、一樹の背後に隠れる。

「やめてください。この娘、光が苦手なんです」一樹は言った。

「光が苦手……う？ なに？ 幽霊や妖怪みたいなもの？」

大柄な男はさらに百合を照らそうとする。一樹には、百合が嫌がるのを楽しんでいるように見えた。いくら救出に来てくれたとはいえ、あまりに失礼な態度に、さすがに腹が立つてきた。

「やめろよ！ 嫌がってるだろ！」

思わず叫ぶ。同時に、不信感も湧き上がってきた。こいつらは、本当に自衛官なのか？ 考えてみたら、船が一艘転覆したくらいで自衛隊が出動するのもおかしい話だ。もちろん、一樹に事故の詳細は判らない。もしかしたら転覆したのは一樹の船だけでなく、多数の船が転覆・行方不明になるほどの大きな災害だったのかもしれない。しかし、災害派遣に銃を所持するなど、明らかにおかしい。

「あんたら何なんだよ！ ホントに自衛隊か!？」

一樹は男を突き飛ばそうとした。だが、男はびくともしない。一樹とその男では、あまりにも体格が違い過ぎた。それでも、百合を護らなければならぬ。男として、それが使命だと思った。

突然。

島の北部から、サイレンが聞こえてきた。

あの、海の上で聞いた濁ったサイレンとは違う、美しいサイレンだった。まるで、永遠の命を持つ鳥の鳴き声のような、澄み切った音色。思わず聞き惚れてしまうほどに、そのサイレンは美しい。

だが、サイレンとは、本来危険を知らせるものだと、一樹はすぐに思い出す。

「三沢三佐……あれ……!!」

若い方の自衛官が、北の空を指さした。

一樹もそちらを見る。

北の空を覆うかのように、巨大な赤い壁がそそり立っていた。

それは、ものすごい速さでこちらへ向かって来る。動く壁……いや、あれはまさか、津波か?! 血のように深い赤——深紅の津波。山



をはるかに越える高さだ。あんなものが押し寄せれば、島は丸ごと飲み込まれてしまうだろう。あり得ない。そのような津波など、あるわけがない。

一樹は、ただその場に立ち尽くす。あまりにも大きすぎて、現実味がないのだ。恐怖さえ感じない。思考が追いつかないとも言える。

サイレンは、鳴り続ける。

ふと、一樹は、そのサイレンが北の方角からではなく、足元から――地の底から聞こえてくることに気がついた。

サイレンが鳴り、赤い津波が迫る。

一樹たちは、赤い波に飲み込まれた。

☆

昭和八十年八月三日、深夜〇時。

島に、サイレンが、鳴り響く――。

第九話 『幻視』 一樹守 夜見島／瓜生ヶ森 0：0

1：08

一樹守は、闇の中にいた。

闇以外、なにも存在しなかった。見えないわけではない。仮に明かりがあったとしても、なにも照らし出すことはできないだろう。本当に何も無い世界——光さえ存在できない、闇だけの世界だ。

声が聞こえる。

女の声だった。泣いている。悲しげな声だ。助けを求めている。自分が助けなければいけないと思った。だが、存在するのは闇ばかりだ。泣き声の主はいない。どこを見ても、どこに向かっても、闇しか存在しなかった。助けを求めて泣く声に応えることができない。それでも泣き声は聞こえる。助けを求めている。でも助けられない。それが、一樹の心に罪悪感を生む。助けられない自分が悪いように思えてくる。泣き声は続く。やめろ……。耳をふさいでも無駄だった。泣き声はさらに大きくなり、罪悪感が一樹の心を蝕む。やめろ……。俺には助けられない……。泣き声はさらに大きくなる。これ以上この泣き声を聞いていたら、心がもたない。心まで闇の中に消えてしまいたい。もうやめてくれ!! 泣き声を打ち消すほどの声で叫んだ。

泣き声が、止んだ。

そして——。

「守だけはあたしの味方だと思ってたのに……。違ったんだね……。」

その瞬間、闇の世界が、崩れ落ちていった。

☆

百合の膝に頭を乗せた状態で、一樹守は意識を取り戻した。心配そうに顔を覗き込んでいた百合は、安堵の表情になり、優しく頭を撫でてくれた。一瞬考え、何があったのかを思い出した。そうだ。自衛官らしき格好の男たちに出会って、島を飲み込むほどの赤い津波に襲われたのだ。

身体を起こし、周囲を見回した。雨は降り続けているため地面はぬかるんでいるが、それだけだった。津波で木々が倒れたり、瓦礫が流れてきた様子は無い。ただ、あの自衛官二人の姿は無かった。

「……あいつらは？」

訊いてみたが、百合は無言で首を振った。

いったい何が起こったのだろうか？ 津波に襲われたと思ったが、周囲にその形跡は無い。あれは現実だったのか、幻だったのか……判らない。この島に上陸してから理解できないことばかりだ。オカルト雑誌の編集者としては心躍る状況、などとは、到底言えない。一刻も早く、この得体の知れない島から離れたかった。だが、どうすればいい？ あの二人組の自衛官はどこかへ行ってしまった。そもそも本当に自衛官かどうかも怪しかったが、とりあえず彼らを探すしかないだろう。一樹は立ち上がった。

その瞬間、激しい頭痛が一樹を襲った。鉈で頭を割られ、手を突っ込まれて脳をかき混ぜられているかのような痛みだ。目を閉じ、両手で頭を押さえ、痛みを耐える。すると、目を閉じているにもかかわらず何か見えた。雨が降る山道の映像だ。映像は激しく揺れ、息がはずむような声も聞こえる。走りながらビデオカメラで撮影した映像を見ているかのようだ。しばらくして、二人組の男女が映った。一人は百合で、もう一人は一樹自身だった。映像は二人へ近づいていく。そして、百合に手を伸ばした。

「――化物女!!」

女の声で、一樹は目を開けた。さっきまでの頭痛は、嘘のように消えていた。

「え……？ ちょっと……なに……？」

百合の戸惑う声。どこから現れたのか、大きな花の髪飾りをいくつ

も着けた着物姿の若い女が、百合に掴み掛っていた。

「なんであんたが生きてるのよ！　どんな術を使った！　お父様をどうした!!」

着物の女は鬼のような形相で百合の髪を掴み、振り回そうとする。悲鳴を上げる百合。

「おい！　やめろよ！」

一樹は女の肩を掴んで百合から引き離した。勢いで女は尻餅をついて倒れ、頭の髪飾りがひとつ地面に転がり落ちた。

女は怖い目で百合を睨み、立ち上がった。また掴み掛ろうとする。だが、一樹が百合を護るように立つと、ぎりぎりと言が聞こえそうなほどに歯をかみしめた。そして。

「ちよつと！　誰か！　誰かいないの!?　化物女はここよ！　誰か来て!!」

人を呼ぶように周囲に向かって叫び始めた。

なんだか判らないが、女の見幕に押され、一樹は百合を連れて逃げ出した。

しばらく走り続ける二人。女は追いかけてこなかったので、立ち止まった。

一樹は息を整えながら、「あの女の人、なに？」と訊いた。

百合は首を振った。「判らない。全然知らない人。頭がおかしいのかも」

そうかもしれない、と、一樹も思った。とにかく尋常じゃない様子だった。もつとも、死体がよみがえったり、赤い津波に襲われるような異常事態なら、おかしくなっても仕方がないかもしれない。しかし、あの女は何者だろう？　自衛官には見えなかった。消えた二人組の自衛官の連れではなさそうだ。あの女もまた、一樹や百合と同じくたまたまこの島を訪れたのだろうか？　上陸が禁止されているとはいえ、不可思議な事件が多発している島だ。興味本位で上陸する者は多いが、それでも、同じ時期にこれほど集中するものだろうか？　まるで、何かに導かれているかのようである。

「追いかけてくるかもしれないわ。行きましよう」

百合に手を引かれ、一樹は先へ進んだ。

しばらく進むと、森の中に大きな建物が見えた。高さは二階建て程度だが、森の中を這う蛇のように細長く曲がりくねった造りになっている。一樹は地図を取り出し確認する。瓜生ヶ森の中でこのような建物は、四鳴山の南のふもとにある夜見島金鉱採掘所跡だ。昭和三十年代後半、一獲千金を夢見た人が多く集まり、金を掘っていた場所だ。「お母さんは、この山の向こう——遊園地の中に囚われているの」

百合が言った。金鉱の発掘で栄えた時代、鉱員やその家族のための娯楽施設として、島の北東部の碑足という地域に『夜見島遊園』は作られた。恐らくヘリが着陸したのもその近辺だと思われる。ここから向かうには、四鳴山を東回りに迂回するのが近いだろう。そのためには、採掘所の建物を抜ける必要がある。今いるのは南西側の出入口だ。主に、採掘した金を夜見島港へ運び出すために使われていた出入口である。ここから中へ入り、北東側の出入口まで行かなければならない。

一樹は建物の外観を見て、小さな違和感を覚えた。何がおかしいのか……考えて、すぐにそれに気がついた。建物が綺麗なのだ。もちろん、新築同然というわけではない。古い建物には違いないが、この採掘所が閉鎖されたのは、島民消失事件よりもさらに前の昭和四十八年だ。三十年以上放置されていることになるが、どういうわけか建物の損傷はそれほどひどくないように見える。同じ時期に放置された夜見島港は、どの建物もいつ倒壊してもおかしくないような、まさに廃墟というありさまだったが、この採掘所は少し手入れすれば充分使えそうだった。放置されて数年しか経っていないように見える。こんな森の中で三十年以上も放置されて、そのようなことがあるだろうか？

「……なにか気になる？」百合が首を傾けた。

一樹は考えを振り払った。今はそんなことを気にしている場合ではないだろう。倒壊する危険が無いならその方がいい。一樹は「いや、なんでもなし」と答え、建物の中に入ろうとした。その後百合が続く。すると、また、あの脳をかき混ぜられるような激しい頭痛に

襲われる。頭を押さえうずくまる一樹。目を閉じると、また映像が見えた。今度は、頭を押さえうずくまっている若い男の背中だった。男の背格好は、一樹と全く同じだ。

「守？ 大丈夫？」

百合が一樹の頭に手を当てた。途端に痛みが引いていく。目を開けると、百合は一樹に寄り添うように、すぐ隣にしゃがんでいた。潤んだ瞳で一樹を見つめている。吐息を感じるほどの距離だ。雨に濡れた唇が、朝露を浴びた石榴ざくろの花びらのように艶やかだった。

「あ……ああ。大丈夫」一樹は危険な誘惑に逆らうように百合から目を逸らした。「でも、変なんだ。さつきから、頭が痛くなるたびに、おかしい映像が見える」

「映像？ どんなん？」

「今は、うずくまっている俺の背中が見えた。あの着物の女が襲ってきたときは、俺と百合ちゃんが見えた。あれはまるで……百合ちゃんやあの女が見ているものが、俺にも見えるような感覚だ」

「……そう。見えたのね」

百合は悲しそうな声でつぶやいた。

「あ、いや、なんでもない」一樹は百合を心配させないよう、できるだけ明るい声で言い、立ちあがった。「痛みは消えたから、もう大丈夫。さあ、行こう」

一樹は建物の中に入ろうとしたが。

「守、あたしを見て」

百合が呼び止めた。

「え？」

振り返る一樹。

すぐ目の前に、百合は立った。

「——目を閉じて」

吐息のような声で囁く。濡れた唇から目が離せない。

「え、いや、でも——」

「お願い……今はあたしの言う通りに」

百合は一樹の手を取り、両手で包み込んだ。雨に打たれ続けたせい

で、二人の手は氷のように冷たい。しかし、肌が触れ合うと、ほんのりとした温かさを感じる。

一樹は大きく息を飲むと、言われた通り目を閉じた。

「そのまま、あたしの方へ意識を送ってみて」

「意識を、送る？」

「ええ。心を解放し、あたしと共鳴するの」

「共鳴……？」

「大丈夫。守なら、きっとできるから」

よく判らなかつたが、言われた通り、百合がいる方を強く意識してみる。すると、一瞬テレビの砂嵐のような映像の後、目を閉じた一樹自身の姿が見えた。

「……これは!？」

一樹は目を閉じたままその映像を見続ける。さつき自分で言った通り、それはまさに百合が見ているものだった。

「それは、『幻視』という力。この島に古くから伝わる特殊な能力よ。他人の視界を見ることができるの。いま守が見ているのは、あたしの視界」

「そんな……なんでこんな能力が……？」

「きつと、お母さんの影響ね」

「え？」

「ううん、なんでもない。それより、他に気配を感じない？ 探ってみて」

「探る？」

「意識を、他の方向にも送ってみるの。その建物の中とか」

言われた通り、一樹は百合に行ったのと同じ要領で建物の中に意識を飛ばしてみた。

それは、まるでテレビのチャンネルをチューニングしているかのようだった。しばらくはノイズしか見えなかつたが、やがてぼんやりと何かが見え始め、そのまま集中して意識を合わせると鮮明な映像になった。今度は、建物内を歩いている映像である。地面は土がむき出しで、線路のようなものが敷かれてある。視点の主は飢えた獣のよう

に息が荒い。なにやらかなり興奮しているようだ。さらには「くわああらちゆをうわんのとうるむれぬううるんあるくらわえええんゆるくわくろるあ」と、呂律の回らない口調で意味不明なことを言っている。その右手には大きな鶴嘴が握られていた。

「これはまさか……屍人!？」

「ええ。他にもいると思う。探してみて」

一樹は他の場所にも意識を飛ばしてみる。丸い石を磨いている視点や、ダイヤル式の南京錠を回している視点が見えた。

「そんな……なぜこんなに?」

目を開ける一樹。屍人は、海から来る屍霊が死体に憑りついたものだ、百合は言っていた。複数の屍人がいるということは、それだけ死体があつたということになる。二十九年間無人だったこの島に、なぜそれほど死体があるのだろうか？

「ここはもう、さつきまでの夜見島じゃないわ。お母さんがつくった、うつしよの世界よ」

うつしよ……現世のことだろうか？ 神道や仏教などで使われる言葉だ。宗教によつて解釈は様々だが、概ね、我々生きている人間が暮らす世界のことを指す。ここが現世というのは当たり前の話だが、お母さんがつくった、とはどういう意味だろうか？ どうも百合の言うことは要領を得ない。

「ここにいと、あの女が追つて来るかもしれない。早く行きましよう」

一樹は百合に言われるままに建物の中へ入った。

建物内に明かりは点いていなかった。昭和五十一年の海底ケーブル切断事件以降、この島の電力は断たれたままだから当然だ。だが、そういうわけか、ぼんやりとではあるが室内の様子を見ることができた。そう言えば、あの赤い津波の後からずつとライトを消したままだった。すでに深夜〇時を回っており、雨が降っているため月明りさえない状況にもかかわらず、昼間と同じように行動できた。これも幻視の能力の影響だと、百合が言った。暗闇でもある程度は見えるようになるという。それでも、外と違い室内はかなり見づらかった。一樹



はライトを点け周囲を照らした。

そこは採掘所から運ばれてきた金を選鉱するための場所のようだった。むき出しの地面にレールが敷かれ、建物の奥へと続いている。その途中にはいくつかトロツコが放置されていた。倉庫や作業室などいくつかの部屋もあるようだ。

「気を付けて。奴らが来る」

百合が警告する。同時に、一樹の心臓が強く鼓動し始めた。一樹はライトを消し、トロツコの陰に隠れた。奥から足を引きずって歩く足音が近づいて来る。そっと顔を出して様子を窺う。グレーの作業着を着た男の屍人だった。屍人は一樹の隠れている方へは来ず、近くの部屋の引き戸の前で立ち止まった。鍵を開け、戸を開ける。だが、部屋の中へは入らず、しばらく中を確認しただけで戸を閉め、鍵を掛け直すと、奥へと戻って行った。と思つたら、またしばらくして部屋の前まで戻ってきて、鍵を開け、部屋の中を確認し、鍵を閉め、奥へと歩いていく。

「屍人は、かなり知能が低いの」百合が言った。「意味もなくああいった単純な行動を繰り返すことが多いわ。もちろん、あたしたちを見つけたら襲い掛かってくるでしょうけど」

しばらく様子を窺っていたが、百合の言う通り屍人は行ったり来たりを繰り返すだけで、その場を離れそうになかった。見つからずに奥へ進むのは難しいだろう。倒すしかない。だが、夜見島港で拾った角材は捨ててしまった。今うろついている屍人は武器を持っていないが、建物のどこかに鶴嘴を持った屍人がいる。他にも武装した奴がいるかもしれない。こちらでも何か武器を持たなければ。

「とりあえず、あの部屋に入ってみましょう。中に何かあるかもしれないから」百合がそう提案した。「あの屍人を幻視してみて。鍵の開け方が判るはずよ」

言われた通り、屍人を幻視してみる。屍人は足を引きずりながら引き戸の前まで移動する。鍵は、ダイヤル式の南京錠だ。屍人は番号を7356に合わせ、錠前を外した。そして部屋の中を確認すると、錠前をかけ直し、奥へと移動する。今がチャンスだ。一樹は幻視をや

め、足音を立てないようにしやがみ移動で部屋の前まで移動し、南京錠のダイヤルを7356に合わせた。かちやり、と、錠前が外れる。音を立てないように引き戸を開け、中に入り、そして静かに戸を閉めた。屍人に気付かれることはなかった。

部屋は鉞員用の休憩室だった。中央に食事をするための机が置かれ、冷蔵庫やコンロ、そして、冬用の石炭ストーブも備え付けてあった。奥には仮眠室もあるようだ。武器になりそうなものを探す一樹が見つかったのは、石炭ストーブをかき混ぜるための金属製の火掻き棒だけだった。武器と呼ぶにはあまりにも頼りないが、なにも持たないよりはましだろう。

「あいつが戻って来たわ」

百合に言われ、さっきの屍人を幻視する。部屋の前まで迫っていた。武器は手に入れたものの、なるべく危険は冒したくない。二人は一度仮眠室へ隠れることにした。屍人は部屋の前でじっと引き戸を見る。南京錠が無いことを不審に思うかと思ったが、屍人は引き戸を開け、その場から中を見渡しただけで、また戸を閉め戻って行った。どうやら知能が低いというのは一樹が思っている以上のようだ。恐らく自分で鍵をかけたことを忘れてしまったのだろう。

「今がチャンスだ」

一樹は休憩室から出ると、建物の奥へと歩いて行く屍人の背後に静かに近づき、後頭部めがけ、渾身の力で火掻き棒を打ちつけた。一発では倒れなかったので、振り向こうとしている屍人の顔めがけてもう一度打ちつけた。屍人は悲鳴を上げ、その場に倒れた。もう、夜見島港の時のようなためらいは無かった。

「やったわね、守」百合が笑顔で言う。「でも、気を付けて。倒したように見えても、それは、屍霊がいったん離れただけ。また屍霊が憑りつけば、よみがえるわ」

そうだった。夜見島港にいた屍人も、いったんは倒したものの、別の屍霊が憑りついたことでよみがえった。もしかしたら屍霊がこの闇にまぎれているかもしれない。一樹はライトを点け、周囲を照らした。思った通り、どこからともなく現れた屍霊が、死体へと近づいて

来る。しかし、一樹がライトで照らすと、屍霊は悲鳴のような鳴き声を上げ、溶けるように消滅した。

「屍霊にとつて、死体は『殻』なの」

「『殻』？」

百合の言葉に、一樹は首をひねった。

「ええ。屍霊は、光を浴びただけで消滅してしまう。だから、光から身を守るために、人間の死体に入るの。死体に入った屍霊は、光に耐性を持つようになる。そうなったら、もうライトを当てても効果は無いわ」

つまり、屍霊は人間の死体をシエルター代わりにしているというわけだ。屍霊は海から来ると言っていた。それは、普段は光の届かない海の底にいるということなのだろうか？

「よみがえるといけないから、一旦ここを離れましょう」

百合に言われ、二人は先へ進んだ。

少し進むともうひとつ部屋があった。近づくと、また一樹の鼓動が激しくなる。幻視で部屋の中の様子を探ると、屍人が何か作業をしているようだった。サッカーボール大の石を磨いている。部屋の戸は開け放たれており、屍人は作業をしながらも時折外の様子を見ている。幸い部屋から出ることはなかった。一樹はそのまま幻視を続け、屍人が出入り口から目を離し作業に入ったタイミングで、静かに部屋の前を通過した。部屋から離れると、心臓の鼓動は小さくなった。島に上陸した時からそうだったが、どうも屍人が近くにいると鼓動が激しくなっているように思う。まるで、警告を促しているようだ。もしかしたら、これも幻視のような特殊能力なのかもしれない。

作業場を抜けると、建物は緩やかに右へとカーブを描いて続いていた。さらに進むと今度は左へカーブしている。ちょうど、アルファベットのSの字を描く形だ。進んだ先はトロツコの車庫になっているようだ。また、それとは別に、正面には地下へと続く階段とインクラインもある。地下には金鉱へと続く坑道があるのだろう。さらに、この一帯は二階建ての構造になっており、階段をのぼって上へ行けるようだった。

一樹は車庫の方向を幻視してみた。いくつかの屍人の気配を感じる。厄介なことに、皆鉄パイプや鶴嘴などを持ち、侵入者を警戒するように、巡回したり周囲を見回したりしている。数が多く、戦って通過するのは難しいだろう。

「鉄パイプを持った奴が、こちらに来るわ」

一樹と同じく屍人を幻視していた百合が言った。「後ろの奴もそろそろよみがえるかもしれない。一旦どこかに隠れましょう」

一樹は周囲を見回した。インクラインのそばに小さな部屋があるのを見つけた。幸い鍵はかけられていなかったので、中に入った。

「——あれ？」

一樹は部屋の不自然さに気がついた。部屋の明かりが点いているのだ。海底ケーブルの切断で、現在島へ電力は供給されていないはずだ。自家発電装置でもあるのだろうか？ もともと金の採掘所なのだからそれくらいの設備はあるだろうが、だとしても、燃料はどこから調達したのだろうか？

「ごめん、電気消してくれる？」

百合がまぶしそうに顔を手で覆っていた。彼女は光が苦手だったことを思い出し、一樹はスイッチを見つけて明かりを消した。息をひそめ、幻視で外の様子を窺う。幸い鉄パイプを持った屍人は部屋まで来ることはなく、そのまま引き返していった。

一旦危機は去ったが、車庫にいる屍人は数が多く、そのまま進むのはあまりにも危険だった。何か方法を考えなければ。一樹はとりあえず部屋を調べた。そこは、天井にいくつものダクトが通り、機械によって管理されているようだった。地下の坑道へ空気を送り込むための送風機を管理する部屋だろう。天井を通って壁の中へ続いているダクトは、ところどころ外れかかっており、機械も動かなかった。さらに部屋を探索すると、壁の一角が少し剥がれているのを見つけた。部屋は木造で、壁は木の板を打ちつけたものである。壁をはがせば建物の外に出られそうだった。幻視で確認した限り、外に屍人の姿は無い。ここから脱出するのが良いだろう。しかし、剥がれているのはほんのわずかで、穴は小さく、そのままでは通れそうにない。何か

工具のようなものでもあれば、穴を広げられるだろう。

「地下へ行ってみる？」と、百合が提案する。「元は金鉱だった場所だから、鶴嘴とかあるかもしれないわ」

いい考えだった。一樹は屍人の動きを警戒しつつ、部屋を出てインクラインそばの階段を下りた。

地下は、かつてはいくつもの坑道があったようだが、施設の閉鎖時に全て埋められた為、現在は管理事務所があるだけだった。事務所は鍵がかけられていたが、ドアは上部に窓が付いているタイプだったので、窓を割って内鍵を開け、中に入ることができた。残念ながら鶴嘴は無かったが、ボールを見つけることができた。板壁をはがすのなら充分だろう。一樹はボールを手にとると、事務所を出て送風機管理室へ戻ろうとした。

——うん？

ふと天井を見る一樹。送風機室から伸びたダクトが各坑道へ続いている。ダクトはどこどころ格子状になっているのだが、そのひとつに、何かあるのを見つけた。ライトを点け照らしてみる。それは、大きな花の形をした髪飾りのようだった。見覚えがある。この採掘所跡に来る前、百合に掴み掛ってきた着物の女が着けていたものだ。それが、なぜあんなところに？

「——あれ、気になる？」

百合が首を傾けた。

一樹は——。

◇

「……いや、今はあんなものを気にしてる場合じゃないよ。行こう」

一樹は階段を上って再び送風機室へ入ると、ボールを使って板を外していった。三枚外すと、充分通れる大きさになった。一樹と百合は壁の穴を潜り、外へ出た。外に屍人の気配はない。うまくいった。これで、碑足方面へ向かうことができるだろう。二人は顔を見合わせ、そして、微笑みあった。

百合が抱きついてきた。

「ありがとう守。あたしのために、頑張ってくれて」

「いや……そんな、たいしたことはしていないよ……」

戸惑いながら答える一樹。心臓の鼓動が激しくなる。それは、近くに屍人がいるからなのか、百合に抱きつかれたからなのか、もう判らなかつた。

「あなたとなら、きっとお母さんを救える」

そう言った後、百合は顔を近づけて来た。一樹と頬を合わせるほどの距離。

そして、耳元でささやく。

「もうすぐ、あたしたちはひとつになれる。ずっと、ずっと、一緒にいられるの」

息を飲む一樹。心臓が、激しく鼓動する。密着し、触れ合った部分がほんのりと温かい。その彼女の温もりを、全身で感じたい衝動に駆られた。

百合は、フフツと笑って、一樹から離れた。

「さあ、行きましょう」

百合に手を引かれ、一樹は遊園地のある碑足方面へと向かって歩く。

二人の姿は、闇の中へ消えた。

第十話 『過去視』 喜代田章子 夜見島／蒼ノ久漁  
港 — 1 : 0 0 : 1 1

夜見島の南西部、鳩の形で例えると後頭の場所にある蒼ノ久集落の海沿いの道で、喜代田章子は堤防越しに夜の海を眺めていた。ライトに照らされた海は闇のごとく黒い。少し前に雨が降り出し、かなり波も立ってきた。どこか不気味な雰囲気ではあるが、しかし、異常というほどでもない。この島へ向かう途中、章子が乗った船は、血のごとく真つ赤な高波に襲われ、転覆した。あの赤い高波は、いったいなんだったのだろうか？

「——しっかし、よく助かったよなあ、オレたち。あんな高波に飲まれたら、普通アウトだぜ？ いやあ、やっぱオレ持つてんなー」

章子の背後では、リーゼントの髪型に黒のデニムジャケットという、いかにもヤンキーという格好をした男がうろろと歩いていた。章子の連れの阿部倉司だ。少し前、章子と一緒に海に投げ出され、命からがら助かったとは思えないほど陽気な声である。

「でもよ、他のヤツらはどうなったんだろうな。無事だといいが」

阿部はポケットからライターとタバコを取り出した。口にくわえ火を点けようとしたが、湿気ているせいか点かなかった。海に落ちたのだから当然だろう。阿部は舌打ちをしてライターとタバコをしますと、章子に向かって「なあ、この島、コンビニとかねえの？」と訊いた。二十九年も無人の島にコンビニなんてあるわけないだろ、と思いつつも、章子は無視して考え込む。

章子と阿部が乗っていた船には、他に四人と一匹の同乗者がいた。船長の男と船員の女、韓国のイケメン俳優似の若い男、そして、サングラスの男とその連れの犬である。みんな港で初めて顔を合わせた人たちで、どこの誰かは知らない。ただ、あのサングラスの男については、少しだけ判った。船が大きく揺れた際、彼が倒れそうになったのを章子が支えたのだが、あるとき、一瞬彼の過去が見えた。名前は三上脩。テレビや雑誌などに多数出演する人気作家だ。章子は、彼の

ことをよく知っているような気がした。もちろん、人気作家だからどこかで見聞きしたことはあるだろうが、それだけではない。もつと、ずっと昔から知っているような感覚がある。今日出会ったのは、はたして偶然だろうか？

それに。

考えてみたら、こんな本土から遠く離れた誰も住んでいない島に、自分と阿部、そして、三上とイケメン風の男、同時期に四人も向かうなんて、偶然にしてはできすぎている。さらには、少し前に島の北東部にヘリが着陸したような様子もあった。まるで、みんな何かに導かれているかのようだ。そうになると、自分たちがこの集落に流れ着いたのも、偶然ではないかもしれない。

章子は目の前の堤防を見つめた。さつきから、強い残留思念を感じる。これが自分たちを導いたのかもしれない。それは、この島の『記憶』と呼べるものだ。それを読み取れば、何か判るかもしれない。

章子は、堤防に手を伸ばした。

喜代田章子は、都内で古い店を営む二十九歳の女だ。繁華街からはかなり離れた雑居ビル内にある小さな店だが、密かな人気があり、芸能人や、有名企業の重役、さらには、政界の重鎮も顧客になっている。それだけよく当たることで有名なのだ。

章子は、タロット、水晶、霊視、など、よくある占いは一通り行うが、実は、それらはすべてパフォーマンスにすぎない。彼女の占いの元になっているのは、触れたものの『記憶』を読み取る力である。

章子には、幼い頃から触れたものが記憶している過去を読み取るという特殊な能力があった。『過去視』と、彼女は呼んでいる。その能力の対象は人に限らず、動物や物にまで及ぶ。章子の占いは、全て、この力を元に行われているのだった。

章子になぜこんな特殊な力があるのか、それは、彼女にも判らない。ただ、親から聞いた話では、母親は妊娠中事故に遭い、そのとき不思議



議な体験をしたらしい。それは旅行先での出来事だった。海辺の街で遊覧船に乗った母は、誤って海へ転落し、溺れたそう。母が海の底へ沈もうとしていたとき、肌が真っ白な美しい少女が海中を泳ぎながらやってきて、母親の体内に入ったという。その後母は救出されたが、母は、その少女のおかげで助かったと信じている。

そして。

「――あの女の娘は、たぶん人魚だったのね」

母は、いつもそう言ってこの話を締めくくった。

つまり、章子の特殊な力は、人魚によるものだ、というのである。

この話は、章子自身が母を過去視し、本当に体験したことだと確認している。もっとも、それが現実だったのか夢だったのかまでは章子には判らないし、人魚の力なのかどうかもまた判らない。ただ、それ以外にこれといった心当たりがないのも確かだった。

きっかけはどうあれ、章子には生まれつき過去を見る能力があった。思春期はこの能力のおかげで人間関係がうまくいかずふさぎ込んだこともあったが、占い師という道を選び、能力を人のために役立てることができるようになって、生きがいを感じるようになった。今では、この能力に感謝していた。

堤防に触れ、過去を読み取ろうとしたとき。

「……んで、これからどうするんだ？ 占い屋」

と、阿部が話しかけてきた。「てーか、オメーに言われるまま船に乗ったけど、大丈夫なのかよ？ この、なんとか島？ 何があるんだよ？」

章子は過去視をやめ、阿部を見た。「そこまでは判らないけど、大丈夫。あたしの占いを信じなさい」

「その占いが信じられないっつーの。オメーだろ、柳子りゅうこに、俺と別れるように言ったのは」

「それは占いじゃなくて、あんたの見た目から客観的に判断しただけ

よ。そんな格好してオラついてたら、普通ヒモだつて思うでしょ。それより、少し考え事してるから、静かにしてて」

「オレはいつも静かにしてるだろ」

けるつとした顔で言う阿部。あの男と出会ってから一度だつて静かだつたことはないが、それは言つても仕方がないということは、すでに章子も判つていた。

阿部倉司は、章子の友人である多川柳子たがわりゆうこの交際相手——さらに言えば同棲相手である。章子は、常々柳子から「今の暮らしを続けていいのかわからない」と相談されていた。章子は仕事とプライベートはつきりと区別するタイプであり、また、友人の過去を勝手に覗き見したくなかつたので、彼女の相談には一切の能力を使わずアドバイスをした。いま思えば、それは間違いだつた。彼女の相談に能力を使つていれば、あのような悲劇は免れたかもしれない。

八月一日——つまり昨日の夕方、多川柳子は、阿部倉司と同棲しているアパートの部屋で、遺体で発見された。

頭部を何度も殴打され、顔の判別ができないほどだつたという。警察は殺人と断定し捜査を開始。ほどなく、同棲相手の阿部倉司が指名手配された。阿部と柳子は一年ほど前から同棲しているが、常日頃から口論が絶えなかつたという。また、事件前夜も争うような物音が聞こえたと、近所の人が証言したのだ。さらに、事件後阿部は一度任意の事情聴取を求められたが、それを拒否し逃亡している。見た目からしてもいかにもやりそうな感じなので、指名手配は当然と言えた。

だが、阿部本人は柳子の殺害を完全に否定している。それどころか、柳子は生きていると主張していた。

彼の話によると。

事件当日の夕方、アルバイト先から帰宅した阿部は、アパートの前で部屋から出てきた柳子とすれ違ったという。阿部は柳子に声をかけたが、柳子は阿部を完全に無視して立ち去つたそう。柳子は仕事に出かける時間だし、彼女が突然不機嫌になるのは別に珍しいことではないので、阿部はあまり気にせず部屋に入った。そこで、血まみれの女の死体を発見したそう。死体は柳子の服を着ており、体つきも

よく似ていた。しかし、顔は判別できないほど殴打されていたし、なにより、直前に部屋から柳子が出ていくのを見ているので、死体は絶対に柳子ではない、と、阿部は言う。

警察の任意同行から逃げ、指名手配された阿部は、柳子の友人である章子に助けを求めて来た。その際、阿部は血まみれのネイルハンマーを持っていた。殺害現場の死体のそばに落ちていたらしい。恐らく犯人が殺害に用いた物だろう。そんな物を持ち歩いていたら逮捕された時にいつそう不利になるだろうが、そんなことは考えてもいないようだった。もつとも、章子にとってこれは幸いだった。章子はネイルハンマーを過去視してみた。過去視の仕組みは章子自身にもよく判らないが、彼女は、人や物に残った『残留思念』のようなものを読み取るものだと思っている。思念の強さは物によって様々だ。思念が強ければはつきりと読み取ることができるが、弱ければぼんやりとしか読み取れない。残念ながらネイルハンマーに残っていた思念はわずかだったが、かろうじて『夜見島』というワードを読み取ることができた。

それに従い、二人は事件の真相を探るため、夜見島を訪れたというわけである。

章子は、気を取り直して堤防に触れた。精神を集中し、堤防に残っている『記憶』を読み取る。

堤防は、この場所に建設されてから今に至るまでの全ての出来事を記憶しているはずだが、章子の力ではそのすべてを読み取ることにはできない。読み取れるのは強く刻み込まれた記憶だけだ。それは、アナログテレビのチャンネルをチューニングする作業とほとんど同じだ。弱い記憶は砂嵐のノイズのようにしか表示されず、強い記憶ほど鮮明な映像になる。章子は堤防に残っている最も強い記憶を探り、意識を同調させた。

見えたのは、若い女と幼い少年が手を繋いでいる姿だった。

若い女の方は、背を向けているため顔が見えない。女は、島の中央にそびえ立つ高い山と、その頂上付近に建つ鉄塔を見つめていた。いや、さらにその向こう、山の反対側にあるものを見ているようにも思える。

少年も、女と一緒に山の方を見ていたが、やがてそれに飽きたのか、周囲を見回し始めた。その顔は幼く、まだ小学校にも通っていないと思われる。恐らく五歳にも満たないだろう。

女は少年の手を握ったまましばらく山の方を見つめていたが、やがて少年の方を見た。それで、章子にも女の顔が見えた。驚いて息を飲む章子。二十歳前の少女だろう。生まれて一度も陽の光を浴びたことがないと思うほど白い肌をした美しい少女だった。だが、章子が驚いたのは、少女の美しさではない。その顔が、彼女の友人の多川柳子と同じだったからだ。どう見ても柳子本人だが、それはあり得ない。これは、この島の過去の記憶。この夜見島には二十九年間誰も住んでいない。ならばこの記憶も、二十九年以上前のものはずだ。

少女は少年の顔を見て、言った。

「――七つの門と、七つの鍵を開けるの」

透き通るような声だった。その声も、柳子と全く同じだった。

少年は、言われたことが理解できなかったのか、ぽかんとした顔で首を傾けた。「宝探しをするの?」

少女は微笑んだ。「そうね。鍵を全部開けたら、めいふくだりをするの」

「めいふくだり?」

「ええ。それで、宝物を見つけることができるわ」

少年は、浮かない顔で視線を落とした。「お姉ちゃん、ぼく、できない。なんだか怖い」

少女は少年の目線にしゃがみ、両肩に手を置いた。

「脩、勇気を出して。脩なら、きっとできるから」

そこで、『記憶』は途切れた。

「お、ラッキー」

阿部の声で、章子は我に返った。振り返ると、阿部は道端に落ちていたものを拾っていた。金色の将棋の駒のキーホルダーだった。

「なあ占い屋、これ、純金じゃね？ やっぱオレ持つてんなー」

章子にキーホルダーを見せ、満面の笑みを浮かべる阿部。どうにも緊張感が無い。自分が指名手配をされていると判っているのだろうか？

章子が無反応なのを見て、阿部はつまらなそうな顔をしてキーホルダーをポケットにしまった。「なんだよ、愛想ワリーな。そんなじゃ、客が来ないぞ？ 占い屋」

章子は大袈裟にため息をついた。「あのさ、その、占い屋って呼ぶの、やめてくんない？」

「なんでだよ？ 占いして飯食ってりや、占い屋だろ？」

「なんかイメージが良くないのよね、その言い方。まるで、リヤカーでも引いて『うらない〜うらないかがつすか〜』って、売り歩いているみたいでしょうが」

「売るのがうらないのかハッキリしろ」

「うるさい。とにかく、その呼び方はやめてちょうだい」

そう言われ、阿部は章子の姿を上から下まで眺めまわした後、言った。「じゃあ、占い女」

「……………」

「……………」

「よし」

「いいのかよ」

「占いは、あたしの人生そのものだからね」

「まあ、オメーがいいならいいけどよ」

「んなことはどうでもいい。今ちよっと考え事してるから、黙っててちょうだい。判った？」

「オレはいつも静かにしてるだろ」

もう一度ため息をつく章子。判っていないようだが、相手にしてい

てはキリがない。

章子はいまの過去視について考える。あの男の子、脩と呼ばれていた。三上脩のことだろうか？ 彼がこの島の出身であることは充分に考えられる。あの少年が子供の頃の三上脩だったとして、『お姉ちゃん』と呼ばれていた女は誰だ？ 柳子と同じ顔をしていたが、決して柳子ではない。この島は昭和五十一年の島民失踪事件以降誰も住んでいない。あの映像は、少なくとも二十九年以上前の出来事だ。柳子は十八歳だから、あの『お姉ちゃん』は、決して柳子ではない。ならば、柳子の母親だろうか？ 普通に考えればその可能性が高い。しかし、いくら親子でもあそこまで似るものだろうか？ 面影があるというレベルではない。身長や体型、声やほくろの位置まで同じだった。双子でもあそこまで同じ姿ということはないだろう。それに、柳子は中迂半島にある亀石野という地域の出身で、母親もその生まれだと聞いている。夜見島の出身ではないはずだ。あの女について探らなければならぬ。この島に住んでいたのなら、他の場所にも記憶が残っているはずだ。

章子は阿部を見た。

「おいヒモ。そろそろ行くよ」

「誰がヒモだ。オレはちゃんと仕事してる」

「バイトでしょ。それも、指名手配されたから、今ごろきつとクビになってるわよ」

「かもしれないが、とにかくオレはヒモじゃない。その呼び方はやめてくれ」

そう言われ、章子は阿部の姿を上から下まで眺めまわした後、言った。「じゃあ、リーゼント」

「……………」

「……………」

「よし」

「いいのかよ」

「リーゼントは、オレのポリシーだからな」

「まあ、あんたが いいならいいけど。とにかく、そろそろ行くよ」

「行くつて、どこへ？」

「とりあえず、その辺を調べてみる。柳子の手掛かりが見つかるかもしれないから」

阿部は、「ふーん」と頷いた。この島の調査は阿部の無実を証明するためでもあるに、まるで他人事のような。先が思いやられる。章子がもう一度ため息をつこうとしたとき。

海と反対側——鉄塔が立つ山の方角から、サイレンが聞こえてきた。

船の上で聞いた濁ったサイレンとは違う、澄み切った、美しいサイレン。

二人はサイレンが聞こえてくる方向を見る。

「……おいおい。またかよ！」

阿部が叫んだ。

山を越える高さの赤い津波が迫っていた。島全体を覆い尽くすほどの、巨大な津波。

——いや、あれはたぶん、現実ではない。

章子は、直感的に悟った。

「おい！ 何してんだ占い女！ 早く逃げるぞ！」

少しでも高い場所へ行こうと、阿部は東の高台を指さす。だが、津波はもう目の前に迫っている。到底間に合わないし、津波の高さは高台をはるかに超えている。

それに。

「たぶん大丈夫。死にはしないわ」章子は言った。

「はあ？ なに言ってるんだよ！ あんなのに巻き込まれて、大丈夫なわけないだろ！」

「心配しないで。それより、気が付いたらまた別の場所にいるかもしれないけど、すぐに見つけるから、なるべく動かないでね。いい？」

「なに落ち着いてんだ！ それよりも早く——」

阿部の声は、そこで途切れた。

二人は、島ごと赤い津波に飲み込まれた。

第十一話 『邂逅』 三上脩 夜見島／蒼ノ久集落

— 2 : 25 : 10

愛犬のツカサに顔をなめられ、三上脩は意識を取り戻した。

周囲を見回すが、霧に閉ざされているかのようにはんやりとしか見えない。三上は弱視であり、眼鏡を掛けなければほとんど何も見るこ  
とができなかった。手探りで周囲を探ってみるが、眼鏡——外出時に  
愛用している度入りのサングラスは、手が届く範囲には無かった。意  
識を失う前の記憶を探る。船で夜見島へと向かう途中、海が荒れたの  
か揺れが激しくなり、やがて転覆したのだ。それからどうなったのか  
は判らない。自分がどこにいるのかさえも不明だが、地面は揺れてい  
ないから、少なくとも船の上ではなさそうだ。肌にまとわりつくよう  
な湿気の多い風と、潮の香り、そして、波の音も聞こえる。海辺にい  
るのかもしれない。船に同乗していた他の人たちはどうなっただろ  
う？ 近くに誰かいないだろうか？ 呼びかけようとして、突然、激  
しい頭痛に襲われた。頭を押さええてうずくまり、必死に痛みを耐え  
る。すると。

——なんだ？

痛みが引くとともに、目を閉じているにもかかわらず映像が浮かび  
上がった。うずくまっている男を見ているような映像だ。奇妙なの  
は、映像の下半分の中央に、動物の鼻先のようなもの突き出している  
ことだ。

——これはまさか、ツカサの目か？

すぐそばにおとなしく座っているツカサの方を向いた。すると、映  
像の男もこちらを見た。手を動かすと、映像の男も同じ動きをした。  
ツカサの視点で間違いなさそうだった。他者の見ているものが見え  
る。そんな特殊な力に、三上は覚えがあった。

——幻視。

それは、夜見島に古くから伝わる特殊能力だ。子供の頃に聞いたこ  
とがある。だが、それを教えてくれたのは父だったか、姉だったか



……そこまでは思い出せない。三上の子供の頃の記憶はあいまいだ。特に、四歳より前のことは、ほとんど何も覚えていなかった。

三上は立ち上がり、右手の人差し指を立て、周囲を指さした。ツカサがそれを追うように周囲を見回す。それで、三上は周囲の様子を見ることができた。陽が落ち、雨も降っているため月も雲に隠れているが、犬の目ならば問題ないだろう。それに、少し離れた場所に建っている電柱の街灯も灯っている。

そこは、小さな漁港のようだった。すぐそばに低い堤防があり、その向こうに小さな漁船がいくつか停泊している。三上がいるのは海に沿って続いている道路の真ん中だった。海の反対側は、緩やかな丘にいくつもの民家が建てられていた。ところどころ明かりがともっており、人が住んでいる気配がある。

三上は息を飲んだ。この光景……覚えていて。これは、私が子供の頃に住んでいた場所だ。夜見島の、蒼ノ久漁港。

——いや。

そんな訳は無い、と、思い直した。夜見島は二十九年前の島民失踪事件以来、人は住んでいない。さらに、同日に発生した海底ケーブル切断事件の影響で、今も電気は通っていないはずだ。今いる地域は、ここから見えているだけでも、いくつかの街灯や民家の明かりが灯っている。人が住んでいる気配があるのだ。ならば夜見島ではないはずだ。では、この既視感は何なんだ？ 考える。三上の子供の頃の記憶はあいまいだ。恐らく、似たような風景と曖昧な記憶が結びつき、以前住んでいた場所のように思えるのだろう。そう思おうとしたのだが。

道を進み、街灯のそばの角を曲がって、緩やかな坂道を上ると、道端に石段があり、その先に小さな民家の門が見えた。そこには、『三上』という表札がかけてある。

——これは、私の家。

記憶が掘り起こされてゆく。勘違いではない。漁港から家へ帰る道順も、この門構えも、はつきりと思い出した。ここは、子供のころ過ごした集落、住んでいた家に、間違いない。では、なぜ人が住んで

いる気配があるのだろうか？ 三上の家も、門の明かりは灯っていた。玄関は石段を上がった先なのでここからでは見えないが、そこも電気が点いているようだ。

と、その、玄関の方から。

「——お父さん、起きてよ。お父さん……お父さん！ お父さん！ お父さん!!」

今にも泣きそうな子供の声が聞こえてきた。

記憶が掘り起こされる。雨が降り続く夜。大人たちがどなる声。薄暗い階段を一人下りて行く心細さ。玄関で倒れている父。血まみれの父。どんなに呼びかけても、どんなに腕を揺すっても、怖い顔のまま動かない父。そして——。

その先は、思い出せない。

——これは、現実なのか、それとも、私の記憶なのか。

三上は石段を上る。ツカサが後に続く。玄関の様子が、少しずつ見えてくる。引き戸は開け放たれていた。そして、上りあがり框かまちに倒れている男。玄関側に頭を向け、仰向けの状態。胸から流れ出した血が衣服を染め、土間まで広がっている。その男のそばで、ロケット柄のパジャマを着た少年が、泣きながら腕を揺すっていた。少年は三上の姿に気付くと、一目散に家の奥へと走って行った。

——あれは、あの日の私！

三上の記憶が、掘り起こされてゆく。

三上脩は、都内に住む作家だ。主に恋愛小説を執筆し、第四四四回塵芥賞を受賞。最近はテレビや雑誌などへの出演も増え、普段本を読まない人にも知られるようになった人気作家である。

三上は、子供の頃夜見島に住んでいたらしい。らしい、というのは、人からそう聞いているだけで、自身の記憶には無いからだ。話によると、昭和五十一年の八月二日、脩が四歳の頃まで住んでいたそう。それは、夜見島全島民が失踪する前日だ。三上は、夜見島でただ一人

失踪から免れた人物であった。

どうして幼い三上は失踪を免れたのか、他の住民はどこへ行ったのか、三上には何も判らない。三上は、八月三日の昼過ぎ、天馬船てんまふねという小型の船に乗って一人で夜見島沖を漂流しているところを、航行中のフェリーに発見され、救出されたのだ。それ以前の記憶は、ほとんど無かった。ただ、不意に当時の記憶がよみがえることがある。多くの場合、それは、一人の美しい少女に関する記憶だった。

加奈江かなえ。

そういう名だったように思う。少なくとも、父からはそう呼ばれていた。三上自身は、ずっと「お姉ちゃん」と呼んでいた。だが、血の繋がりは無かったはずだ。一緒に暮らしていたが、それも数ヶ月程度だったと思う。どの誰だったのか、今となっては判らないが、生まれて間もなく事故で母を亡くした三上にとって、少女は母親のような存在だった。

作家である三上が書く恋愛小説には、必ず『幻の少女』というテーマがある。そのはかない少女の存在が人気の秘密なのだが、それは、幼い頃の記憶に刻まれた加奈江がイメージとなっていた。あの少女は、一体誰だったのか？ さまざまな小説を書くにつれ、三上は少女の正体を知りたい衝動に駆られた。それは自分のルーツとも言える存在なのだ。そして、幼い頃の記憶を取り戻すことは、いまだ行方が知れない父や、その少女、夜見島全島民を探す手掛かりになるかもしれない。

三上は、幼い頃の記憶を取り戻すため、夜見島へとやって来たのだ。

何が起こっているのか判らず、玄関先で呆然と立ちすくむ三上。そのそばにひかえていたツカサが、不意に後ろを振り返り、低い唸り声をあげた。誰かが石段を上がってくる気配がする。ツカサの目を通して見ている三上にも、その姿が見えた。年配の男だった。眼帯の代わりだろうか、黒い布を左目に巻きつけていた。その姿に、三上の記

憶がよみがえる。この島で一番偉い人——幼い頃の三上はそう認識していた。いま思うと、恐らくこの島の漁業を取り仕切る存在・網元なのだろう。もちろん、昭和五十一年の島民失踪事件以降、行方不明となっているはずだ。

網元の男は、玄関先の三上に気付くと、鋭い目を向けて来た。「誰だ？ 見ない顔だな。この家の客か？」

三上が答えられないでいると、網元の男は三上を押しつけるようにして家に向かい、そして、血まみれで倒れている三上の父に気がついた。驚いた様子は無い。ふん、と鼻を鳴らし、「……死んだか。『穢れ』をかばうから、こんなことになる」と言った。

「あなたが……あなたが、こんな酷いことを……」幻視をやめ、男を睨みつける三上。三上は弱視であり、完全に見えないわけではない。眼鏡が無くとも、動くものを認識する程度は可能だった。男はこちらを見て、「なに？」と言った。

ツカサが、激しく吠えさせた。

ツカサは盲導犬の訓練を受けている。よほどのことがない限り吠えたりはしない。三上は再びツカサを幻視する。ツカサは、網元の男ではなく、玄関先の闇に向かって吠えていた。何かいるのか？ そう思った瞬間、闇の中から、黒い煙の塊、あるいは蠢く闇のような物が現れた。

「……まさか、屍霊か!？」

網元の男が声を上げた。屍霊——子供たちの間でも噂になっていた。死んだ人の身体に憑りつき、悪さをする妖怪。たわいない怪談話のようにも思えるが、これは島に古くから伝わる伝承のひとつで、島民の間では強く信じられていた。葬儀の際、屍霊が憑りつかないようお願い、死者に魔よけの樹の枝を刺すという風習もあるくらいだ。

屍霊は吠えたてるツカサや三上たちのそばをすり抜け、玄関に倒れている父の方へ向かう。明かりを浴び、甲高い悲鳴のようなものを上げながらも、父の身体の中に入るようにして消えた。すると、父の身体が一度びくと弾み、のろのろとした動きで起き上がったではないか。その顔色はどす黒く、目はうつろで、とても生きている人間のよ

うには見えない。

網元の男が舌打ちをした。そして、「誰か！ 誰かいないか！」と叫びながら石段を駆け下り、去っていった。ツカサは激しく吠えたてている。三上はその場に立ち尽くす。伝承どおりならば、屍霊に取りつかれた死体は『屍人』となり、生きている人間を襲うはずだ。

だが、屍人になった父は、三上には目もくれず、走り去った網元の男を追うように石段を下りて行った。

ひとまず危機は去ったが、一体いま何が起こっているのか、まったく見当がつかなかった。まるで、二十九年前の夜見島へ時間転移してしまったかのようだ。夢でも見ているような気分だが、夢ではない確かな現実感がある。

——そうだ。ここが本当に二十九年前の私の家ならば、父の持ち物に何か手がかりがあるかもしれない。

そう考えた三上は、ツカサに指示を出し、家の中に入った。玄関を上がってすぐ正面が、父が書斎代わりにしていた居間だ。ツカサの目を借り、たんすや机の中を調べていると、父の物と思われるノートを発見した。これに何か書いてあるかもしれない。三上はツカサの目を使いながらノートをめくった。

子供の頃の三上は、父の仕事を宝探しだと思っていた。大人になり、父は考古学者だったことを知った。三上が生まれる前、父は都内の大学で講師を務めていたが、母の事故死をきっかけに大学を辞め、以前より強く興味を持っていた夜見島の歴史や風習を研究するため、島へ移住したとのことだった。このノートは、父の研究を書きとどめた物だ。ツカサの目を借り、ノートをめくっていく。そして、『幻視』と書かれたページで手を止めた。

それによると。

島には、古くから伝わる伝承をまとめた『夜見島古事ノ伝』という書物がある。その『奇しき印 躰す縁』という章に、他人の視界を盗み見る能力について書かれてあるらしい。その書物によると、この島の地の底には『古の者』と呼ばれる存在があり、人の目を通じて現世を覗き見しているという。また、悪しき念を送って人の心を惑わし、そ

の念に感応する者があれば、『奇しき印』が現れ、その者は幻を見るようになるという。島の人々は、この『奇しき印』のことを『幻視』とも呼んでいた。

つまり、島の地の底にいる古の者の力に感応することにより、他人の視界を見ることができるといふのだ。ただの伝承なのでどこまで信じていいものかは判らない。もう少し情報は無いだろうか。三上はさらにページをめくる。そして、『加奈江』と書かれたページで手を止めた。

加奈江が、脩こうなぎひしよつかに巫秘抄歌まじりかを歌っていた。島に古くから伝わる歌だが、歌詞しか判っていないはずだ。なのに、加奈江はなぜメロディーを知っているのか——そんなことが書かれてあった。

この出来事、思い出した。加奈江はよく巫まじり——巫女が舞い踊る歌をうたっていた。それを聞いた父が血相を変えてやってきて、もう一度うたってくれと迫ったことがある。あまりの見幕に加奈江も三上も怯えてしまい、加奈江はそれ以降、二度とその歌をうたうことはなかった。

加奈江——三上が『お姉ちゃん』と呼び、慕っていた少女。彼女は今、どうしているのだろうか？　ここがもし本当に二十九年前の夜見島ならば、彼女はどこかにいるはずだ。

三上はノートを閉じると、ツカサを連れ、居間を出て奥の部屋へと向かう。当時、加奈江はその部屋で暮らしていた。

部屋のふすまは開け放たれていた。中は六畳間で、机とたんすと鏡台くらいしかない質素な部屋だ。部屋には誰もいない。窓が開いており、雨が部屋に吹き込んでいる。そのそばにある鏡台の鏡は割れていた。

三上の記憶がよみがえる。あの夜——血まみれで倒れている父を見つけ、玄関先に見知らぬ男と大きな犬が立っているのを見て、三上は恐ろしくなり、姉に助けを求めてこの部屋へ逃げ込んだ。だが、部屋には誰もおらず、鏡台の鏡が割れていた。恐らく、網元の指示により島の漁師が家を襲撃し、父を殺害。奥の部屋にいる加奈江を襲おうとしたが、危険を察知した加奈江は窓から逃走したのだ。漁師たちは

逃げた加奈江を追い家の外へ出た。そこへ、騒ぎを聞いて起きた三上が一階に下り、父の死体を発見したのだ。

◇

三上は、これからどうすべきかを考えた。いま自分の身になにが起こっているのかは判らない。もし本当にここが二十九年前の夜見島なら、加奈江は今も漁師たちから逃げているだろう。あの夜、幼い三上は加奈江を追ってこの窓から外へ出た。その後どうなったか、今となっては思い出せないが、翌朝一人で沖を漂流していたことを考えると、悲劇的な結末だったことは間違いない。加奈江を救わなければ。

三上は、ツカサと共に外へ出た。まずは加奈江を見つけないければならない。だが、いま彼女はどこにいるのだろうか？ 二十九年前、家から逃げ出した幼い三上は、加奈江と合流し、一緒に逃げたはずだ。どこへ逃げたのか……記憶を探るが、どうしても思い出せない。

三上が記憶を探っていると、遠くから声が聞こえてきた。

「いたぞ！ 上だ！ 社の方へ逃げた!!」

若い男の声だった。その声に応じて、何人かが走っていく足音も聞こえた。恐らく、この集落に住む漁師たちだ。網元の命令で、加奈江を探しているのだろう。

社と聞いて、脩は思い出した。この蒼ノ久は緩やかな丘の斜面に沿って家が立ち並ぶ集落だが、丘の上の方、海が見渡せる見晴らしのいい場所に、神様を祀まつった小さな社があった。何の神様だったかは覚えていない——というよりは、まだ四歳だった三上が、神社によつて祀られている神様が違うなど知るはずがない——が、住民は、漁に出る前にその社の前で船の安全を祈っていた。三上の記憶が少しずつよみがえる。そうだ。あの夜、家を出て、近くで加奈江と合流した幼い三上は、二人で丘の上へ逃げた。それ以上は思い出せなかったが、丘の上からは島の北部にある貝追崎という地域へ向かうことができず。そちらへ逃げたのかもしれない。自分も追いかけよう。三上は、丘の上へ向かうことにした。ツカサの目と、あいまいな記憶をもとに

進む。家を出て、一度海沿いの道へ戻り、先へ進むと、漁師たちが道具をしまっている小屋がある。その角を曲がると丘の上へ向かう坂道があった。蛇のように細く曲がりくねった道で、場所によっては急な坂になっていたり、途中から階段になっている所もある。それらの道を進んでいくと、また男たちの声が聞こえてきた。三上は、そばにあった電柱の陰に隠れた。

「駄目だ！ 見失った！」

「まだその辺にいるはずだ！ 探せ！」

「おやっさんの命だ！ 絶対逃がすな！」

まずいな、と三上は思った。少なくとも三人以上はいるようだ。皆、かなり殺気立っている。実際、彼らはすでに人を一人殺しているのだ。三上を見つけたら、どのような行動に出るか判らない。

足音が近づいてきた。男が一人下りてくる。このままでは見つかる。どこかに隠れなければ。ツカサの目を使って周囲を見回す。近くに建つ二軒の民家の間にわずかな隙間があるのを見つけた。だが、その隙間はあまりにも狭く、三上の体格では入れそうになかった。他に隠れる場所はない。このままでは見つかってしまう。そう思ったとき、ツカサが走り出した。待てという間もなく、ツカサは下りてきた男の方へ走って行く。男がツカサに気付いた。ライトを向ける。ツカサは男のそばで立ち止まると、顔を見上げて尻尾を振った。

「あん？ なんだ？ どの犬だ？ 餌なんて持ってねえぞ？ あっちへ行け」

男は手を振り、ツカサを追い払おうとする。わずらわしそうではあるが、敵意というほどでもない。殺気立ってはいても、犬にまで手を出すほど我を忘れてはいないようだ。

「おい」と、丘の上から別の男が言った。「野良犬なんかに構うな。それより、女が下りてくるかもしれない。この辺を見張っててくれ。俺は、廃材置き場の方へ行ってみる」

言われた男は、「おう」と応えた。そして、ライトで照らして周囲を見回すと、来た道に戻り始めた。ツカサが後を追う。男は小さく舌打ちをしたが、それ以上追い払おうとはしなかった。



ツカサのおかげで難を逃れたが、貝追崎へ向かうにはこの先へ進まなければならぬ。そのためには、男たちに見つかからないようにしなければ。幸い、ツカサのことは警戒していないようである。三上はそのまま様子を見ることにした。男の後をついていくツカサ。しばらく進むと、道が右へ枝分かれしていた。道をまっすぐ進むと貝追崎方面で、右に曲がると社や廃材置き場などがある。男は道を曲がり、社の方へ向かっていく。そして、社の前まで行くと、その場に立つて周囲を警戒し始めた。今がチャンスかもしれない。だが、ツカサは男のそばにいる。夜の闇の中、裸眼の三上一人で道を進むのは不可能だ。ツカサを呼び戻さなければいけないが、声を出せば男たちに気付かれる。三上はポケットから犬笛を取り出した。犬笛は、犬には聞こえるが人には聞こえない周波数の音を出すことができる。三上が犬笛を吹くと、ツカサは男のそばを離れた。男は社の前に残っている。しばらくして、ツカサは三上の元へ戻って来た。

「よくやったぞ、ツカサ」

三上はツカサを何度も撫でた。

そして、ツカサと共に道を進む。男はまだ社のそばに立っているようだ。気付かれないように静かに走り抜け、三上はツカサと共に貝追崎方面へ向かった。

第十二話 『不信』 一樹守 夜見島／瓜生ヶ森 0：

39：51

島の北東部にある夜見島遊園を目指す一樹守と岸田百合は、夜見島金鉱採掘所跡を抜け、再び森の中を歩いていた。遊園地内に囚われているという百合の母親を救うのが彼らの目的だが、一樹は、まったく別のことを考えていた。今、自分の周りで何が起きているのか。死体がよみがえり襲ってくる、赤い津波、他人の視界を盗み見る特殊能力、無人の島に集う人々……この島に上陸してから、いや、この島に向かう船に乗ってから、常識では考えられないことばかりだ。百合は、屍人や幻視のことを、この島に古くから伝わる現象・特殊能力だと言った。だが、それを素直に受け入れていいのかは判らない。百合の言うことに合理性は無い。もっと、他に合理的な解釈ができるのではないだろうか。

「——守？ どうかしたの？」

いつの間にか先を歩く格好になっていた百合が、振り返って首を傾けていた。

「あ、ごめん。ちよつと考え事してて」小走りで追いつく一樹。「いま、俺たちの周りで何が起こっているのか考えてたんだ。海から穢れが現れて、死体に憑りついて人を襲うとか、他人の視界を覗き見ることができるとか、いくらなんでも非現実的すぎる。他に、なにか現実的な説明ができると思うんだ」

百合の顔に、あからさまな不快感が浮かんだ。「……あたしの言うことが信じられないの？」

「ああ、いや、そういうわけじゃないけど」一樹は両手を振って否定した。「この島に、古くからそういう伝承があるのは本当だと思う。でも、そういう古い伝承は、現代なら科学的に解明できることが多いんだよ。たとえば……そう、鉱山から有毒なガスが出ていて、集団催眠や幻覚を見ているような状態になるとか。こういう鉱山で栄えた村では、まれにあることなんだ。他にも——」

百合が人差し指を立て、一樹の唇に押し当てた。「余計なことを考  
えてる時間は無いの。早くお母さんを助けないといけないから」

「……………」

言葉を遮られた一樹に、百合は妖しげに微笑んで続けた。「お母さ  
んは、『鳩』を飛ばし続けたの。何年も前から、何度も。でも、誰も戻つ  
てこなかった。お母さんを助けることができるのは、あたしたちだ  
け」

百合は一樹の唇から指を離すと、手を取った。「さあ、急ぎましよ  
う」

だが、一樹はその場から動かなかった。鳩を飛ばし続けた……伝書  
鳩を使って助けを求めたということだろうか？ 囚われの身であり  
ながら、伝書鳩を何羽も飛ばすことができるというのは考えにくい。  
どうも、少し前から百合の言うことは要領を得ない。嘘をついている  
とまでは思わないが、なにか、重要なことを隠そうとしているように  
思える。彼女の力になってあげたいという思いはある。しかし、隠し  
事をしている相手とは、信頼関係を築けない。

「そのお母さんの話も、よく判らないんだ。二十九年間誰も住んでい  
ないこの島に、どうしてお母さんが囚われているの？ そこをちゃん  
と説明してくれないと、とても信じられないよ」

その途端、百合の顔が怒りに満ちた。投げ捨てるように一樹の手を  
離す。「酷い！ やっぱりあなたも、あたしを信じてくれないのね！」

「あ、いや、そうじゃないよ。でも——」

一樹は手を伸ばすが、百合は拒絶するように離れた。「みんな同じ  
だった。誰もあたしを信じてくれない。みんなあたしを否定する！  
守だけはあたしの味方だと思ってたのに!!」

不意に。

——守だけはあたしの味方だと思ったのに、違ったんだね。

赤い津波に襲われた後、闇の中で聞いた少女の声が、よみがえった。  
同時に、そう言った少女の、悲しみに満ちた顔も。

「違う！ 違うんだ！ 俺はただ——」さらに手を伸ばす一樹。  
「いやっ!!」

百合は一樹を拒絶し、走り去っていった。

第十三話 『違和感』 喜代田章子 夜見島／崩谷

0：40：38

喜代田章子が目を覚ますと、アスファルトの道路のど真ん中だった。ヤバイ。酔っぱらって路上で寝るといふ嫁入り前の乙女にあるまじき失態をしてしまったか、と、一瞬思ったが、すぐに思い出した。ここは夜見島で、島を覆い尽くすほどの巨大な赤い津波に襲われたことを。周囲を見回す章子。すぐそばに軽トラックが停められてあり、その近くには小さな公園がある。砂場とアクリクの置物くらいしかない小さな児童公園だ。その先には古い団地が見える。見覚えのない場所だった。蒼ノ久漁港とは明らかに違う地区である。津波で流された……わけではないだろう。島を覆い尽くすほどの巨大津波に襲われたのなら、多くの建物が倒壊し、瓦礫などが流されてくるはずだが、見える限りそのような形跡は無い。ここから見る限り団地はしっかりと建っているし、道路にはところどころに空き缶やたばこの吸い殻などのゴミが落ちていくくらいだ。とても津波が去った後には見えない。やはり、あの津波は現実ではなかったのだろう。ただ、連れのリーゼントこと阿部倉司の姿は見えなかった。

よつこらしよと立ち上がる章子。とりあえず阿部を探さなければならぬ。近くにいればいいけど。まずは団地の方へ向かおうとして、不意に、強烈な頭痛に襲われた。二十九年分の生理頭痛を今この瞬間に凝縮したようなひどい痛みにも、頭を押さええてうずくまる。すると、目を閉じているにもかかわらず映像が見えた。左官用のこてを使ってモルタルの壁をならす映像、両手に大きな斧を持って道を歩く映像、「腹減ったなー。お？ ラッキー。やっぱオレ持ってんなー」と道端に実っていた果実をもいで食べる映像、小さな鎌のような物を持って狭い階段を上がる映像……様々な映像が次々と見えては消え、また見える。どれも、主観視点とか一人称とかファーストパーソンとか言われる映像だった。

——え？ なにこれ？

戸惑う章子。章子には人や物の過去を読み取る特殊な能力『過去視』があるが、いま見えているのは、いつもの過去視によるものではない。過去視は、人や物に手で触れ、そこに宿った『残留思念』のよなものを読み取る能力だ（詳しい仕組みは章子自身にも判らないが、少なくとも章子はそうだと思っている）。何にも触れていないのに、勝手に思念が流れ込んできて次々と映像が見えるなど、今までなかったことだ。

目を開ける章子。頭痛は嘘のように消えていた。軽トラックと児童公園が見える。これは、まぎれもなくいま自分自身の目で見ているものである。では、さっきのいくつかの映像はなんだったのだろうか？ 脳梗塞とかで幻覚が見えるとかだったらヤバイな、と思っていたら。

——これは幻視。この島に古くから伝わる、他人の視界を覗き見る特殊能力。

不意に、そんなことを思った。いや、頭で考えたというよりは、胸の奥底から湧き上がってきた、という方が正しいかもしれない。

さらに。

——あれは屍人。海から来る穢れが死体に憑りつき、生きている人間を襲う。

——ここは、蒼ノ久漁港の南東にある崩谷ほうやという地域。夜見島金鉞で働いていた鉞員とその家族のために建てられた社宅がある。

胸の奥底から次々と知識が湧き上がる。まるで、古くからこの島に住んでいたかのようだ。だが、もちろん章子は過去に夜見島に住んでいたことなど無い。島を訪れたことも無く、夜見島という名前さえ二日前に知ったほどだ。今日この島を訪れることになったのは極めて突発的なことであり、事前の調査などほとんど何もしていない。なのに、多くの島の知識がある。なぜ自分がそんなことを知っているのだろうか？ いや、知っているという感覚とは、少し違うような気がした。それは、古い記憶がよみがえるのではなく、自分の胸の奥底に別の誰かがいて、その誰かが知識を授けてくれているような感覚だ。

はつとなる章子。これは、もしかしたら……。

これはもしかしたら、新たな能力が覚醒したのかもしれない。他人の視界を覗き見る能力と、必要な情報を得る能力。どちらも、かなり便利な能力だ。これから島を探索するのに、大いに役に立ちそうだ。『視界ジャック』と『夜見島ガイド』という能力名にしよう。だが、なぜこのような能力が突然覚醒したのだろうか？ 理由は判らないが、もしかしたら、自分にはまだまだ目覚めていない特殊能力があるのかもしれない。島の探索を続ければ、さらに新たな能力が覚醒するのだろうか？ どんな能力だろう？ 前々から、未来を予知する能力が欲しいと思っていたところだ。占いの仕事にはこれ以上ないほど役に立つし、いつそ占いなんてやめて、競馬や株で大儲けすることもできる。時間を止める能力や物を直す能力も欲しい。ああ、なんかワクワクして来たぞ。

……………。

胸の奥底にいる別の誰かが呆れているような気がした。いいだろう別に。人と違う変な能力があるからって、なぜこんな能力があるのか、とか、こんな能力さえなければまともに暮らせるのに、とか、うじうじ悩んだってしょうがないじゃないか。あるものは受け入れ、最大限有効に活用して生きていく。それが、スペックホルダーとして二十九年間生きてきたあたしのモットーなのだから。

まあ、そんなことより、まずは阿部と合流しなければ。章子は目を閉じ、視界ジャックの能力で周囲を探った。さつき道端に実った果物を食べてたのが阿部だろう。テレビのチャンネルをザッピングするかのようにつかつかの視点を切り替え、阿部らしき視点を見つけた。

◇

阿部はいつの間にか室内に移動していた。六畳の和室で、ちゃぶ台やタンス、テレビなどがある居間だ。団地へ入ったのだろう。外は屍人共がうろついているから隠れたのかもしれない。それは仕方ない

が、これはどこの部屋だろうか？ 団地は東のイ棟と西の口棟のふたつあり、両棟とも三階建てで、各階に四部屋ずつある。合計二十四部屋。当然、団地だからどの部屋も同じような間取りだろう。もつと判りやすい場所にいろよ。状況が状況だけに、一部屋一部屋訪ねていくのは危険が大きい。何か部屋を特定する手がかりは無いだろうか？ 章子はとりあえずそのまま視界ジャックを続ける。阿部は窓のそばへ移動する。窓はベランダに出入りするための、いわゆる掃き出し窓だ。窓を開け、ベランダに出る阿部。かなり高い場所にある部屋だった。左下に砂場とアクリクの置物（つて言うかなんでアクリクだよ）がある小さな公園が見える。いま章子がいるそばの公園だ。そうすると、阿部がいるのは西側の口棟の301号室か302号室だ。

幻視をやめ、団地の方へ向かう章子。公園のそばを通ると、西側の団地のベランダが見えた。思った通り、301号室のベランダに阿部の姿が見えた。手を振って合図を送ろうとしたが、その前に阿部は奥へ引っ込んでしまった。そのまま出てくる気配はない。迎えにいかなければならぬようだ。めんどくさいヤツだな。心の中で悪態をつきながら、入口へ向かう。

入口はベランダの反対側だ。そちらへまわりこもうとした章子だったが、角を曲がったところで足を止めた。入口の前に屍人が立っていたのだ。視界ジャックの能力で確認すると、あろうことか拳銃を持っていた。ヤクザかマフィアの屍人だろうか？ だとしても、なんでこんな本土からはるか離れた島にいるんだ？ 拳銃屍人は注意深く周囲の様子を伺っており、その場から離れようとはしなかった。隙を突いて団地内に入るのは無理だろう。何か別の方法を考えなければならぬ。ベランダ側から入れないだろうか？ そう考え、来た道を戻る。残念ながら、一階はどの部屋の窓も開いていなかった。窓を割れば入れるだろうが、音で周囲の屍人に気付かれる可能性がある。もちろん、ここから三階にいる阿部に声をかけるのも危険だ。さらに調べてみると、二階の部屋の掃き出し窓が開いていることに気がついた。なんとかあそこから侵入できないだろうか？ 考える。そう言え、さつき公園のそばに軽トラックが停められていたな。あれを使



えば二階へ上がれるかもしれない。

章子は一旦道を戻り、軽トラックを調べてみた。ドアは開いており、キーも挿しっぱなしだ。災害時、路上に車を置いて避難する場合は、ドアはロックせずキーを挿しっぱなしにしておく。うん。良い心がけの運転手だ。章子は遠慮なく運転席に乗り込み、ハンドルを握った。

……………。

んで、どうするんだっけ？

章子は一応普通自動車免許を持っているが、十八歳の時に取得して以降、十年以上一度も運転していない。いわゆるペーパードライバーである。もはや運転の仕方などすっかり忘れてしまった。もしかしたら胸の奥に潜んでいる別の誰かが教えてくれるかもしれないと期待したが、しばらく待っても何も教えてくれなかった。どうやら別の誰かもペーパーが無免許のようだ。使えないヤツだ。まあいい。ここは取得したばかりの新スキルよりも、使い慣れた従来スキルを使おう。この軽トラックの過去の記憶を見れば、運転の仕方くらい判るだろう。章子は、軽トラックに残る残留思念を探った。

軽トラックは真つ暗な闇の中に停まっていた。誰も乗っていない。過去視は強い残留思念を読み取るものだが、停車している状態で強い残留思念が残っているのもおかしな話だな、と思いつつ映像を見ると、がちやがちやと鍵を開ける音がして、誰か乗り込んだ。なんだか判らないがずいぶんと慌てているようだ。モスグリーンのジャケットを着た若い男だった。顔はかなり幼い。まだ免許を持っているどうかも判らないような少年だ。少年は、かなり慣れていない手つきでキーを挿し込み、捻った。ぶるるん、とエンジンがかかる。その途端、フロントガラスに懐中電灯の光が当てられた。少年は慌ててアクセルを踏む。しかし、車は走らない。どんなに強くアクセルを踏んでも、エンジンが大きく唸るだけだ。おそらくサイドブレーキを

上げっぱなしなのだ。ペーパードライバーの章子でさえすぐに気がつくようなことだが、少年は気がつかず、ただアクセルを踏み続ける。やはり無免許なのだろう。と、ぱあん、と乾いた音がしたかと思うと、フロントガラスに大きな穴が空いた。え？ 銃撃されてる？ どうやらフロントガラスにライトを向けた人物が銃を撃つたようだ。警官のような格好をしているが、どう見ても未成年でしかない少年を、いきなり銃で撃つかフツー？ 警官は銃を構えたまま近づいて来る。少年はパニックになりながらも、ようやくサイドブレーキが上がっていることに気がついた。慌ててブレーキを下ろす。だが、アクセルは踏みっぱなしだ。急発進するトラック。どん！ と鈍い音がして、警官が大きく跳ね飛ばされた。少年はブレーキを踏み、トラックを停めた。倒れた警官は、ピクリとも動かなかつた。

……………。

過去視をやめる章子。どこにあった軽トラだよこれは。もはや事故車とかいうレベルではないぞ。何があつたか知らないが未成年者が逃亡に使用して警官がいきなり発砲するなど、よほど治安の悪い国でもそうそうないだろ。呪われたりしていいのだろうか？ 心配だけど、まあ、別に買うわけじゃないからいいか。そう思い、章子は映像にならってキーを回し、急発進しないようしっかりとブレーキを踏み、きつちりとサイドブレーキを下ろした後、慎重にアクセルを踏んだ。ゆつくりと走り出すトラック。よしよし。いい感じだ。章子は歩いたほうがはるかに速いスピードで軽トラックを進め、時間をかけて団地のベランダ側に横付けした。車を降り、まずは荷台へ上がり、そこから運転席の上、さらに団地の二階へと上がった。よし、うまくいった。団地の中に屍人の気配はない。章子は開いている窓から201号室へ入ると、玄関から外へ出て階段を上がり、301号室へ入った。阿部は奥の部屋で、ちゃぶ台に肘をついてタバコを吸っていた。章子に気付くと、「おう、お帰り」と、片手を上げた。

章子はちやぶ台を挟んで阿部の正面に座った。「お帰り、じやないわよ。何のんきにタバコなんか吸ってんのよ。てか、なるべく動くなって言ったでしょ。なんでこんなややこしい場所に隠れてんのよ」「しゃーねーだろ。外はイカれたやつらがうろついてんだから。なんなんだよ、あいつら。なんか、銃持つてるヤツもいたぞ」

「あれは屍人って言って、まあ、ゾンビみたいなものね」

「あー。やっぱりか。あいつら、なんかもう死んでるっぽいから、そうじやないかと思っただよ。んで、どうするんだ？」

「それよりさ、あんたん家<sup>ち</sup>では、はるばる訪ねてきた客に、お茶の一杯も出さないわけ？」

「オレン家なわけねーだろ。飲みたいなら自分で淹れる。水道もガスも使えるみてーだし」

「え？ ホントに？」

「ああ。さつき試してみた」

阿部がそう言うので、章子は台所へ行き、水道の蛇口をひねってみた。じゃば、と勢いよく水が出る。ガスコンロも同様にひねってみた。問題なく火が点いた。お茶を出せというのはただの冗談だったのだが、まさかホントにお茶を淹れられる状態だとは思わなかった。そう言えば室内の電気も点いている。この島は二十九年前に全島民が失踪し、それ以来無人のはずだ。ライフラインが使えるとは思えない。実際、津波の前の蒼ノ久漁港では、街灯ひとつ点いていなかった。あの赤い津波の後に使えるようになったのだろうか。そうだとすると、それはなぜだ。赤い津波の前と後で、何が変わった。

「おーい、茶はまだかー？」

阿部の声で、章子は考えを中断する。ここで考えていても答えは出ないだろう。今は島を調査するしかない。章子は奥の部屋へ戻ると、また阿部の前に座った。

「お茶はやめておくれ。汚い湯呑とヤカンしかなかったし」

「そうか。まあ、そうだな。んで、これからどうするんだ？」

「とりあえず、島を調査して、柳子の手掛かりを探すしかないわね。この島の北東に、碑足っていう地域があるんだけど――」

「お？ ちょっと待てよ」そう言うと、阿部は立ち上がってタンスをぐそぐそし、戻ってきてちやぶ台の上に夜見島の地図を広げた。「さっき見つけたんだ」

「お？ やるじゃん。えーつと……」章子は地図の中心からやや左下、夜見島を鳩の形で例えると胸の部分を指さした。「今いるのがここ、崩谷地区。碑足は、島のちょうど反対側にあるの。遊園地とかがある地域ね」

「遊園地？ こんな小さな島に、遊園地なんかあるのか？」

「ええ。夜見島は、昭和三十年代に金鉱が発見されて、一気に人が集まって発展したの。この団地は、金鉱で働く人向けに建てられた社宅なのよ。んで、鉱員やその家族向けの娯楽施設として、遊園地や映画館なんかが作られたってわけ」

「ふーん。随分詳しく知ってるんだな。オメー、この島は初めてだ、って言うてなかったっけ？」

章子は「ふっふーん」と言って胸を張った。「実は、この島に来てから新しい能力が目覚めたみたいなのよね。島に関する知識がどんどんあふれてくるの。『夜見島ガイド』って能力名にしたわ」

阿部は、ふーん、と、無感動に唸った。

「……張り合いがない反応ねえ。じゃあ、もうひとつの能力はどう？ なんと、他人の見ているものが見えるの。『視界ジャック』っていう能力名なんだけど」

ドヤ顔で言う章子だが、阿部は驚きもせず、ちやぶ台の上の灰皿にタバコの灰を落とした。「あ、それなら、オレも使えるぜ」

「……へ？ あんたも？ なんで？」きよとん顔になる章子。

「理由はわからんが、目が覚めた後、なんかスゲー頭が痛くなって、気が付いたら使えるようになってた」

「なんだ。じゃあ、みんな使える能力なのかな。つまんないの」

「それより、その遊園地が、どうなんだ」

「ああ、えーつと……その遊園地に、柳子に関する手がかりがあるような気がするから、とりあえずそこへ行ってみましよう」

「気がするって、ずいぶんと頼りない言い方だな？ それも占いか？」

「そう。まあ、安心しなさい。あたしの占いは、だいたい当たるから」「だいたい、ねえ……まあ、そもそもその占い頼みでこの島に来ちまつたんだから、今さら文句は言わねーけど」

「よろしい。んじゃ、そろそろ行きますか」

章子が立ち上がると、阿部も灰皿にタバコを押し付けて立ち上がった。

「でもよ、あのゾンビどもはどうするんだ？ 問答無用で襲い掛かってきて、だいぶヤバイヤツらだったぞ」

「なんとかして脱出するしかないでしょうね。幸い車を手に入れたから、それ使えば、どうにかなるでしょ」

「ずいぶん能天気だな、お前」

「あんたに言われたくないわ」

二人は部屋を後にし、来たときと逆の要領で外に出て、車に乗り込もうとした。

だが、二人とも助手席に座ろうとする。

「……なんでオメーが助手席に座ろうとするんだよ」と、阿部。「オメーの車だろ？ オメーが運転しろよ」

「あたしの車なわけないでしょ。あたしは永久ゴールド免許だから、あんたが運転してよ」

「いや、オレバイクの免許しか持ってねーし」

「はあ？ あんた男のくせに車の免許も持ってないの？」

「それは別に男も女も関係ないだろ。オレはバイクが好きなんだよ。オメーこそ、免許持つてるくせに車も持ってねーのかよ？」

「いいでしょ別に。電車やバスに乗ればいいんだから」

「じゃあそもそも免許なんて取らなきゃいいだろ」

「なに言ってるの。運転免許証は、公的な証明書として最強なのよ？ 保険証だと、だいたい住民票とかガス代の領収書とかの補助書類が必要になるから、めんどくさいのよ。原付免許だけだと、なんかパツとしないし」

などと言ひ合ひをしていると。

びくん、と身体が震え、一瞬、軽トラックの前で言い争いをする男

女の姿が見えた。まずい、ヤツらに見つかった。そう思った瞬間、ぱあん、と銃声が響く。まずいまずい、あろうことか拳銃を持ったヤツだ。幸い弾はどこにも当たらなかったが、もはやペーパードライバーとかゴールド免許とか言ってる場合ではない。素早く車内に乗り込む二人。章子がキーをひねってエンジンをかけると、再び銃声が出て、フロントガラスに穴が空いた。さっき過去視で見た映像と同じ状況だ。

「前から来てるぞ！ どうするんだ!？」と、阿部が騒ぐ。

「……こうなったら、偉大なる先人様の知恵を借りるわ」

「先人様の知恵?」

首をかしげる阿部をよそに、章子はサイドブレーキを掛けたままアクセルを踏んだ。「しっかりつかまってなさいよ!」

思いっきりアクセルを踏み込んだ後、サイドブレーキを下ろす。急発進する軽トラ。どん！ と鈍い音がして、拳銃屍人は大きく跳ね飛ばされ、夜の闇へと消えた。

「……オメー、占い女のくせに容赦ないな」阿部が呆れた声で言った。「占い女は関係ないでしょ。まあ、仕方ないわよ。向こうが襲って来るんだから迎撃しないと。こういうゾンビ的なシチュエーションは、即座に順応しないとね」

「そういうヤツは、だいたい途中で死ぬけどな」

「うるさい。とにかく、あたしはもうあいつらには一切遠慮しないわ。あんたも覚悟を決めなさい」

「へいへい」

再び車を発進させる章子。崩谷から碑足へ向かうには二つのルートがある。北の瓜生ヶ森の四鳴山林道を進むルートと、一旦南東へ行って海沿いの県道を進むルートだ。早いのは瓜生ヶ森を突っ切るルートの方だが、四鳴山林道は舗装されていない細い砂利道で、ところどころ崖のそばを通っている。ペーパードライバーが通行するには危険すぎる道だ。無難に県道を進むのが良いだろう。『夜見島ガイド』の能力でそう判断した章子は、南東へ車を走らせようとした。だが、団地の敷地外へ出る道に車止めのポールが立てられており、その

ままでは通行できなかつた。車止めを外すには専用の鍵がいるようだが、どこにあるのかは見当もつかない。車を捨て、徒歩で碑足へ向かうなら、海沿いの道はかなり遠回りになる。それなら四鳴山林道を通る方が良い。とりあえず、行ける所まで車で行ってみるか。そう思いい、北へ向かおうとしたら。

「……………」

北東の方角には、この島で最も高い山（と言っても標高一〇〇メートルほどだが）・四鳴山がある。その山頂付近には鉱山発展時に建てられた鉄塔があり、この崩谷地区からも見る事ができた。その高さは二〇〇メートルと、なんと山よりも高い。日本でも数ヶ所にしかない規模の鉄塔だった。章子は、アクセルを踏むのも忘れ、闇に浮かぶ四鳴山と鉄塔を見つめた。

「あ、ちよつと待て」と、阿部が言った。「この先は、なんかデカイ銃を持った屍人がいたぞ？」

そう言われ、章子は目を閉じ、視界ジャックの能力で北方向を探ってみた。阿部の言う通り、フェンス製の出入口の前に、アサルトライフルと呼ばれる大きな銃を持った屍人が待機していた。なんでこんな小さな島に銃で武装したヤツらがたくさんいるんだよ。テロリストが秘密基地にしていたのだろうか？ ……地元の間人は近づこうとさえしなかつたというし、案外あり得る話なのかな。なんにしても、さつきと同じ先人の知恵で切り抜けるにはちと危険すぎる銃だ。近づく前にハチの巣にされるだろう。何か別の方法を考えなければ。「林道を通るなら、車はここに置いていく方がいいよな？」と、阿部が言った。

「うーん、そうかもね」

「じゃ、オレに任せろ。降りるぞ」

と、言うので、章子と阿部は車を降りる。何をするのかと見ていると、阿部は運転席側に回り、窓から手を入れて派手にクラクションを鳴らした。

「ちよつと！ 何してんのよ！ アイツらに気付かれるでしょ!!」

「だから、それが狙いだよ。アイツらがこの車に気を取られている隙

に通るんだよ」

ああ、なるほど。そういう作戦か。

びくんと身体が震え、ライフル屍人の視点が一瞬見えた。どうやらうまく気付いてくれたようだ。急いで物陰に隠れる。幻視で様子を探っている、ライフル屍人は出入口の前を離れ、軽トラの方へ近づいてきた。そのまま運転席を覗き込む。その隙にしゃがみ走りて出入口へ向かう二人。ライフル屍人は運転席を覗き込んだまま動かない。そのまま気付かれることなく、二人は出入口の前へ移動できた。「いえーい」と、阿部が陽気な声で右手を挙げた。ホントに緊張感がないヤツだな、と思いつつも、章子も右手を出し、ハイタッチを交わした。

そして、二人で出口から出ようとして。

「……あれ？」

章子は、そばのフェンスに植物の蔓が巻き付いていて、細長い果実がたくさん実っているのに気がついた。そのいくつかはかじられた跡がある。

「そーいやあんた、ちよつと前にこれ食べてなかったっけ？」章子は阿部に訊いた。

「ん？ ああ。腹減ってたからちよつと良かったぜ。うまかったし」

平然とした顔で言う阿部に、章子はあきれた視線を送る。「よくこんな食べようと思うわね」

果実は、真つ赤な表面に黄色い斑点がぽつぽつとあり、毒々しいという表現がぴったりな見た目をしている。自然界で派手な色をしたものは毒があるとよく言うが、その典型的例とすべき見た目だ。

新スキルが発動し、果実の正体が判った。ため息をつく章子。「ヤバイもの食べちゃったわね。知らないよー？」

「なんだよ？ 黄泉戸喫よもつへぐいだとも言いたいのか？ バカバカしい」

「……あんた、リーゼントのくせに変なこと知ってるわね」

「リーゼントは関係ないだろ。まあ、偉大なる先人様の知恵だな」

「よくわかんないけど、黄泉戸喫とは関係ないわ。これ、夜見アケビって言って、この島にしか自生しない果実なの。美味しいらしいけど、



よく当たるのよ」

「はん、オレ様の鉄の胃袋をなめんなよ？ そんなもんじゃ、びくともしねーぜ」

「……ならいいけど」

心配ではあったが、食べてしまったものはもうどうしようもない。まあ、毒性は低く、よほどのことがない限り死ぬことはないだろうから、いいか。

「……ところでよ」

阿部の声のトーンが下がった。笑みが消え、珍しく真剣な表情だ。「ありやあ、なんだ？」

北東の方角、これから二人が向かおうとしている方向を指さす阿部。

「ああ、アレね。あたしも、ちよつと前から気になっていたのよね」

章子も北東を見る。北東には、四鳴山と鉄塔があるのだが、その、鉄塔の上半分が、雨雲の中に消えているのだ。雨雲の中に隠れているのではなく、消えている——そう思わせる光景だった。空は一面厚い雨雲に覆われているにもかかわらず、その鉄塔の周囲だけ雲が無く、ぽっかりと穴が空いているのだ。そこから覗く空は秋の夕暮れのように真っ赤で、鉄塔の上半分は、その赤い空に吸い込まれるように消えているのだ。それは、どこか禍々しさを感じさせる不気味な光景だ。そもそも、四鳴山は標高約一〇〇メートル、鉄塔の高さは約二〇〇メートルで、合わせても高さ三〇〇メートル程度。到底雨雲に届く高さではない。

しばらく二人は無言で鉄塔を見つめていたが、ここにいたらライフル屍人が戻ってくるかもしれないと思い直し、ひとまず先を急ぐことにした。

二人は瓜生ヶ森へと向かった。

第十四話 『悪夢』 三沢岳明 夜見島／瓜生ケ森

1:09:57

三沢岳明は、古いアパートの部屋にいた。

夏の夕方だった。西日が射し込み、部屋の中は燃えているかのよう  
に赤い。あるいは、血に染まつているようにも見えた。窓も、ドアも、  
隙間なく閉ざされている。エアコンはついているが、吐き出されるの  
は冷風ではなく温風だった。その真下に、古いメカ式の扇風機が置か  
れ、強風で室内の空気をかきまわしていた。部屋の中央にはこたつが  
置かれている。布団は掛けられておらず、赤々と燃えるヒーターが丸  
見えだった。こたつの上には黒電話が置かれ、けたたましいベルの音  
を鳴り響かせている。三沢は、自衛隊支給の迷彩服を着て、黒電話の  
前に正座していた。全身から汗が噴き出すが、それは決して部屋の暑  
さによるものではない。三沢の目は、正面の電話ではなく、左手側の  
押し入れのふすまに向けられていた。ガタガタと激しく揺れている。  
エアコンや扇風機の風が当たっているわけではない。閉め切ってい  
たふすまがわずかに開き、隙間から、小さな手が出てきた。子供の手  
だ。焼け焦げたかのように黒くくすんでいた。だが、それは焦げてい  
るのではなく、泥にまみれているのだということに、三沢は気付いて  
いた。手はふすまのふちを持ち、開けようとしている。しかし、何か  
に引っかかっているのか、開かない。ふすまがガタガタと揺れる。三  
沢が見つめる。見ちゃだめ……。誰かに言われた気がした。少女の  
声だった。誰かは判らないが、その声に従うことにした。ふすまから  
目を逸らす。黒電話が鳴る。こたつが赤々と燃える。扇風機が空気  
をかきまわす。エアコンが熱風を吐き出す。西日が射し込む。夏の  
夕方。ふすまはガタガタ揺れている。横目で見た。ふすまはさつき  
よりわずかに開いていた。その隙間から見える押し入れの中は、底し  
れぬ深い闇だった。見ちゃだめ。また誰かに言われた。目を逸らす。  
ふすまがガタガタと揺れる。電話が鳴る。汗が噴き出す。電話が鳴  
る。電話が鳴る。汗が噴き出す。電話が鳴る。ふすまが揺れる。見

ちやだめ。電話が鳴る。ふすまがガタガタと揺れる。ふすまがガタガタと揺れる。ふすまがガタガタと揺れる。

耐えきれず。

三沢は立ち上がると、押し入れの前にしゃがみ、ふすまに手をかけた。

なににも引つかかることなく、ふすまは静かに開いた。

押し入れの中には、何もいなかった。ふすまに引つ掛かるものも、小さな黒い手の主も、底知れぬ闇も、なにも。

西日はいつの間にかやわらかな光へと変わっていた。エアコンからは涼風がそよぎ、扇風機も微風で部屋の空気を循環させる。こたつのヒーターは外され、電話も鳴りやんでいた。

三沢は安堵の息を吐いた。

その、背後で。

泥まみれの幼女が立ち、三沢を見つめていた。

幼女は、音もなく顔を近づけ、そして。

「……見ちやだめって言ったのに。これで、おじさんも……になっちゃったね」

耳元でささやいた。

その瞬間。

何も無かった押し入れが、底知れぬ闇と化した。その闇の中から泥まみれの黒い手が伸びてきて、三沢の腕を掴んだ。それが、ものすごい力で引つ張る。押し入れの中に引きずり込もうとする。足を踏み張り、抵抗する三沢。押し入れの中からもう一本手が伸びて来て、反対側の腕を掴んだ。引きずり込もうとする。抗う。さらに手が伸びてきて、三沢の足を掴んだ。さらに手が伸びてくる、今度は首を掴まれた。さらに手が伸びる、手が伸びる。手が、手が……いくつもの手が三沢を掴む。闇に引きずり込まれる。

三沢は――。

☆

絶叫と共に、三沢は跳ねるほどの勢いで起き上がった。

森の中だった。すぐに状況を思い出す。ここが夜見島ということ。ヘリのトラブルで不時着したことを。そして、自分と永井以外の隊員は死んだが、屍人となって襲ってきたことを。巨大な赤い津波に島ごと飲み込まれたことを。

三沢は周囲を見回した。森は荒れておらず、とても津波に襲われた後とは思えなかった。あの津波にはまるで現実味が無かった。幻の津波だということを、三沢は直感的に悟っていた。

時計を確認すると、一時を少し過ぎたところだった。一時間以上意識を失っていたことになる。そばに落ちていた小銃を取り、周囲を注意深く探る。ライトは点けていないにも関わらず、うっすらと明るかった。少し離れたところに永井が倒れていた。津波に襲われる直前に出会った若い男女の姿は無かった。

背後に、嫌な気配を感じた。

泥まみれの幼女のことか頭をよぎったが、振り返っても、そこには夜の森が広がるだけだ。

ただ。

森の向こうの空が、わずかに明るくなっていた。地上に何か光源があり、それが空を照らしているかのようだ。もちろん、夜見島への電力供給は断たれているため、空を照らすほどの明かりがあるはずもないのだが。

夢で見た少女のことを思い出した。この二年の間、毎日のように夢に現れる少女。三沢を闇に引きずり込もうとするいくつもの手。そして、少女がささやく言葉。これでおじさんも……になっちゃったね。

三沢は。

——異界、か。

直感的に、そう悟っていた。

第十五話 『迷道』 一樹守 夜見島遊園／コーヒー  
カップ 3：45：28

岸田百合と別れて三時間以上が経過していた。一樹守は、島の北東部にある夜見島遊園にいた。「母親が囚われている」と、百合が言っていた場所だ。遊園地の南側には島で最も高い山・四鳴山がそびえ立っている。山頂には巨大な鉄塔が建っているのだが、その上半分は、雨雲の中に消えていた。消えている部分には雲が無く、そこだけぽっかりと穴が空いているように見える。そこから覗く空の色は、まだ夜明け前だというのに夕焼けのように真っ赤だ。さらには、その赤い穴の中に、周囲の雲がどんどん吸い込まれている。それはまるで、赤い底なしの沼に飲み込まれているかのような禍々しい光景だった。

しかし、今の一樹には、そんなことを気にしている余裕は無かった。一樹は、一時間ほど前に遊園地にたどり着き、すでに管理小屋や倉庫など、人を監禁できそうな場所を探索していた。しかし、園内は屍人が何体か徘徊しているくらいで、彼女の母親らしき姿は無かった。百合の姿も無い。一樹の元を去った彼女は、どうしたのだろうか？ 母親を救うのを諦めるとは思えない。一樹に代わる新たな協力者を探しているのだろうか？ あるいは、やはり母親が囚われているというのは偽りだったのか。……いや、と、その考えを否定する一樹。彼女が俺の元を去ったのは、俺が彼女のことを信じてあげられなかったからだ。

——守だけはあたしの味方だと思ってたのに!!

去り際に言われた言葉を思い出す。一樹に対してこの言葉と言った少女は百合が二人目だ。もう二度と誰も傷つけないと誓ったはずなのに、また同じ過ちを繰り返してしまった。百合に謝らなければいけない。償わなければならぬ。そう思うが、彼女がどこにいるのかも判らない。もう、謝ることも償うこともできないのだろうか？ 一人目の少女と同じように。

視線を落として歩いていた一樹は、はつとして顔を上げた。コーヒー

カップのアトラクションがあり、そのカップのひとつに、百合が座っていた。駆け寄る一樹。とにかく謝らなければならぬと思っただが、言葉が出てこなかった。百合を深く傷つけてしまったのだ。なんと詫びてよいか判らない。

「……座って」

百合は、その美しい顔に何の表情も浮かべず、隣の椅子に手を向けた。言われるまま座る一樹。テーブル状になっているハンドルの上に、ガラス細工の鳩の置物があった。百合がその鳩を持ち上げ、空を飛ぶ様子を表すかのように、ゆつくりと左右へ揺らした。無言で鳩を見つめる一樹。と、百合は突然手を放した。解放された鳩。しかし、ガラスの鳩は飛ぶことはない。鳩はそのまま落下すると、ハンドルの上で粉々に砕け散った。破片が四散し、百合の手を傷つけた。その名の花よりも白い百合の手が、赤く濡れてゆく。一樹はポケットからハンカチを出して百合の手に当てようとしたが、百合がそれを押しとどめた。

「——ここは、元に戻ろうとする世界」

静かな声で言う百合。その手の傷がふさがろうとしていた。ぱつくりと割れた傷は徐々に細い線となり、やがて、その線も消えた。百合は一樹の手からハンカチを取り、血を拭いた。百合の手は、彼女の言葉通り、元の純白の手に戻っていた。ハンカチをハンドルの上に置く。そこに、ガラスの鳩が置かれていた。砕け散る前の状態だ。百合の手に注意を奪われた隙に新しいものを置いたのだろうか？ 一瞬そう思ったが、即座にその考えを打ち消す。その疑心が彼女を傷つけてしまったのだ。二度と彼女を傷つけてはいけぬ。それに、周囲には破片のひとつかけらも散らばっていない。一瞬の隙さえあれば別の鳩を置くことは可能だろうが、四散した破片の全てを回収することなど不可能だ。元に戻ったとしか思えなかった。

「島は、二十九年前の記憶をとどめているの。そこに、あたしたちが変化を加えることはできない」

百合の言うことは要領を得ない——少し前までそう思っていたが、その言葉は違った。一樹には、彼女の言葉の意味が判った。

百合は、一樹に身を預けた。「やつぱり、あたしにはあなたしかいないの。お願い、守。あたしのそばにいて。ずっと、一緒に」

一樹は百合の肩を抱いた。ガラス細工の鳩よりも脆く儂い身体に思えた。砕け散ったガラスの鳩は元に戻っても、もし彼女が砕け散ったら、決して元に戻らないと思った。護らなければいけない。彼女を傷つけてはいけない。今度こそ、必ず。

「――来て」

百合は立ちあがり、一樹の手を引いてコーヒーカップの外に出た。

四鳴山の北のふもとにある夜見島遊園は起伏が激しく、園内にはいくつかの丘がある。コーヒーカップは園内で二番目に高い丘の上であり、その西側の観覧車がある丘が最も高い場所だ。コーヒーカップのある丘からは連絡橋を渡って行くことができるが、百合はそれを渡らず、北の方へ向かった。しばらく歩くと下り階段があり、その先は遊園地の裏門だった。百合は門の手前で止まった。

「ここに石碑があるの、見える？」

裏門そばの空間を見つめる百合。一樹には、そこになにも存在していないように見えた。一瞬迷ったが、「ごめん、何も見えない」と、正直に答えた。

「いいの……じゃあ、あたしの目で見て」

百合の目で見ると……幻視をしろということだろう。言われた通り百合を幻視すると、彼女の目の前には、二本の鎖で繋がれた石碑があった。立方体をふたつ組み合わせた形で、上部と下部に分かれており、それぞれの側面に、冠や腕輪、海や炎の絵が刻み込まれている。石碑の上部と下部からは、それぞれぴんと張られた状態の鎖が伸びている。ここが室内なら天井と床に固定されていると思うところだが、ここは屋外。下部はともかく、上部に固定するものは何も無い。それでも、その石碑は確かに鎖でそこに固定されていた。

「七つの門と、七つの鍵を解放するの」

「七つの門と、鍵……？」

幻視をやめ、百合を見る。百合は、目を閉じ、胸の前で手を組むと、森をそよがせる涼やかな風のような声で、歌をうたい始めた。それ



は、冠をかぶった巫女が、炎を前に舞い踊る歌だった。

一節うたい終えた百合は目を開けた。「これは、この島に伝わる古い詩・巫秘抄歌。こつなきひしやうかこの歌が、鍵となっているの」

歌が鍵となる——その意味を悟る一樹。幻視をし、百合の目を通して石碑に触れてみた。ひんやりとした石の感触も伝わってくる。確かに、ここに石碑は存在する。一樹は石碑の上部と下部を持ち、捻ってみた。きしみながら回転する。思った通りだった。一樹は石碑を回転させ、上部の冠の絵と、下部の炎の絵を合わせた。すると、石碑は一瞬赤黒い煙のようなものに包まれたかと思うと、ぼんやりと光りはじめた。幻視をやめ、目を開けると、一樹の目にも石碑が見えた。「これで、ひとつ……あと六つ」

百合が言う。つまり、これと同じ見えない石碑が遊園地内に七つあり、同じように絵を合わせることで、何かが起こるのだろうか。

「次へ行きましょう」

百合は来た道に戻り始めた。後を追う一樹。

と、階段の手前でびくんと身体が震え、一瞬だけ一樹と百合の姿が見えた。屍人に見つかった合図だった。周囲を見回すと、南側から迷彩服を着た屍人が近づいて来る。自衛官の屍人だろうか。その手には、小さなナイフのような物を持っていた。一樹は百合を護るために前に出ると、ズボンに差し込んでいた武器を抜いて構えた。拳銃だった。屍人は一樹の拳銃を見ても構わず向って来る。一樹は十分な距離までひきつけ、引き金を引いた。弾は胴体へ命中した。怯み、後ずさりをする屍人。だが、倒れずに向かって来る。一樹は落ち着いて二発目、三発目の弾を撃ちこんだ。屍人は悲鳴を上げながら倒れた。

一樹は百合の方を向いた。「ここに来る途中で手に入れたんだ。百合ちゃんを護るのに、役に立つと思って」

「ありがとう、守」と百合は微笑んだ。「あなたがいてくれて、本当に良かった」

二人は階段を上り、コーヒーカップのある丘の上へ戻って来た。東側の丘へ続く連絡橋の手前で立ち止まる百合。幻視を通して見ると、先ほどと同じような石碑があった。再び歌をうたう百合。今度は、巫

女が揺れる舟の上で鳥が戻るのを待つという歌だった。一樹は石碑の絵を巫女と舟に合わせる。赤黒い煙に包まれた後、ぼんやりと光を放つ石碑。これでふたつ。

「次はこつちよ」

百合は連絡橋を渡り、観覧車のある丘へ向かう。だが、その途中で立ちどまった。南の方角、遊園地の正門がある方を見ている。そこに石碑があるのかと幻視を試みたが、百合の目を通して石碑は見えなかった。連絡橋の下は時計塔や噴水がある広場になっていて、大きなパンダ型の乗り物もあるが、まさかそれを見ているわけではないだろう。視線の先にあるはずの正門は、夜の闇に隠れて見えない。

「あつちに、石碑があるの？」 幻視をやめ、一樹は訊いてみた。

百合は、「ううん、違うの」と首を振った後、続けた。「でも、なにか感じる。あれは……お母さんの……」

一樹は再び幻視をし、正門の方に意識を飛ばしてみた。すぐに屍人の視点を見つけた。正門の前に立ち、園内と、園外を交互に見ている。鉄格子型の門は閉ざされている。その向こう側に何か落ちているのが見えた。蛤はまぐりの貝殻を何枚も合わせたような形をしていた。百合が言っているのはあれだろうか？ 鉄格子の間から手を伸ばせば取れそうな位置にあるが、そのためには屍人を倒さなければならぬ。だが、そいつは迷彩服を着た自衛官の屍人で、あろうことか小銃を持っていた。狙撃機能もあるタイプで、いかに相手が愚鈍な屍人であっても、拳銃ではあまりにも分が悪い。背を向けている間に近づくこともできるかもしれないが、正門まではかなりの距離があり、経験に乏しい一樹の射程距離まで近づけるかはかなり微妙だった。倒すには、何か策が必要だが……。

◇

「——いいの。行きますよう」

百合に手を引かれた。気になったが、百合がそう言うのなら仕方ないだろう。二人は先を急いだ。

その後、花畑、管理小屋、噴水広場などを回り、百合の歌に合わせ  
て石碑の絵を合わせていく一樹。六つの封印を解いたところで、最後  
に観覧車の前へやってきた。

「これが最後よ」

百合がうたう。それは、天を舞う羽衣を着た巫女が舟に背を向けて  
踊る歌だった。石碑の絵を、羽衣と舟に合わせようとした。だが、そ  
の石碑は、これまでのものと少し違っていた。これまでは、上下の立  
方体それぞれの側面に四つずつ絵が掘り込まれていたが、その石碑に  
は一面ずつしか彫り込まれておらず、残りの面には何も描かれていな  
かった。一応、絵が描かれた面をそろえてみる。それは、羽衣を着た  
巫女の絵だったが、そろえても何も起きなかった。どういうことだろ  
う？ この石碑だけ他と違うのか？ 一体何が違う？ 考える一樹。

百合の歌を思い出す。羽衣を着た巫女が舟を背に踊る……石碑には、  
羽衣を着た巫女しか描かれていない。舟はどこにあるのだろうか？

考えて、思い出した。東の丘を見る。コーヒーカップのそばの石碑  
は、巫女が舟の上で鳥を待つ絵だったはずだ。あれに背を向けるとい  
うことだろうか？ 一樹は石碑を回転させ、羽衣を着た巫女の絵が東  
側の舟の石碑に背を向ける格好にした。思った通り、石碑は赤黒い煙  
に包まれ、最後の光が灯った。

そして、百合も最後の節をうたう。巫女が全てを踊り終えた時、七  
つの門が開かれるという詩だった。

百合が、全てをうたい終えたとき。

石碑が、強く光りはじめた。

今度の光は、これまでよりもはるかに眩しかった。一樹でさえ目が  
くらむような強さだが、光に弱いはずの百合が眩しがっていない。そ  
して、その光はここだけでなく、園内の各所の石碑も同様に強く輝い  
ていた。地面が揺れはじめ。地震か？ そう思ったが、不思議と身  
体は安定している。通常ならとても立ってはいられないほどの揺れ  
なのに、足はしっかりと大地を踏みしめている。何が起こっているん  
だ？ 一樹は訳も判らずそこに立ち尽くす。と、目の前、観覧車が  
建っている地面から、青い光が溢れ出た。それは観覧車を包み込むほ

どの強い光だったが、これも、百合が眩しがることはなかった。  
やがて、光が消える。

あまりの眩しさに、目を焼かれたかのように何も見えなかったが、  
徐々に視力が回復していく。やがて見えるようになったが、一樹は自  
分の目を疑った。

そこに、さつきまでであった観覧車が、無くなっていたから。  
代わりにあったのは、巨大な穴だ。

観覧車が建っていたその場所に、巨大な穴が空いているのだ。  
穴を覗き込む一樹。そこには闇しか存在しなかった。どんなに強  
いライトで照らしても、決して闇の底を照らすことはできない、そう  
思えるほどに、深い。

「さあ、行きましよう」

百合が、一樹の手を取った。彼女の足下には、闇の底へと続く鉄製の  
階段があった。さび止めの赤い塗料が塗られた、非常階段によく使  
われるものだった。

「もうすぐよ、守。もうすぐあたしたち、ひとつになれるの。ずっと、  
ずっと、一緒にいられるのよ」

百合の言葉に、ごくり、と、息を飲む一樹。

一樹は、百合に手を引かれ、階段を下りて行った。

☆

ずっと、目を背けてきたことがある。

あるいは、聞かないようにしていたと言うべきか。

コーヒーカーップのアトラクションで、百合と再会した時から。

ずっと、胸の鼓動が激しいままだ。

それは、屍人が近くにいた時の、警告を促す鼓動。

それが、ずっと治まらないのだ。

園内を百合と行動している最中も、ずっと鳴りやまないのだ。

一樹の胸の奥底で、ずっと、警鐘が鳴っているのだ。

そしてそれは、今も続いている。

だが、園内には、いたるところに屍人がいた。

危険は、いたるところにあったのだ。

あるいは、これは百合に対する想いの表れかもしれない。

一樹は、ずっとそう言い聞かせていた。

だから。

例え、石碑をひとつ解放するたびに、百合が妖しいほほ笑みを浮かべていても。

例え、闇の底へといざなう百合が、邪悪な笑みを浮かべていても。

それは、すべて自分の思い違いだと、言い聞かせていた。

百合のことを信じようと、心に決めていた。

二度と百合を傷つけないと、誓ったから。

たとえ、自分が傷つくことになったとしても。

もう、誰も裏切りたくなかったから。

一樹は、冥府へと続く階段を、下りて行く。

第十六話 『咆吼』 一樹守 冥府 5 : 40 : 39

それはまるで、『冥府』へと通じる階段だった。

冥府下り——神や英雄などが、『冥府』すなわち死者の国へ下りて行くことである。世界中の神話に見られる話だが、特に有名なものが、ギリシヤ神話のオルペウスや、古事記のイザナギだろう。いずれも愛する者の死を嘆き、冥府へと迎えに行くという話だ。そして、どちらも愛する者を連れ戻すには至らなかった。

七つの鍵を開け、門を開いた一樹守は、岸田百合と共に地の底へと続くような鉄の階段を下りていた。すでに三十分以上下りているが、いまだ底は見えない。恐らく五〇〇メートル以上は下っているだろう。とてつもなく深い穴だった。そのような穴が存在するのだろうか？ もちろん、鉱石の発掘現場に掘られる穴は、深さ一キロメートル以上になることも珍しくないし、石油や天然ガスともなると一万平米メートル以上のものもある。だが、いま一樹が下りている穴はそういった人工的なものではない。階段こそあるが、それは元々あった穴に後から取り付けたと思われるもので、穴自体は天然のものに見えた。天然の穴で深いものだと、一樹が知る限りでは、中国に深さ六〇〇メートル以上になるものがあるが、その穴は入口も直系六〇〇メートル以上と、極めて巨大だ。それと比べると、いま一樹が下りている穴は離島の小さな遊園地に建つ観覧車の場所に出没したもので、その入口の直径は三〇メートルにも満たないだろう。そのような不自然な形の穴が、なぜ突如現れたのか。

シンクホール。

そう呼ばれる穴がある。地表に突如出現する穴で、世界中で例がある。原因は無数にあるが、多いのは、地下水の浸食や、その他、なんらかの化学変化による地面の陥没だ。あるいは、鉱石の発掘跡の陥没や、最近では地下鉄や地下街の工事の事故、水道管やガス管の破裂によるものなど、人為的ミスによるものも少なくない。

状況から考えると、この穴もシンクホールなのかもしれない。だ

が、そういったシンクホールはせいぜい数メートルから数十メートルの深さで、一〇〇メートル以上のものなど聞いたことがない。もちろん、今まで一樹が聞いたことがないからと言って、存在しない理由にはならないが。

大きく首を振り、考えを振り払う一樹。そのような科学的な解釈は、今はどうでもいい。重要なのは、この穴の底に囚われているという百合の母親を救い出すことだ。この穴がどうやってできたのだとか、この鉄階段は誰が取りつけたのだとか、このような穴の底に囚われている母親とは何者なのかとか、余計なことは考えなくていい。ただ、百合の母親を救う、そして、百合を助けることだけを考えていればいいのだ。

先を進む百合は裸足だった。階段を下りる途中、百合は早々にブーツと靴下を脱いだのだ。百合のブーツはヒールが高く、筒丈もひざ下まであるものだ。長い階段を下りるには危険だったのだろう。素足に傷がつかないか心配だったが、仕方がない。

「ようやく……ここまで来ることができた」

百合が、闇の底を見つめながら、つぶやくように言った。

そして、羽織っていた赤いカーディガンを脱ぎ捨てた。カーディガンは吸い込まれるように闇の底へと消えた。百合は、純白のブラウスと、純白のプリーツスカート姿になっていた。雨に濡れたブラウスがぴたりと張りつき、純白の下着と、そして、ブラウスよりも、スカートよりも、下着よりも、ずっと純白な百合の肌が、透けて見えた。ごくり、と、百合に聞こえるのではないかと思うほどの音を立てて、一樹は唾を飲み込んだ。

「戻って来るまでに、二年もかかった。長い……本当に長い時だった」

百合は、ブラウスのボタンに指をかけた。ひとつ、ふたつ、と、ゆっくりと外してゆく。そして、七つ外したところで、ブラウスは蝶のように宙を舞った。だが、それはほんの一瞬だった。純白のブラウスもまた、赤いカーディガンと同じく闇の底へ吸い込まれるように消えた。

不意に。

もうひとつ、有名な冥府下りの神話があるのを、一樹は思い出した。メソポタミア神話の女神・イシユタルである。

イシユタルは、不慮の事故で死んだ夫・ドウムジを迎えに冥界へと向かうが、険悪の仲だった冥界の女王である姉・エレキシユガルはこれに激怒した。そして、冥界への道の途中にある七つの門の番人に、冥府の掟に従いイシユタルをもてなすように命じた。番人は、冥府で美しい着物を着てはならないという掟に従い、イシユタルが門をくぐるたびに身に付けているものをひとつずつ剥ぎ取った。イシユタルが七つの門をくぐり、冥府へたどり着いたとき、彼女は全裸になっていたという。

「——さあ、見えてきたわ」

半裸となった百合の背中に見とれていた一樹は、彼女の言葉で、ようやく闇の底が見えていることに気がついた。

そこには、赤い海が広がっていた。

この島へ向かう途中、そして、島へ上陸してからも見た、あの赤い海だ。それが、地下の見渡すかぎりには広がっていた。水平線まで見える。まるで屋外にいるように錯覚するが、そこは確かに地下だった。天からは、いくつもの巨大な木の根がぶら下がっていたから。また、海の中に、一本だけ巨大な樹が生えていた。鹿児島県の屋久島にある縄文杉を思わせるほどの巨樹だ。だが、縄文杉が生命の神秘を感じさせる樹であるのに対し、この樹は死を連想させるものだった。枝の多くが垂れ下がり、そこには葉の一枚も茂っていない。枯れている、というよりは、枯れさせられた、と言った方が正しいように思う。吸血鬼や夢魔といったモンスターに生命力を吸い取られたかのような姿だった。

階段は終わり、その先は、まるで港の波止場のようにコンクリートのブロックが赤い海へとせり出していた。その上を歩く百合。腰の横に手を回した。スカートの留め金を外し、ファスナーを下ろす。純白のプリーツスカートが足を滑り落ちた。もはや彼女の肌を隠すのは、ふたつの下着だけだ。

赤い海にせり出した道は緩やかな下りとなり、海へと消えていた。



百合は海へと入って行く。すねまで浸かったところで、百合は背中に手を回し、留め金を外した。彼女の胸を支えていた下着は、赤い海に投げ捨てられた。

「見て……守……あたしを見て……」

百合は、最後の衣を脱ぎ捨て。

「守に、見てほしいの……あたしの、ほんとうの姿……」

一糸まとわぬ姿で、一樹を振り返り。

そして——妖艶な笑みを、浮かべた。

「見て、守……あたしの顔を、ちゃんと見て」

一樹は、百合の胸から目が離せなかった。

彼女の胸には、もうひとつ、同じ顔があったから。

彼女の妖艶な笑みの下で。

彼女のもうひとつの顔が、邪悪な笑みを浮かべていたから。

その、邪悪な笑みを浮かべた顔こそが、彼女の本当の顔だと判ったから。

地下に、サイレンが鳴り響く。

百合の背後の赤い海から、異形の生物が姿を現した。異形の生物——そう表現するしかなかった。それは、地球上には存在しない生物の姿だったのだ。

見た目は、深海に住む魚を思わせる姿をしていた。だが、あまりにも大きい。下半身は赤い海に隠れて見えないが、見えている上半身だけでもすでに人の背丈の二倍以上はある。肌の色は百合と同じく透き通るような純白だが、百合のような美しさは感じられない。胴体の中央が大きく裂け、歯のようなものが無数に生えていたから。歯のようなもの——歯ではない。その歯は、細長く、ひとつひとつがうねうねと蠢いていた。傷口に大量の蛆うじが寄生する感染症に似ていた。無数の蛆虫のようなものがうねうねと蠢く胴体の上には、人間と同じような肩がある。だが、その肩から生えた二本の腕の先は、ハサミムシの翅のような扇状の形をしていた。そして、肩から上には長い首があるのだが、恐ろしいのは、その先にあるべき頭が無いことである。そこにあるのは傷口だけだ。桃色の肉と、白い骨が見えている。それは

まるで、鋭い刀で斬首されたような姿だった。それでも、その生物は生きていた。頭が無いにもかかわらず、じつと、こちらを見ている――一樹は、そう感じていた。

その異形の生物の首の上にあつたのは、百合の胸にある顔ではないか――。

一樹は、そんなことを考えた。

地下に、サイレンが、鳴り響く。

百合が、両手を広げ。

「――さあ、守。ひとつになりましょう。これからあたしたちは、ずっといつしよにいられるの。守と、あたしと、お母さんと、いつまでも、いつまでも、いつしよに――」

妖艶な笑みと、邪悪な笑みで、一樹に近づいて来た。

☆

――同時刻。

☆

姉を追い、蒼ノ久集落から貝追崎へやってきた作家の三上脩と愛犬のツカサは、かつて日本軍が建造した要塞跡をあてもなくさまよっていた。二十九年、漁師たちの襲撃から逃れた姉の加奈江と幼い三上。彼女たちを追ってここまで来たのだが、その後、まったく手がかりがつかめないのだ。新たな記憶はよみがえってこない。もしかしたら、貝追崎へ逃げたと思ったのは勘違いだったのだろうか？ 三上は、そう思い始めていた。

☆

自衛官の永井頼人は、上官の三沢岳明と共に四鳴山の頂上を目指し

ていた。山の頂上には巨大な鉄塔があるのだが、現在、その先端が雨雲の中に吸い込まれるようにして消えているのだ。あの鉄塔の先に何かある、と、三沢は言う。何の根拠もないことであり、ただの勘にすぎない。それでも、永井は三沢を信じることにした。この夜見島に上陸して以降、三沢は常に正しい行動をしている。彼について行けば間違いない。永井は、そう確信していたのだ。

☆

赤い津波が襲う前に夜見島を離れた警察官の藤田茂は、四キロほど離れた隣の島で夜が明けるのを待ち、日の出とともに三逗港への帰路へ就いていた。すでに上司には状況を報告してある。夜見島では全く繋がらなかった無線が、島を離れた途端高感度で繋がるようになったのだ。無断で行動したことをこっぴどく叱られたし、帰ったらまた叱られるだろうが、幸いクビは免れそうだ。明日からは真面目に勤務しよう。いつかまた、娘と暮らすことを夢見て。そう胸に誓っていた。

☆

崩谷地区を離れ、夜見島遊園へと向かった占い師の喜代田章子とその連れの阿部倉司は、途中で行き先を変え、島の北部にある貝追崎という地域へと向かっていた。理由は判らないが、章子が修得した新スキル・夜見島ガイドがそう指示したのだ。コロコロと行き先を変えることに文句を言う阿部を無視し、章子は貝追崎へと向かう。

☆

そして。

一樹守を追って夜見島遊園へやってきた一人の少女が、冥府への階

段を駆け下りていた。この下に一樹の気配を感じている。そして、ひとつの邪悪な気配と、もうひとつ、大きな禍々しき気配も。一樹の身が危ない、早く助けなければ。そう思うが、階段の先は漆黒の闇に飲み込まれており、底はまだ見えない。一体どこまで続いているのか想像もつかなかった。このままでは間に合わないかもしれない——少女はそう感じていた。ここに来る途中、遊園地の門が閉ざされていたのが大きな痛手だった。内側から南京錠が掛けられており、それを開けるのにかなり手間取ってしまったのだ。門が開いてさえいけば……そう思わずにはいられなかった。

少女は、走り続ける。

だが——。

少女が冥府に下り立つ前に、一樹守の気配は消えた。

☆

八月三日、早朝六時。

島に、サイレンが、鳴り響く——。

☆

夜見島における一樹守の物語は、これで終わりだ。

このあと一樹は、岸田百合の言葉通り、彼女と、そして、彼女が母と呼ぶものと、ひとつになる。

百合の正体はなんだったのか、現れた異形の生物はなんだったのか。

それを知る術は、一樹には、もう無い。

そして、夜見島を訪れた他の者たちがどうなったのかも、彼が知ることはできない。

なぜ、このような結果となったのか、どこかで引き返すことはできなかったのか。

あるいは、彼が別の行動をとっていれば。

これとは違う、別の展開が待っていたのか。

それを考えることも、もう、一樹にはできない。

この世界における一樹守の物語は、これ以上は無いのだから。

ただ。

一樹には無理でも、我々には、別の世界を想像することができる。

もし、一樹守が、この世界とは別の行動をとっていたら。

いや、一樹だけではない。他の誰でもいい。誰かが違う行動をとっていたら。

あるいはその先に、違う展開と、違う結末が待っていたかもしれない。

それを想像することは、我々には可能だ。

いや、想像だけではない。創造することさえ、我々には可能なのだ。

この世界とは全く異なる別の世界を想像し、創造することが、我々にはできるのだ。

この世界における一樹守の物語は、これで終わりだ。

ここから先は、異なる世界、異なる人々の、異なる物語である――。

第十七話 『予兆』 藤田茂 夜見島金鉱採掘所 |

5:26:51 終了条件2

夜見島に怪しい女が上陸するのを見た——地元の漁師から相談を受け、単身夜見島へとやってきた藤田茂は、閉鎖された夜見島金鉱採掘所跡で、海から来る穢れ・屍霊の群れに遭遇した。ライトと警棒を振り回しなんとか採掘所跡から脱出した藤田は、島の南の瀬礼洲という地域の上空がわずかに明るくなっているのを見た。瀬礼洲は森が広がるだけの何も無い地域で、その上、島は昭和五十一年の海底ケーブル切断事件以降、電力は供給されていない。空を照らすほどの光源があるとは思えない。いったい、あそこに何かがあるのか？ 今いる場所からでは光源が何かは判らない。もう少し高い場所に登れば見えるかもしれないが——？

◇

周囲を見回す藤田。いま出て来たばかりの採掘所の建物の向こう側、ちやうど、坑道から金を運び出すインクラインがある辺りに切り立った崖があり、その上に木造の小さな建物があるのが見えた。あそこからなら瀬礼洲地域を一望できるだろう。だが、その建物へは採掘所跡の二階から連絡橋を通って行くしかない。つまり、屍霊が多数徘徊する採掘所跡に戻らなければならないのだ。屍霊一体一体はライトを当てたり警棒で殴ればすぐに消滅するが、あまりにも数が多く、まとめて襲われると危険だ。また、島の伝承が本当ならば、屍霊は死体に憑りつき人を襲うはずだ。万が一この島に死体があれば、屍霊は屍人となり、さらに危険な存在となる。命が惜しいならば早々に島から立ち去った方が良い。本能はそう告げているが。

藤田は苦笑いをする、ライトと警棒を構え、建物の中に戻った。余計なことに首を突っ込むこの性格は一生治りそうにない。すまんなあ、朝子——藤田は心の中で愛する娘に詫びた。

屍霊に背後を取られないよう、なるべく壁を背にし、周囲をライトで照らしながら慎重に進む藤田。なんとかインクラインのある一角へ戻って来た。採掘所内はこの一角だけが二階建てになっている。鉄製の階段を見つけ、二階へ上がる。そして連絡橋を渡り、崖の上の建物の前へ移動した。

だが、建物の入口には南京錠がかけられていた。鍵がどこにあるのかは判らない。採掘所内をくまなく探すのは危険を伴うし、そもそも、何年も前に閉鎖されたこの建物内に鍵があるかどうかも判らない。やれやれ。仕方ないか。藤田はポケットから針金片を取り出すと、南京錠の鍵穴に差し込んだ。

今でこそ田舎町の交番勤務をしている藤田だが、三ヶ月前までは県警本部で多くの手柄を上げた優秀な刑事だった。彼が属していたのは刑事部の捜査三課である。捜査三課は、空巢・スリ・ひったくりなど、主に窃盗事件を担当する部署だ。殺人や誘拐などの凶悪事件を担当する捜査一課と比べると、どうしても地味な印象はぬぐえない。しかし、事件の発生頻度で言えば当然ながら窃盗事件の方が圧倒的に多く、署内でもかなり忙しい部署であった。

空巢やスリなどの犯人はその大半が常習者であり、さらにその大半が毎回同じ手口で犯行に及ぶ。そのため、ベテランの刑事は犯行手口を見ただけで犯人を特定することもできた。それだけ多くの知識と技術を持っているのだ。ヘタをすると、その辺の窃盗犯などよりよほど高い技術を持っている。今でこそ閑職に追われた藤田だが、かつては現場一筋のたたき上げで警部補まで上り詰めた男だ。南京錠程度ならば、針金一本で簡単に開けることができた。もちろん、令状も無く緊急事態でもないのに勝手鍵を開け侵入するのは警官にあるまじき行為だが、それはこの採掘所跡に入った時点で同じだった。いまさら後へは引き返せない。

南京錠を外した藤田は中に入る。そこは、いくつかの操作パネルが置かれた部屋だった。インクラインの制御室のようである。藤田はスイッチを入れてみたが、機械は稼働しなかった。やはり、電力の供給は止まっている。では、あの瀬礼洲方面の光はなんだ？ 建物は二

階建てになっているので、さらに上の階へ上がる。そこは倉庫を兼ねた休憩室だった。南側に窓があり、そこから瀬礼洲方面を一望できた。藤田は窓のそばに立ち、そして、我が目を疑った。

森の中に、大型のフェリーが停泊していたのだ。

いや、停泊という言葉は適切ではないかもしれない。そこは本当にただの森で、海はもちろん、川や池といった水辺さえ無いのだ。どうやってあんなところにフェリーを運んだのだろうか？ 島を飲み込むほどの大きな津波でもあれば流れてくるかもしれないが、もちろん、そのような津波など発生していない。

——そう言えば。

夕方ごろ、本部から無線連絡があったのを、藤田は思い出した。夜見島近くを航行中の大型フェリーから救助要請が入ったとのことだった。その時間、藤田はボートで夜見島へ向かっていたが、それは上司や同僚に無断であったし、そもそも海難事故は県警や交番ではなく海上保安部の担当なので、応援要請でもない限り一交番員の藤田が何かすることは無い。だから、詳しいことは聞かなかったのだ。もう少し詳細を確認しておくべきだった。

藤田はフェリーを見つめる。本能は、近づいてはならないと警告している。だが、フェリーには明かりが点いている。ということは、中に乗客や乗員が取り残されている可能性が高い。救助を待っているかもしれないのだ。どのような危険があらうと、警察官として、見過ごすことなどできはしない。

——すまんなあ、朝子。

今日、これで何度目になるか。藤田は娘に詫び。

そして、インクライン制御室を出て、再び採掘所内を通り南西側出口から外へ出ると、南の瀬礼洲方面へと向かった。



第十八話 『感応』 岸田百合 夜見島／瓜生ヶ森

1：40：07

一樹守と仲たがいをし、彼の元を去った岸田百合は、瓜生ヶ森の中を一人歩いていった。雨は降り続き、月明かりさえ無い森の中は、か弱い少女が一人で歩くには危険だ。正面から屍霊が近づいてきた。屍霊は光を苦手とし、シエルター代わりに人間の死体に憑りつく。近くに死体が無い場合、手取り早く死体を得るために人を襲う。鈍器で殴るかライトの光を当てれば簡単に消滅するが、百合は、武器はおろかライトさえ持っていなかった。屍霊は、格好の獲物を見つけたと思っただろうか、歓喜するような高い声を上げ近づいて来る。

百合は、右足を上げると、ヒールの高いブーツで、思いつきり屍霊を踏みつけた。そして、煙草の火を消すかのごとく踏みにじる。屍霊は、車に轢かれたガマガエルのような悲鳴を上げ、消滅した。

その背後に別の屍霊が迫る。百合は振り向きざまに回し蹴りを叩き込んだ。ぼん、と、小さな爆発音とともに、屍霊は霧散した。

——まったく、次から次へと、鬱陶うっとうしいわね。

胸の内で悪態をつく百合。こんな雑魚共に構ってはいられない。早く一樹守に代わる『オリーブの葉』を見つけなければ。朝が来る前に、なんとしても、母を迎えないといけないから。この近くに、別の人間の男の気配を感じる。赤い津波の前に出会ったあの二人組の男か。それとも、別の誰かか。誰でもいい。男であれば、『オリーブの葉』としての役割を果たせるのだから。

百合は、南の空を照らしている光の元へ向かっていた。そこになにがあるのかは判らないが、人間は羽虫のごとく光の元へ集まる習性がある。百合は光が苦手だが、人間を連れ帰るためならば仕方がない。百合は先を急いだ。

そこには、大きな船があった。

百合は人間の世界へ来てまだ二年ほどしか経っていない。知識が豊富だとは言えないが、船というものが海や川などの水の上を移動す

るものだということは知っていた。しかし、今いるこの一帯に水辺は無い。どうやって現れたのだろうか？ 母が取り込んだのだろうか？

それにしても妙な感じがする。これほど大きな物を取り込むならそれなりに大きな力が必要なのだが、この船には母の力を感じない。自然に現れたか、別の誰かが取り込んだかだ。

フェリーの中の気配を探る。多くの気配を感じたが、そのほとんどが屍人、あるいは屍霊だった。だが、その中にひとつだけ、屍霊とは違う別の気配があった。誰？ 気配を探り続ける。それは、人間とも違う気配だった。姉さんだろうか？ 百合の母は、百合が生まれるよりも前から何度も鳩を飛ばしていた。そのうちの誰かが帰還したのかもしれない。

しかし。

その気配は、自分たちとも違う気がした。似ているようにも思うが、まったく異なるようにも思う。何かがおかしい。かなり異質な感じがする。これは、放っておけない。正体を探らなければ。

百合は、船へと向かう。

船体には、平仮名で『ぶらいとういん』と書かれていた。

第十九話 『喪失』 矢倉市子 ブライトウィン／貨物室 1:20:19

矢倉市子<sup>やぐらいちこ</sup>が目を覚ましたのは、寝慣れた柔らかい布団の中ではなく、冷たく硬いコンクリートの上だった。普段とはあまりにも異なる目覚め。ここはどこだろう。身体を起こし、周囲を見回す。床だけでなく、壁、天井、柱、どれもコンクリートや鉄骨がむき出しの無機質な部屋だった。壁にはところどころにペンキで『火気厳禁・NO S MOKING』と書かれ、柱には注意・警戒を示す黄色と黒のストライプ模様が描かれている。かなり広い部屋で、茶色の貨物用コンテナが三つ置かれていた。倉庫のような場所だ。

なぜ、このような場所にいるのだろうか？ 記憶を探ろうとして、突然、頭が割れるかのような痛みに襲われた。うずくまり、目を閉じて耐える。すると、目を閉じているにもかかわらず映像が見えた。薄暗い階段を下りる映像だった。獣のような低い唸り声をあげ、手には小型の斧を持っている。だが、その映像はすぐに消え、テレビの砂嵐のようなノイズが見えたかと思うと、今度は両サイドに二段ベッドがふたつ並んだ狭い部屋の映像が見えた。これも獣のような息遣いをし、手には包丁を持っている。またすぐにノイズがあり、今度は船の甲板のような映像が見えた。今度は穏やかな呼吸で、細く白い手には何も持っていないかった。さらに何度か別の映像に切り替わった後、頭痛は嘘のように治まった。目を開けると、さつきと同じ無機質な倉庫。いま見えたものはなんだろう？ まるで、テレビのチャンネルをでたらめに回しているかのようなだった。薄暗い階段下りる映像と、二段ベッドがふたつ並んだ部屋と、船の甲板……。船……。それで思い出した。そうだ。中学テニス部の県大会に出場するため、部員と顧問の教師でフェリーに乗り、会場へと向かったのだ。大会では、男子シングルでベスト4、女子ダブルスでベスト8進出、さらには、団体で準優勝を果たすなど、好成績を収めた。そして、意気揚々と帰りのフェリーに乗り――。

.....

それ以上は思い出せなかった。ただ、船内でなにか大きな事件が起こったような気がする。それで意識を失ったのだろうか？ 他の部員や先生はどうしたのだろうか？

「ノリコー・中島君！」なかしま

呼んでみたが、声は無機質なコンクリートに響くだけだった。倉庫内に人の気配はない。

ただ、その名を読んだ瞬間、なぜだろう、胸にぽっかりと大きな穴が開いたような感覚があった、何か、大切なものを失った、あるいは喪ったような気持ちだ。まさか、ノリコや中島君の身に、何かあったのだろうか？

と、びくと身体が震え、一瞬だけ階段を下りる映像が見えた。同時に、心臓の鼓動が激しくなる。なんだろう？ さつき目を閉じた時に見えた幻覚といい、急に動機が激しくなることといい、何かの病気なのだろうか？ そんなことを考えていると、何か機械が稼働する音が聞こえた。音の方を見る。市子がいる場所とは反対側にエレベーターが見えた。フロアの表示はB3となっており、移動を示すランプがB1から下へおりていた。誰かがエレベーターに乗っている。ノリコか、中島君か、あるいは他の部員や先生があたしを探してくれているのだろうか？ そう思ったが、エレベーターが下りてくるにつれ、まるで警告を促すかのように鼓動は激しくなる。このままでは危ない、そう思った市子は、コンテナの陰に身を隠した。そっと顔を出し、様子を窺う。チン、と到着の音がして、ドアが開いた。

「!?!」

思わず息を飲む。声を上げなかったのは幸이었다。

エレベーターから降りてきたのは、漁師のような格好をした男だった。獣のような低い唸り声をあげ、手には小型の斧を持っている。その顔は生気が無く、まるで死人のようだった。死人が歩いている……それは、映画などで見た動く死体・ゾンビにそっくりだ。

——なに!? なんなのアレ!? 意味わかんない！ 気持ち悪い!!

市子は叫びそうになる口を両手で覆い、コンテナの陰で震えた。

矢倉市子は、中迂半島から少し離れた地域にある県立亀石野<sup>かめいしの</sup>中学に通う少女だ。前髪を眉の上でバツサリ切りそろえたオンギ眉毛と、肩まで伸びたツインテールの髪型がトレードマーク。勉強の成績は、国語と英語が少し得意で数学が少し苦手な傾向にあるがごく平均的。対して運動神経はよく、体育の成績は優秀だった。テニス部の所属で、先日の七月三十一日に行われた県大会に出場。出場するだけでも奇跡と言われた大会で予想外の快進撃を続け、見事、準優勝を果たした。

大会を終え、準優勝のトロフィーと共に凱旋することとなった市子たちテニス部員は、八月一日午後、会場近くの港から、大型客船・ブライトウィン号へ乗船した。船内で一泊し、翌二日の昼には中迂半島の三逗港に到着、夕方には亀石野中学に戻れるはずだったのだが。

翌朝、ブライトウィン号が中迂半島沖約三十キロの海域、つまり、夜見島の近くを航行中に、怪異は起こったのである。

ゾンビはエレベーターを降りると、その場で周囲を見回した。さっきの市子の声を聞いて、探しているのかもしれない。コンテナの陰に隠れているだけでは見つかってしまう。お願い！ こつちに来ないで！ 手を組み、目を閉じ、祈る。すると、また目を閉じているにもかかわらず映像が見えた。獣のような息遣いで、薄暗い倉庫のような場所を見回す映像。壁も床も天井もコンクリートや鉄骨がむき出しで、壁に書かれた火気厳禁という文字や、柱の警戒色、三つのコンテナ。いま市子がいる場所のように思えた。その映像が、くると後ろを向いた。ドアが開いたエレベーターが見える。映像はエレベーターの中に入る。どす黒い手がボタンを押し、扉が閉まった。

——あれ？ これって……？

目を開け、そつと顔を出し、様子を窺う。ゾンビの姿は無く、エレベーターの階数を示すランプはB3からB2へと変わった。どうやらゾンビは倉庫の奥まで来ることはなく、そのまま引き返したようだ。やがて、心臓の激しい鼓動も治まった。ほつと、安堵の息をつく市子。

しかし、さつきから目を閉じたら見える映像はなんだろうか？ 倉庫内を見回した後、エレベーターに乗り込む映像……もしかしたら、あのゾンビが見ていたものが見えたのかもしれない。恐る恐る目を閉じ、意識を集中する。エレベーターの扉が開く映像が見えた。今度は倉庫ではなく廊下だった。階数の表記はB1となっている。さつきのゾンビが地下一階へ戻ったのだろう。やはり、他人の視界が見えていくようだ。訳が判らなかつたが、今はそれよりも、あのゾンビの方が問題だ。あれはなんだったのだろうか？ 突然のことで驚いて隠れたが、落ち着いて考えると、部員の誰かがマスクやメイクなどで変装して、市子を驚かそうとしているような気もする。そう思う反面、この船は危険だ、という思いが胸の奥に残っている。そもそもなぜこんな場所で意識を失っていたのだろうか？ 意識を失う前、ゾンビなどよりもつと恐ろしい出来事があったような気がするのだ。一刻も早く逃げた方がいい。他に出口は無いだろうか？ 倉庫内を見回す。残念ながら、出口はさつきゾンビが使っていたエレベーターしかない。しかし、奥の壁に亀裂が入っているのが見えた。決して大きくはないが、市子の体格なら通れるかもしれない。近づき、確認する。向こう側から雨が降る音が聞こえてきた。どうやら外へ通じているようだ。そうなると脱出は困難と言わざるを得ない。ここは大型フェリーの中、つまり海の上なのだ。

——あれ？ そう言えば、この船、揺れてないな。

そのことに気付いた市子。昨日の夕方船に乗り、食堂でバイキング形式の食事をとり、客室へ戻るまでの間、海が荒れていたのか、船の揺れはかなり酷かった。部員の中には船酔いをし、寝込んだ子もいる。しかし、いま船は全く揺れていない。もしかしたら港に停まっているのかも。なら、海に飛び込んで少し泳げば陸だ。あるいは、運が

良ければすぐそこに波止場があるかもしれない。とにかく外の様子を見て見よう。市子は亀裂から外を見た。

——え？

あまりに予想外の光景に目を疑う。そこに広がっていたのは海ではなく、草と樹、そして岩と土だった。フェリーは、海どころか川や池さえない森の中に停まっているのだ。

しばらくその光景を呆然と見つめる。何が起きているのか、まったく判らない。さつきから理解できないことばかりだ。目が閉じると見える他人の視界と、ゾンビのような化け物と、森の中にある大型フェリー……もはや市子の思考は追いつかない。だから、考えるのはやめにした。外が海ではなく陸ならばその方が脱出しやすい。地面までは二メートルにも満たない高さだから、飛び降りても大きな怪我はしないだろう。壁の亀裂も市子ならば充分に通れる大きさだ。そこを潜って外に出ようとして、足を止めた。

ノリコや中島君、そして、他の部員や先生はどうしたのだろうか？ ノリコはテニス部のマネージャーで、市子の一番の親友だ。中島は男子のエースで、市子が密かに想いを寄せている人でもある。みんな、無事なのだろうか？ 先に脱出していれば良いが、もしかまだ船の中に残っているのだとしたら……。そう言えば、さつき激しい頭痛で目を閉じた時、いくつもの映像が見えた。あれが、市子が考えている通り他人の視界を覗き見ていたのだとして、その中に一人、ゾンビではない女の子の視点があった。船の甲板だ。ゾンビではない女の子がまだ船内に残っている。それがもしノリコや他の部員だったら、このまま一人で逃げるわけにはいかない。だが、自分などになにができるだろう。一度逃げて助けを求めた方が良いでしょう。どうすべきか……。迷っていると、また心臓の鼓動が早くなり始めた。まさか？ エレベーターを見ると、ランプの表示がB1からB2へと変わった。またあのゾンビが下りてきたのかもしれない。コンテナの陰に隠れる。エレベーターが到着する音がして、ドアが開き、思った通りゾンビが降りてきた。そしてまたその場で周囲を見回すと、すぐにエレベーターに乗り、上がって行った。さつきと全く同じ行動だ。

単純な動作を繰り返しているのだろうか？ 市子が見た映画のゾンビもそうだった。知能は低く、動きも鈍い。市子は運動は得意だ。鈍いゾンビなんかには捕まらないだろう。よし。市子は意を決し、船内へ戻ることにした。

コンテナに身を隠したまま、視界を覗き見る能力で様子を窺う。エレベーターを降りたゾンビは廊下を進み、その先にある階段を上がった。地下一階から一階、そして二階へ上がる。二階には市子たちが使っていた客室があるが、ゾンビはそちらの方へは行かず、しばらくその場で周囲を見回した後、再び階段を下りはじめた。そのまま地下一階まで下りると、廊下を進み、エレベーターの前のボタンを押した。市子の鼓動が激しくなる。ゾンビは倉庫まで下りてくると、周囲を見回し、また上へと戻って行った。どうやら、この倉庫と二階までを巡回しているようだ。これなら、隙を突いて倉庫から脱出できそうだ。市子は音を立てないよう静かにエレベーターに近づく。そして、ゾンビがB1でエレベーターを降りたのを確認し、ボタンを押した。しばらくして下りてきたエレベーターに乗る。地下二階で降りられれば良かったが、このエレベーターは地下一階と倉庫を行き来するだけのもののように、残念ながらB2のボタンは無かった。仕方なく、市子はB1へ上がる。能力で確認すると、ゾンビは二階へ着いたところだった。今がチャンスだ。市子は静かに走って階段をあがり、一階へ向かった。すぐそばにドアがあったので、それを開けた。

そこはフェリーの右側の甲板だった。夏の夜にしてはややひんやりとした風が吹き、市子のツインテールの髪を揺らした。その風には潮の香りではなく、木々や土の匂いが含まれている。甲板の柵の向こう側には広がるのはやはり海ではなく森だ。見渡す限り水など無い。いったいどうやって、こんな場所に大きな船を運んだのだろうか？

ゾンビが階段を下りてくる音が聞こえたので、すぐに扉を閉め身を隠した。幸いゾンビは市子に気付くことはなく、そのまま地下へ下りて行った。

ほっと息をついたところで、市子は甲板に救命ボートが吊るされていることに気がついた。このフェリーはかなり大きな客船なので、救



命ボートも当然備え付けられてある。

いま市子がいるフロアは一階だが、それは船としての階数なので、地面からはかなり高い位置にある。地下三階から上がって来たということは、ビル四階分の高さに匹敵する。各フロアは一般的なビルと比べて多少天井が低いことを考慮しても、地面までは十メートル以上あるだろう。当然、船の乗降口に行ってもタラップが無ければ降りられないし、こんな森の中にタラップがあるとも思えない。だが、あの救命ボートを使えば脱出できるかもしれない。市子は救命ボートを確認する。ボートは、機械式のウインチを使つて下ろすタイプだった。しかし、電源系統が故障しているのか、ボタンを押しても動く気配が無かった。もちろん、非常時に電気が使えないことは考えられるので、クランクを使つて手動で下すこともできるようだが、肝心のクランクが取り外しできるタイプで、近くを探しても見つからなかった。これでは非常時に使えないのではないだろうか……と言うより今がまさにその非常時なのだが、使えないという時点で欠陥品確定だ。クランクを探るか、倉庫に戻つて壁の亀裂から脱出するか、あるいは別の脱出方法を探すかしかない。いずれにしても、まずはノリコたちを探すのが先決だ。

市子が移動しようしたら、鼓動が激しくなった。ゾンビが近づいている。しかし、能力で確認すると、さっきのゾンビはちょうど倉庫へ下りたところだった。じゃあこの警告は……？　と思つた瞬間、びくとんとして身体が震え、一瞬、救命ボートのそばに立つツインテールの少女の姿が見えた。目を開けると、さっき市子が出てきた扉を開け、バルを取つたゾンビがこちらを見ていた。まずい。最初のゾンビに気を取られ、他にもゾンビが徘徊していることを忘れていた。

ゾンビはバルを振り上げ、獣の遠吠えのような声を上げると、足よりもはるかに速い。だが、それでも早歩き程度のスピードだった。市子はゾンビとは反対側、船の後部へと走った。扉を開け、甲板から船内へ入る。正面に下り階段があったが、船員専用という看板が立てられてあつた。冷静に考えればそんなものを気にしている場合では

ないのだが、ゾンビに追われている市子は思わずそれに従い、階段の手前で右へ曲がった。そこは一・二階の客室へ続くエントランスルームだった。奥にカウンターがあったのでその中に隠れる。追って来たゾンビはエントランスルーム内を見回すが、隠れている市子を見つげられず、やがて右舷甲板へと戻って行つた。危なかつた。船内には他にもゾンビが何体かいるはずだ。注意しなければならぬ。市子はカウンターに身を隠したまま視界を覗き見る能力を使った。いま市子を追って来たゾンビと、最初のエレベーター付近を徘徊しているゾンビ、そして、パイプやタンク・計器類がたくさんある部屋を徘徊しているゾンビと、客室を徘徊しているゾンビの視点を見つけた。客室はこのエントランスルームのすぐそばだ。迂闊に出ていくと危ないかもしれない。そのまま様子を窺う。ゾンビが徘徊しているのは大勢で雑魚寝をする三等客室だった。三等客室はこの一階だ。ここには危ない。幸い鼓動はまだ平常だ。ゾンビは近くにはいない。市子はカウンターから出ると、エントランスルームの階段を上がり、二階へと移動した。

二階は市子たちが使っていた二等客室だ。ゾンビの気配はない。市子は、一度自分たちが泊まっていた部屋に戻ってみた。二等客室は、一階の雑魚寝部屋と違い、一部屋に二段ベッドがふたつずつ設置されている四人部屋だ。入って右側の上の段が市子のベッドで、反対側がノリコのベッドだ。当然ながらノリコの姿は無い。それは、この怪異が起こる前からだった。テニスの大会終了後、船に乗ったノリコは、気分が悪いと言つて救護室へ向かつた。市子は最初、ただの船酔いだらうとあまり気にしなかつたが、ノリコは、食事の時間、そして、夜になつても戻つてこなかつた。心配になつた市子は、寝る前に手紙を書き、ノリコのベッドの上に置いておいた。

ノリコのベッドを確認する市子。あのとき置いた手紙は、そのままそこに残っていた。手紙は便箋を折り紙の要領で折り、セーラー服の形にしたものだ。開けられた形跡は無い。つまり、あの夜ノリコは戻つて来なかつたのだ。

不意に。

——おい、聞いたか？ 船が水死体を引き上げたってよ？ 見に行こうぜ。

男子部員が騒いでいたのを、思い出した。

そうだ。あれは食事の時だった。船が長い間で停泊していたのだが、その時、船の近くを漂流していた水死体を引き上げた、と、みんなが噂していたのだ。実際に引き上げた死体を見たと言う部員もいた。女の死体だったという。そして、その死体が——。

心臓の鼓動が激しくなった。ゾンビが近づいている。目を閉じて確認すると、エントランスの階段を上がり、こちらへ向かって来た。市子は素早く部屋を出ると、ゾンビとは反対側、今度は船の前部へと向かった。エントランス側から来るゾンビには見つからなかったが、客室から外へ出て、階段まで行ったところで思い出した。最初のゾンビは、倉庫と二階を往復している。ここにいても見つかったしまう。幸いゾンビの姿は無かったので、階段を上がり三階へ向うことにした。階段の前には船員専用という看板が立てられてあったが、こうなつては仕方がないので無視した。

三階へ上がった先にはドアがあった。中に入ると、そこは操舵室だった。広い部屋の中央に大きな操縦桿かんが設置され、その周りにたくさん計器類が並んでいる。正面は全面ガラス張りになっており、外の様子が一望できた。前方には夜の闇に溶けるように森が広がっている。その、はるか向こう側の光景に、市子は息を飲んだ。そこには、山の頂上に大きな鉄塔が建っているのだが、その先端が、雨雲の中にぽつかりと空いた赤い輪の中に、飲み込まれるように消えているのである。鉄塔の周囲の雨雲もその赤い輪に次々と吸い込まれている。それはまるで、空に大きな口を開けたモンスターがいて、この世界を丸ごと飲み込もうとしているかのような光景だった。もし、あれに人が飲み込まれたら、いったいどうなるのだろうか？ そんなことを考えてしまう。ぶんぶんと首を振り、考えを振り払った。怖いことを考えてはいけない。それよりも、今はあの女の娘を探さなければ。視界を覗き見る能力で見た、ただ一人ゾンビではなかった女の娘の視点を思い出す。あれは恐らく、船の前部甲板だ。なら、ここから見るこ

できるはずだ。市子はガラスに張りつくようにして外を見た。

◇

前部甲板には、赤いカーデイガンと白いプリーツスカート姿の少女がいた。ここからでは顔はよく見えないが、ノリコや他の部員なら、制服かジャージを着ているはずだ。他の乗客だろうか。彼女以外に人影は見えないが、少女は何かから逃げるように甲板を走っている。甲板にゾンビの姿は無い。……いや、よく見ると、煙のように黒くもやもやとしたものが少女に向かっていった。あれも人を襲うのだろうか？ 知らない娘だと思うけど、助けなきや。

市子は能力を使いゾンビの様子を探る。幸い階段近くにはいなかったのので、すぐに操舵室を出て階段を下り、一階の扉から前部甲板へ出た。

雨が激しく降る甲板に、その少女は立っていた。歳は市子より少し上、恐らく二十歳前後だろう。生まれて一度も陽の光を浴びたことがないような白い肌をしていた。周囲を見回す市子。さつき操舵室から見た黒いもやもやは、どこへ行ったのか、もういなかった。

ゾンビだらけの船内で、ようやく会えたまとも人間。市子は笑顔を浮かべた。赤いカーデイガンの少女も、同じように笑う——はずだった。

だが、市子を見た少女は、不快そうに顔を歪めた。

「……あなた、何者？」

低く冷たい声で言う。そこには、あからさまな敵意が込められていた。

「え……何者って……」まさか敵意を向けられるとは思っていなかった市子は、戸惑いながら答える。「あたしは、亀石野中学テニス部の、矢倉市子だけど……」

「何者か？ って訊いてるの」さらに低い声になる少女。「あたしたちとは違うよね？ 何が目的なの？」

怖い顔で詰め寄る少女。あたしたちと違う？ 何が目的？ 少女

がなにを言っているのか、市子には判らない。だから、正直に言った。「ごめん、あなたが言ってること、よくわかんない——」  
その瞬間。

——あなたが言ってること、よくわかんない。

記憶がよみがえった。

黒いぼろきれをまとった女。この船に乗ってはだめ。食堂のカレーライス。水死体。救護室。化物。先生。襲われるみんな。化物。中島君。化物。黒いぼろきれをまとった女。ノリコ。化物。化物。化物。化物。そして、目の前の少女と、同じ顔。

市子は、怯えた表情で少女を見る。「まさか……生きていたの……？」

少女の顔が、さらに歪んだ。

「あなた、危険ね。早めに排除しておいた方がいいかも」

少女が近づいてきて。

そして、両手で、市子の首を掴んだ。

第二十話 『違和感』 喜代田章子 夜見島／崩谷

0：40：38 終了条件2

親友の死の真相を探るため夜見島へとやってきた占い師・喜代田章子は、巨大な赤い津波に飲み込まれた後、謎のアリクイ像がある公園のそばで目を覚ました。その際、強烈な頭痛と共に、他人の視界を覗き見る能力と、夜見島の知識が次々と溢れ出す新スキルを取得する。『視界ジャック』・『夜見島ガイド』と名付けた章子は、さっそくスキルを発動し、離れ離れになってしまった連れのリーゼント・阿部倉司を探すことにした。

◇

阿部は、敷地内を囲むフェンスに絡みついて実っていた果実をもちで食べていた。章子の新スキル・夜見島ガイドが発動し、その果実はこの島にのみ自生する夜見アケビだということが判った。通常のアケビよりも酸味と甘みが濃厚で非常に美味だが、時に腹痛・下痢・幻覚・幻聴などの症状を引き起こす禁断の果実である。あーあ、こりや楽園追放だな。などと考えていると、阿部は不意に顔を上げ、周囲を見回し始めた。遠くから、犬の鳴き声が聞こえてくるのだ。阿部は泣き声が聞こえてくる方へ歩き、近くの出入口から外へ出た。おいおい待て待て。なるべく動くなっただろう。という章子の声は阿部には届かない。阿部が離れることに映像は不鮮明になり、やがて砂嵐のノイズとなった。どうやら視界ジャックの能力には有効距離があるらしい。

視界ジャックをやめる章子。しょうがないヤツだな。放っておくわけにもいかないから、追いかけるかなければならない。夜見島ガイドの能力により、この崩谷地区の地形は判っている。阿部が出ていったのは団地の北東側、瓜生ヶ森方面へ続く道だ。章子はそちらの方へ向かう。路上に放置されている軽トラックのそばを通り、口棟・イ棟と並

んだ団地の南側の道を進んで角を曲がって北へ向かい、少し進んだところで足を止めた。急に心臓の鼓動が激しくなったのだ。数百メートル歩いたくらいで息切れするほど歳は取っていないはずだ。何か警告しているのか？ そう思った章子は、視界ジャックの能力を使い、前方を確認する。思った通り、さつき阿部が出ていった出入口の前に、大きなライフルを持った屍人が立っていた。あのまま進んではたらハチの巣にされるところだった。いったん戻り団地の陰に身を隠すと、鼓動は治まった。これも新スキルだろうか？ アラートと名付けよう。どんどん新しいスキルを取得している。こりや先が楽しみだ。

……などのんきに言ってる場合ではない。どこから持ってきたのかは判らないが、ライフルを持った屍人が出口を見張っている。視界ジャックで確認すると、ライフル屍人は注意深く周囲を確認し、その場から動こうとはしない。武器を持っていない章子に倒せるとは思えない。どこかで武器を調達するとしても、あんな大きなライフル相手では、チェーンガンやロケットランチャーでもないかぎり勝ち目はないだろう。ここは素直に諦めた方がよさそうだ。幸い出口はこだけでない。南東に行けば、瀬礼洲という地域へ向かう道がある。視界ジャックの能力で確認すると、そっちの方向に屍人はいなかった。よし、行ってみよう。団地の南東へ向かう章子。すぐに出口を見つけたが、残念ながらフェンス製の扉は閉ざされ、門が掛けられていた。鍵は掛けられていないので外せば開くのだが、長年風雨にさらされていたせいも、さび付いてビクともしない。恐らく潤滑油程度ではどうにもならないほど固い。どうすればいいだろうか？ さらに調べてみると、フェンス扉の蝶番もかなり錆びついており、衝撃を与えれば壊れそうだった。しかし、章子の華奢な身体では、揺すろうが体当たりしようが壊すことはできなかった。どうにかならないものか。考え、さつきのアクリイ公園のそばに軽トラックが停められているのを思い出した。そばを通ったときにキーが挿しっぱなしだったのは確認している。あの軽トラと門をロープか何かでつないで引っ張れば、恐らく壊れるだろう。これで問題解決だ。そう思って軽トラを取

りに行こうとしたら、新たな問題が発生した。門から少し離れた場所前に、車止めのポールが立てられてあるのだ。これでは門の前まで軽トラで行くことができない。車止めは鍵を使って外すことができるようだが、もちろん章子は鍵など持っていないしどこにあるか判らない。まずはこの車止めをどうにかしなければいけないようだ。

よし。ここは、使い慣れた従来スキルの出番だな。

章子は車止めポールに手をかざし、そこに残っている残留思念を探った。人や物の過去を見る能力・過去視である。運よく、すぐにそれらしき映像を見つけた。三十代くらいの男がポールを立て、鍵をかけていた。そのそばを、小学校低学年くらいの男の子が駆けて行った。男はその子に向かって、「おい。そろそろ家に帰りなさい」と声をかけた。男の子は片手をあげて「はい」と返事をする、団地の口棟へと入って行った。そこで、過去視は途切れた。

いまの映像を吟味する章子。恐らく鍵をかけていた男は管理人的な人で、男の子はその子供だろう。口棟に入って行ったということ、そこに彼らの部屋があるに違いない。可能性が高いのは101号室だろう。うむ、完璧な推理だ。章子はライフル屍人に見つかからないように注意しつつその場を離れ、入口から口棟へと入った。すぐ左側が101号室だった。玄関を過去視すると、さっきの男の子が中へ入る映像が見えた。この部屋で間違いなさそうだ。過去視をやめ、章子も中へ入ろうとしたが、鍵がかかっていて開かなかった。まさか部屋の鍵まで探さないといけないのか？ フェンスの出入口を開けるために車を探し、車を使うために車止めの鍵を探し、車止めの鍵を探すために部屋の鍵を探したんじや、謎解きとしてはめんどくさすぎだろ。何か方法は無いものか？ 周囲を見回すと、トイレの換気窓が開いているのに気がついた。あそこから入れないだろうか？ 章子は何とかよじ登って頭、そして肩を入れた。お？ 行けそうぞ？ そのまま胴まではすんなり抜けたが。

がぼり、と、見事にお尻がハマった。ヤバイ。中国人みたいなことをやらかしてしまった。このまま余生を過ごすなんてとんでもないぞ。などと言ってる場合じゃない。アラートのスキルが発動してい



る。屍人が迫っているようだ。レスキュー隊を呼ばれると一生の恥だ。ふんぬ！ と、思いつきり力を入れると、ズボリと抜けた。危うく便器の中に落ちてウ○コ屍人となるところだったが、なんとか身をひるがえし着地に成功する。うむ、うまくいった。屍人にも見つからなかったし、まだウンには見放されていないようだ。

トイレを出ると台所で、その奥にリビングと寝室がある。決して広くはないが、一本の鍵を探すにはかなり時間がかかりそうだ。またまた過去視の出番だ。章子はまず台所を過去視してみた。

見つかったのは、さっきの管理人と思われる男の人が、流し台の引き出しや食器入れの中を見て何か探している映像だった。そこへ、玄関の扉が開き、買い物かごを下げた女の人が入って来る。恐らく奥さんだろう。奥さんは買い物かごをテーブルの上に置くと。

「ちよつとあなた、聞いた？ 灯台のヒューズが盗まれて、動かないらしいわよ」

旦那さんに向かって言う。

旦那さんは手を止めた。「灯台のヒューズ？ そんなものを盗んで、どうするんだ？」

「判らないけど、それが原因で灯台が使えなくなったから、しばらくの間、夜は船の出入りを控えるそうよ？」

「そうか。まあ、俺らには関係ない話だ。それより、車止めの鍵を知らないか？」

「車止めの鍵？ それなら、いつものところに……あら？ 変ねえ？

朝はちゃんとあったのに。また、あの子がイタズラしたのかしら……？」

過去視はそこで途切れた。あの子のイタズラ……あの男の子が隠したのだろうか？ そうなると厄介だな。まあ、とりあえず子供部屋を探してみよう。といつてもリビングと寝室しかないアパートだ。親子三人仲良く寝室で寝ていたに違いない。章子は寝室へ行き、押し入れを開けた。中にはおもちゃがたくさん入った段ボール箱があった。ここが怪しい。箱の中を探してみる。光線銃や怪獣のソフビ人形（怪獣でも人形と呼ぶのかは知らないけど）に混じって、チラシの

裏に書かれた手書きの地図が出てきた。つたない子供の字で、こうしや、やみがめのどうぞう、しつぽからまえ3ほ、ひだり5ほ、みぎ2ほ、と書いてある。宝の地図だろうか？ まさか、ここに車止めの鍵が？ 夜見島にある学校は、島の南西部、鳩の形で例えると目の部分にある。そこまで取りに行けということだろうか？ そもそもこの崩谷から脱出するために鍵を探しているのに、その鍵が崩谷の外にあるんじゃない。これは関係なさそう。地図を投げ捨て、さらにおもちや箱を探す。今度は水色のロボットのおもちやを見つけた。立方体の胴体に立方体の頭を取りつけ、胴体にはテレビのようなモニターと、マジックハンドのような輪っかの手、そして短い脚、頭にはアンテナが立ち、まん丸の目と細長い長方形の口がある。昭和中期のブリキのロボットのようなおもちやだ。

そのとき、心の奥底から。

——ボタンを押すと、頭が開いて動物が吠える。

という思いが湧きあがっていた。新スキル・夜見島ガイドの能力が発動したようだ。どうやら島の歴史以外にも詳しいようだ。どれどれ。章子はロボットの胸の下の方にボタンがあるのを見つけ、押してみた。すると、パカッと頭が左右に割れ、中からパンダの頭が出てきて、ぎやおー、と、ノイズまみれの音で吠えた。

……だからなんだよ。こんなおもちやを、当時の子供は喜んだのだろうか？ 昭和のセンスはわからんな。まあ、あたしも昭和生まれなんだけどさ。というか今も昭和だろ。なに言ってるんだ、あたし。

などと考えていると、不意に。

——脩、ちよつとこれ、貸してくれる？

胸の奥底から、そんな言葉が湧きあがってきた。そうだ。あの時あたし、ロボットのおもちやを借りたんだ。形は今持っているものと同じだが、色は緑で、中の動物はパンダではなくクマだった。そして、背中のふたを開け、電池を取り出し、ラジオを……。

……。

あの時っていつだよ。あたし、なに言ってるんだ。新スキルを覚えて何か混乱しているな。まあ、気にしないでおこう。それより車止めの

鍵だ。

章子はロボットのおもちゃを裏返す。背中に電池ボックスの蓋があったので開けてみた。すると、中には電池ではなく鍵が入っていた。恐らく車止めの鍵で間違いないだろう。これで、軽トラックを出入口のところまで乗り付けることができる。あとは、扉を引つ張るためのロープのようなものを探さなければ。この調子で行けばたぶんここにあるだろう。さらに押入れを探る。すると、奥から古いフィルム式のカメラが出てきた。そう言えば、せっかく夜見島に来たのに写真のひとつも撮ってないな。まあ、観光に来たわけではないから別に必要ないのだけど、なぜだろう？ そのカメラを見ていると、章子は無性に持つて行きたくなつた。こういった危機的状況では、道端の石碑を倒したり、手ぬぐいを濡らして冷凍庫に入れて凍らせたりといった訳の判らない行動を、なぜだか無性にやりたくなるものだ。そういった場合、その衝動には素直に従った方がいいことを、章子は偉大なる先人の知恵で知っていた。なので、章子はカメラを持つていくことにした。

さらに探してみる。奥の奥から電気の延長コードが出てきた。リール式のもので、長さは十メートル以上ありそうだ。切断すれば使えるかもしれないが、車に取り付けて扉を引つ張るには強度に問題がありそうだ。これではコードの方がちぎれてしまうだろう。もっと適したものはないだろうか？ さらに探ると、奥の奥の奥からワイヤーロープが出てきた。長さは三メートルほどで強度も充分。よし。これで必要な物はそろつた。

章子は玄関の内鍵を開けて外に出ると、車止めのところへ戻つた。まずは鍵を外して車止めを取り、続いて公園の近くへ戻つて軽トラックに乗り込んだ。章子はペーパードライバーなので慎重に運転し、南東側の出入口まで車を移動させる。そしてワイヤーロープをフェンス扉と軽トラのバンパーに取りつけ、軽トラで引つ張つた。狙い通り、扉は簡単に壊れた。よし。これで通ることができる。

だが、その扉は思っていたよりも横幅が狭く、軽トラックでは通り抜けることができなかつた。ここまで苦勞して開けたのだから別の

道を探すのは勘弁してほしい。まあ、運転技術には自信がないし、途中で事故ったらシャレにならないので、車は置いていくことにした。章子は門をくぐって外に出た。

この道を進んだ先は瀬礼洲という地域だ。森が広がるばかりで特に何も無い地域だが、そこから北へ進めば瓜生ヶ森がある。運が良ければ阿部にも会えるだろう。

章子は、瀬礼洲方面へと向かった。

第二十一話 『闖入者』 喜代田章子 東京／夢魅の館  
— 29 : 04 : 06

その日、占い師の喜代田章子は、店内のテーブルに肘をつき、ぼーっとテレビを見ていた。時刻は夜七時前。閉店時間はまだだが、店内に客はいない。と言うより、章子の店は完全予約制で、今日の予約は一件も入っていないかった。こういう日は予約が入るのを待ちながら、店のホームページを更新したり、顧客名簿を整理したり、特に懇意にしている客に連絡して世間話をしつつ様子を聞いたりするのだが、その日はどうもそんな気分ではなかった。今日は何もせず、このまま閉店までぼーっとしてよう。

近所の主婦から政界の重鎮まで幅広く顧客を抱える章子だが、最近では今日のような予約の無い日が増えてきているようにも思う。こういう日は予約以外のお客さんも受け入れた方が良さだろうか？ しかし、繁華街から離れた雑居ビルの五階にあるようなお店に、飛び入りの客がじゃんじゃん来るとは思えない。予約が無い日はこちらから出向いてみるか。もちろん、道端に机を置いて通りすがりの人を占うような時代ではない。繁華街には、ビルのワンフロアに占い店ばかりが集まった『占いの館』というのがあり、章子にも何度か出店してみないかという誘いが来ている。それを利用するのもありだろう。

などと考えていたら、テレビの時報が七時を告げ、番組はニュースになった。章子はクイズ番組に変えようとしてリモコンを取ったが、その手が止まる。ニュースでは、アパートで女性が殺害され、犯人が指名手配されたことを報じていた。普通ならば別段気にするほどのニュースではない。しかし、それが自分に馴染みの深い地区で起こったもので、さらに、被害者及び指名手配犯のどちらもよく知る人物だったから、章子はリモコンを落として驚いた。

ニュースでは、年配のキャスターが淡々とした口調で原稿を読み上げた後、事件現場の映像へと切り替わった。そこは、章子がよく知るアパートの前。若い女性レポーターが少々早口で事件の詳細を伝え

る。事件があつたのは東京都新宿区にあるアパートの一室。そこで、女性の遺体が見つかった。遺体は頭部を鈍器のようなもので何度も殴られており、顔の判別もできないほどだった。警察は、遺体をこの部屋に住む飲食店勤務の多河柳子と断定。また、この部屋で同棲している無職の男・阿部倉司を容疑者と断定し、行方を捜している、とのことだった。画面に映し出された被害者と容疑者の写真は、まぎれもなく章子がよく知る二人だった。

多川柳子は章子の親友だ。近所にある飲食店で働いており、そこに通ううちに仲良くなったのだ。最近、章子は柳子から相談を受けていた。今の生活をこのまま続けていて良いのか判らない、という。柳子にはアパートで同棲している阿部倉司というヒモ男がおり、彼との生活のことを言っているのだと思つた章子は、即刻別れるようアドバイスをしたのだ。その矢先の出来事。もしかしたら、柳子が阿部に別れ話を切り出した結果、このような悲劇が起こつたのかもしれない。

カランコロン、とベルが鳴り、ドアが開いた。客か？ 今日はず約は入っていないし、たとえ入っていたとしても、とても仕事をする気にはなれない。断ろうとしたら。

「騒ぐな！ 静かにしろ！ 大きな声を出したら、ぶつ殺すぞ！」

黒のデニムジャケットにリーゼントの男が、両手で持ったナイフを前に突き出して叫んだ。今、テレビで指名手配されたと言つていた柳子の同棲相手・阿部倉司だった。

「あんた、柳子の——」

と、章子が言いかけたら。

「騒ぐなっつてんだろ！ ぶつ殺されてえのか！ 静かにしろ！」

声を上げる阿部。かなり興奮している。これは、ヘタなことをするとどんな行動に出るか判らない。

「判った。静かにするから、落ち着いて」

章子は両手を前に出して阿部を落ち着かせようとするが。

「喋るんじゃないねえ！ その口切り刻むぞ！ 俺はやるといったらやる男だぞ！」

阿部は話を聞かず、さらにナイフを突き出す。

「判った判った。喋らないから、とにかく落ち着いて」

「うるせえ！ 俺は柳子をやっちゃいねえ！ いや！ 柳子は生きてんだ！ 俺はあいつが出かけるのを見たんだ!!」

「え……？ それってどういう……」

「うるせえつってんだろうが！ これ以上騒ぐなら、ホントにぶっ殺すぞー」

「騒がないってば。何があったの？ 話を聞くから、とにかく落ち着いて」

「うるせえんだよ！ 誰も信用できねえ！ 警察は話を聞こうともしねえ！ とにかく騒ぐな！ もしちよつとでも騒いだら、ホントのホントにぶっ殺して——」

章子は拳を握りしめると、思いつき振りかぶり、がっん！ と、阿部の頭をグーで殴った。騒いでいるのはお前だ。まったく……ひと気の無い雑居ビルとはいえ、ドアは開けっ放し。誰かに聞かれなかっただろうな。章子はドアから頭を出して外の様子を窺う。幸い廊下には誰もいなかった。章子はドアに下げてある札をくるつと回して『OPEN』から『CLOSE』に変えると、ドアを閉めて鍵をかけた。

「——んで、柳子が死んでないって、どういうこと？」

テーブルを挟んで座った二人。章子は阿部から取り上げたナイフをいじりながら訊いた。ちなみにナイフは先端を押すと引っ込むタイプのおもちゃである。

阿部は、章子が淹れたお茶をずすとすすると、さつきとは一転、落ち着いた口調で話し始めた。それによると、今日の夕方、バイト先から帰宅した阿部は、アパートの前で柳子とすれ違ったそうだ。声をかけたが無視されたのでそのまま部屋に入ったら、そこに顔が潰れた死体があったのだという。

「それを警察に説明しても、信じてくれねーんだよ」

「まあ、そんな与太話を信じろって言われてもねえ」

通報したのは、そのときまたま部屋の前を通りかかった隣の部屋の主婦だった。恐らく阿部を犯人と決め付け、あることないこと言ったのだろう。まあ、阿部と柳子は常日頃から言い争いが絶えなかったというし、血まみれの死体の前にこんなガラの悪い男が立っていたら、誰でもこいつが犯人だと思っただろう。

「なんだよ。オメーも俺の言うことを信じねーのかよ。柳子は顔の判別ができないくらい殴られてたんだぞ？　顔が潰れてたり首が無い死体は入れ替わりを疑えっていうのがセオリーだよ」

「……あんた、ヤンキーのくせに変なこと知ってるのね」

「それはカンケーねーだよ。ヤンキーだって推理小説くらい読む」

「まあ、本とかドラマとかじゃそうだけだよ。でも、警察も、柳子の部屋で女が死んでたから柳子だ、って、安易に決めた訳じゃないと思うわよ？　テレビとかで大々的に発表したからには、指紋とか、DNA鑑定とか、そういうので断定したんだと思うけど」

「そんなのはアテにならない。とにかくオレは柳子が出かけるのを見た。なら、死んでいたのは柳子じゃない。そう考えるのが自然だ」

「あんたの言うことの方がよっぽどアテにならないわ」

大きくため息をついた後、章子は「まあいいわ。とりあえず、手、出して」と言った。

「手？　そんなもんどうすんだよ？　まさか、占いでもしようつてのわ？」

「そうよ？　あたしは占い師。大事なことは、全て占いで決めるの」

「ケツ。そんなのがアテになるかよ」

と言いつつ、右手を差し出す阿部。章子は阿部の手を取り、手相を見るフリをして過去視をした。阿部の過去が見える。それによると、確かに彼の言う通りだった。

「……まあ、ウソはついてないみたいね」

「信用してもらえてありがたいが、手相でそんなの判るのかよ」

「判るわよ。あたしの占いは一〇〇パーセント当たるの」章子は阿部の手を離すと、腕を組み、うーんと唸った。「……でも、警察は信用しないでしょうね。はて、どうしたものか」



「どうすればいい？」身を乗り出す阿部。

章子は片手を開いて阿部に向けた。「相談料は五千円ね」

「……………」

「……………」

「金取るのかよ」

「当然でしょ。ここは占いのお店だもん」

「ちっ、しゃーねーな」阿部はジャケットの内ポケットに手を入れた。

「払うんだ」

「まあ、どうしていいか判らず途方に暮れてたところだからな。五千円で何かアドバイスしてくれるなら安いもんだ」

阿部が内ポケットから財布を取り出したとき、ごとりと、重い音を立て、床に何か落ちた。それは、血まみれのネイルハンマーだった。

「……………」

「……………」

ケータイを取り出す章子。「もしもし、警察ですか」

「違う違う。これはオレんじやねーよ。部屋に落ちてたんだ。犯人が持ち込んだものだと思うんだが」

章子はケータイを閉じた。「なんでそんなもの持ってくるのよ。警察に捕まったら、ますます立場が悪くなるでしょうが」

「実は、オレにもよくわからん。とにかく死体のそばにそれが落ちていたのを見て、持って行かなきゃと思ったんだ。まあ、人は危機的状況に陥ると、倉庫にある酒瓶を持って行ったり、通りすがりの用水路の水門を開けたり、そういう意味不明なことを無性にやりたくなるものだろ？ んで、そういうワケわからん行動は、どこかで誰かの役に立っつてというのが、偉大なる先人様の知恵だ」

「あんたの言ってることの方がよくわからん」

と、言いつつも、実際、阿部がネイルハンマーを持ってきたのは幸いだった。これを過去視すれば、何か判るかもしれない。章子はネイルハンマーを過去視してみた。

「……………夜見島……………」

読み取れたのはそれだけだった。パソコンを起動し、インターネッ

トで夜見島を検索する。東京から少し離れた四開地方の中迂半島沖にある小さな島だった。

「その島に、何かあるのか？」横からパソコンの画面をのぞいていた阿部が訊いた。

「そうね。何かあるのかまでは判らないけど、ここに行けば、手掛かりが見つかると思うわ」

阿部は、そうか、と言って立ち上がった。「じゃあ、オレ、ちよつくらその島に行ってくるわ」

まるで近所のスーパーのタイムセールにでも行くような調子の阿部に、章子はあきれてため息をついた。「あんたねえ。状況判ってるの？」

「判ってるさ。オレは指名手配され、警察に追われる身。だからと言つて、ただ隠れてるわけにはいかないだろ。まあ、あんまり人目につかないよう、気を付けて行くさ」

「そうじゃなくて——」章子は少しためらったが、黙っていても阿部のためにもならないので、言うことにした。「あなたの言うことは信じるわ。あなたは誰も殺していないし、部屋から柳子が出てくるのを見た」

「そうだけど、なんだよ、改まって」

「でも、あなたの部屋で誰かが死んでいたのは、間違いない事実なの」

「……そうだな」

「じゃあ、誰がその人を殺したの？」

「……………」

「……………」

沈黙する二人。阿部とて、その可能性を考えていなかったわけではないだろう。

阿部は、帰宅する直前、柳子が部屋から出て行くのを見ている。

そして部屋に戻ると、何者かの死体があった。

状況から考えると、当然、柳子も死体を見ていることになる。

だが、柳子は何も言わず、その場を立ち去ったのだ。

この状況から、自然と、ひとつの答えが導き出される。

阿部は、ふん、と、鼻を鳴らした。「柳子が犯人だつて言うのか？  
バカバカしい。柳子に人殺しなんて、できるわけないだろ」

「そりゃあ、あたしもそう思うけどさ」

「死んでいたのが誰なのかは判らないし、部屋で何があったのかもわからん。オレが言えるのは、柳子は犯人じゃないってことだけだ。ただ、柳子が何か厄介なことに巻き込まれているのは確かだ。なら、オレは全力で柳子を探す。あいつの力になってやれるのは、オレだけだ」

「……………」

じつと、阿部の目を見る章子。さっきまでのどこか緊張感のない雰囲気は、もう無かった。真剣に、柳子のことを思っている目。

「…………ふーん」

「なんだよ？」

「あんた、ヤンキーのくせに、男らしいこと言うのね」

「アホか。ヤンキーだから男らしいんだろ」

「…………そうね」

章子は小さく笑う。これまでこの男にはあまり良い印象を持っていなかった（と言うよりは柳子のヒモでクズ男だと思っていた）のだが、その考えは少々改めなければいけないかもしれない。見た目だけで人を判断するようでは、占い師として失格だ。これは、大いに反省しなければ。

章子は、ぱん、と手を叩いた。「よし。じゃあ、この夜見島に行ってみるわよ」

「行ってみるって、お前も一緒に来てくれるのか？」

「ええ。親友が事件に巻き込まれてるのなら、ほっとけないでしょ」

「助かるぜ」

章子は指を三本立て阿部に向けた。「出張費は三万円ね」

「……………」

「……………」

「…………しゃーねーな」と、財布を取り出す阿部。

「払うんだ」

「ぎつぎパチンコで大勝ちしたからな。逃亡資金にはしばらく困らん」

逃亡者がパチンコなんかするなよ、と思いつつ、阿部から三万五千円を受け取った章子。こうして、二人は、夜見島へ向かうことになったのである。

☆

——それにしても。

夜見島へと向かう道中で、章子は考える。

ネイルハンマーを過去視して、『夜見島』というワードしか読み取れないのは、いったいどういうことだろう？

過去視は、物体に残った残留思念を読み取るものだ、と、章子は考えている。その残留思念には強弱があり、強い思念ほどはつきりと読み取ることができ、弱い思念は読み取ることができない。

だから、ネイルハンマーを過去視して、『夜見島』というワードしか読み取れなかったということは、それ以外の思念が弱いということである。

そんなことがあるだろうか？

このネイルハンマーは、人を一人殺すのに使われたものだ。

通常、殺人を行う者には強い殺意がある。そして、憎しみや恨みといった、殺意に至るまでの感情もある。

それらの感情は、殺害を実行する際に最も強くなる。当然、使用された凶器に、その時の感情は強く刻み込まれるはずだ。

また、被害者の感情も同じだ。被害者にも、殺される直前の恐怖、殴られている時の痛み、死を迎える直前の悲しみ、殺人者への恨み、など、多くの感情がある。それらも、使用された凶器に強く刻み込まれるはずだ。

まして、今回の事件は、被害者の顔が判別できないほどであったという。小さなネイルハンマーでそこまで行うには、何度も殴りつけな

なければいけない。何度も、何度も、数えきれないほど。  
なのに。

このネイルハンマーには、その時の思念は、何ひとつ残っていない。  
殺人者の殺意も、憎しみも、悲しみも。

被害者の恐怖も、痛みも、悲しみも、恨みも。

何ひとつ、このハンマーには残っていないのだ。

それはつまり。

殺した側も、殺された側も、何の感情も無かった、ということになる。

殺人者は、殺意も憎しみも恨みも無く、ただハンマーで殴り続けたことになる。

被害者は、恐怖も悲しみも恨みも無く、ただハンマーで殴られ続けたことになる。

この殺人には、人の感情が一切動いていないことになる。

そんなことがあるだろうか？

人を殺して、そして殺されて、何の感情も無いなんてことが、あるだろうか？

それは、本当に人なのか。

何の感情もなく人を殺し、何の感情もなく人に殺される。

そんな存在が、はたして人と言えるのか。

あるいは。

まったく別の考え方をすることもできる。

何の感情もなく人を殺し、何の感情も無く人に殺された、と、考えるよりも。

殺人者は強い殺意を持って人を殺し、被害者は強い恐怖とともに死んだが、その感情が、ハンマーに残らなかったと考えることもできる。

つまり。

ハンマーに残った残留思念が、誰かの手によって意図的に消去されていたとしたら。

可能性としては、その方が高いように思う。このネイルハンマーには、夜見島というワード以外何も残っていない。そう。殺人の時の記憶だけでなく、それ以前の記憶も残っていないのだ。ハンマーはかなり使い古されたものであり、凶器となる前は誰かが普通に使っていたと思われる。それらの記憶さえ一切残っていないのは、明らかにおかしい。たとえ新品であったとしても、販売店に陳列されていた頃の記憶、販売店まで輸送されるときの記憶、工場で梱包されるときの記憶、工場で生産されているときの記憶、さらにそれよりも前、鉄や木などの素材だった頃の記憶も、残るものなのだ。

しかし、このネイルハンマーには、それらの記憶さえ一切残っていない。誰かに記憶を消去されたと考えるのは、人ならざる者が人ならざる者を殺したと考えるよりも、現実味があるように思う。

ただ。

そう考えたとしても、結局のところ、結論は同じになる。

物に残った残留思念を消去する——そんなことができる存在が、はたして人と言えるのか。

物の残留思念を消去するのは、人の記憶を消すのと同じだ。他人が意図的にできることではない。

そんなことができる存在が、はたして人と言えるのだろうか。

要するに。

仮に、この殺人事件が、何の感情もなく行われたものだとしても。

仮に、このハンマーに残る記憶が、意図的に消去されたものだとしても。

どちらにしても、そこには、人ならざる者の力がはたらいていることになるのだ。

そして。

そもそも、物に残った記憶を読み取るという力を持った自分自身

も、はたして人と言えるのだろうか。

……………。

まあ、ここでごちやごちや考えても判らん。とにかくその夜見島とやらに行ってみるしかないだろう。章子はそう思った。

つまり。

章子は、これ以上考えるのが面倒になったのである。

第二十二話 『不協和』 永井頼人 ブライトウイン  
／左舷通路 2：34：02

島を丸ごと飲み込むほどの赤い津波に襲われ意識を失った永井頼人は、自衛隊の上官・三沢岳明にたたき起こされ、現在、大型のフェリーの中にいた。と、言っても、海へ出たわけではない。どういう理屈なのか永井にはさっぱり判らないのだが、いま彼がいるフェリーは、海でも川でも湖でもなく、森の中に存在しているのだ。津波で運ばれてきた、というわけでもなさそうだった。永井が意識を取り戻した時、周囲には津波の形跡などまるで無かった。夢でも見たのだろうか……そう思わずにはいられなかった。この数時間、永井の身の周りで起こっていることはあまりにも現実性を欠いていた。ヘリが墜落し、尊敬する先輩の沖田が死に、その上、死体が動き出して襲い掛かってくる。さらに、意識を取り戻した後は、他人の視界を覗き見るという能力まで使えるようになっていた。三沢によれば、これは『幻視』という特殊な能力らしい。もはや、永井の思考は到底追いつかなかつた。夢でなければ説明がつかない。だから。

「……自分、いまだに信じられないんです」

フェリーの左舷甲板から前部へ移動する途中で、永井は先行する三沢の背中に向かって言った。「死体がよみがえって襲ってきたり、大きな津波に飲み込まれたのに無事だったり、他人の視界を覗き見したり、この船も、なんでこんな所にあるのか……もう、なにがなんだか判らなくて、全部夢なんじゃないかって気がします」

三沢は――。

◇

先を歩く三沢は足を止め、振り返った。

「……ほっぺたをつねってやろうか？ 痛くなければ夢、痛ければ現実。簡単な判別方法だ」



そう言った後、永井に向けて手を伸ばす。

永井は嫌がつて顔を引いた。「やめてくださいよ。三佐の馬鹿力でつねられたら、肉が千切れちゃいます」

三沢は一度小さく笑ったが、すぐに表情を引き締めた。「何が起こっているのかは俺にも判らん。だが、夢なんかじゃないことは確かだ。受け入れるしかない。じゃないと——」

突然、三沢は永井に小銃を向けた。

「——」

とつさにその真意を悟った永井は、その場に伏せた。三沢が引き金を引く。たたん、と、パソコンのキーボードを叩くような軽い音がし、続いて、後方でうめき声が出た。振り向く永井。小さな鎌のようなものを持った屍人が倒れるところだった。

銃口を上げた三沢は、倒れた屍人に冷たい視線を向けた。「……あいつらの仲間入りは、したくはないだろ？」

「——はい」

起き上がる永井。確かに、死体が動いて襲い掛かってくるなど、現実的ではない。しかし、いま周りで起こっていることを全て夢だというのも無理がある。三沢の言う通り、何が起こっているのかは判らないが、確かなことは、襲ってくるヤツらを倒さなければ、こちらがやられるということだ。永井は気を引き締めるため、両手でパンパンと頬を叩いた。三沢はもう一度小さく笑うと、再び先行し、船の前部へと向かった。

左舷甲板から船内へ入ると、正面に前部甲板へ出る扉があり、そのそばには上下階へと続く階段があった。三沢は階段を上がったので、永井は後に続いた。

彼らがこのフェリーを探索しているのは、通信手段の確保が目的だった。この島に上陸して以降、永井らが持っている携帯通信機や、遊園地の電話など、全ての通信機器が使えなかった。まるで、島全体が外部から切り離されてしまったかのようだった。もっとも、今の段階では機械の故障や、通話距離外、通信ケーブルの切断などの可能性も考えられる。他の通信手段も試してみる必要があった。これほど

大きなフェリーなら、かなり高性能な通信機器を積んでいるはずだ。また、船ならば、通信機以外にも連絡を取る手段がある。

三階まで上がるとまた扉があり、そこは操舵室だった。鍵は掛けられていないので中に入る。部屋の中央に木製の大きな舵が置かれ、計器類がたくさんついた機械が並んでいる。三沢はその中から通信機を見つけ、操作した。電源は来ているようだが、返って来るのはノイズばかりだ。やはり繋がらないのかもしれない。永井は通信機を三沢に任せ、部屋内を調べることにした。

前方は一面ガラス張りになっており、正面の様子が見渡せた。窓ガラスのそばには永井の身長ほどもある大きなライトが設置されている。永井はそれを調べることにした。そのライトは、点滅の長短によつて離れた相手と通信するシグナリングライトだ。これを使うことで周辺を航行する船、あるいは港や灯台等に簡単なサインを送ることができるのだ。これも、船では重要な通信手段のひとつだ。ライトは問題なく点灯消灯できた。ただ、船の正面は少し離れた場所に山が広がっているため、船外に光を飛ばしたとしてもその山に阻まれる。ライトは床に固定されており持ち運ぶことはできない。これを使つて島の外へサインを送ることはできそうになかった。他の手段を探してみよう。そう思つて移動しようとしたとき、ふと下を見ると、船の甲板に誰かいるのが見えた。赤いカーデイガンに白いプリーツスカートの少女だった。

「三佐、生存者です！」

永井が言うと、三沢は通信機の捜査を中断し、永井のそばに立つて甲板を見た。そして、わずかに表情を歪めた。

「見覚えがありますね」と、永井は続ける。「あの赤い津波に襲われる直前、森の中にいた少女です。一人のようですね」

永井は甲板内を見回すが、少女以外に人の姿は無かった。あの眼鏡の男——雑誌編集者で、一樹守とかいったらどうか——は、一緒ではないのだろうか？

少女は、なぜか甲板を走り回っていた。急に走り出したかと思うと、突然足を止め、しばらく後退した後、反対側へ走る。かと思うと

また足を止め、右に曲がる。そんなことを繰り返していた。まるでなにかから逃げているようだが、甲板に屍人の姿は無い。……いや、よく見ると、あの蠢く闇がたくさんいて、少女を取り囲んでいた。蠢く闇は強い光を当てると簡単に消滅するが、数が多いと手に負えなくなる。助けなければ。しかし、あまりに数が多く、下りて行く間に襲われてしまうかもしれない。何かないか、と室内を見回して、さっきのシグナリングライトが目に入った。あれを使おう。永井はシグナリングライトのスイッチを入れ、光を甲板へ向けた。何キロメートルも離れた先にサインを送るための光だ。照らされた蠢く闇は一瞬で消滅する。永井は甲板を隅から隅まで照らし、蠢く闇を消滅させていった。そして、あらかた片付け終えたところで、三沢を振り返った。

「三佐。自分、あの娘を保護してきます」

そう言つて、永井は操舵室から出ようとしたが。

「——やめておけ」

三沢がそう言ったので、永井は足を止めた。

三沢は冷たい目で甲板を見下ろしながら続ける。「あれには関わらない方がいい」

「……なぜですか？」永井は訊き返す。

「どうもあの女は匂う。まともな人間じゃないかもしれない」

まともな人間じゃない……確かに、上陸が禁止されている島にいるという時点で、まともではないかもしれない。しかし、船が転覆して偶然流れ着いた、と、連れの男は言っていたし、仮にそれが嘘で、何か悪事に加担——例えば、男を誘惑してこの島に連れて来て、殺して埋める、とか——していたとしても、今この状況下で放っておくことは、国民の安全を守るという自衛隊の使命を放棄したことになる。それは、永井が尊敬する先輩・沖田宏の教えに背くことだ。無論、三沢にもなにか考えがあつたのことなのかもしれない。永井は、この島で三沢と行動をし、彼のことも少しずつ尊敬するようになっていた。だが、それでもまだ沖田以上の存在にはなっていない。

永井は。

「三佐は、船の搜索を続けてください。自分は、やはりあの少女を放つ

ておけません。保護したら、また合流します」

そう告げると、三沢が止めるのも聞かず、操舵室を出た。

階段を使って一階まで下りた永井は、正面の扉から前部甲板へ出た。少女は闇の中、震えながら立っていた。永井に気がつくのと、怯えた表情で後退りする。

「大丈夫、化物じゃないよ」

永井は少女を怖がらせないようになるべく明るい声で言った。小銃を背中に隠し、手を挙げ、敵意が無いことをアピールする。「僕は自衛隊の永井頼人。君を助けに来たんだ」

そう言うのと、少女の顔から怯えが消え、安堵の表情になる。そして、駆け寄ってきて、いきなり永井に抱きついた。

「ちよ……ちよつと……君……？」

いきなりのことに戸惑う永井。一旦離そうとするが、少女はその白く細い腕に似つかわしくない強い力でしがみつく。

「怖かった……ずっと一人で……化物にもいっぱい襲われて……本当に怖かったの……」

確かに、さまざまな戦闘の訓練を受けている永井でさえ戸惑うような状況だ。かよわい少女が一人でいるなど、よほど心細かったに違いない。

「でも、連れの彼はどうしたの？」

「化物に襲われて、あたしをおいて一人で逃げたの。お願い助けて。あたしには、もう頼れる人がいないの」

いくら一般人とはいえ、こんな可愛い娘を放って一人で逃げるとは薄情な男だ。永井は、少女を安心させるため、さらに言う。「大丈夫。僕たちは、逃げたりしないから。一度操舵室へ行こう。僕の上官が、島の外と通信を試みているから、うまくいけば助けを呼べると思う」

少女が喜ぶと思っただけだが、永井の思いに反し、少女は。

「いやっー」

急に永井から離れた。「あたし、あの人と一緒にいたくない！」

そう言えば、森の中で出会った時、少女はライトの光を異常に嫌った。連れの男は、彼女は光が苦手だと言っていたし、そういう病気が

あることは永井も知っている。そんな少女に、三沢は必要以上に光を当てていた。あれでは三沢に悪い印象を持つても仕方がないかもしれない。

「大丈夫。あの人は、見た目は怖いけど、意外といい人なんだ。頼りになるから、一緒にいた方がいいよ」

「いや！ 絶対にいや！」

少女はぐるぐると首を振ってかたくなに拒否する。三佐も随分と嫌われたものだ、と、永井が困っていたら。

びくん、と身体が震え、一瞬、甲板に立つ自分と少女の姿が見えた。同時に、鼓動が激しくなる。まずい。これは、屍人に見つかった合図だ。出入口の方を見ると、赤い着物を着て、頭に大きな髪飾りをいくつも着けた女の屍人がいた。手には、樹木の伐採に使うような大きなのこぎりを持っている。屍人はのこぎりを振り上げると、「ぶわけものおんぬあああ!!」と、呂律の回らない声で叫び、走って襲いかかってきた。

永井は少女を後ろに下げると、小銃を構え、引き金を引いた。身体に数発当てると、屍人はうめき声をあげながら倒れた。着物姿の女が巨大なのこぎりを振り上げるといふ姿は一見恐ろしいではあるが、冷静に対処すれば銃を持つ永井の敵ではない。

永井は少女を振り返った。「大丈夫。あんなヤツ、僕らの敵じゃないよ。三沢三佐……僕の上官は、もつと頼りになる人なんだ。だから、一緒に——」

「いや！ ホントにいやなの!!」少女はまた首を振って嫌がる。そして、永井の手を取り、二の腕に胸を押し付けた。「お願い、頼人。あらしと、二人で逃げて」

「あ……いや……そういうわけには……」

出会ったばかりなのに身体を密着させてきて、永井のことを下の名で呼ぶ……なかなか積極的な娘だ。もちろん、男だから悪い気はしない。

と、また身体が震え、自分たちの姿が見えた。もう一体屍人が来たのかと思ったら、いま倒したばかりの着物女の屍人がよみがえってい

た。屍人は何度倒しても復活するというのは永井もすでに経験済みだが、今までの屍人よりはるかに早い復活だ。

とは言え、所詮銃を持っている永井の敵ではない。永井は冷静に銃を撃ち、立ち上がる前に倒した。

「……特殊なタイプの屍人だわ」

少女が、急に真顔になって言った。「屍人は、死体に屍霊が憑りついたもの。死体に残っている記憶に基づいて行動するんだけど、極めて強い思念を持ったまま死んだ人が屍人になると、他の屍人とは違った行動をすることがあるの。そういう特殊なタイプの屍人は、思念が強いからか、屍霊を引き寄せやすい。だから、復活が早いのに」

「そうなんだ。君、詳しいね」

「百合と呼んで、頼人」少女は甘えるような声で言い、そしてまた、永井の腕に胸を押し当てた。「ここにいたら危ないわ。またすぐに復活する。早く行きましょう」

確かに、銃があれば負けることなどまず無いが、弾には限りがある。無駄撃ちはできない。

「脱出方法があるの。こつちへ来て」

百合に手を引かれ、前部甲板を後にする永井。甲板右側の扉から一旦船内に入り、階段の横を通り抜け、再び扉を開けて外に出る。今度は右舷の甲板だ。

「あれを使うのはどう?」

百合が指さしたのは、甲板に設置されたボートダビットだった。機械式のウインチで救命ボートを下ろすことができるようだ。地上までは十メートル以上あるが、確かにあれを使えば脱出できるだろう。あとは動くかどうかだ。永井はボートダビットを調べてみた。しかし、故障しているのか、ウインチは動かなかった。もちろん、緊急時のために手動でも下ろすことができるのだが、そのためのクランクが取り外しできるタイプで、ボートダビットやその近くを探しても見当たらない。これでは、脱出することはできない。

また身体が震えた。あの着物の屍人が追って来ていた。銃を使い撃退するが、これではキリが無い。

「もうひとつ脱出する方法があるの。こつちよ」

百合に手を引かれる永井。再び前部の出入口から船内へ入ると、今度は階段を下りた。地下一階まで下りるとエレベーターがある。それに乗り、地下三階まで下りた。そこは船の貨物室だった。

「こつちよ」

三つあるコンテナの横を通り抜け、奥まで行くと、壁に亀裂が入っていて、そこから外が見えていた。地面までの高さは二メートルもなく、下は草地だから、飛び降りても平気だろう。

「さあ、頼人。あたしと一緒に行きましょう」

百合は亀裂を潜って外に出ようとする。だが、その亀裂は少し小さい。体格の小さな百合は大丈夫だが、永井は通れそうになかった。それに、やはり三沢の許可なく勝手に行動することはできない。

「ごめん。僕は通れそうにない。百合ちゃんは一旦脱出して、どこか安全な場所に隠れてて。僕も、すぐに上官の人と向かうから」

永井がそう言うと、百合は。

「……判ったわ」

そう言つて、船から脱出した。

一瞬。

百合が、とても不愉快そうな顔をしたように見えた。

——めんどくさいわね、コイツ。

そう言いたげな表情だった。

だが、それは本当に一瞬だったし、恐らく気のせいだろう。そう思った。

永井は貨物室から操舵室へ戻り、三沢と合流した。船の無線は、やはりつながらないらしい。他に通信手段も無く、それ以上船内でやることはなくなつたので、二人も船から脱出した。

脱出後、永井は船の周りを探したが、百合の姿はどこにも無かつた。

第二十三話 『実戦』 永井頼人 夜見島遊園／管理  
小屋 — 1:59:53 終了条件2

夜見島遊園敷地内の最も奥まった場所にある管理人の詰所で、自衛官の三沢岳明は、机の上にある黒電話の受話器を取り、耳に当てた。スピーカー部からは何も聞こえてこない。フックを何度か押ししても同じだった。電話は繋がらない。ため息をつき、受話器を置く三沢。ここだけでなく、公衆電話や、各アトラクションの近くにあるスタッフルーム内の電話など、園内の電話は全て繋がらなかった。それも当然だろう。この夜見島遊園は昭和四十年代に閉園しており、以降は放置されている。加えて、昭和五十一年に夜見島へ電力を供給している海底ケーブルが切断され、今もそのままのはずだ。切断されたケーブルの中には恐らく電話線も含まれているだろう。そうになると、園内だけでなく島全域の電話が繋がらないはずだ。自衛隊基地と連絡を取るには、他の通信手段を探さなければならぬ。

三沢は管理小屋を出た。少し歩くと、中央に大きな花壇跡がある広場に出る。その花壇のそばで、三沢の部下である永井頼人土長が、地面に倒れている沖田宏二等陸曹にすがりつくようにして泣いていた。永井には通信機で本部との連絡を試みるよう命令していたのだが、あの様子では何もせずただ泣いていただけかもしれない。三沢は小さくため息をつくとき、永井のそばに立った。

「——園内の電話は繋がらない。ここが夜見島なら、昭和五十一年に海底ケーブルが切断され、そのままのはずだ。恐らく、どこの電話も同じだろう。通信の方はどうだ」

三沢は園内を探索した結果を告げ、通信機の様子を訊く。しかし、永井は沖田にすがりついたまま泣き続ける。やはり、何もしていなかったようだ。胸の奥から怒りが湧きあがるが、なんとかそれを押しとどめる。三沢は倒れている沖田のそばにしゃがみ、小銃を置いて沖田にライトを当てた。呼吸は完全に止まっている。首筋に触れてみたが脈も無い。目に何度か光を当て外してみたものの、何の反応も



示さなかった。

「——もう死んでるぞ」

静かにそう告げ、三沢は小銃を持って立ち上がった。沖田は自衛官として極めて有能な男だった。惜しい男を亡くしたが、感傷に浸っている場合ではない。「行くぞ」と、冷静に命じる。だが、永井は沖田にすがりついたまま動こうとしない。

「立て」

三沢は永井の後ろ襟を掴み、無理矢理立たせた。「気持ちには判るけどな、これ、ドラマとかじゃねえんだ。急がないと危ないだろ」

だが、それでも永井は泣くのをやめない。三沢が手を離すと、崩れ落ちるようにその場にへたり込んだ。しばらくは使い物にならないかもしれない。

永井頼人は入隊三年目の若手自衛官だ。入隊当初はいかにも「就職・進学先が決まらないのでとりあえず自衛隊に来た」という感じの若造だったが、現在は若手自衛官の中でも頭角を現すほどの優秀な隊員になっている。それは、沖田の指導によるところが大きい。永井も、面倒を見てくれる沖田のことを慕っていた。永井にとって沖田は恩人とも言える存在だろう。そんな人を喪ったのだから、辛いのは仕方がない。

そして、それは三沢も同じだった。

沖田宏は三沢の七歳年下で、後輩というよりは弟のような存在だった。沖田もまた、入隊した頃は永井のような頼りない若造だったが、三沢の指導により成長していったのだ。隊において共に行動した回数は数えきれないが、特に記憶に残っているのは、二年前の土砂災害事件で現地に派遣された時のことだ。災害発生から四日後の早朝、三沢は一人の少女を発見し、沖田と共にヘリで救出したのだ。その災害では多くの村人が死亡・行方不明となっており、三沢たちが救出した少女は数少ない生存者の一人だった。災害現場でのヘリによる救助は様々な困難が付きまとう。その救助は三沢と沖田以外の隊員では不可能だったかもしれないと、今でも賞賛されている。沖田は、三沢にとっても特別な存在だ。彼が死に、辛いのは三沢も同じ、あ

るいは永井以上かもしれない。

だが、それでも。

三沢たちは、ここでただ泣き崩れているわけにはいかないのだ。三沢たちがこの島へ上陸したのは、物資輸送訓練中のヘリトラブルによる不時着が原因だ。不時着とは言っても、生存者は三沢と永井の二人のみ。ほとんど墜落と言つてよい。

その際、ヘリに積んでいた物資を、島にばら撒いてしまった。

訓練とは言え、積んでいた物資は全て本物だ。拳銃・小銃などの銃器類はもちろん、手榴弾や迫撃砲、TMT火薬や着火装置なども積んでいる。

それらの危険物を、かなりの広範囲にばら撒いてしまったのだ。

この夜見島は上陸が禁止されているとはいえ、絶対に人がいないとは言いいられない。実際、怪しげな噂を耳にして好奇心で訪れる者は少なくないと聞く。そういった人物が銃や爆薬を拾った場合、素直に届け出るかは怪しい。最悪の場合、島外へ流出し、反社会的勢力の手に渡ってしまう可能性だってあるのだ。一刻も早く回収しなければならぬが、たつた二人で全てを回収するなど到底不可能だ。まずは応援を要請しなければならぬ。それが、いま自衛官である三沢と永井がやるべきことなのだ。

永井が仲間の死を嘆く気持ちは判る。辛いのは三沢も同じだ。だが、今やるべきことを放棄し、ただ泣いているなど、自衛官失格だ。それでは、死んだ沖田も喜ばないだろう。この国と国民の安全を守る自衛官として、やるべきことをやらなければならない。それが判らない永井は、まだまだ未熟だと言わざるを得ない。三沢は、もう一度大きくため息をついた。

その、三沢と永井のそばを、黒い煙の塊、あるいは蠢く闇が、通り過ぎた。

一瞬、それが何なのか、三沢にも判らなかつた。だが、その蠢く闇が沖田の死体の中に入るように消え、次の瞬間、沖田が起き上がった銃を構えたところで、三沢の脳裏に、二年前の少女の言葉がよぎった。

——村のみんなもいつぱい死んで、しびとになって追いかけて来

た。

二年前の土砂災害の時、三沢たちが救助した少女が言っていたことだ。後で調べたところによると、しかばね屍に人と書いて、屍人。死者がよみがえって人を襲うという、少女が住んでいた地域に伝わる伝承のひとつだった。

「——沖田さん!!」

立ち上がった沖田を見て、永井が嬉しそうな声を上げた。仕方ないだろう。永井が屍人の伝承など知るはずがないし、死者がよみがえって人を襲うなど、物語の中だけの話だと思っていて当然だ。

だが、沖田が銃口を向けたところで、さすがにおかしいと思ったのだろう。

「どうしたんですか、沖田さん？ しつかりして——」

——ください、という前に、沖田が引き金を引いた。銃声が響く。幸い銃弾は永井にも三沢にも当たらなかつたが、沖田が二人に対して攻撃したことは間違いない。

だが、それでも永井は。

「……沖田さん、冗談はやめてくださいよ」

そう言つて、笑おうとする。小さく舌打ちをする三沢。冗談で銃を撃つ自衛官がどこにいる。仮に沖田が持つ銃が空砲やおもちやだつたとしても、それが冗談で済むはずがない。死体が動き始めたことが信じられないのは無理もないが、銃で攻撃されていながらそれを冗談だと思うのは、あまりにも危機意識が欠如している。それはもはや現実逃避と言つてよかつた。

もう一度銃声がして、永井がかぶっていたヘルメットがはじけ飛んだ。沖田が再び銃を撃ち、永井のヘルメットを掠めたのだ。それだけで大型のハンマーで殴られたような衝撃だ。頭を押さえ、叫ぶ永井。もつとも、所詮はヘルメット越しの衝撃なので、耐えられないほどではないはずだ。そう冷静に判断した三沢は、小銃を構え、沖田へ向けた。しかし、引き金を引こうとして、その指を止めた。沖田は、銃の弾倉を外し、取り替えようとしている。沖田が持っている小銃の弾の装填数は三十発で、二発撃つただけで取り換える必要はない。そのう

え手つきはあまりにもぎこちなく、弾倉を外すことさえ手間取っている。どうやら生前の沖田と比べかなり知能が低く、動きも緩慢なようだ。これならば、今すぐ自分が射殺する必要はない。それよりも、永井をどうにかしなければならぬ。永井は沖田が発砲したことがいまだ信じられないのか、呆然と見つめている。明らかに攻撃されているにもかかわらず、反撃することもなければ逃げようともしない。これでは、この先命がいくつあっても足りないだろう。屍人は沖田だけとは限らないのだ。

三沢は小銃を下げると、腰のホルスターから拳銃を抜き。

「士長、応戦だ」

グリップ側を向け、永井の顔の前に差し出した。

事態が把握できていないのだろう。永井は目を白黒させている。

「危害射撃だ、撃て」

さらに言った。危害射撃とは、警告ではなく目標に向かって本当に撃つことだ。目標——すなわち沖田は、こちらに向けて銃を二発撃ってきたのだ。それに対し危害射撃を行うことは正当な行為である。

だが、永井にはやはりそれが理解できないようだ。

「そんな……相手は沖田さんですよ!」

信じられない、というような表情になる。

「沖田はもう死んだ」と、三沢は冷静に続ける。「黒い塊が入るのを見ただろう。あれは沖田ではない。屍人だ」

屍人という言葉をも、永井が知るはずもない。恐らく死人と聞こえただろうが、どちらでも大きな違いは無い。「説明している暇はない。相手が誰であろうと発砲してきたからには応戦しろ。でなきややられるぞ。もう訓練じゃないんだ」

三沢は、『やられる』『もう訓練じゃない』のふたつを特に強調して言った。もつとも、感情を込めて喋るのは苦手だから、どこまで伝わったかは判らないが。

永井は、三沢の拳銃を受け取ると、立ち上がり、震えながらも両手で構えた。

沖田は——いや、屍人は、ようやく弾倉を外した所だった。新たな

弾倉を取り出し、装填しようとする。しかし、外すのさえ手間取ったのだから、装填などすぐにできるはずがない。案の定、前後逆に取り付けようとしている。永井と屍人の間は三メートルほど。いかに未熟な永井と言えど、この距離ならば外さないだろう。

永井は――。

◇

永井は銃口を下げると、肩を落としてうなだれた。

「どうした永井！ 撃て!!」

と、三沢が叫んでも。

「――できません!!」

永井は三沢を見て、涙を流しながら叫ぶ。「あれは、沖田さんなんですよ!?!」

三沢は大きく舌打ちをした。屍人は、相変わらず弾倉を逆に取り付けようとしている。沖田は優秀な自衛官だ。銃のリロードなど手早くやつてのけるし、そもそも理由も無く仲間に向かって発砲することなどあり得ないのだ。あれが沖田であるはずがない。永井は、そんなことも判らないのか。

かちやり、と音がした。屍人が弾倉を取り付けたのだ。これ以上は危険だ。そう判断した三沢は、屍人が銃口を向けるよりも早く、自分の小銃の引き金を引いた。三発撃ち、三発とも屍人の身体に命中する。屍人は弾き飛ばされるようにして後ろに倒れ、そのまま動かなくなった。

「沖田さん!!」

駆け寄ろうとする永井。

三沢は永井の腕を掴み、力づくで引き寄せた。

「いいか、小僧」

三沢は、訓練等で多くの部下を震え上がらせてきた目で、永井を睨んだ。「遊びでやってるんじゃないやねえんだ。命が惜しけりや、俺の命令に従え。相手が誰であろうと、俺が撃てと言ったら撃て」

三沢は永井を放すと、「銃を取れ」と言って、倒れている屍人を顎でしゃくつた。永井はためらいながらも、屍人から小銃を取った。

「よし。ここから脱出する。永井、お前が先行しろ」

「え……俺が……ですか……」

「そうだ。他にも敵がいるかもしれない。油断するなよ」

永井は戸惑った表情のまま頷く。何とも頼りないが、今は一刻も早くこの状況に慣れさせないといけない。でなければ、永井だけでなく三沢自身も危ない。今の永井はただの腑抜けだ。背を任せられるはずもない。

永井は身を屈め、先行して走った。三沢はその後が続く。しばらく進むと上り階段があり、上には観覧車が見えた。その手前に人影がある。迷彩服を着て、小銃を持った男。自衛官の姿をしているが、島に上陸した自衛官は、三沢と永井以外の死亡を確認している。あれも屍人だ。

永井は階段の下で立ち止まり、どうしようというような表情で三沢を振り返った。遊園地から脱出するためには観覧車の前を通る必要がある、他に道は無い。そのためには屍人を倒すしかないだろう。

「撃て」と、三沢は言った。

「し……しかし……」

ためらう永井。まだ覚悟ができていないようだ。怒鳴りつきたい衝動を抑え、静かな声で命令しようとした時。

たたたん、と銃声が響き、ほぼ同時に二人の足下の土が数か所はじけ飛んだ。見ると、観覧車の前の屍人がこちらに銃口を向けている。気付かれた！

「永井！ 死にたくなければ撃て!!」

三沢の怒声に、永井は銃口を屍人に向ける。引き金に指をかけた。そして。

「……うわああ!!」

叫びながら引き金を引いた。銃声が連続して鳴り響く。それはでたらめな射撃で、階段や観覧車のゴンドラなど、様々な場所に穴をあ

けたが、そのうちの何発かは屍人にも命中した。屍人は倒れたが、それでも永井は引き金を引き続ける。弾倉の弾が無くなっても、永井は叫びながら引き金を引いている。

「もういい永井、やめろ」

三沢が銃口を下げさせると、永井は我に返り、引き金を離した。

「よくやった……と言いたいところだが、次はもつとスマートに倒せ」  
あまりにもお粗末ではあったが、ひとまず屍人を倒すという第一歩を踏み出すことができた。こうやって、少しずつ今の状況に慣れさせるしかないだろう。気の遠くなる話だが。

「他にも敵がいるかもしれない。リロードしておけ」

三沢はポーチから弾倉を取り出し、永井に渡した。弾倉を交換する永井。

「よし。行け」

再び永井を先行させ、先へ進む。階段を上がり、観覧車の前を通ると、向こう側にもうひとつ丘があり、そこにコーヒークップのアトラクションが見えた。かつては連絡橋を渡ってそこへ行けたようだが、今は連絡橋が崩れ落ち、渡ることができない。幸い高さはそれほどでもないため、飛び降りることができた。

丘の下へ飛び降りた二人は、周囲の状況を確認する。ここから南へ行くと正門で、北へ行くと裏門だ。正門の方向に人影はないが、裏門の方向には二体の人影が見えた。永井は指示を仰ぐように三沢を見た。だが、いま脱出ルートを決めるのは永井だ。三沢は何も言わずただ睨み返す。永井は少し迷った後、南の正門へ向かって進んだ。

二人がこの遊園地へ入る際に通ったのは正門だ。その際、門は閉ざされておらず簡単に通ることができた。しかし、いま門は閉ざされ、南京錠で鍵がかけられてある。屍人共が閉ざしたのかもしれない。南京錠は安っぽいもので、銃で撃てば簡単に壊れるだろう。ドラマや映画などではよく見かける行為だが、実際に銃を扱う者はまずやらない。正確に錠を撃ち抜くにはかなり近づく必要があるが、近づけば近づくほど、跳弾した時の危険性が増すのだ。かといって離れると正確に撃ち抜くのが困難になり、無駄に弾を消費する。よほどの緊急事態

でない限りはやるべきではないのだ。それに、そんな危険な方法を用いなくても、他に脱出方法はある。園内を囲む壁の高さは三メートルほどだ。二人で力を合わせれば越えられない高さではない。二人組で壁を越える訓練は、永井も何度も行っているはずだ。

だが、永井は。

「……駄目ですね。裏門へ回りましょう」

そう言つて、北へと向かい始めた。

二人組で壁を越える方法は二人の息を合わせる必要がある。慣れない者同士で行うのはかなり難しい。三沢と永井は訓練でコンビを組んだことはなく、うまくいかない判断したのかもしれない。三沢はたとえ初めて組む相手であっても成功させる自信はあったのだが、脱出ルート判断は永井に任せてある。三沢は何も言わず永井の後に続いた。

崩れた連絡橋の手前まで戻ったところで、永井は足を止めた。先ほど裏門の前にいた屍人の一体が、こちらへと向かって来ていた。三沢は小銃に取り付けてあるスコープを覗いて確認する。屍人が持っているのは機関拳銃、俗にサブマシンガンと呼ばれている銃だ。連射力が極めて高く近距離では脅威だが、弾道がぶれやすいため距離が離れると狙いを定めにくい。この距離ならば三沢たちが持つている小銃の方が有利だ。このまま三沢が撃つのが簡単だが、三沢は銃口を下ろし、永井の判断を待った。

永井は周囲を見回す。右手側に、コーヒーカップのある丘へと登る階段があった。永井はそれを登り始めた。まだヤツらを攻撃することのためにめらいがあるのだろうか？ だとしたら問題だが、丘を登れば屍人を回避することが可能だ。消極的と言えばそうなのだが、今の状況なら、無駄な戦いを避けるという判断は間違いではない。三沢は何も言わず、永井の後に続いた。

丘へ上がった二人は、コーヒーカップの遊具に身を隠し、屍人が通り過ぎるのを待つ。

「……あれ？」

永井が何かを見つけた。遊具の入口のそばに迷彩柄のバッグが落



ちている。自衛隊支給のバックパックだ。隊員の誰かのものだろう。永井がバッグに取り付けてあるタグを確認する。

「これ、沖田さんのバッグです」

永井は三沢に告げた。沖田のバッグならば、何か使える物が入っているかもしれない。開けてみる、と命令する三沢。永井はバッグを開け、中を探った。

「……起爆装置がありました。まだ使えそうですね」

三沢は永井から起爆装置を受け取った。円柱状の機械の上部にT字型のスイッチが取り付けてあるものだ。起爆装置と呼んではいるが、実際は発電機だ。スイッチをひねると内部で発電し、コードを通じて爆発物に伝わるのだ。よって、銅線などで爆薬などと繋がなければ役に立たない。もちろん、永井のバッグにはそれらもあるはずだ。

だが、バッグを探っていた永井は、首をかしげた。

「三佐、TNTがありません」

TNTとは代表的な軍用爆薬のひとつである。ダイナマイトなどの産業爆薬よりも強力で、自衛隊だけでなく世界中の軍隊、及びテロ組織等が使用している。バッグに入っていないということは、誰かが持って行ったのだろうか？

バッグの中にはそれ以上特に何も無かった。TNTを持って行った者に関する手掛かりも無い。まずは遊園地からの脱出を優先すべきだろう。機関拳銃を持った屍人は正門の方へ向かっている。うまくやり過ぎせたようだ。

だが、丘を下りようとしたところで、永井が足を止めた。遊具の近くにスタッフルームがあり、その中を見ている。そこには黒電話があるのだが、その横に薬を入れるピルケースが置いてあった。

はつとして、ポケットを探る三沢。常に持ち歩いているピルケースが無い。三沢は、永井と別行動をしていた際、園内を巡り、目についた全ての電話を試してみた。このスタッフルーム内の黒電話も試してみたのだが、その際、三沢はピルケースを取り出し、薬を一錠飲んだのだ。そのとき置き忘れてしまったようだ。まずいな、と三沢は思った。あの薬を服用していることは、隊の誰も知らない。永井はも

ちろん、沖田にさえ話していないのだ。自分のものだとは知られるのは避けたいが、薬はもうあれしか残っておらず、置いていくわけにはいかない。永井が目を離れた隙に回収できれば良いが……。

だが、三沢の思いに反し、永井はスタッフルームの中に入ると、ピルケースを取った。

「これは……？」

仕方なく、三沢もスタッフルームの中に入り、横からピルケースを取り上げた。

「俺のだ。悪いな」

ポケットに押し込む。ピルケースは半透明で、中の薬はむき出しの状態が入っているが、見ただけでは何の薬かは判らないはずだ。

三沢はスタッフルームから出ると。

「お前に任せていては夜が明けてしまう。ここからは俺が先行する。ついて来い」

そう言っつて、先行して裏門へ向かった。裏門の前に待機していた屍人は気付かれる前に狙撃で倒す。裏門も正門同様閉ざされていたが、二人組での壁越えの技を使い、問題なく脱出することができた。

そして、二人は南の瓜生ヶ森へと進んだ。

## 第二十四話 『幻影』 三沢岳明 夜見島金鉞社宅

4 : 4 2 : 4 0

大型客船ブライトウィン号の探索を終えた自衛官の三沢岳明は、瀬礼洲地域の北西に位置する崩谷地区にいた。古い団地が立ち並ぶ地区で、夜見島が金鉞発掘で栄えた時代、鉞員たちが多く住んでいた社宅である。

夜見島不時着後、ずっと行動を共にしていた部下・永井頼人の姿は無かった。数時間前、永井は暴言と共に三沢の元を去って行ったのだ。上官の命令に背き、任務を放棄して勝手に行動するなど、自衛官にあるまじき行為——いや、社会人としてあるまじき行為である。あれでは、まるで子供だ。隊内では若手の有望株として評価されている永井だが、まだまだ精神的には幼いようだ。「……どうしてそんなに嫌うかなあ」

三沢は苦笑いと共につぶやいた。もともと三沢は部下から慕われるような男ではない。永井が尊敬する沖田と違い、無愛想で、積極的に部下や後輩の面倒を見るようなタイプではないのだ。それでも、この島に不時着して以降、生き残るために最善の努力をしてきたはずだ。それが、永井には判らないのだろうか。

気分がかなり落ち込んでいる。よくない兆候だ。三沢は、ポケットからピルケースを取り出し、蓋を開けた。上陸前には十錠近くあった中の薬は、すでに残り一錠となっていた。舌打ちをする三沢。この島に不時着して以降、かなり早いペースで服<sup>の</sup>んでいたから当然だ。この一錠を服んでしまおうともう終わりだ。島内で同じ薬が手に入る可能性はまず無いし、島を脱出できる見込みも今のところ無い。一瞬ためらったが、それでも三沢は、最後の錠を服んだ。服ま<sup>ず</sup>にはいられなかった。目を閉じ、薬の効き目が表れるのを待つ。それは、傍<sup>はた</sup>から見ると気分を落ち着かせているように見えるだろうが、実はまったく逆だった。三沢は今、気分を高めようとしているのだ。

しばらくして、薬の効果が表れたのを感じた三沢は、目を開け。

「なああああがあいくうううん！　いつしよにああそびいましてよお  
おおお!!」

目の前の社宅に向かって、子供のようにおどけて叫んだ。

途端に、びくんと身体が震え、同時に心臓の鼓動が激しくなる。敷  
地内に潜んでいる屍人に声を聞かれたのだろう。かなりの数がいる  
と思われる。今はまだ見つかったてはないが、それも時間の問題だ。  
危険な状態だが、気分が高揚している三沢は、恐れはしなかった。む  
しろ、この地区にいる屍人全員を殺して回りたい気分だった。

三沢は、薄く笑いながら進んだ。

社宅は、敷地内の東側と西側に二棟並んで建っている。その南にあ  
る道を西へ向かって進む三沢。身を屈め、姿を見られないよう警戒し  
て進む……という訳ではない。まるで夜の散歩を楽しむかのように、  
道の真ん中を堂々と歩いていった。びくんと身体が震え、一瞬、夜道を  
歩く自分自身の姿が見えた。屍人に見つかった合図だ。正面にいる。  
三沢は慌てず、小銃を構えてスコープを覗き込んだ。すぐに闇に潜む  
屍人を見つけた。ナイフのようなもの——恐らく小銃の先端に取り  
付ける銃剣だ——を振り上げ、こちらに向かって来る。銃を持ってい  
る俺にそんなもので勝てると思ったのか？　三沢は失笑と共に引き  
金を引いた。撃った弾は一発。その一発が、正確に屍人の頭を撃ち抜  
く。屍人はその場に倒れた。

三沢が銃を下ろした瞬間、また身体が震え、今度は闇の中にたたず  
む自分の背中が見えた。後ろから来る。三沢が振り返ると、たたた  
ん、と、小刻みな銃声が響き、同時に足元の土がいくつもはじけ飛ん  
だ。機関拳銃だな、と、すぐに判断した。連射力は高いが反動で照準  
がぶれやすく、距離があればそうそう当たるものではない。三沢と屍  
人の距離は二十メートル以上離れている。三沢は冷静に小銃を構え  
ると、スコープを覗くのとほぼ同時に引き金を引き、またも一発で仕  
留めた。

また身体が震える。今度は社宅の屋上から見下ろし、小銃を構える  
映像だ。その一瞬の映像で、屍人が持つ小銃がいま自分が持っている  
ものと同じ銃だと判断した三沢は、反射的に駆け出した。次の瞬間、

さつきまで三沢が立っていた場所の土が弾け飛んだ。三沢は走り続ける。その背後を追うように、土が次々と弾け飛び続ける。三沢は頭の中で、ひとつ、ふたつと数えた。そして、みつつ数えたところで立ち止まる。同時に、屋上からの銃撃も止んだ。屋上の屍人が持っている小銃は三沢の銃と同じ。この銃の発射速度は一秒間に八発から九発で、装填できる弾は二十発。つまり、三秒弱で弾切れとなるのだ。そうなたらりロードするか別の銃に持ち替えるかだが、どちらにしても、その一瞬の隙があれば充分だった。三沢は屋上に向けて銃を構える。屋上は闇に溶け込んでよく見えないが、銃声から屍人のいる位置の見当は付けてある。スコープを覗き込むと、思った通りの場所に屍人はいた。弾倉を取り換えようとしているが、もう遅い。三沢は引き金を引き、屍人の頭を撃ち抜いた。

また身体が震えた。今度は拳銃を持った屍人が迫っていた。それも、二体。もちろん、近づかれる前に狙撃して倒す。また身体が震える。倒す。また体が震える。倒す。

屍人を倒しながら、三沢はどんどん気分が高揚していくのを感じていた。笑みがこぼれる。笑った。笑いながら、銃を撃つ。笑いながら、屍人を倒す。

三沢は一人、屍人を倒し続け。

十分後。

静かになった敷地内で、三沢は幻視の能力を使い、周辺の気配を探った。

◇

敷地内には、何の気配も無かった。もう、この近くには誰もいない。屍人も、そして、他の者も。どうやら永井はここにはいなかったよう

だ。無論、屍人となっていなければの話だが。

三沢は、無言で敷地内を見回した。多くの屍人が倒れている。みな、迷彩服を着ている。かつては三沢の仲間だった者たちだ。ふと。

夜見島遊園で初めて屍人と対峙した時の、永井の言葉を思い出した。

——できません!! あれは、沖田さんなんですよ!?

屍人としてよみがえり、こちらに発砲してきた沖田に対し、永井は反撃することができず、涙を流しながら叫んだ。

今の三沢には、あのときの永井のような感情は無かった。ただ降りかかる火の粉を払っただけで、それ以上でも、それ以下でもない。たとえかつての仲間であろうと襲って来るからには敵であり、倒さなければならぬ。そうでなければ、こちらがヤツらの仲間入りをしてしまう。それは、今この状況下で生き残るためには正しい行為だ。

たが。

はたして人として正しい感情を持っているのは、自分だろうか、永井だろうか。

「……………」

三沢は倒れた屍人たちに背を向けると、その場を去った。

第二十五話 『邂逅』 三上脩 夜見島／蒼ノ久集落

— 2 : 25 : 10 終了条件2

夜見島へ向かう途中、濁ったサイレンの音と共に出現した赤い海によつて船が転覆し、海へ投げ出された三上脩は、夜見島の蒼ノ久漁港で意識を取り戻した。そこは、三上が四歳のころまで暮らしていた集落だ。二十九年前の島民失踪事件以来誰も住んでいないはずのこの集落に、なぜか多くの人の気配がある。不審に思いながら、愛犬のツカサと共にかつて住んでいた家へと戻る三上。その玄関先で、血まみれで倒れている父と、泣いている幼い自分の姿を目撃する。ここが二十九年前の夜見島である可能性に気がついた三上は、曖昧な記憶を頼りに、当時彼が姉のように慕っていた少女・加奈江の部屋へと向かう。部屋には誰もおらず、窓は開け放たれていた。そのそばにある鏡台の鏡は割れている。記憶を探る三上。二十九年前のあの夜、玄関に倒れている父を見つけ、その後、大きな犬を連れた見知らぬ男が現れた。恐ろしくなった三上は、加奈江に助けを求めてこの部屋に駆け込んだ。しかし、部屋には誰もおらず、窓が開け放たれ、鏡が割れていた。恐らく父は、この島の漁業を取り仕切る網元の指示により漁師たちに襲われたのだ。そして、その漁師たちは加奈江も襲おうとしたが、危険を察知した加奈江は窓から逃走。漁師たちは逃げた加奈江を追つて外に出た。三上は、そう推理した。

◇

—— いや。

それはおかしいことに、三上は気がついた。

何者かに胸を刺された父は、頭を玄関側にし、仰向けで倒れていた。

もし、夜中に来客があり、父が玄関に迎え出て襲われたのなら。

足を玄関側に向け、仰向けに倒れるか。

頭を玄関側にし、うつ伏せに倒れるか。

そのどちらかではないだろうか？

頭を玄関側にし、仰向けに倒れていたのなら。

それは、家にいた者に襲われたことにならないだろうか？

だが――。

あの時間、家にいたのは、自分と加奈江だけなのだ。

当時の記憶はかなりあいまいだが、まだ四歳だった自分が父を殺すことなど、到底考えられない。

ならば、父を殺したのは……。

考えを振り払う三上。あの日、私は八時過ぎに布団に入り、父が襲われる直前まで眠っていた。その間に訪問者があり、父が家の中に招き入れた可能性は充分にある。家の中にいたのが自分と加奈江だけだったとは言い切れない

三上は、これからどうすべきかを考えた。もし本当にここが二十九年前の夜見島ならば、幼い自分と加奈江は、いままさに漁師たちに追われているだろう。なんとかして助けないといけない。三上は加奈江の部屋を後にし、家の外へ出た。

三上の家の前は坂になっている。坂を下ると漁港があり、上がると道はすぐに突き当たって右に折れ、裏口に回ることができる。二十九年、姉の部屋から逃げ出した自分は、どちらに向かったのだろうか？ 当時の記憶はほとんど残っていないが、島に上陸して以降、少しずつ思い出している。三上は記憶を探った。

――お姉ちゃん、手、ケガしたの？

記憶がよみがえった。確か、裏口付近で姉に会ったはずだ。その時、姉の手が血で真っ赤だったのを思い出した。三上はツカサの目を頼りに坂を上がり、裏口へと向かう。突き当りを右へ曲がり、さらに進むとまた道は突き当たって右へ曲がっている。その先に三上家の裏口があるのだが。

三上は、突き当りの民家とその隣の家の間にわずかな隙間があることに気がついた。

そして。

――ここを通ると、近道だよ。



また記憶がよみがえった。姉と合流した後、漁師の目を逃れるため、二人でこの隙間を通つたはずだ。この先は確か、丘の上にある社や廃材置き場へ向かうための曲がりくねった坂道がある。確か、九十九折り階段と呼ばれていた。

そのとき、丘の上の方から声が聞こえた。

「いたぞ！　上だ！　社の方へ逃げた!!」

漁師たちだ。やはり、姉と三上は丘の上へ逃げたのだ。丘の上からは、島の北部にある貝追崎という地域へ向かうことができる。幼い三上たちはそちらへ逃げたのかもしれない。後を追わねば。

その隙間は大人になった三上が通り抜けるには狭すぎたので、一旦坂をくだって漁港へ下り、回り道をして九十九折り階段へと向かう。かなり曲がりくねった坂道で、その名の通り途中から階段になっていく場所もある。多くの殺気立った漁師が徘徊していたが、三上は幻視とツカサの力を借り、なんとか漁師たちの目をかいくぐって貝追崎方面へ向かうことができた。

しかし。

——下へおりたら、どこか安全な場所に隠れていて。お姉ちゃん、必ず迎えに行くから。

集落を離れようとしたところで、また記憶がよみがえった。

それは姉の声だった。下へおりたら……貝追崎へ向かうには山道を通ることになる。下へおりるとは言い難い。貝追崎へ向かったのではないのだろうか？　だが、丘の上に貝追崎以外の場所へ向かう道は無い。他には、小さな社と廃材置き場があるだけだ。社は道端にある簡易的なもので、隠れたりすることはできない。ならば廃材置き場だろうか？　行けば何か思い出すかもしれない。三上は来た道に戻り、再び漁師の目をかいくぐって廃材置き場へと向かった。

廃材置き場は、この集落で最も高い場所にある。ところどころ切り立った崖となっているが柵は立てられておらず、危ないから子供は遊んではいけない、と、大人たちから強く注意されていた。もっとも、資材がたくさん積み上げられたこの場所は秘密基地のような雰囲気があり、子供たちは内緒で出入りしていたのだが。

敷地の奥には古い木材が積み上げられており、雨から守るために屋根が建てられてある。むき出しの地面に柱を立て、その上に梁を渡してトタンを乗せただけの簡素なものだ。長年風雨にさらされていたため柱はかなり傷んでおり、今にも崩れそうだった。その手前には資材運搬用のロープウェイがあった。確か、島の南部にある夜見島港と繋がっていて、港に着いた荷物を手早く運ぶために使われていたのだ。運搬用のゴンドラは無かった。港側にあるのだろう。電源は入っており、ゴンドラを動かすためのモーターも待機状態だった。直前に誰かが使ったようである。それで思い出した。あの夜、三上と加奈江は貝追崎へ向かったのではない。漁師の目を逃れこの資材置き場へやってきた三上は、姉の手でこのロープウェイに乗せられ、夜見島港へ下りたのだ。このロープウェイは資材用だからゴンドラは小さなものだが、四歳の子供を運ぶくらいなら可能だ。ただし、加奈江が乗ることはできないだろう。加奈江自身は自分の足で夜見島港へ向かったはずだ。追わなければ。

三上はツカサへ指示を出した。しかし、ツカサは廃材置き場の屋根の下へと走り、一度吠えようと、土を掘り返し始めた。遊んでいる場合ではないのだが……と思ったが、ツカサは賢い犬だ。三上の指示を聞かずに遊ぶとは考えにくい。そこに何かあるのだろうか？ 三上も屋根の下に入り、ツカサが土を掘るのを待った。やがて、土の中からクッキー缶が出てきた。子供が宝物を埋めたのだろうか？ 開けてみると、中に入っていたのはクレヨンで描かれた少女の絵だった。水色のシャツと紺色のスカート姿の少女。下部には土の地面と草が描かれており、上部には黒い雲がいくつも描かれていた。曇り空の屋外にたたずむ少女——それは、三上の記憶に残っている加奈江の姿だった。

——これは、私が描いたもの。

自分がここに埋めたのだろうか？ 判らない。思い出せない。

と、地面が、小さく揺れた。

それは、地震と呼べるほどの揺れではなかった。近くを大型のトラックが通ったと思う程度の、ほんとうに小さな揺れだ。もつとも、

この近くに大型のトラックが通れるほどの道は無いから、なんらかの自然現象だったのだらう。後から思えば、この後起こる巨大な津波の前兆現象だったのかもしれない。原因が何であれ、そのほんのわずかな揺れで、資材置き場の屋根を支える柱がきしみ始めた。ツカサが上を向く。ツカサを幻視している三上も天井を見る。パラパラと埃が落ち始めていた。柱がきしむ音が大きくなる。崩れる！ そう思った瞬間、ツカサが三上を突き飛ばした。弾かれた三上は屋根の外に出る。

その直後、木が引き裂かれる音と、トタンが割れる音。そして全てが崩れ落ちる音がして。

幻視をしていたツカサの視点は、真っ暗になった。

「——ツカサ!!」

幻視をやめ、ほとんど見えない目で崩れ落ちた屋根に駆け寄り、瓦礫をどかそうとする三上。手に鋭い痛みが走る。折れた柱の先か、むき出しになった釘か、なにかは判らないが手を切ったようだが、構わず瓦礫をどかす。その行為でさらに崩れてしまい、三上も巻き込まれてしまう可能性もあるが、それでも三上瓦礫をどかす、何度もツカサの名を呼ぶ。ツカサは、応えない。

不意に、びくんと身体が震え、瓦礫の前にしゃがんでいる男の背中が、一瞬だけ見えた。

そして、「よわらやつつれよくわる!!」と、呂律の回らない声で叫びながら、何者かが近づいて来る。

漁師か、あるいは屍人か——三上には判らない。

どん、と、強い衝撃があった。体当たりをされたのかもしれない。その後、奇妙な浮遊感。

崖下へ突き落された——。

そう思った瞬間、強い衝撃と共に、三上は意識を失った。

第二十六話 『代役』 阿部倉司 夜見島／第1砲台  
跡 3：47：08

夜見島の北部、鳩の形で例えると右翼の中央に、三夜要塞跡さんやという遺跡がある。いまから百年ほど前の明治の時代、日露戦争に備えた当時の日本軍が建設したものだ。海に面した丘の上にはいくつかの砲台跡が残り、地下には弾薬庫跡や兵舎跡、そして、それらを結ぶ通路が迷路のように入り組んでいた。いずれも赤煉瓦を用いた欧風の建物だ。それらが朽ち果て、同時に成長する木々や雑草に覆われる姿は少しずつ自然と一体化しているように見える。南の夜見島港と並び、廃墟マニアが無断で島に上陸し訪れる場所である。

蒼ノ久集落からこの要塞跡へと通じる道の途中で、作家の三上脩は、黒のデニムジャケットを着たヤンキー風の男と一緒に道端に座り込んでいた。五時間ほど前、蒼ノ久集落の資材置き場で何者かに襲われ、崖下へと転落した三上は、通りがかったこの男に助けられたのだ。男は阿部倉司と名乗った。この島へ来るとき、三上がチャーターした釣り船に強引に乗り込んできたカプルの内の一人だ。

「しっかし危なかったな。あんた、あのままだったら、あのゾンビみたいなやつらに襲われて、一巻の終わりだったぜ」

阿部の話によると、三上が意識を失った後、島を大きな赤い津波が襲い、ゾンビのようなヤツらが徘徊し襲ってくるのだという。実際、ここへ来るまでも何度か襲われ、三上も阿部の目を通して確認していた。屍人と見て間違いない。屍人と幻視の能力……夜見島に古くから伝わる伝承が現実のものとなっている。全てはあの赤い海が原因なのだろうか？ あの赤い海はなんだ？ 三上がこの島に住んでいたのは四歳までだ。怪談じみた話は子供たちの間でも広まっていたのでかろうじて覚えているが、難しい話は覚えていない。

「……なーんか、見たことあるんだよなあ」

阿部が、三上の顔を覗き込んでいた。そして、ぽん、と手を叩くと。「そうだ！ テレビとかによく出てる作家の先生じゃないか？ 確

か、ナントカギよナントカつていう小説の！」

「ああ。よく知っているね」と、三上は頷いた。恋愛小説『人魚の涙』で塵芥賞を受賞した三上は、その後、テレビ番組への出演や雑誌の取材などの仕事相次いでいる。三上自身はそのような仕事にはあまり興味がないのだが、彼をもっと売り出そうとする編集社が芸能事務所との協力を得て行っているのだ。

阿部は「へへへ」と笑って鼻の下をこすった。「オレ、頭ワリーから小説は読んだことねーんだけどよ、テレビアニメでやってたのを観たぜ。きんぎよが空を飛んで、ウシやサメが喋るヤツ。あれは斬新な設定だったなあ。先生、よくあんな話思いつくな」

「……それは私の作品ではないな。私の本は、まだ映像化されていないよ」

「そうなのか？　じゃあ、ドラマや映画になったら教えてくれよ。それならオレも観れるからさ」

「私としてはぜひとも本を読んでもらいたいね。もっとも、無事に帰れたら話だが」

三上がそう言うと、阿部は肩を落としてため息をついた。「……なんでこんなことになっちゃったかなあ。占い女も、どっかいつちまうしよ」

阿部には連れがいた。ネックレスやブレスレットをじゃらじゃらとつけた女性だった。阿部の話によると、赤い津波に襲われた後離れ離れになり、今はどこにいるのか判らないという。

阿部が顔を上げて三上を見た。「そういや、先生の連れてた犬、どうしたんだ？」

「……………」

愛犬のツカサのことを思う三上。彼が屍人に襲われる前、蒼ノ久集落の資材置き場で、ツカサは崩れた建物の下敷きになった。島に上陸して以降、ツカサの目を頼りに行動していた三上。幻視が途切れて闇に閉ざされた視界は、三上の絶望そのものだった。

「ツカサは、思い出となくなってしまったよ」独り言のようにつぶやく。

「思い出？」

「ああ。みんなそうだ。父も、母も、姉も……私の大切な人は、みんな私の元から去っていく」

我ながら、抽象的なことを言っているな、と思う。いつもそうなのだ。三上が書く作品は抽象的な表現が特徴だ。重要なことははつきりと書かず読者の想像力に任せる、それが人気の秘密でもあるのだが、こんなときでも作家としてのクセが抜けないことに、三上は苦笑する。

三上の言うことが判ったの判らないのか、阿部は「ふーん」と曖昧に唸った。「……まあ、元氣出しなよ、先生。オレも、ガキの頃犬を飼ってたんだ。先生の犬みたいに立派な血筋のやつじゃねーけど、メチャクチャかわいかったよ。で、十歳くらいの時だったかな。オレ、道路に飛び出して、車にはねられそうになったんだ。そこに犬が走って来て、俺のこと突き飛ばして、助けてくれたんだ。でも、代わりに犬がはねられちまって。そいつ、どうなったと思う?」

「……どうなったんだね?」

「はねられた瞬間は、絶対死んだと思ったんだけどよ、そいつ、すぐに起き上って、ぴんぴんしてるの。一応病院に連れて行っただけど、かすり傷くらいしかなかったよ」

「それは、運が良かったんだね」

「そうかもしれない。でもよ、オレ、思うんだ。動物つてのは、オレたち人間様が思ってるより、ずつつえーんだよ。人間が大ケガや死んだりするようなことでも、あいつらなら平気だつてことは、たくさんあるんだ。だから、先生の犬だつて、きつと無事なはずだ」

阿部の顔を見る三上。無論、弱視の三上にはぼんやりと輪郭が見える程度だが、それでも、彼の爽やかな笑顔が見えるようだった。

「……そうだな。君の言う通りだ。ありがとう、阿部君」

阿部は、また「へへへ」と子供のように笑った。

蒼ノ久方面から獣の遠吠えのような声が聞こえた。屍人だ。

「おっと。ヤツらが来たようだ」立ち上がる阿部。「先生。すまねえが、犬を探すのは後だ。まずはここから脱出するぜ」

三上も立ち上がる。「私は目が見えない。すまないが、君の目を借

りるよ。ときどき私を見てくれ。そうすれば、はぐれないですむ」  
「OK、じゃあ、行くぜ」

阿部と三上は要塞跡の方へ進んだ。しばらく進むと『第一砲台跡』という立札と、地域一帯の地図を描いた案内板があった。この要塞は、日露戦争及びその後の二度の世界大戦でも結局使われることはなく、太平洋戦争時の金属類回収令で砲台が全撤去されると同時に日本軍も撤退した。その後はしばらく放置されていたのだが、昭和三十年代の金鉱発掘時代になると、鉱員たちの娯楽の場のひとつとして人々が集まるようになり、また、島の小中学生が社会見学の間として利用することも多くなったので、危険が無いように建物が補修され、公園として整備されたのである。もちろん、それは昭和五十一年の島民失踪事件以前の話であり、今はまた廃墟と化しているだろう。

地図によると、このまま要塞跡を抜けて東へ進めば碑足という地域へ向かうことができるようだ。だが、要塞跡にも多くの屍人が徘徊しているだろう。注意して進まなければならない。

さらに進むと、三メートルほどの高さのコンクリートの壁があった。崖が崩れないようにコンクリートで固めた、いわゆる擁壁だ。地図によればその上に砲台跡があり、その向こうは海が広がっているはずだ。その砲台跡の周囲を、猟銃を持った屍人が警戒していた。幻視で確認すると、こちら側と海側を交互に見ている。三上はもちろん阿部も武器は持っていない。戦うのはあまりにも無謀だ。幸い、擁壁の真下は上からは死角となっているため、タイミングを計れば突破できそうだった。幻視で様子を伺い、屍人が海側を見たところでまず阿部が走る。うまく擁壁の陰に隠れた後、阿部は振り向いて三上を見た。三上も幻視し、屍人が海側を見た瞬間阿部に視界を切り替え走る。屍人は気付かない。うまくいったようだ。

二人は擁壁の陰に身を隠しながら東へと進む。途中、『弾薬庫跡・兵舎跡』という立札が立てられてあり、そのそばに地下への階段があった。もっとも、地下にも屍人は多数徘徊しており、特に行く必要もないので、二人はそのまま東へ進んだ。

しばらく進むとまた立札がある。このまま東へ進むと要塞内の電

気設備を管理していた電灯所跡があり、南へ進むと碑足方面へ向かうようだ。

しかし、碑足方面へと向かう道は三メートルほどの崖に阻まれていた。かつてはそこに階段があったようだが、今は崩れ落ちてしまい使うことができない。他に脱出する道はなく、なんとかして上へあがらなければならぬ。何か台になるものがあればよいのだが。三上たちは周囲を見回した。

◇

幸い、近くにドラム缶が転がっていた。阿部が崖下に移動させ、上にあがる。そこから手を伸ばすと崖の上に手が届いたので、なんとかよじ登ることができた。三上も阿部の目を通してドラム缶の上にあがり、そこから崖の上に引き上げてもらった。

「よし！ うまくいったな！ さあ、先生の犬を探しに行こうぜ！  
大丈夫。きつとすぐ見つかるさ！」

明るい声の阿部。彼の言うことには何の根拠もないのだが、不思議と彼の言う通りのような気がしてくる。そうだ。ツカサはきつと生きていく。まずはツカサを探し、そして、島から脱出する方法を探ろう。

三上と阿部は、碑足方面へと向かった。



第二十七話 『喪失』 矢倉市子 ブライトウィン／  
貨物室 1：20：19 終了条件2

大型客船・ブライトウィン号の貨物室で意識を取り戻した矢倉市子は、テニス部員で親友のノリコを探し、ゾンビのような化け物が多数徘徊する船内を探索する。他人の視界を覗き見る能力を使い、ゾンビから逃れつつ操舵室へたどり着いた市子は、正面の窓から外を見た。フェリーの前部甲板には、ゾンビではない少女がいるはずだった。

◇

だが、窓の下の甲板には誰の姿も無かった。ゾンビたちから逃れるため、どこかに隠れたのだろうか？ そう思い、他人の視界を覗き見る能力を使って船内を探る。小型の斧を持ったゾンビ、ボールを持ったゾンビ、こん棒を持ったゾンビなどの視界が見つかるが、少女の視界は見つからなかった。すでに船外へ脱出したのだろうか？ それなら良いのだが……。

突然、操舵室内にベル音が鳴り響き、市子はびくつと身体を震わせた。舵のそばにある電話が鳴っている。誰かがどこから電話を鳴らしている？ 何者かは判らないが、そのままにしておくと言を聞いたゾンビがやって来るかもしれない。市子は慌てて受話器を取った。《もしもし!? 誰か、誰かそこにいるのか!?》

男の人の声だった。きちんと聞き取れる声で話している。この操舵室に来る途中、市子が確認した限りゾンビどもは呂律の回らない声で意味不明にわめくだけだった。電話をかけてきたのは生きている人間だ。そう思った市子は。

「もしもし！ あたし、亀石中学テニス部の矢倉市子です！ そちらは誰ですか!？」

すぐるように、電話に向かって叫んだ。

《私は三逗港交番の藤田だ。今、船後部の機関室にいる。君は、この船

の乗客かい?》

「はい! テニスの大会の帰りなんですけど、途中、何か……事件があつて……気がついたら、ノリコも、中島君も、先生も、みんななくなつて、船の中はゾンビだらけで、それであたし、どうしていか判らなくて——」

《判つた。お巡りさん、すぐに迎えに行くから。今、どこにいる?》

「ここは、船の前方の——」

市子が場所を伝えようとすると、突然、スピーカーにノイズ音が混じり始めた。

「もしもし? お巡りさん? もしもし?」

呼びかけても、返ってくるのはノイズばかりで、返事は無かつた。やがて、電話はぷつりと切れてしまう。何度呼びかけても、あるいはフックや番号を押してみても、受話器からはもう何の音も聞こえてこなかつた。仕方なく、市子は受話器を置いた。

警察の人が船内にいる。だが、こちらの場所を伝える前に電話は切れてしまった。ここに隠れていればすぐに見つけてくれる……という望みは、持たない方がいいかもしれない。お巡りさんは、船後部の機関室にいてと言っていた。視界を覗き見る能力で船内を調べた時、パイプやタンク・計器類がたくさんある部屋にいる視点を見つけた。ゾンビだと思っていたが、恐らくあれがお巡りさんだろう。機関室はこの操舵室の反対側だ。そこから、どこにいるかもわからないあたしを探して一部屋一部屋回っていたのでは、あまりにも時間がかかる。その前にゾンビが操舵室にやって来る可能性の方が高いかもしれない。なら、こちらから機関室へ向かった方が良さだろう。大丈夫。ゾンビどもは鈍間で頭も悪い。注意すれば捕まりっこない。よし。市子は機関室へ向かう決意をした。

操舵室から出ようとして、市子は電話のそばにあるテーブルの上にあるL字型のクランクハンドルが置いてあるのを見つけた。そう言えば、この操舵室に来る途中、右舷甲板に救命ボートが吊り下げられていた。それを使えば脱出できると思ったのだが、ボートを下ろすためのウインチの電源が入らず、手動で下すためのクランクも取り付けられ

ていなかったため、使い物にならなかった。このクランクハンドルは、あのボートを下ろすためのものかもしれない。市子は、念のためクランクを持っていくことにした。

操舵室を出て、ゾンビの動きを警戒しつつ進み、右舷甲板へと戻った市子。救命ボートを下ろすウインチにクランクハンドルを挿し込んでみると、ピタリとはまった。やった、これでボートを下ろすことができる。そう思ったものの、ハンドルを回そうとしても、市子の力では固くてほとんど回らなかった。つくづく使えない救命ボートだ。誰かと協力するか、男の人に回してもらおうしかない。どちらにしてもまずはお巡りさんと合流することが先決だ。市子はクランクをそのままにして、再びゾンビを警戒しつつ船後部へと向かった。

後部側の扉から船内へ入る。正面に下り階段があり、右手側はエントランスを経由して客室へ向かうことができる。さつきは客室の方へ向かったが、機関室は恐らく階段の先だろう。市子は階段を下りた。

階段を下りると右手側に『機関室』というプレートが貼られた扉があった。しかし、ノブを回してみても、扉は開かない。ノブは回るから鍵はかかっているかと思うが、押ししても引いてもビクともしなかった。立てつけが悪いのかもしれない。この船はほぼ左右対称の造りになっているから、反対の左舷側にも恐らく出入口があるだろう。もちろん、そちらへ回り込むには、ゾンビが徘徊する船内をもう一度移動しなければならぬ。そんな危険を冒すよりは、ここは思い切って――。

「誰か！ 誰かいませんか!? お巡りさん！ お巡りさん!!」

市子は扉を激しく叩いた。恐らく、お巡りさんはこのすぐ向こうにいる。もちろん、ゾンビにも気付かれるかもしれないが、こうなってはもう仕方がなかった。

しばらく呼び続けると、中で人が動く気配がした。

「君！ さっきの電話の、矢倉市子ちゃんだね!」

電話で聞いた声だった。良かった！ ゾンビより前に気付いてもらえた！ 市子はさらに呼びかける。「この扉、固くて開かないんで

す。そつちから、なんとかありませんか!？」

「待ってて、今、ここを開けるから。少し離れてて」

市子は扉から離れた。どん、と、向こう側から体当たりをしたような音がして、少しだけ扉が開いた。もう一度に体当たりされ、また少しだけ開く。さらに何度か体当たりされると、ようやく通れる程度に開いた。開けてくれたのは、市子の父親よりも少し年上くらいのお巡りさんだった。

お巡りさんは一度肩で大きく息をつくと、市子の顔を見た。「良かった。君、怪我は無いかい？」

「あたしは大丈夫です。でも、ノリコや、部のみんながいなくなつて……船の中を探したんですけど、どこにもいないんです」

「そうか……とりあえず、君が無事で良かった。お巡りさんも、船内を探してみたけど、他に生存者はいなかったな。もしかしたら、他の人たちはもう脱出したのかもしれない」

「だといいですけど……」

みんな船外へ脱出した……確かに、その可能性は十分に考えられる。船内にノリコたちの姿は無く、徘徊しているゾンビはみんな漁師のような格好をしており、乗客には見えなかった。ならば、脱出したと考えるのが自然だ。しかし、どうしても安心することはできなかった。そもそも、なぜこんなことになったのか、意識を失う前に何が起こったのか、何も思い出せないのだから。

びくと身体が震え、階段の下で話す自分とお巡りさんの姿が一瞬見えた。ゾンビに見つかった合図だ。階段の上を見ると、ボールを持ったゾンビが迫っていた。お巡りさんが、市子を守るようにして前に出た。腰のホルスターから拳銃を抜き取る。そして。

「止まちなさい！」

警告した後、天井に向けて一発撃った。鼓膜を針で刺すような音に、市子は思わず耳をふさいで身を縮めた。ゾンビは構わず向かって来る。お巡りさんはゾンビに銃口を向け、さらに引き金を引いた。三度、銃声が響く。しばらくの後、ゾンビはバタリと倒れた。

「驚かせちゃったかな、ごめんね」お巡りさんは市子を振り返り、苦笑

いと共に拳銃を下ろした。「ホントはあまり使っちゃいけないんだけどね」

「いえ、大丈夫です。ちょっと、ビックリしただけです」

ゾンビを拳銃で撃つようなシーンはテレビや映画などではよく見るが、当然ながら実際に見るのは初めてだ。驚きはしたが、なぜだろう？ それほどショックは受けなかった。なにか……もつと衝撃的なことが、船の中であったような気がするのだ。

「ここにいたら、別のヤツらが来るかもしれない」と、お巡りさんが言った。「すぐに脱出しよう」

それで救命ボートのことを思い出した市子は、ボートを使えば脱出できるかもしれないこと、ハンドルが固くて回せないことを、お巡りさんに告げた。

「救命ボートか……」お巡りさんは市子の提案を吟味するようにつぶやいた。「いや、お巡りさん、左の乗降口の鍵を開けたから、そこから出た方がたぶん早いと思う。それでいいかい？」

「あ、はい。もちろん大丈夫です」

市子はお巡りさんについて行く。途中、もう一体別の屍人に襲われたが、お巡りさんが拳銃で難なく撃退した。左舷の甲板に出ると、確かに乗降口の扉は開いていた。タラップが無いため地上までの高さは十メートルほどあるが、避難用の縄梯子を使って、なんとか船外へ脱出することができた。

「よし。ひとまず大丈夫だ」お巡りさんが言う。「お巡りさん、島の北側にボートを停めてあるんだ。そこに行けば、島から脱出できる。ちよつと遠いけど、頑張れるね？」

「はい。大丈夫です」

市子が返事をする、お巡りさんも力強く頷いた。そして、周囲を警戒しながら北へ向かう。市子はその後について行き、フェリーから離れた。

第二十八話 『悔恨』 藤田茂 蒼ノ久集落／三上家  
居間 2：49：11

森の中に突如出現した大型フェリー・ブライトウィン号内を捜索し、亀石中学の女生徒・矢倉市子を救出した警察官の藤田茂は、船を離れ、島の西部にある蒼ノ久集落に来ていた。古くから島で暮らす漁師たちの港がある地域だ。この集落の丘の上にある道をたどれば、貝追崎という地域へ向かうことができる。その浜辺に、藤田が島へ渡るのに利用した小型のボートを停泊させてある。そこへ向かおうとしているのだ。しかし、時刻は深夜の三時前だ。雨が降り続いており、空は厚い雲に覆われ月明かりさえ無い。どういふ訳か集落の明かりは点いているのだが、貝追崎へ向かう道は街灯など無く真つ暗だ。屍人や屍霊は夜の闇を苦しめない——というよりは、闇の中こそがヤツらの世界だ。小さな懐中電灯ひとつで移動するのはあまりにも危険だ。加えて、藤田も市子も、屍人たちと戦いと逃亡を繰り返し、かなり疲労していた。いま移動するのは避け、少し休んだ方がいい。そう思い、手近な民家を借りることにしたのだ。

だが、市子は眠るのを嫌がった。眠るのが怖い、何かが来る、と、しきりに不安を口にする。

「大丈夫だよ」と、藤田は励ます。「あいつらが入って来ないよう、お巡りさん、ここで見張ってるから。だから、少し眠っておきなさい」  
「……はい」

不安そうな表情で横になる市子。どんなに励ましても、今の状況で安心できるはずもないだろう。それでも疲労が溜まっているからか、市子は五分ほどで小さな寝息を立て始めた。

市子の寝顔を見る藤田。その姿が、娘と重なる。

藤田には、朝子という名の娘がいる。年齢は市子よりも少し上。来年の春に高校を卒業する予定だ。だが、今は一緒に暮らしていない。三ヶ月前、護送中の窃盗犯を逃がしてしまうという失態を犯した藤田は、降格され、中迂半島の交番へ左遷させられた。その際、娘と妻は

家に残り、藤田は単身でこの地に赴任したのだ。それは、単身赴任というよりは別居状態だといえる。藤田は、若い頃から家族を顧みず仕事一筋に打ち込んでおり、元々娘からは慕われていなかった。そして、その仕事でも失態を犯してしまい、とうとう見捨てられたのだ。

藤田は——この島に上陸してから何度目になるか——大きくため息をついた。

「——やんなっちゃうなあ。なんでこんなことになるかなあ」

独り言をつぶやく。仕事で失敗し、左遷されにもかかわらず、また厄介ごとに首を突っ込み、問題を起こしてしまった。無断での夜見島への上陸。敷地内へ不法に侵入。そして、発砲——。全ては緊急避難及び正当防衛ではあるが、それを説明したところで、死者がよみがえって襲ってくるなど、誰が信じるだろう。もはやクビは避けられない。妻と娘からはさらに愛想を尽かさされ、離婚を迫られてもおかしくない。なぜ、こんなことになってしまったのか？ 一人で夜見島へ来なければこのようなことにはならなかったのだろうか。あるいは、屍霊や屍人について調べなければ、謎の座礁船を調べなければ、こんなことは避けられたのだろうか。

自分は、間違った判断をしたのだろうか。

いや……。

藤田は、自分が間違っているとは思えなかった。

生存者がいる可能性がある場所を探索しないわけにはいかないし、刃物や鈍器を持って容赦なく襲ってくる相手から少女を守るためには発砲も必要だ。間違ったことは、何もしていないはずだ。

三ヶ月前の件もそうだ。藤田が左遷させられる原因となった事件——護送中の窃盗犯を逃がしてしまったのは、藤田の人情から出たことだった。藤田が逮捕したその犯人は以前にも同じ罪で有罪となっており、執行猶予中の身だった。二度目ならば実刑は避けられない。だから、刑務所に入る前に一度母親に会って謝りたい、その後、必ず出頭する、と、犯人から涙ながらに訴えられたのだ。その言葉を信じ、藤田は犯人を実家へと立ち寄せさせたのだ。それで、逃走を許してしまった。

間違ったことはしていないはずだ。今日も。あのときも。それでも。

事態が悪い方へ進んでしまうのは、なぜだ？

藤田には判らない。

ただ。

眠る市子を見つめる。

どんなに悪い事態に進もうとも、この少女だけは護らなければならぬ。

市民の安全を守る、それが警察官の使命だ。たとえクビになろうとも——たとえ命を落とそうとも、己の使命を全うできるなら、それは本望だ。

だから。

「——すまんなあ、朝子。俺に何かあつたら、母さんを頼むぞ」  
もはや口癖となった娘への謝罪の言葉を、また口にした。



第二十九話 『再会』 藤田茂 夜見島／第1砲台跡

5：14：55

謎の座礁船ブライトウィン号から脱出した警察官の藤田茂と女子中学生の矢倉市子は、蒼ノ久集落で一度休んだ後、島北部にある貝追崎へ来ていた。かつて日本軍が建造した要塞が遺跡として残る地域である。遺跡の中央には砲台跡がある小高い丘があり、その北側に海が広がっている。そこに、藤田が乗ってきた小型のボートが停めてあるのだ。それを使い、市子を安全な場所へ避難させるのが藤田の目的だった。

「さあ、あと少しだ。ガンバレ」

市子を励ましながら先へ進む。地図と案内板が建てられた広場を抜けると、赤煉瓦で造られた擁壁が見えた。そのすぐ上が砲台跡だが、こちら側には階段が無い。向こう側へ行くには、地下道を通るか、東へ大きく迂回しなければならなかった。迂回はかなり時間がかかる。藤田は擁壁に沿って進み、地下道への階段へと向かった。

しばらく進んだところで、壁の上で何者かが動く気配がした。しまった、屍人か？ 警告を促すような激しい鼓動が無かったため、完全に油断をしていた。市子をかばい、拳銃を構える藤田。どさりと、目の前に着物姿の男が落ちてきた。すぐ引き金に指をかけたが、その顔を見て指が止まる。顔色は、屍人ではなく生きた人間のものだった。なによりも、その顔に見覚えがあったのだ。左目に黒い布を巻きつけた初老の男。

「……おやつさん？ あんた、太田のおやつさんか!？」

銃口を下げ、男に駆け寄る。間違いない。かつてこの島の漁業を取り仕切っていた網元・太田常雄だ。

太田は顔を上げた。「お前は……藤田のところのバカ息子か？ どうした……少し会わない間に、随分と老けたな……」

「なにを言ってるんだ……それより、あんた、二十年近くもどこにいたんだ!？ 他の連中は無事なのか!？」

太田常雄は、昭和五十一年の島民失踪事件で行方不明になった者の一人だ。警察は懸命に搜索するも手掛かりひとつ見つからず、事件から数年後に死亡が認定された。

太田が眉間にしわを寄せた。「二十年だど？ お前こそ、なにを言っている？」

「なにを……って……」

言葉を告げない藤田。話がかみ合わない。まるで、太田には失踪したという認識が無いかのようだ。

「それよりも……」と、太田は鋭い目で睨んだ。「大口を叩いて島を出たお前が、なぜここにいる？」

夜見島には、島で生まれた者は島で一生を終える、というしきたりがある。藤田はそんな古いしきたりに反発し、立身出世を夢見て島を出たのだ。当然、両親や島の者からは反対されたのだが、若い藤田は聞く耳を持たなかった。

「……二ヶ月前、護送中の犯人を逃がしてしまい、左遷させられたんだ」

藤田の言葉に、太田は、ふん、と鼻を鳴らした。「……つまらんしくじりをしておって。それで、逃げ帰って来たわけか？ だから、島を出るなど言っただ。貴様は、島の習わしを——」

太田が激しく咳き込んだ。両手を地面につき、さらに咳き込む。咳と同時に血を吐いた。

「おやつさん!? 大丈夫か!？」

藤田は太田の顔を覗き込んだ。口の周りを血で濡らし、苦悶の表情を浮かべている太田。その腹も、血に染まっていた。かなりの出血量だ。銃で撃たれたか、刃物で刺されたか、いずれにしても、すぐに適切な処理をしなければ助かりそうにない。だが、この島には病院も無ければ医者や看護師もいない。急病人や怪我人が出た場合、船で本土の病院まで運ぶしかないのだ。無論、そんな余裕は無いだろう。

「藤田よ……ワシは……もう駄目だ……」太田は、咳と血を吐きながらも、強い力で藤田の襟を掴んだ。「お前、『枝』は持っているか？」

『枝』？ おやつさんから貰った、あの『枝』か？」

『枝』も、夜見島に伝わる古い習わしのひとつだ。夜見島では、葬儀の際、死者に魔よけの木の枝を刺すと風習がある。その枝は、島で赤子が生まれた際、太田家の当主が一人一人の名前を刻んで授けるものだ。だから、島で生まれた者は皆、自分の名前が記された『枝』を持っていた。島民は皆それを大事にし、箱に入れてお守り代わりに常に持ち歩く者も少なくはない。藤田もその『枝』は貰っていたが、島を離れる際、実家に置いたままにしていた。

「今は持っていないが、家に帰れば、どこかにあると思う」

「そうか……貴様の家では……間に合わんな……」

太田は、再び血を吐いた。今までよりもさらに大量の血だった。

「もういい。おやつさん、もう喋るな。もう——」

藤田の言葉を遮り、太田は最後の力を振り絞るようにして、続けた。

「いいか……ワシが死んだら……誰の物でもいい……その『枝』を……」

だが。

また、激しく咳き込む太田。咳と血に言葉が掻き消される。

「おやつさん！ おやつさん!!」

藤田には、名を呼ぶことしかできない。

激しく咳き込んだ太田は、最期に、ひゅつ、と、短い息をして、その場に伏し、動かなくなった。

「おやつさん!? しっかりしろ！ おやつさん!!」

藤田がどんなに呼びかけても、もう、太田は返事をしなかった。

最期の言葉は聞き取れなかった。『枝』を……どうすればいいのだろうか？ 島で死者に枝を刺すのは、穢れから死者を守るためとされている。今の島の状況を見れば、それが単なる習わしではなく、島に必要不可欠なことであったのは明白だ。恐らく、『枝』を刺した死体に、屍霊は憑りつくことができなのだ。太田は、誰の物でもいい、とも言っていた。『枝』にはそれぞれ名が刻まれているが、誰の物でも効果は同じなのかもしれない。ならば、どこかで『枝』を調達しなければ。だが、もう遅かった。

まるで太田の死を待ちわびていたかのように、周囲の闇から屍霊が

湧いて出て来た。群がるように太田へ近づく。ライトを当て、あるいは警棒を振るっても無駄だった。数が多すぎる。そのうちの一体が太田の中に入った。太田の身体がびくと震え、ゆっくりとお起き上がった。そして、藤田を見て獣のような咆哮を上げた。

「おやっさん！ やめろ！ おやっさん!!」

屍人相手に話しても無駄だということは判っていた。それでも、島では世話になった人だ。銃で撃つのをためらう。

背後で、小さな悲鳴がした。

はつとする藤田。そうだ。自分の後ろには、怯える少女がいる。護らなければならぬ。

藤田は拳銃を向けると。

「——おやっさん！ すまん!!」

警告なしで発砲した。とても警告などする余裕は無かった。三発命中し、太田はその場に倒れた。

大きく息を吐き、気持ちを落ち着かせる藤田。おやっさんには申し訳ないが、これは仕方がないことだ。そう自分に言い聞かす。それより、これからどうすべきかが問題だ。屍人化したおやっさんは倒したが、そのままにしておく、また別の屍霊が憑りつき、よみがえるだろう。『枝』を刺せば、もうよみがえることはないのかもしれない。だが、この近くに民家は無い。『枝』を手に入れるには蒼ノ久集落まで戻らなければならない。ただし、戻っても手に入るとは限らないし、運良く手に入ったとしても、その間におやっさんはよみがえりどこかへ行ってしまうだろう。それよりも、今は少女を護ることが重要だ。おやっさんには申し訳ないが、脱出を優先しよう。藤田はもう一度太田に詫びると、市子を連れて先へ進んだ。

擁壁に沿って先へ進むと地下への階段がある。幻視の能力で気配を探ると、多くの屍人の視点が見つかった。皆、ナイフやスコップなどで武装している。拳銃を持つ藤田の方が有利だが、地下は電気が点いておらず真っ暗だ。屍人は暗闇の中でも行動に不自由はないが、こちら幻視の能力でわずかに見える程度だ。小さな懐中電灯一本で進むにはあまりにも危険だ。なんとかして明かりを点けた方がいいだ

ろう。確か、ここを真っ直ぐ進めば電灯所跡があつたはずだ。もちろん、戦時中に打ち捨てられた基地だから、現在電気が来ているはずはない。しかし、この要塞跡に来る途中に立ち寄った蒼ノ久集落では、どういう訳か電気が使えた。もしかしたらここも使えるかもしれない。藤田たちは電灯所跡へ向かった。

電灯所跡は、古い赤煉瓦で造られた平屋の建物だ。扉の無いアーチ状の入口から入ったすぐそばに、電灯所内の明かりを点けるスイッチがあつた。押してみるが、明かりは点かなかつた。やはり電気は来ていないのか。諦めかけた時、ぱつと、室内が明るくなった。だが、すぐにまた消える。しばらくするとまた点いて、そして消えた。そのまま明滅を繰り返す。配線の接触が悪くなっているのかもしれない。それでも電気が来ているのは間違いないようだ。藤田は中に入ると、明滅する明かりと懐中電灯を頼りに室内を探し、地下道のへ電気を供給するブレーカーを見つけた。「切」になっていたので「入」にする。これで、地下にも電力が供給され、明りも点いたはずだ。屍人は光の影響を受けないからあまり意味は無いかもしれないが、屍霊の動きはかなり制限できるし、なにより、相手だけがこちらの姿を確認できるという状況は避けられる。光は、必ずこちらに味方するはずだ。

電灯所を後にし、地下へ向かう。階段を下りた瞬間、警告を促すかのように鼓動が激しくなった。藤田は幻視を駆使して様子を探りながら、慎重に進んだ。

要塞跡の地下は、戦時中の敵襲に備え、迷路のように入り組んだ構造になっている。しかし、終戦後、公園や社会見学の場として島民たちに活用され始めると、地下で迷子になる者が続出した。そのため、現在は不要な通路を板で塞ぎ、弾薬庫跡や兵舎跡などの順路を示して、迷わないように整備されていた。おかげで地図が無くとも道に迷うことはなくなつたが、全ての跡地を回るようになっていたため、ただ通り抜けたいだけの場合はかなり遠回りになってしまうのが欠点だった。

階段を下りると東側に通路が続き、さらに進むと北へと折れ曲がつた。しばらく進むと、右手側にかつて日本兵が寝泊まりしていた兵舎

跡がある。この兵舎跡は、地下の東側区画と西側区画に各三部屋ずつ、合計六部屋建造されていた。

兵舎跡の前を通る藤田と市子。反対側の壁にはいくつか西へ向かう通路があるのだが、それらはみんな板で塞がれており、通れないようになっていている。このまま真つ直ぐ進むしかない。途中、何人かの屍人に襲われたが、所持している武器はナイフなどの刃物だったため、拳銃で難なく撃退できた。やがて地下二階への階段が見えてきた。この下は弾薬庫跡があるが、一階と同様に通路はかなり入り組んでいる。藤田たちは階段を下り、さらに通路を進んだ。しばらくして、二人は地下二階の中央部にたどり着いた。

◇

そこは、北側に二部屋の弾薬庫がある場所だ。無論、今は弾薬はもちろん他の物資なども残されていないので、そのまま素通りする。途中、スコップを持つ屍人に襲われたが、拳銃で簡単に撃退した。

さらに進むと地下一階へ上がる階段があった。それを登り、西部兵舎跡の前を通ると地上への階段がある。それを上がれば要塞跡の北部に出るはずだ。ボートを停めてある浜辺はそのすぐ先だ。

だが、外へ繋がる階段の手前で、藤田は息を飲んだ。通路が土砂によって塞がれ、通ることができないのだ。藤田は上陸した時もこの通路を通ったが、その時は何も無かった。深夜の津波で崩れたのかもしれない。

「出られないんですか……」ここまで無言で藤田の後について来ていた市子が、不安そうな声を上げた。

藤田は、市子を少しでも安心させるため、笑って振り返った。「大丈夫。土砂の量は多くないから、何か道具があれば、すぐに出られるよ」考える藤田。ちょうど、地下二階にスコップを持った屍人がいた。あれを使わせてもらおう。

再び地下二階へ下りる。幸い屍人はまだよみがえっていないなかったので、スコップを奪って階段前へ戻った。土砂をかき分ける。手作業

で除去するにはかなりの量だ。まして屍人の襲撃を警戒しながらの作業となると神経も磨り減る。思ったより時間はかかったが、なんとか三十分ほどで通れるようになった。疲労に押し潰されそうな身体に鞭を打つようにして階段を上がる。浜辺はすぐそこだ。この先に屍人の気配はない。あと少しで、この島から脱出できる。そう信じて。

だが。

階段を上がり、目の前に広がる海を見て、藤田の希望の光は消えかける。

目の前には、赤い海——血のように真っ赤な海が、広がっていた。

この要塞跡に来る前の蒼ノ久集落でも、海は見た。だが、その時は真夜中だったから、闇に閉ざされ遠くまで見渡すことはできなかった。

しかし、夜が明け、わずかに明るくなっただけ、海を臨むと。

「どうなってるんだ……」

そこは、見渡す限り赤い海だった。

赤い海以外、何も見えない。

夜見島は、本土から三十キロ以上離れているが、それでも、隣の島までは四キロ程度。充分目視できる距離だし、さらにその隣の島も見ることができると。

また、付近を航行する船も、夜見島を避ける航路を取ることが多いとは言え、見えなくなるほど遠くを通るわけではない。三逗港へ通じるこの海は、旅客船や貨物船など、行き交う船が多い。近隣の島には漁業を生業とするものも多い。夜明け前に出港し、ちようど漁を始めると時刻だ。島からは、それらの船も多数見えるはずだ。

なのに。

見渡す限り、島も、船も、何も無いのだ。

見渡す限り、赤い海しかないのだ。

赤い海がどこまでも続いている——そう思わずにはいられなかった。

ボートは、藤田が上陸した時のまま浜辺に残っていた。海へ出るこ

とは可能だ。

だが、この赤い海を渡った先に、本当に本土があるのだろうか。判らない。あることを祈るしかない。

藤田は市子と共にボートに乗り込んだ。



第三十話 『不協和』 永井頼人 ブライトウィン／  
左舷通路 2：34：02 終了条件2

島を丸ごと飲み込む赤い津波に襲われ、意識を失った自衛官の永井頼人は、上官の三沢岳明にたたき起こされ、現在、森の真ん中に座礁した謎の旅客船を捜索していた。水辺など無いこの森の中にどうしてこんな大きな船があるのか、永井には全く判らなかつた。そして、相変わらず死者が武器を持って襲ってくる。全てが、永井の理解の範囲を超えていた。誰かに教えてほしかつた。もちろん、こんな訳の判らない状況を説明できる人などいないかもしれない。それでも、気休めでもいい。何か、答えだと思えるようなもの、あるいは、いま何をすべきかを教えて欲しかつた。こんな時、いつも永井にアドバイスをくれた先輩の沖田は、もういない。いま彼のそばにいるのは、これまでほとんど話などしたことのない三沢だ。無愛想でとっつきにくく、隊員の間でも評判は良くない。それでも永井の上官であり、今はこの隊——もはや二人だけとなつてしまつたが——を指揮している男だ。何か、励みになる言葉をくれるはずだ。そう信じ、永井は。

「……自分、いまだに信じられないんです。死体がよみがえつて襲ってきたり、大きな津波に飲み込まれたのに無事だったり、他人の視界を覗き見したり、この船も、なんでこんな所にあるのか……もう、なにがなんだかわからなくて、全部夢なんじゃないかつて気もします」  
胸の内の不安を、吐露した。

三沢は——。



三沢が振り返つた。険しい目をしていた。仲間に向ける目ではない。まるで、敵と対峙した時のような——そう、あの動く死体・屍人を見ているような目だ。

そして。

「——頭に弾丸ぶち込んでやろうか？」

あろうことか、手にしている小銃を、永井に向けた。

意味が判らなかつた。小銃はもちろん本物で、弾も入っているのだ。

三沢は、唇の端を吊り上げて不敵に笑うと、銃口を永井の額の前まで上げた。

「これが夢なら、お前は温かい布団の中で目が覚める。だが、もし夢じゃなかつたら、それで終わり——」

抑揚のない声で言う。

そして、しばらく沈黙した後。

「ばぁん!!」

思わず身を竦める永井。

もちろん、それは本当の銃声ではない。三沢が口で言っただけのことだ。

三沢は銃口を下げ、まるで子供のおどけて笑う。いつも仏頂面の三沢が、そんな顔をするのは初めてだった。無論、それで場が和むはずもない。三沢はしばらく笑っていたが、やがていつもの仏頂面に戻ると、無言で背を向け、歩きはじめた。

思いもよらない三沢の行動に、永井は呆然と立ち尽くす。だが、我に返ると、胸の奥から怒りが湧きあがってきた。今のはまさか、冗談のつもりだったのだろうか？ 弾が入った本物の銃を突きつけておいて、それが冗談で済むはずがない。

腹立たしい話だが、今はどうすることもできない。本部に戻って報告し、対応してもらうしかない。恐らくかなり厳しい処分が下されるはずだ。除隊で済めば良い方で、脅迫や暴行の罪に問えるかもしれない。何にしても今は我慢だ。永井は、仕方なく三沢の後を追おうとした。

背後で、カンカンと足音がした。誰か来る。屍人か？ 銃を構え、振り返る永井。いま永井がいるのは左舷の甲板で、船を降り降ろすための乗降口と、少し奥に地下へ下りる階段がある。その階段から、若い女が上がって来た。屍人のようななどす黒い肌の色ではない。生

きている人間の——それも、生まれて一度も陽の光を浴びたことがないような、真つ白な肌の少女だった。見覚えがあつた。島が赤い津波に襲われる直前、森の中で出会った若い男女の内の一人だ。

少女は永井たちの姿を見ると、はつとした表情になって、踵を返し、階段を駆け下りた。

「あ、待って！」

永井は呼び止めたが、少女は走り去ってしまった。

「三佐！ 生存者です！」

三沢を振り返る。現在、島は津波に襲われ、得体の知れない化物が襲ってくるような事態だ。自衛隊員の使命として、市民の安全を守らなければならない。

だが、三沢は振り返ることもなく、そのまま行ってしまった。聞こえなかったわけではないだろう。保護するつもりはない、ということだろうか。

「……何だよアイツ。いったい、何考えてんだよ」

ここまで溜まっていた不満を思わず口にする永井。この島に上陸して以降、三沢の行動は理解できないことだらけだ。ヘリの墜落で死亡した沖田たちを放置してその場を離れ、遊園地では怪しげな薬を持っていった。それらのことを訊ねても、何も答えてくれない。この船に乗り込んだこともそうだ。三沢はただ「船を探索する」と言っただけで、その目的などは言わなかった。生存者の搜索とも思ったが、それさえも放棄している。三沢が何を考えているのか、まったく判らない。

また、背後で気配がした。

同時に、今度はびくんと身体が震え、一瞬だけ甲板に立つ自分の背中が見えた。屍人に見つかった合図だ。

振り返ると、船の乗降口の前に、赤い着物を着て、頭に大きな髪飾りをいくつも着けた女の屍人がいた。手には、樹木の伐採に使うような大きな鋸のこぎりを持っている。襲われる。そう思い、銃を構える。

だが、屍人は永井を一瞥しただけで、そのまま走って階段を下りて行った。

銃を下ろす永井。屍人に見つかったのに襲われなかったのはこれが初めてだ。人を襲わない屍人もいるのか、と一瞬思ったが、はつとして気付く。もしかしたら、さっきの少女を追っているのかもしれない。だとしたら、すぐに助けなければ。だが、三沢は行ってしまった。別行動をすることになるが、許可を得ている猶予は無い。永井は自らの判断で行動することにした。

階段を下りようとして、思わず足を止めた。船の乗降口を見る。通常はタラップを着けて乗り降りするが、ここは港ではないから、当然タラップなど無い。そのため、避難用の縄梯子が吊るされており、永井たちもそれを使って船内へ入ったのだが、その縄梯子が切断されていたのだ。さっきの屍人がやったのだろうか？ 乗降口から地上までは十メートルほどだ。とても飛び下りられる高さではない。船から脱出するには、別の方法を見つけなければならぬ。だが、それは後だ。まずは少女を保護しなければ。

階段を下りると、左手側に『機関室』というプレートが貼られた扉があった。開けて中に入ると、薄暗い通路が続いている。少し進むと右舷側に出る扉があるが、その手前、左手側に『機関制御室』というプレートが貼られた扉があり、着物女の屍人はその前にいた。

「ぶわけものおんぬあああ!!」

呂律の回らない声で叫び、激しく扉を叩いている。少女はあの中に閉じこもっているのだろうか？ 屍人は永井に気付いていないのか、そのまま扉を叩き続けている。隙だらけだった。容赦なく小銃を撃ち、倒した。

そして、永井は機関制御室の扉を叩く。

「君！ 無事かい!? 僕は自衛官の永井頼人！ 君を助けに来たんだ！ 化物は倒したから、ここを開けて！」

しばらく呼びかけると、やがて鍵を開ける音がして、ゆっくりと扉が開いた。少女が恐る恐る顔を出す。最初は怯えた表情だったが、倒れている屍人を確認すると安堵の表情になり、そして、いきなり永井に抱きついてきた。

「怖かった……ずっと一人で……本当に怖かったの……」

少女は、岸田百合と名乗った。話によると、津波に襲われる前に一緒にいた若い男は、屍人に襲われた際、百合を置いて逃げたそうだ。「それは、ヒドイ話だね。安心して。僕たちは、君を見捨てたりしないから。すぐに脱出したいけど、船には、僕の上官も乗っているんだ。たぶん操舵室にいると思うから、一度合流しよう」

そう言うと、百合は。

「いやっ!!」

永井の言葉を拒絶するように離れた。「あの人はいや! 絶対にいや!!」

そう言えば、あの赤い津波が襲う前に百合と出会った時、光を嫌う百合に対し、三沢は必要以上にライトを当てていた。あれで不信感を持ったのかもしれない。

「お願い頼人。あたしと二人で逃げよう?」

百合は永井を下の名前で呼ぶと、永井の手を取り、二の腕に胸を押し当てた。ずいぶんと積極的な娘だ。もちろん、このような危機的状況では不安だろうし、百合のような少女に頼りにされるのは、男として悪い気はしない。

びくと身体が震え、自分と百合の姿が見えた。着物女の屍人がよみがえっている。屍人は倒してもまたよみがえることは永井も知っていたが、あまりにも早い復活だ。

大鋸を振り上げて襲って来る屍人。もちろん、小銃を持つ永井の敵ではない。永井は百合を背後にかばうと、再び銃を撃ち、屍人を倒した。

百合が後ろから抱きついてきた。

「怖いよ、頼人。あたし、本当に怖い。早く行こう? あたしと一緒に行こう?」

背中に当たる胸の感触に、永井はごくりと唾を飲んだ。だめだ。そんなことを考えている場合ではない。永井は邪まな考えを振り払うと、倒れている屍人を見た。銃がある限りこの屍人は大した脅威ではないが、あのペースでよみがえり続けると厄介だ。銃弾には限りがある。確かに、早めに立ち去った方がいい。

「あ、でも、乗降口にあった縄梯子が切られてるんだ。何か、他の脱出方法を考えないと」

永井がそう言うのと。

「大丈夫。こつちに来て」

永井の手を引き、百合は、乗降口がある左舷とは反対側の通路を進む。階段を上がって右舷甲板へと出ると、救命ボートが吊るされたボートダビットがあった。確かに、あれを使えば脱出できそうだ。ボートダビットを確認する永井。ボートを下ろすためのウインチの電源は入らなかったが、電気が無くても手動で下ろすことができるようにクランクが取り付けられてあった。試しに回してみると、かなり固かったが、なんとか回すことができそうだ。これなら脱出できるだろう。

「さあ、頼人。あたしと一緒に行きましょう」

永井はどうすべきかを考えた。上官である三沢の許可なく別行動をするのは自衛官にあるまじき行為だが、その三沢も、永井に銃口を向けるという自衛官にあるまじき行為を犯している。三沢は上官の資質には欠けると言わざるを得ない。この、いつ命を落とすか判らない状況で、あの男について行くのは危険だ。自分一人ならまだよいが、今はこの少女がいる。まずは、なによりも彼女の安全を優先すべきだろう。ここでこうして考えている間にも、あの着物女の屍人がよみがえって襲ってくるかもしれないのだから。

「——判った。一度、船から脱出しよう」

永井がそう言うのと。

百合は、一瞬、妖しげな笑みを浮かべた。

——バカな男。

そう言いたげな笑みだった。

だが、それは本当に一瞬だったので、恐らく見間違いだろう。

永井は、百合と二人で救命ボートに乗り込み、ブライトウイン号から脱出した。

第三十一話 『破綻』 永井頼人 夜見島／瓜生ヶ森

3：00：59

上官である三沢を残し、岸田百合と二人でブライイトウィン号から脱出した永井頼人は、瀬礼洲地区の北にある瓜生ヶ森にいた。道端の岩に百合を座らせ、話を聞く。百合のような少女が、なぜ、上陸が禁止されたこの島に来たのか。彼女の話によると、島北東部の碑足地域にある遊園地に、母親が囚われているという。

「あの遊園地に、お母さんが……？」

百合の話を反芻するように問う永井。その遊園地には永井も立ち寄った。屍人と化した隊員たちが何名かいたが、他に人の気配は無かった。夜見島は、二十九年前に全島民が失踪するという事件があり、それ以来誰も住んでいないと聞いている。そんな島に、母親が囚われている……にわかには信じられない話だった。いったい誰が、何の為に捕らえたのか。不審なことだらけだ。訊いてみても、百合は首を振るだけだ。

ただ。

「お願い、頼人。あたしを信じて。あたしには、あなたしか頼れる人がいないの」

そう懇願されると、不審な点など大した問題ではないと思えてくる。

「あの、一樹って人にも同じ話をしたんだけど、信じてもらえなかった。誰もあたしを信じてくれない。みんなあたしを裏切る。これで頼人にも信じてもらえなかったら、あたし、もうどうしていいか判らない……」

百合は両手で顔を覆い、嗚咽を漏らしはじめた。

永井の胸に、罪悪感に似た感情が湧きあがってきた。彼女が泣いているのは自分のせいだ、そんな風に思えてくる。彼女の力になりた。男として、彼女を助けなければ。

永井は、百合の両肩に手を置き、「判った、信じるよ」と、力強く言っ

た。

百合が顔を上げた。「本当？ 本当に、信じてくれる？」

「ああ、もちろん。一緒に遊園地に行つて、お母さんを助けよう」

「ありがとう、頼人」

百合は、両手を永井の首の後ろに回した。

そして、顔を近づけ。

「……もうひとつ、お願いがあるの」

耳元でささやく。

「なに？」

「お母さんを助けたら……あたしと、ひとつになってほしいの」

「え？ それつて、どういう意味？」

「ひとつになるのよ。あたしと、頼人が、ひとつに……」

「……………」

永井は百合の目を見た。魂を吸い取られてしまいそうな、妖しげな美しさを秘めた瞳だ。思わず視線を下げると、今度は雨に濡れて潤んだ唇が見えた。わずかに開き、「頼人……」と、吐息のような声で呼ばれた。永井は、貪りつきたい衝動を抑えるのに必死だった。

不意に。

百合の、美しい顔が強張った。

その、強張った百合の顔に、小銃の銃口が突きつけられた。

「……………!!」

永井はとっさに銃口を跳ね上げ、振り返った。

そこに、三沢が立っていた。

「あんた！ 何やってんだよ!!」

上官であることも忘れ、感情のままに叫ぶ永井。市民に銃口を突きつけるなど異常だ。頭がおかしいとしか思えない。

「いやああ!!」

百合は、悲鳴を上げて走り去った。

「あー！ 百合ちゃん！ 待って!!」

追いかけてようとする永井の腕を、三沢が掴んだ。強引に引き寄せられる。



「任務を放棄し、こんなところで女と乳繰り合うとは……貴様は、自衛官の使命を心得ていないのか？」

訓練で多くの部下を震え上がらせてきた三沢。彼の指導に妥協はなく、誰であろうと容赦はなかった。多くの部下、後輩、そして同僚からも恐れられていた。彼の一声で、腰を抜かしてしまう者もいるほどだ。そんな訓練の時とは比べ物にならないほどの恐ろしい声で言う。

だが、今の永井は、上官に対する恐怖よりも、怒りの方が勝まっていた。

永井は三沢の手を振り払った。「何が自衛官の使命だ！ あんたなんか、そんなことを言われる筋合いはない！」

「なんだと？ 貴様、それが上官に対する態度か？」顔を歪める三沢。感情の表現が乏しい分、能面に睨まれているような得体の知れない恐ろしさがあるが、もはや永井には関係ない。

「上官？ あんたなんかを上官だなんて思えるかよ！ なんであんたなんだよ！ なんであんたが生き残って、沖田さんが死ななきやならないんだ!!」

言ってもどうにもならないことであり、言っではならないことだとも判っていたが、もう止められなかった。大した熱意も無く自衛隊に入った永井を指導し、自衛官の使命を教えてくれた沖田。もつと沖田の下で学びたかった。この不可解な状況下を沖田に導いてほしかった。沖田と一緒になら、この危機的状況を乗り越えられただろう。だが、沖田はもういない。いるのは、何を考えているのか判らない、頭がおかしいとしか思えない三沢だけだ。

「クソ！ もうやってられっか！ 任務なんかクソ喰らえ!!」

永井は吐き捨てるように言うと、逃げた百合を追い、走った。

第三十二話 『幻影』 三沢岳明 夜見島金鉾社宅

4：42：40 終了条件2

暴言と共に去った部下の永井頼人を追い、崩谷地区の夜見島金鉾社宅にやってきた三沢岳明は、気分を高揚させる薬を服み、襲ってくる屍人たちを次々と倒していった。敷地内にいた一〇体の屍人をわずか一〇分ほどで始末した三沢は、幻視の能力を使い、他に隠れている屍人がいないか探った。

◇

夜見島金鉾社宅の敷地内には、中央にイ棟、及び口棟のふたつの団地と、南西部に小さな児童公園がある。幻視でくまなく探ってみたが、屍人の気配は感じなかった。もうこの敷地内には誰もいない。

ただ、北西の方向に、かなり不鮮明ではあるが何者かの視点を見つけた。畳敷きの狭い部屋で、膝を抱き、すすり泣いている。幻視の能力は、対象が近いほど鮮明な映像になり、遠くなればなるほど不鮮明な映像となる。この視点の主は、かなり離れた場所にいるのだろう。

幻視をやめ、気配があつた北西の方向に目を凝らす。そこには小高い丘があり、その上に、うっすらともう一棟団地があるのが見えた。夜見島金鉾社宅の八棟だ。丘の斜面には階段が設けられており、それを使えば行けるようだ。ただ、階段の手前にはフェンス製のゲートがあり、南京錠で鍵がかけられてある。

どうすべきか考える三沢。いまの目的は永井を探すことだ。任務を放棄し逃亡したからといって放っておくわけにはいかない。上官として、本部へ連れ帰り相応の罰を与える義務がある。丘の上の団地にいるのは永井ではない。他にも誰かいるかもしれないが、階段手前の門が閉ざされている以上、永井が丘に上がった可能性は極めて低いだろう。通常ならば行く必要はない。早くこの場を去り、永井を探さなければならぬ。しかし、三沢は去るのをためらった。丘の上の団

地ですすり泣く者の声は、屍人のような呂律の回らない声ではなく、生きている人間の――それも、幼い少女のものだったからだ。もちろん、生存者の少女が一人で泣いているのであれば、なにもためらうことはない。一刻も早く保護すべきだ。それでも三沢がためらってしまうのは、とある少女の言葉が頭をよぎったからだ。

――見ちゃだめ。

二年前からずっと、三沢を苦しめているその言葉。見てはいけない。このまま立ち去った方がいい。本能は、そう警告している。

大きく頭を振り、考えを振り払う三沢。少女が一人で泣いているのだ。そこにどんな危険があろうとも、放置してそのまま去るなど、できるはずがない。三沢は意を決すると、丘の上へ向かうことにした。階段手前のフェンスゲートは南京錠で閉ざされているが、長年風雨にさらされていたため、蝶番の部分がかなり劣化していた。何度か強い力で蹴ると、簡単に壊すことができた。

だが、ゲートを壊したと同時にびくんと身体が震え、団地の屋上から小銃を構える視点が見えた。次の瞬間、八棟の方向から銃声が響き、三沢の左の二の腕から、小さく爆発するように血飛沫しづきが飛び散った。

――クソツツ!!

反射的に走り、そばにあった樹の陰に身を隠そうとする三沢。もう一度銃声が出て、今度は右足のふくらはぎが切り裂かれた。それでも左足で跳ねながら、なんとか樹の陰に身を隠す。幻視をし、銃撃してきた者の視点を探した。丘の上の八棟の屋上に、小銃を構えた屍人の視点を発見した。三沢が隠れている樹に狙いを定め、顔を出すのを待っているのか、いまのところ撃つ気配はない。三沢は幻視をやめると、今度は撃たれた傷を確認する。二の腕の傷は弾が貫通しており、ふくらはぎは肉をえぐられただけで、どちらも骨に異常は無かった。事前に飲んだ薬の影響で気分が高まっており、痛みもそれほど感じない。これなら大丈夫だ。右腕と左足さえあれば充分狙撃する自信が

ある。今の状態でも、屍人相手に撃ち負ける気はしなかった。

三沢は樹の陰から出ると、社宅の屋上に向けて銃を構えた。狙いを定め、引き金を引こうとしたが、それよりも先に銃声が響き、左肩に大きな衝撃があった。体勢を崩し、尻餅をついて倒れる三沢。さらに銃声がしたが、とつさに身をひるがえして樹の陰に隠れ、なんとか横腹を掠めただけで済んだ。三沢は小さく笑った。ここまで四発の銃撃。致命傷にはならなかったとはいえ、全て命中させている。屍人のぶんざいでかなりの精度の高い射撃だ。生きていたなら、恐らく三沢に匹敵するほどの腕だろう。それほどの射撃の腕を持つ者は、三沢の所属する隊には一人しかいない。

——沖田か。

沖田宏。三沢の後輩で、彼が一目置くほどの優秀な隊員だった。気分がさらに高揚してくる。遊園地で屍人化した際、沖田は銃弾の装填さえまともに行えないほど無様な姿を晒していた。それがいま、怪我をしているとはいえ三沢が撃ち負けるほどの腕前となっている。それが、なぜだか妙に嬉しかった。

無論、相手が沖田だからといって殺られるわけにはいかない。

どうする？ 四発の銃弾を喰らい、かなり分が悪くなった。このまま身をひそめていれば狙撃される可能性は低いが、それでは事態は悪化するだけだ。三沢が敷地内の屍人を全滅させてからすでに五分近く経つ。そろそろ倒した奴らもよみがえる頃だ。そうなったら、もはや逃げ場はない。その前に別の場所に隠れなければ。一か八か、怪我をした足で走るしかないか……そう考えていた時、三沢はふくらはぎの出血がすでに止まっていることに気がついた。驚くべきことに、傷がふさがろうとしている。二の腕の傷と違い比較的軽症ではあったものの、それにしてもあまりにも早い回復だ。何が起こっているのかは判らないが、今さら驚く必要はないかもしれない。ここは死者がよみがえって歩き回る島なのだ。傷が早く治ることもあるだろう。そう考えた三沢は、樹の陰から跳び出し、団地の口棟へ向かって走った。背後で銃声が響くが、さすがに全力疾走している三沢を捕らえることはできなかつた。三沢はどうか口棟の東側に回り込み、沖田の銃撃

から逃れることができた。

だが、びくんと身体が震える。別の屍人に見つかった。予想した通り、先に倒した屍人がよみがえったのだ。幸い最初に倒した銃剣を持った屍人だったので片手で銃を撃ち撃退することができたが、すぐに機関拳銃や小銃を持った屍人もよみがえるだろう。ここにいてもまだ危険だ。この敷地内の屍人は全て屋外へおびき出した。ならば、団地内はしばらく安全だろう。三沢は口棟内に入ると、玄関が開いていた101号室に入り、ドアを閉めて鍵をかけた。

部屋は、台所を抜けた先がリビングで、その奥が寝室だ。三沢は奥の部屋まで移動する。部屋中に光線銃やらロボットやらの子供の玩具が散乱していたので、それらをどかして腰を下ろした。怪我の具合を見る。ふくらはぎの傷はもう完全に塞がっている。二の腕の傷もすでに塞がりかけており、肩と腹の傷も血が止まりかけていた。この様子なら、少し休めば全快するだろう。三沢は幻視で周囲の様子を探りつつ、傷が癒えるのを待つことにした。

三沢が倒したイ棟・ロ棟周辺の屍人が続々とよみがえっていた。もつとも、奴らは大した脅威ではない。問題は、やはり丘の上のハ棟の屋上にいる沖田だろう。幻視でハ棟方面の様子を探る。距離があるためかなり不鮮明な映像だったが、なんとか沖田の視点を見つけ出した。三沢が隠れているロ棟を見下ろす位置で銃を構え、周囲を警戒している。この様子なら、注意が逸れた隙に狙撃する——例えば、ロ棟の北側を警戒している時に反対の南側から狙撃する——ことができそうだ。いかに相手が沖田とはいえ所詮は屍人。傷さえ癒えれば敵ではない。

だが、しばらく様子を見てみると、沖田は銃口を上げ、屋上の奥へ下がり始めた。映像がさらに不鮮明になる。やがて完全に奥へ引つ込むと、映像はノイズだけになった。

幻視をやめる三沢。これでは沖田の様子が判らないし、奥に引つ込まれては丘の下から狙うこともできない。しかし、近づけば向こうからの狙撃を許してしまう。なんとかおびき出すことはできないだろうか。奴の注意を引くものがあれば。三沢は部屋内を見回した。散

乱する玩具にまぎれて、リール式の電気コードがあった。屋外で使うもので、長さは十メートルほどあるだろう。

「……………」

三沢はコードを持って台所へ行くと、ガスコンロの栓をひねった。夜見島のガスはプロパンだから恐らく使えるだろう。点火スイッチを回すと、思った通り火が点いた。これは利用できそうだ。一度火を止めた三沢は、ナイフを取り出し、ガスのホースを切断した。しゅうしゅうと音を立ててガスが漏れ出す。三沢は電気コードを持って外に出ると、玄関を閉めた。そして、ナイフで電気コードのプラグ部分を切断して銅線をむき出し、ドアの新聞受けから挿し込んだ。リールを伸ばし、周囲を警戒しながら団地の外へ出て安全な場所まで移動する。そして、コードの反対側も切断して銅線を出すと、夜見島遊園で見つけた起爆装置を取り出し、コードを取り付けた。そのまま部屋内にガスが充満するのを待つ。何度か屍人に見つかり襲われたが、所詮雑魚だ。小銃で簡単に迎撃する。

そして、部屋内にガスが充満し、傷も癒えたところで、三沢は起爆装置のスイッチを捻った。地面がかすかに揺れるほどの爆発音。同時に、窓ガラスが割れ、玄関のドアが吹き飛ぶ音もする。団地全体が揺れ、パラパラとコンクリートの欠片が落ちて来た。三沢は幻視で屍人たちの様子を探る。敷地内にいた屍人たちは皆、101号室がある口棟南側に様子を見に来ている。沖田はどうだ？　ハ棟屋上に意識を飛ばした。しばらくはノイズだらけで何も見えなかったが、やがて不鮮明な映像が浮かび上がってきた。徐々に鮮明な映像になり、窓から黒煙が上がる口棟101号室を見下ろす映像がはつきりと見えた。今がチャンスだ。三沢は101号室とは反対側の口棟北側へ回り込み、ハ棟屋上に向けて銃を構えた。沖田の注意は完全に101号室に向けられている。引き金を引いた。三沢の放った弾丸は、一発で沖田の頭部を撃ち抜いた。

ふう、と、大きく息を吐き、銃口を下ろす三沢。これで邪魔者はいなくなった。三沢はフェンスゲートを抜けると、階段を上がって社宅ハ棟へ向かった。

幻視で八棟内を探ると、少女は先ほどと同じく畳張りの部屋で膝を抱えて泣いていた。映像からはどこの部屋にいるのかは判らないが、意識を向けている方向からある程度の位置は絞り込むことができる。少女の視点は一階の中央部付近だ。恐らく102号室か103号室だろう。まずは102号室へ向かう。部屋は先ほどの口棟101号室とほとんど同じ間取りだ。玄関から台所を抜けるとリビングで、その奥が寝室。奥まで行くと、少女は三沢に背を向ける格好で泣いていた。泥まみれのシャツを着たおさげ髪の少女だった。三沢は声を掛けようとしたが、気配に驚いたのか、少女は押し入れの中に入り、ぴしやりとふすまを閉めて隠れてしまった。

「——大丈夫だよ」

三沢は、隊の仲間たちには絶対にしない優しい声で言い、笑顔さえ浮かべ、少女に呼びかけた。「おじさん、君を助けに来たんだ。怖がらなくていいから、出ておいで」

その瞬間。

——大丈夫だよ。おじさん、みんなを助けに来たんだ。怖がらなくていいから、出ておいで。

再び、二年前の記憶がよみがえる。

二年前、山間のある村で起こった土砂災害。救助活動のために出動した三沢は、災害発生から約七十七時間後、一人の少女を保護した。そう言えば、いま隠れた少女の背格好は、あのとき救出した少女とまったく同じだ。

三沢の汗が急激に冷えていった。あのときの少女が——二年もの間三沢に悪夢を見せ続けるあの少女が、いま、押し入れのふすま一枚隔てた向こう側にいる。

いや、そんなはずはない。考えを振り払う。あの村と夜見島は一〇〇キロ以上離れている。少女は今もあの村で暮らしているはずだ。なんらかの理由でこの島に訪れていた——その可能性は極めてゼロに近いが、絶対に無いとも言切れない——としても、三沢が少女を救出したのは二年前の話だ。成長期の少女が、二年も前と同じ背格好であるはずがない。

——大丈夫だ。あの少女が、ここにいるはずがない。俺の勘違いだ。

そう、自分に言い聞かせ。

三沢は、押し入れの前にしゃがむと。

「開けるよ?」

静かに、ふすまを開けた。

押し入れの中には、果てしない闇が広がっていた。

部屋の明かりも、三沢のライトも、なにをもつてしても、決して照らすことができない闇が、どこまでも続いていた。

そして。

「……だから、見ちゃだめって、言ってるでしょ?」

不意に、耳元でささやかれた。

その瞬間。

闇から、黒い手が伸びてくる。

三沢の首を掴み、闇の中へ引きずり込もうとする。

もう一本手が伸びてきて、足を掴んだ。さらにもう一本伸びてきて、腕を掴んだ。さらにもう一本、さらにもう一本……闇の中から伸びてきた無数の手が三沢を掴み、引きずり込もうとする。

「……ああああ!!」

言葉にならない悲鳴を上げ、三沢は、小銃を乱射した。狙いを定めることもせず、ただ引き金を引き続けた。押し入れの闇だけでなく、ふすまも、天井も、窓も、壁も、畳も、全てに銃弾を撃ち込んだ。小銃の弾が切れたら、拳銃を取り出して撃った。拳銃が弾切れになったら、次はナイフを取り出して振り回した。ただがむしやらに振り回した。

どれくらい、そうしていたのか。

三沢は、一人で部屋にいた。

天井、壁、窓、床、いたるところに銃弾が撃ち込まれて穴があき、あけるいはナイフで斬り裂かれている。少女の姿など、どこにも無い。押し入れの中の闇も存在しない。部屋の明かりが押し入れの中まで入り、銃弾の跡を照らし出している。もちろん、闇の中から伸びてきた



無数の手も、無い。

全ては、幻影だったのだろうか。

胸の奥から笑いが込み上げてきた。耐え切れず、三沢は笑った。声を上げて笑い続けた。二年前のあの日から、毎日のように夢に現れる少女。三沢を苦しめる悪夢。ついには、起きているときにも見るようになった。三沢の心はどんどん浸食されている。この悪夢はいつまで続くのだろうか？ 逃れる術は無いのだろうか？

この苦しみを、誰かに聞いて欲しかった。打ち明けたかった。理解してほしかった。だが、子供じやあるまいし、怖い夢を見る、などと、話せるわけがない。その葛藤が、さらに三沢を苦しめた。

だから。

——自分、いまだに信じられないんです……もう、なにがなんだかわからなくて、全部夢なんじゃないかって気もします。

森の中の座礁船で、あまりにあっけらかんと胸の内の不安を吐露する永井を疎ましく思い、思わず銃口を向けてしまった。忌々しかった。自分は胸の内の恐怖を誰にも相談できないのに、永井はそれをあっさりと——それも、今までほとんど口を利いたことのない男に——話したのだ。憎しみさえ抱くほどだった。

だが、同時に。

あのととき三沢は、永井をうらやましくも思ったのだ。

ああやって誰かに胸の内の不安を吐露すれば、自分も楽になれるのだろうか？ 恥を捨て誰かに恐怖を語れば、この悪夢から逃れられるのだろうか？ だが、誰に話す？ こんな話を真剣に聞いてくれる者がいるだろうか？ この不安と恐怖を取り除いてくれる者がいるだろうか？

「——いないよ。だって、たった一人のお友達は、おじさんが自分で撃ち殺しちやっただじゃん」

耳元で、少女にささやかれた。

三沢の絶叫が、社宅内に響き渡った。

第三十三話 『呪詛』 三沢岳明 羽生蛇村／土砂災害現場 2年前

二〇〇三年八月三日深夜、三隅郡羽生蛇村を襲った大規模な土砂災害は、甚大な被害を出していた。

被害は、刈割、下粗戸、折部など複数の地区に渡り、多くの住人と連絡が取れなくなった。事態を重く見た三隅郡役場は、災害発生直後に自衛隊へ派遣を要請。警察、消防、などが一丸となって救助活動に当たった。

災害発生から四十八時間が経過し、残念ながら三名の死亡を確認したが、同時に十五名の村人を救出することができた。それらはいずれも土砂災害があった地区の周辺に住む村人たちで、二次被害によって倒壊した家屋の下敷きとなっていたところを発見され、救助、あるいは収容されたのだった。

それに対し、土砂災害の直接被害に遭った地区の救助活動はなかなか進まなかった。生存者の発見はおろか、遺体の収容さえゼロである。現場の救助活動は難航していた。と、言うよりも、何ひとつ進行していなかった。なぜなら、災害現場には何も無かったからだ。そこはただ土砂が広がっているだけで、生存者も、遺体も、倒壊した家屋やビルさえも存在しなかったのだ。救助隊は大型の重機はもちろん、小回りの利く小型重機、あるいは手作業で土砂を除去し搜索を続けたが、土の下からは瓦礫ひとつ出てこない。それは、地区が土砂に埋もれたのではなく、丸ごと消失したかのような光景だった。

救助隊の間に得体の知れない恐怖が広がる中、時間は刻々と過ぎてゆき、やがて、八月六日を迎えた。災害発生から七十二時間が経過したことになる。一般的に、これ以降の生存者の救出率は著しく下がると言われている。

隊員たちの間に悲壮感が漂い始めた、その六日早朝。

下粗戸の災害発生現場から二キロ南にある地区で、災害発生当初か

ら行方不明だった村の小学生女兒一名を発見・保護したとの報告が入った。それは、諦めかけていた救助隊に、希望の光が射した瞬間だった。

☆

自衛隊所属の三沢岳明一等陸尉は、上空でホバリングするヘリから垂らされたロープを取り、先端の金具を救助具に取り付けた。三沢のそばには、彼が一時間ほど前に保護した少女がいる。怪我は無く、体調も悪くないという。確かに見た限り外傷はないし、三日三晩何も口にしなかったとは思えないほど顔色も良い。ただ、心の方は大きな傷を負っているように思えた。三沢は救助時に少女から話を聞いたのだが、その内容はあまりにも現実味を欠いていた。災害発生直後、死んだ村人たちが屍人という化物となってよみがえり、襲ってきたと言うのだ。恐らく少女は、多くの村人の死を目撃し、その恐怖が幻影を生み出したのだろう。そういった現実味に欠く部分を排除して少女の話を整理すると、八月二日の夜、少女は小学校が企画した『星を見る会』という天体観測のイベントに参加し、そこで災害に巻き込まれたようだ。発生当初は担任教師と行動を共にしていたそうだが、八月四日の深夜、担任教師は少女を護るために死亡。以後、少女は四十八時間以上一人で行動していたらしい。

少女が心に負った傷は計り知れないが、残念ながら、三沢にできることは何も無い。救助者の心のケアは三沢の仕事ではない。いま三沢がすべきことは、少女を無事医療施設まで届けることだった。

三沢は普段は絶対に誰にも見せない笑顔で少女の目線にしゃがむと、少女の救命具にもロープを取り付けた。

「高くて怖いかもしれないけど、おじさんにしっかりと掴まって、下を見ないようにすれば、大丈夫だからね」

優しい声で言った。少女は不安そうな表情ながらも頷いた。三沢は少女の頭を撫でると、しっかりと抱きかかえ、無線で準備完了を告げた。ヘリから《了解》の返事があり、三沢たちはロープで引き上げ

られる。『ホイスト救助』と呼ばれる、ヘリからロープで吊り上げる救助方法だ。

災害現場でこのホイスト救助を行うにはかなりのリスクを伴う。通常、この救助を行うヘリは、上空二十メートルから三十メートルでホバリングする。しかし、災害現場でこの高度でホバリングを行うと、ヘリが起こす風が周辺の瓦礫を吹き飛ばしてしまうことがあり危険なのだ。また、土埃を巻き上げ視界も奪われやすい。そのため、今回ヘリは通常の倍ほどの高さである上空五十メートルでホバリングしていた。ホイスト救助が行える限界の高さと言つていい。当然高度が上がると救出までの時間がかかり、それだけ危険は増す。上空に行けば行くほど風は強くなる傾向にあり、まして羽生蛇村は山間で風向きが変わりやすい。ホバリングし続けるのも困難を伴う。少しでもヘリが風に流されたり、万が一にも飛行姿勢が崩れたら、最悪の場合墜落の危険もある。無論、ロープで吊られている三沢も神経を使わなければならない。風は、当然三沢たちにも襲い掛かる。少しでも体勢を崩すと危険だ。最初はほんのわずかな揺れであっても、振り子の要領で揺れはどんどん大きくなる。途中から立て直すのは熟練の隊員でも極めて困難だ。だから、地上からヘリに収容されるまで、体勢を崩さないようにしなければならない。

つまり、今回の救助活動は、ヘリの操縦士と救助隊員どちらにも高度な技術が必要とされるのだ。同時に、二者の息をピッタリと合わす必要もある。

だが、三沢は心配などしていなかった。ヘリを操縦しているのは彼の後輩の沖田宏だ。隊内でも特に優秀な男で、三沢とは何度もコンビを組んでおり、ヘリの操縦はもちろん、あらゆる面で全幅の信頼を寄せている。

引き上げは順調に進んだ。ヘリは上空でぴたりと静止しており、安定している。運よく風も穏やかだ。ホイスト救助では高さに驚いた救助者がパニックになって暴れることもまれにあるが、少女は三沢にしつかりと捕まり、目を閉じて下を見ないようにしている。このまま問題なく救助は完了するだろう。そう思った。

だが。

残り十メートルほどの地点で、三沢は違和感を覚えた。

風は相変わらず穏やかだ。へりは安定してホバリングしており、三沢も体勢を崩していない。それでも、何かがおかしい。何かが……来る。そんな感じがした。

三沢は、下を見た。

地面から、何かが迫っていた。黒い物だった。

初めはカラスかトンビなどの鳥かと思った。だが、その姿はあまりに鳥とはかけ離れていた。地面からまっすぐ伸びていて、その先端が細く五つに分かれている。

手だった。

地面から、黒い手が伸び出ているのだ。

三沢は、見間違いをしたのだとばかりに何度も瞬きをした。だが、確かにそこには黒い手があつて、三沢に迫ってくる。一本ではない。二本、三本と、次々と地面から伸び出てきて、三沢に迫る。

「——見ちゃ、だめ」

少女がつぶやいた。「見たら、おじさんも……になっちゃう」

少女の言葉はよく聞き取れなかった。少女を見る。少女は目を閉じ、顔を伏せ、下を見ないようにしていた。

黒い手が、三沢の右足を掴んだ。はつきりとした感触がある。幻なんかではない。もう一本手が伸びてきて、逆の足を掴んだ。強い力で引っ張る。さらに手が伸びてきて、腕を掴む。さらに伸びてきて、頭を掴む。無数の手が、三沢を掴み、引きずりおろそうとする。

三沢は、声にならない悲鳴を上げた。

《……三沢さん!? 三沢一尉!! どうしました!? しっかりしてください!! 三沢一尉!!》

沖田からの無線で、三沢は我に返った。

眼下には、瓦礫と土砂が広がっていた。無数の黒い手など、どこにも存在しなかった。

「——な——い」

少女が何かつぶやいたが、それはへりの音に掻き消され、三沢の耳

には届かなかった。

☆

結局この救助は何の問題も無く進み、少女は無事救助された。

村での救助活動はその後も続けられたが、これ以降生存者の発見は無く、最終的な行方不明者は三十三名となった。

救助された少女は『奇跡の生還』とされ、週刊誌やテレビなどで大々的に取り上げられた。また、困難な救助活動を成功させた三沢と沖田は隊員から称賛され、表彰もされた。

だが――。

この日以降、三沢は悪夢を見続けている。

第三十四話 『迷道』 一樹守 夜見島遊園／コー  
ヒーカップ 3：45：28 終了条件2

些細な意見の違いから仲たがいをし、去ってしまった岸田百合を探す一樹守は、島の北東部にある夜見島遊園に来ていた。そこで百合と再会した守は、この遊園地に囚われているという百合の母親を救うため、彼女が歌う詩を元に、遊園地内にある石碑を解放し始めた。そして、ふたつの石碑を解放し、コーヒーカップのある丘から観覧車のあがる丘へ向かう途中、丘を繋ぐ連絡橋の上で百合が立ち止まり、南の方向を見た。そこに石碑は無いが、わずかに母親の気配を感じると言う。一樹が幻視で確認すると、南には遊園地の正門があり、その外に、貝殻を何枚も重ねたようなものが落ちていた。だが、正門の前では小銃を持った屍人が見張っており、近づくのは危険だった。その貝殻のようなもの手に入れるには、何か策を用いる必要があるが……。

◇

一樹は連絡橋の下を見た。そこは噴水や時計塔がある広場となっていて、子供用のパンダカーも置いてあった。その名の通りパンダの形をした電動車で、お金を投入すると音楽が流れて一定時間運転できるというものだ。あれを利用しよう。一樹は百合を連れ、一度コーヒーカップのある丘に戻ると、階段を使って噴水広場に下りた。そして、パンダカーを使おうとしたのだが。

「——ぶうるるわあらあかかうえれむおんおんのおんぬるいわうわ！」

一樹たちの背後、遊園地の裏門がある方向から奇声が聞こえた。同時にびくと身体が震える。振り返ると、赤い着物を着た若い女の屍人が、樹木の伐採に使うような大きな鋸を持って迫っていた。見覚えがあった。赤い津波に襲われた直後の瓜生ヶ森で、いきなり百合に掴み掛ってきた頭のおかしな女だ。あのときと同じ、いや、あのとき以

上に恐ろしい形相で、まっすぐ百合へと向かって来る。

「……ウソでしょ？　ここまで追つて来たの？」百合の顔に浮かんだのは、恐怖ではなく呆れの感情だった。「守と別れた後も、ずっと追われてたの。船に閉じ込めたから、今度こそ逃げられたと思ったのに」百合は、あの女のことを全然知らない人と言っていた。つけ狙われる理由にも心当たりが無いらしい。頭がおかしいとしか言いようがない。そんな女が屍人化したとなると、危険極まりない存在だ。一樹は百合を護るように出で、拳銃を構えた。この銃は、ここに来る途中で屍人から奪ったものだ。予備の弾もあるが決して多くないし、銃声を正門前にいる小銃屍人に聞かれる可能性もあるが、ためらってはいられなかった。一気に三発撃った。そのすべてが女の胴体に命中する。しかし、女はわずかに怯んだだけで倒れなかった。大鋸を振り上げ、まだ襲ってくる。さらに三度引き金を引く。計六発撃ちこんだところで、ようやく女は倒れた。

だが、それで安心はできない。今の銃声を小銃屍人に聞かれていたらずい。この拳銃の装弾数は九発。六発撃ったから、残り三発しかない。もしいま小銃屍人に襲われたら、反撃すらままならないだろう。素早く幻視をして小銃屍人の様子を探った。幸い、屍人は正門前から動いていなかった。どうやら気づかれなかったようだ。

「気を付けて、守」百合が一樹の肩に手を置いた。「その女、復活が早い。何かに強く執着して死んだ人は、屍霊を引き寄せやすいのよ。なんでそんなにあたしに執着するのか、全然身に覚えは無いんだけど」

一樹は倒れている着物女の屍人に注意を払いながら拳銃に弾を装填する。銃弾はこれで全部だ。これ以上無駄撃ちはできない。一樹は、倒れた女の手から大鋸を奪い取った。重量があるので振り回すのは難しいが、その分威力はあるだろうし、リーチも長い。武器としては角材や火掻き棒などよりはるかに強力だろう。これを使えば銃弾を節約できるし、女が復活した時の脅威も格段に減る。使わせてもらう。

一樹たちは女の元を離れ、パンダカーのそばに戻った。パンダカー



を正門の方へ向け、連続で小銃を投入する。パンダカーは陽気なメロデーを奏でながら進み出した。一樹は百合と共に時計塔の後ろに隠れ、幻視で様子を窺った。ゆっくりと進んでいくパンダカー。やがて小銃屍人が気付いた。正門の前から離れ、パンダカーへ近づく。しばらくして立ち止まり、目の前を通過するパンダカーをじつと見つめた。パンダカーはそのまま屍人の前を通り過ぎる。屍人は一樹に背を向ける格好になった。今がチャンスだ。一樹は銃を構え、しゃがみ走り、屍人の背後に近寄ると、引き金を引いた。不意打ちが効き、屍人は一発で倒れた。

百合を呼び、正門の前へ移動する。鉄格子の門の向こうに、貝殻を何枚も重ねたようなものが落ちていた。だが、門は南京錠で閉ざされており、高さは三メートル近くあつてとても越えられそうにない。南京錠を開けるしかないが、当然鍵など持つていない。壊すしかないだろう。一樹は南京錠に向けて拳銃を構え、引き金を引いた。映画やドラマなどではすぐに壊すことができるのだが、小さな南京錠に弾を当てるのはかなり困難で、六発撃つてようやく壊すことができた。正門を開け、落ちている貝殻のようなものを取る。薄桃色で、ライトの光を反射し、虹色に鈍く輝いていた。どうやら魚の鱗のようだ。ただ、一枚一枚が手のひらより少し小さいくらいのものである。鱗がこの大きさだと、魚の体長は十メートル以上になるのではないだろうか？もちろん、その大きさの魚もいないわけではないのだが。

「守、ありがとう」

百合が手を出したので、一樹はその鱗を渡した。

「やっぱり、これ、お母さんのだ」

百合は愛おしそうにそれを抱きしめた。お母さんのもの……アクセサリーなのだろうか？しかし、それは加工も何もされておらず、ただ大きな魚から抜け落ちた鱗でしかないように思える。

びくん、と身体が震え、一瞬正門前にたたずむ自分と百合の姿が見えた。着物女の屍人が復活し、迫っている。一樹は大鋸を持って前に出た。首を絞めようと手を伸ばす女に向かって鋸を振り下ろす。拳銃の弾を数発喰らっても倒れない女だ。鋸で倒すのはかなり苦労し

だが、相手が素手だったため、なんとか倒すことができた。

「相手をしているとキリが無いわね」百合が言った。「急ぐう？ お母さん、もう近くにいますわ」

百合は、笑みを浮かべて一樹の手を引いた。

そして。

その後、七つの門と七つの鍵を解放した一樹守は、『冥府』へと下りてゆく――。

第三十五話 『代役』 阿部倉司 夜見島／第1砲台  
跡 3：47：08 終了条件2

屍人に襲われ、愛犬のツカサと離れ離れになってしまった三上脩は、瓜生ヶ森でヤンキー姿の男・阿部倉司と出会い、行動を共にすることになる。貝追崎の要塞跡から脱出するため南東を目指すが、崖の上の道へ行くための階段が崩れており、そのままでは登れそうになり。何か踏み台になりそうなものがあれば上がれるのだが……三上たちは、周囲を見回した。

◇

「お？ いいもんがあるじゃねえか」

阿部は近くにドラム缶があるのを見つけた。阿部を幻視している三上も、そのドラム缶を確認する。確かに、それを使えば崖の上へ行くことができそうだ。さつそく阿部が崖下へ動かそうとしたのだが。

「……阿部君、少し待ってくれ」三上は止めた。

「ん？ どうした、先生？」

「南東の方向——高い山と、鉄塔がある方向を見てくれないか？」

「山と鉄塔……ああ、あれか」阿部も気付いていたのだろう。すぐに南東の方向を向いた。「あれは、オレも気になってたんだよな」

阿部の視線の先には、夜見島で最も高い山・四鳴山がある。最も高いといっても標高は百メートルほどだが、その頂<sup>いただき</sup>付近には、山の倍にも及ぶ高さの鉄塔がそびえ立っていた。その高さは二百メートルにもなり、日本でも数ヶ所しかない規模の極めて珍しい鉄塔である。だが、三上が気になったのは鉄塔自体ではない。現在上空には厚い雲が立ち込めているのだが、その鉄塔の周囲だけ雲が無く、ぽっかりと穴が空いているのだ。鉄塔の先端は、その穴の中に消えている。また、周囲の雲も、まるで排水溝に飲み込まれる水のように、その穴に次々と吸い込まれているのだ。さらには、この場所からは穴の向こう側が

わずかに見えるのだが、そこには、逆さまになった鉄塔と山、そして、鳩の形をした島が見えるのだ。それは、上空に逆さまの夜見島が浮かんでいるかのような状態、あるいは、上空に巨大な鏡があつて、それに島が映っているかのような光景だった。

「現世は夢、夜の夢こそまこと、か……」三上は、ぽつりとつぶやいた。「ん？ 先生？ なに言つてんだ？」阿部が首を傾げる。

「江戸川乱歩先生がよく色紙に書いたとされている言葉だよ」

阿部は、ぱん、と手を叩いた。「ああ、知ってるぜ。江戸川なんとかつて、あれだろ？ 『真実はいつもひとつ！』つてやつ」

三上は小さく笑う。「君との会話は実に興味深いよ。一見的外れなようで、実はかなり核心をついている」

「……先生、遠回しにオレのことバカにしてるだろ？」

「とんでもない。感心してるんだよ。君の言う通りさ。真実の世界は、ひとつしかない。ここは、真の夜見島ではないんだよ。言うなれば『写し世』の世界かな」

「……よくわかんねーけど、偉大なる先人様の知恵を借りるなら、ここは異界ってことか」

「そうだな。そう考えて差し支えないよ。阿部君。すまないが、脱出はもう少し待ってくれ。少し、この辺りを探索してみたい」

「ここを？ こんな廃墟を調べて、どうすんだ？」

「私はこの島の出身なんだ。でも、子供の頃の話だから、当時の記憶があいまいだね。どこかに記憶の引き出しを開ける鍵があるはずなんだ」

「記憶の引き出しの鍵？」

「ああ。私は、以前もこの要塞跡に来たと思う。その時、私が姉と慕う女性から、何か重要なことを聞いたような気がするんだ。ここを調べれば、それを思い出すかもしれない。まずは、地下に行ってみよう」

「でもよ、地下はあいっすらでいっばいだけ？ 大丈夫かよ」

三上は阿部の幻視をやめ、地下に意識を送ってみた。ピツケルを持った屍人や、野球のバットを持った屍人、さらには、機関銃を持った屍人までいる。

三上は幻視をやめた。「大丈夫。君が護ってくれるからね」

「……やれやれ。とんだムチャ振りをする先生と組んじまったもんだぜ」

阿部は肩をすくめながらも、言われた通り来た道に戻り、地下へ続く階段を下りた。

要塞跡の地下は迷路のように入り組んだ作りになっているが、基地閉鎖後は不要な通路を板で封鎖し、順路を明確に示すなど訪れた人が迷わないように整備されていた。地下の電気は点いていなかったの  
で、阿部の持っていたライトで照らしながら進む。地下道はまず東へと続き、やがて北に折れ曲がった。しばらく進むと右手側に三つの兵舎跡がある。そのまま通路を進めばやがて地下二階へおりの階段があるが、通路の奥から木製バットを持った屍人が迫っていた。こちらは武器を持っていない。二人は、一旦手前の兵舎に身を隠すことにした。

だが、兵舎の中は扉が無いアーチ状の出入口で三部屋がひと続きになつており、身を隠すようなものも無かった。このままでは見つかつてしまうかもしれない。心配した通り、屍人は真ん中の部屋で立ち止まると、向きを変え、中に入った。びくと身体が震える。見つかった。

「フ……どうやらオレ様の阿部式徒手格闘術を披露するときが来たようだな！」

阿部は指の関節を鳴らしながら前に出ると、左ひぎを上げて片足立ちをし、大空を舞う鶴のように両手を広げた。バットを振り上げて迫る屍人。阿部は「あちよー!!」と叫んで手刀を繰り出した。

だが、その手刀が屍人を捕える前に、がきんと、金属がぶつかる音がして、屍人の突進が止まった。目測が外れた阿部は盛大に空振りして転ぶ。屍人は悲鳴を上げ、持っていたバットを落とした。その足に、何か絡みついていた。何かは判らないが、今がチャンスだ。

「阿部君！ 武器を奪うんだ！」

三上の声で立ち上がり、阿部は駆け寄ってバットを拾うと、力任せにスイングして屍人の頭に叩きつけた。屍人は軽く吹っ飛んで倒れ、

動かなくなった。

「どうだい、先生？ いいスイングしてるだろ？」得意げにバットを素振りする阿部。「オレ、こう見えてもガキの頃はスポーツ少年だったんだ。近所の野球チームのレフトで8番だったんだぜ？ スゲエだろ。鬼に金棒、医者にネイルハンマー、オレ様にバットって感じだ」

「……それは頼もしいね」

「それと……コイツも使えそうだな」

阿部は倒れている屍人に近づき、足に絡みついている物を外した。それは、トラバサミと呼ばれる狩猟用の罠だった。鋸状の刃がついた半円の金属板二枚を広げ、獲物がその中に足を入れると強い力で挟み込んで捕らえるのである。現在日本では全面的に使用が禁止されているが、第一次世界大戦中は敵の突撃に備え多用されていたと聞く。その頃の物かもしれない。

武器を手に入れた阿部。バットを肩に乗せ、肩で風を切るように歩く。「オラオラ化け物！ どっからでもかかってこいや！」と、挑発まではじめた。途端に身体が震える。通路の先、地下二階へおりる階段の手前にもう一体屍人がいるようだ。

「ようし、返り討ちだぜ」

阿部はバットを構えた。

しかし、たたたん！ と連続して小さな爆発音が鳴り響いたかと思うと、近くの壁や天井や床の煉瓦が何ヶ所も弾け飛んだ。阿部は首を縮めて後退りする。どうやら相手は機関銃を持っているようだ。

「ヤベエー！ 先生、一旦逃げるぞー！」

さつきまでの威勢はどこへやら。三上の手を引き一目散に逃げる阿部。もう一度兵舎の中に隠れる。幻視で確認すると、屍人は階段の前を離れ、こちらに迫っていた。

「……へっ。ちようどいいぜ」

阿部はさつき拾った狩猟用罠を取り出すと、兵舎の入口付近に仕掛けた。そして、通路から姿を見られない位置に隠れ、屍人が来るのを待つ。相手が近づくとつれ、警告を促すかのような鼓動がどんどん強くなる。そして、屍人が部屋に足を踏み入れたと同時に。

がきん！

激しい金属音がして、屍人は低い悲鳴を上げる。もがきながら武器を落とした。

「はいきたあー！」

阿部はバットを屍人の頭へ叩きつける。かつて少年野球で八番レフトを務めた男のスイングは、一振りで屍人の頭を打ち崩した。

「へへん。オレ様の神スイングの前には、マシンガンもバトルライフルも敵じゃねえぜ。恐れ入ったか化物」

阿部は罨を回収し、続いて屍人が落とした機関銃を拾った。「……これは、使い方がよくわかんねーけど、一応持っておくか。置いといたら、復活した時またやっつかいだしな」

一階通路の屍人を倒した二人は、奥まで進み、階段を使って地下二階へと下りた。地下二階も、一階と同じく迷路状だった通路が整備され、今は一本道になっている。入り組んだ道を進むと、やがて中央部に出た。そこは、かつては日本軍が弾薬や爆薬、各種兵器を保管していた弾薬庫跡がある区画だ。通路の北側に倉庫状の部屋が二部屋ある。二人は中に入ってみたが、今は弾薬も兵器も残っていないかった。

だが、三上は小さな違和感を覚えた。弾薬庫の出入口はふた部屋とも通路の北側にあるのだが、双方の部屋の入口と入口の間が不自然なほど離れているのだ。それは、右の部屋と左の部屋の間にも、もうひとつ同じ広さの部屋があるのではと思わせる作りだった。

「阿部君。その壁を調べてみてくれ。なにか、隠し部屋のようなものがないかい？」

三上に言われ、阿部は壁を調べた。この要塞跡の建物は基本的に煉瓦造りなのだが、そこだけはモルタルになっていた。ライトで周囲を照らすと、アーチ状に塗り固められている。明らかに出入り口を塞いでいる。阿部がバットの柄で壁をコンコンと叩くと、ぽろぽろとモルタルが崩れた。

「かなり脆いな。これなら何とかなるかもしれないねえ。先生、危ないから離れてな」

三上が下がると、阿部はバットを振り上げ、壁に叩きつけた。壁が

大きく崩れる。さらに何度かバットを振るうと壁は崩れ落ち、思った通り、その向こうには両隣と同じ作りの部屋があった。

阿部は大きく息を吐くと、バットを肩に担いだ。「……日本軍の隠し部屋ってわけか。さて、なにがあるんだ？ 埋蔵金か？ それとも、究極の破壊兵器か？」

だが、その部屋も他の部屋と同じく、何も残っていないかった。あからさまに肩を落とす阿部。

「気を落とすのはまだ早いよ」と、三上は言った。「こういう隠し部屋は、侵入者対策で二重三重になっている場合もある。奥の壁を調べてみよう」

三上に言われ、阿部は部屋の奥の壁にライトを向けた。

そのとたん。

何もしていないのに、突然奥の壁が崩れ始めた。衝撃を与えるどころか、まだ近づいてさえいない。ただライトを向けたただけだ。まるで、向こう側から何かが出てこようとしているかのようだ。

奥の壁一面が崩れ落ち、土がむき出しになった。

そこに、何か埋め込まれている。

「……なんだ、こりゃあ？」

近づいてライトを向けた阿部は、素っ頓狂な声を上げる。

それは、見たこともない生物の骨だった。

体長は十メートル以上あるだろうか。全体の形は首長竜に似ていた。胴体から伸びた長い首が特徴の恐竜だ。ただ、頭部が一般的な首長竜とは異なるように思う。首長竜の頭部はワニのように口が長く突き出した細長い形をしているが、その化石の頭部はサッカーボールほどの大きさの球体だった。胴体に大きさに対して極端に小さいように思う。顔のパーツもアンバランスだ。顔の大半をふたつの目が占めており、その分、口が極端に小さい。そして、長い首の下にある胴体には手と思われる部位が六本もあり、背中には翅のような部位まである。

三上は生物学者ではない。地球上の全ての生物を知っているわけではないが、その姿は地球上のどこにもいない、未知の生物のように



思えた。

三上は、不意に。

——大きな神様が死に、あたしのお母さんが生まれたの。たくさん、たくさん、生まれたわ。

姉の言葉を思い出した。

大きな神様……創造神のことだろうか？ 人間や他の生命、多くの神々、そして、この世界そのものを生み出したとされる存在。世界各地の神話に登場するが、日本では、イザナギとイザナミがそれにあたりとされている。イザナギとイザナミはまず国を生み、そして、多くの神々を生んだ。

姉の話がこれと同じようなものだとすると、まずこの世界を創った創造神が死に、その結果、姉が母と呼ぶ神が生まれた、ということになる。その神は多く生まれ、各地に存在する。もしかしたら、この未知の生物の骨は、創造神が生み落した神々のひとつなのかもしれない。

——多くの、神々？

何かが引つ掛かった。姉の言葉が、さらによみがえる。それは、蒼ノ久集落の漁港付近で、四鳴山の鉄塔を見つめていた姉が言った言葉。七つの門と七つの鍵を開け、めいふくだりをするの。

めいふくだり……冥府下り。神や英雄などが死者の国へと下りてゆく、これも世界中の神話に見られる話だ。

三上は顔を上げた。「行こう、阿部君」

「行くって、どこへ？」

「島の北東部、碑足という地域に、遊園地があるんだ。そこに、鍵がある」

「鍵？」

「ああ。たぶん、この島の謎を解くのに、極めて重要な鍵だ」

三上の言葉に、阿部ははじめぼかんとした表情だったが、やがて大きく頷いた。「判った。先生を信じるぜ」

そして。

来た道を戻り地下から出た二人は、ドラム缶を使って崖の上へあがり、碑足方面へ向かった。

第三十六話 『奇憶』 三上脩 夜見島遊園／時計広場 4：03：57

貝追崎の要塞跡を脱出し、夜見島遊園へとやってきた三上脩と阿部倉司は、開けっ放しとなっていた正門から中へ入り、時計塔や噴水がある広場まで進んだ。周囲に屍人の気配はない。園内に意識を飛ばせばいくつかの視点が見つかったが、どれも離れた場所にいるようだ。阿部は広場を見回し、隅の方にベンチとスタンド式の灰皿を見つけると。

「先生、ちょっと休憩しようぜ」

そう言っつて、ポケットを探りながら歩いて行つた。煙草を取り出し、一本啜える。だが、ライターが見つからないのか、ジャケットとジーンズのポケットを探つた後、「先生、火、持ってねえ？」と訊いてきた。

「私はたばこは吸わないんだ」

三上がそう答えると、阿部は「マジかよ……ツイてねえな」と肩を落とし、啜えていた煙草を箱に戻した。どうやらライターを落としたようだ。

三上は遊園地を見回す。三上は弱視であり、完全に目が見えないわけではない。ぼんやりとではあるが、闇の中にコーヒーカーップや観覧車などの遊具が見える。

それらの光景が、三上の子供の頃の記憶と繋がった。

——脩、こつちよ。

姉の声がよみがえる。七つの門と七つの鍵、そして、巫女が舞い踊る歌。

そうだ。私はあの時、姉がうたう歌に従つて、石碑を解放していった。

だが、三つ解放したところで。

——ごめん、脩。やっぱり、やめよう？

姉は、突然中断したのだ。

石碑の絵を七つ合わせれば宝物がもらえる——姉はそう言っていた。だから、四歳の子供には少々困難な作業も、宝物をもらうためにやってのけたのだ。いや、正確に言うならば、脩自身は宝物が欲しかったわけではない。宝物を手に入れて、姉にプレゼントしたかった。姉を喜ばせたかったのだ。

だが、姉は。

——ううん、いいの。お姉ちゃん、もう宝物を見つけたから。脩のおかげだよ？

笑ってそう言ったのだ。

あの時、姉が何を見つけたのか。それは判らない。脩が訊いても、姉は微笑むだけで何も答えてはくれなかった。

そして脩は、姉に手を引かれ、家に帰った。

あのまま石碑を解放していけば、なにが手に入ったのだろうか？ いまでも、宝物は手に入るのだろうか。

阿部がいる方向からは、場違いに陽気な電子音が鳴っていた。正門のそばに子供向けパンダカーが置いてあったのだが、それに乗って遊んでいるのかもしれない。

「すまない阿部君、手伝ってくれ」

三上は、視線を動かすことなく阿部に言う。

「いいけど、今度は何するんだ、先生？」

「七つの門と、七つの鍵を解放する」

「……七つの門と、七つの鍵？」

「行こう。まずはあそこだ」

三上は、小さな丘の上にあるコーヒークップの遊具を指さした。そこに、鎖で空中に繋ぎ止められた石碑があるはずだ。

第三十七話 『鳩の帰還』 岸田百合 冥府 6:0  
0:00

八月三日、早朝六時。  
島に、サイレンが、鳴り響く――。

◇

「――さあ、守。ひとつになりました。これからあたしたちは、ずっといっしょにいられるの。守と、あたしと、お母さんと、いつまでも、いつまでも、いっしょに――」

七つの門と七つの鍵を解放し、岸田百合と共に冥府に下りた一樹守は、赤い海から現れた首のない異形の生物と対峙していた。一樹をここまで導いた百合は、その異形の生物と融合し、ひとつの存在となっている。異形の生物の首の上には、いま、百合の顔があった。深海魚を思わせる醜い巨体に百合の顔。一樹は、不思議とその姿を美しいと思った。それは、この世界には存在しないものだった。実体をもたない神が、我々人間の前に現れるために具現化した姿なのだ。恐らく、多くの人間がああ姿を醜いと言い、嫌悪あるいは恐怖するだろう。だが、卑小な人間に、神の美しさが理解できるはずがない。あ的美しさが理解できるのは、神の領域に踏み込んだ者だけなのだ。今、自分はその領域にいる。

「来て、守。ここにきて」

百合の頭部が言い、両手を広げた。神が俺を迎え入れようとしている。あ的美しいものとひとつになれる。それはまさに、天にも昇る心地だった。俺は、楽園へと誘われるのだ。

一樹は、一步、さらに一步と、神へと近づいてゆく。赤い海に足を踏み入れる。

だが、突然。

一樹の身体が弾き飛ばされた。全身に激しい衝撃を受け、後方へ吹

き飛ぶ。地面に叩きつけられた一樹は、痛みで我に返った。

目の前にいるのは、美しい神——ではなく、醜い異形の生物。

「——?!」

化物の頭部にある百合の顔が歪んだ。歯を食いしばり、全身が小刻みに震えている。それは、何か見えない力で身体を縛られているような姿だった。いま一樹を弾き飛ばしたのも、この力なのだろうか？

「——逃げて！早く!!」

地下に少女の声が響き渡り、一樹は振り返った。

赤い海の波打ち際に、見覚えのある少女が立っていた。黄色いパーカーに赤い帽子……この島へ来る際に乗った釣り船でアルバイトをしていた少女だ。船が赤い高波に襲われ、反動で海へ投げ出された少女。名前は確か、木船と言っただろうか。

少女は、目の前で右拳を握り、その手首を左手で握り、歯を食いしばって何かに耐えていた。

異形の生物が、歪んだ表情のまま少女を睨んだ。

《貴様は『因子』を持つ者か……なぜ我の邪魔をする!?!》

それは、百合の声だが、百合の声ではなかった。なぜそんな風に思ったのかは判らない。百合と同じ声だが、百合よりもはるかに重く、あるいは高く、胸に響く、あるいは耳に刺さる、そんな、不可解な声だった。

「早く……これ以上は……抑えられない……」

少女の右手が少しずつ上へあがっている。少女は手首を握った左手で、右手を引き戻そうとする。意志に反して勝手に動き出そうとする右手を押さえようとするように見えた。異形の生物を見ると、わずかに身体が上昇していた。身体を縛る見えない力に抗おうとしているかのようなのだ。少女の右手の動きと異形の生物の動きがリンクしている。少女が、何か特殊な力で異形の生物を押さえているのだろうか？ それがどんな力なのか、一樹には想像もつかなかったが。

異形の生物が大きく飛んだ。同時に、少女の身体も大きく後方に跳ね飛ばされた。

見えない力から解放された異形の生物は、網から解き放たれた魚の

ように一樹たちの頭上を泳いだ。もちろん、そこに水など存在しない。それでも、長い尾びれと扇状の手を動かし、宙を泳ぐ。

そして、少女と一樹の頭上で制止すると、憎々しげな顔で二人を見下ろした。

「逃げてー！」

少女の声が、地下に響いた。

☆

「――逃げてー！」

一樹守を追って冥府へと下り立った少女・木船郁子<sup>いくこ</sup>は、倒れている一樹に向かつて叫んだ。一樹は立ち上がろうとするが、膝から崩れ落ち、また倒れた。先ほど化物から一樹を護るため、郁子は能力を使って彼を弾き飛ばした。とっさのことだったので手加減はできなかったから、それで怪我をしたのかもしれない。本当に、ギリギリのことだったのだ。到着があと一分遅れていたら間に合わなかっただろう。

郁子は立ち上がり、一樹に手を貸そうとした。だが、差し出しかけた手を思わず引っ込める。直接触れることはできない。郁子は肌と肌が触れないようにパーカーのフードを深くかぶると。

「ほらー！ 早く立ってー！」

一樹に肩を貸し、なんとか起き上がらせた。階段へ向かう。だが、郁子自身も、先ほど異形の生物を押しやるために能力を使い、かなり疲労していた。足がもつれて倒れる二人。衝撃で、一樹が掛けている眼鏡が滑り落ち、少し離れたところへ転がった。一樹が手を伸ばすが、拾っていては追いつかれる。一樹を引っ張り、立ち上がって逃げようとする。背後から異形の生物が迫る。逃げられない！ そう思った時。

「……おいおい、なんだよありゃ？」

地下に、新たにいくつかの気配が生じ、異形の生物の注意は、そこからへ向いた。

☆

「……おいおい、なんだよありや？」

夜見島遊園の封印を解き、三上脩と二人で地下へと下り立った阿部倉司は、宙を舞う異形の生物の姿に両目を大きく開いて驚いた。タツノオトシゴとクラゲとウマを掛け合わせたような巨体もさることながら、その顔が、現在行方不明となっている彼の同棲相手にそっくりだったのだ。

「柳子……じゃ……ねえよな……？」

何らかの事件に巻き込まれ、阿部の前から去った同棲相手の柳子。彼女の手掛かりを求めてここまでやって来たのだが、この島で起こったことは阿部の理解できないことばかりだ。赤い津波に、よみがえる死体に、見たこともない生物の骨。そして、いま目の前にいる、柳子と同じ顔をした化物。訳が判らないが、あれが柳子でないことだけは判った。顔は柳子だが、まったく別の存在だ。根拠など無いが、阿部はそう確信した。それは、彼が持つ野生の勘とでも言うべきものだった。

「……お姉ちゃん？ お姉ちゃんだよね？」

阿部の後ろにいた三上が、誘われるように歩き出す。

「おい……先生……？」

阿部は止めようと肩に手をかけたが、三上はそれを振り払い、赤い海の方へ向かって歩く。その目が——見えないはずの彼の目が、まっすぐに化物の顔に向けられていた。その顔を見て「お姉ちゃん……お姉ちゃん……」と繰り返しつつやく。三上は、子供の頃この島で一緒に暮らした『姉』の痕跡を追って島に来たと言っていた。その姉が、あの異形の生物と同じ顔をしているということだろうか？ だがそれは、同時に柳子と同じ顔であることも意味していた。柳子と、三上の姉と、化物。同じ顔が三つ。一体、これはどういうことだ。阿部には、なにがなんだかさっぱり判らなかった。

「お姉ちゃん……見えるよ……お姉ちゃん」

三上は、異形の生物へ近づいてゆく。



☆

阿部倉司と共に冥府へと下り立った三上脩は、そこに広がる光景に息を飲んだ。赤い海がどこまでも広がり、天から樹の根がぶら下がり、海の中に枯れた大樹が生えている。

だが、三上が驚いたのは、それらの光景に対してではない。その光景を、他人の視界を通してではなく、自分自身の目で見ているということだった。

目が、見える。

四歳の時に光を失い、ほとんど見えなかった目が、今、はっきりと見えるのだ。

そして。

「脩……来て……あたしを見て……脩……」

赤い海の上には、ずっと探し求めていた姉がいて、両手を広げて三上を待っている。

「見える……見えるよ……お姉ちゃん……」

姉の元へ向かう三上。ずっと会いたかった……ずっと探していた、ずっと寂しかった。ようやく、お姉ちゃんと一緒になれる。

「そうよ、脩。あたしたちはひとつになるの。ずっと、ずううつと、一緒よ」

三上は姉の胸に飛び込んだ。姉が優しく抱きしめてくれた。脩は、姉の胸に顔をうずめ、子供のように泣いた。ようやく会えた。もう二度と離れない。離れたくない。

だが。

「——脩！ ダメ！ 見ちゃダメ!!」

背後で姉が叫ぶ声がして、脩は顔を上げ、振り返る。

そこには、もう一人、姉がいた。

「……お姉ちゃん？」

阿部の後ろ、階段を下りて、姉が駆け寄って来たのだ。はつとして、自分を抱きしめている者を見ると。

それは、姉ではなく、姉の顔をした異形の生物で。  
その腹——ぽっかりと穴が空き、中から生えたいくつもの蠢く触手に捕らえられ、三上は半身を取り込まれていた。

☆

「——脩！ ダメ！ 見ちゃダメ!!」

化物の腹に取り込まれる三上脩に向かって叫びながら、喜代田章子は奇妙な感覚に襲われていた。その声は、自分の声であって、自分の声ではない。いや、声だけでなく、いま見ている光景もそうだ。自分の目で直接見ているようで、実は間接的に見ている。なに言ってるのか判らないだろうが章子にも判らない。それはまるで、映画館で一人映画を観ているような、あるいは、家の外で起こっている出来事を窓越しに見ているような、そんな不思議な感覚だった。

さらには。

「待ってて脩！ いまお姉ちゃんが助けるから！」

口が勝手にしゃべり、足が勝手に駆け出す。訳が判らなかつたが、とにかく脩を助けなければという思いでいっぱいだった。

「おい、よせ！ もうムリだ！」

脩の元へ走ろうとした章子の手を、阿部が掴んだ。我に返る章子。三上はもう首まで化け物に飲み込まれていた。阿部の言う通り、もう助けられるような状態ではない。近づけば自分も取り込まれてしまうかもしれない。なのに、身体は勝手に動こうとする。章子は気がついた。これはあれだ。新能力『夜見島ガイド』によって目覚めたあたしの内なる何者かが、表に出てきているのだ。で、代わりにあたしが内側にいる。おい、勝手に入れ替わるなコラ。これはあたしの身体だ。あたしは三上脩なんてテレビで見たくらいでよく知らないし、何の恩も無い行きずりの男を危険を冒してまで助けるほど甘くもない——というのはもちろん冗談で、助けたいけどあの状況じゃとても助けられない。ここで無理をしてあたしまで取り込まれたんじやただの犬死だ。大丈夫。チャンスはまだある。ここは一時撤退するのが

賢明だ。だからあたしの身体を返せ。ふんぬ！ と気合を入れると、一歩引いた場所から見ているような奇妙な感覚は消え、操作権が自分の元に戻って来た。よし、まだあたしはあたしだぞ。

三上を見ると、もはや全身が完全に取り込まれていた。化物の腹の穴がふさがってゆく。完全に穴がふさがると、その周りに生えていた蠢く触手や胴体を覆っていた鱗が抜け落ちていった。それは地面へ落ちると、一体一体が巨大な蛆虫のような姿になって動きはじめた。巨大蛆虫モドキは鎌首をもたげる蛇のようにして立ち上がる。その頭部に目や鼻は無いがなぜか口だけがあり、人間のような歯がずらりと並んでいた。章子たちに向けてニヤリと笑う。それが数十匹——いや、化物の身体からはまだ触手や鱗が抜け落ちているから、その数はどんどん増える——群れを成して章子たちに迫る。キモい、キモすぎる。

「よし・逃げるわよ、リーゼント！」

章子は阿部の手を引き、階段へ向かって一目散に走った。

☆

同時刻——。

☆

自衛官の永井頼人は、瓜生ヶ森の林道に立ち、耳を押さえ、鳴り響くサイレンの音に耐えていた。三沢の元を去った永井は逃げた百合を探したが、いまだ見つけられていない。島の北東部にある遊園地に母が囚われていると言っていたから、そこに向かったのかもしれない。自分もそこへ行くべきなのだろうが、行き方が判らなかつた。永井は島の地図を持っていない。コンパスは持っているが、針はフラフラするばかりでまったく機能していなかった。この先どうしているのか判らない。彼を導いてくれる人はいないのだ。だが、三沢の元へ戻るといふ選択肢だけは無かつた。なんとか、自分一人で道を切り開

くしかない。

☆

亀石中学テニス部の矢倉市子は、貝追崎の浜辺で座り込んで泣いていた。彼女の前には、胸から大量の血を流す藤田茂が横たわっていた。到底助かるような傷ではない。何もできない市子は、ただ泣き続けるしかなかった。

☆

警察官の藤田茂は、彼のそばで泣き崩れる市子に、遠く離れて暮らす娘の面影を重ねていた。やはり、この島から脱出し、無事帰ることはかなわなかった。また家族三人で暮らすというささやかな夢は叶わなかった。何がいけなかったのか、いまの藤田には判らない。すまんなあ、朝子。藤田は薄れゆく意識の中で、もう一度娘に詫びた。

☆

自衛官の三沢岳明は、夜見島金鉱社宅八棟の屋上で、迫りくる屍人と屍霊を相手に一人で戦っていた。小銃を撃ち、あるいは銃のグリップで殴り、拳銃を撃ち、ナイフで斬り裂く。弾が無くなれば相手の武器を奪い、また戦う。倒してもまたよみがえる敵を、また倒す。三沢は戦い続ける。戦っている間は悪夢を忘れられる。恐怖から解放されるのだ。だから、戦い続けるしかない。

☆

そして――。

☆

三上脩を取り込み、地の底より解放された百合の『母』は、産み落とした大量の『子』を見おろし、満足げに微笑んだ。

《よくやった、『鳩』よ。そなたなら、我が宿願を果たしてくれると思うたぞ》

母は、融合した百合に話しかけた。

「ありがとう、お母さん」百合は笑顔で答える。

《我は何度も鳩を飛ばしたが、戻って来たのはそなただけだ。まったく……どいつもこいつも役立たずの不完全品であつたわ。そう言えば、先ほどの『人間』共の中にも、因子を持つ者が何人かおつたな。『分裂体』のぶんざいで我に刃向うとは。今度我に姿を見せたら、八つ裂きにしてくれよう》

「……………」

《それにしても、人間とはなんと醜き生き物じゃ。あのような醜きものを殻にせねば生きられぬなど、我が子らが哀れでならぬ》

母は忌々しげに言った。彼女たちは地上の光に対する耐性が無い。そのため、地上で活動するためには殻を被らなければならなかった。母は何度も鳩を飛ばし、地上の様子を探った。その結果、地上で最も繁殖している人間という生物が最も殻に適していると判断したのだ。だが、彼女たちから見た人間の外見は、目を背けたくなるほどの醜き姿だつた。

「その人間のことで、お母さんに報せておくことがあるの」

《なんだ》

「人間は、危険かもしれない。殻となった人間には、活動してた頃の記憶が残ってる。殻に入った者は、その記憶の影響を受ける者もいるわ」

鳩として地上に放たれた二年の間、百合は人間の世界で暮らしながら、人間という生物を観察し続けた。人間にはそれぞれ意志があり、それぞれが目的を持って生きている。そして、その人間が死に、殻となったそれに屍霊が憑りつくつと、屍人は、殻に残っている人間の記憶に従って行動することが多いのだ。もつとも、大半はさほど影響がな

い範囲だ。ちよつとした動作や口癖、扱う道具の好みが変わるといった程度であり、ほとんどの者は屍人としての意志を優先し行動する。しかし、まれに屍人の行動から大きく逸脱する者もいる。あの着物女の屍人がそうだ。執拗に百合をつけ狙い、追って来た着物女。屍人が特定の人間に恨みを抱くなどあり得ない。あれは屍人の行動ではなく、完全に人間の頃の記憶で行動していたのだ。屍霊が、殻の記憶に惑わされたのだ。ああいった例はまだ数少ないが、今後増えていく可能性もある。

だが、母は百合の話の鼻で笑った。《それは、あの『劣化種』共の話であろう。我が子らに、そのような殻の記憶に惑わされるものなどおらぬ》

「だといいんだけど……」百合は心配げにつぶやいた。

母が言う劣化種とは、屍霊や屍人のことである。もともと奴らは彼女たちと同じ存在のだが、太古に袂たもとを分かち、今は異なる存在となっている。母は、奴らのことを自分たちよりも劣った存在と考え、劣化種と呼んでいた。

《まあ、もし殻の記憶に惑わされるような者が我が子の中におけるようならば、そやつは劣化種と同等の不完全品ということだ。容赦なく排除せよ》

「……はい」

母は空中を泳ぎ、一度ぐるりと旋回すると。

《さあ、我が子たちよ！ 時は来た！ 光によって奪われた我らが故郷を取り戻すのだ！》

産み落とした子たちに檄を飛ばした。

子たちは、うねうねと蠢きながら、階段を上って地上を目指す。

第三十八話 『漂着』 加奈江 夜見島港／岩場 2  
9年前

夜見島港の南にある灯台近くの岩場で、考古学者の三上隆平は、四歳になる息子の脩と共に探し物をしていた。数年前に大阪で開催された国際博覧会『土器と平和』の記念メダルで、以前、隆平が脩に与えたものだ。友達と遊んだ際、落としたのだという。もう、かれこれ二時間近く探している。間もなく陽が暮れる時間だ。暗くなり始めた岩場でライトの光を頼りに探す、見つかりそうにない。

「脩、本当にここに落としたのか？」

隆平の問いに、脩は力無く「うん」と答えた。小さくため息をつく隆平。子供の言うことだから、あまりアテにはならないかもしれない。まったく違うところに落としていても、特に根拠も無くここに落としたと思っっている可能性もある。仮に本当にここに落としたとしても、波にさらわれてしまったとしたら、もう見つけるのは不可能だろう。

それでも脩は探し続ける。隆平としても見つけてあげたい。メダル自体はせいぜい数百円程度のもので、たいして価値のあるものではない。しかし、脩にとっては他に代えがたい宝物だ。母の、形見の品と言つてよいものだった。

脩の母親は、大学生時代に土器の研究をしていた。記録的な赤字を出したとされる土器博にも何度も足を運び、興味深いレポートを数多く書いていた。メダルは、そのとき買ったものらしい。

母親は、脩を生んで間もなく海難事故に遭い亡くなった。その際、隆平は母の遺品からメダルを選び、「母さんの宝物だ」と言つて、脩に与えた。実際はさほど大事なものではない。形見の品であるのは間違いないが、所詮は安物のメダルだし、だからこそ幼い脩に与えたのだ。本当の形見は、脩が大人になった時のために取つてある。だから、メダルを無くしたことは残念ではあるが、隆平にとっては諦めがつかない品というわけでもないのだ。隆平は何度も「無いなあ。暗く

なると危ないから、もう帰ろうか」と言っているのだが、その度に脩は、「もう少しだけ」と言って、ずっと探し続けていた。

陽が落ち、周囲はどんどん暗くなる。探し始めた時間は引いていた潮も、少しずつ満ちはじめている。この周辺の岩場は、満ち潮になると沈んでしまうところがほとんどだ。さすがにこれ以上は危険だった。

「脩。今日は諦めて、また明日探そう。お腹すいただろ？ 今日はおムライスを作ってやるぞ？」

隆平は脩の好物で気を引こうとする。

しかし、脩は隆平の言葉には応えず、波打ち際に立ち、じっと、薄暗い海を見ていた。足元には、時折強い波が押し寄せ、脩の足を濡らしている。

「脩、危ないぞ。こっちへ来い」

隆平はやや強い口調で言った。脩は聞き分けのいい子だ。それで、おとなしく帰るだろうと思ったのだが、それでも脩は、そこに立ったままだ。

「お父さん、アレ」岩場の先を指さす脩。

隆平は、脩が指さす先にライトを向けた。

波打ち際に、裸の女が倒れていた。夜の闇に覆われはじめた岩場で、彼女だけが薄く光り輝いているかと思うほどに、全身真っ白な肌をしている。

脩が女に駆け寄ろうとしたが、隆平は肩をつかんで止めた。海辺に全裸で倒れている女。何らかの事件や事故に巻き込まれたのならすぐに助けなければならぬが、言い知れぬ恐怖が胸の内から湧き上がり、隆平の行動を押しとどめていた。

この島には、海から来る穢れという古くからの伝承がある。海から来るものは島に災いをもたらすと、島民はみな強く信じていた。

隆平はこの島の生まれではない。妻の死をきっかけに、島の歴史や伝承を調査するため移住したのだ。研究者であるがゆえ、伝承が生まれた背景に興味はあるが、伝承自体を信じているわけではない。

それでも、その女からは不穏な空気が漂っているように思えてなら



ない。関わらない方が良いように思える。警察に連絡し、全てを任せるのが無難だが、本土から遠く離れたこの島には駐在員さえいない。本土、あるいは近くの島から警察官が来るには時間がかかる。ならば、この島の漁業を取り仕切る網元の太田に報せるべきだろう。そう思うが、太田を始め島の住民は伝承を強く信じている。海から来たかのようなこの女をどうするかは判らない。あまり考えたくはないが、伝承どおり、穢れとして処分する可能性もある。

隆平がどうすべきか迷っていると、女の肩がわずかに震えた。意識を取り戻したようだ。ゆつくりと顔を上げ、こちらを見た。いや、隆平を見たのではなかった。隆平のそばにいる脩を見ている。

脩を見つめた女は、漂う不穏な空気とは正反対の、穏やかな笑みを浮かべた。

「……ただいま、脩」

その言葉と、そして女の顔に、隆平は言葉を失った。

地の底から一樹守を救出した木船郁子は、地上へと続く階段を登っていた。すでに三時間近く登り続けているが、まだ出口は見えない。目に映るのは、岩の壁と鉄の階段、そして、どこまでも広がる闇。登っても登っても変わらない光景に、まるで無限階段に迷い込んでしまったかのような錯覚を覚える。疲労はどうにピークを越えている。足を上げようとしても思うように動かず、肺に新鮮な空気を取り込もうとしても、呼吸さえうまくできない。

一樹の方は、郁子よりもさらに辛そうだ。ずっと、右の脇腹を押さえた格好で階段を登っている。地の底で異形の生物に囚われそうになった一樹。彼を救う際、郁子は特殊能力を使って彼の身体を弾き飛ばした。その時の衝撃でろっ骨を折ってしまったのかもしれない。だが、立ち止まるわけにはいかない。

彼女たちの少し下に、異形の生物が産み落とした巨大な芋虫のような化物が、群れを成して迫っていた。戦ってどうにかなる数ではないし、戦う体力も残っていない。逃げるしかないのだ。二人は気力だけで階段を登る。もはや這っているのと変わらない程度の速さではないが、それでも追いつかれることはなかった。芋虫状の身体をした化物どもは、階段を登るのに適した形態ではない。奴らも言うようにして階段を登っているため、郁子たちと変わらない速さなのだ。なんとか追いつかれることはなく、かといって引き離すこともできず、微妙な距離を保ったままの状態が、ずっと続いていた。無論、少しでも速度を落とせば、たちまち追いつかれてしまうだろう。

一樹が低いうめき声をあげた。負傷した脇腹を押さえ、苦しそうに表情を歪める。それでも進むもうとするが、足がもつれ転びかける。幸い踏みとどまったが、一歩間違えれば手すりなど無いこの階段では、地の底へ真つ逆さまだ。

「大丈夫!?!」

郁子は手を出しかけたが、すぐに引つ込めた。代わりに。

「ほらー！ しっかりー！」

励ましの言葉を掛ける。一樹はなんとか階段を登ろうとするが、再び足はもつれ、また転びかける。芋虫の化物は、すぐそこまで迫っていた。

「……俺に構わず……君だけでも……逃げるんだ……」

弱々しい声の一樹を、郁子は「バカじゃないの!？」と一蹴した。「こんなところでカツコつけたって、誰も見てないわよ！ それに、あなたがそれを言ったから、こんなことになってるんでしようが!」

地の底で異形の生物と対峙した際、郁子と一樹の他に、ヤンキー姿の男と無数のアクセサリーを身に付けた派手な女がいた。郁子や一樹と違い体力は有り余っている様子で、手を貸してもらえばこの逃走もかなり楽になったはずだ。しかし、化物から逃げる際、一樹は今と同じ言葉を彼らにも言ったのだ。二人はその言葉をあつさりと受け入れ、一樹たちを置いてさっさと逃げてしまった。

「つべこべ言わずに、早く立って!」

郁子は一樹の腕を持ち、無理矢理立たせた。こんなときでも肌と肌が直接触れないように注意しながら。

鉛のように重い身体を引きずり、二人はさらに階段を登る。登って、登って、登り続け、そして、ようやく前方にわずかな光が見えた。地上への出口だ。助かった！ と思ったのだが。

その光を遮るように、蠢く闇が何体も降りて来た。

「……ウソでしょ」

海から来る穢れ・屍霊だ。地下から迫る芋虫状の化物にも劣らぬ数で、群れを成して下りてくる。完全に挟まれた。逃げ場はない。

獲物に追いついたふたつの化物は、一斉に跳びかかる。

郁子は、一樹に覆いかぶさって階段に伏せた。

思いもよらないことが起こった。

蠢く闇と芋虫状の化物は、二人の頭上、あるいはそばを素通りし、互いに争い始めたのだ。

蠢く闇が体当たりをすると、芋虫状の化物は人間のように並んだ歯

で噛みつく。どちらも、郁子たちには見向きもしない。

一樹が、争う化物どもを怪訝そうな表情で見つめる。「仲間じゃないのか……?」

「そう……みたいね」

頷く郁子。とにかく今がチャンスだ。二人は争っている屍霊と芋虫の化物の横をすり抜け、地上を目指した。

異形の生物から逃れ、どうにか地の底から舞い戻った二人。目を焦がすほどの眩しい光が迎えてくれることを期待していたが、遊園地は薄闇に包まれていた。時刻は朝の九時を過ぎている。すでに日は昇っているはずだが、空は依然厚い雲に覆われており、深夜よりやや明るくなった程度だ。

近くの茂みがガサガサと揺れ、隠れていた屍霊が襲い掛かって来た。とつさにライトを向け、なんとか迎撃する。屍霊は光に弱く、懐中電灯程度の光でも消滅する。陽が昇れば動きをかなり制限できると思ったが、この薄暗さでは期待できない。

背後で獣の唸り声が出た。屍霊の群れを殲滅した芋虫状の化物が迫っている。二人は急いでその場を離れようとした。

だが、隣のコーヒーカップがある丘へ続く陸橋の上には、小銃を持った自衛官の屍人が警戒していた。幸いこちらに背を向けていたため見つからなかったが、遊園地から脱出するためにはこの陸橋を渡る必要がある。郁子は武器を持っていない。一樹は大きな鋸を持っていたが、負傷した身体である階段を登るには邪魔でしかなく、途中で捨ててしまった。素手で挑むのはあまりにも無謀だ。

再び獣の唸り声が出た。芋虫状の化物が数体、地上に現れたのだ。しかし、化物が地上に姿を晒した途端、身体からしゅうしゅうと音を立て煙が立ち上りはじめた。悶え苦しむ化物。まるで、全身に火を点けられたかのようなのである。やがて化物は、甲高い悲鳴と共に消滅した。

「屍霊よりも、さらに光に弱いのか……？」

一樹がつぶやいた。今の化物の死にざまは、強い光にさらされた屍霊と同じだ。遊園地は薄暗いが、逆に言えばわずかながら光があるとと言える。屍霊は影響を受けていなかったが、あの芋虫状の化物は消滅した。ならば、一樹の言う通り、芋虫状の化物は屍霊よりも光に弱いのだろうか。

「……そうかもしれない」郁子は記憶を探り、この島に伝わる古い伝承を思い出した。「光に追われし古の者……」。屍霊が海から来る穢れなら、あいつらは地の底に潜む穢れ。ヤツらはずっと地の底にいたのよ。海の底よりも、もつと暗い、光なんて存在しない、地の底に」

一樹が首を傾けた。「君、あいつらのことを知ってるの？」

「ええ。闇霊やみれいって呼ばれてるわ。この島じゃ有名な伝承よ。でも、その説明は後。まずは、あの屍人をなんとかしなきゃ」

郁子は幻視を使い園内の気配を探った。陸橋の屍人の他に、正門と裏門の前にも小銃を持った屍人が一体ずつ、さらに——これは、コーヒーカップのある丘とは反対側だが——花壇のある広場にも、拳銃を持った警官姿の屍人が警戒をしていた。他にも、陸橋のすぐ下の時計塔や噴水がある広場には、ナイフのようなものを持った屍人がいる。

郁子同様、幻視で周囲を調べた一樹が、手のひらに拳を打ちつけた。「くそ……これじゃあ、脱出なんて無理だ」

幻視をやめる郁子。一樹の言う通りだ。銃を持っているヤツが多すぎる。これでは、どこかで武器を調達したとしても分が悪すぎる。鈍器や刃物などではとてもじゃないが太刀打ちできないし、首尾よく銃を手に入れたとしても、郁子には銃に関する知識も技術も無い。見よう見まねで使うのはあまりにも危険だ。負傷した一樹に頼ることもできない。

もちろん。

郁子には、能力がある。地の底で一樹の身体を弾き飛ばし、異形の生物の動きを制御した能力が。

それを使えば、脱出は不可能ではない。  
だが。

——なんかあの娘、気味悪いよね。

かつてのクラスメイトの声が、胸の奥からよみがえった。能力を使えば、一樹もまた、同じように思うのだろうか。そう考えると、ためらわずにはいられない。

びくん、と身体が震え、一瞬、観覧車のそばに立つ郁子と一樹に向けて銃を構える視点が見えた。見つかった！

「伏せろ！」

一樹が腕を引っ張った。とっさにその場にしゃがむ。ほぼ同時に銃声が響いたが、幸い当たらなかつた。二人はしゃがんだまま移動し、奥にあるベンチの陰に隠れた。再び幻視をし、屍人の視点を探る。屍人はベンチに付近に照準を合わせていたが、今いる位置からは郁子たちを狙うことはできない。屍人は銃口を向けたまま、丘の方へ移動し始めた。このままでは狙撃されるのも時間の問題だ。ためらっている場合ではなかつた。

郁子は、屍人を幻視したまま、胸の前で右の拳を握った。

そして、幻視をしている屍人の、さらに奥深くを探る。

郁子はそれを『感応』と呼んでいた。幻視が他者の視覚と聴覚に共鳴・同調するのに対し、感応はさらに奥深く、心、あるいは精神そのものに共鳴・同調する。これにより、嗅覚や触覚など五感の全てに同調できるのはもちろん、脳や神経細胞にも影響を及ぼすことができるのだ。

つまり。

——止まって！

屍人の精神と共鳴した郁子は、指示を飛ばす。

すると、屍人は郁子が命じた通り、その場に立ち止まった。

——正門前にいる屍人を撃って。

さらに指示を出す郁子。屍人はベンチに向けていた銃口を、南の正門方向へ向ける。スコープを覗き、正門前に立つ屍人へ照準を合わせると、引き金を引いた。銃弾は頭に命中し、正門前の屍人はその場に

倒れた。

——橋の下の屍人も撃って。

さらに指示を出す。橋の下の噴水広場にはナイフを持った屍人がいる。屍人は、指示に従いナイフ屍人も狙撃する。

——そのまま裏門前まで移動して、その屍人も倒して。

屍人は指示に従い、郁子たちがいる丘とは反対側、コーヒーカープのある丘まで移動すると、北側の階段から下り、裏門前まで移動した。裏門前の屍人は、陸橋を警戒していた屍人が移動して来たのを不審に思ったのか、わずかに首を傾けた。だが、やはり屍人同士。攻撃はるか警戒さえしていない。陸橋を警戒していた屍人は銃を構えると、引き金を引いた。

限界だった。感応を解く郁子。階段を登った時の何倍もの疲労が郁子の身体を蝕む。耐えられず、郁子はその場にへたり込んだ。

「大丈夫か!？」

手を貸そうとする一樹を、郁子は手のひらを向けて止めた。「大丈夫……ちよつと……疲れただけだから……」

肩で大きく息をし、呼吸を整える郁子。感応を使った後は大きく体力を消耗する。詳しい理屈は郁子にも判らないのだが、それは身体ではなく、心が疲弊しているようにも思う。

「今のは、君がやったのか……?」

一樹の声には、得体の知れない能力に対する畏れおそのようなものが含まれていた。それが郁子の心をさらに疲弊させるが、今はそれどころではない。

「……説明は後……それより……あいつが戻ってくる前に……早く……」

背後でまた唸り声があった。振り返ると、どこから調達したのか、全身に黒い布を巻きつけた闇霊が迫っていた。あれで光に耐えようというのか。郁子とはつきにライトを向け、唯一肌がむき出しの顔の部分に光を当てた。闇霊は大きくのけ反って悲鳴を上げ、煙を上げて消滅した。しかし、その後ろからも、同じように黒い布を巻きつけた闇霊が何体も迫っている。

「……行くわよ！」

郁子は氣力を振り絞って立ち上がると、陸橋を渡った。一樹が後に続く。コーヒーカップのある丘に移動し、南側の階段を使って噴水広場に下りた。この先に屍人はいない。裏門へ追いやった屍人も、戻るにはまだ時間がかかる。これで脱出できる……そう思ったのだが。

広場に下り立った瞬間、周囲の薄闇にまぎれていた屍霊が、大量に姿を現した。ライトで照らして反撃するが、あまりにも数が多すぎる。

「ダメだわ！ 戻って！」

振り返り、コーヒーカップのある丘へ戻ろうとする。どこかに身を隠しやり過ぎそうとしたのだが、階段の上からは大量の闇霊が下りてきた。逃げ場はない。屍霊と闇霊が争っている隙を突いて強引に突破するような体力も、もう残っていない。

——助けて!!

追い詰められた郁子には、もう、祈るよりほかに手段が無かった。胸の奥で叫ぶ。

その叫びが、天に届いたのだろうか、空を覆っていた雲が、一瞬途切れた。

そして、そこから眩しい光が注ぐ。

それは、雲の隙間からのぞいたほんの一瞬の晴れ間だったが、その光が、二人の周囲の屍霊を焼く。同様に、黒い布を巻きつけた闇霊をも焼く。屍霊と闇霊の群れは、白い煙を上げながら消滅してゆく。

陽の光は園内全てに注ぎ、屍霊と闇霊を焼き尽くしていった。

「……やった」

助かったことを知った郁子は、力が抜け、その場に座り込む。一樹もそばに座り込んだ。お互い顔を見合わせ、そして、どちらともなく笑い合った。まさに危機一髪だった。

だが、休んではいられない。雲がまた太陽を隠せば、奴らは再び動き始めるだろう。その前に——。

◇



二人は正門を抜け、遊園地から脱出した。

第四十話 『呪縛』 木船郁子 夜見島港／岩場 2：

13：33

木船郁子は、闇の中を一人で歩いていった。

そこは、闇しか存在しない世界だった。見えないわけではない。ライトがあつたとしても、なにも照らし出すことはできないだろう。そこには、建物も無ければ、道も無い。足元を覆い尽くす草原も、あるいはむき出しの土の地面や海原のように広がる砂も無い。地面そのものが存在しないのだ。空も存在しない。だから、前も後ろも、上や下といった概念さえ無い。本当に闇以外には何も無い世界だった。郁子は歩く。どこを指しているのかは、自分にも判らない。闇しか存在しないのだから、目指すものも無い。地面さえ存在しないから、その行為を歩くといいのかさえ判らない。それでも郁子は歩く。歩き続ければ、何か見えてくるかもしれない。

どれだけ歩き続けたか、やがて、正面に小さな光が見えた。それは本当にわずかな光だったが、そこへ向かえば何かある。そう思い、郁子は光の方へ進んだ。進むほどに、光はどんどん強くなる。そこへ行けば、この闇から抜け出せる。そんな気がした。自然と走り出していた。光はどんどん大きく、眩しくなり、郁子の全身を包み込む。やっただ。闇から抜け出した。そう思ったとき。

——なんかあの娘、気味悪いよね。

光の向こうから、声が聞こえた。

郁子は、思わず足を止める。

少女の声だった。聞き覚えのある声。いや、忘れられない声と言った方がいい。それは、郁子が通っていた高校の、クラスメイトの声。卒業以来会っていない——もう二度と会うこともないだろうと思っていた娘の声。

その声に。

——うん、あたしもそう思ってた。

別の声が応じた。それも覚えのある声だった。別のクラスメイトだ。

さらに。

——急に黙り込んだりするよね。

——うん、あるある。

別の声が応じる。みんな覚えがある。みんなクラスメイトだ。みんな、郁子と仲が良かった——いや、仲が良いと思っていた娘たちだ。声は聞こえる。

——ああいう時さ、なんか、全部判ってる、みたいな顔しない？

——するする。

——ホント、気持ち悪いよね。

やめて……郁子は両手で耳を塞いだ。

しかし、どんなに強く耳を押さえても、その声は手のひらをすり抜けて聞こえてくる。まるで、耳ではなく、直接心に響いているかのよう。

——実際、あたしが誰にも話してないこと、あの娘が知ってたことあったよ？

——えー？ なにそれー？ やばーい。

やめて！ 郁子は後ずさりする。声は聞こえる。

——知ってる？ あの娘の胸の痣。

——あ、見たことある！ すつごくおっきな痣があるの。

もうやめて！ 郁子は耳をふさいだまま、踵きびすを返して走った。それでも、声は聞こえる。

——あの痣、なんか人の顔みたいに見えるよね。

——なにそれ？ 呪われてんじゃないの？

——ちよつとやめてよ、怖いなあ。

やめてやめてやめて、もうやめて！ 郁子は叫ぶ。自分の声で相手の声をかき消そうと叫び続ける。それでも声は聞こえる。郁子は耳をふさぐ。すこしでも声を聞くまいと。それでも、声は聞こえる。郁子は逃げる。少しでも声から遠ざかるために。それでも——声は聞こえる。

——ホント、気味悪いよね。

——うん、気持ち悪い。

——やばーい。

——怖い怖い。

郁子は逃げる。

耳を塞いで。

光が射す世界から、光が射さない世界へ。

闇へ向かって。

闇しか存在しない世界へ。

郁子は、走る。

☆

「!?!」

息を飲むと同時に、郁子は意識を取り戻した。

そこはもう、闇の世界などではなかった。クラスメイトの声も聞こえない。ごつごつした岩が続く波打ち際で、聞こえるのは潮騒のみ。郁子が住んでいる中迂半島の三逗港近辺では珍しくもない風景だ。

上半身を起こし、周囲を見回す。ここはどこだろう？ なぜこんなところで気を失っていたのだろうか？ 記憶を探る。すぐに思い出した。船で夜見島へ向かう途中、高波に襲われ、海に落ちたのだ。腕時計を見ると、深夜二時を過ぎていた。高波に襲われたのが六時前だったから、八時間以上経過している。よく助かったものだ。郁子は安堵の息を洩らした。

ひととき強い波が押し寄せた。波は岩に当たって砕け、しぶきが顔にかかった。郁子は顔を拭い、何気なく手を見てどきりとした。手が真っ赤に染まっていたのだ。怪我をしている？ それも、かなりの出血量に思えた。しかし、身体中調べてみても、どこにも傷は無い。痛みも感じない。訳が判らなかったが、とりあえず血で汚れた手を洗おうと波打ち際にしゃがみ、海が血のように真っ赤に染まっていることに気がついた。驚いて尻餅をつく。そうだ、船が高波に襲われた時もそうだった。濁ったサイレンの音が聞こえたかと思ったら、突然、海が赤く染まったのだ。

それで、郁子は気がついた。

あたしは、夜見島に流れ着いてしまったんだ！

再び強い波が押し寄せ、岩に当たってしぶきとなった。それが、海から伸びてきた手が郁子を掴み、引きずり込もうとしているように見えた。思わず後ずさりする。

夜見島は、三逗港で働く人やその近隣の住民から『呪われた島』と呼ばれ、忌み嫌われていた。実際に島やその近海では失踪事件や遭難事故が後を絶たないし、海底ケーブル切断事件など、常識では考えられないような出来事も多発している。何より、郁子自身、この島に言い知れぬ恐怖を感じていた。三逗港で働いている郁子は、仕事で海に出て夜見島の近くを航行することも少くない。その度に、島から邪悪な気配が漂ってくるのを感じている。夜見島に近づいてはいけない。郁子は本能的にそう悟っていたのだ。だから、昼間、船長から夜

見島へ向かうと言われたとき、考え直すよう説得した。だが、客からかなりの大金を積まれたらしく、船長は考えを変えなかった。さらには、郁子に対しても、普段の五倍のバイト料を出すと言う。高校を卒業し、一人暮らしを始めて四ヶ月。生活費は郁子が思っていた以上にかかるし、港で安定した職に就くためには様々な資格を取得しなければならず、その費用も貯めなければならない。五倍のバイト料は魅力的だった。悩んだ末、客を島まで連れていくだけで、自分たちは絶対に上陸しないことを条件に引き受けたのだ。やはり断るべきだった。もちろん、今さら後悔してもどうにもならない。とにかく、一刻も早くこの島を離れなければ。

郁子は立ち上がり、持ち物を確認した。財布やパスケース、ライトなど、普段持ち歩いているものは、海に落とさないよう全てチェーンで結びつけている。何も無くしていない。郁子はライトを取り出し、壊れていないことを確認する。万が一の事態に備え、小型だがかなり遠くまで光が届く物を買っておいた。これで近くを航行する船に救助サインを送ろう。それには、もう少し高い場所の方がいい。郁子はライトで周辺を照らした。海と反対側は堤防があるが、高く登れそうにない。さらに周囲を照らすと、岩場を堤防沿いに少し進んだ先に、コンクリートのブロックが海にせり出しているのが見えた。船を繋ぎ止める係留柱や栈橋もある。どうやら港のようだ。郁子は、足を滑らさないよう気を付けつつ、そちらへ向かった。

港までたどり着いた郁子は栈橋を渡った。栈橋の先には石段があり、それを登ると、急な斜面にコンクリート製の建物がびっしりと並び、廃墟に出た。見覚えがある。夜見島沖を航行中、何度も見た光景だ。恐らくここは、島の南西部にある夜見島港だ。ならば、この栈橋から少し南へ行けば灯台があるはずだ。そこからなら救助サインを出しやすいだろう。運が良ければ緊急時の通信設備や救命ボートがあるかもしれない。あまり島を歩き回りたいわけではないが、行ってみる価値はある。郁子は灯台へ向かおうとして。

——あれ？

道端に、小型のデジタルカメラが落ちているのを見つけた。最新式

のもので、廃墟に落ちているに似つかわしくないように思う。恐らく最近誰かが落としたのだろう。そのカメラには見覚えがあった。確か、昼間三逗港で出会った雑誌の編集者が持っていた物だ。名前は確か、一樹守と聞いただろうか。勝手に写真を撮られたので抗議し、その場で消去させたからよく覚えている。オカルト系雑誌の取材で夜見島に渡る船を探しており、郁子が働いている船に乗ることになったのだ。あいつも、この島に？ 郁子はカメラを拾った。その瞬間。

——助けて、あたし、あの男に追われているの。

郁子の脳裏に、一樹と、彼の腕にすがりついて助けを求める少女の姿が浮かんだ。

それはすぐに消えたが、また別の姿が浮かぶ。今度は、一樹と少女がゾンビのような化物から逃げる場面だ。

その場面はまた消え、今度は一樹が化物と戦うところが見える。さらに場面は切り替わり、迷彩服を着た二人組と言いつ争う場面が、着物の女に追いかけられる場面が、工場のようなところで多くの化物から逃げる場面が……様々な場面が現れ、次々と切り替わる。

そして。

——もうすぐ、あたしたちはひとつになれる。ずっと、ずっと、一緒にいられるの。

一樹の首の後ろに腕を回し、耳元でささやく少女の姿が浮かんだ。映像が消え、郁子は我に返った。今のはなんだったのだろうか？ 判らないが、あまり驚きはしない。こういった不思議な能力は、幼い頃から何度も経験している。だからこそ、郁子はクラスメイトの前から去り、人の少ないさびれた港で働くことにしたのだ。なぜこんな能力があるのかは判らないが、なんにしても、あの一樹という男が危険なことに巻き込まれているのは間違いないだろう。

「……知らないよ、あんなヤツ」

小さくつぶやく郁子。くだらない理由で上陸禁止の島に向かって  
いたヤツがどうなろうと知ったことではない。今は自分の身の安全  
が第一だ。一刻も早くこの島を離れなければ。郁子はカメラをその  
場に置いて行こうとした。

……でも。

——掴まれ！

郁子に向かって手を伸ばす一樹の姿を思い出す。

船の上で赤い高波に襲われた際、郁子は海に投げ出されそうになっ  
た。必死で手すりにしがみついていたところを、船室から出てきた一  
樹が助けようとしてくれたのだ。自分が海に落ちる危険も顧みず。

郁子はしばらくその場に立ち尽くしていたが。

「……ああ、もう！ ふざけんなよ！ バーカー！」

悪態をつき、カメラをポケットにしまう。

そして、灯台とは反対の方向へ向かって、走り出した。

この港のちょうど反対側、島の北東部に、廃墟となった遊園地があ  
る。高台にある観覧車は、仕事中の海上からもよく見えるのだが。

島から漂ってくる邪悪な気配は、いつもそこから湧き出しているこ  
とに、郁子は気が付いていた。



第四十一話 『脱出』 木船郁子 冥府 8 : 59 : 0  
7 終了条件2

地の底から地上へと生還した木船郁子と一樹守は、屍霊と闇霊、ふたつの勢力が争っている隙に遊園地からの脱出を試みる。脱出目前に屍霊と闇霊に囲まれ、絶体絶命の危機となるも、運よく雲の切れ間から陽の光が射し、園内の屍霊・闇霊は焼き尽くされた。

◇

「——今のうちに、逃げましょう」

郁子は立ち上がると、正門から外へ出ようとした。

だが一樹が「待つて」と、止めた。「このままにはしておけない」  
振り返る郁子「このままって……」

一樹は観覧車の丘を指さした。いま、丘の上に観覧車は存在しない。代わりに、時折空に向かってオーロラのような虹色の光が吹き出している。

「冥府の門は開いたままだ」と、一樹は続けた。「あれをなんとかしな  
いと」

観覧車があった場所には、一樹が言う冥府と繋がる大きな穴が空いており、そこから、地の底に潜んでいた古の者・闇霊が次々と現れている。闇霊は屍霊よりも光に弱い。今はまだ雲の切れ間から太陽がのぞいているため闇霊どもは動けないが、太陽が隠れたら、奴らはまた動き始めるだろう。まして夜になれば、もう手が付けられなくなる。

「でも、どうするの?」

郁子の問いに、一樹は正門のそばを指さした。そこには、鎖で地面と空に固定された立方体の石碑があった。

「園内には、あれと同じ石碑が七つある。あれが、冥府の門を開ける鍵だった。石碑を破壊すれば、門を閉じることができるかもしれない。」

頼む。今がチャンスなんだ」

陽が射したことで、園内の屍霊と闇霊はほぼ全滅したはずだ。一樹の言う通り、石碑を壊すなら今しかない。

郁子は頷いた。「判った。やってみる」

「ありがとう。まずは武器を調達しないと。君、銃は使える？」

正門前には自衛官の屍人が倒れており、側には小銃が落ちていている。もちろん、郁子に銃の知識などあるはずもない。

「使えるわけではないでしょ、あんなもの。あなたはどうかなの？」

「拳銃なら撃つたことがあるけど、あのタイプのライフルはないな。まあ、どちらにしてもこの身体じゃ無理だ」

一樹はまだ脇腹を押さえている。この島では不思議な力で傷が治るのが早いのが、地の底で負った傷はまだ癒えていないようだ。

「まあ、使えなくても、とりあえずあの銃は奪っておこう」

そう言われ、郁子は小銃を拾うと、近くの茂みへ投げ捨てた。屍人は倒しても新たな屍霊が憑りつけばまた復活する。その時、銃を持っているかいないかで、脅威は格段に違うはずだ。

正門前の他に噴水のそばにも石碑があるが、さすがに素手では破壊できなかった。まずは武器を探すため、二人は一度コーヒーカップの丘へ戻ることにした。

階段を上がると心臓の鼓動が激しくなった。近くに屍人がいる合図だ。少し前、陸橋の上で警戒していた屍人を、郁子は特殊能力・感応を使って裏門前まで移動させた。あの屍人が戻って来たようだ。見つかる前に、二人は遊具の近くにあったスタッフルームに身を隠した。

スタッフルームは三畳ほどの狭い部屋だ。奥に机と黒電話があり、その横にゴルフクラブが立てかけてある。ヘッド部が金属製のパートナーで、リーチも重量も悪くない。銃相手に戦う武器としてはあまりにも頼りないが、石碑を壊す程度なら充分だろう。郁子はゴルフクラブを持っていくことにした。

屍人はコーヒーカップの遊具の横を通り過ぎ、また橋の上に戻った。郁子は静かにスタッフルームを出る。屍人に見つからないよう

しやがみ走り移動し、石碑の前に立った。クラブを振り上げ、思いつきり石碑に打ち付ける。鈍い手応えと共に、石碑は血のような真つ赤な煙をまき散らして砕け散った。まずひとつ。

だが、石碑を破壊した瞬間、びくんと身体が震え、小銃を構える視点が見えた。陸橋の上の屍人に見つかった！ 近くに身を隠す場所はないし、感応をする暇もない。イチかバチか逃げるしかない。正門方向へ走り出そうとしたとき、屍人が悲鳴を上げた。見ると、屍人は背後から現れた闇霊に襲われていた。いつの間にか太陽は雲に隠れている。周囲が薄暗くなつたため、再び動き出したのだ。闇霊は屍人を引き倒し、胸の部分に噛みついた。屍人は手足をばたばたさせてもがくが、闇霊は喰らいついて放さない。今のうちだ。郁子は南側の階段を下り、噴水広場に戻った。

広場と正門前の屍人はまだ復活していなかったが、太陽が隠れてしまったため、屍霊も動き出すだろう。急がなければ。郁子は噴水広場と正門前の石碑を破壊した。これで三つ。

二人は陸橋の下を潜って北へ移動する。まっすぐ進むと裏門があり、そこにも石碑があるはずだ。裏門前に立っていた小銃屍人は少し前に倒した。郁子は倒れている屍人のそばを通り抜け、裏門前の石碑も破壊した。これで四つの石碑を破壊した。残りは三つだ。

移動しようとして、また、びくんと身体が震えた。倒れていた屍人が起き上がろうとしている。しまった！ 先に銃を奪っておくべきだった！

屍人が起き上がり、郁子と一樹に顔を向けた。

……いや、それは屍人なのか。その姿を見て、郁子は戸惑う。今まで見た屍人とは明らかに違う姿をしていた。屍人は、人間の死体に屍霊が憑りついたもの。だから、外見は死体そのものだ。血の気の無いどす黒い肌をしており、多くの場合、身体中いたるところを欠損している。それに対し、いま目の前で立ち上がったものは、生まれて一度も陽の光を浴びたことがないかのように真つ白な顔色で、小さな傷ひとつ無い。全身にはレインコートのような黒い布を巻きつけていた。それは、光から身を護るために黒い布を巻きつけた闇霊のようだった。

た。

それで、気がついた。

これは屍人ではない。死体に闇霊が憑りついた姿——いわば闇人やみびとだ！

闇人は唇の端を吊り上げてニヤリと笑うと、小銃を振り上げて襲ってきた。とつさに頭をかばう郁子。偶然、手に持っていたライトの光が闇人の顔に当たった。すると、闇人は両手で顔を押しさえ、悲鳴を上げてもがき始めた。突然光を向けられ目がくらんだという感じではない。まるで催涙スプレーを吹き付けられたかのような苦しみ方だ。

「——今だ！」

一樹の声で我に返った郁子。ゴルフクラブを振り上げ、闇人の頭に殴りつける。二度、三度と殴ると、闇人は金属をこすり合わせるような甲高い悲鳴を上げて倒れた。

郁子は一樹を睨んだ。「……まったく。かよわい女の娘になんてこたせんのよ」

思わず愚痴を洩らす。もつとも、ここに来るまでに何度も屍人を倒しているのに、もう罪悪感も湧かないのだが。

「殺されるわけにはいかないだろ？ さあ、次へ行こう」

銃を茂みに捨て、再び階段を上がってコーヒーカップのある丘へ戻る二人。残る三つの石碑は、陸橋を渡った向こう側だ。

陸橋の上にあった屍人は、先ほど襲われた闇霊に乗っ取られ、闇人と化していた。無論小銃を持っており、ゴルフクラブで挑むのは無謀すぎる。特殊能力・感応を使つて移動させることはできるが、まだ体力は万全ではない。どこまで遠ざけられるかは判らない。

「大丈夫。俺に考えがある」一樹が、なにやら自信ありげな口調で言った。

「どうするの？」

一樹は口元に意味ありげな笑みを浮かべると、橋の前まで移動した。

そして。

「おい！ こっちだ！」

口元に手を当て、闇人に向かって大声で叫んだ。

「ちよつと！ 正気なの!?!」

目を丸くして驚く郁子。銃を持った相手を前に叫ぶなど、正気の沙汰ではない。

一樹は相変わらず意味ありげに笑っている。「大丈夫だ、たぶん」

びくんと身体が震えた。闇人が襲ってくる。両手の銃を、頭上に振り上げて。

「やっぱり！ ヤツら、銃の使い方を知らないんだ！」

一樹は後ろへ下がると、郁子に向かって「ライトでひるませろ！」と言った。

「……って、結局戦うのはあたしなの!?!」

「いいから早く！」

郁子は前に出ると、ライトを闇人の顔に向けた。悲鳴を上げ、苦しむ闇人。郁子はクラブで殴りつけ、倒した。

「ほら、うまくいっただろ？」感謝しろ、と言わんばかりの顔をする一樹。

「あのさ。あなたさつき、たぶん、って言ったよね？」

「ああ。裏門前の闇人が、銃を撃たずに殴ろうとしたのを見て、もしかしたら、と思ったんだ。絶対に銃が使えないという確証は無かった」

「……次からはそういうのやめてくれる？ 戦う方は命がかかってるんだから」

「まあ、うまくいったからいいだろ？ さあ、行こう」

郁子は銃を捨てると、陸橋を通って観覧車の丘へ渡った。観覧車があった場所には、地の底と地上を繋ぐ大穴が空いており、ときどき虹色の光が空へ舞いあがっている。その穴の近くに、石碑がひとつある。壊そうとクラブを振り上げた時、穴から獣のような唸り声が出て、大量の闇霊が現れた。とつさにライトを向けるが、対処できる数ではない。

「ダメだ。一旦逃げよう」

二人は陸橋とは反対側の階段を下り、花壇広場へ逃げた。

「あそこへ」

広場の隅を指さす一樹。そこにはベンチがあり、そばに大きな街路灯が立っていた。電気は点いている。二人は明かりの下に逃げ込んだ。何体の闇霊が追って来たが、街路灯の光を浴びると、煙を上げながら燃え尽きた。それを見た後方の闇霊は立ち止まる。そして、光が届かない場所でうねうねと蠢きながら、歯をむき出しにして威嚇しはじめた。光の下に入って来ることはできない。ここにいれば襲われることはないだろう。だが、このままでは身動きが取れない。どうすべきか。

びくと身体が震え、街路灯の明かりの下にいる自分たちの姿が見えた。しまった！ この花畑広場には、拳銃を持った警官屍人がいた！ 気配がした方を見ると、「とうとうえりいうこうするとうおうつずうおお！」と、呂律の回らない口調で叫びながら、屍人が向かって来る。

だが、警官屍人に反応したのは郁子たちだけではなかった。闇霊たちもまた、警官屍人の方を見る。闇霊は明かりを迂回して回り込み、一斉に警官屍人へ襲い掛かった。警官屍人はライトを向けたり拳銃を撃って応戦する。

「今のうちに！」

二人は屍人と闇霊が争っている隙に明かりの下から出ると、花壇そばにある石碑を破壊した。そのまま広場の奥へ進む。広場の奥には管理小屋があり、その前にも石碑がある。それも壊す郁子。これで、残りはひとつ。

銃声が響き、同時にガラスが割れる音がした。振り返ると、花壇広場の街路灯が割れ、明かりが消えていた。割れた街路灯の下には、闇人と化した警官が、銃を構えて立っていた。あの闇人が銃で街路灯を壊した？ 銃の使い方は知らないはずではなかったのだろうか？

闇人は銃の引き金を引きながらこちらへ向かって来た。幸い、弾はあらぬ方向へ飛んで行く。

「あそこへ隠れよう！」

二人は奥の管理小屋に駆け込み、内側から鍵をかけた。そして、奥で息をひそめる。

「大丈夫だ」と、一樹が小声で言った。「あいつらは知能が低い。ここに隠れていれば、すぐに俺たちのことなんて忘れて、どこかへ行くさ」確かに、屍人共はそうだった。しかし、あれは闇人。はたして屍人と同じようにいくのだろうか？ 裏門前や陸橋の上の闇人は銃の使い方を知らなかった。それに対し、あの警官闇人は、狙いこそデタラメだがちゃんと銃を撃っている。もしかしたら、警官屍人が銃を撃っているのを見て、使い方を覚えたのかもしれない。だとしたら学習能力が高い。屍人と同じようにはいかないかもしれない。

「——上手に隠れたねえ」

外から声が聞こえた。外には闇人と闇霊しかいない。闇人が喋っている？ 屍人は呂律の回らない口調で意味不明な言葉しか喋ることができなかつたが、闇人は人の言葉で喋ることができるのだろうか？

「そこに誰かいるのかあ？」

扉の前で声がした。がちやがちやとノブが回される。もちろん鍵をかけてあるから開かないが、完全に隠れていることがバレている。やつらは、屍人とは明らかに違う。

「今、ここを開けるから。少し離れてて」

闇人がそう言った後、どん！ と、向こう側から体当たりをする音が聞こえた。鍵をかけたとはいえ建物自体が古い。ドアが壊されるのは時間の問題だ。そうなれば、狭い管理小屋では逃げ場はない。

——仕方がない。

郁子は胸の前で拳を握ると、警官闇人に幻視を行い、さらにその奥の精神を探る。

がたん！ と扉が壊れ、闇人が入って来た。

「良かった。君、怪我は無いかい？ じゃあ、死んでいいよ」

銃口を向ける闇人。引き金に指を掛ける。

だが、その前に。

——後ろを向いて！

警官屍人の精神と共鳴した郁子は、指示を出す。

警官闇人は一度大きく震えると、郁子の指示通り後ろを向いた。

——闇霊を倒しながら、丘の上へ。

さらに指示を出す。警官闇人はライトと拳銃を使い、花畑広場の闇霊を倒しながら、階段を使って観覧車のある丘へ上がった。

「そうだ」と、一樹が言った。「観覧車付近の街路灯を調べてくれないか？ ブレーカーを上げれば、明かりが点くかもしれない」

郁子は感応したまま頷くと、一樹の言う通り指示を出した。警官闇人は街路灯の前に進む。街路灯の柱には小さなボックスがあり、開けるとスイッチがあった。オフになっているのでオンにする。頭上の明かりが点き、闇人は悲鳴を上げた。郁子はさらに指示を出す。観覧車の丘には三本の街路灯がある。その全てのスイッチを入れた。これで、穴から闇霊が出てきても、動きを制限できるだろう。

——そのままコーヒーカップの丘へ行つて。

指示を出す、警官闇人は階段を下り、陸橋を渡り始めた。

だが、その真ん中付近で郁子の体力に限界が来た。感応が解けると、疲労が全身にのしかかる。その場に崩れ落ちる郁子。座り込み、呼吸が整うのを待つ。

「……行くわよ……最後のひとつ……」

郁子はなんとか立ち上がり、ふらつく足取りで小屋を出て、階段を上がった。そして、石碑の前まで移動すると、ゴルフクラブを振り上げる。

銃声が響き、左肩に鋭い痛みが走った。それは二の腕をわずかに掠めただけだったが、大男に体当たりされたかのような衝撃に尻餅をつく。二の腕がぱっくりと裂け、血がだらりと流れた。警官闇人が戻つて来たのだ！

「馬鹿にしゃがって……検挙するぞお？」

階段付近で闇人が銃口を向けていた。引き金に指をかけている。反撃も、感応も、逃げることさえ不可能だ。郁子は、目を閉じた。

——しかし。

かちり、と、拍子抜けするほど軽い音がした。

目を開けると、闇人は首を傾け、不思議そうな表情で銃を見つめながら、何度も引き金を引いている。その度に、リボルバー式の拳銃は



シリンドーがカチカチと空回りするだけだ。弾切れだ！

「……やんなっちゃうなあ」

苦笑いのような顔になる警官闇人。

郁子は立ち上がると、ゴルフクラブを振り上げ、渾身の力を込めて振り下ろした。ガツン！ と、確かな手ごたえ。

闇人は、「すまんなあ……朝子……」と、小さな声でつぶやきながら倒れた。

肩で大きく息をし、郁子は石碑のところへ戻る。最後の力を振り絞り、もう一度クラブを振り上げ。

「……うわああああ!!」

吠えると同時に振り下ろし、石碑を破壊した。血飛沫のような赤い煙が霧散し、やがて消滅する。

これで、石碑はすべて破壊した。地の底と地上を繋ぐ門と鍵は失われた。

地面が揺れ始めた。時化<sup>しけ</sup>の海を航行する船上にいるような大きな揺れだが、不思議と身体は安定している。現実ではない地震——そんなことを思った。冥府の穴を見ると、吹きあがっていた虹色の光が消えていた。穴が塞がろうとしている。地の底へ落ちた土の塊が重力に逆らって地上に戻り、穴の周囲に次々とくっついて修復している。巨大な穴が見る間に塞がると、今度は消えていた観覧車が土台から修復されていった。下部のゴンドラが修復され、ゴンドラを回転させるホイールが修復され、そして、上部のゴンドラが修復された。爆破解体された建物の映像を逆再生しているような光景だった。

地面の揺れが治まった。大穴は消え、観覧車は元に戻った。冥府の門は塞がれたのだ。

「やったー！ やったぞー！」

一樹が叫んだ。郁子は全身の力が抜け、その場に崩れ落ちた。

だが、次の瞬間、再び地面が揺れ始める。

「——えっ?」

きよとんとした表情になる郁子と一樹。

二人の目の前で、再び、観覧車が消えはじめる。

上部のゴンドラから、ホイール、下部のゴンドラと、次々と崩れ落ちてゆく。

観覧車があつた場所の地面も消える。中心から土が崩れ落ち、見る間に穴が出現した。それも、さつきよりも一回りも大きい穴だ。

そして、穴からは、さらに勢いよく虹色の光が吹き出す。

「ちよつと！ どうなつてんの!？」

「判らない!」

悲鳴に近い声を上げる二人の目の前で、さらに大量の闇人が湧き出した。ライトの光やゴルフクラブではもちろん、周辺を照らす三本の街路灯の強い光でも撃退できないほどの数だ。

「ダメだ！ 逃げろ!!」

一樹が叫び、二人は正門へ向かって走った。？

第四十二話 『別離』 木船郁子 蒼ノ久集落／三上  
家居間 11：48：46

冥府の門を閉ざすことに失敗し、閻霊を地上へ解放してしまった木船郁子と一樹守は、なんとか遊園地から脱出し、島の西部にある漁師たちの集落・蒼ノ久まで逃げていた。二人は丘の斜面にいくつも立ち並んだ木造住宅の中から鍵がかかっていない家を見つけ、中で少し休むことにした。

「——すまない。まさか、あんなことになるなんて」

居間に腰を下ろした一樹は、悔しさと申し訳なさをにじませた声で言った。冥府から地上に戻った郁子と一樹は、遊園地から脱出する前、敷地内にある七つの石碑をすべて破壊した。石碑は地上と冥府を繋ぐ門と鍵であり、それを壊せば門を閉ざすことができると考えたのだ。だが、その行為は完全に裏目に出た。全ての石碑を破壊した結果、冥府の門は大きく広がり、大量の閻霊が地上へ湧き出したのだ。石碑の破壊は、かえって事態を悪化させてしまったのだ。

「知らなかったんだから仕方ないわよ。あたしだって、石碑を壊せばなんとかなるかもって思ってたし」

落ち込む一樹をなんとか励まそうとする郁子。無論、どんな言葉を掛けたところで、気休めにもならないだろう。それ以上かける言葉を見つけれず、郁子は無言で一樹の隣に座り、部屋を眺めた。八畳の和室で、机とたんす、そして、ぎっしりと本が詰まった大きな本棚がある。並んでいる本のタイトルを見ると『土器に見る縄文人の歩み』とか、『失われた古代文明の秘宝』など、世界中の遺跡や出土品、古い文明等に関する本ばかりだ。考古学というやつだろうか。趣味というレベルをはるかに超えた量である。もしかしたら、この家に住んでいたのは学者さんなのかもしれない。

しばらくぼんやりと本棚を眺めていると、一樹が「——教えてくれ」と言った。「あいつらは何なんだ。なぜ地下に封印されていた。地上に現れて、なにをするつもりだ」

郁子は視線を一樹に移した。「えっと……あたしも、子供の頃に昔話みたいなのを聞いただけで、あんまり詳しくないんだけど……あ、そうだ。ちよつと待ってて」

郁子は立ち上がり、本棚の前に立った。この島に住む学者さんならたぶん……と思い、本の背表紙を端から見ていくと、思った通り、『夜見島古事ノ伝』というタイトルの本を見つけた。夜見島に伝わる古い伝承をまとめたものだ。郁子は本を取り出すと、その中の『光に追われし古の者』のページを開いて、一樹に渡した。

「ヤツらは、この世界に人間が誕生するよりもずっと昔に、地上を支配していた者と言われているわ——」

その頃、この世界にはまだ光が存在せず、全てが闇に包まれていた。古の者は、闇の世界で生きていたのだ。だが、あるとき、世界を創造した神が「光在れ」と言うと、たちまち地上に眩しい光が降り注ぎ、世界を覆い尽くした。これを、光の洪水と呼ぶ。この光の洪水により、地上で生きられなくなった闇の住人達は、光を逃れるために地の裏へ逃げた。それが冥府だ。闇の住人たちは長い年月冥府に身をひそめ、やがてひとつの存在になったという。恐らくこれが、郁子たちが冥府で見た異形の生物の正体だろう。

一方で、闇の住人の中には逃げ遅れた者も多くいた。冥府に逃げ損ねた者たちは海の底へ隠れた。それが、海から来る穢れ・屍霊どもだ。「——こうして、闇の者たちは地上から追い出されることになったんだけど、ヤツらはいつか地上に戻ることを願い、地の底から使いを放って、地上の様子を窺っていると言われているの」

郁子の話を聞いた一樹は、はっとした表情になった。「使い……そうか、それがあの、岸田百合——鳩と呼ばれていた女か」

「……そうだと思う」

「地上に戻ると言っても、人間と仲良く一緒に暮らしましょう、という話じゃないだろうな。俺たち人間を排除し、再び地上の支配者となるつもりなんだ。クソ！俺は、ヤツらの地上侵攻に手を貸してしまっただのか」

「……………」

一樹は、島で出会った岸田百合と名乗る少女に誘惑され、彼女に言われるがまま冥府の門を解放した。だがそれも仕方がないかもしれない。ヤツらは幻視などの様々な特殊能力を持っている。人の心をまどわし、操る能力を持つていたとしても不思議ではない。普通の人間が、そんな特殊能力に抗うことは難しいだろう。

郁子は、一樹を慰めようと、彼に手を添えようとした。しかし。

——貴様は因子を持つ者か!?

不意に、冥府で異形の生物から言われた言葉が、脳裏によみがえった。

「……………」

郁子は一樹に伸ばしかけた手を下げ、代わりにパーカーのポケットに入れた。そして、デジタルカメラを取り出し、一樹に差し出した。

「これ、港に落ちてたよ？ あなたのでしょ？」

カメラを受け取る一樹。「どこに落としたのかと思ってたんだ。ありがとう」

「でも、ゴメン。今度は、眼鏡を落としちゃったね」

地の底で異形の生物から逃れる途中、一樹は掛けていた眼鏡を落としました。一樹は拾おうとしたのだが、それでは異形の生物に捕まってしまう恐れがあったため、郁子が無理矢理一樹を連れて逃げたのだ。

一樹は小さく笑った。「いや、いいんだ。どうせ度が入ってない」

「そつか……………なら、もう大丈夫よね？」そう言って、郁子はまた立ち上がった。「じゃあ、あたしは行くから」

「え……………行くって、どこへ？」

「わかんないけど……………とにかく、島から脱出する方法を探してみる」  
「なら、俺も一緒に」

一樹も立ち上がるうとしたが、郁子は手のひらを向けてそれを制した。

「悪いけど、あたし、誰かと一緒にいるの、好きじゃないの」

一樹に背を向け、部屋から出ようとする郁子。

その肩を、後ろから一樹が掴んだ。「待ってくれ。どうしたんだ、急に?」

郁子は肩に添えられた一樹の手を見る。「あたしの能力、見たでしょ?」

「君の能力……あの、屍人や闇人を操った能力か」

「そう。あれは、他人の心の中に入り込んで操る能力。この島に来てから目覚めた能力だけど、それに似た能力は、もつとずっと前……子供の間から使えるの」

「……似た能力?」

「ええ。他人の心の中に入り込むだけなら、ずっと昔から使えたわ。あたしには、他人が考えていることが判る——心が見えるの」

「……………」

「それだけじゃない。最近は能力を使わなくても、触るだけで、その人が考えていることが判るわ」

郁子の言葉を聞いて、一樹ははっとした表情になり、郁子の肩から手を離れた。

「安心して。直接肌と肌が触れなければ大丈夫だから」

郁子が夏でも厚手のパーカーを着ているのはそのためだ。誰かと不意に肌と肌が触れないよう、常に長袖でフードつきの服を着るようになっている。若い女には場違いな田舎の港で働いているのもそれが理由だ。港ならば、日光を遮るものがない海上で肌を守るため、長袖姿でいる人は少なくない。

自嘲するように小さく笑い、郁子は一樹を見た。得体の知れない能力に脅えるような、あるいは、郁子の話を疑っているような、そんな微妙な眼差しだ。

「——そういう目で見られるのが嫌なの」

突き放す声で言ったつもりだったが、自然と声が震え、どこか悲しみがにじむ言い方になってしまった。

「いや、俺は別に——」

戸惑う一樹に背を向け。

「さよなら」

郁子は家から出ていった。一樹は、追いかけてこなかった。

一人、海沿いの道を歩く郁子。別に、彼に何かを期待していた訳ではない——そう自分に言い聞かす。彼は海に転落しそうになった郁子を助けようとしてくれた。その借りを返したかっただけだ。

それに。

——あたしは、誰かのそばにいてはいけない人間なのかもしれない。

他人の心に入り込む——なぜ、そんな能力を持っているのか？  
ずっと悩んでいた。その答えが、この島にあるような気がする。異形の生物が放った鳩には、幻視や他人の心を惑わすといった特殊な能力がある。あたしの能力もそれと同じものなのではないのか。あたしも鳩ではないのか。あたしも、闇の住人ではないのか——。

大きく首を振り、考えを振り払う。それはおかしい。あたしは光が苦手ではない。夏でもパーカーを着ているが、それは日光を避けるためではなく、他人と肌が触れ合うのを避けるためだ。鳩は地上の様子を探る使命を受けているというが、あたしはそんな使命は知らないし、人間を探ろうと思ったこともない。また、あたしには子供の頃の記憶があるし、当時の写真やビデオの映像もある。以前ちよつとした事情で戸籍を調べたが、きちんと記載されていた。冥府から放たれた鳩に子供の頃の記憶や写真、戸籍があるとは思えない。あたしは、鳩なんかではない。

ただ。

——貴様は因子を持つ者か!?

郁子を見た異形の生物が言った言葉が、ずっと心に引つかかっている。

因子とは何か、それは判らないが。

あの時、少しだけ、異形の生物の心が見えた。郁子は、異形の生物の心の中にも入りこんだのだ。

——我は何度も鳩を飛ばしたが、戻って来たのは一人だけだ。

感応はすぐに弾かれてしまったため、読めたのはそれだけだった。その一人とは、岸田百合のことである。戻ったのは百合だけ——つまり、他の鳩は戻っていないということになる。

では、戻らなかった鳩は、どうなったのか。

全員死んでしまったのだろうか？ ヤツらは光に弱い。強い太陽光を浴びれば死ぬという可能性も、充分に考えられる。

だが、もし、光を避け、人間の世界に溶け込み、いまも暮らしているとしたら——。

おぞましい考えが浮かび、郁子の背中を冷たい汗が流れた。



第四十三話 『畏怖』 阿部倉司 夜見島／四鳴山林  
道 12:58:10

一樹と郁子よりも先に地上へ戻った阿部倉司と喜代田章子は、遊園地を離れ、四鳴山のふもとを通る林道を歩いてきた。このまま進めば、金鉱発掘時代につくられた夜見島港という港があるらしい。別に何か目的があつてそこに向かつているワケではない。地の底から現れた異形の生物共から逃れるため、とりあえず遊園地から最も離れた場所へ向かつているだけだった。

同棲相手である多河柳子失踪の真相を探るため夜見島へやってきた阿部だったが、今の彼は目的を失っていた。

遊園地から逃げ出した後、阿部は章子から異形の生物の正体について話を聞いた。ヤツらはまだ世界が闇に包まれていた大昔に地上を支配していた闇の住人だが、光の洪水が起こって世界が光に包まれると、地の底へ身を隠した。そして、地の底から鳩と呼ばれる使いを送り、いつか地上を奪還するために様子を探っていたという。

この話は、阿部にはイマイチよく判らない。恐らく判らなくても良い話だろうとも思う。重要なのは、あの化物どもが柳子の失踪とどう関係するかだ。

異形の生物は、柳子と同じ顔をしていた。似ているというレベルの話ではない。髪型やホクロの位置、話をする時のちよつとした表情の動き方など、全て柳子そのものだった。他人の空似でそこまで似るはずがない。さらには、作家の三上が探していた女も同じ顔だったようだ。柳子と同じ顔をした女が三人——これは、一体どういうことなのか。

章子は言う。

「闇の住人が地の底へ逃げたのは人類誕生よりもずっと前だから、ヤツらは人間のことなんて知らなかったはず。たぶん、あの異形の生物が飛ばした鳩っていうのは、誰か特定の人間をモデルにして作られたんだと思う。要するに、クローン人間みたいなものね。元になった人

が誰なのかはわかんないけど」

つまり、異形の生物と同じ顔を持った柳子はクローン人間のようなもの——ヤツらが放った鳩である可能性が高いというのだ。

そんな訳はない、と、否定することはできない。思い当たることがあるからだ。阿部が柳子と同棲していた一年の間、彼女が昼間外出することはほとんど無かった。仕事は夜から営業する居酒屋だ。夏は陽が沈む前に出勤することもあったが、その時は必ず長袖の服を着ていた。陽の光に当たることを極端に嫌っていたのだ。特にこの数ヶ月間は酷かった。夜勤の仕事にも行かなくなり、昼は部屋中のカーテンを閉め、電気も消し、布団にくるまっていた。無理に外へ連れ出そうとすると手が付けられないくらい暴れた。何かがおかしいと、阿部も思っていたのだ。闇の住人とやらの仲間であつたのなら、説明はつく。

だが章子は、不可解な点もあると言う。

地の底から放たれた鳩は、地上のことを何も知らないはずだ。言わば究極の世間知らずであり、人間社会ではかなり浮いた存在になるはずだ。柳子には、光を嫌うという以外に不審な点はなく、きちんと働いてごく普通に暮らしていた。世間知らずだという印象は無い。

また、柳子は日頃から日記を書いていた。章子は一度、それを見せてもらったことがあるという。ごく普通の十八歳の少女がごく普通に書いたごく普通の日記だったそうだ。鳩では、これはあり得ない。地上に放たれて間もない鳩が長い文章を違和感なく書くとは思えない。

「もちろん、それらはあたしの勝手な思い込みかもしれない。鳩は何年もかけて人間を観察・学習して社会に馴染んでいるのかもしれないし、鳩が人間をモデルにして作られたのなら、最初からオリジナルの人間の記憶があるのかもしれない。でも、地上の様子を探るためにやってきた鳩が日記を書くっていうのは、あまりにも違和感があるわ。柳子の日記は本当にごく普通の日常を書きとめたものだった。あんなもの、闇の住人の地上侵攻には何の役にも立たないはず。鳩としては無駄な行動としか思えないのよ。柳子が鳩だったのは間違い

ないと思うけど、ちよつと特殊な鳩なのかもしれない」

そう、章子は言う。

もつとも、今の阿部には柳子の正体がなんであろうと関係なかった。

阿部は、いつも財布の中に入れてある柳子とのツーショット写真を取り出した。

「結局、死んだのは柳子だったんだな……」

二日前の夕方、彼のアパートで殺害されていたのは柳子であり、立ち去った女が柳子でないというのは、もはや疑いようがなかった。

「たぶん、柳子は鳩の使命を放棄して、人間としてあなたと暮らすことを選んだんだと思う。でも、それが原因で……」

章子は最後の言葉を言い淀んだが、言いたいことは阿部にも判った。あの異形の生物は柳子の裏切りを許さなかった。異形の生物は新たな鳩を飛ばし、裏切り者を抹殺したのだ。

柳子との写真を見る阿部。カメラに向かっておどけて笑う阿部に對し、柳子は目をそむけ、暗い表情を浮かべている。写真は阿部のアパートで撮ったもので、フラッシュを使っている。恐らく光が嫌だったのだろう。柳子はカメラで撮影されるのを嫌っていた。彼女が写っている写真は唯一これだけだ。もう二度と、柳子の写真を撮ることはできない。彼女が笑っている姿は、思い出の中にしか存在しない。

章子が、阿部の肩に手を添えた。「元気出して……なんて言っても、出るわけがないよね。恋人が、あんなことになったんだから」

「いや、元気出た」

阿部は写真をしまうと、けろりとした表情で言った。

「……はい？」

「柳子が死んじまったのなら、それはどうしようもない。今は落ち込んでいる場合じゃねえ。もうこの島に用は無い。こんなところ、さっさと逃げ出そうぜ」

章子はしばらく目を丸くして驚いていたが、やがて小さく笑った。「へえ？ 意外ね。あんたのことだから、『柳子の仇だ』とか言っ

バットで化物に挑んでいって、あつさり返り討ちになるかと思つたのに」

「俺ひとりだったら、そうしたかもな。でも、今はオメーがいるからよ」

「へ？ あたし？」

「ああ。俺のせいでこんな危険なことに巻き込まれて、ホントにすまねえと思ってるぜ。オメーのことは、俺が責任もって、無事家まで送り届けてやる」

「なによ、急に。あたしは、あたしの意志でついてきたんだし、別にあなたのせいで巻き込まれた、なんて、思ってるないよ」

「いいから、俺に任せとけ」

「……ありがと」

ほほ笑んで礼を言う章子に、阿部は鼻の下をこすって笑い返した。「で、帰るにはどうしたらいいんだ？」

「……あなた、たった今『俺に任せとけて』言っただけでしょ」

「それは化け物どもからオメーを護ることに關してだ。脱出方法を考えるのは、オメーの仕事だ」

「やれやれ、ま、そんなことだろうと思っただけだね」あきれ声で言った後、章子は腕を組んで考える。「まあ、オーソドックスにどこかで船を手に入れて、海へ出るしかないんじゃない？」

「ならちようにいいじゃねえか。この先に港があるんだろ？ 行ってみようぜ」

道を進もうとする阿部だったが、章子は「うーん」と唸った。「あそこには船は無いんじゃないかな？ 夜見島港は、島で発掘した金を運び出すための港なの。金鉱を管理してた会社がつくったんだけど、会社は金鉱閉鎖と同時に島から撤退しちゃったから、船は残ってないと思う」

「じゃあ、どうするんだ？」

「船があるとしたら、夜見島港を抜けて少し北にある蒼ノ久の漁港だろうね」

「それって、俺たちが最初に流れ着いたところだよな」

「そう。あそこは、島に古くから住んでる漁師たちの港だから、漁船があるかもしれないわ」

「よし、じゃあ、行ってみつか!」

「ええ」

愛用のバットを手に、ぐるぐると肩を回す阿部。いつもの調子が出てきた。柳子の命を奪ったヤツらに対する恨みは、もちろんある。だが今は、島からの脱出を優先すべきだろう。化物どもの正体について考えたり、落ち込んだり、ヤケになって無謀な行動に出るのは性に合わない。今まで通りのやり方で島からの脱出を目指す。阿部は、そう心に決めた。

二人は、港へ向かって歩き出した。

「……でもよ」

「……なに?」

歩きながら、阿部は空を見上げた。「これ、船なんかで脱出できる状況なのか?」

章子も同じように空を見る。「そうね……正直に言うと、ムリだと思う」

空を見上げたまま、二人は大きいため息をついた。島に上陸して以降、空はずっと厚い雲に覆われていたのだが、いまは少しだけ雲が途切れ、陽の光が注いでいる。敵は光に弱いからそれは良いことなのだが、問題は、雲の切れ間から見えているのが空ではないということだ。そこには、鳩の形をした島が逆さを向いて浮かんでいるのだ。それは、空に巨大な鏡があつて、島全体を写しているかのような光景だ。なぜこんなことになっているのかは、章子も判らないと言う。

「……船よりロケットでも探した方がいいんじゃないかねえか? 作家の先生も、あつちの島が本物で、こつちの島は偽物だ、みたいなこと言ってたぞ?」

「ロケットなんてあるわけないでしょ、種子島じゃないんだから」

しばらく二人で逆さまに浮かぶ島を眺めていたが、やがて、空は再び厚い雲に覆われ、島は見えなくなつた。

「とにかく、今は港に行ってみるしかないわ」

章子の言葉に、阿部は「へいへい」と応える。二人はとりあえずもうひとつの島のことは考えないようにして、先を急いだ。

しばらく進むと道は開け、小さな広場に出た。広場の隅には資材を保管する倉庫があり、その右側には鉄柵の扉がある。扉から広場を出て少し進めば金鉱会社のビルが建ち並ぶ区域だ。また、倉庫の左側にはトンネルになっていり階段があり、下りていくと灯台があるそうだ。二人はビルが建ち並ぶ区域へ向かうため、鉄柵の扉の方へ向かった。

倉庫の前を通りかかったとき、心臓の鼓動が激しくなった。近くに屍人がいる合図だ。阿部は幻視で素早く周囲を探った。すぐに、トンネル方面から広場に向かって階段を登る視点を見つけた。手にはポロボロのコウモリ傘を持っている。

「さっそくお出ましか。まあ、傘なんて貧相な武器で、オレ様の聖剣エクスカリバットにかなうワケはないがな」

阿部はバットを構えて倉庫の陰に隠れると、息をひそめて相手が現れるのを待つ。そして、姿を見せた瞬間、大きく振りかぶって殴りつけた。

しかし。

がつん！ と、硬いものを叩いた手応え。阿部渾身の一撃は、相手の傘で受け止められていた。

「……なっ!!? なんだてめえは!?!」

阿部は驚きの声を上げる。屍人が不意打ち攻撃を受け止めたことも驚きだが、相手の姿がこれまでに見た屍人とは全く異なっていたのだ。死体そのものの顔色でぼろぼろの服を着た姿ではなく、色白の肌で黒い雨合羽のような服を着ている。さらには、見るだけで不快な気分になるようなニヤケ面をして、「醜い人間のクセに、よく頑張ったなあ、偉いぞお」と、人間の言葉まで喋ったではないか。

色白の肌で黒い雨合羽のような服を着た屍人のような化物は、阿部のバットを横に薙ぎ払った。体勢を崩す阿部。そこへ、色白の肌で黒い雨合羽のような服を着た屍人のような化物が傘を振り上げる。ヤベエ！ と思った瞬間。

「——ギヤあ!!」

色白の肌で黒い雨合羽のような服を着た屍人のような化物は悲鳴を上げ、顔を押しえて苦しみ始めた。色白の肌で黒い雨合羽のような服を着た屍人のような化物の顔には、章子が向けたライトの光が当たっている。光に弱いのか？

「今よ！早く倒して！」

章子の声で我に返り、阿部は色白の肌で黒い雨合羽のような服を着た屍人のような化物に向けてバットを打ちつけた。三度、バットで殴ると、色白の肌で黒い雨合羽のような服を着た屍人のような化物は、金属をこすり合わせるような甲高い悲鳴を上げて倒れた。

ふう、と大きく息を吐く阿部。なんとか倒すことができたが、コイツは一体なんなのだろう？バットによる渾身の一撃を受け止め、人間の言葉を喋った。屍人とは明らかに違うように思う。この、色白の肌で黒い雨合羽のような服を着た屍人のような化物は——。

「その呼び方やめてくれない？長すぎてイライラするから」しびれを切らした声で言う章子。

「なんだよ？オメー、人の心が読めるのか？」

「読めるわよ。占い師だから」

「どういう理屈だそれは」

「とにかく、そいつは、闇人っていうの」

「闇人？」

「ええ。地の底で異形の生物からイモムシ状の化物が生まれるの、見たでしょ？あれは闇霊って言って、まあ、屍霊の親戚みたいなものね。で、闇霊も屍霊と同じく光が苦手だから、人間の死体に憑りついてシエルター代わりにするの。それが闇人。屍人よりずっと頭は良いし力も強いから、ヤバイ相手よ。気を付けて」

「やれやれ、めんどくさそうだな」阿部は倒れた闇人をじっくり観察した後、章子を見た。「ところでオメー、なんかやたらとこいつらのことに詳しいみたいだが、それも、例の夜見島ガイドって新能力か？オメーの中にある別の誰かが島を案内してくれるっていう」

「そうね。理由はわかんないけど、なんか島や屍人に関する事より

も詳しいみたい」

「ふうん、なんでだろうな」

「なんでだろうね」

「……………」

「……………」

「つーかオメー、その夜見島ガイドの能力とか、一〇〇パーセント当たる占いとか、変な能力持つてるわりには、やたら明るい性格してるよな？」

「なによ急に。明るい性格だったらいけない？」

「別にいけないってことはないけどよ、普通だったら、『なんであたしにはこんな能力があるの?』とか、『あたしは何者なの?』とか、悩むんじゃないの?」

「なんで悩む必要があるのよ? むしろ、こんな便利な能力をタダで取得できるなんてラッキーじゃん」

「ずいぶん能天気だな、オメー」

「あんたがそれを言うかね」

などと話していたら、びくんと身体が震え、倉庫の屋根の上から阿部たちを見下ろす視点が見えた。屋根の上を見ると、鉄パイプを持った闇人が阿部たちを見下ろして、さっきのヤツと同じく不愉快な気分になる薄ら笑いを浮かべていた。

「人間ってというのは、本当に醜い生物だなあ。早く死ねばいいのに」

闇人は屋根の上から飛び降りると、阿部に向かって鉄パイプを振り上げた。だが、章子がライトを顔に当てると激しく悶えて苦しみ始めたので、阿部はその隙にバットで殴り倒した。さらに身体が震える。今度は背後の道から左官用のコテを持った闇人が襲って来たが、これも章子のライトでひるませて倒した。

「なんだよ。闇人は、屍人よりヤバいんじゃないやなかったのか? これじゃあ、屍人の方がよっぽど手ごわいぜ」

「まあ、闇霊はずっと地の底に隠れてたからね。海の底にいた屍霊よりも、さらに光に弱いだよ。だから、死体に憑りついてても、完全に光への耐性を持つわけじゃない。そこは、大きな弱点だと思う」



「へっ。そんな致命的な弱点があるんじや、オレ様の神劍バトルムンクの敵じゃねえな」

阿部も懐中電灯を取り出すと、バットを肩に担いで悠々と歩きはじめた。

鉄柵の扉から広場を出てさらに進むと、近代的なコンクリート製のビルが所狭しと立ち並んでいた。昭和三十年代に島から金を運び出すために造られた夜見島金鉱株式会社のビルだ。道は舗装され、ビルの間を縫うように細く長く続いている。しばらく進むと曲がり角が見えたが、その手前でまた鼓動が激しくなった。幻視で様子を探ると、ちょうど角を曲がったところに闇人がいる。手には何も持っていない。

「弱いくせに武器さえ持ってないとはな。そんなんで、オレ様の魔劍レーバットインに敵うとでも思ったのか」

「呼び方が苦しくなってるわよ。元ネタの武器もどんどんマイナーになるし」

阿部は章子を見殺し、バットを振り回して走り出した。

しかし、角に差し掛かったところで急停止し。

「……………」

回れ右をして引き返した。

「どうした、急に」と章子。

「いや、なんかヤバイのがいる」

「だから、闇人はヤバイって、最初から言ってるでしょ」

「いや、あれはたぶん闇人じゃないな」

「じゃあ、なによ」

「何と言ったらいいかわからんが、まあ、いま見たものをありのまま話すぜ。外見は、ケンタウルスに似ている。RPGなんかに出てくる、上半身が人間で下半身が馬のモンスターだ。だが、顔が頭に無いんだ。顔は、人間でいう股間の所にある。それも、普通の三倍くらいデカイ顔だ。そんで、下半身なんだが、馬って言ったが、それは他に表現のしようがなかったから言っただけで、本当は馬じゃない。四足歩行をしているんだが、足がデカイ指なんだ。下半身にでっかい指が四

本生えてそれで歩き回ってる感じだな。体長体高ともに二メートル以上あって、とにかくデカイ。なに言ってるのかわからねーだろうが俺だってわからねーよ」

「あんたが判らなきやあたしだって判らないわよ。もつと判りやすく説明できないの?」

「じゃあ、オメーが手本を見せてくれよ」

「いいわよ? あたしの語彙力、見せてあげるわ」

章子は角から顔を出して向こう側を覗くと。

「……………」

すぐに回れ右をして戻って来た。

「……………どうだった?」と訊く阿部。

「何と言ったらいいかわかんないけど、まあ、いま見たものをありのまま話すわね。外見は、セントールに似ているわね。ギリシャ神話なんかに登場する、上半身がヒューマンで下半身がホースの半人半獣よ。でも、顔が頭に無いの。顔は、馬でいう首の付け根の所にあった。それも、普通の顔を十倍にして三で割ったくらいの大ささよ。それで、下半身んだけど、ホースって言ったけど、それは他に表現のしようがなかったから言っただけで、本当はホースじゃないの。四足歩行してるけど、それは手なの。四本指の手が下向きになって、その上にデカイ顔とヒューマンの身体が乗ってる感じね。体高体長ともに八十インチ以上あって、とにかくおっきいの。なに言ってるのかわかんないだろうけどあたしだってわかんないわよ」

「…………俺が言ったのと同じじゃねーか」

「仕方ないでしょ。それ以外に言いようがないわよ」

「んで、ありゃあ、なんだ?」

「たぶん、闇人の一種だと思う」

「あれが闇人? 闇人は、闇霊が人間の死体に憑りついたものなんだろう? どう見ても人間の姿じゃないぞ、あれは」

「そうね。闇人は、憑りついた人間の細胞を一度ぐちゃぐちゃにして再構築することができるの。つまり、自由自在に姿を変えられるわけ。おそらく、より戦闘に適した姿になろうとして、いきついた姿な

んじゃないかな」

「あの変な姿が戦闘力マックス形態だっていうのか？ 化物のセンスはよく判らん。んで、どうやって倒すんだ？」

「倒し方？」

「ああ。夜見島ガイドは、なんて言ってる」

「えーっと……知らない、だって」

「なんだよ。肝心なところで役にたたねーな」

「仕方ないでしょ。人類と闇霊が接触するのは今日が宇宙史上初なんだし、夜見島ガイドさんだって、あんなの初めて見るのよ」

「まあ、何にしてもこんなバットなんかで倒せる相手じゃねえだろうな」

「強そうな相手には聖剣とか魔剣とか言わないのね」

「仕方ない。こんな時は、アレだな」

「ええ。アレしかないわね」

二人は頷くと、曲がり角に身を隠したまま巨体の闇人を幻視した。説明しよう。アレとは、必殺・様子見。敵の行動を観察しつつチャンスを窺う、究極の基本技である。

必殺・様子見は、すぐに効果を発揮した。巨体闇人は、のっしのっしと歩きながらその場を離れ、道の先にある長くて急な階段を下りていったのだ。章子によると、その階段は地獄段と呼ばれるこの地域の名所のようなもので、下りた先には波止場があると言う。また、街は急斜面に張りつくようにビルが建てられているため、階段の途中から連絡橋を通ってビルの二階や三階に入ることできるそうだった。

巨体闇人は地獄段の下まで降りると、波止場の方へ歩いて行った。今がチャンスだ。二人は角を曲がって地獄段まで進み、途中にある連絡橋から隣の夜見島金鉱のビルに渡った。連絡橋はビルの二階に繋がっている。二階のドアは開きっぱなしになっていたので中に入った。

章子は大きく息をついた。「ふう。なんとかやり過ぎせたわね」

阿部は室内を見回した。金鉱会社の二階は十メートル四方の広さだ。正面にもうひとつ出入口があり、連絡橋を使ってさらに隣のビル

に渡ることができるようになっている。

「しかし、この先もあんな奴らがいるんじゃないや、もつと強い武器を見つけないきゃな。ここに何かないかな」

阿部と章子はなにか武器はないかと手分けして室内を探ってみた。が、所詮はただの会社だ。武器として使えそうなものは、鉄パイプやモンキーレンチ、ハンマーやクギなどの工具くらいしかない。どれもバットと大差はないだろうが仕方がない。沢山持つて行っても邪魔になるので、阿部はその中からハンマーとクギを取った。

「ハンマーはともかく、クギなんてどうするの？ 違法建築でもするの？」

「ふふん。思いついたことがあるんだ。まあ見てな。オレ様の手にかかれば、ただのバットもあつという間に電光剣ライトセーバットに早変わりだ」

「ネタが無いからってSFに逃げな」

阿部は早速作業に取り掛かろうとしたが、またまた心臓の鼓動が激しくなった。あの巨体闇人が戻って来たらしい。ここにしていると見つかるかもしれないので作業は後回しにし、二人は反対側のドアから外に出た。連絡橋を使ってさらに隣のビルへ渡る。幸い、巨体闇人に見つかることはなかった。二人はビルの階段を使って一階に下りると、出入口から外に出た。

ビルの前は舗装されていない砂利道が南西から北東へと続いていた。ビルの敷地と道の境には鉄格子製の扉があったが、鍵はかかっていなかったので開けて敷地の外へ出る。南西の道は波止場に通じ、反対の北東の道は蒼ノ久漁港へ通じていると、章子が説明した。

「そーいや、さっきの部屋でコレを見つけたんだが、使えないか？」

阿部はポケットから鍵を取り出して章子に見せた。鍵には木の札が付けられてあり、『蒼ノ久行ロープウェイ』と書かれてある。

「蒼ノ久って、いまから行く港だろ？ ロープウェイがあるなら、それ使えば楽じゃねえか？」

章子は鍵を受け取って少し観察した後、「ああ、ダメよ」と首を振った。「確かに、ここからちよつと東に行つたところにロープウェイが

あるけど、人が乗るタイプじゃなくて、工事とかの資材を運ぶためのものなの。まあ、小さな子供なら乗れないことはないかもしれないけど——」

そこまで言ったところで、章子は急に黙り込んでしまった。あごに手を当て、何か考え込んでいる。

阿部は章子の顔を覗き込んだ「どうした？　いきなり黙り込んで」。

章子は——。

◇

章子は顔を上げ、首を振った。「ううん、なんでもない。とにかく、そのロープウェイは使えないわ。歩いて行くしかないわね」

「ちっ、しゃーねーな」

二人は北へ向かう。少し進むと古い街灯があり、そこで道が枝分かれしていた。さっき章子が言ったロープウェイへ向かう道だが、特に用は無いので二人はそのまま直進し、蒼ノ久方面へと向かった。

第四十四話 『共鳴』 多河柳子 東京／河合荘203号室 — 31:59:04

その日、多河柳子はアパートの部屋で、一人、日記を読み返していた。何の変哲もない大学ノートに鉛筆で書き記した簡素なものだが、この一年の間、毎日欠かすことなく書き綴ってきた。思い出を詰め込んだ大切な日記だ。

日記を読み返しながら、柳子は時折部屋の中を見回す。古い木造アパートの六畳一間。ここで、柳子は阿部倉司と暮らしてきた。二人で暮らすにはあまりにも狭いこの部屋にも、思い出が詰まっている。食器棚のおそろいのマグカップ、インスタントコーヒーの瓶、壁に掛けられたドライフラワー……もちろん、それらを買った日のことも、全て日記に記してあった。この日記と部屋は、倉司との思い出そのものだ。この一年は、本当に幸せだった。

だが、この生活が決して長くは続かないことを、柳子は悟っていた。ずっと、胸の奥がざわめいている。幸せだった一年の間も、ずっと消えなかったざわめき。忘れようと思っても忘れられなかった言葉。決して忘れることのできない、彼女の使命。

——七つの門と、七つの鍵を解放せよ。

一年前、突如胸の奥底から湧き上がったこの言葉と共に、柳子は人として生きる道を無くした。オリーブの葉となる人間を夜見島へ連れ帰り、七つの門と七つの鍵を解放しなければならない。それが、彼女に与えられた使命。彼女がこの世界に存在している理由なのだ。

今と違い、一年前の柳子は使命に忠実だった。柳子はオリーブの葉に適した人間を探した。その結果出会ったのが、阿部倉司だった。

柳子は倉司を島へと誘うために接触を試みた。当時の柳子は住む場所を持っていなかった為、二人で暮らし始めるのにさほど時間はかからなかった。柳子は倉司の部屋で暮らしながら機会を伺った。

一週間が過ぎた頃、倉司が柳子に仕事を勧めてきた。近所のスーパーのレジ打ちの仕事だ。ずっと家に閉じこもってばかりの柳子を心配したのだ。だが、柳子は断った。使命に目覚めた柳子は、太陽の下での行動が制限されるのだ。日中外に出ることはできない。そう告げると、倉司は簡単に信じた。

二週間が過ぎた頃、倉司は再び仕事を勧めてきた。今度は少し離れた繁華街の小さな居酒屋だ。出勤は日が暮れてからだし、夜が明ける前に帰宅できる。これなら、昼間外に出る必要はない。それでも柳子は気が進まなかったが、むきになって断ると怪しまれるかもしれない。とりあえず働いてみることにした。

三週間が過ぎた頃、柳子は仕事に慣れていった。これまで働いたことがない柳子に対し、お店の人は優しく指導してくれた。倉司に言われ、しかたなく仕事を始めた柳子だったが、案外悪くない気分だった。少なくとも、ずっと家にこもっているよりは気がまぎれた。

四週間が過ぎた頃、柳子は常連の客と仲良くなっていた。柳子よりも一回り以上年が離れた女性だが、不思議と話が合った。やがて、仕事以外の時間にも会うようになった。その女性と一緒にいる時間は、すごく楽しかった。

一ヶ月過ぎた頃、柳子は気がついた。

自分は、人間としての暮らしを手に入れていたのだ。

目が覚めるとそばに倉司がいて、仕事場に行くとお世話をしてくれる仲間がいて、仕事が終わると何でも話せる友人がいて、そして、部屋に帰るとまた倉司がいる。

そんな暮らしに、心が安らぐようになっていた。

この暮らしに、満足していることに気がついた。

この暮らしを、いつまでも、いつまでも、続けたいと思うようになっていた。

だが――。

それが決して叶わぬ願いだということは、判っている。

――七つの門と、七つの鍵を解放せよ。

胸の内から、常にその言葉は湧き上がる。二ヶ月経っても、四ヶ月

経っても、半年たつても、一年経つても、胸の内に焼きついた使命は、決して消えない。

そして、使命を果たさぬ者がどのような末路をたどるのかも、柳子は理解していた。それが、そう遠からず訪れるであろうことも。

ノックも無しに玄関のドアが開いた。日記を見ていた柳子は、顔を上げて玄関を見る。鍵はかけていたはずだが、ドアは何の抵抗もせずその者の侵入を許した。倉司ではないだろう。彼はまだ仕事からだ。

侵入者は畳張りの部屋に土足で上がりこむ。真夏にもかかわらず長袖のシャツを着て、さらにその上にカーディガンを羽織った女だった。女は奥に座る柳子のそばに立ち、冷たい目で見降ろした。その顔は、まるで鏡を見ているかのように柳子と瓜二つだった。驚きはしない。二人はそういう存在なのだと、柳子にも判っていた。

「なぜ、使命を果たさないの？」女が口を開いた。その目と同様の、冷たい口調だった。「お母さん、怒ってるよ？」

柳子は、女の目を真っ直ぐに見つめ返す。「判ってるわ。でも、あたしにはできない。あたしはもう、島には帰らない」

女が表情を歪めた。「本気で言っているの？」  
「もちろんよ」ためらうことなく答える。

女は表情を歪めたまま、柳子のそばにしゃがんだ。右手を伸ばす。柳子は抵抗せず、目を閉じ、女に任せた。女の手が頬に触れた。その瞬間、女の心の内が流れ込んでくる。女は岸田百合という名で、二年前に鳩として放たれた。長い時間をかけて人間の言葉や生態を学び、人間の社会に馴染んだ。母から与えられた使命を果たす——その強い決意を、柳子は感じ取った。

それは、柳子と百合が同調したことを意味していた。特別なことではない。二人は、共に母から分裂した存在だ。元々同じ存在だったのだ。だから、触れ合うだけでその心を共有することができる。だから、柳子が百合の心を知ったと同時に、百合も柳子の心を知ったはずだ。

百合が手を離した。「……幸せなのね、あなた」

柳子は目を開け、「ええ」と、力強く頷いた。



百合は変わらず冷たい目を向けている。いや、その目の奥から、ふつふつと怒りが湧き出しているのを、柳子は感じていた。

百合はわずかに顎を上げた。「判っているはずよ？ それは所詮、殻の感情。あなたの感情ではない。あなたは、殻に惑わされているだけよ」

柳子たち闇の住人は、地上で生きるためには人の身体を殻として利用しなければならぬ。殻には、感情や記憶が残っていることがあり、中に入った者は、それを共有することになる。だが、多くの場合、殻の感情や記憶が闇の住人に影響を及ぼすことはない。せいぜい、口調や仕草が変わるといった程度のことだ。

だが、まれに、殻の記憶に惑わされ、闇の住人からかけ離れた行動に出る者もいる。

柳子や百合ら『鳩』には使命がある。人間を島に連れ帰り、七つの門と七つの鍵を解放しなければならない。全ては母のため——母に尽くすことだけが、鳩のたったひとつのやるべきことなのだ。それを放棄し、人として暮らし続けることに幸せを感じるなど、殻の感情以外の何ものでもない。それは、柳子にも判っていた。それでも。

「たとえこの感情が偽りでも、あたしは構わない。あたしは今、幸せなの。この幸せを、ずっと続けていたいと思ってる」

強い決意と共に、そう告げた。

百合の表情がさらに歪む。「そんなこと、お母さんは許さないわ」「判ってる。だから、あなたが来たんでしょ？」

柳子は、決して考えを変えようとはしない。たとえどのような結末が待っているようとも。

二人はそれ以上何も言わず、ただ、お互いの強い決意を込めた視線をぶつけ合った。長い時間、ずっと。  
やがて。

「——最後に、もう一度だけ言うわ」

部屋が凍りつくかと思うほどの声で、百合が告げる。「使命を果たして」

それでも、柳子の決意は変わらない。

「できないわ。だって、あたしは『人間』だから」

その瞬間、百合はハンマーを取り出し。

柳子の顔に、打ちつけた。

☆

長い時が過ぎ――。

夕日が射し込み始めた部屋で、岸田百合はただの殻となったかつての仲間を見下ろしていた。柳子と名乗っていたその女の顔は、もはや判別がつかないほどに潰れている。百合は、自分の行動が理解できなかった。なぜ、ここまでしてしまったのだろうか？　ただ殺すだけならば、一度殴ればすむはずだ。なのに、何度も、何度も、殴ってしまった。なぜだ？　考える。

使命を放棄し、人として生きていくことに幸せを感じていた柳子。百合は、柳子と同調し、彼女の胸の内から溢れ出た幸せを感じ取った。それに比べ、自分は何も持っていない。ただ使命を果たすだけの、空っぽの存在。

――あたしは、柳子に嫉妬したのだろうか？

百合が地上に放たれて二年。その間、彼女は人間について学んだ。嫉妬とは、他人をうらやましく思い、憎しみへと至る感情だ。バカなと、百合は自分の考えを笑い飛ばした。あたしは使命を果たすために地上に放たれたのだ。人として生きることを選んだ柳子に嫉妬するなど、あり得ない。だから、嫉妬したとすれば、それは殻の感情だ。殻が嫉妬し、結果、柳子を執拗に殴ってしまったのだ。つまり、あたしも殻の感情に惑わされていたことになる。

……いや。

使命を果たさそうとしない者を――母の意志に背く者を徹底的に排除するのは、鳩として当然のことだ。あたしは、母の怒りに従っただけだ。決して、殻の感情に惑わされた訳ではない。

百合はハンマーを投げ捨てると、部屋を後にした。

階段を下り、道を少し歩いたところで、前から男が歩いて来るのに気がついた。

「——お？ 柳子じゃねえか。どうした？ 久しぶりに、仕事に行く気になったのか？」

男は嬉しそうな声で百合に話しかけてきた。

それは、阿部倉司という名の男——柳子と一緒に暮らしていた人間だ。

百合は何も答えなかったが、男は構わず続ける。「やっぱ、人間働かないとダメだからな。一週間も休んだこと、みんなにちゃんと謝るんだぞ？ なあに。きちんと謝れば、許してくれるさ」

男は百合のことを柳子だと思っている。まったく同じ顔をしているから当然だろう。これは使えそうだ。

鳩として地上に放たれた百合にはふたつの使命がある。ひとつは、使命を放棄した不完全品の排除。これはすでに果たした。もうひとつは、人間を島へ連れ帰ること。男は百合のことを柳子だと思っている。百合は柳子と同調したから、柳子の記憶は全て持っている。柳子になりすますのは容易だ。この男を島へ連れて行くことは容易だ。

だが、不意に。

——おい柳子。その百均に良いマグカップがあったから、買って来たぞ。カワイイだろ？

両手に同じクマ柄のマグカップを持って笑う倉司の顔が、胸の内に浮かんだ。

さらに。

——柳子、コーヒー淹れたから、一緒に飲もうぜ？ 今日のは、ちよつといいヤツだぞ？

そのマグカップにコーヒーを淹れてテーブルに運ぶ倉司の笑顔が浮かぶ。昨日の夜、同じアパートの住人が心配して駆けつけるほどの激しいケンカをしたにもかかわらず。

——ほら、こうしておけば、ずっとこの花を飾っておけるぜ。

ドライフラワーを壁に掛ける倉司の笑顔が浮かぶ。花瓶に入れて飾っていた花がしおれてきたので、慌ててドライフラワーにしたそう

だ。それは、倉司の誕生日に柳子がプレゼントした花だった。

次々と浮かぶ倉司との思い出。仲が良かった日々ばかりではない。特に、鳩の使命が強くなったこの数ヶ月の間は、激しく言い争い、彼を傷つけた。

それでも、胸の奥から湧き上がる倉司は、常に笑っている。

「――」  
一人喋り続ける倉司に、百合は、何もせず、何も告げず、歩きはじめた。

「……なんだよ。まだ機嫌ワリーのかよ。ま、いいや。今日は早く帰って来いよ。うまいもん作って待つてるからよ」

背中に聞こえる声に振り向きたい衝動に駆られたが、振り向かなかった。

知らず、目から水が流れ出していた。

これは、涙というもの。人間が、喜んだり、悲しんだり、激しく感情が揺さぶられたときに、目から流れる水だ。

百合も、涙を流すことはできる。だがそれは、人間を思い通りに操るために使うためのものだ。人間の、特に男というものが涙に弱いことを、百合は知っていた。涙で男を操ることができるから、必要なときに流すのだ。何もしていないのに自然に流れてくるなど、今までなかったことだ。

――あたしは今、感情を揺さぶられているのだろうか？ 悲しんでいる？ 失われた柳子の幸せを嘆いている？

考えを振り払う百合。これは殻の感情だ。あたし自身の感情ではない。あたしは、惑わされない。

百合は強い決意と共に、島への帰還を目指す。

第四十五話 『彷徨』 喜代田章子 夜見島／蒼ノ久  
集落 15:31:58

◇

島から脱出するための船を求め、蒼ノ久漁港にやってきた喜代田章子と阿部倉司の二人は、海沿いの道を重い足取りで歩いていた。古くから漁師が住むこの集落ならば漁船があるだろうと思いついてみたのだが、期待通りにはいかなかった。船自体はすぐに見つかった。漁港には何艘もの船がロープに繋がれていたが、どれも古く、とてもじゃないが乗れたものではなかったのだ。半分沈んでいるものや、完全に沈没しているものがほとんどで、かろうじて浮いている船も、いつ沈むか判らないボロボロの状態だ。そのような船で海に出るのは自殺行為としか思えなかった。

章子は肩をすくめた。「考えてみたら当然よね。この島は二十九年も無人で放置されているんだから。ま、海に出ること自体思いつきで言ってみただけだから、これで良かったのかも」

「のんきに言ってる場合じゃねえだろ」と、阿部。「他に何か良い手はないか？ 夜見島ガイドに訊いてみる」

「それが、さつきから全然返事しないの」

「はあ？ なんでだよ」

「たぶん、拗ねてるんだと思う」

「拗ねてる？」

「ええ。実はね、夜見島港で、あんたがロープウェイに行こうって言ったじゃない？」

「ああ。物資運搬用で人は乗れないってやつだよな。」

「そう。だからあたし、行く必要はないって言ったんだけど、実はあの時、夜見島ガイドさんは、ロープウェイに行けって、メチャクチャアピールしてたの。それを無視したから、怒ってるんじゃないかな」

「オメーのせいで拗ねてるのかよ。なんで無視なんかしたんだ」

「まあ、なんとというか、ちよつとイヤな予感がしてね。このまま夜見島ガイドさんの言うこと聞いてたら、あたしがあたしじゃなくなっちゃうかもしれないって」

「なんだそりゃ?」

「ううん。なんでもない。とにかく、そういうワケだから、しばらく夜見島ガイドさんは使えないわ。あたしたちでなんとかするしかないでしょうね」

「俺たちだけでどうにかできるとは思えねえけどなあ」

ため息まじりに周囲を見回す阿部。海の反対側は丘があり、斜面に古い民家が建ち並んでいた。夜見島港ほど急傾斜ではないものの、ここも斜面に沿って発展した集落だ。

しばらく周囲を見回していた阿部だったが、「うん?」と首をかしげた後、近くの街灯のそばの角を曲がった。

「どうした? 何かあった?」章子も阿部を追って角を曲がる。曲がった先は緩やかな坂道になっていて、いくつかの民家の玄関が見えた。

阿部は、手前の民家の門を指さした。「アレなんだけどよ」

阿部が指さした民家には、『三上』の表札がかかっていた。立派な門構えで、平屋がほとんどのこの地域では数少ない二階建て。周辺の家と比べると浮いていると言つていいほどの大きな家だ。

「ここって、あの作家先生の家じゃねえのか? 先生、この島の出身だつて言つてたし」

と、阿部が言つたが。

——お姉ちゃん! 加奈江お姉ちゃん!

章子の目には、まったく別のものが映っていた。

雨の降る夜、幼い少年が傘も差さずに道を走っていた。五歳にも満たないであろうあどけない顔には見覚えがあった。章子が島に上陸し、海沿いの堤防を過去視した時に見た少年——二十九年前の三上脩だ。ならば、これは過去の映像。過去視が発動しているのであろう。

だが、章子が行う過去視は人や物に触れて残留思念を読み取る能力だ。なにも触れていないのに映像が見えるなど、今までになかったことだ。新たな能力が目覚めているのかもしれない。

脩はロケット柄のパジャマを着て、手にはロボットのおもちゃを持ってしている。靴も靴下も履かない素足の状態で、「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と言いながら、泣き出しそうな顔で周囲を見回している。だが。

「脩！ どこにいるの!?!」

坂の上から女の声が聞こえた。そのとたん、脩は笑顔になる。坂の上へ向かって走り出す。その先に、若い女が背を向ける格好で立っていた。女も脩と同じく、雨の中傘も差さず、靴も履いていない。どこか怪我でもしているのか、手は血がべつとりとついており、その手にたき火などをかきまわすための鉄の棒を持っていた。

脩の声に女は振り返った。その顔を見て、章子は息を飲む。生まれて一度も陽の光を浴びたことがないのではと思うほどの白い肌の美しい少女——柳子と全く同じ顔の少女だった。少女は脩の姿を見ると。

「脩！ 無事だったのねー!」

と言つて、駆けてきた少年を抱きしめた。

……そうだ。島に上陸した際に見た過去視でも、脩のそばにこの少女がいた。脩が「加奈江お姉ちゃん」と呼ぶ少女。

「脩、大丈夫？ どこもケガしてない？」加奈江は脩の身体の様子を確認する。

脩は「うん。大丈夫」と、大きく頷いた後、加奈江の血まみれの右手に気がついた。「お姉ちゃん、手、ケガしたの?」

「ううん、大丈夫」加奈江は首を振り、隠すように右手を背中に回した。「お姉ちゃんも、ケガはしてないわ。それより脩、怖い思いしなかった?」

「あのね、お父さんがいっぱい血を出して廊下で寝てて、お父さん、お父さん、って、何回呼んでも起きなくて、それで、怖いおじさんたちが探してるの」

「そう……でも、よく一人でここまで来れたね」

「うん！ ボク、お姉ちゃんに言われた通り、勇気を出したの！」

「そう、偉いわ」

加奈江が頭をなでると、脩は満面の笑みを浮かべた。

「——おい」

という阿部の声で、章子は我に返った。映像は消え、阿部が章子の顔を覗き込んでいる。

「どうした？ ボーっとして」

「ああ、ゴメン、なんでもない」章子は首を振った後、目の前の家を見た。「えっと……ああ、そうね。ここが脩……三上さんの家で、間違いないわ」

阿部は章子から家に視線を移す。「あの先生、島についていろいろ詳しく知ってみたいだから、中を調べれば、脱出のヒントみたいなのが見つかるかもしれねえぞ？」

「いや、どうだろう？ 住んでたと言っても二十九年前の話だからね。確か、彼が四歳の頃よ。当時から島に詳しいとは思えないけど」

「そうか……でも、一応調べてみようぜ」

阿部は門をくぐり、玄関へ歩いて行った。まあ、他にアテがあるわけじゃないし、調べるくらいならいいか。章子も阿部の後に続いた。

だが、門をくぐったと同時に、二人の目の前に、どすん！ と大きな音を立て、妖怪つるべ落としかと思うほどの大きな物体が落ちてきた。巨大な手の上に人の身体が乗り、あり得ない場所にデカイ顔がある化物。妖怪つるべ落としなんかよりもよっぽどたちが悪い、巨体闇人だ。

巨体闇人は「他人ひとの家に勝手に入るなあ」とやたら低い声で言うところちらに突進してきた。

「ヤベエー！ 逃げるぞー！」

二人は門から外に飛び出すと、坂道を駆け上がったって逃げた。巨体闇人はその巨体に似合わず二人にも劣らぬ速さで追いかけてくる。道は少し進むと右に折れていた。そこを曲がって少し進むともう一度右に曲がっている。ちょうど、三上家の周囲をぐるっと回る道で、そ



のまま進めば下り坂になり、海沿いの道へ戻ることになる。

巨体闇人から逃れるため走り続ける章子だが、二つ目の角の手前で、不意に。

——ここを通ると、近道だよ？

脩の声が聞こえたかと思うと、一瞬、家と家の間に空いたわずかな隙間を通り抜ける脩と加奈江の映像が見えた。映像はすぐに消える。また過去視か？ 正面を見ると、突き当りの民家とその隣の民家の間に、映像と同じわずかな隙間があるのを見つけた。

「リーゼント！ あそこに逃げるわよ！」

章子は隙間を指さして阿部に指示を出した。阿部もその隙間に気付き、身体を横にして入ろうとするが。

「ダメだ！ 狭すぎる！」

阿部の体格では隙間は狭すぎて通り抜けられそうになかった。そうしている間にも、巨体闇人は迫っている。

「ここはあたしに任せて、あなたは逃げて！」 章子は阿部の目を見て、力強く言った。

「そんな……オメー、犠牲になるつもりか!？」

目を潤ませそうな安部。その横を通り抜け、章子は隙間へ身体を滑り込ませた。阿部と比べてかなり小柄な章子だ。問題なく隙間に入ることができた。そのまま奥へ進む。

「……って、オメー、なに一人だけ逃げてんだ！」

「だから言ってるでしょ？ ここ（を通るの）はあたしに任せて、あなたは（自力で）逃げて！」

「んだよそりゃ！ てめー、覚えてろよ……」

阿部の声が遠ざかる。坂を下って行ったようだ。直後に巨体闇人がやってきて隙間を覗き込んだが、阿部が入れないほどの隙間だ。阿部の倍くらいありそうな巨体闇人が通れるはずもない。巨体闇人は章子を諦め、阿部を追って坂を下って行った。よし、作戦成功だ。章子はそのまま隙間を通り抜け、反対側の道に出た。海から丘の上にかけて曲がりくねった細い坂道が続いている。途中から階段になっている所もあるようだ。

さて。

先ほど一瞬見えた脩と加奈江の映像のことを考える章子。あれが二十九年前の出来事を過去視したものだとしたら、二人もこの隙間を通り抜けたのだろうか。脩たちも誰かから逃げていたのだろうか？

誰から？ 闇人ではないだろう。二十九年前、闇の住人はまだ地の底だ。ならば屍人か？ 屍人の伝承は古くから島に伝わっているから、あり得ない話ではないだろう。だが、幼い脩は「怖いおじさんが探してる」と言っていた。追手が屍人なら、オバケ、あるいはゾンビと言うように思う。屍人でもない。ならば、生きている人間——島の住民だろうか？ しかし、なぜ住民が脩たちを追いかける必要がある？ 四歳の子供だぞ？ それとも、脩を追いかけていたのではないのだろうか？ 脩でなければ、一緒にいた加奈江ということになる。あの、柳子と同じ顔をした少女……。

はっとして顔を上げる章子。

——鳩だわ。

異形の生物が地上の様子を探るために地の底から放った鳩。柳子と同じ姿をしているのなら、加奈江も鳩であった可能性が高い。島の住民は、加奈江が鳩であると気付き、排除しようとしたのだろうか？

それで、加奈江と脩は逃げた。この蒼ノ久から逃げるなら、北の貝追崎か、南の夜見島港だ。貝追崎は戦前に日本軍が建設した要塞跡がある地域だ。夜中に四歳の子供と一緒に向かうには少々遠い場所にある。南の夜見島港ならかなり近い。可能性が高いのはこっちだ。

——そうか。だからあの時、夜見島ガイドさんはロープウェイに行けって言ったんだ。

蒼ノ久と夜見島港を繋ぐロープウェイ。資材運搬用だから人が乗ることはできないが、小さな子供ならば乗れないことはない。加奈江は、幼い脩をロープウェイに乗せ、夜見島港へ逃がしたのかもしれない。

だが、夜見島港ではなにも調べて来なかった。その後、脩と加奈江がどうなったかは判らない。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

いつの間にか、すぐそばに息も絶え絶えな阿部が立っていた。

「あら、無事で何より」

「無事じゃねーわ。死ぬかと思ったぞ」額の汗をぬぐう阿部。額だけでなく、全身汗でびっしょりである。「あのヤロー、マジでヤベえ」

「だから、最初から闇人はヤバイって言ってるでしょうが。よく逃げきったわね」

「いや、まだ逃げきってねえんだ」

坂の下を指さす阿部。巨体屍人が、のっしのっしと上がって来るのが見えた。

「ちよつとー。あたしと合流するなら、あいつを振り切ってからにしなさいよ」

「ムチャ言うな。あいつ、あんなデカイ身体なのに、結構足速いんだぞ」

「次はちゃんと振り切って来るのよ？　じゃ、あたしはこれで」

章子は片手をあげると、もう一度隙間を通過して反対側に行こうとする。

だが、向こう側では別の人型闇人がニヤケ顔で隙間を覗き込んでいた。人型闇人もそれなりに大柄だから隙間を通り抜けることはできないが、これでは向こう側に行けない。

「残念だったな」と、阿部。「諦めて一緒に戦え」

「戦うったって、バットやハンマーやクギなんかじゃどうにもならないでしょ」

「安心しろ。俺には秘密兵器がある」

不敵に笑う阿部に対し、章子はめいっばい疑惑の眼差しを向ける。

「秘密兵器って、夜見島港で言ってたライトセーバットってやつ？」

どうせ、バットにクギ打ち付けただけでしょ？　そんなんで勝てるの？」

「違うな……見ろ！」

阿部がドヤ顔で取り出したのは、なんと小型のマシンガンだった。

「……………」

「……………」

「バットとハンマーとクギを組み合わせてマシンガンを作るなんて、コンボ武器作りの達人チャック・グリーンやフランク・ウエストもビックリだわね」

「誰だそれは。オメーは言うことはたまによくわからねーんだよな。バットやクギからマシンガンが作れるわけねーだろ。これは、前に要塞みたいところで手に入れたんだ。いつか使おうと思って、すっかり忘れてたんだよ」

「そんなもの、今までどこに隠し持ってたのよ。小型っていつでも一応マシンガンなんだから、結構な大きさでしょ」

「それが異界の不思議なところだ。まあ、これくらいの大きさならまだマシだ。偉大なる先人の中には、ブラウン管テレビくらいある大きな脳波測定器を隠し持ってた医者もいるからね」

「誰よそれ。あんたの言うことはたまによくわかんないのよね。それより、持ってたのはいいけど、そんなの使えるの?」

「狙いを定めて引き金引きやいだけだろ? 簡単だぜ」

「そんな安易なモンじゃないと思うけど……まあいいわ。やってみなさい」

阿部は巨体闇人に銃口を向け、引き金を引いた。ぱらぱららら、と、小気味良い音を奏で、銃口が火を噴いた。ずっと安全装置を掛けずに持ち歩いてたのかこの男は、という思いはあるものの、とりあえず撃つことはできた。だが、かかかかん、と、トタン屋根に雨が当たったような軽い音がして、弾は全て弾き返された。巨体闇人の身体には、かすり傷ひとつついていない。

「……………」

「……………」

「……ダメじゃん」

「……ダメだな」

銃弾の雨をものもしない巨体闇人は、股間にある大きな顔でニヤリと笑うと、また突進してきた。やはり逃げるしかない。二人は坂道を駆け上がる。曲がりくねった道は途中から階段になっている。階段は擁壁の上にある道へ繋がるもので、大人二人がすれ違うのがやつとという狭さだ。二人は階段を駆け上がった。巨体闇人は階段の下で立ち止まり、悔しそうに見上げる。あの巨体は戦闘に特化しているのかもしれないが、蒼ノ久や夜見島港のような狭い道が多い斜面地域ではかなり行動が制限されるだろう。そこは弱点と言えるかもしれない。

巨体闇人を階段下に置き去りにし、二人はさらに坂道を上がる。やがて、道端に小さな社があるちよつとした広場に出たので、そこで少し休むことにした。この地区ではかなり高い位置にある広場で、集落全体と海を見渡せる場所だ。

「ふう。なんとか振り切ったわね」社のそばに腰を下ろす章子。

その隣に阿部も座る。「しかし、銃も効かないとなると、もうどうしようもねえな。この先あのタイプの闇人に会ったら、逃げの一択しかないな。まあそれはそれとして、この先どうするんだ？」

「うーん。とりあえず、ここから北へ行けば要塞跡があるけど……どうする？」

「またあそこか……あそこに行っても、次は遊園地に行つて、そんてまた夜見島港に逃げて、結局ここに戻つて来るだけだろ」

「Continue to NEXT LOOP…って感じね」

「それは偉大なる先人の最大の知恵だが、この島じゃ通じないだろうな」

「そうね。お互いなに言つてんのかわかんないけど」

と、どすん、と重いものが落ちたような音がして、わずかに地面が揺れた。いやな予感がして階段の方を見ると、巨体闇人が立っていた。どうやら擁壁をよじ登つたらしい。

「本当にしつこい女だな、いや、しつこい巨体闇人だな」阿部は呆れ声で言いながら腰を上げた。

章子もやれやれと立ち上がる。「このままやられるわけにはいかな

いから、ループ覚悟で逃げるしかないわね。何度もループしてたら、ちよつとした行動の変化で抜け出せるかもしれないし」

などと話していたら。

——社を開けよ。

不意に声が聞こえた。誰？ 章子は周囲を見回すが、それらしき人はいない。というよりも、今の声は耳で聞いたのではなく、直接頭に響いたという感じだった。夜見島ガイドさんの機嫌が直ったのか？ と一瞬思ったが、それとも違うように思う。夜見島ガイドさんの声は胸の内から聞こえてくる感じだ。なによりも、今の声は女の人ではなく男の人だった。天の助けか？ それとも土壇場で新能力が目覚めたのか？ 判らないがとにかく今はこの声に賭けてみよう。社を開けよ？ 広場には小さな神社のような社がある。あの中に何かあるのかもしれない。小さいながらも何かの神様を祀まつったものだから、きっと神器と呼ぶにふさわしい物が奉納されているに違いない。煉獄の炎を降らす土人形か、はたまた聖獣の宿りし刀か。章子は胸の高鳴りを押さえつつ社の扉を開けた。中には一本の木の枝が入っていた！ しかも、三上脩という名前が書かれた札付きだ!!

……………。

……つて、ただのボロい枝じゃねーか！ んなもんどーしろっつーんじやい！

思わず杖を真つ二つに折りそうになった章子。そんなことをしている間にも巨体闇人は迫る。ダメだ。謎の声なんか信じたあたしがバカだった。こうなりや自分たちでなんとかするしかない。

……………。

「……リーゼント」

「……なんだ」

「あたしがあいつの注意を引くから、その隙に、あんたはあいつの後ろに回り込んで、背中を撃ってみて」

「後ろからの攻撃なら効くのか？」

「わかんないけど、正面からの攻撃が効かないなら背後から、つていうのは、セオリーでしょ」

「そうかもしれないが、オメーは大丈夫なのかよ？」

「んっふっふ。任せなさい。あたしには、最強の武器があるから」

「いまいち根拠不明だが……信じるぜ」

「ええ」

二人は力強く頷き、巨体闇人の方を向いた。

巨体闇人が突進してくる。こちらの作戦が決まるまで待つてくれた巨体闇人の優しさにちよっぴり感謝しつつも、情けは無用だ。

「これでも喰らいなさい！」

章子はライトを取り出すと、迫ってくる闇人の顔に光を当てた。

「——ぐはあ!!」

悲鳴を上げ、顔を押さえて苦しむ巨体闇人。そう！ その恐ろしい姿にビビってすっかり忘れていたが、巨体だろうと何だろうとこいつは所詮闇人！ 光こそが最強の武器だ！

「今よ！ リーゼント！」

「任せろ！」

章子の声に応じ、巨体闇人の背後に回り込む阿部。巨体闇人はもがきながらも両腕を振り回す。そんな闇雲な攻撃を喰らうものか！

章子はバックステップでかわし、阿部は身を屈めてかわす。そして、巨体闇人の背後に回り込んだ阿部は、マシンガンの引き金を引いた。ぱらぱらという音と共に、大きくのけ反る巨体闇人。効いてる！ 効いてるぞ！ やっぱり背後からの攻撃は有効だ！ そのままぶっ

殺せ！  
と思つたとたん。

ぱらぱらという小気味良い音が、からからからというむなし音に変わる。銃に詳しくない章子にも、それが弾切れを告げていることがすぐに判った。なんで敵がない間にリロードしておかないかな。そういうの基本動作だろ。つまらんしくじりをしておつて。そういうヤツだ、あの男は。

光から復活した巨体闇人は、振り返って阿部の方を向いた。阿部は慌ててライトを取り出し、顔に光を当てようとするが、巨体闇人は顔に手をかざして光を遮った。ちなみに巨体闇人の顔は股間にあるの

で、股間を手で隠すというちよつとマヌケな格好になっている。

「てめえ！ 光を手で遮るなんて卑怯だぞ！」

卑怯なのかな？ どちらかと言うとあたしの方が卑怯な手段使いまくつてる気がするが。まあいい。敵がリーゼントに気を取られているこの隙に、逃げよう。章子は息を殺してその場から去ろうとしたが。

——枝を刺せ。

また謎の声がした。枝？ さっきの社の中にあつたボロい木の枝か？ 枝は三十センチほどの長さで、ところどころコブのように膨らんで太くなっており、先端は鋭く尖っている。とは言え所詮は木の枝だ。めちやくちや油断している人間のおなかくらいになら刺さるかもしれないが、マシンガンですら倒せない化物に刺さるとは思えない。どうあつてもこんな枝で戦えと言うのか。五十ゴールドと銅の剣で魔王を倒せとか言う王様並のムチャ振りだな。

巨体闇人がリーゼントに迫る。あの男を犠牲にして逃げることは簡単だけど、あたし一人逃げたところで先はないかもしれない。なら、腹をくくるしかない。こうなりやヤケだ！

章子は、巨体屍人が阿部に気を取られている隙に、そつと背後に忍び寄り。

「……うおおりややああ!!」

気合と共に、闇人の背中を枝で突いた。ぶすり、と。

枝は、まるで鶏モモ肉に串を刺すかのごとく、ワリと簡単に刺さつた。

同時に、巨体闇人がその巨体にはあまりにも不釣り合いな金切り声で悲鳴を上げる。まさか、こんな枝の攻撃が効いているのか!?

次の瞬間、枝のコブのような部分から、いく本もの根が生え出し、巨体闇人の全身に絡みついていく。巨体闇人がもがく。その体格にふさわしい馬鹿力を持っているはずだが、絡みついた木の根はビクともしない。やがて木の根が巨体闇人の全身を包み込むと、闇人の身体が青白い炎に包まれた。さらに悲鳴を上げる巨体闇人。炎はすぐそば



にいる章子をも飲み込むほどの勢いだが、不思議と熱さを感じなかった。炎はさらに燃え上がり、巨体闇人の身体を焼く。炎が勢いを増すと同時に、木の枝が大きくなっていった。三十センチほどの長さだったものが一メートルほどになり、いくつも枝分かれし、葉も茂ってきた。闇人の生命を糧に育っているように見えた。

やがて巨体闇人は、枝が納められていた社に睨むような視線を向けると。

「こちらから招かれてやったというのに……いまだ我らの災いとなるか……」

よくわからない言葉を残し、燃え尽きた。

そして、その後には、一本の小さな木が生えていた。

「なんだ……？ オメー、何やったんだ？」驚いた表情の阿部

「わかんない……ただ、謎の声に従って、木の枝を刺しただけ」

残った木を見つめる章子。闇人も屍人同様、一度倒しても死体に闇霊が憑りつけばまたよみがえる。だが、枝を刺した闇人は消滅し、一本の木と化した。これでは屍霊も闇霊も憑りつきようがない。あの枝は、不死なるものを無に還すレベルの神器だったのだろうか。

だが、枝は消滅してしまった。一本一体にしか使えないのだろうか。あの枝がもつとあればこの先の戦いがぐつと楽になるのだが……。そう言えばあの枝、三上脩という名前が書かれた札が付いていた。名前が書いてあるのは、他の人のものと間違わないようにするためだろうか。だとしたら、他の住人の枝もあるのかもしれない。

「……あれ？」

章子は、木の根元に手帳落ちていることに気がついた。拾ってみる。表紙に、三上隆平と書かれていた。三上隆平……三上脩りゅうへいの父親だろうか。そう言えばあの巨体闇人、三上家に入ろうとした時、「勝手に人の家に入るな」とか言ってたな。

章子が手帳をどうしたものかと眺めていたら、はらりと、中から写真が一枚滑り落ちた。拾って見てみる。それは、大きなおなかを抱えた女性が穏やかに微笑んでいる写真だった。

「……………え？」

思わず声が出る章子。その写真の女は、柳子と全く同じ顔をしていた。

写真を裏返す。手書きの文字で、『一九七二年六月 弥生・妊娠九月』と書かれてあった。

これは、三上隆平の妻——つまり、脩の母親？ この母親もまた、柳子と同じ顔をしている。ということは、脩の母親も鳩だったのだろうか？ この写真の女は妊娠している。恐らくお腹の子は三上脩であろう。鳩も妊娠できるのだろうか？ ならば、過去視で見えた映像で脩と一緒にいた少女・加奈江は、母親だったのだろうか？ いや、加奈江はまだ成人していないと思われる。仮に柳子と同じ十八歳だとすると、脩を産んだのは十四歳の頃ということになってしまふ。あり得なくはないだろうが、やはり不自然だ。そもそも脩は加奈江のことを「お姉ちゃん」と呼んでいた。母親ではないように思う。どうなっている。この写真の女と、脩が姉と慕う加奈江と、柳子と、鳩。これらは、どう繋がるのだ。

……………

章子は考えるのをやめ、写真を手帳に戻すと、そのまま木の根元に置いた。あたしたちはもう、柳子の正体は探らないと決めた。いまのあたしたちの目的は、島から脱出することだけだ。

—— 鉄塔へ向かえ。

また謎の声が聞こえた。鉄塔——四鳴山の頂上に建つ、あの鉄塔か。

章子は北東の方角を見た。島で最も高い山に建つ、山よりも高い鉄塔。空は一面雲に覆われているが、相変わらず鉄塔の周辺だけは丸く穴が開ており、その穴に鉄塔の先端と雲が吸い込まれて消えている。

章子は、夜見島港の手前で見た空に浮かぶ逆さまの夜見島を思い出した。そうか。あの空に浮かんだ島が真実の夜見島なら、あの鉄塔を上れば……………

「……………リーゼント」

「……………なんだ」

「鉄塔に行ってみるわよ」

「アレか……」阿部も鉄塔の方を見た。「アレはアレでヤバそうだが……まあ、他に手段がないなら、行くしかねえか」

「ひよつとしたら、これが島から脱出する最後のチャンスになるかもしれない。気合入れなさいよ?」

「ああ、任せとけ」

二人は決意を込めて頷くと、蒼ノ久集落を後にし、四鳴山へと向かった。

第四十六話 『決起』 太田常雄 蒼ノ久集落／太田  
家大広間 — 4 : 00 : 09

その夜、夜見島の漁業を取り仕切る網元の屋敷には、多くの漁師たちが集まっていた。時刻は夜の八時。朝が早い漁師たちはすでに床に就いている時間だ。にもかかわらず、大広間には二十人以上の男が神妙な面持ちで正座している。日に焼けてがっしりとした体格の中年の漁師、まだ細腕で少年の面影を残す若い漁師、島で最年長の漁師——島の漁師ほぼ全員が集まっていた。つまり、それだけ重要な集まりであることを意味している。

漁師たちの正面には、左目に眼帯代わりの黒い布を巻きつけた年配の男が座っていた。網元の太田常雄だ。太田から少し離れた脇には、娘のともえも控えていた。集められた理由は、まだ誰も聞いていない。しかし、誰もがその理由を察していた。皆、太田の言葉を待っている。だが、太田は座したまま、やや視線を落とし、ずっと沈黙している。太田がなにも喋らないので、他の誰も言葉を発しない。大広間は息をするの**も**はばかれるほどの静寂に包まれていた。

長い沈黙の後、ようやく太田は顔を上げた。そして、集まった漁師一人一人の顔を確認するようにゆっくりと視線を移動させた後、重い口を開いた。

「遅い時間が集まってもらってすまぬな。皆も知っておるだろうが、岩井家の娘婿が、海から来た女をかくまっておる」

漁師たちは一斉に頷いた。集められた理由は、やはり想像通りのものだった。

岩井家は、蒼ノ久漁港のすぐそばにある二階建ての大きな家だ。その一人娘である弥生は、『島で生まれた者は島で生涯を終える』という習わしに反し、十年ほど前に島を出て行った。その後、東京で大学教授をしている三上隆平という男と結婚し、子を授かった。出産のために島へ帰省したのが四年前だ。弥生は無事に男の子を産んだが、その直後に海難事故に遭い、夫と赤子を残し他界した。

夫の三上隆平が息子の脩と共に島へ移住してきたのは、その二年後のことだった。

もともと閉鎖的な島だ。島民は、島の者が外に出ることはもちろん、島の外から余所者がやって来ることにも極端に嫌う。三上家の移住は、島民からは決して歓迎されたものではなかった。それでも、本来は島の住人だった弥生の夫とその息子である。亡き弥生を想いただけ静かに暮らしているだけならば、いずれ皆から認められたかもしれない。だが、大学教授であった三上が職を辞してまで島に移り住んだのは、決して亡き妻を想つてのことではなかった。三上の目的は、島の風習や歴史を研究することであった。

島には、地の底や海の底に潜む古の者の話や、死者に神木の枝を刺して葬るなど、独特の伝承や風習が多数存在する。それらは決して島外に漏らしてはならないことなのだが、三上は、それを学会で発表しようというのだ。そのために、島民には禁足地とされる場所にも足を踏み入れ、地面を掘り起し、出土した物を持ち帰り調査している。島民にとってはそれだけでも許し難い所業であるのだが、あろうことか、三上は海から流れ着いた女を家に招き入れ、共に暮らし始めたのである。しかもその女は、海難事故で死んだ弥生と瓜二つなのだ。

「あの女は、昼間はずっと家に閉じこもっているわ」そう言ったのは、太田の脇にひかえていた娘のともえだった。「光を恐れる者は古の者の使い——伝承の通りよ。それに、あたし見たの。あの女が、海から現れた黒くてもやもやしたものを追い払ってた。あの女は、絶対に人間じゃない。化物よ！」

ともえの話に、漁師たちは深く頷いた。疑う者はいない。皆、伝承や風習の意味は幼い頃から繰り返し聞かされている。海の底には『穢れ』が潜んでいる。穢れは海からやってきて人の死体に憑りつき悪さをする。穢れが憑りつかないよう、死者の身体には神木の枝を刺して弔わなければならない。妊娠した女を海に入れてはいけない——穢れが腹の子に憑りつくから。

そして。

時に、穢れは海で死んだ者の姿を模して現れることがある。海で死

んだ者が帰って来ても、決して家にあげてはならない。  
それらはすべて、島の掟なのだ。

その掟を、三上隆平は犯した。許し難いことであつた。それが三上自身の身を滅ぼすだけならばまだしも、島全体の危機に関わるのだから。

太田が言葉を継いだ。「わしは何度も警告をしたが、あの男は聞く耳を持たぬ。『穢れ』から島を守る太田家の当主として、これ以上放っておくわけにはいかぬ。穢れは、排除せねばならぬ」

穢れの排除——その言葉に、漁師たちは一斉に息を飲んだ。広間の重苦しい空気が、さらに重量を増した気がした。そのまま押し潰されてしまいそうな錯覚さえする。

それを破つたのは、漁師の中でも特に血気盛んな若者だつた。

「やつてやりましょう！ おやつさん!!」若者は拳を握りしめて立ち上がった。「穢れを排除し、島の平和を守りましょう！」

若者の言葉に、隣の年配の漁師も「そうだ！」と声を上げる。「余所者は、いつも島を荒らす！ 好きにさせていたら、島が滅んでしまふ！」

さらにその隣の漁師が「化物から島を守るんだ！」と応じた。さらにその隣の漁師が「親父さんの命だ！ 絶対しくじらねえぞ！」と声を上げれば、「やつてやる……やつてやる！」と、自分に言い聞かせるようにつぶやき続ける漁師もいる。広間は、先ほどまでの静寂が嘘であつたかのように、男たちの怒号に包まれた。

だが、息巻く男たちを、太田は「静まれ！」と一喝した。

再び広間は静寂に包まれる。太田は獵師一人一人の顔を見た後、「そなたらの気持ちは判つた。だが、もう一度よく考えるのだ」と、重い口調で続けた。「相手は穢れ。無事ではすまぬかもしれぬ」

海の底に潜む穢れは、様々な妖かしの術を使うとされている。女一人とはいえ、決して侮れない存在であることを、太田は理解していた。「子供や年寄りがいる者は今すぐ帰るのだ。決して、とがめたりはせぬ」

穢れの排除には、どのような危険があるか判らない。漁師たちの中

には、明日子供が誕生日を迎える者もいる。間もなく初めての子が産まれる者もいる。寝たきりの親を介護している者もいる。もしものことがあれば、残された者はどうなるのだろうか。

だが、それでも帰る者はいなかった。皆、決意を込めた目で太田を見ている。

「……良いのだな？」

太田の言葉に、漁師たちは力強く頷いた。

「すまぬ、恩に着るぞ」

太田は漁師に向かって深く頭を下げると、視線を娘のともえへ移した。

「ともえ、わしに何かあったら、後のことは任せたぞ」

突然のことに、ともえは驚いて目を丸くする。「そんな……不吉なことを仰らないでください」

「相手は穢れだ。太田家当主と言えど、無事ではすまぬかもしれぬ。首尾よく穢れを排除できたとしても、その行為は余所者には決して理解されまい。最悪の場合、わしは官憲に捕まるやもしれぬ。その時は、そなたが太田家当主代行を務めるのだ」

「そんな！ お父様が捕まる覚悟ならば、私も！」

立ち上がろうとするともえを、太田は手のひらを向けて制した。

「それはならぬ。穢れを一人排除したところで全てが終わるわけではない。またいずれ、新たな穢れがやって来よう。その際、太田家の当主が不在では、島の秩序を守ることはできぬ」

「しかし、私は女です。女の身では当主など務まりません」

「太田家の当主に男も女も関係ない。その器に足るかどうかだ。わしは男児に恵まれなかったことを一度も悔いたことはない。ともえ。そなたなら、立派に当主の務めを果たせるであろう。わしはそう信じている」

会合が始まって以来ずっと厳しかった太田の顔が和らいだ。太田家当主の顔から、父親の顔になっていた。

「お父様……」

ともえは目を涙で潤ませたが、やがて強い決意と共に言う。「判り

ました。その時は、太田家の娘として、必ずや務めを果たします」

娘の言葉に満足した太田は、再び漁師たちに向き直った。「では皆行くぞ！ 穢れから島を守るのだ!!」

太田の檄に、漁師たちは一斉に声を上げて応じた。



第四十七話 『惨劇』 三上脩 蒼ノ久集落ノ三上家  
二階 — 3 : 45 : 12 終了条件2

翌日の保育園の支度を終え、父親に促されて布団に入った三上脩だったが、明日は加奈江と外で遊べるかも、と思うと、胸が高鳴つてなかなか眠れなかった。ようやく眠りについた頃、一階の部屋から父の叫び声が聞こえ、脩は目を覚ました。しばらくは夢か本当の出来事か判らなかつたが、続いて何人もの男が騒ぐ声と、ガラスが割れる音、家の中をどたどたと走り回る音が聞こえ、夢ではないと判つた。やがて静かになつたので、脩は勇気を出して一階へ下りていく。そこには、血まみれで倒れている父の姿があつた。どんなに呼びかけても父は反応しない。ふと顔を上げると、玄関先に見知らぬ男と大きな犬が立っていた。怖くなつた脩は、加奈江がいる部屋に向かつて逃げた。

◇

「——お姉ちゃん！」

一階の奥にある加奈江の部屋に飛び込んだ脩。しかし、部屋には誰もいなかった。部屋の奥の窓が開けっ放しになっており、雨が吹き込んで畳を濡らしている。そのそばにある鏡台は割れており、破片が周囲に飛び散っていた。部屋の電気は消えている。光を嫌う加奈江が減多なことで明かりを点けないことは脩も知っていたが、誰もいなくて薄暗い部屋、しかも、雨が降っているのに開いている窓と割れた鏡という異様な部屋の様子が、脩の恐怖をさらにあおり立てる。

「——誰だ？ 見ない顔だな」

玄関の方で声がした。脩がよく知っている人の声だ。この島で一番偉いおじさんと、脩は認識していた。同時に、一番怖いおじさんでもあつた。毎日のように家にやってきては、お父さんを怒っているおじさん。その声を聞いただけで、脩はすぐみ上つて動けなくなる。あのおじさんが来たとき、脩はいつも、奥の部屋で怖くて震えていた。

そんな脩を、加奈江はいつも抱きしめ。

「大丈夫よ、お姉ちゃんがそばにいるから」

と、優しく声をかけてくれた。加奈江に抱かれていると脩は安心できた。おじさんが帰るまで、ずっとそうしていた。

だが、いま加奈江はいない。恐怖を和らげてくれる人がいないのだ。おじさんはずっと家にいて帰らない、ボクはずっとここから動けない——そんな気がしてくる。

脩が部屋に立ち尽くしていると、犬が激しく吠えだして始めた。あの、知らない男の人のそばにいた大きな犬だろう。怖いおじさんが、脩を探して咬みつけ、と言ったのかもしれない。ここにいたらすぐに見つかって咬みつかれてしまう。そう思うが、それでも脩は動けない。恐怖が、脩の身体を縛っている。

——脩、勇気を出して。

どこからか加奈江の声が聞こえた気がした。もちろん、部屋を見回しても姉の姿は無い。ただ、部屋の隅に緑色のロボットのおもちゃが転がっていることに気がついた。四角い頭と胴体にマジックハンドのような手と短い脚のロボットで、背中のボタンを押すと頭部が割れ、中から熊が顔を出して吠えるというおもちゃだ。部屋で加奈江と遊んだあと忘れていったのだろう。

——もし、お姉ちゃんがいなくて怖いおじさんがやってきたら、このロボットに、勇気をください、ってお願いするの。そうしたら、勇気が出てくるから。

また加奈江の声が聞こえた気がした。いや、それは思い出したと言った方がいいかもしれない。昨日の夜、おじさんはいつも以上に怖い声で怒っていた。そのとき、震える脩に加奈江はおもちゃを持たせ、そう言ったのだった。

加奈江の言葉を思い出した脩。それまでどうしても動かなかった身体が、不意に動くようになった。ロボットを拾い、勇気をください、とお願いしてみる。

すると、加奈江に言われた通り、脩の胸に勇気が湧いてきた。

みしり、と、床板を踏む音がした。怖いおじさんが来る、と思った。

勇気が湧いた脩は、もう立ちすくんだりもしない。畳に散らばった鏡の破片を踏まないように注意し、窓際まで移動した。窓枠に足を掛けないし、外は雨が降っている。それでも、勇気が出た脩は恐れることなく庭へ飛び降りた。そのまま玄関の方へまわる。玄関先には誰もいない。怖いおじさんたちは家の中を探しているのだろうか。脩は走って門をくぐると、石段を下りて家の前の道へ出た。

家の前はゆるやかな坂道になっている。坂をおりると港があり、海沿いの道を通れば保育園や商店街へ向かうことができる。脩は坂をおりていこうとしたのだが、海沿いの道に雨がっぱを着た男の人が見えたので立ち止まった。脩は、この島の男の人はみんなあの恐いおじさんの家来だと思っている。実際それは間違いではない。この島の男のほとんどは漁師であり、網元である太田常雄に忠実なのだ。だから脩は、あの人も自分のことを捕まえようとしていると思った。幸い男の人は脩には気付かず通り過ぎたが、このまま海側へ逃げると見つかってしまうかもしれない。脩は反対方面へと逃げるため坂を上がる。しかし、この道は脩の家の周りをぐるっと回って結局海沿いの道へ繋がっている。近所の家に逃げることもできるが、誰も助けたくないだろう。この辺りに住む人はみんな漁師で、漁師でないのは脩の家だけなのだ。脩を助けてくれる人は、加奈江しかない。

「お姉ちゃん！ 加奈江お姉ちゃん！」

脩は姉の名を呼んだ。怖いおじさんたちに見つかる、とは思わなかった。お姉ちゃんは怖いおじさんたちよりも先に見つけてくれると信じていた。そして、その通りになった。

「——脩！ どこにいるの!？」

坂の上から加奈江の声が聞こえた。そのとたん、ロボットのおもちゃにお願いした時の何倍もの勇気が湧いてくる。脩は坂の上に向かって駆けだした。角を曲がったところで、探し求めていた姿を発見した。水色のシャツに紺色のスカートの少女。脩と同じく、雨の中傘も差さず靴も履いていない。つまり、脩同様慌てて逃げ出したのだ。

脩の気配に気づいた少女が振り返った。

「脩！ 無事だったのね！」

脩は加奈江の胸に飛び込んだ。加奈江が優しく抱きしめてくれる。そこで、ようやく脩は本当に心の底から安らいだ。これでもう、なにも怖くはない。

加奈江は心配そうに脩の身体を確認する。「脩、大丈夫？ どこもケガしてない？」

「うん。大丈夫」と、脩は笑顔で答えた。そのとき気がついた。加奈江は右手に鉄の棒を持っているが、その手が、血で赤く染まっていたのだ。

「お姉ちゃん、手、ケガしたの？」

脩が訊くと、加奈江は右手を背中に回した。「ううん、大丈夫。お姉ちゃんも、ケガはしてないわ。それより脩、怖い思いしなかった？」

脩は、さつき家で起こったことを全て加奈江に話した。お父さんが血を流して玄関に倒れていたこと、何度呼んでも返事をしなかったこと、怖いおじさんたちが探していること。

「そう……でも、よく一人でここまで来れたね」

「うん！ ボク、お姉ちゃんに言われた通り、勇気を出したの！」

「そう、偉いわ」

加奈江に褒められ、脩は満面の笑みを浮かべた。

だが、「出てこい！ 化物！」という声が聞こえて、脩の顔は再び強張る。加奈江も顔を上げた。周囲を見回すが姿は見えない。雨音が激しく、声が聞こえてきた方向も判らなかった。

加奈江が目を閉じた。脩は首を傾けて加奈江の顔を見る。加奈江は、目を閉じたまま頭の中で何かを探しているように思えた。やがて、加奈江は目を開けた。

「脩、今から怖いおじさんたちがいないところへ逃げるよ？ 暗い道を通って遠くまで行くけど、がんばれる？」

加奈江の言葉に、脩はためらうことなく答える。「うん！ ボク、お姉ちゃんがいれば、勇気いっぱいだもん！」

加奈江は脩の頭をもう一度撫でると、三上家の裏口へ続く道を進んだ。脩がその後へ続く。角を曲がり、裏口の前を通ろうとしたところ

で加奈江は立ち止まった。また目を閉じ、何かを探しているような仕草。

「……小屋の前にも一人……後ろからも来るし、これじゃあ動けないわ……」

独り言のようにつぶやく加奈江。小屋というのは、漁師たちが倉庫代わりに使っている海辺の小屋のことだろうか。この道を通って海沿いの道に出たらすぐ左にあるが、この場所からは見えない。どうやって小屋の前に人がいることを知ったのか脩には判らなかったが、加奈江が言うのだから間違いないと思った。

「お姉ちゃん、ここを通ると近道だよ」

脩は、すぐ近くの民家と民家の間にあるわずかな隙間を指さした。ここを通ると、九十九階段という細く曲がりくねった道に出る。丘の上にある友達の家や社のある広場に行くときによく使っている近道だった。

加奈江は隙間を確認すると。

「すごいわ、脩。よく知ってるね」

褒められた脩は得意げに笑う。二人は隙間を通り、漁師たちに見つかることなく反対側の道に出ることができた。

「こつちよ、脩」

蛇のごとく細く曲がりくねった坂道を上る加奈江と脩。道は途中から階段になっている所もあり、それを上がったところでまた加奈江は立ち止まり目を閉じた。

「……この先にも一人……分かれ道のところね……」

この先の道はふたつに分かれている。まっすぐ進むと暗い森があるらしいが、危ないから子供たちだけでは絶対に行つてはいけないと厳しく言われていたので、脩はその先になにかがあるのかを知らない。横道を曲がると小さな神社があるちよつとした広場があり、それを抜けてさらに進むと廃材を置いてある広場がある。夜見島港と繋がっている資材運搬用のロープウェイがある場所だ。ここも危ないから入つてはいけないと言われていたが、秘密基地のような雰囲気があるため、子供たちは大人に内緒でよく遊んでいた。

加奈江は目を開け、脩を見た。「脩、この辺に、さつきみたいな近道はある?」

脩は少しうつむいて首を振った。この辺りは坂が急で家と家が隙間なくくつついており、脩が知る限り近道はない。

「そう……いいのよ、ありがとう。でも、どうしよう……何かで注意を逸らせればいいんだけど……そうだ。脩、何か、投げられるものを探して?」

脩と加奈江は周辺を探す。すぐに空き缶が落ちているのを見つけた脩は、加奈江のところへ持つて行つた。

「ありがとう脩。これで大丈夫よ」

空き缶を受け取つた加奈江は笑顔でお礼を言うと、道の先に向かつて空き缶を投げた。かん! と一度大きくはねた後、からからと転がって行く。

「……そっちか?! いるんだろ! 隠れてないで、出てこいよ!」

男の声が聞こえ、少しずつ遠ざかつて行つた。空き缶の音を追つて森の方の道へ行つたようだ。その隙に脩たちは走り、横道を曲がつた。また坂を上がると、社がある広場に出た。

「大丈夫、脩? 少し、休もうか」

ずつと坂を駆け上がつて来たので、脩はもちろん加奈江もかなり疲れ、息が上がつていた。二人は少し休むことにした。

小さな社があるこの広場は、漁師たちが漁に出る前と漁を終えた後に必ずお参りをする場所である。見晴らしがよく、ここからなら集落と海を一望できるのだが、今は夜の闇と強い雨に覆われて何も見えない。

ふと脩は、加奈江が社の前に立っていることに気がついた。社は小さなもので、加奈江の腰ほどの高さしかない。前に立てば加奈江が社を見下ろす格好になる。加奈江は、なんだかすごく怖い顔をしていた。睨むよう目で、社を見下ろしている。脩は声を掛けられず、しばらく黙つて見ていた。加奈江がなにかを取り出した。それは、一本の木の枝のようだった。加奈江はしゃがむと、社の扉を開け、中に木の枝を入れた。

「お姉ちゃん、なにをしたの……？」恐る恐る訊く。

振り返った加奈江は、いつもの優しい顔に戻っていた。「神様に、脩のことを護ってください、って、お願いしてたの」

加奈江が元の優しい顔に戻ったので、脩も笑顔に戻る。「そっか……じゃあ、ボクもお姉ちゃんを護ってくださいってお願いする！」

脩は社の前で手を合わせ、神様をお願いをした。

「いたぞー！ 上だー！ 社の方へ逃げたー！」

下の方で男たちの声が聞こえた。こちらにやって来る。

「脩！ 行くよー！」

社の広場を離れ、さらに坂を駆け上がる。しばらくすると、「駄目だ！ 見失った！」「まだその辺にいるはずだ！ 探せー！」「おやつさんの命だ！ 絶対逃がすな！」と、何人もの男の声が聞こえてきた。

男たちから逃れ、廃材置き場までやって来た二人。この集落では最も高い場所にあり、ところどころ切り立った崖のある広場だ。廃材を置く場所はトタン屋根で覆っただけの簡素なもので、長年雨風にさらされて今にも崩れそう。ロープウェイはそのすぐそばにある。資材運搬用の小さなもので、南の夜見島港に繋がっている。広場にあるのはそれだけだ。来た道以外にどこかへ通じる道も無い。つまり、追い詰められた。

男たちの声が聞こえた。こちらに迫っている。社の周辺に隠れられるような場所はほとんど無いから、探すのにさほど手間はかからなまいだろう。男たちがここまで来るのは時間の問題だ。

「——こっちへ」

加奈江は脩を連れてロープウェイのそばに行った。そして、少し調べた後。

「脩、これに乗って」

ゴンドラを示す加奈江。ゴンドラは小さな物だが、四歳の子供ならば乗れないことはない。実際、脩をはじめとした子供たちも乗ったことはある。ただし、それはその場で揺らすだけのブランコ遊びだった。スイッチを押して下までおりていったことはない。ゴンドラはあまりにも高い場所を通るため子供心にもそれは危険だと判ってい

たし、そもそも動かすための鍵がない。

だが、加奈江がスイッチを入れると、エンジンが唸り始めた。

「これに乗って、下まで降りるの。できる？」

加奈江はそう言ったが、脩は小さく首を振った。

「しつかり掴まっていれば怖くないから」

加奈江はさらにそう言ったが、それでも脩は首を振る。怖いのは高さではない。高くても下を見なければ大丈夫だし、そもそも真っ暗で下は見えないだろう。脩が怖いのは、加奈江と離れ離れになってしまうことだ。ゴンドラは脩一人が乗るのがやつとだ。加奈江は乗ることができない。なら、脩を下におろした後、加奈江はどうなってしまうのか。

「お姉ちゃんなら、大丈夫だから」

脩の気持ちを察したのか、加奈江は脩の目線にしゃがみ、両肩に手を置いて、まっすぐ目を見て言う。「お姉ちゃん、すぐに脩を迎えに行く。どこに隠れてたって、絶対にすぐに見つける。お姉ちゃん、脩を探すの得意なんだから」

確かに、かくれんぼをしたとき、脩が隠れても加奈江にはすぐに見つかってしまう。オニは目を閉じ、顔を伏せ、背を向けているのだが、加奈江はまるで脩が隠れているところを見ているかのように、まっすぐ脩の元へ向かって来るのだ。

それでも、いま加奈江と離れ離れになるのが怖かった。もう二度と会えないような気がした。

加奈江は、脩を胸に抱き寄せた。「脩、勇気を出して。脩なら、きつとできるから」

加奈江の胸に抱かれ、脩は不意に。

——七つの門と、七つの鍵を開けるの。

以前、加奈江と宝探しをしたことを思い出した。

それは、島の北にある遊園地跡だった。噴水やコーヒーカップのそばに絵が描かれた四角い石があり、その絵を加奈江の歌に合わせて揃



えていくと、宝物が手に入る、というのだ。だが、三つ絵をそろえたところで、加奈江は突然帰ろうと言いだした。それ以降、宝探しはしていない。加奈江は、もう宝物を見つけた、と言っていた。しかし、なにを見つけたかは教えてくれなかったし、たぶん嘘だろうと脩は思っていた。加奈江は、脩が宝探しを怖がっていると思つてやめたのだろう。確かに、誰もいない遊園地は寂しくて怖かったし、宝物を手にするためにやらなければいけない『めいふくだり』というのも、脩には何のことは判らないが、漠然とした恐怖を抱いていた。だから、加奈江が宝探しをやめて帰ろうと言つたとき、ほつとしたのは間違いない。反面、後悔もしている。自分にもつと勇気があれば、宝探しを続けられたはずだ。宝を見つければ加奈江を喜ばすことができたはずだ。もつと、勇気があれば――。

脩は。

「判つた！ ボク、勇気を出してがんばる！」

精一杯大きな声で言つた。加奈江を心配させたくなかつたし、もう二度と、加奈江をガツカリさせたくない。

「よし、偉いわ、脩」

加奈江は、もう一度脩を胸に抱きしめると、ゴンドラに乗せた。

「下を見ないで、しっかり掴まって。下に怖いおじさんはいないと思うけど、念のため、どこかに隠れてるのよ？」

「うん！」

脩は、もう一度強く返事をする。

加奈江はボタンを押した。

ゴンドラが動きはじめる。広場が遠ざかる。加奈江が遠ざかる。やがて、加奈江の姿は闇に消えた。

脩はライトを持っていない。雨の夜、高所から下るロープウェイの中にいると、闇の中に一人取り残されたような気がしてくる。世界に一人ぼっちになってしまったような気がしてくる。

「お姉ちゃん！ 早く迎えに来てね!!」

脩は叫んだ。加奈江の姿はとっくに見えなくなっている。雨は激しい音を立てて身体やゴンドラに当たり、ロープウェイのエンジン音

はここまで聞こえるほど大きく鳴り響いている。

それでも。

「うん！ お姉ちゃん、絶対すぐに行くから！ 絶対絶対！ 脩を見つめるから!!」

闇を照らす光のように、加奈江の声ははっきりと聞こえた。

第四十八話 『畏怖』 阿部倉司 夜見島／四鳴山林  
道 12:58:10 終了条件2

島から脱出する船を探すため、蒼ノ久集落を目指していた阿部倉司と喜代田章子は、途中立ち寄った夜見島港で、人間の死体に闇霊が憑りついた化物・闇人と遭遇する。屍人よりも頭が良く力も強いらしいが、極端に光に弱いという弱点があり、ワリと簡単に迎撃できた。だが、楽勝だったのは第一形態までで、第二形態とも言える巨体闇人の姿を見た二人は、ビビッて夜見島金鉱会社のビルに逃げ込んだ。なんとか巨体闇人をやり過ごし、隣のビルへ繋がる連絡橋を渡って外に出た二人は、予定通り蒼ノ久へ向かおうとする。その途中、道はふたつに分かれており、横道に入るとロープウェイがあるらしい。資材運搬用の小さなロープウェイで、人は乗れない。わざわざ向かう必要はないのだが……。

◇

章子は顔を上げ、阿部を見た。「ねえ、そのロープウェイ、ちよつと行ってみてもいい？」

章子の提案に、阿部は首を傾げる。「あん？　なんでだ？　資材用だから、俺らは乗れねえんだろ？　だったら、わざわざ行く必要ねえだろ」

「そうなんだけど、なんというか、もう少しで全部判るような気がするの」

「全部判るって、この島のことや、あの化物どものことか？」

「あ、ううん。そうじゃないけど……まあ、細かいことはイイから、とにかく、行ってみるわよ」

章子はごまかすように言うと、歩き出した。

「……ま、ま、ここまでオメーの言うことはだいたい間違ってたから、別にいいけどな」

ということ、どういふことかは判らないが阿部は章子の提案通りロープウェイへ行ってみることにした。

蒼ノ久へと通じる坂道を登る。しばらく進んだところに古い街灯があり、そこで道が枝分かれしていた。二人は横道へ入る。その道は、途中、さつき出てきたビルの二階部分のすぐ隣を通るかたちになっていった。かつては道とビルが連絡橋で繋がっており、自由に行き来できたようだ。急な斜面に無理矢理建物を建てた夜見島港ならではのつくりだ。しかし、長年風雨にさらされていたためか、連絡橋は崩れ落ち、今は渡ることができない。その幅は一メートルほどだ。

「ま、オレ様の跳躍力をもってすれば、なんてことはないな」

阿部は屈伸運動を始める。別にビルへ戻る必要はないが、こういう穴を見ると跳び越えなくなるのが男の性<sup>さが</sup>だ。

「やめなさい」と、章子が止めた。「穴があると跳び越えようとしていたり、カメを見つけると踏もうとするのは、スーパーマリオ世代の悪いクセよ?」

「オメーと一緒にすんな。オレはマリオワールド世代だ」

「たいして変わらないでしょうが。それより、早く行くわよ」

章子に注意されたので、穴を飛び越えるのは諦め、さらに道を進む。しばらく歩くと小さな広場に出た。隅にロープウェイの発着場がある。機械に直接雨が当たらないよう、木の板やトタンで覆っただけの簡素なものだ。

「んで、ここに何が判るんだ?」

阿部は章子に聞いたが、章子は「うーん、そうねえ……」と曖昧な返事をしただけで、何も答えなかった。発着場の裏に回り、木の板を並べた壁に手を触れ、目を閉じる。例の特殊能力で調べているのだろう。章子はさつき、「全部判るような気がする」と言った。何がどう全部判るのか阿部には判らないが、まあ、変な能力を持つているアイツのことだから、普通の人間には判らない何か判るのだろう。ここは任せておいた方がいい。阿部は章子のやりたいようにやらせておくことにして、発着場の中に入った。ゴンドラとケーブルを動かすモーターがある。章子が言った通り、ゴンドラは資材運搬用でかなり小さ

く、阿部たちは乗れそうにない。ゴンドラの中には古びたボロボロの縄が一本入っていた。

「……………」

阿部は、さつき金鉱会社のビル内で見つけたロープウェイの鍵を取り出すと、モーターの操作パネルにある鍵穴に挿し、ひねってみた。ばるるん、とエンジンが唸る。問題なく動くようだ。阿部が適当にボタンを押すと、ゴンドラが動き出し、上へあがって行った。

「——むやみに動かさないですよ。音であいつらに気付かれるでしょ」

調査を終えたのか、章子が入って来て呆れ声で言った。

「いや、俺の意志じゃねえよ。身体が勝手に動いたんだ。これはあれだ。先代の神の花嫁の導きってやつだ」

「先代の神の花嫁って誰？」

「わからんが、ずつと言ってるだろ？　こういうわけの判らない行動は、必ずどこかで誰かの役に立つんだ。たぶん、あの縄を必要としているヤツが、向こう側にいるんだろ」

「あんなボロボロの縄を必要としている人なんているわけないでしょ。アホなこと言っていないで、次行くよ」

「次って、ここはもういいのか？」

「ええ。次は、さつきのビルのところね」

阿部と章子はロープウェイを後にし、来た道に戻ってさつきのビルの前までやってきた。道とビルの敷地の境には鉄格子製の扉がある。章子は扉に触れ、目を閉じた。

ビクン、と、阿部の身体が震えた。敵に見つかった合図だ。波止場へと通じる道から、ハンマーを持った闇人が迫っている。

「おい、ヤツらに見つかったぞ」

阿部は章子に声をかけたが、章子は何も応えず、目を閉じたままだ。仕方なく、阿部は一人で闇人と戦う。幸い敵は進化前の闇人一体のみ。ライトでひるませて殴るというコンボ技で、簡単に迎撃できた。

「ん、ごくろうさん。じゃ、次行くよ」

あつけらかなとした口調で言い、章子はまたさつきと歩いて行く。「護ってやったのに礼のひとつもないのかよ。オメーは、受けた恩を

返すということを知らねーのか」

「ん？ 感謝してるわよ？ ありがとね。次もよろしく」

まったく心がこもってない言い方にため息をつきつつ、阿部は章子について坂を下る。

坂を下って行くと高い堤防が連なる広い道に出た。阿部の身長の二倍ほどある高さで、向こう側を見ることはできないが、波の音が聞こえるので、恐らく海があるのだろう。

「ええつと、こっちかな？」

章子が先導して進む。堤防に沿ってしばらく南へ歩くと門があった。門をくぐった先には下りの石段があり、下には栈橋や係留柱がある波止場が見える。章子は下にはおらず、門に触れて目を閉じた。また阿部の身体が震えて闇人が襲って来たが、これも一体だけだったので簡単に迎撃できた。

「……ここから脱出するのは諦めたのね。そうになると、次は灯台だけど……」

章子は道へ戻ると、堤防に沿って南へと続く道の先を見た。「あの梯子を脩君がのぼるのは無理だろうから、上から回ったのかな？」

「さっきからなに一人でぶつぶつ言ってたんだ。それって、あの作家の先生のことだろ？ 詳しくは知らないが、たぶんオメーより先生の方が年上だろ。君付けで呼ぶなんて失礼だぞ」

「あんだだってあたしのことをオメーとか占い女とか呼ぶでしょ。ていうか、あんたこの島に来てから柳子以外の人を名前で呼んだことないでしょうが。そっちの方が失礼よ」

「オレは人の顔と名前を覚えるのがニガテなんだよ。だから、名前よりも職業とか肩書きみたいなのでも覚えた方がいいんだ。言っておくが、個人の感想だぞ。効果には個人差があるからな」

「テレビショッピンングか。んなことどうでもいいから、次行くよ」

波止場を離れ、海沿いの道から逸れて東へと続く細い道へ入る。少し先に急勾配の階段が見えた。この地区の名所とも言える地獄段と呼ばれる階段だ。

階段へ向かおうとして、章子は急に足を止めた。「……そういやこ

の先、アイツがいるんだっけ？」

「アイツか。たぶんいるな」

アイツとは、指のような足に顔のような股間があるという、訳が判らないとしか言いようがない化物・巨体闇人だ。闇人が戦闘に適応するために進化した姿で、まだ戦ってはいないものの、どう考えてもバットなんかで倒せる相手ではないだろう。

阿部は目を閉じ、幻視で巨体闇人の気配を探った。ちょうど、地獄段を下りてこちらへ向けているところだ。このままでは見つかる。二人は一旦その場を離れ、物陰に身をひそめた。少し前に必殺・様子見を使い、巨体闇人の行動パターンは把握してある。地獄段を下って波止場の前まで来た後は、また地獄段を上がって元の場所に戻り、そしてまた波止場へ向かう、という行動を繰り返している。

「やり過ぎすしかないわね。かなり遠回りになるけど、一度さっきのビルに戻って、アイツが波止場に下りたところを通り抜けるのが無難かな」

章子の提案に、阿部は「フッフッフ」と不敵に笑った。「それには及ばないぜ。すっかり忘れていたが、オレにはコイツがあるんだった」阿部は、要塞跡で自衛隊員の屍人から奪い取った機関銃を取り出した。

「そんな大きくて強そうな武器をすっかり忘れるんじゃないわよ」

「正直自分でもそう思うが、まあ思い出したからいいだろ。これさえあれば、あんな巨体屍人、屁でもねえぜ、たぶん」

「たぶん、っていうのが引つ掛かるけど、まあいいわ。とりあえず、やってみなさい。あ、でも、所詮あなたは素人なんだから、正面から戦うのは避けた方がいいわね。まだ見つかってないわけだし、後ろから撃ってみて」

「いやいや、そんな卑怯な戦法は恥だ。男なら、正々堂々正面から戦うべきだろ」

「じゃあ、相手は素手なんだから、あんたも素手で戦うべきね。正面からガッツリ殴り合い。うん、男らしいわ」

「いやいやいやいや、それとこれとは話が別だ」

「なによ、意気地がないわね」

「意気地の問題じゃねえだろ。あんな丸太みたいな腕に鉄球みたいな拳の相手と正々堂々正面から殴り合って、勝てるわけねえだろ」

「だったら、つべこべ言わず背後から撃ちなさい」

「ちっ、しょうがねえな」

阿部は幻視で様子を伺う。地獄段を下りた巨体闇人は、波止場の門の前でぐるりと周囲を見回すと、来た道に戻って行った。今がチャンスだ。阿部はしゃがみ歩きで静かに巨体屍人の背後へ近づく。充分間合いを詰めたところで銃を構え、引き金を引いた。たたたん、と、小気味良い音と強い反動。巨体闇人が大きく身体をのけぞらせる。全弾撃ちつくすつもりでの攻撃だったが、半分も撃たないうちに巨体闇人は倒れた。

「なんだよ、見かけ倒しかよ。これなら、銃を使うまでもなかったかな」阿部は少々拍子抜けの気分で倒れた巨体闇人を見おろした。

「たぶん、不意打ちが効いたのよ」と、章子。「こんなナリしてるけど、気を抜いてるところを背後から撃てば、意外とあっさり倒せるのかもね」

「なんだかこいつら弱点だらけだな。ホントに屍人より恐ろしい存在なのか？」

「まあ、屍人と違って今日地上に出てきたばっかりだからね。慣れない生活に苦労してるんでしょ。地上での生活に慣れてきたらこうはいかないかもしれないから、できることは今のうちにやっちゃった方がいいわね」

二人は地獄段を上がり、資材倉庫がある広場に戻って来た。阿部たちが初めて闇人と遭遇し戦った場所だ。あるとき倒した闇人の姿は無い。蘇ってどこかに行ったのだろうか。

「こつちよ」

章子は倉庫の左側にある道を進む。すぐに下り階段になり、その先はトンネルとなっていた。ここを抜けた先に灯台があるという。トンネルはかなり長く続いているが、明かりが点いているためライト無しでも大丈夫そうだった。敵の気配はない。二人はそのままトンネ



ルに入って先へ進む。

だが、半分ほど進んだところで、突然明かりが消えた。

「なんだ!？」

周囲を見回すが、真つ暗で何も見えない。明かりが点いていると安心し、ライトはしまったままだ。

びくん、と身体が震え、傘や鉄パイプを持って階段を下りてくる三体の闇人の視点が見えた。

「まさかあいつら、ワナを仕掛けてやがったのか!？」驚く阿部。

幻視の能力で暗闇でも多少見えるとはいえ、急に明かりを消されたため、目が慣れるのには時間がかかる。それに、例え目が慣れたとしても、闇の中では相手の方が有利なのは間違いない。なんとと言っても、奴らは闇の住人なのだから。

足音が迫ってくる。その姿はこちらには見えないが、相手には見えているだろう。

「クソ！ おい占い女！ オレの後ろで伏せてろ！」

「どうする気？」

「こうするんだ！」

阿部は章子が背後に回ってしやがんだのを気配で確認すると、機関銃を構え、足音だけを頼りに引き金を引いた。狙いを定めることなく銃口を左右に振り弾をばら撒く。デタラメな射撃だが連射力の高い機関銃ならそれなりに有効なはずだ。思った通り、「ぎゃっ！」という悲鳴と共に倒れる音が聞こえた。だが、それは二体だけだった。もう一体の悲鳴が聞こえる前に、銃は空撃ちの音になる。弾切れだ。

「終わりかい？ もっと楽しもうよ」

闇の中に相手の声が響く。姿は見えない。やられる！ そう思ったとき、章子がライトを取り出して阿部の周囲を照らした。すぐそばに左官用のコテを振り上げた闇人がいた。光が顔に当たり、両目を押しさえて悶える闇人。

「今よー」

章子の合図で阿部は機関銃を投げ捨て、バットで思いっきり殴った。怯んだところにさらに二発。闇人はバタリと倒れた。

阿部は汗を拭った。「ふう、危なかったな」

「うん。正直、ちよつと闇人をナメてたわね。やっぱり、あいつらは屍人よりも危険なのよ」

確かに、トンネルの明かりを点けて誘導し、途中で明かりを消して襲うなど、屍人には到底できない作戦だ。弱点が多いとはいえ、決して油断してはいけなかった。これからはたとえ明るい場所でもすぐにライトを点けられるようにしておいた方がよさそうだ。

二人はライトで照らしながら先へ進む。途中、通路は上り階段と下り階段の二手に分かれていた。章子の説明によると、灯台へ行くのは左の上り階段で、右の下り階段は、亀穴と呼ばれる天然の洞窟へ通じているそうだ。

阿部は目を輝かせる。「亀穴ってことは、カメがいるのか？」

「ええ。夜見亀って言つて、この辺り特有の海亀を見ることができわ。運が良ければ、だけど」

「そうか。そりゃ、ぜひとも踏んで蹴り飛ばさなきゃな。それが男の性つてもんだ」

「やめなさい。バチが当たるわよ？」

「冗談だよ。ヤンキーは動物に優しいんだ。とにかく、カメと聞いちゃ素通りできねえ。子供たちにいじめられてたら大変だからな。助けて、水宮殿に連れてつてもらつて、まな板の上の赤子をごちそうになろうぜ」

「あ、ちよつと、待ちなさいよ。遊びに来たんじゃないんだよ？」

阿部は章子が止めるのも聞かず、右の通路を進んだ。階段を下りてしばらく進むと、人口のトンネルからごつごつとした岩肌の洞窟になった。さらに進むと洞窟は開けて外に出たが、その先の道は海の中に沈んでいた。阿部は周辺をライトで照らす。亀の姿はどこにも無い。

「なんだよ。カメなんていないじゃねえかよ」落胆した口調で言う。

「池の亀じゃないんだから、そこらで甲羅干ししてるわけないでしょ」追いついた章子が言った。「海亀が陸に上がるのは産卵の時だけ。陸上じゃ、めつたに見られるもんじゃないわよ」

「ちつ、つまんねーな」阿部は舌打ちすると、ライトの光を波打ち際からその先へ移した。「てか、ここって、さっきの波止場に通じてる道があるんじゃないのか？　こんなじゃ、通れないだろ」

洞窟の先には、少し離れた所にコンクリート製の堤防と埋め込み式の梯子が見えるが、そこまで通じる道は海の中に沈んでいる。

「そうね。この道を通れるのは引き潮の時だけで、満ち潮になると沈んでしまうの」

章子の説明に、阿部は「ふうん」と気の無い返事をした。せっかく来たんだから、亀じゃなくても何か面白い物はないかと、周囲をライトで照らしてみる。すると、波打ち際にきらりと光る物があつた。何かが漂着しているようだ。海に落ちないよう注意しつつ拾い上げてみると、小さな瓶だつた。長く海を漂っていたのだろう。表面の紙ラベルはほとんど剥がれて読めないが、恐らく栄養ドリンクの瓶だ。

「そんなゴミ拾ってどうすんのよ？　まさか、それも神の花嫁とやらの導き？」と、章子。

「いや、これ、中に何か入ってたよ」

阿部は瓶のふたを開け、中のものを取り出した。それは丸めた紙だつた。漂着した瓶の中に丸めた紙。宝の地図か？　それとも、異国の美女からの手紙か。男の性に胸を躍らせながら紙を開く。かなりボロボロだつたが、なんとか破らずに広げることができた。どうやら手紙のようだ。

『助けてください。私の名前は岸田百合。私はいま、中迂半島三逗港近くの倉庫みたいな場所に閉じ込められています。これを読んだあなた。どうか警察に通報して、私を探してください。私を閉じ込めた女は、私の持ち物と、服と、名前を奪っていきました。あの女の顔に騙されないで、あの女の本当の顔は』

そこから先は、消えていて読めなかった。

「なに？　ずいぶんミステリーなモノ拾ったわね」

阿部の背中越しに手紙を読んだ章子が言った。

「三逗港って、オレらが船に乗った港だよな？ あの近くに監禁されてるってことか？」

「イタズラじゃなけりや、そうなるわね。でも、見たところ何年も前に書かれたものみたいだから、もうとつくに救出されたか、誰にも気付かれずに死んじやつたかじゃない？」

「かわいそうなこと言うんじゃねえよ。まだ監禁されてる可能性もあるだろう？」

「それはそれでかわいそうだけど、まあ、可能性としては無くはないだろうね。でも、何にしても今のあたしには、どうしようもないわ」「そうだな。まずは、帰らないと話にならねえからな」

「そゆこと。さ、行くわよ」

二人は通路を戻ると、左側の上り階段をのぼった。しばらく進むとトンネルは終わり、コンクリート製の堤防が海に大きくせり出した場所に出た。灯台は堤防を進んだ先にある。その途中に猟銃を持った闇人が立っていた。注意深く周囲を見回し警戒している。

「うーん、これじゃ近づけねえぞ」

阿部は頭を掻いた。堤防の上に身を隠す物は何も無い。しばらく様子を見ても阿部たちに背を向けることもなく、気付かれずに近づくのは不可能だ。

「こっちの銃は弾切れで捨てちまつたし、さすがにバットだけで挑むのはムチャだな。距離があるからどこまで効果があるかわからんが、ここから光を当てて、怯んだ隙に殴るしかないか」

阿部の提案に、章子は「フッフッフ」と不敵に笑った。「それには及ばないわ。すっかり忘れてたけど、あたしにはコレがあるんだった」そう言っって章子を取り出したのは、古いフィルム式のカメラだった。

「……って、銃じゃないのかよ」

「銃なんか持つてるわけないでしょ。でも、大丈夫よ。ヘタな銃よりも役に立つと思う」

「どうするんだ？」

「フラッシュのタイマーを入れてアイツの足下に投げるの。そうすれ

ば、ライトなんかよりずっと強力な目くらましになるわ」

「確かに。でもよ、旅行に来たわけでもないのに、なんでカメラなんか持ってたんだ？」

「さあ？ あたしにもよくわかんない。崩谷の社宅の押し入れで見つけたんだけど、なんだか知らないけど無性に持っていきたくなつたのよ。これはたぶん、因果律によるものね」

「因果律ってなんだ？」

「原因があるから結果がある、という哲学的考えよ。全ての事象には必ず原因があり、原因無しには何も起こらないってわけ。つまり、『カメラを持っていて』という事象の前には『カメラを見つけた』という原因が存在するってことよ」

「だが仮に事象が光速を超えた場合、事象の前に原因があることを証明できないだろ？」

「どうした急に」

「気にするな。ただの口から出まかせだ」

阿部は章子からカメラを受け取ると、タイマーを十秒後にセットし、レンズ面を上にして地面を滑らせて投げた。カメラはうまい具合に闇人の足下で止まった。闇人が気付き、首を傾けてカメラを見る。タイマーがゼロになり、フラッシュが一瞬強い光を放つ。闇人は悲鳴を上げ、両目を押さえてもがく。その隙に間合いを詰めてバットで殴ろうとしたが、その必要もなく、もがき苦しむ闇人は堤防から足を滑らせて海へ落ちていった。

「厄介なのかそうでないのか、よく判らん、闇人は」阿部は闇人が落ちた海を見ながらつぶやいた。「まあ、それはともかく……」

視線を堤防の先に移す。灯台へと続く通路は、そこから少し進んだ先で崩れ落ちていた。向こう側までは五メートルほどあるだろう。高校時代の走り幅跳びならそれくらいは跳んでいたが、卒業以降まともな運動などしていない今、試すのはあまりにも無謀だ。仮に跳べたとしても、その先の堤防もいたるところが崩れ落ちている。これ以上進むのは危険だろう。

「こりゃ、灯台へ行くのは諦めた方がよさそうだな」章子を振り返る阿

部。

「――」  
章子は、呆然とその場に立ち尽くしていた。その視線は、灯台に向けられている。いや、灯台の向こう側、赤い海の水平線を見ているのだろうか。

「おい、どうしたんだ？　ボーっとして」

阿部の声にも応えず、ただ章子は立ち尽くす。

不意に、涙が頬を伝った。

そして。

「……そういうことだったんだ」

支えを失ったかのように、その場に座り込んだ。

「おいおい、大丈夫かよ」

慌てて駆け寄る阿部。貧血で倒れようものなら海に落ちてしまうような場所だ。阿部は章子に肩を貸すと、その場を離れた。

第四十九話 『記念日』 喜代田章子 夜見島港 1

4:01:10

灯台を離れ、トンネルを通って再びビルが建ち並ぶ地区へ戻った喜代田章子と阿部倉司の二人は、休める場所を探し、近くのビルに入った。周辺に闇人がいないのを確認し、ビル内の最も奥まった部屋に入ると、ドアに鍵をかけ、窓は部屋内にあった黒い布で覆って外から見えないようにした。これで、ちよつとやそつとでは見つからないだろう。

「――しかし、ビックリしたぜ。オメーが突然泣き出すんだもんな」作業を終えた阿部は、章子の隣に腰を下ろした。

「あは、ゴメンゴメン。ちよつと、昨日観た映画思い出しちゃつて。ほら、今やつてるでしょ？」『ダースベイダーVS. 貞子と炎の宇宙戦争』

「ああ、アレは確かに泣けるな」

「でしょ？ あたしなんてもう五回も観てるけど、何度観てもトライポッドから貞子が這い出てジャックとアナキンをダークサイドに引きずり込むシーンは号泣しちゃうわ」

「適当な話でごまかす章子。さつき灯台で見たものは、阿部には関係の無いことだ。話す必要はない。」

章子は「はあ……」と、と大きくため息をついた。「しかし、とんだ誕生日になっちゃったわね」

「うん？ オメー、今日誕生日なのか？」

「そ。この数日ずっと大変だったから、あたしもすっかり忘れてたんだけどね。八月三日はあたしの誕生日。いくつになつたかは訊かないでね」

「別に興味ないから訊く気はねーけど、いくつになつたんだ？」

「だから、訊くなつての」

阿部はへへつと笑った後、何か思いついたように目を輝かせた。そして、ポケットをぐそぐそと探り、中のものを両手で覆って取り出す

と、指輪の箱のフタを開けるような仕草でぱかっと開いた。

「サプラーイズ」

阿部の手の中には、金の将棋の駒のキーホルダーがあった。

「純金だぜ？ スゲーだろ？ オメーを驚かせようと、密かに用意してたんだ」

したり顔で言う阿部からキーホルダーを受け取る章子。突然のプレゼントに最初は目を丸くして驚いていたが、やがて目を細めて阿部を見た。

「……って、これ、島に上陸したとき道端で拾ったヤツでしょ」

「判るか？」

「ったく……そんなもの誕生日のプレゼントにするかね？」章子はあきれて肩をすくめたが、「でも」と笑顔を浮かべて続けた。「ありがとうね」

「礼なんていいさ。どうせ拾ったモノだ」

章子は首を振った。「それもあるけど……あたしのこと、信じてくれて、ありがとう」

「あん？ なんだ、急に？」

「あたしの特殊能力……過去の映像を見たり、あたしの中にいる別の誰かが島について教えてくれたり……そんな胡散くさい話を信じてくれて、こんな危険な島まで来て、あたしを護ってくれて、本当に、感謝してる」

「なんだよ、改まって。それこそ、礼にはおよばねーよ。警察に追われて途方に暮れてたところを、オメーのアドバイスで随分助かったんだ。礼を言うのはオレの方だ」

恥ずかしそうに鼻の下をこする阿部を見て、小さく笑う章子。

その表情を引き締め、「ねえ、リーゼント」と、まっすぐに阿部を見た。

「なんだ？」

「このままこの島で調査を続けたら、あたしはあたしでなくなるかもしれない」

「あ？ そりゃ、どういうことだ？ オメーはオメーだろ」



「そう。でも、そうじゃないの」

「――？」

「でもね、これだけは言える。あたしがあたしでなくなっても、あなたが言う通り、あたしはあたしだから。だって、あたしがあたしなのに、あたしじゃなくなったら、それってあたしじゃないあたしがあたしだってことじゃない？　だったら、そこにいるあたしは確かにあたしだけど、ここにいるあたしは一体どこの誰なのよ？」

「粗忽長屋か」

「……………」

「……………」

「今のボケにそこまでの確なツツコミを入れるなんて、あんた、ウデを上げたわね」

「なんだよ。褒めてもこれ以上何もでねーぞ」

「あたし、ちよっと前まであなたのことを柳子のヒモでクズ男だと思ってる、柳子はなんでこんなヤツを好きになったんだろうって思ってたけど、いまなら、柳子があなただを好きになった理由が判る気がする」

「今度は愛の告白か？」

「そう取ってもらって構わないわ。ねえ、元の世界に帰ったら、あたしと漫才コンビを組んで、M1に出場してみない？　二人で天下を取りましょう」

「お断りだ」

「そう？　残念」

章子が肩をすくめると、阿部が笑い、そして章子も笑った。

「疲れただろ？　少し寝ろよ。オレが見張ってるから」

阿部の言うことに、章子は「ん、そうする」と、素直に従い、阿部の肩に頭を乗せ、眠った。

一時間ほどで章子が目を覚ますと、阿部は隣でいびきをかいてい

た。見張ってるって言ったのに、コイツは。

——ま、あんたらしいけどね。

章子は小さく笑うと、阿部を起こさないよう静かに立ち上がった。部屋を見回し、紙とペンを見つけ、サラサラとメモを書く。

『鉄塔に行ってる。あそこからなら、脱出できると思う。先に行ってるから、後から来てね』

章子はメモをテーブルの上に置いた。メモを見た阿部は、鉄塔に向かうだろう。書いた通り、恐らくあの鉄塔を上れば、元の世界に戻るはずだ。

だが、章子は鉄塔に向かうつもりはなかった。予定通り、蒼ノ久集落の漁港を目指すつもりだ。

章子は、「ん……柳子……これ……純金じゃね……」と寝言を言う阿部の寝顔を見つめ。

「——さよなら、リーゼント」

小声で言っつて、一人、部屋を出た。

調査を続けなければならぬ。

ずっと、章子の胸の内に潜む何者かが訴え続けている。脩を助けて、と。

章子は、それを無視し続けていた。章子にとって三上脩は赤の他人だ。危険を冒してまで助けるような関係ではない。内に潜む何者かも正体不明だ。言うことを聞く恩も義理も無い——ずっと、そう思っていた。

だが、あつたのだ。章子と、彼女の間には、重大な関係が。

章子は今日、二十九歳の誕生日を迎えた。つまり、二十九年前の今日——昭和五十一年八月三日に、章子は生まれた。

そして、夜見島の全島民が失踪したのも、二十九年前の今日、昭和五十一年の八月三日だ。

全ては、最初から繋がっていたのだ。

章子は全てを知ってしまった。もう、彼女の言うことを無視できない。三上脩を助けなければならない。例え、自分が自分でなくなつたとしても。

第五十話 『逃亡』 加奈江 夜見島港／旧道 — 1 :

50 : 46

蒼ノ久集落の資材運搬用ロープウェイを使い、幼い三上脩を逃がした加奈江は、追っ手を逃れ、夜見島港へ続く坂道を駆け下りていた。いざというときの武器にしようと持っていた火掻き棒はもう捨てた。加奈江の細腕では屈強な漁師たちと戦って勝てるとは思えないし、走るのには邪魔でしかない。今は、一刻も早く脩を迎えに行かなければ。きつと、一人で心細い思いをしているだろう。

雨が降り続く砂利道を裸足で走る加奈江。その前に、赤い着物を着た女が立ち塞がった。太田家の一人娘・ともえだ。

「見つけたわよ化物女！ もう逃がさないから！」

鬼のような形相で加奈江を睨み、両手を広げて行く手を阻む。

「どいてください。脩を……脩を迎えに行かなきゃ」

「化物のクセに何を！」

無理矢理通ろうとする加奈江に、ともえが掴みかかってきた。加奈江は押しのけようとするが、ともえが強い力で腕を掴み、離さない。加奈江の白い肌に、ともえの爪が食い込む。

「痛い……離して……離して！」

加奈江は強い力でともえを突き飛ばした。バランスを崩したともえは、雨でぬかるんだ地面に尻餅をついた。

「よくもやったわね！」

さらに鬼相を浮かべ、立ち上がろうとするともえ。加奈江は構わず走る。ともえは追いかけてきたが、ぬかるんだ地面に着物と草履では思うように走れないだろう。

「誰か！ 誰か来て！ 化物女が逃げたわ！ 港の方よ！ 誰か——」

わめき散らすようなともえの声は次第に遠くなり、やがて聞こえなくなった。加奈江はそのまま走り続け、夜見島港のビル群を見下ろす場所までやってきた。夜見島港の北東部だ。このまま下り坂をまっ

すぐ行くと波止場がある。その途中、左手側に横道があり、その先がロープウェイの発着場だ。脩は無事に着いただろうか。

加奈江は目を閉じ、意識を周囲へ巡らせた。すぐに、いくつかの気配が見つかった。そのほとんどが、刃物などで武装し、殺気立った漁師たちだった。ここもすでに手が回っている。早く脩を見つけなくては。幸い、人間は幻視の能力を使うことができない。こちらの方が早く見つけられるはずだ。さらに周囲を探る。ロープウェイの発着場に、脩の気配を感じた。ゴンドラを動かすモーターの後ろに隠れている。小さな膝を抱え、「お姉ちゃん……怖いよう……早く来てよう……」と、震えている。ロープウェイに乗せたときは「大丈夫！」と言っていたが、脩はまだ四歳。こんな夜中に暗い山の中で一人。怖くないわけがない。すぐに迎えに行かなくては。

加奈江はさらに坂を下る。少し進むと道が枝分かれしていた。そこを曲がれば、ロープウェイはすぐそこだ。

だが、その道の途中に、鉄パイプを持った漁師がいた。幸いロープウェイの方へ向かう様子はなく、その場で見張っているだけのようだが、これでは通れない。何か陽動するものはないだろうか？ 加奈江は周囲を見回す。枝分かれしている道のそばに街灯がある。かなり古いもので、柱に取り付けられたボックス内のブレーカーで点灯消灯するタイプだ。

加奈江は、手のひらをひさしにして街灯の光の下へ入ると、ボックスを開け、ブレーカーを落とした。

「……なんだ？」

横道の方から漁師の声が聞こえた。見つかる前に身を隠す加奈江。幻視で様子を伺う。漁師は街灯の下までやってきて、「故障か？」と、持っているライトを上に向けた。その隙に、加奈江はしゃがみ歩きで静かに背後を通り抜けた。漁師から充分距離を取ったところで走る。すぐに小さな広場へたどり着き、ロープウェイの機器を囲った雨よけの中に駆け込んだ。

「脩！ 無事!？」

加奈江の声に、脩は満面の笑みでモーターの裏から出てきて、「お姉

ちゃん！」と加奈江の胸に飛び込んだ。

加奈江は脩を抱きしめたあと、頭を撫でた。「良かった……よく頑張ったね、脩。ごめんね、怖い思いをさせて」

「ううん！　ボク、全然怖くなかったよ！」

元気よく答える脩に、加奈江は、フフフと笑った。さつき膝を抱えて「怖いよう」と言っていたのは、見なかったことにしておこう。

加奈江は脩の両肩に手を置いた。「脩、よく聞いて。ここにも、怖いおじさんたちが来てるの。たぶん、島のどこに逃げても追いかけてくると思う。だから、船に乗って、島から逃げないといけない。港に行けば船があると思うから、もうちよつと、がんばれる？」

怖いおじさん、と聞いて、脩は少しだけ泣きそうな顔になったが、すぐに頷き、「うん！　ボク、お姉ちゃんと一緒なら平気だよ！」と言って拳を握った。

「そう、偉いわ、脩」

もう一度脩の頭を撫でる加奈江。胸の中で、嘘をついたことを詫びた。

漁師たちが追っているのは、島民にとって海から来た穢れである加奈江だ。幼い脩にまで手を出すはずがない。むしろ、漁師たちは子供を保護しようとしているはずだ。脩は怖がるだろうが、漁師たちは脩を悪いようにはしないだろう。実際、網元である太田常雄は、四年前、余所者の子である脩にも、神木の枝を授けてくれたのだから。

だが、それでも。

一刻も早く、この島を離れなければならない。

ずっと、地の底から母が呼びかけている。《帰還せよ》と。

恐らく母は、間もなく何らかの行動を起こすだろう。それが何かまでは加奈江にも判らないが、このまま島にいては危険だ。母が行動を起こす前に島から離れなければならない。島民にも危険を知らせたところだが、彼らは穢れである加奈江の言うことに耳を貸さないだろう。ならばせめて、脩だけでも。

加奈江は脩を連れ、広場を離れた。街灯がある三叉路まで戻る。街灯の明かりは再び点けられていたが、漁師の姿は無かった。



加奈江は角を曲がり、坂を下った。少し進むと道の左側に夜見島金鉱株式会社のビルがあり、そのまま真っ直ぐ行けば波止場だ。

だが、ビルの前で人影を見つけ、加奈江は立ち止まった。片目に眼帯代わりの黒い布を巻きつけ、右手に草刈り用の鎌を持った年配の男だった。夜見島の漁師たちを束ねる網元・太田常雄だ。

「見つけたぞ、穢れめ」

憎しみの宿った目で加奈江を睨んだ太田は、「ここだ！　ここにいろぞ！」と、漁師たちを呼んだ。

「脩！　こつちよー！」

加奈江は脩を連れ、金鉱会社の敷地へ逃げ込んだ。「待てー！」

追いかけてくる太田。加奈江は道と敷地の境にある鉄格子の扉を閉めると、内側の門を掛けた。鍵は掛けられないので、格子の隙間から手を入れれば開けられるだろうが、時間稼ぎにはなる。その隙に、脩と一緒にビルの外階段を上がり、二階の部屋に入った。部屋は事務作業をするための場所のようだ。中央に事務机がいくつか並んでいる。加奈江たちが入って来た出入口の反対側にもドアがあり、そこから連絡橋を渡って隣のビルへ行けるようだ。

だが、加奈江はドアを開けただけで外へは出ず、脩の手を引いて事務机の後ろに隠れた。

「逃がさんぞ穢れ！」

部屋に入ってくる太田。開いている反対側のドアを見て、そちらへ走って行く。太田は外へ出て、連絡橋を渡ろうとした。その隙に、加奈江は入って来たドアから出ていこうとしたのだが。

「あ、おやっさん！　あの女はどこです!？」

隣のビルから若い漁師の声がした。連絡橋の上で太田と漁師が数人鉢合わせになったようだ。

「こつちへ逃げたはずだ。お前らこそ、あの女を見なかったか？」

太田の問いに漁師たちは顔を見合わせ、「見ていません」と答える。「くそ、どこへ消えた。そう遠くへ行っていないはずだ！ 探せ！」

太田が命じると、漁師たちは隣のビルへ戻り、搜索を始めた。

「穢れめ……絶対に逃がさんぞ……」

太田が部屋に戻って来た。加奈江と脩は、事務机の後ろで息を殺し隠れ続ける。だが、部屋を探されたらすぐに見つかってしまう。イチかバチか、走って逃げるべきだろうか……。

しかし、搜索は漁師たちに任せただろうか、太田は部屋を素通りし、元来た出入口から出ていった。

ふう、と、大きく安堵の息をつく加奈江と脩。なんとか見つからなかったが、漁師たちは隣のビルを搜索している。すぐにこちらにもやって来るだろう。加奈江は脩を連れ、太田の後を追うかたちでドアから外に出た。太田が振り返っても見つからないよう距離を取り、警戒しつつ進む。太田は外階段から一階に下りると、敷地の外に出た。太田が去るのを待ち、加奈江たちも出ようとしたのだが、太田は鉄格子製の扉を閉めると、南京錠を取り出し、扉に取り付けた。

「これでここからは逃げられまい。穢れめ、絶対に見つけ出してやる」  
太田は満足げに南京錠を見つめた後、坂を上がり、ロープウェイがある広場の方へ歩いて行った。

太田の姿が見えなくなったのを確認し、扉の前まで移動する加奈江。鉄格子を持ち、揺すってみた。扉はかなり古く、蝶番はさびび付いているが、非力な加奈江が揺すった程度ではビクともしない。到底壊すことなど不可能だ。

「困ったわね……これじゃあ、出られない」

残る出口は二階の連絡橋を渡って隣のビルへ移動することだが、そこには多くの漁師が加奈江たちを探している。隠れながら通過するのは極めて難しいだろう。

「お姉ちゃん、あれ」

脩が扉の外を指さす。ぬかるんだ地面に鍵が落ちていた。さっきまでは無かったはずだから、太田が鍵をかけたあと落としていったのかも知れない。加奈江は格子の隙間から手を伸ばしてみたが、あと少

しというところで届かなかった。鉄格子の下にも少し隙間があるが、そこからも届かない。何か棒のようなものでもないかと周囲を探すが何も見つからない。ビルの中には何かあるかもしれないが、漁師たちがこちらのビルに来るのも時間の問題だ。戻るのは危険だろう。早く何とかしなければ。

「ボク、やってみる」

そう言うと、脩は地面に這いつくばった。身体を横に滑らせ、格子扉の下のわずかな隙間から外へ出ようとする。地面は舗装されていない。雨によつてぬかるんだ地面は沼のような状態だ。全身泥まみれになりながらもなんとか外に出た脩は、鍵を拾い、たどたどしい手つきで南京錠の鍵穴に挿し込み、捻つて扉を開けた。

「すごいわ、脩。本当に、すごい」

加奈江は脩を抱きしめた。こんなに泥まみれになって加奈江を助けようと頑張つた脩に、涙が出そうになる。

ビルの二階で人が動く気配がした。隣のビルから漁師たちが移つて来たのだろう。脩の成長は喜ばしい限りだが、感慨に浸っている場合ではない。

「お姉ちゃん、脩がいると心強いわ。さあ、もう少しよ」

脩を連れ、坂を下る加奈江。ほとんどの漁師はビル内を搜索しているようで、途中誰にも会わなかった。

堤防のある広い道に出て、さらに進む。しばらくすると門が見えてきた。門をくぐつて石段を下りれば波止場があるのだが。

「……ダメだわ。ここも見張られてる」

石段の上から波止場を見ると、数人の人影が見えた。加奈江たちがここから逃げると踏み、見張っていたのだろう。ここから見える限り船も無い。

「脩、ここはダメみたい。こつちよ」

波止場を離れる加奈江。あと船があるとすれば、ここから少し南に行つた所にある灯台だ。そこへ向かうしかない。

加奈江は、脩と共に灯台へと向かった。



第五十一話 『消失』 太田ともえ 夜見島灯台 —

0:00:47

追っ手から逃れた加奈江と脩は、夜見島港の南にあるトンネルを抜け、海に大きくせり出した堤防の手前までやってきた。堤防の先に灯台が見える。灯台まで行けば、救命用のボートがあるだろう。太田常雄と漁師たちは、まだビル群の方を探しているはずだ。もうすぐ島から脱出できる。二人は堤防の上を走る。

だが、加奈江の前に、また着物姿の女が立ちはだかった。太田家の娘・ともえだ。

「ここに來ると思つたわ。もう逃がさないから」

ともえは、夜見島港の手前で会つたときと同じく、鬼相を浮かべて加奈江を睨む。そして、波止場の方へ向かつて「化物女はここよ！ここにゐるわ！みんな早く來て!!」と、叫んだ。

棧橋の近くにいた漁師たちが移動するのが見えた。すぐにここへ來るだろう。

「お願いです。そこを、通してください。あたしは……あなたたちに、なにもしません」

「はん。化物女の言うことなんて信じると思う？ おとなしく子供を渡しなさい！」

ともえは脩の腕を掴み、加奈江から引き離そうとする。脩は加奈江の腕にしがみつき、「やだやだ！お姉ちゃん！お姉ちゃん!!」と叫ぶ。

「やめて！脩を連れていかないで!!」

ともえを脩から離そうとする加奈江。しかし、ともえは脩をつかんで離さない。「あなたこそ離しなさい！」と、逆に加奈江を押す。

「ともえ！無事か!？」

トンネルの方から声がした。太田常雄と漁師が数人駆けつけたのだ。一瞬、加奈江の注意がそちらに向く。その隙に、ともえに強い力で突き飛ばされた。

「お姉ちゃん！」

倒れた加奈江に駆け寄ろうとする脩の両肩を掴むともえ。

「さあ、覚悟しなさい！ 化物女！」

ともえが脩を奪う。後ろから漁師たちが迫る。脩が泣き叫ぶ。

加奈江はそのとき、サイレンの音を聞いた。

北東の方角、ちょうど、四鳴山を越えた向こう側の、遊園地がある方向だ。最初は小さかった音が、次第に大きくなる。

「……なんだ？」

漁師たちも足を止め、北西の方向を見た。遊園地のある地域に、サイレンが鳴る設備など無いはずだ。

サイレンの音は、どんどん大きくなる。

それにつれ、地面が小刻みに揺れ始めた。

「地震か……？」

太田がよろけ、そばにいた漁師に支えられた。揺れは、サイレンの音に合わせるかのように大きくなり、やがて、立っていられないほどになった。

「……おやつさん！ あれ!!」

漁師の一人が海を指さした。赤い海が大きくうねって盛り上がっている。それが、こちらに近づいて来る。近づくにつれうねりは大きくなり、やがて島を飲み込むほどの巨大な津波となって押し寄せていった。

その津波を見た瞬間、加奈江は悟った。

——お母さんが、人間を写し世に取り込もうとしている！

太田は大きく目を見開いて立ち尽くしている。漁師たちは後ずさりし、腰を抜かす者もいた。ともえも怯えも、加奈江から目を離し、呆然と赤い津波を見ていた。

加奈江は、ともえから脩を引き離した。

そして。

「脩！ お姉ちゃんに捕まって！ 絶対絶対！ 離しちやダメよ!!」

脩の身体を、強く、強く、抱きしめた。

脩も、小さな身体の全ての力を使って、加奈江に抱きつく。

赤い津波が、すぐ目の前まで迫る。

「おのれ穢れ！ 何をした!!」 太田が叫ぶ。

「化物女！ 絶対許さないから!!」 ともえが叫ぶ。

漁師たちの怒号が、あるいは悲鳴が、聞こえる。

加奈江は脩を抱きしめ、脩は加奈江にしがみつき。

——ああ、どうか神様、この子だけは……この子だけは助けて!!

加奈江は、神に祈った。

赤い津波は、加奈江と脩、太田常雄ともえ、漁師たち、そして、島の住民全員を飲み込み。

彼らを、写し世の世界へと連れ去った。

第五十二話 『既視感』 木船郁子 夜見島／瓜生ケ  
森 15:31:07

一樹守と別れた木船郁子は、蒼ノ久漁港から四鳴山へと続く森の道を歩いていた。ずっと、自分の正体について考えていた。他人の心の中に入り込み、触れるだけで考えていることを読み、そして、他人を思い通りに操る——そんな特殊能力を持つ自分。なぜ、自分にはこのような能力があるのだろう。他人の心が読める能力は、物心ついたときからあった。時が経つにつれ、それが強くなっているように思う。

木船郁子は、中迂半島の亀石野という地域で生まれた。もうすぐ十九歳になる今日まで、決して恵まれているとは言えない環境で育った。母が郁子を産んだのは十四歳の時だったというから、産まれる前から様々なトラブルを抱えていたことは容易に想像できた。父親はいなかった。郁子が生まれる前に死んだと聞いているが、本当かどうかは判らない。

郁子を産んだものの、まだ少女と言つていい年齢の母に、一人で子供を育てられるはずもない。母は中学を卒業すると、郁子を両親に預け、割のいい仕事を求めて上京した。定期的に届く手紙には「生活が安定すれば迎えに行く」と書いてあったが、母は結局、郁子を迎えに来ることはなかった。

祖父母に育てられた郁子は、中学を卒業し、亀石野から少し離れた三逗高校に通うことになった。電車を乗り継げば祖父母の家からでも通えない距離ではなかったが、郁子は高校の寮で暮らすことを選んだ。決して祖父母との仲が悪いわけではない。むしろ、祖父母は実の親以上に愛情を注いでくれた。だが、他人の心が読める郁子には、その愛情が苦痛だった。祖父母の心の奥底には、郁子のことを「母親に捨てられたかわいそうな子」という思いが、確かにあったのだ。

祖父母の家を離れ、高校の寮で暮らし始めた郁子だったが、そのころから、肌が触れただけで他人の心が読めるようになった。それが原因で、次第にクラスから孤立していく。結局、高校生活もうまくいか

なかった。卒業はできたものの、進学はせず、三逗港の近くに小さなアパートを見つけ、港でアルバイトをして生計を立てた。そのまま極力人との接触を避け、一人で生きていくつもりだった。

だが、昨日船で夜見島へ向かう途中、怪異に巻き込まれる。高波により海へ転落し夜見島に流れ着いた郁子は、他人の心に入り込み、自在に操る能力を身に付けていた。

亀石野を離れてから三逗地域での寮暮らし、そして、この夜見島への上陸——島へ近づけば近づくほど、郁子の特殊能力はより強くなっているように思う。一連の特殊能力は、この島と深い関わりがある……そういう気がしてならない。この島には、他人の視界を覗き見る、他人の心を惑わす、死体に移り移る、死者の姿をまねる、といった、不可思議な伝承が数多くあるのだ。郁子の能力も、そのひとつかもしれない。

不意に、背後から左肩を掴まれた。

反射的に振り返り、手を払いのけた。幸いパーカーの上からだったため、心の声が聞こえることはなかった。

「いつてえな。そんなに嫌がらなくてもいいだろ。悪かったよ、驚かせて」

右手を押さえてそう言ったのは、リーゼントの髪型にデニムジャケットの男だった。見覚えがある。一樹守と三上脩を夜見島へ案内する際、無理矢理船に乗り込んできた男女二人組の一人だ。地の底で異形の生物と対峙した際にもいた。

男は痛そうに右手をさすりながらも、頬を緩めた。「あんた無事だったんだな。良かった。もう一人の、韓国のイケメン俳優みたいなヤツは、どうしたんだ？」

「……安全な場所にいるわ」顔にはつきりと不快感を表し、そっけない言葉を返す郁子。

男はそんな郁子の態度を気にした風も無く、「そうか、なら良かった」と答え、そして続けた。「ところで、オレの連れの女、知らないか？ ネットレスやブレスレッドをじゃらじゃらつけたハデな女。鉄塔に行くってメモ残して、いなくなっちゃったんだ」

「……知らない」

「そうか……アイツ、いつたどこ行きやがったんだ」男は腰に手を当て、ため息をついた。「ホントに铁塔に行ったとは思えねーんだよな。オレを置いて一人だけで逃げるヤツじゃないし……いや、いざというときは容赦なく見捨てて逃げるヤツなんだけど、そういう状況になるまでは、オレのこと利用するだけ利用すると思うんだ。そういうヤツなんだよ、あの女は」

郁子のはつきりと拒絶感を表しているにもかかわらず、冗談交じりで話す男。人懐っこいのか、空気が読めないのか。どちらにしても、人と関わることを避けている郁子が最も苦手とするタイプだ。

戸惑う郁子に構わずぺらぺらと喋り続ける男だったが、突然、はつとした表情になった。「そういやあんた、なんか、どこかで会ったことあるな？」

「船で会ったでしょ」

「いや、そうじゃなくて、なーんか、誰かに似てんだよな……」

男はぐいつと顔を近づけ、まじまじと郁子の顔を見る。後退りして距離を取る郁子。男は郁子の顔を見ながら顎に手を当てて考えた後、ぼん、と手を叩いた。

「そうだ。柳子だ。柳子に似てんだ」

「——！」  
地の底から黒い手が伸びてきて、郁子の心臓を掴んだ——そんな気がした。

柳子——その名前を、郁子は忌まわしく思っていた。忘れたかったが、決して忘れることはできない名前だ。例えば子供の頃、夜中に目覚め、トイレに行こうとすると、居間で祖父母が柳子のことを話している。例えば定期的に届く母の手紙に、柳子がどここの中学に通っている、とか、なに部に入った、など、知りたくもない情報が書かれている。例えば戸籍を見た際、郁子の近くにはその名が記されている。実際に会ったことは数えるほどしかないのに、その名は常に郁子に付きまとう。祖父母の家を出て、その名を聞くことはもうほとんど無いだろうと思っていたのに、なぜ、昨日会ったばかりの人から、そ

の名を聞かなければならないのか。

男は、まるで郁子の心に土足で踏み込むかのごとく続ける。「いや、顔は全然違うんだけど、雰囲気というかなんというか、全然似てないけど、めっちゃくちや似てるんだよな。ひよつとして、姉妹かなんかじゃねえの?」

地の底からさらに黒い手が伸びてきて、郁子を掴み、地の底へ引きずり込もうとする——そんな錯覚を抱く。柳子と似ている。柳子と姉妹。母は柳子を引き取った。柳子だけを引き取った。あたしは捨てられた。祖父母の愛は同情。友達は偽り。全て忘れたいのには、そのため家を捨て、人との関わりを捨て、一人で生きていこうとしているのに。

それでも、その名はしつこく付きまとう。

「いやああああ!!」

郁子は悲鳴を上げると、耳をふさぎ、男を置いて駆けだした。

第五十三話 『彷徨』 喜代田章子 夜見島／蒼ノ久  
集落 15:31:58 終了条件2

◇

阿部倉司と別れ、一人、蒼ノ久漁港にやってきた喜代田章子は、海から少し離れた場所にある『三上』の表札がかけられた家の前にいた。夜見島ガイドの能力が、二十九年前に三上脩が住んでいた家だと教えてくれる。あの夜、この家で何があったのか。それを調べなければならぬ。

地の底で、異形の生物の体内に取り込まれた三上脩。彼を救う決意をした章子だったが、まだ、二十九年前の三上家で何があったのか、全てを知ったわけではない。命がけで救出するのだから事情くらいは知っておきたいと思うのだが、これまで章子の質問には大抵答えてくれた夜見島ガイドさんが、どうもその辺の質問には答えてくれないのだ。幸い、章子には過去視という能力がある。これを使って三上家を調べれば、二十九年前に何があったのかは判るだろう。

門をくぐり、玄関へ向かう章子。だが、玄関の鍵はかけられており、開かなかった。田舎は外出するときでも鍵をかけない家が多いと聞くが、三上家は東京から移住して来たので、その辺の防犯意識はしっかりしていたのかもしれない。悪いことではないが、これでは中に入れない。

どうしたものかと周囲を見回すと、玄関のそばに植木鉢があるのを見つけた。地面には少しづらしたような跡がある。もしか、と思い植木鉢をどけてみると、下に鍵があった。植木鉢の下に鍵を隠すなんて不用心だな。最近の空巢には通じないぞ。などと思いつつ鍵を拾い、玄関の鍵穴に挿そうとしたが、入らなかつた。玄関の鍵ではないようだ。章子が思っているほど家主も不用心ではないらしい。でも、それならこれはどこの鍵だろう？ 裏口の鍵をわざわざ玄関前に隠すとも思えない。他に入入り口でもあるのだろうか？ さらに見回すと、



庭の隅に小さな物置があるのを見つけた。あれかな？ 引き戸に取り付けられた南京錠に挿すと、抵抗なく入り、かちりと回った。

章子は物置を開けてみる。ほうきやホース、灯油のポリタンクなどの日用品が詰め込まれていた。そういえば、一人で行動しているのに武器も何も持ってなかったな。リーゼントからバットを奪ってくれば良かった。まあいい。せっかく開けたから、何か使わせてもらおう。物置を探る章子。いろいろ入っているが、武器になりそうなものはハンディタイプの熊手くらいしかなかった。頼りなさは否めないが、金属製なのでそこそこ重量があり、先が尖っているのでうまくすれば刺さるだろう。こんなものでも何も持たないよりははるかにマシだ。章子はひとまずそれを持っていくことにした。

他にも何かないだろうか。さらに探ると、奥から『夜見島B出土品54号（登録抹消予定）』というタグが付けられたなにかを見つけた。なにか……そう表現するしかない。五十センチほどの長さのそれは、一見すると刀……それも、かなり幅広の物、西洋のサーベルという武器に似ている。しかし、刃は無く、そもそも金属ですらない。表面は茶色で、ぼこぼこしている。木のようにも見えるが、石のようにも見える。初めて触る感触だが、どこか馴染みのある感触。そんな不思議な材質だ。

しばらくその不思議な物体をいじくりまわしていた章子は、不意に。

——骨？

と、思った。そうだ。この質感は、博物館なんかで見る恐竜の骨の化石によく似ている。タグにも出土品と書いてあるし、三上脩の父親は考古学者だったらしいし、そうに違いない。何の骨かまでは判らないが、大きさから考えると、かなり巨大な生物だろう。本当に恐竜の骨かもしれない。だとしたら、元の世界に帰って売り飛ばせばいい金になるかも、もとい、恐竜の骨なら頑丈だろうからいい武器になるだろう。章子はその骨のような物体を持っていくことにした。

武器を手に入れた章子は、さてどうやって家の中に入ろうかと、玄関の方を振り返った。すると、目の前に、どすん！ と大きな音を立

て、妖怪おとろしかと思うほどの巨大な物体が落ちてきた。妖怪おとろしなんかよりよっぽど厄介な巨体闇人だ。

巨体闇人は、「他人の家の物置を漁るなんて、お前は泥棒か?」と、章子に迫る。武器を手に入れたとはいえ、こんな骨みたいな物体で巨体闇人と戦うのはムリゲーすぎる。逃げるしかないが、門への行く手は阻まれた格好だ。他に逃げ場はない。いきなり詰んでしまったと、思っていたら。

不意に、意識が遠くなった。

と言っても、急に貧血に襲われたワケではない。地の底で三上脩が異形の生物に取り込まれそうになったときと同じ、一步引いたところから自分を見ているような不思議な感覚。これは、章子の内に潜むもう一人の誰かさんが表に出てきている状態だ。

章子に代わったもう一人の誰かさんは、巨体闇人に向かって、「お願い、邪魔しないで」と訴えた。巨体闇人がそんなお願い聞いてくれるわけないだろ、と、章子は思ったのだが。

「……うん? あんた、鳩か?」

巨体闇人は、股間にある巨大な顔を傾けた。

「……そうよ。あたしの邪魔をすると、お母さんに怒られるわよ?」

章子に代わったもう一人の誰かさんがそう言うと、巨体闇人の股間の顔はみるみる青ざめた。そして。

「いえいえ、邪魔するなんてとんでもない。どうぞどうぞ、気がすむまでお調べください。お母さまによろしく」

急に低姿勢になり、揉み手をしながらそう言うと、巨体闇人はすぐと去って行った。

巨体闇人が庭から出て行ったところで、操作権が章子に戻って来た。なんだかよく判らないが、面倒なことは深く考えないのが章子の主義なので、そのまま調査を進めることにした。

どこか鍵がかかってないところはないかと、近くの窓を調べてみる。窓枠に触れると、強い残留思念を感じた。ここに何かありそうだ。章子は意識を集中し、過去視を試してみる。すぐに映像が浮かび上がった。雨が降る夜、ロボットのおもちゃを持った幼い三上脩が、パ

ジヤマ姿で窓から庭に飛び降りるところだ。脩はそのまま庭を走り、門をくぐって外に出た。

過去視をやめる章子。ふむ。二十九年前のあの夜、脩君はこの窓から外に逃げ出した。おそらく、穢れを排除しようとした太田常雄と漁師から逃げたのだろう。そのとき家の中で何があったのかは判らないままだが、とりあえず脩の後を追ってみよう。

章子は三上家を後にし、門から外に出た。家の前で過去視をする、坂道を駆け上がる脩の姿が見えた。後を追って章子も坂を上がる。しばらくすると道は右へ折れ曲がり、さらに進むともう一度右に折れ曲がって下り坂となっている。坂を下って行けば海岸沿いの道に出るが、その途中、三上家の裏口の前で強い残留思念を感じた。裏向かいの浅野という家からだ。三上家の半分くらいの広さしかない平屋の家で、ブロック塀に囲まれている。章子は塀に触れ、過去視を試してみた。

雨の中、傘も差さず、靴も履かず、一人立ち尽くす少女の姿が見えた。柳子と同じ顔をしている。脩が姉と慕っていた少女・加奈江だ。加奈江は左手に火掻き棒、右手には血まみれの包丁を持っていた。血は刃から柄へ伝い、加奈江の右手をべつとりと濡らしている。

「お姉ちゃん！　加奈江お姉ちゃん！」

脩の叫び声が聞こえた。加奈江ははっとした表情になると、周囲を見回し、持っていた包丁を浅野家の庭に投げ入れた。そして、「脩！　どこにいるの!？」と、声が聞こえた方へ走った。

過去視をやめる章子。加奈江が包丁を投げ入れた家を見る。いかにも怪しげなあの包丁を過去視してみたいが、ブロック塀は二メートルほどで、乗り越えるのは難しい。そばに木製の小さな開き戸があるものの、押しても引いても開かなかった。鍵穴は無いので、恐らく向こう側から門が掛けられてあるのだろう。他に出入口は無く、今は中に入れそうにない。とりあえず後回しにして、章子は脩と加奈江の後を追うことにした。

その後も脩と加奈江の行動に合わせ過去視をする章子。三上家の近くで合流した二人は、浅野家とその隣の民家の間に空いたわずかな

隙間を通り抜け、九十九階段を登って丘の上にある社へ向かったようだ。章子は二人の行動をなぞり、丘の上の社へ向かう。途中、何度か闇人に見つかつたが、襲つて来ることはなく、みんな、「これはこれは鳩様。お母さまによるしくお伝えください」と、やたら低姿勢で去つていった。戦わないで済むのは結構だが、大丈夫なのだろうか？ このまま教会まで行つて「お母さん開けて！」つてなつて苦情が殺到してCMが打ち切りになつたりしないだろうか？ などと自分でもワケが判らないことを考えながら調査を進める章子。社の過去視を終え、さらに進むと、集落で最も高い場所にあるロープウェイの広場に着いた。蒼ノ久集落と夜見島港を結ぶ、資材運搬用のロープウェイだ。過去視をすると、加奈江はゴンドラに脩を乗せて夜見島港まで逃がし、その後、自分も夜見島港へ向かつたようだ。

過去視をやめる章子。これで、この地域での三上脩と加奈江の行動はおおむね判つた。あとは、肝心の三上家で何が起こつたかだ。今の段階では三上家には入れない。加奈江が浅野家の裏庭に投げ入れた血まみれの包丁が最後のピースだろう。出入口の開き戸には門がかかつている。あれをどうにかしなければ包丁を調べることはできない。なんとかして、外から門を外せないだろうか？ 例えば、時代劇なんかで忍者が使つている、鉤爪にロープを結びつけたものを投げ入れ、門に引つ掛けて引つ張るとか。……悪くないアイデアだな。ちやうど、引つ掛けるのに良さそうなハンディタイプの熊手を持つている。あとは、どこかでロープを調達しなければならぬ。都合よくロープが見つかるかが問題だ。

……………

ふと、ロープウェイのゴンドラを見ると、中にボロボロのロープが入つていた。おお。なんとという幸運。きつと日ごろの行いが良いからだな。章子はロープをこの場に運んだのが阿部の功績であることなどすっかり忘れ、ロープを取つた。古くてボロボロだが、門を外すくらいなら充分だろう。ロープを熊手に結びつけた章子は、急いで坂を下り、浅野家の裏口まで戻つた。ぶんぶんと回して勢いをつけ、開き戸の上から熊手を投げ入れる。引つ張ると、がちりと、熊手が引つ

掛かった。さらに引つ張ると、からんと、木の棒が落ちる音がして、開き戸は見事に開いた。よし、作戦成功だ。中に入る章子。庭に、血まみれの包丁が落ちている。

章子は包丁を拾う。今までに感じたことがないほどの、強い残留思念を感じる。

——さて。

この包丁は、恐らく最後のピースだ。これを過去視すれば、二十九年前の夜、三上家で何があったのか、全て明らかになるだろう。そして、全てを知った後、恐らくあたしはあたしでなくなる。胸の内に潜む誰かさんが、あたしと入れ替わるはずだ。元のあたしに戻るかは判らない。それ以前に、命さえ危ういだろう。あたしと入れ替わった誰かさんは、脩を助けるため、あの異形の生物の元へ向かうだろうか。

それでも、章子は少しもためらうことはなく。

意識を集中し、包丁の残留思念を探った。

第五十四話 『覚醒』 喜代田章子 蒼ノ久集落／三  
上家玄関 17:41:33

玄関の上りあがり框で、加奈江は一人、立ち尽くしていた。外から戸を激しくたたいた音がする。すりガラスの越しに何人もの人影が見えた。「ここを開けろ!」「いるのは判ってるぞ!」「開けないとぶち破るぞ!」と、かなり息巻いていた。また網元の太田が怒鳴り込んできたのだろうか。それにしても時間が遅いし、来るときは太田一人か多くても二、三人だ。いつもとは様子が違う。太田がこの家に来る理由は加奈江だが、対応は家の主である隆平が行い、加奈江は奥の部屋で彼らが帰るのを待っている。今もそうした方がいいだろう。一階の自分が寝泊まりしている部屋へ戻るか、二階へ行つて脩のそばにいるか。加奈江がその場を離れようとして。

……え?

足元に、三上隆平が倒れていることに気がついた。寝間着姿だった。玄関側に頭を向け、仰向けで倒れている。土間と上り框にまたがる状態だ。さらに、隆平の胸の辺りは血に染まり、流れ落ちて土間にまで広がっていた。かっと見開いた眼には、何も映っていないように思えた。虚空を見つめているかのような暗い瞳。その表情は、驚いているようにも見え、恨んでいるようにも見え、悲しんでいるようにも見える。

三上隆平は、刃物で胸を刺されて死んでいた。  
そして。

そこで、加奈江はようやく、自分の右手に血まみれの包丁が握られていることに気がついた。

どこかぼんやりとしていた意識が、急に鮮明になった。状況を把握した加奈江は短い悲鳴を上げる。身体が震える。血まみれの包丁と、血まみれで倒れている隆平。これは、あたしがやったのだろうか? あたしが、脩の父を殺した……。覚えは無い。無いが、意識が鮮明になると、隆平の胸に包丁を突き立てた時の感触が右手に残っているこ

とに気がついた。刺されたときの、隆平の呻き声も耳に残っていた。そして、加奈江をその恐ろしい行為へと書き立てた、胸の奥底から聞こえる母の声も。

《使命を果たせ》

地上の様子を探るため、地の底から放たれた加奈江。その使命を放棄しようとした加奈江に、母は怒っていた。

玄関の引き戸が蹴破られた。ガラスが割れる音と木が裂ける音。ふたつが入り混じった大きな音と共に、数人の男たちが家の中に入ってきて来る。男たちは、血まみれで倒れている隆平の姿を見て、小さくうめき声をあげた。土間に広がる血が足元まで迫り、一斉に後退りする。男たちはしばらく倒れた隆平に釘付けになっていたが、一人が、包丁を持って立ち尽くす加奈江に気がついた。

「化物が！ ついに正体を現したな！」

一人が叫ぶと、他の男たちも加奈江に気がついた。初めて見る惨たらしい死体に脅えていた男たちが殺気立つ。目に、憎しみが宿っている。

《殺せ！》

加奈江の胸の内から、また母の声がした。

その声に応じるかのように、加奈江の身体が勝手に動いた。男たちに向かって、包丁を横薙ぎに払う。後退りする男たちに、さらに切りかかろうとする。

「——ダメ!!」

加奈江は叫んだ。なおも切りつけようとする右手を左手で押さえ、強い意思で母の声に逆らう。加奈江は奥の部屋へと走った。しばらく呆然と立ち尽くしていた男たちだったが、我に振り返って来た。部屋へ駆け込んだ加奈江は、奥の窓を開け、外に出ようと窓枠に足を掛けた。そこで止まる。窓のそばには鏡台が置いてある。そこに、自分の姿が映っていた。まだ若い……まだ成人していない頃の、若い自分の姿。

——違う！ これはあたしじゃない！ あたしは……あたしは!!  
思わず、包丁の柄で鏡を叩き割った。

男たちが部屋に駆け込んできた。加奈江は窓から外へ飛び降りると、庭を走り、門から外へ逃げ出した。

そこで、映像は途絶えた。

過去視を終えた章子は、小さくため息をついた。加奈江は脩の父親を殺した。まあ、驚きはしない。概ね予想していた通りだ。

「……聞こえる？」

章子は、胸の奥に潜む誰かさん——加奈江に話しかける。

加奈江は応えなかったが、間違いなく声は届いているだろう。章子はそのまま話す。「なんで、脩のお父さんを殺したの？」

加奈江はしばらく無言だったが、やがて、答えた。

——あたしは、お母さんが地上の様子を探るために放った鳩。お母さんの意志に逆らうのは、容易ではないの。

「そっか……それで、脩を護ろうとしたのね」

異形の生物の意志とは言え、加奈江は脩の父親を殺してしまった。到底償えない罪だ。だから、せめてもの罪滅ぼしに、脩を護ろうとしているのだろう。

家から逃げ出した加奈江は、脩と合流し、蒼ノ久から夜見島港へ逃げた。そして、己の命と引き換えに、脩を島から脱出させたのだ。

だが、二十九年の時が流れ、失われた過去を追い求める三上脩は、島へ戻って来た。そして、地の底で異形の生物に取り込まれた。

——お願い。脩を助けて。あの子はまた、一人ぼっちで怖がってる。

加奈江が、これまで何度も章子に訴えてきたことを、もう一度繰り返した。

三上脩が異形の生物に取り込まれて以降、加奈江は章子に助けを求めている。脩を助けて、と。章子はそれを、ずっと無視し続けていた。「あたしにとつて、三上脩は赤の他人。危険を冒してまで助けるような義理は無いわ。あなたも、勝手にあたしの中に住みついてるだけ



の他人。言うことを聞く理由は無いでしょ」

「……と、思ってたんだけど」

章子は大きく息を吐き、続けた。「ありがとう、お母さんを助けてくれて」

——え？

戸惑う加奈江に、章子はさらに言葉を継ぐ。

「あなたがいなかったら、あの日、お母さんは助からなかった。当然、あたしも生まれなかった。あなたは、あたしと、あたしのお母さんの、命の恩人よ」

章子の母親は、妊娠中に事故に遭った。旅行中、海辺の町で遊覧船に乗り、誤って海へ転落したのだ。どうにか救出されたが、母が言うには、溺れて海の底へ沈みかけたとき、肌が真っ白な美しい少女が海中を泳ぎながらやってきて、胎内に入ったそうだ。母は、その少女のおかげで助かったと、今でも信じている。

物心ついた頃から、章子は何度もこの話を聞かされていた。章子は母親を過去視し、この話が真実であることを確認している。

無事に救出されたものの、事故のショックからか母親は緊急出産することになり、章子は予定よりも早く生まれることになった。

すべて、二十九年前の八月三日の出来事だ。

二十九年前の夜、加奈江は、夜見島の灯台で脩と共に赤い津波に飲み込まれた。どうにか脩を助けることはできたが、加奈江は力尽き、海へ沈む。その後、海中を漂っていた加奈江が、偶然同じ海へ転落した章子の母を見つけ、その胎内に宿った。

「長年の疑問が解けたわ。あたしの一連の特殊能力は、鳩の力なのね」  
——ごめんなさい。あなたを巻き込んでしまった。

「なに言ってるの。謝ることなんてないわよ。この能力のおかげで天職に就くことができたし、それなりに儲かっているし。それが闇の住人の力だろうと何だろうと、あたしには関係ないわ。あたしはあたしだもん」

あはは、と笑うと、章子は、強い決意と共に、続けた。

「あなたには、大きな……本当に大きな恩があった。あなたは、あたしの大切な人を救ってくれた。その恩は、絶対に返さないとね。脩を……あなたの大切な人を、一緒に助けましょう」

「——ありがとう」

その瞬間。

章子の意識は、胸の内の、深い、とても深い所へ落ち。

代わりに、加奈江が目覚めた。

☆

覚醒した加奈江は、空を見上げた。もうすぐ陽が暮れる。世界は、また闇に包まれる。それに合わせ、母は侵略を始めるだろう。光によつて奪われた地上世界を奪還するために。

四鳴山の頂上に建つ鉄塔に視線を移した。鉄塔の先端は、空に吸い込まれるように消えている。その向こう側に、本当の夜見島が、わずかに見えている。

もうすぐ母は、あの鉄塔に来るはずだ。

第五十五話 『狭間』 三上脩 —— / —— 「殍」  
从：久ゴ

その空間は、『時空ののりしろ』と呼ばれていた。

写し世の夜見島が存在するのは虚無の世界だ。太古、光に追われた闇の住人が逃げ込んだその世界では、あらゆるものが形をとどめることができない。全てが抽象的な存在であり、概念的なエネルギーの集合体でしかない。

だが、二十九年前に写し世を生み出した母の力により、現在はどうか形を保とうとしていた。もちろん、それは虚無の世界のルールに反したことである。海の中に砂の城を築いたような極めて不安定な状態であり、形を維持していることが奇跡だった。あるいは、それだけ母の力が強いということでもある。

しかし、母がどんなに強い力で均衡を保とうとしても、端々で綻びは生まれる。砂の城の先端が崩れて砂玉になるかのごとく、写し世の周辺には様々な世界が生まれては消えていた。虚無の世界とは逆に、あらゆるものが形をとどめ、決して崩壊しない世界や、全てが元に戻る世界、時間が完全に止まった世界、あるいは、現世と虚無の世界の狭間という、本来は存在しえない世界さえも存在していた。

時空ののりしろは、そうした綻びによって生まれた世界のひとつだ。そこは現在であり、過去でもあり、未来でもある。時間は過去から未来へ流れるし、未来から過去へも流れる。あらゆる事象が存在し、あらゆる事象が存在しない。完全に時間が破綻した世界だった。

地の底で異形の生物の体内に取り込まれた三上脩は、時空ののりしろを漂っていた。現在であり過去であり未来であるこの世界では、三上の失われた時間をもよみがえらせる。それは夢でもあり、現実でもあった。本当の出来事でもあり、偽りの出来事でもある。自分の記憶でもあり、他者の記憶でもある。あらゆる事象が入り混じった、彼と彼女の記憶。

夜の闇が消え、光が満ちはじめた海の上で、幼い脩は小さな舟にゆられていた。舟の縁に両手を掛け、じつと、海面を見つめる。海面には、彼が姉と慕う少女・加奈江が浮かんでいた。舟は小さいが、少女と子供の二人くらいなら充分に乗ることができる。だが、加奈江は舟に乗ることを拒んだ。乗ったところで運命は変えられない。もう、崩壊を止められない。

水平線から陽がのぼる。世界はさらに眩しい光に包まれる。遮るもののない海の上で、闇は、決して存在することができない。

陽がのぼるにつれ、明るくなるにつれ、加奈江の身体は崩壊してゆく。抗う力は、もう加奈江には残っていない。写し世へと連れ去ろうとする赤い津波に逆らうため、脩を救うため、加奈江は全ての力を使い果たしていた。崩壊は止められない。それは、海に放り込まれた泥人形のようなだった。手足の末端から崩れ、海に溶けてゆく。手が溶け、足が溶け、腕が溶け、脛や腿が溶け、やがて、胸や腰が溶けはじめる。

「……脩……見ないで……見ちゃ駄目……」

加奈江を見つめる脩に向かって、最期の力で訴えた。崩壊する姿を見られたくないし、見てほしくない。

脩は無言で頷くと、目を閉じた。加奈江に言われた通り、決して、見ないように。

陽がのぼる。世界はさらに明るくなる。加奈江の腰から下はすでに存在しなかった。崩壊はさらに進む。腹が崩壊し、胸が崩壊し、首が崩壊し、そして、顔にまで及ぶ。

加奈江は、海の中へ沈んでゆく。脩は目を閉じ、決して、見ようとはしない。

「さよなら、脩」

最期に発した言葉は、いくつもの海の泡となり、脩の耳に届くことはなかった。

海の底に沈みながら、加奈江はふと。

——脩を残して海に沈むのは、二度目ね。

そんなことを思った。

第五十六話 『再会』 藤田茂 夜見島／第1砲台跡

5：14：55 終了条件2

謎の座礁船・ブライトウィン号から脱出した藤田茂と矢倉市子は、島の北部にある旧日本軍の要塞跡へ来ていた。この先の浜辺に、藤田が上陸した際に使用した小型のボートが停めてある。それを使い、島から脱出するつもりだった。その道中、藤田はかつて世話になった島の網元・太田常雄に出会う。怪我をしていた太田は命を落とし、ほどなく屍人となってよみがえった。市子を護るために拳銃で太田を撃った藤田は、要塞跡の地下道を通って浜辺へ向かう。迷路のように入り組んだ地下道を進み、二人は地下二階の中央部にたどり着いた。そこは、東西に通路が伸び、北側に二部屋の弾薬庫がある場所だ。

◇

奇妙な違和感に、藤田は足を止めた。どうも様子がおかしい。ライトで周辺を照らしてみる。地下二階の中央部は北側に弾薬庫跡が二部屋あるが、ライトで照らしてみると、出入口が三つ確認できた。部屋がひとつ増えているのだ。

藤田は十五歳まで島に住んでいた。この要塞跡には何度も訪れている。その頃は二部屋だったと記憶している。無論、もう三十年以上前の話だから、それだけなら記憶違いの可能性もある。しかし、藤田は昨日、島に上陸したときもこの地下道を通った。その時も、確かに二部屋だった。記憶違いではない。

昨日まで無かった部屋は、東側と西側の部屋の間に出現していた。そこはただの壁だったはずだ。ライトで照らしてさらに確認すると、床に瓦礫が散らばっていることに気がついた。どうやら壁が崩れ落ちたようだ。得心がいく藤田。隠し部屋というわけだ。誰かが壁を壊したか、あるいは経年劣化で自然に崩れたかで、入口があらわになったのだろう。ここは戦時中に旧日本軍が造った要塞だ。隠し部

屋くらいあつてもおかしくはない。

「あ——」

藤田と一緒に隠し部屋を見ていた市子が何かに気づいた。出入口付近の地面にライトを向けると、何かがきらりと反射する。それを拾う市子。どうやらオイルライターのようだ。

「コラコラ、中学生がそんなもの拾っちゃいかんぞ」

非常事態ではあるが、一応警察官として注意し、ライターを預かろうとした。

びくん、と身体が震え、隠し部屋の前に立つ藤田と市子の姿が見えた。同時に、地下道内に銃声が響き、藤田の右肩に鋭い痛みが走る。市子が悲鳴を上げる。

「ふぎたのバカむすふるこおお……んふ……んふふふ……」

呂律の回らない声で言い、ひきつるような笑い声をあげたのは、屍人と化した太田常雄だった。その手には古いリボルバー式の拳銃が握られていた。自衛隊員の屍人から奪ったのか、あるいは——警官の藤田としては認めるわけにはいかないが——元々太田の持ち物か。

その銃口を、藤田から市子に向ける。

「おやつさんやめろ！ 相手は子供だぞ!!」

藤田は叫ぶが、屍人と化した太田にその言葉が届くはずもない。太田は薄ら笑いを浮かべたまま引き金を引いた。悲鳴と共に血飛沫が飛び散り、市子は地面に尻餅ついた。幸い銃弾は腕を掠めただけのようだが、太田はさらに引き金を引こうとする。藤田も銃を構えようとするが、右肩を撃たれたため、狙いを定めるどころか銃を向けることさえできない。これでは市子が撃たれてしまう。

——そのとき。

《——雑兵が！ 我の邪魔をするでない!!》

声が響いた。

低く、暗く、恐ろしい声だった。藤田はなにも喋ってはいない。そもそもそれは人の声ではないように思えた。まるで、暗闇の奥底に得

体の知れない化物が潜み、発したかのような声。もちろん、屍人と化した太田には、もう人の言葉を発することはできない。

市子を見ると。

鋭い目で、太田を睨んでいた。

そこには、強い殺意が宿っていた。とても子供とは思えない、恐ろしい目。

藤田は、かつてたたき上げで警部補まで出世した男だ。当然、多くの犯罪者と対峙してきた。彼が属していた捜査三課は主に窃盗事件を取り扱う部署だが、それでも、チンピラやヤクザ者と対することも少なくない。それなりに修羅場も潜っている。

そんな藤田ですら、今の市子の眼光に、得体の知れない恐怖を感じる。

そして。

それは屍人と化した太田でさえ同じだった。

市子に睨まれた瞬間、太田の顔から薄ら笑いが消えた。怯えた表情になり、後退りする。

《去れ!!》

市子が一喝すると、太田は慌てて逃げ出した。

その様子を呆然と見ていた藤田は、ふと思いつく。このような光景を、昔見たことがある。それは、夜の繁華街。チンピラが、肩がぶつかったと因縁を付けた相手が、その地域を取り仕切るヤクザの幹部だった。幹部はひと睨みした後恫喝し、チンピラを追い払った。

いま、藤田の目の前で起きたことは、それとそっくりだ。

市子を見る。唇の端を吊り上げ、不気味に笑っていた。妖あやかしの者が浮かべるような笑みだ。藤田の背中を冷たいものが走る。

だが、市子は不意に、はっとした表情になり。

「あ……あたし……いま……何を……」

突然見知らぬ場所に放り出されたかのごとく周囲をきよろきよろと見回しはじめた。頭を抱え、「わかんない……わかんない」と、ぐるぐると首を振る。

呆然と見ているだけだった藤田も我に返った。



「落ち着いて。市子ちゃん。大丈夫、大丈夫だから」

藤田はなんとか市子を落ち着かせる。さっきの出来事はなんだったのか。落ち着きを取り戻した市子に話を聞くが、太田に腕を撃たれてから後のことは、何も覚えていないと言う。

何が起こったのか判らないが、このままここにいてはまた屍人に襲われてしまうかもしれない。藤田は言い知れぬ不安を抱えたまま、弾薬庫を後にした。

## 第五十七話 『孤影』 矢倉市子 夜見島／潮降浜

8：50：32

夜見島は、上空から見ると飛び立つ鳩の形をしている。それを強く印象付けているのが、西端にある潮降浜しおふりはまと呼ばれる地域だ。丸く小高い丘と鋭角な岬からなるこの一帯が、鳩の頭部とくちばしを連想させるのだ。また、海に面して続く広い荒地と丘の上にある廃校が、ちようど目にあたる場所にある点も大きいだろう。

地形の関係からか、この地域は強い海風が吹き付ける。特に時化の時など、風の影響で海水が堤防を乗り越えて降り注ぐことから、潮降浜との呼び名が付けられたという話だ。

丘の上にある廃校は、かつては島で唯一の学校だった夜見島小中学校だ。金鉱発掘時代には鉱員の子供たちで溢れていたが、金鉱閉鎖後は児童・生徒の減少に歯止めがかからず、昭和四十四年に廃校となった。その後は数年放置されていたのだが、昭和五十一年の七月三十一日、島を訪れた廃墟マニアの男が校舎内に無断で侵入し、教室のカーテンに火を放つという事件が起こった。火は瞬く間に燃え広がり、校舎は全焼。警察に逮捕された男は、「夜になつたので教室内で寝ていたら、赤黒い化け物に襲われた。化物を倒すために火を点けた」などと、意味不明の供述をしたという。全焼した校舎は取り壊しが検討されたものの、事件発生から数日後の八月二日深夜、島の全住人が集団失踪するという前代未聞の事件が発生。島は上陸禁止となり、学校はもちろん、島全体がそのまま放置されることとなった。

☆

夜見島を一人さまよう矢倉市子は、潮降浜から少し北東の丘の上にいた。もはや道とは言えないほど木の枝や下草が生い茂る場所を、おぼつかない足取りで歩く。市子の首回りは血がべっとりとかびりついていた。その血はセーラー服の首元から胸の辺りにも付着してお

り、それが雨の水を含み、服全体に薄紅色に染み広がっていた。市子自身の血ではない。市子を救助しようとして命を落とした警察官・藤田茂の血だ。彼が要塞跡で死んで以降、市子の意識ははつきりしない。どこをどう歩いてここまで来たのか、全く思い出せなかった。ただフラフラと歩き続け、いつの間にかこの場所に来ていたのだ。獣道同然の場所を、不確かな足取りで歩く市子。ずるりと、足が草の中に沈んだ。草に覆われて見えなかったが、道の端は急な斜面になっていた。そのまま投げ出され、斜面を転がり落ちる。

不意に。

——市子!!

親友の手が、市子の腕を掴んだ。

それは、木々が生い茂る獣道ではなく——船の上。

高波により大きく船が傾き、市子は船の外に投げ出された。

海に落ちそうになったとき、親友のノリコが、手首をつかんでくれた。

同時に、市子もノリコの手首をつかむ。

だが、つかんだ場所が悪かった。ちょうど、ノリコがいつも着けているブレスレットの上からつかんでしまったのだ。ブレスレットが邪魔をし、うまく握れない。市子を支えるのはノリコの握力だけだ。十四歳の少女であるノリコに、片手だけで市子を引き上げる力があるわけもない。ノリコの手が滑った。市子が握っていたブレスレットがちぎれる。奇妙な浮遊感と共に、ノリコの姿が遠ざかる。

だが、その浮遊感が消える。

同時に、海も、船も、ノリコも、みんな消え。

市子は、斜面のそばにある舗装されていない砂利道に倒れていた。身を起こす市子。身体中あちこち痛むが、それよりも、いま見えたものの方が気になった。いまのはなんだったのだろうか？ それは、見えたというよりは、不意に記憶がよみがえったといった方がよいかもしれない。あの船は、市子がテニス部の大会から帰る際に乗った大型

フェリーのブライトウィン号だ。ブライトウィン号が何らかの事故に遭い、海に投げ出されたのだろうか？　しかし、市子が目覚めたのはブライトウィン号内の倉庫だった。海に投げ出されたのなら、それはあり得ないだろう。

判らない。大会を終え、ブライトウィン号に乗ってからの記憶がほとんど無い。あの夜、船で何があつたのだろう。ノリコや中島君たちはどこへ行ってしまったのか。なぜ、市子だけが船に残っていたのか。

市子は立ち上がった。腕や足にいくつもの切り傷や擦り傷を負っていたが、大きな怪我はなかった。周囲を見回す。斜面の反対側には市子の胸ほどの高さの堤防があり、その向こう側に赤い海が広がっていた。

「……<sup>かえ</sup>還りたい……お母さんのところへ……」

ぽつりとつぶやく市子。お母さんは心配しているだろうか？　警察官の藤田さんは、ここは夜見島だと言っていた。市子が住む中迂半島沖約三十キロにある島だ。決して絶望的な距離ではないのに、まるで一人だけ異なる世界に流れ着いてしまったかのような疎外感がある。母は行方の知れない市子を心配しているはずなのに、まるで見捨てられたかのような悲壮感がある。船に乗ってから二日ほどしか経っていないのに、永遠とも思える長き時間を一人で過ごしていたかのような孤独感がある。

いつの間にか。

市子は、海ではなく、反対側の山の方を見ていた。

島の中央、高い鉄塔が建つ山の、さらにその向こう側。そこに、母がいるような気がする。そこへ還りたいと思う。自分を残し遠い世界へ逃げた母、自分を見捨てた母、永遠とも思える孤独、それでも母の元へ還りたいと願い、母の行動を真似、母に認められたいと願う自分。

はつと、我に返る市子。あたしは今、何を考えていたのだろうか？

あたしの家があるのは海の向こうの本土、中迂半島にある亀石野という地域だ。当然、お母さんもそこに住んでいる。お母さんは怒ると怖

いけれど一緒に仲良く暮らしている。決して市子を見捨てたりなんてしない。

なのに。

この胸の内から湧き上がる思いは、いったいなんなのだ。それはまるで、自分の中に自分じゃない別の存在がいるような感覚だった。

「ちがうちがうちがうちがう！ これはあたしじゃない！ あたしじゃない！」

首をぐるぐると振り、考えを否定する。

心臓の鼓動が激しくなった。屍人がいる合図だ。危険な状態だが、パニックに陥りかけていた市子は冷静さを取り戻した。近くに古い軽トラックが停められていたので、その陰に身を隠し、周囲の様子を伺った。

砂利道は海に沿って続いており、その先に広場が見えた。一面枯草に覆われた荒地で、朽ち果てた小屋や漁船、ボロボロの木箱やコンテナなどが放置されていた。中には、高さが三メートル以上ありそうな石油タンクまである。幻視で様子を探ると、アイロンを持って徘徊する女性の屍人を発見した。砂利道の手前まで来たが、広場から出ることはなく、しばらくそこに立ち止まった後、元の場所へ戻って行った。

幻視をやめる市子。ひとまず危機は去ったが、どこか安全な場所へ避難した方がいい。とりあえず荒地の方には屍人がいるので、反対側へ行こうとした。

だが、びくと身体が震え、軽トラックの陰に隠れる自分の姿が見えた。いつの間にか、背後に迷彩柄の服を着た屍人が立っていた。右手に拳銃を持っている。とっさに荒地の方へ駆けだす市子。ぱん、と銃声が響いたが、幸い弾は当たらなかった。そのまま走り続ける。屍人は鈍間だから少し離れればもう弾が当たる可能性は低いだろうし、走れば追いつかれることもないだろう。荒地を横切って走る市子。しばらくすると、海と反対側にある丘の上に、フェンスに囲まれた大きな建物が見えた。どうやら学校があるようだ。あそこなら、隠れる場所が多いだろう。市子はそちらへ向かおうとした。だが、背後

で車のエンジン音がして振り返る。軽トラックが猛スピードで迫っていた。運転席にはさっきの迷彩服の屍人が見えた。屍人が車を運転している！ とつさに横に跳び、ギリギリでかわしたものの、まさか鈍重な屍人が車を運転するとは思わなかった。軽トラックは大きくUターンして再び市子に迫る。早く逃げなければ。市子は学校へ向かって走り出したが、びくんと身体が震え、女の屍人がアイロンを振り上げて向かって来る視点が見えた。軽トラックと女の屍人が同時に迫る。大ピンチだ、と思ったら、女屍人は勢い余って軽トラックの前に飛び出す格好になり、そのまま撥ね飛ばされた。軽トラックも女屍人をはねたことで車体が大きくブレ、広場のコンテナに突っ込んで停まった。その隙に、市子は丘の上へ続く坂道を駆け上がった。

坂を上がるにつれ、市子はその違和感に気がついた。学校から、なにやら焦げ臭いにおいが漂って来るのだ。不安を抱きながらも坂を上がり、しばらくすると、『夜見島小中学校』と銘板が掲げられた校門が見えた。門扉は閉ざされていたが、一メートルほどの高さなので乗り越えることができるだろう。だが、ためらってしまう。校門の向こうには二階建ての校舎があるのだが、焦げ臭いにおいはそこから漂ってくる。火事があったのだろう、校舎は全焼状態だった。それも、ほんの数日前に起こったかのような様子だ。昼前とはいえ、雨が降り続く夜見島は薄暗い。薄闇の中に建つ全焼した校舎は、オバケでも出そうな不気味さがある。

しかし、丘の下から車のエンジン音が聞こえ、ためらっている場合ではないと思い直した。軽トラックがまた迫っている。市子はトラックが来る前に校門を乗り越え、学校内に入った。

校庭には、滑り台やブランコ・鉄棒などの遊具や、朝礼台や花壇、意図は不明だが海亀の銅像も立っていた。残念ながら、何体かの屍人の姿も見える。まだこちらには気付いていないので、見つからないように校庭の隅を通り、校舎の方へ移動する。

またエンジン音が聞こえ、校舎の裏から軽トラックが走り出してきた。裏に車両用の出入口があったようだ。幸い市子は校庭の隅にいたため見つからなかったが、軽トラックはそのまま校庭内をぐるぐる

と走り始めた。徘徊していた屍人が次々と撥ねられる。その隙に、市子は校舎の裏に回った。

校舎裏には車両用の出入口があったが、その先の道は丘の下の荒れ地に通じているようだ。もうひとつ、フェンス製扉の通用口もあり、その先の道は荒れ地とは反対側の方向にのびている。しかし、扉は南京錠で閉ざされているため通れそうにない。他に、奥の階段を上がったところに焼却炉が見えた。車のエンジン音が迫って来たので、市子は慌てて階段を登った。

焼却炉があるのは小さな広場だった。さらに奥に道が続いており、その先にもうひとつ運動場があるようだ。だが、その前には大きな銃を持った屍人が立っていた。遠く離れているので見つかることはなかったが、このままでは通れない。何かで相手の注意を引いて、その隙に通るしかないだろう。とりあえず焼却炉を調べてみる。中にはプリントなどのゴミが詰め込まれていた。まだ燃やされていない。これは使えそうだ。ポケットを探る市子。少し前に要塞跡の地下二階で拾ったライターを取り出した。ライターでゴミに火を点ければ、屍人が様子を見るかもしれない。市子はライターでゴミに火を点けると、階段を数段下りた場所に身をひそめ、幻視で様子を探る。狙い通り、運動場前の屍人は焼却炉から煙が上がっていることに気がつき、移動し始めた。しばらくして焼却炉の前にやってきた屍人は、じっと、燃えるごみを見つめる。こうなった屍人はちよつとやそつとでは周囲の気配に気づかない。市子は静かに屍人の背後を通り抜け、運動場へと向かった。

校舎裏の運動場は校庭の半分ほどの広さだ。小運動場と言ったところだろう。残念ながら体育道具をしまっておくための倉庫があるだけで、他に出入口はない。

心臓の鼓動が早くなった。さっきの屍人が戻って来る。一旦倉庫に隠れよう。市子は倉庫のドアに手をかけたが、鍵がかかっているため開かなかった。裏に回り込む。窓があるが、そこも鍵が掛けられていた。しかし、窓の下にテニスラケットが立てかけられてあったので、いけないこととは思いつつ、ラケットで窓ガラスを割ると、鍵を

開けて中に入った。

倉庫の中は、ソフトボールやサッカーボール、ハードルやライン引き、綱引きの綱や玉入れのかごなど、たくさん物が所狭しと詰め込まれていた。もつとも、物が多い方が隠れるには都合が良い。市子は外からは見えない位置に腰を下ろすと、大きく息を吐いた。ここにいれば、しばらくは安全だろう。

息を整えた市子は、幻視で周囲の様子を探った。大きな銃を持った屍人は小運動場前に戻ったが、やはり焼却炉が気になるのか、しばらくするとまた様子を見に行き、そしてまた元の場所に戻るという行動を繰り返している。軽トラックに乗った屍人は相変わらず校庭を走り回り、何度もよみがえる屍人を何度も撥ね飛ばしている。

幻視をやめる市子。当分は大丈夫そうだが、ここもずっと安全である保証はない。どうかにかして別の場所に移動した方がいいかもしれない。何か手はないだろうか？ 市子は倉庫内を探した。体育や運動会用の道具の他に、車などを持ち上げるためのフロアジャッキと工具類、釘やハンマーなども置いてあった。

市子は――。

◇

それらには手をつけず、倉庫の隅に座り込んだ。とりあえずここは安全なんだから、今すぐ何かをする必要はない。それに、待っていていればあいつらはどこかに行くかもしれない。とにかく、今は少しでも休みたい。

市子は膝を抱えると、顔をうずめ、そのまま動かさずじっとしていた。



第五十八話 『虚無』 三沢岳明 夜見島／第1砲台  
跡 13:00:27

逃亡した部下の永井頼人を探す三沢岳明は、島北部にある要塞跡の丘の上で、大の字になって横たわっていた。じっと、空を見つめる。島へ上陸したときから、空はずっと厚い雲に覆われていた。だが、昼前から時折雲が途切れるようになった。その雲の切れ間から、逆さまに浮かぶ夜見島が見えている。それは、空に巨大な鏡があり、島全体を写したかのような光景だ。

「あっち側は遠いな……」

空を見つめながらつぶやく三沢。あの空に浮かぶ夜見島を見た瞬間、三沢は、あれこそが現実の夜見島であることを悟った。より正確に言うならば、それよりもさらに前、森の中に座礁した大型フェリーを探索中、山の頂に建つ鉄塔を見たときから、今いるここが現実の夜見島ではない可能性を考えていた。鉄塔の先は、雲の輪の中に吸い込まれるようにして消えている。あの鉄塔の先に現実の夜見島があることに、三沢は早くから気がついていたので。だから、あの鉄塔を登れば、この異界から脱出できるはずだ。

しかし、状況がそれを許さない。屍人共が行く手を阻み、部下は逃亡した。常用していた薬も切れ、気分は落ち込む一方だ。あらゆることがうまく回らない。何か行動を起こすたびに事態が悪化しているように思う。全てが悪い方向へ進んでいるのだ。それはまるで、島から脱出しようとする三沢を、地の底から伸びてきた手が掴み、留めようとしているかのようだ。

◇

遠くで、銃声が聞こえた。

反射的に起き上がる。小銃を持ち、周囲を見回した。敵の気配はない。銃声はかなり遠かったから、三沢を狙ったものではないだろう。

とは言え、いつまでもここに寝転がっているのは危険だ。行動するたびに事態が悪化するとはいえ、何もしないわけにはいかない。まずは永井を探さなければ。三沢は周囲を警戒しながら、丘の南へ移動した。

南側は三メートルほどの高さの擁壁となっており、東西へ繋がる道を見下ろすことができた。東に行けば、要塞地下の電気設備を管理する電灯所があり、西にはトンネルがあつて、他の地域へ通じている。

身体が震え、擁壁の上にいる三沢を見上げる視点が見えた。敵に見つかった。電灯所側の道を見ると、全身に黒い布を巻きつけ、ぼろぼろの蝙蝠傘こうもりを持った青白い顔の化物が、にやにや笑いながらこちらを見上げていた。屍人ではなかった。少し前から、あのにやけ顔の化物の姿を見ることが多くなっている。

あれは、早朝六時頃——三沢が社宅の屋上で屍人たちと戦っていた時間だった。島の北東部から再びサイレンが鳴り響き、これまでにないほど邪悪な気配が島を包み込んだ。それ以降、島は、屍人に変わりあの黒い布を巻きつけた化物がうろついている。正体は判らないが、屍人よりも頭が良く、人の言葉を喋り、言葉で惑わそうとする。ただ、極端に光に弱く、ライトを向けると悶え苦しむという弱点もある。屍人よりもさらに闇の存在——闇人とでも呼ぶべきだろうか。

三沢に気付いた闇人は、「おお、醜い人間のくせに、良い殻だねえ」と言いながら、走って向かって来た。もつとも、擁壁は一人でよじ登れる高さではないし、相手の武器は蝙蝠傘だけだ。三沢は銃を構え、容赦なく撃ち殺した。

再び身体が震える。今度は背後から三沢に迫る視点が見えた。同時に、ぱらら、と銃声が聞こえ、足元の土が何ヶ所か弾け飛ぶ。背後から銃撃された。三沢は振り返ると同時に引き金を引く。機関式拳銃を持った闇人だったが、その姿を確認するとほぼ同時に倒していた。

銃口を下げ、幻視で周囲を探る。地下や浜辺側など、多くの闇人の気配があつた。闇人以外の気配はない。この地域にはヤツらしかないようだ。ならば、もうここに用は無い。早く永井を探さなければ

ば。三沢は擁壁を飛び降りると、西方面へ走り、トンネルへ向かった。

第五十九話 『憎悪』 一樹守 ブライトウィン／甲板 15:04:44

森の中に座礁した大型客船の甲板で、一樹守は船室内へ入る扉を開けた。闇に包まれていた船室内に光が射し、隠れていたものがあらわになる。うねうねと蠢いていた芋虫状の化物・闇霊が数体、光を浴び、ドブネズミを踏み潰したかのような耳障りな叫び声を上げる。空はいまだ厚い雲に覆われており、陽射しは決して強くない。その上、闇霊は全身に黒い布を巻きつけている。それでも、闇霊たちは煙を上げ、なすすべもなく消滅してゆく。

「……そんなに光が苦手なのか？」

一樹は哀れに消滅する闇霊たちを冷たく見つめた。太陽の下で生きられないなど、まともな生き物ではない。まさに化物だ。怒りが湧いてくる。化物への怒りではない。こんな化物を地上に解き放ってしまった自分、それを阻止しようとして、逆に事態を悪化させてしまった自分に対する怒りだった。

「……化物め」

その怒りの矛先を、闇霊に向け。

「化物め……化物め、化物め！ 化物め!!」

一樹は憎しみと共に叫んだ。

木船郁子と別れた一樹守は、島の南部にある瀬礼洲地区の森の中で、この大型客船を見つけた。船体には平仮名で『ぶらいとういん』と書かれていた。ブライトウィン号——今から十九年前の昭和六十一年八月二日未明、夜見島沖を航行中、突如消息を絶ったフェリーだ。海上保安部は警察や自衛隊とも協力して周辺海域を捜索したが、生存者一名を発見したにとどまった。残り四十四名の乗員乗客、及び船体は、十九年経った今でも見つからない。

そのブライトウィン号が、この偽りの夜見島に存在している。しかも、十九年経つたとは思えないほど船体は奇麗だ。まるで、十九年の時の流れを止めていたかのような姿。あるいは、十九年の時を超えてここに現れたのか。どちらも科学的に考えてあり得ない話だ。到底現実的ではない。しかし、科学的とか現実的などという考え方は、いまの一樹には些細な問題だ。この偽りの夜見島では、科学的・現実的という言葉に縛られるのは、思考を停止するに等しい。

仮にこのブライトウィン号が十九年の時を超えて現れたとすれば、行方不明だった人々が船内にいるかもしれない。そう考えた一樹は、船内を調べてみることにしたのだ。

闇霊が消滅した通路を通り、反対側の扉から外に出る。そこは救命用のボートダビットがある右舷の甲板だ。陽の光をさえぎるためか全面黒い布が張られてあり、外の景色は見えない。それでも完全に光を遮ることはできないため薄明るく、闇霊の姿は無かった。一樹はそのまま通路を通り抜け、後部の入口から再び船室内に入った。正面に下り階段があり、その手前に船員専用という看板が立てられてある。右手側は客室へと通じるエントランスホールだ。どちらも陽の光が奥まで届かず、電気も消されているため真つ暗だ。一樹はライトを取り出し、エントランスの方へ向かった。

エントランスからは各客室へ向かうことができる。一階は大部屋で雑魚寝する三等客室で、階段を上がれば寝台部屋の二等客室だ。室内にはところどころ非常口を示す緑色の看板がぼんやり光っているだけで、他の明かりは点いていなかった。階段の近くには受付カウンターがある。一樹はカウンターの中に入り、ライトで照らして明かりのスイッチを探した。すぐに見つけることができたが、オンにしても明かりは点かなかった。船内放送用のマイクや防犯カメラのモニターのスイッチも入れてみたが、どれも動作しない。主電源が落ちているようだ。光を嫌う闇人が、船全体のブレイカーを落としたのかも

しれない。

カウンター内を調べていると、心臓の鼓動が激しくなった。近くに敵がいる。幻視で探ると、一階の三等客室に闇人の気配を見つけた。自衛隊員が使用する小銃を持っている。遊園地に現れた直後は銃の使い方を知らなかった闇人だが、一樹たちが園内を探索しているわずかな時間で学習してしまった。もう銃を使えないという考えは捨てた方がよい。一樹が持っている武器は道端で拾った鉄パイプだけだ。こんなもので銃相手に戦うのはあまりにも無謀だろう。闇人はエンランスの方へ向かって来る。一樹は一旦身を隠すことにした。

カウンターの途中でしゃがみ、ライトを消す。幻視能力の影響で暗闇でもぼんやりと見ることはできた。息を殺して敵が過ぎ去るのを待つ一樹。ふと、カウンター内の棚を見ると、『落し物』と書かれた箱があり、その中に拳銃が入っていた。あまりにも場違いなので子供が落とした玩具かとも思ったが、手に取ってみると重量も質感も間違いなく本物だ。弾も入っている。闇人が律儀に落とし物として届けたのだらうか？ 経緯は判らないが、これで戦いはかなり楽になる。ありがたく使わせてもらおう。

闇人がエントランスホールに入ってきた。一樹は身をひそめたまま幻視で様子を探る。ホールの中央まで来た闇人は、周囲を見回した後、三等客室の方へ戻り始めた。一樹は幻視をやめ、カウンターから出て静かに後をつける。ある程度間合いを詰めたところで銃を構え、引き金を引いた。三発撃ったが、命中したのは一発だけだった。やはり暗闇だと狙いを定めにくい。背後から銃弾を喰らった闇人は大きくのけ反ったものの倒れることはなく、振り返って小銃を構えた。一樹はライトのスイッチを入れ、闇人の顔に当てた。闇人は顔を押しえて悶える。そこへさらに銃弾を撃ち込む。光がある状態ならば狙いを定めやすい。今度は三発とも命中させ、闇人は甲高い悲鳴と共に倒れた。

なんとか闇人を倒すことができたものの、銃弾の三分の二を使ってしまった。予備の弾は落し物入れには無かった。倒した闇人の持ち物を探ってみる。ウエストポーチの中に計十八発の弾を見つけた。

運よく一樹が持っている銃に使用できるものだったので、遠慮なく貰っておく。残るは小銃だ。一樹は海外の射撃場で拳銃を撃った経験はあるものの、さすがに小銃は扱ったことがない。素人が適当に使うのは危険だろう。とは言え、このままにしておくのも危険だ。闇人も屍人と同じく、一度倒しても新たな闇霊が憑りつけばよみがえる。武器を奪っておけば、復活した時の脅威は格段に減るはずだ。一樹は鉄パイプをその場に置き、小銃を取った。

エントランスホールを離れ三等客室へ入る。三等客室は大部屋が四つある。ひとつひとつ探索していくが、闇にまぎれて闇霊が襲ってくるだけで、生存者の姿は無かった。一階の搜索を終えた一樹は二階へ上がる。二階の二等客室は、一部屋に二段ベッドがふたつずつ設置されている四人部屋だ。一部屋一部屋確認していくものの、一体の闇人と無数の闇霊が襲ってきただけで、やはり生存者の姿は無かった。闇人は銃で倒し、闇霊は銃で殴ったりライトの光を当てて倒した。

一階と二階の客室を搜索し終えた一樹。生存者の姿は無い。オカルト雑誌の編集者としてはフェリー消失の謎を探るべく探索を続けたいところではあるが、今の状況ではそこまでの余裕はない。生存者がいないのならば長居は無用だ。一樹は船を下りることにした。

一樹が船に乗り込んだのは左舷甲板の乗降口だ。タラップは無く、結び付けられた縄梯子を使って乗り込んだのだ。他に乗降口は無いようなので、またそこへ行かなければならない。エントランスホールへ戻る一樹。しかし、ホールから左舷甲板へ出る扉は施錠されていて開かなかった。そうなると、右舷側から地下に下りて回り込まなければならぬ。一樹はエントランスを後にすると、船員専用の看板が立てられた階段を下りた。

階段の中ほどまでおりたところで鼓動が激しくなる。闇人がいるようだ。幻視で様子を探ってみる。細長い通路にそれらしい気配を見つけた。すぐそばに、『機関制御室』というプレートが貼られた扉がある。どうやら階段を下りた先の通路のようだ。だが、どうも様子がおかしい。その視点は、扉のプレートやノブを見上げる格好になっている。視点の位置が低いのだ。それも、床すれすれと言っていいくら

いの位置である。視点の主は「髪飾り……お父様の髪飾り……」とつぶやきながら通路をうろうろしている。女性の声だった。髪飾りを落として探しているのだろうか？ そうだとしても、コンタクトレンズじゃあるまいし、床に這いつくばって探すようなものではないだろう。

幻視をやめる一樹。相手は長い間地の底にいた化物だ。ヤツらのやることを気にしても仕方がない。それより、あいつをどうするかだ。ずっと通路に這いつくばって髪飾りを探しており、他の場所へ移動する気配はない。通るためには倒すしかなさそう。幻視では武器を確認できなかったが、仮に小銃を持っていても、ライトで目をくらませて拳銃を撃てば倒せるだろう。一樹は階段を下までおりる。右手側に開けっ放しの扉があり、闇人はその先、通路の中央付近にいる。一樹は通路に踏み込むと、中央付近にライトを向けた。「ぎゃあー」と悶え苦しむ声がある。すかさず距離を詰め、銃を撃とうとした。

「——!?!」

思わず足を止める一樹。一樹が想像していた這いつくばった闇人は、そこにいなかった。いや、闇人はいるのだが、それは人型の闇人が這いつくばっているのではなく、闇人が四足歩行に姿を変えたかのような姿だった。ドラム缶を横倒しにしたような巨大な寸胴で、かつて手だったと思われる前足は鳥類の足のように変化している。それだけでも奇怪極まりないのだが、胴体に埋め込まれたかのような顔は、あろうことか人間の顔の二倍以上の大きさがある。

四足よっあしの闇人は光の不意打ちから立ち直ると、獣のごとく突進してきた。人をはるかに凌駕した速さだ。あり得ない姿の化物があり得ない速さで迫っている。驚きと戸惑いと恐怖が入り混じった感情の中、それでも一樹は本能的に引き金を引いた。人は危機的状況に陥ると常識を超えた力を発揮するというが、そのせいだろうか、五発撃った弾は、全て四足闇人に命中した。だが、闇人の突進は止まらない。それどころか、弾は全て弾き返され、かすり傷ひとつ負っていない。さらに残りの四発を全て撃ったが、結果は同じだった。



弾を撃ち尽くした一樹。リロードするような余裕は無いし、銃が効かない相手を殴って倒せるとも思えない。瞬時にそう判断し、階段を駆け上がる。相手は人を凌駕する速さで走る化物だ。逃げられるかどうかは判らないが、どんなに絶望的な追いかけっこでも、逃げるしか道は無い。

だが、相手はその速さが仇となり、角をうまく曲がれず壁に激突して足が止まった。さらに、鳥のような前足ではうまく階段を踏めないのか、かなりもたもたと階段が上がっている。一樹はその隙にエントランスホールに逃げ込むと、カウンターの中に隠れた。息を殺して様子を伺う。

ホールに四足闇人が駆け込んで来た。一樹の姿を見失った四足闇人は、周囲を見回す。

◇

四足闇人はしばらくホールの中央で周囲を見回していたが、諦めたのか、また「髪飾り……お父様の髪飾り……」と言いながら、出入口の方へのそのそと歩いて行った。

一樹はカウンターからそつと顔を出し、四足闇人の後ろ姿を確認する。赤い着物に草履履きだった。その格好には見覚えがあつた。一樹が冥府へと下りる前、岸田百合を執拗に追いかけていたあの着物姿の女だ。そう言えば、顔も声もそうだったように思う。

もつとも、元の間人が誰であろうと、それは大した問題ではない。重要なのは、四足闇人の正面は、寸胴に鳥のような前足にあり得ない大きさの顔という姿だが、後ろ姿は、人が四つん這いでいるのとあまり変わらないということだ。つまり、上半身は大きく形態を変えているが、下半身はほとんど変化していないのである。ならば、後ろから攻撃すれば効果があるかもしれない。一樹は銃に弾を装填すると、カウンターを出て四足闇人の後を追った。たどたどしい足取りで階段を下りる四足闇人に銃を向け、充分に狙って引き金を引いた。三発撃ち、そのうち二発が背中命中する。四足闇人は悲鳴を上げて大きく

のけ反った。思った通り、後ろからの攻撃は有効だ。一樹は相手に振り返る間を与えずさらに引き金を引く。残りの銃弾を全て撃ち込むと、四足闇人は耳障りな金切り声をあげて倒れた。

大きく息を吐き、銃を下げる一樹。なんとか倒すことができたが、異様な姿といい、正面への攻撃が効かないことといい、かなり恐ろしい相手だった。

一樹は再度銃に弾を込める。残りの弾は少ない。この四足闇人がよみがえったり、同じヤツが他にもいたら危険だ。早々に立ち去った方がいいだろう。一樹は階段を下り、通路を進む。通路の中央には『機関制御室』のプレートが貼られた扉と、その反対側には『機関室』のプレートが貼られた扉もあるが、どちらも用は無い。一樹は扉の前を通り過ぎ、反対側の階段を上がって左舷甲板に出た。乗降口の縄梯子は、一樹が乗りこんだ時のまま結び付けられている。一樹は縄梯子を下り、ブライトウイン号を後にした。

第六十話 『闇人』 木船郁子 四鳴山／離島線4号  
基鉄塔 20:19:42

夜見島のほぼ中央、鳩の形で例えると背中から尾羽にかけての地域に、島で最も高い山・四鳴山がある。標高約百メートル、島のどこからでも見えるこの山は、古くより神が住む山とされてきた。島民は、朝目覚めた後と夜眠る前、あるいは、一日の仕事を始める前と終えた後など、山に向かって祈りを奉げることが多い。皆、四鳴山に畏敬の念を抱いて暮らしてきたのだ。

山頂にはかつて『滅爻樹』めつこうじゆと呼ばれる神木が存在していた。古文書によると、その高さはなんと二百メートル以上に及んだとされている。日本で最も高い木が約六十メートル、世界で最も高い木でも約一〇メートルであることを考えると、まさに、神の力が宿りし木と言えるだろう。

もつとも、現在の四鳴山に滅爻樹はない。その存在を確認できるのは古文書の中だけだ。それによると、今から約一三〇〇年前、突如山頂から消えてしまったようだ。消えた理由は定かではないが、神の世界へ戻った、人の目には見えない存在となった、そもそも我々人間の住む世界の存在ではなかった、など、様々な解釈がされている。

現在は存在しない滅爻樹だが、神の世界から流れてくるのか、枝だけは現在でも落ちている。枝には邪気・不浄を浄化する力があるときれ、島民は一人一本必ず所持していた。島で赤子が生まれた際、太田家の当主が枝を取りに行き、銘を刻んで授けるのである。そして、島民が死を迎えると、死者の身体には各々の枝が刺されて葬られる。死者の身体を穢れから護り、安心して神の世界へと旅立ってもらうための儀式だ。

このように、長きに渡り島民から聖地とされ、特に滅爻樹が生えていた山頂付近は太田家の当主以外は決して足を踏み入れてはいけないとされてきたが、昭和三十年代、島に金脈が発見されると、インフラ整備のため山頂付近に巨大な鉄塔が建てられることになった。離

島線4号基鉄塔である。本土より遠く離れたこの島に電力を供給するため、その高さは約二百メートルと山よりも高い。当然、聖地とされる四鳴山にそんなものを建てることを、島民たちが許すはずもない。建設当時は怪我人や死者が出るほどの反対運動が行われたが、阻止することはできず、建設は強行された。元々島民は外部との接触を嫌い、閉鎖的な生活を送ってきたが、この鉄塔建設を境に、島民の余所者へ対する感情は憎しみへと変わった。鉄塔建設から四十年以上。金鉱は閉鎖され、ほとんどの余所者が去った現在も、その憎しみは消えていない。

☆

蒼ノ久集落で一樹守と別れた木船郁子は、四鳴山の頂上付近に来ていた。すぐ目の前に鉄塔がある。あまりにも巨大なこの鉄塔は、真下から見上げると、はるか天空の彼方から見下ろされているような威圧感があり、それだけで郁子の心は委縮してしまいそうだった。

夜見島の上空は、相変わらず厚い雲に覆われている。しかし、鉄塔の周囲だけは丸く穴が空いており、周辺の雲はその穴に吸い込まれるように消えていた。穴の向こう側には、逆さまに浮かぶ夜見島がわずかに見えている。現実的にはあり得ない禍々しい光景だ。さらには、遠くから見ている時は気付かなかったが、この場に立ってみて、鉄塔がいくつもの建物や大きな木と一緒に存在していることに気がついた。鉄塔と接触するほどの近さに大きなビルが建ち、木は鉄塔に絡みつくように生えている。上の方にはいくつか家屋も見える。鉄塔と巨木と建物が融合し、ひとつの存在となったかのような姿だった。

なぜこのような状態になったのか、郁子には判らない。恐らく考えなくてもよいことだろう。今の郁子にとって重要なのは、この忌まわしき島から脱出することだけだ。

暗くなるにつれ、島中に散らばっていた闇人が鉄塔に集まりつつあった。蒼ノ久からこの四鳴山に来るまでの間、郁子は多くの闇人に感応を使い、ヤツらの心の中に入り込んだ。その結果、判ったことが

ある。ヤツらは陽が落ちるのを待っていた。この鉄塔を使い、現実世界へ侵攻しようとしているのだ。つまり、鉄塔は現実世界の夜見島へと繋がっている。あの逆さまに浮かぶ夜見島こそが本物なのだ。だから、鉄塔を登れば、元の世界へ帰れるはずだ。

背後で土を踏む音がした。振り返ると、生まれて一度も陽の光を浴びたことがないかのような真つ白な肌の少女が立っていた。

——岸田百合！

とつさにゴルフクラブを構える郁子。一樹守を誘惑して地の底へと連れて行き、異形の生物をよみがえらせた女だ。

だが、郁子がゴルフクラブを構えても、相手は敵意を見せなかった。郁子に対して身構えるわけでもなく、逃げるでもなく、ただ静かに郁子を見つめる。そう言えば、敵意を持った相手が近くにいる際の警告を促すような鼓動も無い。それに、どうも岸田百合とは雰囲気が違うように思う。現れた少女はネックレスやブレスレットをたくさんつけた派手な格好をしている。それは、三上脩と一樹守を夜見島へ案内する際、無理矢理船に乗り込んできた女と同じ服装だ。郁子のセンスでは理解できない浮ついた格好だが、にもかかわらず、少女の佇まいにはどこか成熟した雰囲気がある。見た目は郁子と同年代だが、一回り以上年上の女性と対峙しているかのようだ。

「あなただれ？　岸田百合じゃないの？」警戒は解かず、ゴルフクラブを構えたままキツイ口調で言う郁子。

「……それはたぶん、あたしの妹ね」岸田百合と同じ顔をした少女は、静かな口調で答えた。

「妹……それは、鳩の一人ってこと？」

強くゴルフクラブを握る郁子。地の底に潜んでいた異形の生物は、地上の様子を探るため、鳩と呼ばれる使いを何度も飛ばしたという。その最後の一人が岸田百合だ。それを妹と呼ぶからには、この少女は鳩の一人ということになる。

「そうね」と少女は頷いた。「でも、あたしはあなたの敵ではないわ。少なくとも、今は」

そう続けた少女。敵意はなさそうだが、だからと言って友好的でも

ない、そんな、静かで冷たい口調だった。

「今は？」 郁子は首を傾けた。

「ええ。あなたがあたしの邪魔をしない限り、あたしもあなたをどうこうするつもりはない。まあ、たぶんあなたは大丈夫。もうしばらく目覚めることはなさそうだから」

「なにを言ってるのか判らないんだけど？」

「判らないなら判らないままの方がいいわ」少女は一瞬目を伏せたあと、鉄塔を見上げた。「それより、鉄塔に登るつもり？」

「ええ」

「そう……なら、これを持っていきなさい」

そう言って少女が差し出したのは、長さ三十センチほどの木の枝だった。ところどころコブのように膨らんで太くなっているが先端は鋭い。端には、藤田茂という名が書かれた札が付いていた。

「それって、滅爻樹ってやつ？」

郁子が訊くと、少女は「そうよ」と頷いた。死者に神木の枝を刺して弔う風習があることは郁子も知っていたが、実物を見るのは初めてだ。

少女は続ける。「これを刺せば、その身体には屍霊も闇霊も憑りつくことはできない。名前が書いてあるけど、基本的には誰に使っても同じよ。ただし、二度は使えないから、刺す相手は慎重に選んでね」差し出された枝を、郁子は困惑しながらも受け取った。

少女は「じゃあ、頑張ってるね」と言い、去ろうとする。

「ちよつと待って」と、郁子は止めた。「あなたはどうするの？」

少女は振り返った。「あたしは、脩を助けないといけない」

その瞬間、何の感情も読み取れなかった少女の瞳に、初めて感情が宿った。それは、強い決意。

「脩って、三上脩のこと？」

「ええ。あたしの大切な存在。あの子がいるから、あたしは自分を失わないでいられるの」

「……………」

少女が言うことは相変わらずよく判らないが、そこには微妙な違和

感がある。郁子はこの少女のことも三上脩のこともよく知らない。二人がどんな関係なのかは判らないが、少女が「大切な人」というかにはそうなのだろう。だが、どう見ても二十歳に満たない少女が、十歳以上年上であろう三上脩のことを「あの子」と呼ぶのには、どうにも違和感を覚える。

「あなたも、大切な人が見つかるといいわね」

そう言って、少女はほほ笑んだ。ずっと敵か味方が判らない口調だったが、初めて優しさが宿った気がした。

「さあ、早く行きなさい。もうすぐお母さんが来る。あなたのこと、すごく怒ってるみたいだから、見つかったら、ただじゃすまないわ」

お母さん——あの異形の生物のことだろう。地の底で一樹守を捕らえようとしていた異形の生物を、郁子は感応を使って一時的に動きを封じた。あのととき、確かに異形の生物は郁子に対して激しい怒りの感情を抱いていた。

少女の言うことは要領を得ない。鳩であることは間違いないさそうだが、三上脩を助けるといふからには、あの異形の生物と敵対するつもりなのだろう。それは、子が親に逆らうようなものだ。なぜそこまでして三上脩にこだわるのか。なぜ郁子に滅爻樹を授けたのか。判らないことだらけだ。

だが、それでも。

少なくとも今は敵ではない——その言葉は、信じていいように思えた。

郁子はゴルフクラブを下ろした。「判った。ありがとう」

少女はもう一度優しく微笑むと、郁子の元から去っていった。その姿が森の中に消えるまで、郁子はずっと見つめていた。

——よし。

決意を新たに、鉄塔へ向かう。

鉄塔を登るためには内部の階段を使わなければならないが、鉄塔の周囲は鉄条網付きのフェンスに囲まれている。そのままでは入ることができない。ただし、現在は鉄塔に密接するほどの位置に高い建物が建っている。まずは建物を登り、途中から鉄塔に渡ることは可能

だ。建物には、『夜見島金鉱業所』という看板が掲げられている。本来は瓜生ヶ森の金鉱採掘所から少しの東に行った場所にある建物で、地下深くの金を採掘・加工するための施設だ。主に、『鉱業所』『豎坑櫓』『事務棟』の三つの建物からなる。郁子がいるのは鉱業所の建物が密接している鉄塔の東側だ。鉄塔と建物のわずかな隙間に鉱業所の非常階段があるので、それを登った。

階段は、鉱業所建物の外壁に沿って続いている。全七階建ての建物だが、残念ながら四階より上は階段が崩れ落ち、それ以上は登れなかった。非常階段には鉱業所内部に入るためのドアもあるが、向こう側から鍵が掛けられているため開かない。どうしたものかと周囲を調べる。南側から下を覗くと、少し下に豎坑櫓の屋上が見えた。高さは一・五メートルほど、幅は数十センチもないので、充分跳び降りることができらるだろう。郁子は豎坑櫓の屋上へ飛び降りた。

豎坑櫓とは、巨大なケージを上げ下げするための建物で、地下深くの鉱脈へ鉱員を下ろしたり、鉱脈から金を運び上げたりするために使用されたものだ。これも、本来は瓜生ヶ森の金鉱採掘所にある建物で、鉱業所と併設する形で建っている。そのため、この屋上から連絡橋を渡れば鉱業所に行くことができた。郁子は連絡橋を渡って鉱業所へ移動する。

◇

鉱業所内部に入るための扉は鉄格子製のもので、外側から南京錠で閉ざされていた。それ自体はかなり錆びついているため、ゴルフクラブで何度か叩けば壊れそうだ。しかし、扉の向こう側に大きなロッカーが置かれてあり、出入り口を塞いでいた。郁子の力では動かせそうにない。ここから入るのは無理なようだ。他に道は無いだろうか？ さらに周囲を調べると、豎坑櫓のさらに隣に事務棟があり、そこへも連絡橋を使って渡ることができらるようだ。郁子はそちらの方へ向かった。

だが、びくん！ と身体が震える。同時に、豎坑櫓の屋上にいる自



分を、別の建物の屋上から見下ろす視点が見えた。闇人に見つかった。見上げると、事務棟の屋上に人型の闇人が立っているのが見えた。事務棟の屋上はここからさらに二階分の高さだ。少し安心する郁子。ここから見る限り闇人が何の武器を持っているのかは定かでないが、少なくとも狙撃用の大きな銃は持っていない。事務棟内を通ってここまで来るとしてもかなり時間がかかるはずだ。その間に移動しよう。郁子は気にせずそのまま行こうとした。

しかし、どさりと音がして、さっきの闇人が目の前に現れた。十メートルはある高さを飛び降りたのだ。闇人は勢い余って倒れたが、すぐに起き上がり、郁子を見てニヤリと笑った。

「張り込みも楽じゃねえよ」

そう言つて拳銃を取り出し、構える。その声と姿に見覚えがあった。一樹守と遊園地の石碑を壊した際、花壇広場にいた警官の闇人だ！

ぱんつ、と、運動会の徒競走でよく聞く乾いた音がした。それほど大きな音ではなかったが、音の大きさからは想像もつかないほどの強い衝撃が郁子の左肩を貫いた。あまりの衝撃に後ろに吹き飛んで倒れる。左肩に、内部から小さく爆発したかのような穴が空いていた。そこから、どろりと血が流れ出る。さらにもう一度銃声がして、今度は右足に鋭い痛みが走った。これは腿を掠めただけだったが、それでも肉が大きく抉られ、血飛沫が飛び散った。

「逃げられたら始末書ものだからなあ」

銃を構えたまま近づいて来る警官闇人。このままではやられる。だが、足を撃たれて思うように逃げられなくなったし、そもそもこの屋上には逃げるような場所がない。もはやゴルフクラブで戦えるような状況でもない。感応を使うしかない。郁子は目を閉じ、警官闇人の心の中に入り込んだ。

——止まって！

指示を出すと、警官闇人はすぐに立ち止まる。感応に成功した。しばらくの間この警官闇人を自由に操ることができる。この場から追い払うことは簡単だ。しかし、どうやらこの警官闇人はかなり郁子に

執着しているようだ。遊園地で殴り倒したのを根に持っているのかもしれない。だとしたら、たとえ追い払ったとしてもしつこくつけ狙われる可能性がある。どうするべきか……。

——これを刺せば、その身体には屍霊も闇霊も憑りつくことはできない。

鳩の少女が言ったことを思い出す。彼女から貰った滅爻樹の枝を刺せば、そいつはもう復活することはできない。枝は誰にでも有効だ。少女は、刺す相手は慎重に選ぶよう言っていたが、慎重になるあまり機会を逃しては意味が無い。いや、恐らく今がそのときだ。

——後ろを向いて！

警官闇人に指示を出す郁子。言われた通り、警官闇人は郁子に背を向ける。

郁子は感応を解くと、滅爻樹の枝を取り出した。足の傷から血を流しながら立ち上がり、警官闇人が振り向くよりも早く、その背中に枝を振り下ろした。枝は先端こそ尖っているものの、細くて古いものだ。それでも、枝はほとんど抵抗なく警官闇人の背中に刺さった。金属をこすり合わせるような甲高い悲鳴を上げる闇人。枝から根のようなものが生え出し、闇人に絡みつく。闇人の全身から青い炎が燃え上がった。同時に、枝が成長してゆく。細い枝が太い幹となり、いくつも枝が伸び、葉が茂る。やがて、枝は一メートルほどの高さに成長した。

警官闇人は郁子の方を見て、すがるように左手を伸ばし。

「……そうか……あんたが……あの……」

謎の言葉を残して、警官闇人は燃え尽きた。

呆然とその光景を眺めていた郁子だったが、やがて我に返る。闇人の身体は消滅し、一本の木と化していた。人間の身体も、その身体に憑りついていた闇霊も、完全に消滅してしまった。これが、滅爻樹……神の力宿りし樹の力。

ふと、郁子は思う。この滅爻樹を授ける『神』とは、いったどのような存在なのだろう？ 闇人や屍人などの闇の住人と敵対するかのよう存在だ。ひよつとしたら、太古の昔、闇に閉ざされていた世界

に光の洪水を起こし、闇の住人どもを地上から追い払ったとされる創造主と、同じ存在なのかもしれない。

考えを振り払う郁子。そんなことを考えている場合ではない。今は鉄塔を登ることが最優先だ。

傷の状態を確認する。左肩と右腿を撃たれたが、幸いこの島では不思議な力で傷が治るのが早い。肩の傷はかなりの重傷なので少し時間はかかりそうだが、腿の傷はもう血が止まり、塞がりつつある。ゆっくり歩くくらいなら問題ない。郁子は足を引きずりながら事務棟へ向かった。

ぐしゃり、と。

背後で、なにか大きな物が潰れたような音がした。

振り返ると。

——え？

すぐ後ろに、人が倒れていた。

さつきまで、この豎坑櫓の屋上には郁子以外誰もいなかった。事務棟から跳び降りてきた警官闇人は木と化したままだ。いったい、どこから現れたのだろうか。

その人は、奇妙な格好をしていた。服装がおかしいという意味ではない。手足が、あり得ない方向に曲がっているのだ。右腕の関節は通常と反対側に曲がり、左腕はねじ曲がっていた。右足は関節など存在しないはずの脛の部分から折れ曲がり、左足に至っては根元からちぎれかけている。操り人形の糸を切断したらこんな姿になるのだろうか——そんなことを思う。

胴体は、さらに奇妙なことになっていた。内部から、白く細長いものが何本も飛び出しているのだ。白いとは言っても、どれも、赤くドロドロとした液体にまみれているのだが。

頭部だけは、特に変わった点は無い。地面に赤くドロリとした液体が輪になって広がっているのと、その顔に見覚えがあるということを除いては。

——一樹君？

それは、蒼ノ久集落で別れた一樹守の顔だった。顔だけは、一樹守

だった。首から下は、なんだかよくわからない、言うなれば、肉の塊のようなもの。

「……一樹君……どうした……の……?」

郁子は、まるで思考が停止したかのごとく状況を理解できなかった。恐る恐る声をかけてみる。一樹は、郁子の声になんの反応も示さなかった。ただ、かっと思開かれた瞳が、虚空を見つめているだけだ。

「……一樹君……」

少しずつ。

停止していた郁子の思考が、動き出す。

「……一樹君……返事……してよ……」

少しずつ、状況を理解しはじめる。

「……一樹君……返事してつてば……」

郁子と別れた後、一樹も鉄塔の先にあるのが本当の夜見島だと気づき、登ろうとしても、おかしくはない。

「一樹君！ 返事して!!」

だが、それを、闇人に阻まれた。

「一樹君！ 一樹君!!」

そして——鉄塔から、突き落とされた。

「……一樹……君……」

郁子と別れた一樹は、一人で鉄塔に登り、闇人に阻まれ、そして、鉄塔から落とされたのだ。

「……いや……一樹君……いやあ……」

それが一樹守の姿だと認めたくなくて、郁子はぐるぐると首を振る。そうすることで、これが偽りの光景となることを願って。もちろん、どんなに激しく首を振って否定しようとも、冷たい肉塊と化しつつある一樹の身体は、そこにある。

「……いやあああ!!」

叫んだ。叫ぶことで、全てを否定したかった。もちろん、どんなに叫んでも、なにも変わらない。

なぜ、こんなことになってしまったのだろうか？ 一樹が一人で鉄塔に登らなければこんなことにはならなかったのだろうか？ 蒼ノ久

集落で一樹と別れなければこんな結果にはならなかったのだろうか？ 三逗港で彼が夜見島へ向かうのを止めておけばこんなことにならなかったのだろうか？ 判らない。判ったところで、もうやり直すことはできない。

郁子は泣いた。叫んだ。泣いて、叫んで、一樹の身体にすがりつき、抱きしめた。抱きしめて、泣いた。泣き続けた。

不意に。

——俺に構わず——君だけでも——逃げるんだ——。

一樹の声が聞こえた。

顔を上げ、一樹の顔を見る。一樹の目は相変わらず虚空を見つめている。唇が動いた様子もない。だが、確かに今、彼の声が聞こえた。いや……聞こえたという感じではなかったように思う。それは、心の中に響いたような声。一樹の心の声が、郁子の中に流れ込んだかのような声だった。

それで気がついた。一樹を抱きしめたとき、肌と肌が直接触れてしまったのだ。肌が触れることで、彼の心の声が流れ込んできたのだ。つまり、彼はまだ生きている！

「一樹君！……しっかりと！……一樹君!!」

あらん限りの声で呼びかける郁子。反応は無い。だが、希望はある。この偽りの夜見島では傷の治りが早い。どんなに酷い傷でも、時間さえあれば治ってしまう。一樹が死んでいないのであれば、まだ大丈夫なはずだ。呼びかけ続け、彼の命を繋ぎ止めれば、時間はかかるかもしれないが、きつと完治する。

そう信じて。

郁子は、彼の名を呼び続ける。

びくん、と、身体が震え。

遙か頭上から、郁子と一樹を見下ろす視点が見えた。

——こんなときに！

ゴルフクラブを持ち、立ち上がる郁子。何としても、一樹を護らなければならぬ。たとえ相手が銃を持っていようとも、絶対に、彼を護ってみせる。

強い決意と共に、相手の方を振り返った。

大きい——あまりにも大きな身体が、空を舞っていた。

海洋生物を思わせる巨体に、岸田百合と同じ顔——地の底から蘇った、異形の生物。

《見つけたぞ、因子を持つ者よ》

異形の生物は、美しい岸田百合の顔を醜く歪め、忌々しげに声を発した。《分裂体の分際で、よくも我の邪魔をしてくれたな》

ゆつくりと下りてくる異形の生物。最悪のタイミングで、最悪の相手に見つかってしまった。ゴルフクラブなんかで戦える相手ではない。それでも、逃げるわけにはいかない。一樹守を護らなければならぬ。郁子は、ためらうことなく感応を使った。異形の生物の心の中に入り込もうとする。

だが、即座に弾き返された。郁子の身体は見えない力に吹き飛ばされた。

《そのような小賢しい技が、何度も通用すると思うな》

激しくコンクリートの床に叩きつけられても、それでも郁子は立ち上がる。彼を護るために。

《ふん。小癩こしやくなヤツめ。我が手で八つ裂きにしてやりたいところではあるが……そなたよりも、さらに許し難い者がおるようじゃな》

異形の生物が横を向いた。視線が郁子から外れ、別のものを捕らえている。

《……子らよ、その不完全品を始末しておけ》

よそを向いたままそう言い残すと、異形の生物は飛び去って行った。

代わりに。

ビルから、鉄塔から、あるいは階段から、大勢の闇霊や闇人が現れ、集まってきた。人型の闇人の他に、四足歩行をする闇人や、巨体の闇人もいる。あつという間に、何十体もの闇人達に囲まれた。数が多すぎる。ゴルフクラブはもちろん、例え銃を持っていたとしても太刀打ちできる数ではない。感応は一人にしか使えないし、感応中は郁子自身が無防備になってしまう。

郁子を困んだ闇人達は、ニヤリと笑うと。  
一斉に、襲いかかってきた。

☆

同時刻――。

☆

暴言と共に上官の元を去り、一人、夜見島をさまよっていた永井頼人は、蒼ノ久集落で三沢岳明に見つかり、説教されていた。憎らしい相手だが、今は我慢するしかない。三沢の元を去り、一人で行動してみたものの、どこに向かえばいいか、何をすればいいか、まったく判らなかったのだ。自分一人では何もできない。そのことを悟った永井は、極めて不本意ではあるが、もう一度、三沢と共に行動することにした。忌々しいことではあるが、それでも、この得体の知れない島を一人で行動するよりはマシだろう。

☆

潮降浜の学校の大道具倉庫に逃げ込んだ矢倉市子は、今もそこに隠れていた。学校内から化物どもがいなくなるのを待っていたのだが、いなくなるどころか、かえって多くなっている。それも、ずっと市子を襲ってきたゾンビのような化物・屍人ではなく、全身に黒い布を巻きつけた青白い顔の化物だ。このままでは身動きが取れない。誰かが助けに来てくれるのを待つしかないのだろうか？　しかし、いったい誰が助けに来てくれるだろう？　希望は、無い。

☆

一人で勝手にどこかへ行ってしまった喜代田章子を探す阿部倉司

は、瓜生ヶ森にある夜見島金鉱採掘所の休憩室から上機嫌で出てきた。たった今、人生最大の危機を乗り切ったところだ。実にすがすがしい気分である。鼻歌を歌いながら煙草を取り出して啜えたが、ライターを落としていたことを思い出した。舌打ちをして、煙草を戻す。朝からずつと煙草を吸っていない。これは、占い女を探すより、まずライターを探すべきだろう。どこかに百円ライターでもないだろうか？ あるいはマッチでも、最悪ガスコンロでも構わない。とにかく火だ。阿部は煙草を吸う手段を求め、採掘所内を探索し始めた。

☆

四鳴山の山頂にある離島線4号基鉄塔のふもとで、加奈江は彼女が母と呼ぶ存在と対峙していた。加奈江の手には、三上家の庭の物置で見つけた謎の骨が握られている。骨は、その姿を微妙に変えていた。先端が鋭くなり、骨身が刃のようになっていた。それは小太刀のような形だ。加奈江は本能的に悟る。これを使えば、たとえ母と言えどただではすまない。その証拠に、小太刀と化した骨を見た瞬間、母の表情は明らかに変わった。小太刀を恐れているように見える。一定の距離を保ち、ずつと加奈江を睨んだままだ。警戒し、手が出せないのだ。ただ、手が出せないのは加奈江も同じだった。脩が、まだ母の体内に取り込まれたままだ。仮にこの小太刀を使って母を倒せたとしても、脩がどうなるかが判らないのだ。母の地上侵攻を阻止できても、脩を救えないのでは意味が無い。

加奈江の迷いに気付いた母は、唇の端を吊り上げ、不敵に笑った。空に向かって甲高い声で鳴く。

その声に応じるかのように、空から光の刃が落ちてきて、加奈江の身体を貫いた。

☆

昭和八十年八月四日、深夜零時。



闇の住人達の、地上への侵攻が始まる――。

高波により大きく傾いたブライイトウィン号から投げ出され、矢倉市子は海の底へ沈もうとしていた。転落してから、すでに数分が経過している。意識は薄れ、もはや、もがくような力はない。なすすべもなく、ただ沈んでいくだけだった。まぶたを閉じる力さえ無い。うつつすらと開かれた眼には、血のように真っ赤に染まった海が映っていた。意識がもうろうとしているから、こんな風に見えるのだろうか。その不吉な色に、地獄へと堕ちているような気分になる。

——ああ、あたし、死ぬんだ。

自分でも意外なほど冷静に、そう悟っていた。怖い、という気持ちは、あまりない。怖さよりも、寂しさや悲しさが勝っていた。こうしてひとりで海の底に沈んでいくことが寂しい。何日か後、近くの海岸に流れ着き、誰かが見つけてくれるのなら、まだいい。海の底に沈んだまま、永遠に誰にも見つけてもらえない可能性だつてある。そうなったら、もう二度と大好きな人たちに会えない。お父さんやお母さんと、おじいちゃんやおばあちゃんと、中島君や先生ら学校のみんなと、そして、ノリコと……みんなと会えなくなるのが、ただ悲しい。

市子は、わずかに残った力で右手のブレスレットを握りしめた。これだけは、手放すわけにはいかない。碧色の石があしらわれたそのブレスレットは、市子のもではなかった。市子のブレスレットは朱色の石があしらわれたものだ。この碧色のブレスレットは、同じテニス部で親友のノリコのものであった。以前、二人の友情の証にと、お揃いで買いそろえたものである。市子のものである朱色のブレスレットは、今は持つていない。そう言えば、あれはどこにあるのだろうか？

薄れゆく意識の中で記憶を探る。昨夜、船室のベッドで外し、枕元に置いて眠ったことを思い出した。目覚めた直後に怪異に巻き込まれたから、恐らくそのまま置いてあるはずだ。ノリコはまだ船に残っている。彼女が見つつけ、形見に持っていきければうれしい。ノリコの

ブレスレットは、市子が壊してしまったから。

市子の手の中の碧石のブレスレットは、リングが大きく湾曲し、留め具もちぎれていた。市子が船から投げ出された際、ノリコは市子の手首を掴んでくれた。同時に市子もノリコの手首を掴んだのだが、ノリコの手首にはブレスレットがさかれてあり、うまく掴むことができなかった。

そして、ノリコの手が滑った。

市子が掴んだブレスレットに、彼女を支えるほどの強度はない。ブレスレットはちぎれ、市子は海へと転落したのだ。

——ごめんねノリコ。大切なブレスレットを、壊しちゃって。

胸の内で謝る。ブレスレットは、決して高価なものではない。それでも、二人の友情の証として買い揃え、何かあるたびに、「ずっと友達だよな？」と、永遠の友情を誓い合った。もちろん、ブレスレットが壊れたことで二人の友情も壊れるなんてことがあるはずもない。そう信じている。でも、どうしても、不安になってしまう。あたしは、ノリコに見捨てられたのではないかと、と。

遠くで、サイレンが鳴っていた。

壊れたスピーカーで鳴らしているかのような、濁った音のサイレンだった。海の中にいるから、そう聞こえるのだろうか？

その音を聞いていると、なぜだろう？ 海の底に一人沈む孤独感が大きくなる。大切な人に見捨てられた絶望感が膨らむ。負の感情が、抑えられなくなる。

——あのと、ノリコの手は、本当に滑ったのだろうか？

そんなことを考えてしまう。そんな訳はない、と、否定することは、もうできない。

あの一瞬、ノリコの手力が緩んだような気がした。

それはつまり——ノリコが手を離れた。

船から投げ出された市子の手を、ノリコは咄嗟に掴んだものの、自分も海へ落ちるのを恐れ、ノリコは手を離れたのではないかと。

あたしは、ノリコに見捨てられたのではないかと。

考えを振り払う市子。あたしは、なんて醜いことを考えるのだから

う。ノリコがあたしを見捨てるなんてこと、あるはずがない。それに、手を掴んだとはいえ、宙にぶら下がった状態の市子を引き上げる力が、ノリコにあつたとは思えない。ヘタをすれば二人とも海へ落ちてしまう。だから、万が一ノリコが本当に手を離れたのだとしても、それを恨むのは筋違いだ。

それが判つていても。

——ノリコ……どうして、あたしを見捨てたの……？

海に沈むごとに、意識が遠のくごとに、その負の感情は強くなり、やがて、揺るぎない確信へと変わる。

濁ったサイレンは、鳴り続けている。

その音は、海の中にいるとは思えないほど、はっきりと聞こえていた。しかも、徐々に大きくなっていくようだ。それは、海の上からではなく、反対側——海の底から聞こえてくるように思う。どんどん大きくなり、市子に近づいて来る。それにつれ、市子の胸に湧いた負の感情も大きくなる。

《なぜ……我を見捨てた……》

やがて市子は、意識を失い。

そして、その肉体は、二度と浮かび上がることはなかった。

第六十二話 『孤影』 矢倉市子 夜見島／潮降浜

8:50:32 終了条件2

夜見島の西部にある潮降浜の学校へ逃げ込んだ矢倉市子は、屍人が運転する軽トラックから逃れ、小運動場の隅にある体育倉庫に身を隠した。ひとまず安全を確保したものの、学校から脱出するためには、校内を暴走するあのトラックをどうにかしなければならぬ。何かないかと探す市子。倉庫内には、サッカーボールやライン引きなどの体育道具、綱引きの綱や玉入れのかごなどの運動会用具、車などを持ち上げるためのフロアジャッキ、釘やハンマーなどの工具類などが置いてあった。これらの道具を使って、暴走する軽トラックをなんとかできないだろうか？ それとも、このままここに隠れ、誰かが助けに来てくれるのを待った方がいいのだろうか？

◇

市子は様々な道具の中から、釘がたくさん入ったケースを取った。中には、虫ピンほどの小さなものから、ワラ人形に刺すような大きなものまで、たくさん釘が入っている。これを使えば、軽トラックの暴走を止められるかもしれない。もちろん危険だが、何もせずここに隠れていても、誰かが助けに来てくれるなんてことはまず無いだろう。むしろ、騒ぎを聞きつけた周辺の屍人がどんどん集まるだけだ。そうなれば、ますます脱出は困難になる。

市子はケースを持って倉庫を出た。幻視で周囲を確認すると、軽トラックは相変わらず校庭を暴走していた。校内にいる屍人は、ほぼ全員軽トラックに撥ねられ、行動不能になっている。ただ一人、この体育倉庫がある小運動場の前を警戒していた屍人は撥ねられていない。小運動場は校舎裏の階段を上った場所なので、トラックは侵入できないのだ。屍人は狩りに使うような大きな猟銃を持って警戒していたが、先ほど市子が焼却炉に火を点けたため、それをじっと見つめた

まま動かない。市子は猟銃屍人の背後を静かに通り抜け、階段を下りて校舎裏へと移動した。

校舎裏の南側には、潮降浜の岬へと向かう通用口があるが、フェンス製の扉は南京錠で閉ざされているため通れない。市子は校舎の南側に移動すると、通用口から少し離れた場所に、ケース内の釘を全てばら撒いた。そして、校舎の北側から回り込んで校庭へ向かう。校庭では相変わらず軽トラックが暴走している。それに向かって「おーい！」と叫んだ。びくん、と身体が震える。市子の声に屍人が気付いた。軽トラックが大きく旋回し、こちらに向かって来る。市子は通用口に向かつて全力で走る。軽トラックが追いかけてくるが、校舎裏の道は狭く、あまりスピードは出せない。追いつかれる前に通用口前まで移動した市子は、校舎の角を右に曲がり、物陰に身を隠した。軽トラックがやってきて、通用口前でハンドルを切る。だが、ばら撒いた釘を踏み、タイヤがパンクした。車体が大きく揺らぎ、操縦不能になった軽トラックは、大きく蛇行しながら通用口へぶつかった。フェンス製の扉が壊れ、勢いよく開いた。やった。これで脱出できる。市子は通用口を通って学校の外へ出ようとした。

ところが、トラックのドアが開き、中の屍人が出てきた。かなりの勢いでぶつかったから無事ではないと思ったのだが、まさかちやんとシートベルトを締めていたのだろうか？

屍人は拳銃を取り出すと、銃口を市子に向けた。ここは一度逃げてどこかに身を隠し、やり過ぎた方がいいだろう。市子は小運動場へ続く階段へ走った。だが、びくんと身体が震えると同時に、階段の上から猟銃を構える視点が見えた。焼却炉に気を取られていた屍人だ。さすがに今の事故の音を聞いて、様子を見に来たのだろう。幸い、まだ距離は離れている。市子はすぐに踵を返し、反対側の校庭へと走った。また身体が震える。今度は校庭の屍人に見つかった。軽トラックに撥ねられた屍人がよみがえったのだ。こちらにも逃げることはできない。他に逃げる場所は無い。完全に追い詰められてしまった。やはり、あのまま体育倉庫に隠れていた方が良かったのだろうか？悔やんでも、もう遅い。

通用口の方から銃声が響いた。身を竦める市子。

しかし、何も起きなかった。どこも痛くない。弾は外れたのだろうか？ 恐る恐る振り返ると。

屍人は、銃を市子ではなく別のものに向けていた。

それは、全身に黒い布を巻きつけた、巨大なイモムシのような化物だった。

屍人に撃たれたイモムシの化物は、人間のような大きな口から甲高い悲鳴を上げ、消滅した。

だが、通用口から新たなイモムシの化物が現れ、拳銃屍人に襲い掛かる。屍人はそれも撃退したが、イモムシの化物は次々と現れる。拳銃一丁では到底倒しきれない数だ。すぐに弾切れとなり、一匹が、その大きな口で屍人の胸に喰らいついた。屍人は地面に引き倒され、手足をばたばたさせてもがく。

階段の上から銃声が響き、市子はまた身を竦めた。だがそれも、市子を狙ったものではなかった。階段の上の猟銃屍人も、イモムシの化物に向かって銃を撃っている。校庭からも数体の屍人が走ってきたが、市子のそばを素通りし、化物に襲い掛かった。

しばらく化物どもが争う様子を呆然と見ていた市子だったが、我に返る。何が起こっているのかは判らないが、とにかく今がチャンスだ。市子は争う化物どもの横を走り抜け、通用口を通って外に出た。屍人も、イモムシの化物も、もう市子には見向きもしなかった。

通用口の外は舗装されていない砂利道が続いている。道のそばにはまばらに草木が茂っており、見通しは良くない。市子はしばらく道を走る。屍人どもが追い掛けてくる気配はないので、走るのをやめ、大きく安堵の息をついた。なんとか学校から脱出することはできた。しかし、あのイモムシ状の化物はなんだっただろう？ 屍人や屍霊とも違う、初めて見る化物だ。屍人に襲い掛かり、屍人も迎え撃つように戦った。どちらも、市子には見向きもしなくなった。屍人と敵対する存在のようだ。だからと言って味方だとは思えなかった。巨大なイモムシの身体に人間のような大きな口だけがあるその姿は、思い出しただけで気持ちが悪い。

道端の草むらだが、ガサガサと揺れた。驚いてそちらを見ると、イモムシの化物が姿を現した。大きな口を開け、飛びかかってくる。とっさに走ってかわす市子。やはり、こいつらは味方なんかではない。そのまま走って逃げようとするが、前の草むらからも化物が現れ、行く手を阻まれた。さらに一体、もう一体と現れ、市子は、完全に囲まれてしまった。

イモムシの化物どもはニヤニヤしながら近づき、一斉に襲い掛かって来た。

そのとき、空を覆う雲が途切れ、太陽が姿を現した。

眩しい光が降り注ぐ。同時に、化物どもが甲高い悲鳴を上げた。しゅうしゅうと身体中から煙を上げ、消滅していく。その様子は、黒い煙のような化物・屍霊そっくりだ。どうやら屍霊と同じく、強い光に弱いようだ。

やがて、化物どもは太陽の光に焼き尽くされた。危ないところだった。まさに、危機一髪だ。

だが、安心してもいられない。雲の切れ間はわずかだ。それはほんの一瞬の晴れ間にすぎず、しばらくすれば、太陽はまた雲に隠れてしまうだろう。あのイモムシの化物がまだその辺に潜んでいるかもしれない。とにかくここから離れよう。市子は急いで道を進んだ。

しばらく進むと、急に視界が開けた。海を臨む切り立った崖の上に出たのだ。細く鋭く海にせり出したその崖は、鳥のくちばしを連想させるような形だ。道はそこで途切れていた。崖は十メートル以上の高さがあり、下りるような階段も無い。波が岩に当たって砕ける音が繰り返し聞こえる。かなり波が高いようだ。

海から強い風が吹き付け、市子のおさげ髪を揺らした。太陽はまた雲に隠れてしまい、周囲は薄闇に包まれている。雨が、また強くなり始めた。

市子は細くせり出した崖の上を進んだ。進むほどに幅は狭くなる。もし足を滑らせたら命の保証は無い。背後からあのイモムシの化物に襲われようものならさらに危険だが、それでも、市子は進む。何か



に呼ばれているような気がする。

崖の先端に立った市子は、海を見つめた。血のように染まった真つ赤な海が広がっている。あの時——ブライトウイン号から転落した時に見た、赤い海。

不意に。

《——なぜ我を見捨てた？》

海から、声が聞こえた。

低く、暗い声だった。それも、複数の声が重なり合い、ひとつになつたような奇妙な声。海の底に沈んだ亡者どもの恨みが合わさつたのだろうか……そんな風に思う。

《——置いて行くな》

《寒い——ここは——寒い》

《——我也、共に》

声は、次々と聞こえる。まるで、市子を海の底へと引きずり込もうとしているかのように、身体にまとわりつく。

だが、不思議と、市子はその声を怖いとは思わなかった。  
なぜなら。

——なんで、あたしを見捨てたの？

その声は、海から聞こえると同時に、市子の胸の内からも、湧き出していたから。

——置いて行かないで。

——独りぼっちは嫌。

——あたしも、一緒に。

海から聞こえる声と、市子の胸の内から湧き出す声が重なり、ひとつになつていく。  
やがて。

《——還りたい》

声は、強烈な帰郷心へと変わる。

《還りたい——母の元へ》

還りたい、みんなのところへ。

《我也ひとつになりたい》

あたしも、ひとつになりたい。

《我也、母の元へ!!》

あたしも、お母さんの元へ!!

自分を見捨てた母を恨み、それでも母の元へ還り、ひとつになりたいと願う、歪んだ思慕の念へと変わる。

しばらく崖の上に立ち尽くしていた市子は。

——そうだ。あたしは、母に会わなければならない。

決意と共に振り返った。

遠く、鉄塔が建つ山が見える。

あの向こうに、母がいる——そう確信する。会わなければ。

市子は、来た道に戻り始めた。

第六十三話 『虚無』 三沢岳明 夜見島／第1砲台  
跡 13:00:27 終了条件2

自衛隊員の三沢岳明は、島北部にある要塞跡の丘の上で大の字になつて横たわつていた。空を眺めていると、時おり雲が途切れ、その向こうに逆さまに浮かぶ夜見島が見える。あれこそが現実の夜見島であり、今いる場所は偽りの世界であることに、三沢は早くから気がついてた。四鳴山の頂上に建つ鉄塔を登れば、現実世界に戻れる可能性が高い。逃亡した部下の永井を探し、一刻も早くこの島から脱出しなければならぬ。それが判つていても、どうにも動く気になれない。三沢が何か行動を起こすたび、事態はどんどん悪い方へ向かつていくように思う。このまま何もせずじつとしていた方がよいのではないか——そんな気さえしていた。

◇

「……いや……いやあ!!」

悲鳴が聞こえ、三沢は反射的に身を起こした。すぐ側に置いてある小銃を取り、周囲を確認する。見える範囲には誰の姿もない。悲鳴は若い女のもので、丘の南側から聞こえた。三沢は周囲を警戒しつつしゃがみ走りで移動する。丘の南側は三メートルほどの高さの擁壁となつており、東西へ伸びる道を見下ろすことができた。

「助けて……誰か……誰か!!」

道の西側、電灯所がある方向から、セーラー服を着た少女が走つて来た。その後ろからは、全身に黒い布を巻きつけた人型の化物が追いかけてくる。屍人ではない。少し前から、あの化物をよく見かけるようになった。闇人、と、三沢は呼んでいる。

少女の足は速く、闇人に追いつかれることはなさそうだった。だが、道は、途中で瓦礫を積み上げて作ったバリケードに塞がれていた。他に逃げ場はない。追い詰められた少女に、闇人が迫る。三沢は擁壁

の上から銃を構え、闇人に照準を合わせた。距離は二十メートルもない。三沢の腕ならば外すことはないが、三沢は引き金から指を外し、銃口を上げた。追われている少女は、見たところ十代前半で、恐らく中学生だ。いかに化物が相手とはいえ、子供の前で銃殺するのは控えた方がよいだろう。幸い、闇人が持っているのは刃渡りが十センチほどの刃物だ。三沢は擁壁の上から「おい！」と、低い声で叫んだ。闇人の注意がこちらに向く。三沢は擁壁から跳び降りた。

「こつちだ、化物！」

挑発すると、闇人は刃物を振り上げ三沢に襲い掛かって来た。屍人よりも格段に素早い動きだが、所詮はリーチの短い武器である。三沢は闇人が刃物を振り下ろすよりも早く、あごに向けて小銃のグリップを打ち込んだ。大きくのけ反つて後ずさりしたところへ、さらに殴りつける。闇人は甲高い悲鳴を上げて倒れた。

闇人が完全に動かなくなったのを確認し、三沢は少女を見た。

少女は「良かった……」と、大きく息をついた。「あたし、ずっと一人で、怖かったんです」

「……………」

三沢は無言で少女を見つめる。その姿に、小さな違和感を覚えた。少女の服には、首から腹にかけて血の染みが広がっているが、見たところ怪我はしていない。この島では謎の力により傷の治りが早いが、その血は少女自身のものではないように見えた。他の者の血——返り血を浴びたような広がり方なのだ。無論、この島では死体がよみがえり襲つて来るから、それを撃退すれば返り血を浴びることもあるだろう。幼い少女が化物と戦うのは望ましくない行為だが、この状況でそれをとがめる気は無い。だが、その血の跡と、少女の顔を見ていると、なぜだろう？ 少女が、笑いながら何者かを襲う姿が思い浮かぶのだ。それは、理屈ではない。三沢が持つ鋭い勘——二年前の悪夢の出来事以降、異常に鋭くなった勘が、そう告げているのだ。おとなしそうな見た目に惑わされてはいけない。この少女は、あの光を嫌う女と同じ……。

「あの……助けてくれるんですよね……」少女は、不安そうな表情で三

沢の顔を見ていた。

小さくため息をつく三沢。気は進まないが、このまま放っておくわけにはいかない。ひとまず、この要塞跡から脱出しよう。

三沢は頭の中で状況を整理する。この要塞跡から脱出する道はふたつ。この場所から東へ行つたところにある崖をよじ登り、遊園地がある碑足地域へ向かうか、西へ向かう道を通り、蒼ノ久という集落へ向かうかだ。近いのは遊園地がある碑足方面だが、あの場所からは早朝にサイレンが鳴って以降、尋常ではない邪悪な気配が漂って来ている。絶対に近づいてはいけないと、本能が警告している。西の蒼ノ久という集落へ向かうしかない。

だが、西へ向かう道は、何者かが作ったバリケードによって塞がれている。三沢はバリケードを確認する。瓦礫をでたらめに積み上げ、黒い布をかぶせただけの簡易的なものだが、その分、下手に取り除こうとすれば簡単に崩壊してしまう危険性がある。隅の方には、体格の小さな者なら通り抜けられそうな隙間があるが、三沢の体格では無理そうだ。バリケードの向こう側にも敵はいるので、少女を一人で向かわせるわけにもいかない。この道を通るのはあきらめた方が良さそうだ。幸い、要塞跡の地下を通れば、バリケードの向こう側に行くことは可能だ。地下へおりの階段は、ここから少し東に向かったところにある。ただ、恐らく地下には闇人がいるだろう。幻視で確認すると、思った通り多数の闇人の気配があった。地下は明かりが消されて真っ暗だ。闇人は光を極端に嫌う。奴らが明かりを消したのだろう。幻視をやめる三沢。地下は完全な闇だ。そのうえ通路は迷路のように入り組んでおり、どこから襲われるか判らない。ライト一本で下りていくのはかなり危険だろう。まずは地下の明かりを確保した方がいい。東に行けば電灯所跡がある。少女と会う前に探索した際には、その明かりは点いていた。恐らく地下の電気設備も生きているはずだ。

「……ついて来い」

三沢は短くそう告げると、少女を連れて東の電灯所跡へ向かった。電灯所は、赤煉瓦でできた平屋の建物だ。室内を探すと、地下へ電

気を供給するブレイカーは「切」になっていた。スイッチを「入」にし、再び幻視で地下の様子を伺う。突然明かりが点き、悲鳴を上げて悶える闇人の視点がいくつも見えた。逃げ場がなくそのまま倒れる闇人がほとんどだが、何体かは明かりから逃れ、光が届かない場所へ移動していた。長年使われていない施設だから、場所によっては電球が切れているのだろう。この場からはこれ以上どうすることもできない。三沢は少女を連れ電灯所から出ると、来た道に戻り、擁壁そばの階段を下りた。

この要塞は日露戦争前に作られたもので、地下は敵の侵攻に備えて迷路のように入り組んだつくりになっている。しかし、太平洋戦争終結後、島民に公園として利用され始めたのをきっかけに、余計な通路は木の板で塞がれ、一本道で迷わないように整備されていた。その分、地下施設を全て巡る設計になっているのが難点だ。観光用の案内板通りに進むと、地下一階の東部兵舎跡を通り、地下二階に下りて弾薬庫跡、もう一度地下一階に上がって西部兵舎跡、と、順に巡ることになる。ただ通り抜けたいだけの三沢にとっては、無駄に回り道させられているだけだ。もちろん、律儀に案内板に従う必要はない。兵舎跡前まで移動した三沢は周囲を調べた。西へ続く道が板で塞がれているが、何年も手入れされていないため、かなり劣化している。試しに小銃のグリップを打ち付けると、簡単に崩れた。三沢はさらに銃を打ち付け、板を崩して通れるようにすると、現れた通路を進んだ。

しばらく進むと広い部屋に出た。ドーム状の天井を中央の太い柱で支えた円形の部屋だ。電気は点いているため、闇人の姿は無い。道は西に続いている。進めばすぐに地上へ出る階段があるが、その通路は小銃を持った屍人が見張っていた。明かりは点いておらず、通路は真っ暗だ。距離もあり、三沢のいる場所からライトで照らしても奥までは届かない。これでは目くらましにならないだろう。それでも、相手が屍人ならば撃ち勝つ自信があるが、闇人は屍人よりも頭が良く動きも機敏だ。三沢の腕をもってしても、闇の中で撃ち合うのは分が悪い。なんとかして光を確保しなければならぬ。

三沢はポケットを探り、自衛隊支給の発煙筒を取り出した。先端の

キャップを外し、マッチのように擦って火を点けるものだ。ところが、何度擦っても火が点かなかつた。どうやら長く雨に打たれていたせいで、先端の擦り葉が濡れてしまったようだ。幸い内部に水は浸透していないようなので、少し細工すれば、ライターなどで直接火を点けることはできる。三沢は煙草を吸わないが、いぎという時に備え、火を点けるものは常に持ち歩いている。三沢はライターを取り出そうとしたが、どのポケットを探しても見つからなかった。どうやら落としてしまったようだ。この要塞跡に来る前、崩谷にある社宅で屍人共と長く戦っていたから、あのととき落としたのかもしれない。

「あの……」少女が、恐る恐る声をかけてきた。「それ、壊れてるんですか……?」

発煙筒を見る少女。三沢は、ああ、と、そっけなく応えた。

「これ、使えませんか?」

そう言っただけ少女が取り出したのはオイルライターだった。三沢は無言で少女を見つめた。その表情に誤解したのか、少女は、「違います」と首を振った。「あたしの物じゃなくて、たまたま拾ったんです」ライターは炎を模りたいかついキラクターが描かれた物で、どちらかと言えば不良少年が持ち歩く物だろう。確かに少女の持ち物ではなさそうだ。それに、今の状況では誰の物だろうと構わない。三沢はライターを受け取ると、発煙筒の先端を少し細工し、ライターで火を点けた。バチバチと花火のような眩しい炎が燃え上がる。三沢は通路の先へ向かって投げた。通路が眩しく照らされ、闇人が悲鳴を上げた。すぐに小銃を構え、スコープを覗き込む。通路が煙で覆われるよりも早く狙いを定め、闇人の頭に銃弾を撃ち込んだ。甲高い悲鳴を上げて倒れる闇人。光さえあれば、三沢の敵ではない。

闇人を始末した三沢は通路を進む。すぐに地上へと続く階段が見えたので、それを登り、バリケードの反対側に出ることができた。周囲に敵の気配はない。三沢は擁壁沿いの道を西へ向かう。しばらく進むとトンネルが見えた。その先は、蒼ノ久集落へと通じているはずだ。

「やった。これで、もう安心ですね」

少女は安堵の声で言った。

「……………」

三沢は応えず、無言で少女を振り返った。鋭い目で睨む。少女は武器を持っていないが、ポケットなどに忍ばせている可能性もある。もし襲われてもすぐに反撃できるよう、充分に距離を取る。

「えつと……………どうしたんですか……………」怯えた声になる少女。

三沢は、自衛隊内では多くの部下から恐れられている上官だ。三沢がひと睨みしただけで、大の男が震えあがるほどである。さまざまな訓練を受けた隊員でさえそうなのだから、女子供ならなおさらだろう。もちろん、三沢には誰彼構わず脅して悦に浸るような趣味は無い。必要だから、やるだけだ。

「……………お前は何者だ？」

三沢は、敵を尋問するときの声で訊いた。

「え……………」

言葉に詰まる少女。何を訊かれているのか判らない、そんな表情だ。しばらく戸惑っていたが、やがて、「えつと……………あたしは、亀石野中学二年の矢倉市子で、テニス部の大会に参加して、その帰りにフェリーに乗って——」と、この島に来た経緯を話し始めた。

「お前は臭う」三沢は少女の話を遮り、続けた。「あの、光を嫌う女と同じ臭い——いや、違うな。お前は光を嫌わないようだが、その分、あの女よりもさらに臭う。あの女からは木が腐った臭いがしたが、お前は魚が腐った臭いだ」

「……………ごめんなさい、なにを言ってるのか、判らないです。それより、あいつらが来るかもしれないから、早くここから逃げないと……………」

先へ進もうとする少女に、三沢は、銃口を向けた。

短い悲鳴を上げ、後退りする少女。

少女の見た目や行動に不審な点は無い。闇人に追われて逃げている時の恐怖の表情も、助けた時の安堵の表情も、脅すように質問した時の戸惑いの表情も、銃を向けられて怯えている時の表情も、全て、十代前半の少女そのものだ。

それでも、三沢の勘が告げている。この女はまともな人間ではな



いと。

そして、この島に上陸して以降、その勘が外れたことはない。

「……言え。お前は——お前らは、何者だ？」

三沢は、小銃の引き金に指を掛けた。

第六十四話 『暴発』 永井頼人 夜見島／蒼ノ久集  
落 14:00:45

自衛官の永井頼人は、寂れた漁港のある集落へ来ていた。と、言っても、特に何か目的があるわけではない。この集落にたどり着いたのは、ただの偶然にすぎなかった。三沢の元を去り、一人で行動し始めたものの、どこに行けばいいのか、何をすればいいのか、彼には全く判らないのだ。初めて訪れる島で地図も持っていないから、そもそもどこに何があるのさえ判らない有様である。こんなとき、沖田さんがいてくれたなら……そう思わずにはいられない。

深夜のヘリの墜落により、永井が所属していた隊の仲間は、彼と三沢を除き全員が命を落とした。尊敬する先輩の沖田も同様だ。もし沖田が生きていれば、この絶望的な状況でも、きっと永井を導いてくれただろう。あるいは、隊長の一藤陸佐が、副隊長が、いや、他の誰でもかまわない。隊の誰か一人でも生き残っていれば、こんなことにはならなかったかもしれない。なぜ、あるとき生き残ったのが、未熟な自分と、そして、頭がおかしいとしか思えない三沢だったのか……考えても判らないし、恐らく理由など無いだろう。運が悪かったとしか言いようがない。

入り組んだ細い道が続く集落を慎重に進む永井。明け方あたりから、屍人に代わり、全身に黒い布を巻きつけたニヤケ顔の化物と遭遇することが多くなった。屍人よりも素早く、人間の言葉を喋り、戦闘時に策を用いるなど、頭も良い。人間と同じ背格好の者が多いが、ドラム缶を倒したような寸胴で四足歩行する者や、人型の数倍はある巨体の者など、人間とはかけ離れた姿の者も存在し、それらは総じて人型より戦闘力が高い。屍人とは比べ物にならないほど危険な相手だった。一瞬の油断が命取りになりかねない。永井は機関拳銃を握りしめ、神経を研ぎ澄まし、敵の気配を探る。

「——やだー！ やめてくださいー！ やめてえ!!」

正面から悲鳴が聞こえた。女の声、それも、まだ少女と言っている

歳頃だろう。生存者がいるのだろうか？ 永井は悲鳴が聞こえた方へ走った。細い通路の先、丁字路になっている所を、セーラー服姿の少女が駆け抜けた。そのすぐ後を、体格の大きな男が追いかける。それは、ニヤケ顔の化物でも、屍人でもなかった。生きている人間——それも、知っている顔だった。永井の上官で、へり墜落時の、もう一人の生存者。

——三沢三佐!?

姿が見えたのは丁字路を駆け抜けた一瞬だけだが、見間違うはずはない。三沢が、逃げる少女を追っている。少女は恐らく中学生だろう。なぜ三沢が、まだ子供と言っている少女を追っているのか。理由は判らないが、まともな行動とは思えなかった。

銃声が響き、少女がさらに悲鳴を上げた。まさか、発砲しているのか!?! 永井は駆け込んだ。丁字路の角を曲がると。

「言えー！ 貴様はなんだ!?! 何が目的だ!?!」

行き止まりに追い詰められ、腰を抜かして地面に座り込む少女と、その少女に小銃を向け、怒声を上げる三沢の姿があった。少女は首を振り、「判りません……本当に判らないんです……」と、涙を流す。三沢の顔が苛立ったように歪んだ。さらに引き金を引く。銃口は下げられているため、銃弾は少女のすぐそばの土を弾き飛ばしただけだ。それでも、自衛官にあるまじき行為だ。国民の安全を守ることが使命であるはずの自衛官が、まだ幼い少女に向けて発砲しているのである!

「——やめろおおお!!」

その行為を止めるよりも早く、永井は叫んでいた。

それは、決して、故意ではなかった。

三沢の暴挙を止めようとして、叫び、思わず全身に力が入ってしまっただけだ。

ただ、そのとき永井の指は、機関拳銃の引き金に添えられてあり。

その銃口は、三沢に向いていたのだ。

不運だった——そう思うしかない。

たたたん、という軽い音とは不釣り合いな、強い衝撃が、腕を伝い、

全身を駆け抜けた。

同時に、三沢が低いうめき声をあげる。

やや前かがみで銃を構えていた三沢だったが、今は少し後ろにのけ反る格好だ。その姿勢のまま、しばらく立ちつくす。やがて両腕がだらんと下がり、小銃が地面に落ちた。三沢は、ゆっくりと視線を落とし、自分の腹を見た。迷彩服が大きく破れ、血が噴き出している。その血を右手で拭い取り、わずかに首を傾げた後、永井を振り返った。「……やるじゃない……」

三沢の顔からは、全ての感情が消えていた。さっきまでの苛立った感情も、撃たれたことの痛みや怒りも、あるいは恐怖や悲しみと言った感情も。全てを失ってしまった顔。

「敵が他に気を取られている隙に背後から撃つ……お前にしちやあ上出来だ」

その体格からは考えられないほど弱々しく、ゆっくりとした足取りで歩く。左右によるめきながらも視線は真っ直ぐに永井を捕らえ、近づいて来る。

永井は、銃を構えたまま呆然と立ち尽くしていた。腹から血を流し、近づいて来る三沢。あれは、自分がやったのだろうか？ 自分が撃った弾が、三沢の身体を貫いたのだろうか？ それ以外には考えようもないが、信じられない。信じたくなかった。誰かに向けて銃を撃ったのは、もちろんこれが初めてではない。この島に上陸して以降、化物どもに数えきれないほどの銃弾を撃ち込んだ。だが、化物どもを撃った時とは明らかに違う。手の震えが止まらない。全身から汗が吹き出し、呼吸は短く、荒くなる。

永井の目の前に立った三沢。そこで力を失ったのか、永井に向かって倒れてきた。頭一つ分高い三沢が、上から永井に抱きつくような格好だ。

三沢が、永井の耳元に口を寄せた。

「……上官として……最期にひとつだけ……アドバイスしてやろう……」

ささやくように言う。

「……この島では……何か行動を起こすたびに……事態は悪い方向へ進む……あまり……頑張りすぎるなよ……」

三沢の言葉は全て聞こえたが、理解はできなかった。いま起きていること、自分が起こしてしまった事態に、思考が追いつかない。

ふふん、と、三沢がわずかに息を吐く。笑ったように思えた。

「……じゃあ……俺だけ先に目覚めちゃうけど……悪いな……」

その言葉と同時に、三沢の身体が軽くなった——ような気がした。「……うわあー!」

永井は覆いかぶさる三沢の身体を突き飛ばした。どきり、と、地面に横たわる三沢。その肌から急速に血の気が失われ、灰色と化していく。目も同様に色が消える。かっと開かれたまま、濁り、くすみ始める。

それは、この島で何度も見た、屍人と同じ姿。

三沢岳明は、いま、永井の目の前で死んだのだ。永井の放った銃弾によって。

人の死を見るのは、これが初めてではない。自衛隊に所属して三年、経験豊富とは言えないが、何度か災害現場に派遣され、救出できなかった命を目の当たりにしてきた。特に、この二十四時間は、常識ではありえない経験をした。ヘリが墜落し、多くの仲間が目の前で死んだ。その死体がよみがえり、襲って来るので、銃で撃退もした。だが。

三沢の死は、今まで永井が目の当たりにしてきた死とは、まるで違う。当然だ。永井自身が、その手で銃を撃ち、その結果、三沢は死に至ったのだから。

人を——生きている人間を、殺してしまったのだ。

違う! と、即座に否定する。これは事故だ。決して故意ではない。銃が暴発した、それだけのことだ。そう自分に言い聞かせる。だが、それで罪の意識が消えることはない。事故だろうと故意だろうと、その結果一人の人間が死んだことに変わりはないのだ。その責任が自分にあることは、間違いないのだ。

永井は、頭がおかしくなりそうだった。そのままだったら、本当に

おかしくなっていたかもしれない。

「……ありがとうございます……」

その言葉で、永井は正気のふちに踏みとどまった。

三沢に追いかけられていた少女だった。恐怖から解放され、心の底から安堵した笑みを浮かべていた。

「その人、急に怒りだして、言ってることも訳が判らなくて……本当に怖かった……」

その笑顔が、永井を奮い立たせた。

そうだ。俺は、あの少女を助けたのだ。少女は恐らく十代前半。まだ子供だ。三沢は、子供に向けて銃を撃つたのだ。正気とは思えない。俺は、狂人から少女を護つたのだ。断じて、ただ人を殺したのではない。

そう、自分に言い聞かせる。

永井は、一度大きく息を吸い、そして吐き出した後、少女に言った。

「君、名前は？」

「矢倉市子です」

「よし。市子ちゃん。僕は、自衛官の永井頼人。ここは危険だから、まずは安全な場所へ移動しよう。いいね？」

「はい」

少女の笑顔に、自信が湧いてくる。自分は、何も間違ったことはない。自衛官の責務として、この少女を保護したのだ。

そして、このイカれた世界から少女を連れ出し、無事、元の世界へ帰る。

それが、今の自分の使命だ。

やるべきことを見出した永井は、決意を新たにし、少女と共にその場を後にした。

第六十五話 『奪還』 永井頼人 夜見島金鉞社宅／  
八棟102号室 14：45：29

矢倉市子を保護した永井頼人は、海辺の集落を離れ、古いマンションが建ち並ぶ地区へ来ていた。何かの会社の社宅のようだ。小さな児童公園のそばに、外壁にイ棟・ロ棟と書かれたふたつの建物が並んでいる。そこから少し離れた丘の上にも、もうひとつ八棟が建っていた。幻視を使い、丘の上の八棟に闇人がいないことを確認した永井は、鍵がかかっていなかった102号室へ入り、少し休むことにした。「——それで、大会の帰りに三逗港行きのフェリーに乗りました。そこで、なにか、すごく怖いことがあったんですけど……あまり、覚えていません」

奥の部屋に腰を下ろし、市子がこの島に来た経緯を聞く永井。どうやら、永井と三沢が深夜に探索した森の中の座礁船——ブライトウイン号という名前だったか——の乗客だったらしい。昨日、夜見島の近くを航行中に怪異に巻き込まれ、気がつくと、船は森の中にあつたそう。昨日は永井が搭乗した輸送ヘリも原因不明のトラブルに巻き込まれたから、あの時間、なんらかの未知の力が働いていたのかもしれない。

「それで、結局あたしとノリコだけが助かって、二人で、救命ボートを使って逃げ出そうとしたんです」

市子は右手首をさすりながら言った。そこには、碧色の石があしらわれたブレスレットがされてある。リングが大きく歪み、留金も壊れているためぶら下げているだけだが、親友とお揃いで買った大切なものさそうだ。

「でも……」と言った後、市子は少し言いよどんだが、やがて続けた。「……高波で船が傾いて、あたしは海に投げ出されて……死んじゃったんです」

「え？ ちょっと待って」永井は市子の話を止めた。「市子ちゃんは、こうして生きているじゃないか？」

市子は大きく首を振る。「違うんです……あたし、ノリコから聞いたことがあるの。夜見島の海の底には、姿を盗む化物がいるって」

それは、戦時中にこの島で起こった話だという。

岩場に海藻を採りに行った少女が、夜になっても戻って来なかった。家族を始め村人たちは必死で捜索したが、見つからない。高波にさらわれたのだろうと、皆が言った。流れの早い引き潮にのみ込まれたら、泳ぎの達者な者でもまず助からない。

結局少女の遺体は見つからぬまま、数日後、葬儀が行われることとなった。

家族が準備をしていると、玄関の方が騒がしい。何事かと母親が向かうと、死んだと思われていた少女が、玄関先に立っている。母親は喜び、少女を家に招き入れようとしたが、祖母が止めた。海で死んだ者が戻って来ても、決して家にあげてはいけない。海には、死者の姿を盗む化物がいるから、と言う。

祖母がその話をした途端、少女は、狂ったような笑い声をあげ、溶けるように消えてしまった。

あとには、水溜りだけが残っていたという。

「……その少女が、あたしなんです」

市子は、虚ろな表情で、最後にそうつぶやいた。

部屋が沈黙に包まれる。永井は、なんと言っているか判らなかつた。その少女があたし——どういう意味だろう？　いまの話は戦時中に起こったことだと言っていた。その話に出てくる少女が、市子であるはずがない。そもそもこの話は友達から聞いた話だ。その友達も、恐らく友達から聞いたとか、本などを読んで知ったのだろう。言わば都市伝説的な話であり、真実だという根拠は何も無い。だが、これを馬鹿げた怪談話だと否定することは、今の永井にはできなかつた。この島に上陸して以降、死体がよく見えたり、森の中に突然大型フェリーが現れたり、怪談話のようなことが現実に起こっている。今の話が真実だったとして、戻って来た少女は何者だったのだろうか？　海には死者の姿を盗む化物がいる。あの化物どもは、海からやって来るのだろうか？　ならば、海にはいったい何が潜んでいるのだ。



「今のあたしは、あたしじゃない」沈黙を、市子が破った。声が震えていた。身体も震えている。その震えを抑えるように、自分で自分の肩を抱いた。「だってあたしは、あるとき死んだもの。あるとき海の底から声が聞こえて、それで意識を無くして、でもあたしはここにいます。あたしはあの声がつくり出した化物なのよ——」

「落ち着いて、市子ちゃん」

堰を切ったように話す市子の両肩に手を置き、永井は、「大丈夫だから」と、力強く言った。「そんなの、ただの怪談話だよ。君はこうして生きています。大丈夫。僕が必ず、家まで送り届けてあげるから」

「……はい」

まだ表情は虚ろだが、とりあえず落ち着きを取り戻した市子は、小さく頷いた。「ごめんなさい、変な話をして」

「いや、いいんだ。ずっと一人でいて、怖い目にあっただから、変なふうにも考えても仕方ないよ。少し横になって休むといい。僕は、あいつらが来ないよう、見張ってるから」

「判りました」

言われた通り横になった市子は、すぐに小さな寝息を立て始めた。少し精神的に参っているようで心配だが、少し眠れば落ち着くだろう。今は、とにかく休ませた方がいい。

市子が眠ったのを確認した永井は、ポケットからパスケースを取り出した。自衛隊の証明書が入ったパスケースだ。永井自身のものではない。この部屋に入った際、押し入れの前に落ちていたのだ。それは、永井の元上官・三沢岳明の物だった。あいつもこの部屋に来たのだろうか？

パスケースには、手紙が一通挟み込まれていた。たどたどしい字で、所属基地の住所と三沢の名が書かれてある。子供が書いたもののような。消印はごく最近のもので、開封はされていない。まだ読まれていないようだ。

永井は、封筒を裏返した。

差出人は、三隅郡羽生蛇村の、四方田春海となっていた。

永井が、証明書と手紙をどうしようかと考えていたら。

突如、窓を突き破り、天井に頭が届くほどの巨体が突入してきた。驚いて市子が飛び起きる。永井は機関拳銃を構えた。

突入して来たのは、闇人の中でも最も厄介な種類・巨体闇人だ。下腹部の顔で部屋の中を見回し、市子の方を見た。永井は機関拳銃を撃つ。全て顔に命中したが、弾は全て弾き返され、傷ひとつついていない。

「ダメだ！ 市子ちゃん！ 逃げて!!」

永井が叫ぶのと、巨体闇人が岩のような拳を振るって来たのは、ほぼ同時だった。永井はなすすべもなく拳を喰らい、障子を突き破って隣の部屋まで弾き飛ばされた。壁に頭をぶつけ、意識が飛んだ。

意識を取り戻すと、部屋には誰もいなかった。畳の上に碧石のブレスレットが落ちている。それを拾う永井。どれくらい意識を失っていたのだろう。市子はどうなったのか。すぐに幻視で周囲の様子を探ったが、八棟内には誰の気配も無かった。幻視の探索範囲を広げ、丘の下のイ棟・ロ棟方面も探った。こちらは、多くの闇人達が、社宅内や屋上、建物の周辺を警戒していた。その中に、ここと同じ間取りの部屋にたたく視線を見つけた。肩で大きく呼吸をし、わずかに聞こえる声は市子のものであった。良かった、無事だった。だが、それも安全とは言えない。また窓を突き破って巨体闇人が突入してくるかもしれないし、社宅内を巡回している人型闇人もいる。すぐに迎えにいかなければ。

市子は窓際に立ち、外を眺めていた。部屋の場所は高く、左下の方に小さな公園が見える。その景色から、市子がいるのはロ棟の301号室だと判断した永井は、幻視をやめ部屋を飛び出した。

八棟を出て丘の階段を下りると、ロ棟は目の前だ。出入口の前まで移動しようとした永井だが、社宅の角を曲がったところで足を止めた。出入口付近を二体の闇人が警戒していた。いずれも小銃や機関拳銃を持っている。その二体だけならば不意を突いて倒すこともで

きるだろうが、敵は目の前の二体だけでなく、隣の棟の屋上やベランダにもいる。こちらも小銃や猟銃を持っており、出入口前の闇人と戦闘になれば、背後から狙撃される危険性が高い。だからといって、幻視で様子を見つつタイミングを計って一体ずつ倒す、というような余裕もない。口棟内を巡回している闇人が三階へ上がろうとしている。もたもたしていると間に合わない。強行突破するしかないだろう。

永井は自衛隊支給の発煙筒を取り出した。先端のキャップを外して火を点けると、花火のような眩しい炎が燃え上がる。それを、出入口前の闇人に向けて投げた。発煙筒は強烈な光を発し、闇人は両目を抑えて苦しみ出す。永井は闇人に向かって走り、機関拳銃を乱射した。でたらめな射撃だが何発かが命中し、倒すことができた。だが、びくんと身体が震え、高所から狙撃銃を構える視点が見えた。棟の狙撃手に見つかったのだ。永井はそのまま走り、立ち上る煙の中に身を投じた。背後で銃声が響くが、弾は永井の背後の土を弾き飛ばしただけだった。この煙の中、走っている者を狙撃するのはまず無理だろう。二発、三発と銃声がしたが、弾が永井を捕らえることはなく、なんとか無事に社宅内に入ることができた。すぐさま階段を駆け上がる。三階にたどり着いたが、社宅内を巡回していた闇人の姿は無く、301号室のドアは開いていた。市子が玄関のドア開けっ放しで中に隠れるとは考えにくい。闇人が中に入ったのだ。室内から甲高い悲鳴が聞こえた。間に合わなかったか!? 永井は部屋の中に飛び込んだ。

だが、部屋の中は、永井の想像とは違っていた。

部屋の中央に倒れていたのは闇人だった。その首がぱっくりと斬り裂かれ、流れ出した血が、畳一面に広がっている。そばには機関拳銃が落ちていた。

市子は、幻視で確認したときと同じく窓際に立ち、外を眺めていた。永井に背を向ける格好だ。その右手には、出刃包丁が握られていた。刃は、ねっとりとした血にまみれている。

市子は、永井に背を向けたまま動かない。

市子の右手も血にまみれていた。それが包丁の柄を伝い、刃を伝い、刃先から、糸を引いて、ぽたり、ぽたり、と、滴り落ちる。

首を斬り裂かれ、倒れている闇人。これは、市子がやったのだろうか？ 状況から判断すると、そうとしか思えない。機関拳銃を持った闇人を、包丁一本で倒した？ 信じられない。もちろん、物陰に身を隠すなどして、不意を突いて喉を斬り裂けば、いかに相手が銃を持っているようと倒すことはできる。だが、それには高度な技術が必要だ。素人がテレビや映画などを真似て簡単にできるものではない。

ぽたり、と、また、包丁から血が滴り落ちた。

我に返る永井。経緯がどうあろうと、とにかく、市子は無事なようだ。

「市子ちゃん、無事で良かった」

永井は声をかけたが、市子は無言で窓の外を眺めている。

「……わ……」

いや、わずかに声が聞こえた。ひどく低く、小さい声で、何かつぶやいている。口の中にこもるような、淀んだ声だ。それが、ずっと、途切れることなく続く。呪いの言葉をささやくような、そんな声。

「市子ちゃん、大丈夫かい？ まさか、怪我をしたのかい？」

市子は応えない。低い声でささやき続ける。ぽたり、と、血がしたり落ちる。ぽたり、ぽたり、と、何度も。奇妙なほどに規則正しく、奇妙なほどに大きな音で、血が滴る。その音が、市子のささやき声と混じり合う。

「市子ちゃん」

永井は、市子の肩に手を置いた。

市子のささやきが止まった。

その瞬間、ぞくりとした感触が永井の身体を駆け抜けた。まるで海の底に沈んだかのように、全身が凍える。思わず手を離れた。触れたのはほんの一瞬だが、それだけで手が凍りついてしまったかのような錯覚を覚える。

「……どうして、私たちをおいて行ったの？」

それまでずっと聞き取れないささやきを続けていた市子が、突然、

はつきりとした声を上げた。

「……え？」

思わず聞き返す永井。

「淋しかったよ……ずっと、海の底で」

背は向けたまま、市子はそう続けた。

永井は答えることができない。意味が判らなかつたのだ。私たちをおいて行つた、ずっと海の底、いつたい、何を言っているのだろうか？

「ねえ……仲間はずれにしないで……」

とまどう永井に構わず、市子は言う。誰かに話しかけているような声になった。誰に？ 判らない。部屋には永井しかいないが、市子は背を向けたまま、こちらを見ようともしない。ずっと、窓の外を見たまま。もちろん、窓の外にも、誰もいない。

「早く……みんなといっしょになりたい……いっしょになりたいよ……」

その声が、徐々に弾んでくる。笑っているように思えた。感情の變化がおかしい。気が動転しているのだろうか？ 恐怖で混乱しているのかもしれない。

「落ち着いて、市子ちゃん。もう大丈夫だから」

「ごとんと、音を立て、包丁が畳に落ちた。あまりにも大きな音だったので、永井は思わず身を竦めてしまう。」

「あは……あはは……」

市子は、笑い始めた。

「市子……ちゃん……？」

振り返つた。笑っていた。狂人が浮かべる笑みだつた。笑いながら、闇人のそばに落ちている機関拳銃を拾つた。

「市子ちゃん、そんなの拾つちゃ、危ないよ。そこに置いて」

市子は、永井の声など聞こえないかのように、笑いながら拳銃を持ち。

「あは……あはは……あははは!!」

銃口を、永井に向けた。

とつさにその場に伏せる永井。たたん、と、銃声が響いた。同時に、市子の身体は銃の反動で倒れた。銃弾は当たっていない。永井は市子が倒れている隙に部屋を出た。階段を下りようとして、びくんと身体が震える。階下から、拳銃を持った闇人が上がって来たのだ。永井は素早く機関拳銃を構えて引き金を引くが、からからと空回りをする音がする。弾切れだ。社宅に入る前に銃を乱射し、そのまま再装填していなかった。闇人が拳銃を向ける。引き金が引かれる前に、永井は屋上へと向かう階段へ走った。

「——あははははは!!」

笑い声をあげながら、部屋から市子が出てきた。玄関の前で闇人と遭遇する。ちょうど、闇人が拳銃を構えたところだ。そのまま引き金が引かれた。四度、銃声が出た。そのすべてが、市子の身体に命中した。市子の笑い声が途絶えた。

「市子ちゃん!」

叫ぶ永井。

市子は、よろよろと数歩あとずさりをしたが。

「……あははははははは!!」

再び狂笑が響く。笑いながら、闇人に機関拳銃を向け、引き金を引いた。闇人の身体が踊るように震えた。銃声が止むと、闇人も倒れる。市子は満足そうに倒れた闇人を見ていた。やはり笑っている。四発の銃弾を受けたはずだが、まるで痛みを感じていないかのようだ。傷跡を見ると、みるみるうちに塞がっていく。この島では不思議な力で傷が治るのが早い、それでもあり得ない早さだ。その上、身体は傷だけでなく、服に開いた穴まで塞がっていくではないか。

階下から、もう一体闇人が上がって来た。市子と同じ機関拳銃を持っている。市子も銃を構えるが、闇人の方が早かった。十数発の銃弾が、市子に撃ち込まれた。それでも、市子は倒れない。逆に、機関拳銃を撃ち返す。闇人は、簡単に倒れた。

「あはははははははは! たーのしい!!」

歡喜の声を上げ、市子は階段を下りていった。

永井は——。



永井は機関拳銃の弾倉を交換し、市子の後を追った。

社宅の出入口前の闇人はよみがえっていた。先に外に出た市子に向けて、小銃と機関拳銃を撃つ。だが、やはり市子はものともしない。反撃して倒した。イ棟の屋上やベランダの闇人も狙撃してきたが、それでも市子は倒れず、逆に撃ち返す。

いったいどうなっている？ 市子はすでに何十発も銃弾を受けているが、わずかに怯むだけで、痛みを感じる様子もなく、傷もすぐに塞がってしまう。あれでは、どちらが化物か判らない。

市子はそのまま北東へ向かって走った。出会う闇人は、手当たり次第に撃ち殺していく。弾が切れたら相手の武器を拾い、また撃つ。闇人を倒しながら、やがて市子は敷地内の北東部へ着いた。フェンス製の扉から敷地の外に出ることができる。道の先には、高い山と、その頂に建つ巨大な鉄塔が見える。

「お母さん！ もうすぐ会えるね！」

鉄塔を見ながら嬉しそうに言う市子。そのまま走り、やがて姿が見えなくなった。

永井は後を追おうとしたが、行く手を闇人に阻まれた。すぐに機関拳銃を撃って倒したものの、北東のフェンス扉付近には、市子を追って来た闇人が多数集まっている。それぞれが小銃や機関拳銃を持ち、中には巨体闇人の姿も見える。永井が持つ機関拳銃の弾倉は、いま取り付けてあるものが最後だ。他の武器は拳銃しかなく、こちらは予備の弾も無い。発煙筒などの装備もさつき使ったのが最後だ。これであの闇人共を倒し、市子を追うのは不可能だろう。

仕方なく、永井はその場を離れた。南東へと向かう。そこにもフェンス製の出入口があり、外に続く道は、大型のフェリーが座礁した森へと続いている。

永井は敷地から脱出すると、森へ向かって走った。

第六十六話 『真実』 矢倉市子 夜見島／第2砲台  
跡 5:54:58

☆

その日、藤田茂は警ら用の自転車に乗り、三逗港近辺を巡回していた。この地区の交番員となって、間もなく三ヶ月。事件や事故と呼べるものは、一件も発生していない。港と言っても、近隣の島を巡る小さな定期船が一日数便発着する程度のもので、あとは小さな漁港が点在するだけの寂れた地域だ。強盗や殺人・誘拐などの凶悪事件など皆無で、空巢やひったくりといった犯罪も、少なくとも十年以上発生していないそうさ。主な仕事は、こうして街を巡回することである。それも、一人暮らしの老人を訪ねたり、定期船に乗り遅れて困っている人がいないかを確認するのが目的だ。あとは、自転車の二人乗りをする中学生や、駐車禁止の場所に車を停めている住人を注意するくらいである。ほぼ毎日その繰り返しで、この三ヶ月で発生した最も大きな事件は、酒に酔って喧嘩を始めた漁師を仲裁したことだろう。三ヶ月前まで県警の三課で大いに手腕を振るっていた藤田にとっては、考えられないほど退屈な毎日だった。

藤田が警察官となつてから、もうすぐ四十年になる。そのほとんどを、県警の三課に勤めていた。三課で扱うおもな事件は、窃盗・スリ・ひったくりである。事件が発生しない日はほぼ無く、多くの事件を解決し、数えきれないほどの手柄を立ててきた。三課で扱う犯罪は再犯率が高い。逮捕した犯人が有罪となり刑期を終えても、また同じ罪を犯して服役し、それを繰り返す者が多いのだ。そのため、出所した後面倒を見て、二度と罪を犯すことの無いよう更生させるのも重要な仕事だ。多くの犯人を逮捕してきた藤田は、同時に多くの犯罪者を更生させた。その働きが認められ、現場一筋のノンキャリアながら、警部補になることができたのだ。

しかし、三ヶ月前、藤田は護送中の窃盗犯を逃亡させてしまうとい



う失態を犯した。

この、たつた一度の失態で、彼はそれまで築き上げてきたものをすべて失った。警部補から巡査部長へ降格され、この寂れた港街の交番へ左遷されたのだ。今は家族とも離れて暮らしている。同い年の妻と、高校三年になる一人娘は、藤田と一緒にここで暮らすことを拒んだ。それは単身赴任ではなく、別居状態と言っている。ずっと仕事ばかりして家族を顧みることなどなかったから、それも当然と言えた。家事や子育ては妻に任せきりだったし、結婚記念日や誕生日を祝ったこともない。娘の授業参観や運動会、入学式・卒業式などの学校行事に顔を出したこともない。四年前、妻は病に倒れ入院したが、ほとんど見舞いに行くこともなかった。その入院は三年にも及び、手術・入院・リハビリの費用は、それまで藤田ががむしやらに働いて貯めた貯金をほぼ使い果たすほどであったが、それを知ったのは左遷が決まった後だ。それが原因で娘が大学進学を諦め就職を希望していると知ったのもそのときだ。妻がなんの病気だったのかは、今も知らない。

—— 私たちは、お父さんには頼らないで生きていきます。

あのととき娘から言われたその一言は、今も、藤田の胸の奥に刺さっている。

藤田は、職場にも、家庭にも、居場所を無くしたのだった。

巡回を終え、交番へ戻った藤田。あとは日誌を書き、夜勤の者に引き継いで、今日の勤務は終了である。机に向かい、日誌を開く。今日も事件と呼べるほどのことは起こっていない。まず日付を記入すると、一行目に、いつもと同じ言葉を書いた。

—— 地域をパトロール。異常なし。

ペンを止める藤田。この言葉を書いたたびに、藤田は思う。はたしてこの地域に、警察官は必要なのか、と。

重大な犯罪など起こるはずがない。酔っ払いの喧嘩を仲裁するのが関の山だ。住人は出かける時にも鍵を掛けない。それどころか、玄関や窓さえ開けっぱなしだ。それでも、十年以上空巣も窃盗も無い。交通量が少ないから事故も起こらない。二人乗りや駐車違反をした

ところで、その行為に迷惑している人などいないのが本当のところだ。

この地域は、警察官などいてもいなくても変わらない——三ヶ月の勤務で、藤田はそう確信した。

藤田は大きく息をつく。

さらに、ペンを走らせる

——本日は一日中晴天。ただし、昼過ぎから風が強くなり、波もやや高くなった。東の空にはやや雲が多い。天気予報によると、明日は午後から雨になるという。漁師たちには、明日海に出るとき注意するように告げた。

ペンを止め、藤田は小さく笑う。海の知識は彼らの方がよほど豊富だ。自分のような素人が口出しするまでもないだろうが、それでも彼らは、藤田の注意を嫌な顔ひとつせず聞いてくれた。

さらにペンを進める。

——三丁目の鈴木のおばあちゃんは、最近体調が良いようだ。食欲もあり、朝夕の散歩を楽しむまでになっている。ただ、明日は雨が降るから、またひざが痛みだすかもしれない。先日渡した湿布が効いたと言っていたから、また持って行ってあげよう。

——子供たちが神社でかくれんぼをしていた。その際、やんちゃ坊主が一人、社の屋根にあがっていたので、バチが当たるぞと注意しておいた。もつとも、私も子供の頃は境内で爆竹を鳴らしたり立小便をするなどしょっちゅうだったので、人のことは言えないのだが。

藤田のペンは止まらない。事件は皆無だが、書くことは山ほどある。

県警に勤めていた頃は、書類仕事などする暇がないほど忙しかった。事件は後を絶たず、それを次々と解決していくことを誇りに思っていた。

それに比べ、ここでの勤務は退屈そのものだ。事件は何も起こらず、警察官がいる必要もない。

だがそれは、この地域の治安が良いことを意味している。

なにも事件が起こらず、警察官が暇を持て余す。それこそが地域と警察の理想の形ではないか——藤田は、そのことに気がついた。

降格され、左遷され、家族にも見捨てられ、あの日、藤田は全てが終わったと思った。事件が発生しない地域の交番に勤務すること、何の意味があるのかと、投げやりな気持ちになった。がむしやらに働いた結果がこんな何も無い地域での暮らしなのかと、惨めな気持ちになった。

しかし。

この交番に来て、藤田は知った。

目の前に広がる海の広さを、藤田は知った。

見上げた空の、どこまでも広がる青さを、藤田は知った。

藤田の生まれ故郷の島も、ここと同じくらいの小さな漁村だ。景色も、こことほぼ変わらない。若い頃はそれが当たり前で、なんとも思わなかったが、それこそがこの地域の財産であると、藤田は今になって知った。

そして。

「お巡りさん、今日もパトロールご苦労様です。どうぞ、上がってお茶でも飲んでいってください」

「お巡りさん、今日はええ鯛がとれたけえ、帰りにうちによつてくださえ。うまい酒用意ときますわ」

「お巡りさん、昨日は酔っぱらってケンカしてすんまへんでした。アイツは頑固で気が短みじうてすぐに手え出ささかい、ホンマ困ったヤツですよ。ガキの頃からずっとそうなんです。これやから巨人ファンはアカンのですわ」

「お巡りさん、うちのバカ息子がまた迷惑かけたようで、ホンマすみません。今度なにかやらかしたら、遠慮のう逮捕して、二・三日牢屋にぶち込んだってください」

「お巡りさん、いつもありがとうございます。お巡りさんがいてくれるおかげで、この辺は事件や事故が無くて、ホント、助かってます。これからもよろしくお願いしますね」

地域の人々の温かさに、藤田は涙した。

確かに、この地域の治安は良く、警察官がいなくとも、犯罪など起こらないであろう。

だが、ここには、間違いなく藤田の居場所があった。

ここは、藤田が心から住みたいと思う場所だった。

いつかこの街で、妻と娘と、一緒に暮らしたい——そう思える場所だった。

先日、藤田は非番の日を利用して、久しぶりに家族の元へ帰った。嫌がる娘をなんとか言い聞かせ、一緒に夕食を食べた。そのとき藤田は、この街の海の広さを、空の青さを、そして、人々の温かさを話した。妻も娘も終始無言で、話を聞いているのかどうかも判らなかつた。食事が終わり、家を出た時も、見送りはなかつた。

ただ。  
忘れ物をしたことに気付き、家に戻ると、娘が妻と話す声が聞こえた。

——お父さん、なんか明るくなったね。

その一言で、藤田は泣いた。

その一言で、藤田は家族への愛を思い出した。

その一言で。

もう一度、必ず、家族三人で暮らす——そう、胸に誓った。

——しかし。

その、彼のささやかな望みは、叶うことはなかった。

☆

夜見島北部にある古い要塞跡で、藤田は血まみれになって倒れていた。そばには、藤田に包丁を突き立てる矢倉市子がいる。狂ったように笑いながら、包丁を振り下ろす。執拗に、何度も何度も、藤田の胸を、腹を、包丁で刺す。少し前までは、まるで冬空の下に放り出された子猫のように怯え、震えていた少女が、今は悪鬼のような形相で、藤

田の身体を引き裂く。なぜ、市子は突然豹変したのか。藤田には思い当たることがあった。

「そうか……あんたがああ……姿を盗む化物か……」

藤田は、市子の禍々しい笑みを見つめ、つぶやいた。

夜見島には、『海で死んだ者が帰って来ても、決して家にあげてはいけない』という言い伝えがある。海に住む穢れは死者の姿を盗み、その姿を模して現れることがあるのだ。市子は、遭難したブライトウィン号の乗客だと言っていた。おそらく、本物の市子は海に落ちて死んだのだ。いまここに居る市子は、海に住む穢れが姿を模した姿なのだろう。

やはり、自分はどことん運が悪いようだ。

がむしやらに働くことが家族のためと思っていたが、それが原因で家族を失った。

良かれと思つて窃盗犯を母親に会わせたが、それが逃走を許す結果になってしまった。

そして。

上陸禁止の島に謎の女がいるという話を聞き、管轄外だが調べることにした。自分の手に負えることではないと判っていたが、島の穢れについて調べようとした。

その結果。

偶然保護した少女が穢れそのものであり、命を落とすことになった。

全ての行為が悪い方向へ進んでしまったように思う。何かひとつでも違った行動をしていれば、こんな結果にはならなかったかもしれない。思えば、昔からずつとそうだった。余計なことに首を突っ込んで厄介ごとに巻き込まれる性格は、やはり死ぬまで直らなかつた。

執拗に包丁を振り下ろす市子の姿が、娘と重なる。これは、家族を顧みなかつた自分への罰なのだろうか。娘も、父親のことを殺したいと思うほど憎んでいたのだろうか。

——すまんなあ、朝子。

最後の娘への詫びの言葉は、もはや声とも呼べないわずかな吐息と

なり、市子の狂笑に飲み込まれて消えた。

☆

我に返った矢倉市子は、血まみれで息絶えている藤田茂と、返り血を浴びた自分と、そして、手に持った血まみれの包丁を見て、悲鳴を上げて包丁を投げ捨てた。ちがう！これはあたしがやったんじゃない！これはあたしじゃない！！だって、あたしはあのととき死んだ！！あたしは、あたしじゃない——。

そのことに気がついた市子は。

「——いやああああ！！」

絶叫と共に、その場を走り去った。

第六十七話 『幻視』 一樹守 夜見島／瓜生ケ森

0:01:08 終了条件2

突然赤い着物を着た女に掴み掛られ、瓜生ケ森の中を逃げる一樹守と岸田百合は、屍人共が大勢徘徊する夜見島金鋤採掘所跡へ逃げ込んだ。幻視の能力を駆使しながら採掘所内を進むも、車庫付近は大勢の屍人が警戒しており、進むのは危険だった。脱出方法を探し地下の坑道へ下りた二人は、管理事務所内でボールを発見する。これを使って送風機管理室の壁板をはがせば脱出できるだろう。地上階へと戻ろうとした一樹だったが、天井のダクト内に赤い花の髪飾りがあるのを見つけた。それは、あの赤い着物を着た女がつけていたものだ。なぜ、あんなところにあるのだろうか？

◇

一樹は幻視を使い、ダクト内の気配を探った。格子状の排気口に置かれた髪飾りを、じつと見つめている視点があつた。屍人だろうか？ダクトは、平均的な成人男性程度なら這って進める大きさだ。屍人が中に入ることは可能だろう。しかし、ダクトは接合部がところどころ腐食しており、衝撃を与えればすぐに外れそうだった。人の体重を支えられるとは思えない。では、中にいるのはなんだ？ しばらく幻視で観察を続けていると、視点の主は手で顔を拭いた。その手は黒く短い毛でおおわれており、爪は鋭く、手のひらには肉球がある。さらには、耳を澄ますとごろごろと喉を鳴らす音も聞こえる。

——猫か？

そう思った。その仕草から、恐らく間違いのないところだろう。ただの猫がダクト内に隠れているのなら、何の問題もない。だが、一樹の脳裏に、ひとつの考えがよぎった。

一樹は幻視をやめ、百合を振り返った。「百合ちゃん、屍霊は、人間以外の死体にも憑りつくことができるのかな？ 例えば、猫とか」

突然の質問に目を丸くする百合。しばらく戸惑った表情をしていたが、やがて顎に指を当てて考えた後、言った。「……そうね、そういう例は見たことないけど、理論上は可能だと思う。屍霊が人間の死体を『殻』として選んだのは、地上でもっとも広い範囲に繁殖しているから。地上で行動するうえで、『殻』として最も適しているのが人間だと考えたのよ。だから、別に人間じゃないとダメってわけじゃないはず。猫の死体にだって、憑りつこうと思えばできると思うけど……でも、それがどうしたの？」

一樹は、頭上のダクトを指さした。「あの中に何かいる。猫みたいなヤツだ。あれは、『ヤミピカリヤー』かもしれない」

「ヤ……ヤミピカリヤー……？」

ますます目を丸くして戸惑う百合に、一樹は説明する。

「夜見島に出現すると言われていたUMA・未確認動物だよ。巨大な猫の姿をしていて、二足歩行をするとか、光物を集める習性があるとか、鋭い爪で人を襲うとか、いろいろな噂がある。以前、俺の出版社の別の部署で特集したことがあるんだ。ワナを使って捕獲しようとしたんだけど、突然暗闇から大きな獣が襲ってきて、その編集者は怪我をしたらしい」

「そ……そうなんだ……怖いね……」

「そのヤミピカリヤーの正体は、猫の死骸に屍霊が憑りついたんじゃないかと思うんだけど、どうだろう？」

「えっと……どうだろうって言われても、あたしにはわかんないけど……」

「ヤミピカリヤーの噂が流れ始めたのは、二十年くらい前からなんだ。さつき百合ちゃんは、屍霊は海から来て、人の死体に憑りつく、って言ったよね？ でも、二十九年前の島民失踪事件以降、この島には誰も住まなくなつた。屍霊が憑りつく死体が無いんだよ。だから屍霊は、仕方なく、島で死んでいた猫に憑りついて行動するようになった。それが、好奇心から島に上陸した人に見つかり、ヤミピカリヤーの都市伝説が生まれた……俺は、そう思う」

「そうかもしれないね……うん。守がそう思うのなら、あたしもそう



だと思う」

「もし、屍人化した猫がダクトの中にいるとしたら危険だ。送風機管理室で作業している途中、襲われるかもしれない」

「そ……そだね……」

「だから、先手を打って倒しておこうと思う」

「どうやって?」

二人はダクトを見上げた。かなり高い位置にあり、ボールや火掻き棒を使っても、届きそうにない。

一樹はしばらく考えた後、言った。「いい手がある。少し手間がかかるけど、いいかな?」

さつきからなに言ってるのこの人? と言わんばかりの顔をしていた百合だったが、コホンと咳払いをすると、表情を引き締めた。「守の好きにしていよいよ。あたしは、大丈夫だから」

一樹は百合を連れてその場を離れ、インクラインを上がって一階へと戻った。すぐ右手側に送風機管理室があるが、そこへは戻らず、まっすぐ進む。少し進んだ先に作業室がある。先ほど前を通り過ぎた際、中で屍人がサッカーボール大の石を磨いていた。

作業室の前まで移動した一樹は、幻視で中の様子を探った。さつき通った時と同じく、屍人が石を磨いていた。時折出入口の方を振り返るものの、基本的には作業に没頭している。一樹は幻視をやめ、屍人が背を向けている間に静かに近づき、背後から火掻き棒で殴った。不意打ちが効き、屍人は一撃で倒れた。

一樹は作業台に置かれた石を見た。真っ黒なその石は、表面がつやつやと光るほど磨きこまれており、一見するとボウリングの玉のようである。両手で持ってみると、予想していたより重い。見た目以上に重量があるようだ。驚くべきことに、どの方向から見ても、歪みや欠けている箇所が無い。完全な球体に見えた。

そう言えば。

一樹は、夜見島へ渡る前の事前調査で、インターネットや古い新聞・週刊誌などの記事を読み漁ったのだが、その中に、四十年ほど前、金鉱発掘中に奇妙な石が発見された、というのがあった。その石は完全

な真円を描く球体で、しかも、発見されたのが五億年以上前の地層であつたことから、ちよつとした騒ぎとなつたのだ。真球を製造することは現在の技術をもつてしても困難であり、それが、人類誕生よりはるか以前に作られていたのだ。いわゆる、オーパーツである。当時は地質学者や考古学者の間でさんざん議論されたが、結局は誰かのイタズラということで決着した。

「それ、とても大切なものだから、気を付けてね」

石を観察していると、後ろから覗き込んだ百合が言った。

「百合ちゃん、この石のこと、知ってるの？」

百合は首を振った。「ううん。なんでもない。まあ、ちよつとやそつとの衝撃で壊れるようなものではないから大丈夫。それより、そんな物、どうするの？」

「これを使って、ヤミピカリヤーを倒すんだ」

一樹は作業室内を見回し、机の上にあつた工具箱を探つて中からモンキーレンチを取り出すと、石球を持つて作業室を出た。インクラインの前を通つて送風機管理室へ入る。室内の天井には、坑道内へ空気を送るためのダクトが通つているが、ここも地下と同じく接合部が外れかかっている。一樹は一旦石球を置くと、モンキーレンチを使ってダクトを外した。そして、石球を持ち上げ、ダクトの中に放り込む。石球が転がるゴロゴロという音が遠ざかり、やがて、猫を踏んだような鳴き声が聞こえ、同時に、食器棚をひっくり返したようなけたたましい音も聞こえた。幻視で様子を伺うが、さつきまでダクト内にいたヤミピカリヤーの視点は見つからなかつた。

「行つてみよう」

送風機室を出て、再び地下へ向かう。ダクトは石球の重さに耐えられなかつたようで、接合部が外れて天井から垂れ下がっていた。石球は地面に転がっていた。表面にべつとりと血が付いているが、ヤミピカリヤーの姿はどこにもない。逃げたのだろうか？

一樹は石球に付いた血を調べようとして、そばに髪飾りが落ちていゝることに気がついた。さつきダクト内にあつたやつだ。拾つてみる。椿の花を模した髪飾りで、花卉には、花が入つた六角形が上下左右に

並ぶ花菱亀甲はなびしぎっこうという模様の細工が施されている。かなり手が込んだ細工で、見るからに高価な品だ。

「守、もういい?」

後ろで百合が言った。その声は、どこか不機嫌になっているような気がした。

「あ、うん。アイツはいなくなったから、もう襲われる心配は無いよ。ゴメンね、時間かかっちゃったね」

百合は何か言いたげな表情をしていたが、出かかった言葉を飲み込むように一度頷くと、首を振った。「ううん、守が満足したなら、それでいいの。あたしは大丈夫よ。さあ、行きましょう」

二人はその場を離れ、送風機室に戻ると、ボールを使って壁板をはがし、そこから脱出した。

このとき。

一樹は、無意識のうちに、拾った髪飾りをポケットに入れてしまったのだが。

後に、それが彼を大いに苦しめることになる――。

第六十八話 『断末魔』 太田ともえ 夜見島／蒼ノ  
久集落 1：17：46

逃げた化物女を追ったものの、結局見失ってしまった太田ともえは、瓜生ヶ森を離れ、西の蒼ノ久集落へ来ていた。化物女を探さなければならぬのだが、ともえは、いつの間にか髪飾りを一つ落として、戻つて探してみたのだ。よそ者の男に突き飛ばされた時かと思ひ、戻つて探してみたが見つからなかった。そうなる、今から三時間ほど前、蒼ノ久集落から夜見島港へ向かう道で、化物女と揉み合いになった時かもしれない。……いや、あのとき髪飾りはあったように思う。いったい、どこで落としたのだろうか？ 他に心当たりは無いので、今夜通つた道をくまなく探すしかなかった。かなり広範囲を移動したので探し出すのは大変だが、絶対に見つけなければいけない。高価な品であることはもちろんだが、花卉に施された美しい細工模様がともえのお気に入りであり、なによりも、あの髪飾りは二十歳の誕生日に父が買ってくれた、とても大切なものなのだ。

「髪飾り……お父様の髪飾り……」

足元を懐中電灯で照らしながら歩くとともえ。高台の社から漁港まで続く急な下り坂だ。斜面に張りつくように造られた道は幅が狭く、腰よりも低い手すりの向こうは崖のような状態だ。少し足を滑らせただけでも転落しかねない。雨の降る夜、着物と草履で歩くのは避けた方がよい場所だが、あの髪飾りを見つげるためなら、危ないなどと言つてはいられない。ともえは、道を隅々まで照らしながら坂を下る。左右に振られる懐中電灯の光は、砂利以外なにも照らし出さない。そのまま坂を下りていくと、道は途中から階段になる。その手前で、懐中電灯の光が、黒くくすんだものを照らした。漁師が履く長靴だった。誰か立っている。ゆっくりと懐中電灯を上げる。ポロポロの作業着にねじり鉢巻き、血の気の引いたどす黒い顔色に白く濁った目、頭部が大きく陥没し、右腕は関節が逆に折れ曲がり、左手の肉はこそげ落ちて骨がむき出しだ。死体に穢れが憑りついた化物・屍人

だ。

「……なによ……なんなのよ……あたしは太田常雄の娘よ？　あたしに手を出したら、お父様が許さないから！」

強がり、声を張るともえ。父の名を出せば誰もが震えあがるし、そもそも太田家の娘に手を上げる者などこの島にはいないのだが、もちろん、そんなことが屍人に通じるはずもない。屍人が一歩近づいた。だが、二歩目を踏み出したところで足がぐんと折れ、派手に転んだ。かなり身体の損壊が激しいから、骨が折れていたのかもしれない。これなら襲われることはないだろう。安心し、せせら笑うように唇の端を吊り上げたともえだが、その表情が凍りつく。屍人の身体から、もやもやとした黒い煙のようなものが抜け出したのだ。屍霊が身体を離れた。ともえに近づいて来る。損壊の激しい身体を捨て、新たな身体を求めているのだ。流動する煙のような姿が何かの模様のように見える。それが一瞬、人が笑っている顔に見えた。

「ひいっ!!」

短い悲鳴を上げ、ともえは懐中電灯を投げた。でたらめに投げた懐中電灯は屍霊にかすりもしない。走って逃げるともえ。もちろん、着物と草履ではうまく走れない。

「誰か！　誰か来て！　化物が！　化物がここにいるわ!!」

叫び、助けを呼ぶが、誰も応えてくれない。ともえは明かりもない斜面の細道を、がむしやらに走る。

どん、と、背後から強い衝撃があった。

屍霊に体当たりをされた——そう思った瞬間、ともえの身体は奇妙な浮遊感に包まれる。それも一瞬だった。背中から腹を貫く鋭い痛みと共に、背骨がへし折れるかと思うほど身体がのけ反る。あまりの痛さに体勢を変えようとしたが、さらなる痛みが全身を駆け巡り、思わず悲鳴を上げた。痛みから逃れようともがけばもがくほど、さらに強烈な痛みが襲う。どれほどもがいても、体勢を変えることができない。腹を見ると、太い鉄の棒が身体を貫いていた。崖から落下したともえは、民家の屋根のアンテナに、背中から突き刺さったのだ。

「痛い！　誰か！　誰か助けて！　痛い！　痛い！」

気が狂いそうなほどの激痛だった。叫び、助けを求めても、誰も応えない。次第に呂律が回らなくなる。発する言葉は意味をなさないものとなり、声もかすれてくる。さらに大きな声を出そうとしたら、声ではなく血を吐いてしまった。やがて、身体も思い通りに動かなくなった。同時に、痛みも感じなくなる。意識も薄れる。

「た……す……け……」

ついに、声は出なくなり、もがいていた手足が、だらんと垂れ下がる。目がかすむ。何も考えられなくなる。

意識が途絶える寸前、ともえは、近づいて来る屍霊を見た。

やがて。

屍人としてよみがえったともえは、大きく身体を振ってアンテナを折った。勢いで屋根から転げ落ち、全身を強く打つ。が、何事もなかったかのように立ち上がり、身体を貫いていた鉄の棒を抜き取った。

「髪飾り……化物女……かみかざり……ばけものおんぬわ」

呪文のように、ふたつの言葉を繰り返し口にするともえ。南東の方角を見た。森が広がる瀬礼洲地区だ。そこに、あの女の気配を感じる。

「ばけもぬお……おんんうら……ぶわけむおのおんぬわあ……」

ともえは、瀬礼洲方面へ向かった。

第六十九話 『憎悪』 一樹守 ブライトウィン／甲板 15:04:44 終了条件2

十九年前に消息を絶った大型客船・ブライトウィン号を発見した一樹守は、生存者がいないか船内を探索したが、明かりが消された船内には闇人や闇霊がうろついているだけだった。生存者はいないと判断した一樹は脱出しようとするが、途中、四足で歩行する闇人と遭遇する。通路で髪飾りを探していた四足闇人だが、一樹の姿を見ると襲い掛かって来た。拳銃は通用しない。通路からエントランスへ逃げた一樹は、カウンター内に身を隠す。追って来た四足闇人は、ホール内を見回した。

◇

「髪飾り……お父様の髪飾り……返せ……髪飾りを返せ……」

四足闇人はホール内を徘徊し始めた。通路へ戻る様子は無い。このままではいずれ見つかってしまう。なんとかしなければ。

四足闇人の正面は装甲車のように頑丈で、拳銃では傷ひとつつかなかった。なら、後ろからはどうだろう？ 一樹はカウンターから顔を出し、様子を伺う。四足闇人の上半身は横倒しのドラム缶のように巨大化しているが、下半身は赤い着物に草履履きと、人間とほとんど変わらない姿だった。その格好には見覚えがあった。サイレンが鳴った直後、森の中で岸田百合に掴み掛り、その後屍人化して遊園地まで追って来た着物女だ。あいつが闇人と化し、さらに進化したのか。だが、あの下半身なら拳銃が通用するかもしれない。一樹は拳銃に弾を装填しつつ様子を伺い、四足闇人が背を向けた隙に、ホールへ飛び出して拳銃を撃った。一発目は外れたが、二発目が命中した。大きくのけ反る四足闇人。思った通り、後ろからの攻撃は有効だ。さらに引き金を引く。三発中二発が命中し、四足闇人は甲高い悲鳴を上げて倒れた。一樹は大きく息を吐く。とりあえず倒すことができたが、再び闇

霊が憑りつけば復活する。今のうちに船から脱出しよう。拳銃に弾を込め、ホールから出ようとしたが、びくんと身体が震え、一瞬自分の背中が見えた。振り返ると、いま倒したばかりの四足闇人がよみがえっている。

「髪飾り……髪飾りを返せえ!!」

突進してくる四足闇人。正面からの攻撃は効かない。一樹はホールを走り、奥の階段を駆け上がった。四足闇人は素早い、急旋回や階段の昇降が得意ではない。一樹は二階へ上がると、通路を走って手前の客室へ逃げ込んだ。四足闇人が追って来たが、一樹の姿を見失ったように、客室の前を通り過ぎた。一樹は客室を出て、背後から銃を撃つ。残り四発中三発が命中し、四足闇人は倒れた。

だが、その場を去ろうとしたら、またすぐに闇人が起き上がった。幸い気付かれる前に客室に身を隠したが、あまりにも復活が早い。どうなっている？

そう言えば……。

以前岸田百合が、何かに執着している屍人は屍霊を引き寄せやすく復活が早い、と言っていた。あの着物女は、屍人のときも復活が早かったのだ。理由は判らないが、異様に百合に執着しているようだった。闇人も同じなのだろうか？ しかし、百合はもういない。一樹は森で着物女を突き飛ばしたが、まさかあれを恨んでいるのだろうか？

よみがえった四足闇人は一樹を探し始める。一樹は残りの銃弾を確認する。自衛隊員の闇人から奪った銃弾は、あと三発しかない。これではあと一度倒せるかどうかだが、あの復活の早さでは、一度倒すだけではほとんど意味が無い。何か別の方法を考えなければ。闇人は、闇霊が死体に憑りつくことで動き出す。復活が早いということでは、それだけ早く闇霊が憑りついているということだ。ならば、先に船内の闇霊をすべて倒しておけば、もう復活できないだろう。名案だが、問題はどうかやって闇霊を倒すかだ。闇霊は銃を撃たずとも鈍器で殴れば比較的簡単に倒すことができるが、船内全ての闇霊となると、数が多すぎる。全てを殴り倒す間に、四足闇人に襲われかねない。あとは、ライトを当てて倒す方法だが……。



——そうか、光だ。

一樹は客室を出て通路を走った。四足闇人に見つかったが、客室の廊下は狭く、小回りが利かない四足屍人に追いつかれることはない。そのままホールの階段をくだり、通路へ出て地下へおりる。右舷から左舷へ向かう通路の中央には、機関室と機関制御室に入るふたつのドアがある。一樹は機関制御室の中に入ると、ドアに鍵をかけた。ドアは金属製で重量のあるものだ。鍵を掛ければ、破るのは困難だろう。

一樹はライトで室内を照らした。押しボタンや切り替えスイッチ、計器類やモニターなどが付いた機器が並んでいる。目的は、船の主電源だ。

一樹は、船内の全ての明かりが消えていたのを確認している。その他の電気設備もすべて使えなかった。恐らく主電源が落とされているのだ。それを入れれば、船内の明かりが点くはずだ。それだけで多くの闇霊が倒せるだろう。

一樹は室内を探索し主電源を見つけると、オフになっていたスイッチをオンにした。機関制御室内が明るくなる。同時に、計器類も動きはじめた。その中に船内カメラのモニターがあったので、それで船内の様子を確認する。思った通り、多くの闇霊が身体を焼かれ消滅していった。中には客室のベッドの下など光が届かない場所に隠れるやつもいたが、明かりを点けていけば、行動はかなり制限されるだろう。今のうちに四足闇人を倒さなければ。一樹はモニターの中から四足闇人の姿を見つける。ちょうど、機関制御室前の廊下にいた。倒すには背後から銃で撃たなければならないが、弾は三発しかなく、一発も外すことはできない。今まで通りの戦い方では仕留めそこなう可能性が高い。確実に背後から狙うために、何か策を用いなければ。

一樹はさらに室内を探り、機器類の中に船内通話用の電話を見つけた。受話器の横に、エントランスホール、操舵室、救護室、機関室など、船内各所に繋がるボタンがある。一樹は受話器を取ると、機関室のボタンを押した。機関室は、この機関制御室の正面の階段を下りたところだ。電話が鳴る音が聞こえる。モニターで四足闇人の様子を確認すると、電話の音に気付き、機関室へと走って行った。階段を下

り、電話の前まで移動すると、じつと見つめて動かなくなった。今がチャンスだ。

一樹は電話を切らずそのままにして機関制御室を出ると、静かに機関室へ入った。階段の下に、背を向けた四足闇人が見えた。一樹は銃を構え、慎重に狙いを定めると、引き金を引いた。背中命中し、大ききのけ反る四足闇人。しかし、一発外してしまった。四足闇人は倒れない。もう弾は使い果たした。周囲を見回す。通路に消火器が設置されているのが見えた。とっさにそれを持ち上げ、四足闇人に向かって投げつけた。消火器は四足闇人が振り向く前に背中に命中する。四足闇人は甲高い悲鳴を上げて倒れた。

油断せず、周囲を見回す一樹。闇霊の姿は無い。復活が早かった四足闇人も。そのまま倒れたままだ。これで、しばらくは大丈夫だろう。一樹は大きく息を吐いた。後は、光が当たらない場所に隠れている闇霊を倒すだけだ。

第七十話 『反抗』 一樹守 ブライトウィン／操舵室 16:58:59

ブライトウィン号の最上階にある操舵室の隅で、一樹守は片ひざを立てて座っていた。何をするでもなく、何かを待っているわけでもなく、ただ室内を眺める。しいて言えば考え事をしているのだが、それは今ここで考える必要もないことだ。こんなところで時間を無駄にしている場合ではない。

着物女の四足闇人を倒し、隠れている闇霊も倒した一樹。全て、この船から脱出するためにやったことだ。早く脱出しないと新たな闇霊がやってくる可能性もあるのだが、どうしても動く気になれない。どうも、何か行動を起こすたびに、事態が悪い方向へ進んでいるように思うのだ。

蒼ノ久集落で木船郁子と別れた後、一樹は、四鳴山の頂上にある鉄塔へ向かおうとしていた。その途中、偶然この森の中でブライトウィン号を発見したのだ。生存者がいないか確認するため中に入ったが、船内にいたのは闇人共だけだった。着物女の四足闇人に執拗に追われ、倒すために船内全ての闇霊を倒す羽目になった。その結果、大幅に時間を浪費してしまった。船内を探索しなければ、今ごろ鉄塔を登り、運が良ければ先端部に到達できていたかもしれない。もうすぐ夕方の方の五時、日没まであと二時間ほどだ。夜になれば闇人共の脅威は格段に増すだろう。そうになると、鉄塔へ向かうことすら簡単ではない。船の探索は、事態を悪くしただけだった。

冥府から生還し、遊園地から脱出しようとした時もそうだった。冥府の門を封じるために園内の石碑を破壊したが、それが、かえって門を大きく開く結果となった。あれも、一樹の行動が事態を悪くしたのだ。思えば最初からそうだ。島で出会った素性も判らぬ少女を助けようとした結果、あの闇人共を解き放ってしまったのだ。常に行動が裏目に出る。いつそ、このまま何もしない方が良いのではないか……そんな気さえしていた。

突如銃声が鳴り、一樹はそばに置いていた鉄パイプを取って構えた。出入口を見る。全身に黒い布を巻きつけた芋虫状の化物・閻霊が、キィキィと奇声をあげて消滅するところだった。船内の閻霊はすべて倒したと思っただが、まだ残っていたのか。

「――油断していると、あつという間にあいつらの仲間入りだぜ」

キザったらしいセリフと共に入って来たのは、小銃を持った迷彩服の若い男だった。見覚えがある。昨夜、赤い津波が島を飲み込む直前に、森の中で出会った自衛官の男だ。

一樹は鉄パイプを下ろし、「あんた、無事だったのか」と言った後、小さく首を傾けた。男は一人だった。森で会った時は、もう一人、大柄の男がいたはずだ。

「相方はどうしたんだ？ あんたの上官の」

一樹がそう言うと、男は不愉快そうに顔を歪めた。

「あんなヤツ、相方でも上官でもない。この非常時に女のケツを追い回してたから、ぶっ殺してやったよ」

もちろん冗談だろう。そう思い、「そうか、清々したよ。アイツは、俺も気に入らなかつたんだ」と、男の話に付き合う。

男は表情を変えずに続ける。「そっちこそ、あの岸田百合って娘はどうした？」

「なぜ名前を知ってる？」

「夜中にこの船で会ったんだ。結局いなくなっただけだな。そういや、あんたに見捨てられたって、泣いてたぞ？ なにがあつたんだ？」

フフ、と、一樹は自嘲気味に笑った。「言いたくないな。まあ、あの娘に関わって酷い目に遭ったとだけ言っておくよ。それより、黄色いパーカーの女を見なかったか？ 夏なのに長袖で、口の悪いヤツだ」

「……いや、見てない」

「そうか。無事だといいが」

一樹は再び腰を下ろした。男は一樹から目を離すと、無言で操舵室内を歩く。操縦桿や計器類、窓の近くにあるシグナリングライトなどを見て回った後、また一樹を見た。

「何があつたのか知らないけど、その、口の悪い女を探さなくていいの

かよ？ もうすぐ陽が暮れる。そうになったら、あのニヤケ顔の化物が、好き放題に暴れ出すぞ」

「そんなことは判ってるさ。でもな、どうにもやる気が起きないんだよ。この島では、何か行動を起こすたびに、事態が悪い方向に進んでいる気がするんだ」

男はまた顔を歪めた。「……あんた、アイツと同じことを言うんだな」

「うん？」

「いや、なんでもない」男は首を振ると、一樹を真っ直ぐに見た。「俺は、あきらめて全てを投げ出すなんて御免だ。カッコつけて語る暇があるんだったら、最後まであがいてみた方がいいぞ。映画とかじゃ、そういうヤツが、最後まで生き残るだろ？」

「実際の戦場じゃ、臆病者の方が生き残るって聞いたけどな」

「つべこべ言わずに、立てよ」

男は一樹のそばに立ち、腕をとった。無理矢理立たせられる。

「……強引なヤツだ」

「悪いな。一応自衛官だから、生存者を見つけてほっとくわけにはいかないんだよ。さあ、行くぞ」

男に連れられ、一樹は操舵室を出た。まあ、仕方がない。行動を起こすたびに事態が悪い方向へ進むとしても、何もせずはずっとここにいるわけにもいかない。

男は永井と名乗った。一樹は永井の後について階段を下りる。そのまま一階へ下りて乗降口から脱出するのかと思ったら、永井は二階の客室の方へ向かい始めた。

「どこに行くんだ？ 出口はそっちじゃないぞ？」

一樹が止めると、永井は振り返った。「いや、ちよつと調べたいことがあるんだ」

「調べたいこと？」

「少し前に、この船の生存者に会った。その子のことを調べたいんだ」「生存者？」

「ああ。中学生の女の子だ」

「中学生……？」

一樹はあごに手を当て考える。今の話し方からすると恐らく永井は知らないのだろうが、このブライトウィン号は十九年前に突如消息を絶った船だ。その生存者が現在中学生ということは、通常あり得ない。その少女が嘘をついているのでなければ、一樹が考えた通り、この船は十九年の時を超えてここに現れたということになる。

「……その子の名は？」一樹は訊いた。

永井は一瞬、そんなこと訊いてどうするんだと言いたげな顔をしたが、すぐに言った。「矢倉市子だ」

「矢倉市子……亀石野中学二年で、テニス部員の？」

「……知ってるのか？」

「……ああ」

一樹は頷くと、永井にこの船について話した、この船はブライトウィン号という名で、十九年前の八月二日、夜見島の近くを航行中、突如消息を絶ったこと。当時海上保安部や警察などが全力で捜索したが船体は見つからず、乗員乗客四十四名が現在も行方不明だということ。事件の内容からオカルトマニアの間では有名な話で、そのテの雑誌の編集者であり、近々夜見島の特集を組む予定だった一樹は、事件について当時の新聞や雑誌を取り寄せ徹底的に調べたこと。その新聞記事の行方不明者のリストの中に、矢倉市子という名が写真付きで載っていたこと。その矢倉市子が中学生のまま生存していたのなら、この船は十九年の時を超えてここに現れた可能性が高いこと。

話を聞いた永井は疑うような表情をしていたが、口に出して否定はしなかった。常識的に考えればあり得ない話だが、死体がよみがえり襲ってくるような状況では、常識など捨てざるを得ないだろう。まあ、今の話をどう受け止めるかは永井の自由だ。それよりも。

「他に生存者はいななかったのか？ その市子って子は、なんと言っていた？」一樹はさらに訊いた。

「船の中で何があったのかはよく覚えていないらしい。ただ、すごく恐ろしいことがあって、みんな死んだ、というようなことは言っていたな。かなり混乱している様子だったから、どこまで本当なのかは判

らないが」

乗客乗員がみんな死んだのなら、今ごろ化物となって行動しているはずだ。しかし、一樹がこれまでに見た屍人・闇人は島民と自衛官ばかりで、中学生やフェリーの乗務員など見たことがない。残りの四十三名の乗員乗客はどうなったのだろうか？ いったい、この船で何があったのか。調べてみる価値があるように思えた。

一樹は永井と共に二階の客室を調べる。二階は二等客室で、一部屋に二段ベッドがふたつずつ設置された四人部屋が並んでいる。一部屋一部屋調べていくと、三つ目の部屋のベッドの枕元で、朱色の石があしらわれたブレスレットを見つけた。内側に、イニシャルと思われるI・Yの文字が刻まれてある。永井によると、矢倉市子の持ち物だという。友人とお揃いで買い揃えたもので、もうひとつを市子が持っていたそうさ。

二階の客室ではそれ以上の収穫は無かった。二人は一階の客室を調べるため、エントランスの階段から下りる。

——うん？

階段の踊り場で、一樹はハートの形に折られ紙を見つけた。折り紙かと思ったが、表に『My Dear Nakajima-Kun』と書かれてあるのを見て、手紙であることに気がついた。昔、便箋を複雑に折り込み、ハートやセーラー服などの形にして相手に渡す行為が、小中学生の間で流行したことがある。一樹が小学生の頃もクラスの子がやっていた。恐らく、船に乗っていた生徒が作ったものだろう。宛名に書かれたナカジマという名には心当たりがあった。中島なかしま一郎いちろう。四十四名の行方不明者の一人で、こちらも新聞記事のリストに載っていた。

手紙を拾う一樹。他人の手紙を読むのは気が引けるが、手掛かりになることが書いてあるかもしれない。一樹は胸の内を持ち主に詫びると、手紙を開いた。

その手紙は、テニス部の女子マネージャーが部員である中島に宛てたものだった。大会で好成績を収めたことを喜ぶ文面に始まり、『カッコよかった』『素敵だった』『好きになって良かった』などという

言葉が頻繁に登場することから、二人が交際していたことが伺える。前半は、微笑ましくはあっても一樹の興味を引くような内容ではなかった。

しかし、後半を読み、一樹は息を飲んだ。

《……ずっと一緒にいたいけど、もしかしたら、もう一緒にいられないかもしれない。

すごく不安なことがあるの。

市子にも言えないこと。

中島君に言うのが怖い……。

でも、言わなきゃいけないから。

階段のところで待ってます。絶対に来てください。

From Noriko》

市子とは、矢倉市子のことだろう。この手紙を書いた少女は、矢倉市子と友人だったのだ。差出人の名はNoriko——ノリコ。その名前にも心当たりがあった。だがそれは、市子や中島ら行方不明者ではない。

ブライトウィン号には、乗員乗客合わせて四十五名が乗り込んでおり、うち四十四名が行方不明となっている。

つまり——一名の生存者がいる。

その生存者は、十九年前の八月四日夕方、夜見島沖を漂流していたところを、捜索中の海上保安部に発見された。当時は大々的に報道されたようで、一樹が取り寄せた多くの新聞や週刊誌の記事でその名を目にした。その生存者の名が、木船倫子のりこ。この手紙は、ブライトウィン号唯一の生存者が書いたものなのだ。

だが、一樹が息を飲んだのは、それが理由ではない。生存者の名前と、その手紙の内容に、何か引掛かっていたのだ。なんだ？ 考える。

——木船倫子……木船？

一樹の頭の中で、それが繋がった。

三逗港で出会い、冥府で異形の化物に囚われそうになった一樹を救



い、遊園地で共に石碑を破壊した女——木船郁子。

木船という名字は、かなり珍しいように思う。ひよつとして、この手紙の倫子と郁子は、血縁者なのだろうか？

そう言えば。

三逗港で船を探した際、一樹は、港でアルバイトをしていた郁子に取材を申し込んだ。聞けたのは雑談程度の話だったが、その際、郁子は春に高校を卒業したばかりだと言っていたのだ。ならば、彼女は恐らく十九歳。ブライトウィン号が失踪した年に生まれたことになる。そして、手紙に書いてある、不安なこと。それは友人にも言えないことであり、恋人に告げるのが怖いことであり、それが原因で二人は一緒にいられなくなるかもしれないことなのだ。考えられるのは、妊娠

。。

考えを振り払う一樹。名字が一緒だからといって血縁者であると考えるのは早計だろう。確かに木船という名字は珍しいが、地域によつてはありふれているのかもしれない。一樹自身の名字も全国的に見ればかなり珍しいが、地元には数十世帯住んでいる。確たる証拠もない話を繋ぎ合わせて想像を膨らませても、それは仮説にすらならないだけの妄想だ。一樹はこの問題を一旦保留することにし、永井を追つて一階の客室へ向かった。

一階は雑魚寝部屋の三等客室だ。そこも一部屋一部屋調べていくと、乗客の持ち物と思われるビデオカメラを発見した。小型のテープに録画する8ミリビデオカメラだ。テープはカメラの中に入っており、ラベルには『1986・8・1 Memory of Keichi & Tomoko』と書かれてあった。船が三逗港へ向けて出港した日だ。このビデオが十九年前の八月一日に撮影されたのなら、当時の船内の様子が判るかもしれない。カメラはモニター付きで、その場で再生することもできる。一樹はテープをカメラに戻すと、電源を入れ、再生ボタンを押した。

甲板でおどける若い女性の姿が映っていた。画質が悪いためはっ

きりとした年齢は判らないが、恐らく二十代か三十代。少なくとも中学生ではない。女性は撮影者の男性と天気や海の様子などたわいもない話をしていたが、やがて。

《船、いつ動くんだらうねー》

と、少し不安そうな顔で言った。船が停泊しているのだろうか？

女の言葉に、撮影者の男は《何かあったのかな？》と答える。《そういや、中学生が、『死体が見つかった』とか騒いでたな》

《えー？ なにそれ、こわーい》

《子供がバカなこと言っただけだと思っただけで、もしかして、ホントだったりして》

《そう言えば、あっちの方が、なんか騒がしいね》

《行ってみようぜ》

映像は激しくブレながら、右舷甲板へと移動する。救命ボートを下ろすボートダビットのそばに人だかりができていた。その多くが学生服やセーラー服を着た中学生だ。それらを、数人の船員が制している。

《近寄らないで、離れて！》

《ちよつと！ 子供たちをなんとかしろ！》

《引率の教師はどこだ！ 連れて来い！》

《下がって！ 下がってください！》

船員たちはみな苛立ち、怒声を上げていた。かなり緊迫した事態であることが伺える。本当に死体を引き上げたのだろうか？

《ねー、ケイちゃんいこうよー》

撮影者の腕が引つ張られたのか、カメラが大きく振られる。

《ちよつと待って。あれ、人だろ……？》

カメラが人だかりに戻った。その隙間から、人が倒れているのがわずかに見える。カメラはそこへ近づく。びしょ濡れの白い着物と、胸のあたりまで伸びた長い黒髪が確認できた。女性のようだ。

《——離れろって言ってるだろー！》

ひととき大きな声を上げ、船員が中学生の男子を強く押した。それで、人だかりが大きく割れ、倒れていた女の顔が映った。

「!!」

その顔を見て、一樹は目を剥いた。

《ちよつとそこ！ カメラやめてください！》

船員がこちらに向かつて来て、カメラのレンズを手で遮った。

映像は、そこで途絶えた。

「……おい、いまの女は……」

一緒に見ていた永井も、そのことに気付いたようだ。一樹は、無言で頷いた。

一瞬だけ映った、倒れていた女。船員の様子から、航行中水死体を発見し、引き上げたのだろう。問題は、その女の顔だ。見覚えがあったのだ。一樹にも、そして、永井にも。

だが、それは本当に一瞬の映像で、その上画質が悪い。見間違いということも考えられる。一樹はテープを巻き戻し、女の顔が映ったところで静止した。今度は、じっくりと確認する。そして、見間違いではないと確信した。

倒れている女の顔は、岸田百合と同じだった。

どういうことだ……一樹は思考を巡らせる。この船に、岸田百合と同じ顔をした女の水死体が引き上げられた。恐らく映っているのは鳩だ。地の底に追いやられた異形の生物が、地上の様子を探るために放った使い。その一人だろう。映像では死体と言っていたが、鳩は闇の住人だ。本当に死んでいたかは判らない。そして、その後船が消息を絶ったことに、無関係だとは考えにくい。この後なにが起こったのかを調べなければならぬ。一樹はテープを早送りするが、今の映像以外は何も撮影されていなかった。このビデオからは、それ以上の情報は得られそうにない。どうすればいい？ 考えて、すぐに思い当たった。船内には、いたるところに防犯用のカメラが設置されている。そのモニターが地下の機関制御室にあったことを思い出した。当然録画もされているだろう。それを確認すれば、船内で何が起こったのか

判るはずだ。

一樹は永井に説明し、地下の機関制御室へ向かった。

機関制御室のモニターは、一樹が四足の闇人と戦ったときそのまま映っていた。その近くに、録画用の機器がある。録画は停まっていたが、中にテープは入っていた。一樹と永井は顔を見合わせて頷くと、再生ボタンを押した。

モニターに映像が浮かび上がる。映像は、船内各所に設置されたカメラの映像が五秒毎に切り替わるタイプだ。二階客室の通路、エントランスの全景、地下へ下りる階段、と、次々と切り替わる。映っていない場所は当然死角となるため、防犯カメラとしては致命的な欠陥であるが、十九年前ならばよくある話だ。

映像は、八月二日の深夜二時のものだ。乗客は眠りにつき、船員も、夜勤の者以外は仮眠を取っている時間帯である。映像にはほとんど人影が無い。まれに機関室や操舵室に出入りする船員が映るだけだ。

だが、そのまま少し見ていると、エントランス横の地下へとおりる階段に、セーラー服の少女が座っているのが映った。誰だ？ と考え、すぐに思い当った。さつき拾ったハート形に折られた手紙の内容『階段のところで待っています』。いま映っている少女が木船倫子だろうか？

映像は切り替わり、今度は二階客室の通路が映った。その部屋のひとつから男子生徒が出てきた。周囲の様子を伺いながら、エントランスの方へ歩く。映像が切り替わり、エントランスを映し出した。そこにも、その男子生徒が映っている。さつきの女子生徒が待つ階段へ向かっているようだ。ならば、この男子学生が中島一郎か。映像が階段に切り替わると、思った通り男子生徒が現れ、女子生徒の隣に座った。中島一郎と木船倫子とみて間違いないだろう。

映像が切り替わる。通路を映し、エントランスを映し、階段を映す。中島と倫子が話をしている以外、特に変わった様子は無い。防犯用のカメラだから音声は録音されおらず、二人が何を話しているのかは判らない。

一樹と永井は、しばらく変化の無い映像を見る。

——と、映像が通路からエントランスに切り替わる寸前、通路の奥に、白くぼんやりした塊が見えた。一瞬であったため、何かまでは判らなかつた。

映像はエントランスから階段へ切り替わる。階段では、変わらず中島と倫子が何かを話している。

再び通路の映像に切り替わった。

そこに、白い着物で、胸まで伸びた黒髪の女が映っていた。

前かがみの格好で、ゆっくりと歩いている。長い髪に隠れて顔は確認できないが、その姿は、8ミリカメラの映像に映っていた死体と同じだ。

ゴクリ、と、永井が喉を鳴らす音が聞こえた。一樹の額を冷たい汗が流れる。あれは、船が引き上げた水死体の女だろうか？ 死体がよみがえり歩き出すことには慣れていたつもりだったが、それとはまた別種の恐ろしさを抱く。

映像がエントランスに切り替わり、階段に切り替わる。中島と倫子はまだ話している。通路に切り替わった。女の姿は無い。エントランスに切り替わる。女の姿が映った。ゆっくり、ゆっくりと、左右に体を揺らしながら、歩く。階段に切り替わる。二人はまだ話している。通路に切り替わる。誰もいない。エントランスに切り替わる。誰もいない。階段に切り替わった。中島と倫子が立ち上がった。話が終わったのだろうか？ 階段を上がろうとしたところで、通路に切り替わった。誰もいない。エントランスに切り替わる。誰もいない。そして、階段に切り替わる——誰もいなかった。一巡し、さらにもう一巡するが、どこにも、誰の姿も映らない。中島と倫子、そして、あの女は、いったいどこへ行ったのか？ 映像は死角が多い。映らないように移動することは不可能ではないだろうが、映像が切り替わるタイミングはモニターを見ないと判らないはずだ。偶然映らなかつただけなのだろうか？

一樹が考えを巡らせていると、映像は、通路、エントランスへと切り替わり。

そして、画面に張り付く女の顔を映し出した。

どくん、と、心臓が大きく血液を送り出した。背中を冷たいものが走る。永井が、低いうめき声をあげた。

映像は、すぐに通路に切り替わった。今のはなんだったのか？ 考える間もなく、エントランスに切り替わり、そして、再び女の顔が映し出される。目を剥き、唇の端をわずかに上げて薄く笑い、ゆっくり顔を傾ける。まるでこちらを覗き込んでいるかのようだ。見られている――そう感じた。考えを振り払う。向こうからこちらが見えるはずはないし、そもそもこれは過去の映像だ。そう考えても、カメラの向こうから強烈な視線を感じてしまう。

映像が通路に切り替わり、エントランスに切り替わる。

そして、白い着物の女が、ハンマーのようなものを振り上げている姿が映った。

思わず、頭をかばう一樹。

女がハンマーを振り下ろした瞬間、映像が切り替わった。再び通路、そして、エントランス。

だが、次に切り替わって映し出されたのは、ノイズだけだった。通路になり、エントランスになったところで、その映像もノイズとなる。

そして、最後の通路の映像もノイズに変わり。

そこで、全ての映像が途絶えた。

肺が新鮮な空気を求めていた。気付かないうちに息を止めていたようだ。大きく息を吸い込み、そして吐き出した。永井も同じように深く息をついた。

映像に映っていた白い着物の女はなんだったのだろうか？ 客室で見つけたビデオテープに映っていた水死体だろうか？ 死体がよみがえって動き回ることは、夜見島の近くならば充分あり得るだろう。そもそもあの女が鳩ならば、死んでいたかどうかとも判らない。

結局、監視カメラの映像からも、船内で何が起こったのかは判らなかった。ただ、あの白い着物の女が関係しているのは間違いない。

……そう言えば。

一樹は永井を見た。「なあ、あんたが見つけた矢倉市子って子は、ど

うなっただんだ？」

「あん？　なんだよ、急に」

「いいから教えてくれ。その子に、何か変わったところはなかったか？」

永井は大きくため息をついた。「変わったところだらけだよ。おかしなことばかり言っていた」

「具体的に説明してくれ。なんと言ったんだ」

「自分は船から落ちて死んだ。今いる自分は自分ではない。この海には姿を盗む化物がいる、とか」

「姿を盗む化物？」

「ああ。それで、その子、突然おかしくなったみたいに笑い始めて、機関銃ぶつ放して闇人どもを片っ端からやつつけて回ったんだ。それだけじゃない。闇人共に何度も銃で撃たれたが、死ななかつた。すぐに傷が治ってしまうんだ。俺は姿を盗む化物なんて話は信じちゃいないが、あれが何だったのかは判らない」

姿を盗む化物——それが夜見島に伝わる伝承のひとつだとしたら、それは海に潜む穢れ・屍人共の仲間かもしれない。

「それで、その子はどうなった？」一樹はさらに訊く。

「山の上に大きな鉄塔が建っているだろう？　あそこに向かって走って行った。お母さんに会いたいとか、一人にしないでとか、訳の判らないことを言っていた」

それを聞いて、一樹の中で話が繋がった。

島の伝承によると、屍霊や闇霊どもは、この世界に人間が現れるよりもずっと以前に地上を支配していた者だ。その頃世界は闇に包まれていたが、光の洪水が起こったことで地の底へ逃げ、逃げ遅れた者は海の底へ逃げた。それが、闇人と屍人。闇人は地上世界の奪還を、屍人は自分を見捨てた者たちの元へ還ることを望んでいるという。

恐らく永井が出会った矢倉市子は、本物の矢倉市子ではない。屍人の勢力が矢倉市子の姿を模してつくり出し、地上へ放った使い——いわば、屍人側の鳩なのだ。

一樹は顔を上げた。「行こう」

「行くつて、どこへ」永井は首を傾げる。

「鉄塔だ。その子を放つておくと、大変なことになる」

「大変なことつて、なんだ」

「詳しくは後で話す。とにかく急ごう」

機関制御室を出る一樹。永井は後からついてくる。

「なんか、急にやる気になったな」永井は戸惑いがちに言った。

「そっちが焚き付けたんだろ？」一樹は振り返ることなく答える。

二人は乗降口から船を脱出すると、鉄塔を目指して走った。



第七十一話 『苦悶』 阿部倉司 夜見島金鉞採掘所

19:28:17

八月三日、夜七時二十八分。

阿部倉司は、二十四年の人生で最大の危機を迎えていた。

物心ついたときからワルだった彼は、これまで多くの修羅場を潜つて来た。小学生の頃は近所のガキ大将と呼ばれるヤツにはたとえ年上だろうと片っ端からケンカを挑んで負けたし、中学では入学式の日に番長グループから目つきが気に入らないと因縁を付けられ袋叩きにされたし、高校では暴走族同士の抗争を遠くから眺めていた。特に、ここ数日の間に訪れた危機は、彼の身を滅ぼしかねないほどだった。同棲相手の殺人容疑を掛けられ全国に指名手配された。この島に上陸してからは鈍器や刃物や銃を持った化物に何度も襲われた。だが、そんな過去など穏やかで平和で静謐せいひつで天下泰平てんかたいへいで鼓腹撃壊こふくげきごうな毎日だったと思えるほど、今の阿部は崖つぶちの窮地に立たされた絶体絶命ぜつめいの危殆きたいに瀕ひんした焦眉しょうびの急なのである。

阿部は前かがみになって腹に手を当てた。少し前に下腹部が痛み出し、それがいま、堪え難いものになっている。ただしその痛みは、鈍器で殴られたわけでも、刃物で刺されたわけでも、銃で撃たれたわけでもない。屍人や闇人共との戦いで何度かそういった攻撃を受けたが、それらの傷は、島の不思議な力ですぐに治ってしまうのだ。それに対し、この痛みは島の力をもつてしても治ることはないだろう。この痛みを取り払う方法はただひとつ、トイレに行くことだ。

そう！ 阿部はいま、猛烈に○ンコがしたいのである!!

なぜ、彼は突然このような危機に陥ってしまったのか？ 思い当たる理由はひとつだ。深夜、腹が減った阿部は、社宅近くの金網に絡みついていた果実を食べた。非常に美味だったので三つほどまとめて食べた。赤い表面に黄色い斑点という毒キノコのような見た目だったが気にせず食べた。アレが原因だ。島に来て以降あの果実以外は

何も口にしていないから間違いない。もつとも、今さら原因が判ったところで何の解決にもならない。この危機を乗り切るにはトイレに行くしかない。急いでトイレを見つけないといけないが、急いで移動するとケツを閉める力が緩み危険という大いなる矛盾を抱えつつ森の中を探したものの、当然トイレなどあるわけもない。その辺ですること考えたが、それは彼のプライドが許さないし、紙が無いのでは結果的に悲劇は避けられない。結局一時間ほど森の中をさまよい、ようやく『夜見島金鉱採掘所』という看板が掲げられた建物を見つけたのだ。前に占い女が『むかし島では金が採れた』と言っていたから、その鉱山だろう。ここならトイレがあるだろうと駆け込んでみたものの、そこはむき出しの地面に線路が敷き詰められ、たくさんのトロツコの車両が放置された車庫で、全体的な広さは郊外のショッピングモールにも匹敵しそうだ。そのくせ案内板など無いからどこにトイレがあるかも判らない。一度希望を持たせておいてまた絶望の淵に追い込むとは、この島の神様はなんと底意地が悪いのだろう。

「くそすぎだろっ！ このままじゃよお……」

腹立ち紛れに壁に拳を打ち付ける阿部。それが大きな間違いだった。拳の衝撃は腕を伝い肩を伝い胸を伝い、そして腹に伝わる。衝撃に驚いた腸が、ここは危険だから早く逃げろと言わんばかりにウ○コを押し出そうとする。逃げろと言われたウン○も、早くここから出せと言わんばかりに内側から激しく門を叩く。彼の愚かな行為は、ここに来て最大の波を呼び寄せたのだ。乗るわけにはいかない！ このビッグウェーブには!!

人は、普段潜在能力の一〇パーセントから三〇パーセント程度しか使うことができないが、本当の窮地に陥った時、リミッターが解除され、一〇〇パーセントフルに能力を発揮できるようになるという。

今の阿部が、まさにそれだった。彼は、潜在能力限界マックスモードへ突入したのだ！

阿部の脳は今までにない早さで回転しはじめた。現状を的確に分析し、この危機を乗り切る最適解を導き出そうとする。便意には波がある。大きな波が来た後は、その波が引く時が必ず来る。一刻も早く

トイレにたどり着きたいが、今は動くのではなく耐える時だ。全ての力をケツに集中して耐えろ。そう判断した阿部はその場にうずくまった。その瞬間、建物内に銃声が鳴り響き、同時に頭の上を鋭い風が駆け抜け、目の前の壁に小さな穴が空いた。狙撃された！

「ああもう！ どうしろってんだよ!!」

叫ぶ阿部。ヤケになったわけではない。ハンマー投げの選手が競技中大声を出して瞬間的に筋力を高めるがごとく、今の彼もまた、大声を出すことでケツの筋力を高めたのだ。これなら少し動いても大丈夫だ。阿部はダツシユし、近くに停めてあつたトロツコの陰に身を隠した。これで狙撃手の視界からは外れた。阿部は再びうずくまり、全神経をケツに集中させる。そのまましばらく待つと、ゆっくりと波が引いてきた。よし。油断は大敵だが、これなら行動できそうだ。だが阿部は知っている。大きな波が来た後はその波が引く時が必ず来るが、同時に波が引いた後はさらなる大きな波が来るということ。そして、次の大波を耐えることができるかは判らない。つまり、次の波が来るまでに決着をつけなければならないのだ。

阿部は素早く幻視を行い、狙撃手の居場所を探った。車庫を進んだ先に鉄製の階段があり、それを上がった先の細い通路、ライトブリッジとかフライングブリッジとかユニテージとかキャットウォークとか呼ばれている足場に、狙撃用の小銃を持った闇人がいる。常に車庫の方を向き、阿部が隠れているトロツコ付近を重点的に警戒している。幸い、車庫には放置されたトロツコの車両が多いため、それに身を隠しながら進めば、階段の手前までは行けそうだ。ただし、その先には身を隠す物が無く、進むためには狙撃手を倒さなければならぬ。こちらは銃を持っていないため、倒すためには階段を登って通路を進み殴るしかない。狙撃手の腕前にもよるが、間違いなく途中で撃たれるだろう。何か策を用いなければならぬ。幸いなことに、こちらにはいくつかの秘密兵器がある。それらを使えば、狙撃手など恐れるに足りない。阿部は幻視をやめる。驚くべきことに、幻視をして狙撃手を見つけ状況を確認し策を練るまでの時間、わずか0.3秒。潜在能力限界マックスモードの阿部だからなせる業である。

阿部はトロツコの車体に身を隠しつつ階段の手前まで進んだ。狙撃手に見つからないようそつと顔を出し、敵までの距離を目測する。階段までは二歩、階段は十段、階段を上がって狙撃手のいる場所までは七歩だ。狙撃手は相変わらず車庫側を警戒しているため、姿を見せた瞬間狙撃されるだろう。何かで注意を引く必要がある。阿部はジャケットの右ポケットを探った。中には、金属製の六角ナットを詰め込んでいる。夜見島港の廃ビルで古い女と休憩を取った際、ビル内に大量に置いてあったので、何かに使えろと思いつてきたのだ。阿部はナットをひと握り取り出すと、トロツコの陰から手だけ出して正面に投げた。ナットは狙撃手が立つライトブリッジの下に、派手な音を立てて散らばる。狙撃手の注意が真下を向いた。阿部はその瞬間跳び出し、階段へ向かって走った。0.8秒で階段まで到達し、駆け上がる。もちろん、鉄製の階段はカンカンと激しく音をたてる。地面に散らばったナットに気を取られていた狙撃手も阿部に気が付いた。もちろんそれは計算済みだ。狙撃手がこちらに気づき、振り向くまでに1.2秒、それだけの時間があれば十段ある階段の五段目までは上がる。狙撃手がこちらの姿を確認し、銃を構えて照準を合わせるまで2.41秒。その時間で階段を上がってフライングブリッジを三歩進める。だが、狙撃手が引き金を引くまでの0.294秒の間に、残り四歩の間合いを詰めるのは不可能だ。そこで二つ目の秘密兵器が炸裂する。阿部はライトを取り出し、光を闇人の顔に当てた。顔を抑え、悶え苦しむ闇人。秘密兵器と言いながらこれまで何度も使った技だが、そんなことは気にしない。闇人の目がくらみ復活するまで3.7127秒、それだけの時間があれば四歩の間合いを詰め、武器を振り下ろすことができる。阿部が愛用している木製バットで闇人を倒すのに四発。その間に反撃される可能性84.21541%。阿部が通常の状態なら、銃での殴り攻撃はもちろん銃弾を一発喰らうくらいは大丈夫なので、そのまま連続攻撃で倒してしまえばいい。しかし、今は平手打ち攻撃一発喰らうのですら致命的になりかねない危機的状態だ。反撃を許すわけにはいかない。問題ない、三つ目の秘密兵器を使えば！ 阿部はバットを大きく振り上げて突進すると、ケツ

の力を緩めない程度の渾身の力で闇人の頭部に打ち付けた。よろめいた闇人に、今度はバットを下から上に振り上げる。そのわずか二発の連続攻撃で、闇人は甲高い悲鳴を上げて倒れた。どうだ、と闇人を見おろす阿部。通常の半分の攻撃で倒したことになる。そう、阿部のバットは、今までより大幅にパワーアップしているのだ。バットには、夜見島港の廃ビルで見つけた大量の釘を打ち付けてある。その名も釘バット。阿部の天才的ネーミングセンスによりそう名付けられたこの武器は、その威力、なんと通常のバットの3.14159倍。天才・阿部倉司の最高傑作である。

狙撃手は倒した阿部は小銃を拾う。これを奪っておけば、この闇人が復活した時の脅威は格段に減るし、潜在能力限界マックスモードの阿部ならば使いこなすことも可能だ。もちろん、これで終わりというワケではない。いま阿部の終了条件は『トイレへの到達』であり、『狙撃手を倒す』は小目標にすぎないのだ。そして、いまだトイレの場所は不明だ。危機的状况は何も変わっていないのである。阿部はユニテージの上から周囲を見回した。車庫を進んだ先は、アルファベットのSの字を描くように、緩やかに右、そして左へと曲がっている。また、それとは別に、左側には地下へ続く階段とインクラインも見えた。その下には恐らく坑道があるのだろう。この場から下を見る限り、トイレらしきものは見当たらない。では、このキャットウォークを進んだ先には何かがあるのか。見ると、通路の先は連絡橋を渡って外に出るようになっており、そこに木造の小さな建物があるのが見えた。いかにもトイレがありそうな雰囲気である。阿部は迷うことなくそちらへ進んだ。

建物に鍵はかかっていたいなかった。中に入ると、そこはいくつかの操作パネルが置かれた部屋だった。普段の阿部ならなんの機械か判らないところだし、そもそも気にもしないとこだが、潜在能力限界マックスモードの阿部は、そこがインクラインの制御室だと判断した。もちろん、制御室だろうが分娩室だろうが今の阿部には関係ない。いま必要なのはトイレだけである。阿部は二階建ての建物をくまなく探したが、トイレを発見することはできなかった。だが、悲観

はしていない。こういう場所には何かある。一見無意味で理解不能な行為が後に重大な意味を持つことになるのはこの世界の理だ。ことわり阿部はすでに気付いている。壁にある大きな丸ボタンが怪しい。ためらうことなくそれを押す阿部。ガコン、と、遠くで機械が稼働する音が聞こえた。通常ならば聞こえるはずがないほどの小さな音だったが、潜在能力限界マックスモードの阿部は、それがインクラインの稼働した音だということまで判る。戻ってみよう。

阿部はインクライン制御室を後にし、連絡通路を通って階段を下りる。インクラインのところまで進むと、思った通り、そこにはさつきまでなかったトロッコの牽引車があった。地下に停めてあったものが、さつきのスイッチで上昇して来たのだろう。トロッコの線路は建物の奥へと続いている。これに乗れば早く進めるだろうし、歩かなくていいから腹への刺激も少ない。これは使えそうだ。阿部は早速トロッコに乗り込もうとしたが、ふと横を見ると、地下へ下りるインクラインの横に、送風機管理室と書かれた小さな部屋があった。地下の坑道へ空気を送る装置を管理する部屋だ。トイレなどありそうもないが、すぐそこだから一応確認してみても大した時間のロスにはならない。いや、そのわずかな時間のロスが、後に致命的になる可能性もある。

このとき、潜在能力限界マックスモードの阿部は、本能的に悟る。ここは、我が人生最大の分岐点だ。ここですぐにトロッコに乗るか、送風機管理室を調べるか——その選択によって、この後の人生が大きく変わる。正解はひとつしかない。一方は生で一方は死、一方は天国で一方は地獄、一方は歴史を動かし一方は歴史に埋もれる、そんな究極の分かれ道なのだ。もちろん、潜在能力限界マックスモードの阿部をもってしても、どちらが正解なのかは判らない。

阿部は――。

◇

今はわずかな時間も無駄にはできない。このまま先へ進む方が賢

明だろう。阿部はトロツコの牽引車に乗り込んだ。阿部には電車的な乗り物の運転知識など無いが、潜在能力限界マックスモードの彼は、運転席に立っただけで瞬時に操縦方法を理解した。レバーを回して速度を調整する単純なものだ。阿部はレバーを停止から走行へ回す。ゆつくりと動き出す牽引車。あまり早く走行すると腹への刺激が強くなるので、速度は十キロ程度にとどめておく。歩くよりも少し早い程度だが、今はこれで充分だ。トロツコはSの字を描いた線路上を進んだ。

だが、しばらく進んだところでビクンと身体が震え、接近する電動トロツコに向けて小銃を構える視点が見えた。瞬時に阿部は電動トロツコから跳び降りる。その刹那、銃弾が阿部の自慢のリーゼントを掠めた。危ないところだった。潜在能力限界マックスモードでなければ、確実に脳天を打ち抜かれていただろう。どうやらこの狙撃手はかなりの腕前のようなだ。

操縦士を失った電動トロツコは自動でレバーが停止位置に戻り、やがて停止した。阿部はトロツコの陰に身を隠し、幻視で狙撃手の気配を探った。少し進んだ先に、狙撃用の小銃を持った闇人の視点をみつけた。迷彩服を着ているため、元は自衛官だったのだろう。休日のサラリーマンが自慢のゴルフクラブをピカピカに磨き上げるかのような手つきで銃身を撫で、「あっち側もこっち側も関係ない」と、意味ありげな独り言をつぶやいている。だが、阿部が注目したのは、その世界の左隅にわずかに映っているものだった。引き戸があり、そこに『休憩室』というプレートが貼られているのだ。潜在能力限界マックスモードの阿部は、瞬時のその意味を分析する。休憩室とは、従業員が休憩するための部屋だ。炭鉱で金の採掘をしていた鉱員、インクラインや送風機室の機器類を操作していた技師、採掘された鉱石を選鉱する技術者、それらの者たちがひととき身体を休め、食事をとり、談笑をし、あらためて仕事に取り組むための活力を得るための部屋である。そこは従業員にとって安らぎの場所でなければならぬ。安らげない場所で休憩などできるはずがない。ならば！ その部屋にはトイレがある確率が高い、いやトイレがあるはずだ、いや絶対にトイ

レがある、いやトイレが無ければ困る、いやある！ 絶対確実一〇〇パーセントあるはずだ!! ならばならば!! あの狙撃手をどうにかすれば私の勝利、つまりこれは、阿部倉司の人生最大一世一代けんこんいつてき乾坤一擲天下分け目の天王山である!!

はやる気持ちと便意を抑えつつ、阿部は冷静に狙撃手の様子を探る。狙撃手は、阿部が身を隠しているトロッコに銃口を向けたまま動こうとしない。背を向けた隙に攻撃して倒すという戦法は使えそうにない。距離が離れているため、ライトを当てて目をくらませる技も効果が低いだろう。恐らくナットを投げて気を引くという作戦も無駄だ。あの狙撃手は騙されない。こちらも銃を使うべきだ。さつき倒した狙撃手から奪っておいたから、銃はある。潜在能力限界マックスモードの阿部ならば使いこなすことは可能だ。それでも、あの狙撃手相手に撃ち勝つことは困難であろう。恐らくヤツは、自衛隊でもトップクラスの腕前だ。

幻視をやめる阿部。ダメだ。状況を分析すればするほど、極めて勝ち目が低い戦いだと認めざるを得ない。必勝法が無い戦いの策を考え続けるのは座して持つのも同じだ。そして、時の経過は確実に阿部を追い詰める。こうしている間にも少しずつ時は進み、腸の中の○ンコも少しずつ進んでいる。次の波が来るまでもう幾ばくの猶予も無いだろう。こうなればウンを天に任せるしかない。フン碎覚悟で特攻だ！ 阿部がヤケクソで突撃しようとした時。

——道を見失ったら、原点に戻りなさい。

不意に、何かのマンガで読んだいやや天の神からのお知らせが聞こえた。

原点……？ この場合の原点とはなんだ？ 時間は無いが、考えてみる価値があるように思えた。闇人と戦う原点……言うまでも無く、それは光だ。ヤツらは光に追われて地の底に逃げた。ヤツらは光に弱い。ヤツらには光こそ最大の武器。そう、小銃も釘バットもトラバサミもナットも、すべてサブウェポンにすぎない。メインウェポンは光。手持ちのライトで足りないのなら、ライト以上の光を用意すればいい。そして、もうひとつの原点。一見ワケの判らない行動がどこか



で誰かの役に立つ。阿部がインクライン制御室でボタンを押して  
ロッコの牽引車を稼働させてこの場まで来たのにも意味があるはず  
だ。周囲を見回す阿部。そして見つけた！ なんとという偶然なんと  
いう幸運なんという僥倖きようこうなんという有卦うけなんというご都合主義！

すぐそばの壁にブレーカーがあるではないか!! スイッチは切ら  
れた状態なので、入れれば明かりが点くはずだ!! しかもあの狙撃手  
の頭上にちようど電球がある!! もはや神の導きとしか思えない状  
況ではないか!! ああ！ 神よ！ さつきは底意地が悪いとか言っ  
てスマセンでした！ おめでとうございます、恵みに満ちた方よ。  
全ての祝福は、御身のもの。さあ、楽園の門が開かれる!! 阿部はブ  
レーカーのスイッチを入りにした。薄暗い建物内の明かりが全て点  
灯する。休憩室前の狙撃手は、身体中から煙を上げて悶え苦しみ始め  
た。もはや隙だらけだ。銃で撃つのも釘バットで殴るのもトラバサ  
ミで足を挟むのもナットを投げつけるのもやりたい放題だ！ 阿部  
は一気にケリをつけようとした。

だが！

しかし!!

なんとということだ!!

潜在能力限界マックスモードの阿部をもつてしても予想できな  
かった事態が起こってしまった!!

光を浴び苦しむ狙撃手は、あろうことか、そばの休憩室に逃げ込ん  
でしまったのだ!!

……………。

……………。

……………。

しばらく呆然とその場に立ち尽くす阿部。狙撃手は休憩室に閉じ  
こもって出てこない。外は明るいから当然だろう。これでは中にあ  
る（と思われる）トイレに入れないではないか!!

腹から野獣が唸るかのような音が聞こえた。中に鉛の玉を仕込ま  
れたかのような重さを感じる。全身から脂汗がにじみ出る。来る。  
海の底に住む混沌と仇をなす巨大な海龍が大いなる尾を打ち振るい

天を曇らす光を発すかのごとく、災いの波が来る!! こうしてはいられない! あの休憩室に入れないのであれば、他を探すしかない!!

阿部は小銃も釘バットも投げ捨て走り出した。今の状況で武器はもはや荷物でしかない。休憩室の前を走り抜け、建物のさらに奥へと進んでいく。闇人に出会わなかったのは幸運か、それとも建物内を光で満たした彼の功績か、もはやどちらでもいい。とにかく阿部は敵と対峙することはなかったものの、トイレらしきものも見つけられないまま建物の最深部までたどり着いてしまった。そこには左の壁に引き戸があるだけだ。プレートはついていない。その先に何があるのかは開けてみないと判らない。そこにトイレがあることを祈るだけだ。阿部は引き戸を開けた。

目の前には、降り続く雨と、広大な森が広がっていた。そう、阿部は、建物の反対側に出たのだ。

ここまで阿部は、潜在能力限界マックスモードを駆使し、建物の一階は隅から隅まで塵ひとつ見逃さないレベルで探索したが、トイレがありそうな場所はさっきの休憩室のみだった。もしかしたら地下の坑道や、唯一探索していない送風機管理室の中にあつたのかもしれないが、なんにしてもこの広大な建物内にトイレが休憩室にひとつ(その休憩室も未確認なのであつたとも言い切れないが)しかないなど、欠陥物件もいとところだ。よく従業員はこんなところで働いていたな。そういう時代だったと言えばそれまでなのだが、いったい何人の者がここでウ○コを洩らしたのだろう。彼らに同情を禁じ得ない。

などと、そんなことはどうでもいい! ここまで来てトイレが無かった! いったいどうすればいいのだ! もはや限界だ!

……落ち着け、阿部倉司。そう、落ち着くんだ。潜在能力限界マックスモードでも乗り越えることができなかつたこの窮地を乗り越える方法はただひとつ。そう! 限界突破モードへ移行するのだ!!

言葉は、単なる記号ではない。それ自体に意味があるものだ。

例えば、極めて困難な状況に挑むとき、「俺はできる！」とつぶやくことで、通常は成し遂げることができないことでも達成できることがある。あるいは、人から「ガンバレ」「負けるな」と言われることで、くじけそうな心が支えられることがある。

また、結婚式の場において、「切れる」「終わる」「もう一度」などという言葉は忌み嫌われる。別れや再婚などを連想させるからだ。言葉がそれらを引き寄せると信じられているからである。

言葉には、それほどの力があるのだ。いわゆる『言霊』である

この『言霊』という考えは、古くから日本に根付いている。良いことを言えば良いことが起こり、悪いことを言えば悪いことが起こる。誰もがそう信じてきた。この国は、言葉が全てを支配すると言っている。

つまり、何が言いたいのかという点。

このとき阿部は、決して思い浮かべてはいけない言葉を思い浮かべてしまったのだ。

——限界突破。

その言葉が、阿部に悲劇をもたらしたのだ。

「……………」

阿部は、それまでの自信に満ちた姿からは想像もつかないほどの弱々しい声を上げた。

☆

昭和八十年八月三日、夜八時——。

阿部倉司は、『どうあがいても絶望』という言葉の意味を知った。

第七十二話 『共闘』 永井頼人 四鳴山／離島線4  
号基鉄塔 18:05:01

ブライトウイン号の調査を終え、四鳴山の山頂にやってきた永井頼人と一樹守は、そびえ立つ鉄塔の姿に言葉を失い、思わず立ちすくんでしまった。一樹の話によると、山の標高約百メートルに対し、鉄塔の高さは二百メートルと、山よりも高い。日本でも数基しかない巨大鉄塔だ。その大きさに圧倒されたのもあるが、現在の鉄塔は、樹木や巨大な廃ビル、家屋などと融合するように存在しているのだ。廃ビルは『夜見島金鉱業所』という建物で、本来は島中央の瓜生ヶ森という場所にあるらしい。それがなぜ、この場に転送され、鉄塔と融合してしまったのか。それは一樹にも判らないという。もともと、それはさほど重要な問題ではないだろう。いま重要なのは鉄塔の先端だ。空は相変わらず厚い雲に覆われているが、鉄塔の周囲だけはぼつかりと穴が空いており、周囲の雲は、まるで排水溝に水が流れるかのごとく穴に吸い込まれている。鉄塔の先端もその穴の中に消えているのだが、向こう側には、まるで鏡に映したかのような逆さまの夜見島がわずかに見えている。永井は少し前にもあれを見た。昼間、雲が途切れて陽が射す時間が何度かあったのだが、その時も、空には逆さまの夜見島が浮かんでいたのだ。あれはいったい何なのだろう。

「恐らく、あれこそが本当の夜見島だ」一樹が、全てを悟ったような顔で言った。

「じゃあ、いま俺たちがいるここは、なんなんだよ?」

「ここは、二十九年前の夜見島をコピーしたものだ。岸田百合はこの島のことを『うつしよ』と言っていたが、あれは『現世』ではなく『写し世』という意味だったんだ」

一樹の話によると、岸田百合はあのニヤケ顔の化物・闇人達の仲間だ、地の底に封じられていた母と呼ばれる異形の生物を解き放つために、一樹を誘惑したのだそうだ。永井にも思い当たることがある。深夜のブライトウイン号搜索時、永井は船内で岸田百合と出会ったが、

あのとき彼女は、「遊園地に囚われている母を助けてほしい」と、永井に懇願した。いま思うと彼女の話は極めて疑わしいのだが、あの時は彼女の力にならなければという気持ちでいっばいだった。百合が他人の心を操るような特殊な力を持っているというのは、判るような気がする。

「……そうか……そういうことだったのか……」 鉄塔の先端を見ていた一樹が、大きく目を見開いた。

「なんだよ？ 何か判ったのか？」

「船で俺が言ったことを覚えているか？ この島では、何か行動を起こすたびに、事態が悪い方向へ進むってやつだ」

「……忘れてたくても忘れられねえぜ」

小さく舌打ちをする永井。元上官である三沢も、死の間際に同じことを言っていたから、忘れるはずがない。

「あの理由が判ったんだ」と、一樹は続けた。「これは、『シユレディンガーの猫』なんだ」

「シユレ……なに？」 永井は首をかしげた。この男は、急に何を言い出すのだろうか？

戸惑う永井に、一樹は続ける。「全ての事象は、観測者が確認するまで複数が重なり合って存在している。そして、観測された瞬間に確立するんだ」

「……また語りはじめちゃったよ、この人」 永井は呆れたため息をついた。「すまねえが、俺はお前と違って国語が苦手なんだ。判るように言ってくれないか」

「例えば、不透明な箱の中に、一匹の猫と、五〇パーセントの確率で毒ガスが放出される装置を入れたとしよう。箱を閉じ、一時間待つ。観測者からは箱の中は見えないから、中の猫が生きているのか死んでいるのかは判らない」

「まあ、そうだな」

「このとき、箱の中では、猫が生きている状態と、猫が死んでいる状態、そのふたつが重なって存在しているんだ」

「はあ？」

「そして、観測者が箱を開けた瞬間、そのどちらかが決定される。猫が生きているか、死んでいるか、ふたつの可能性は、箱を開けた瞬間に確立されるんだ」

一樹の話を考える永井。中学高校共に、体育以外の成績は下から数えた方が早い永井にとつて、今の話は少々難しいが、それでも、それがおかしいことだけは判った。

「……ちよつとなに言ってるのかわかんねえけどよ、そんなのあり得ないだろ？ 猫が生きているのか死んでいるのかは、箱を開ける前から決まってるんじゃないやねえのか？」

永井がそう指摘すると、一樹は「その通り、よく気付いたな」と、どこか上から見るような顔でうなずいた。その態度が気に入らないが、一樹が話を続けるので、永井はひとまず怒りを抑える。

「これは、エルヴィン・シュレディンガーという物理学者が、量子力学の基本である『コペンハーゲン解釈』を皮肉ったものなんだ。お前の言う通り、これはあり得ない。だが、この偽りの夜見島では、あり得ないというのは思考を停止することに等しい。全てのことは、あり得るんだ」

「だから、俺は歴史が苦手なんだって言ってるだろ。判るように話してくれ」

「例えば、俺とお前はあのブライトウィン号の操舵室で再会した。しかし、もし俺が早々に船を立ち去っていたら、出会うことはなかった。そこに、ふたつの世界が存在することになる。『並行世界』とか『パラレルワールド』と呼ばれているものだ。あの瞬間、箱の中には俺とお前が『出会う』世界と『出会わない』世界が存在していた。そして、観測者が箱を開けた瞬間、『出会う』という世界が確立された。しかし、『出会わない』という世界もまた存在していたんだ」

「……………」

「この夜見島という箱の観測者は、箱を開ける前から中身が見えていて、自らの意志でどちらか一方に確立することができるのかもしれない。あるいは、箱を開けて自分の望む結果でなければ、箱を閉じもう一度開けることができるとも言える。どちらにしても、観測者の望む

方へ事態を進めることができるんだ」

「……そうだな。お前がそう言うんなら、たぶんそうなんだろう」

「そんなことができるのは、この偽りの夜見島を創った者……あの異形の生物以外に考えられない。事態が悪くなる一方のはずだ。俺たちは、観測者である異形の生物の意のままに操られていたんだ」

「そだな」

「だが、俺たちは猫じゃない。猫よりもはるかに知能の高い人間だ。猫にはできないことを、俺たちならやれる。観測者の意に反することもできるはずだ。いや、俺たち自身が観測者になるんだ。その方法が、この鉄塔にある。つまり——」

一樹は鉄塔を見上げ、歌劇の舞台にでも立ったかのような大げさな仕草で指さした。

「あの先に、俺という観測者がたどり着いた時、可能性はひとつに収束する」

長い話がようやく終わったようなので、永井は大きくため息をついた。「……お前、わけわかんないことを一人で熱く語って周りにドン引きされることないか？」

「いや、そんな経験は無いな」一樹は真面目な顔で首を振った。

「そうか……まあ、別にいいけどな。それより、お前は頭が良いワリに空気が読めないってことは判ったから、今の話と市子ちゃんが、どう関係するんだよ？」

永井と一樹は、ブライトウイン号失踪事件の生存者である矢倉市子の痕跡を探るため、森の中に座礁した船を探索した。乗客が持ち込んだ8ミリカメラや船内カメラの映像から、船が消息を絶つ直前、船内を岸田百合と同じ顔の女がうろついていたことが判った。それが何を意味するのは永井には判らなかったが、一樹はなにかを悟っている様子だった。

「ブライトウイン号の失踪に鳩が関わっているのは間違いない。あの船内カメラの映像に映っていた鳩の女は、明らかに様子がおかしかった。恐らく、あの映像の後、鳩は船内で乗客らを殺戮したのだろう。いや、船内に争った形跡や死体は無かったから、どこかへ連れ去った

のかもしれない。どちらにしても、矢倉市子と木船倫子の二人だけが生き残った。そして、二人が救命ボートで脱出しようとした時、高波で船が大きく傾き、市子は海に転落して死んだ。夜見島周辺の海には屍霊どもが身をひそめている。市子の死体を見た屍霊どもの親玉は、その姿をコピーし、偽りの夜見島へ送り込んだんだ。言わば、矢倉市子は、屍人側が放った鳩だ」

「……………」

一樹の話を無言で聞く永井。今度の話は、理解できなかつたわけではない。矢倉市子は屍人の勢力は放った化物……市子は闇人達から集中的に狙われていた。そして、どんなに銃弾を浴びても死なず、それどころか、たちどころに傷が治ってしまった。人間ではないと考えるのは、妥当なように思う。

だが、それでも永井は。

「俺はそんな話は信じない。市子ちゃんは、催眠術か何かで屍人共に操られてるのかもしれないだろ？　なら、その術を解けば、元に戻るはずだ」

「本気で言ってるのか？　その女は不死身だったんだろ？　人間であるはずがない」

「それも化物どもの力かもしれないだろ。とにかく俺は認めない。市子ちゃんは、俺が助けてみせる」

頑なに一樹の話を否定する永井。受け入れるわけにはいかなかった。永井は、上官である三沢を射殺してまで市子を助けたのだ。それが化物どもの仲間だったなどと、どうして受け入れることができるだろう。

一樹はさらに何か言いたげだったが、その言葉を飲み込み、別の言葉を継いだ。「……まあいい。今は言い争ってる場合じゃない。陽が暮れたら、闇人共はこの鉄塔に押し寄せてくる。ヤツらは、ここから地上へ侵攻するつもりなんだ。ヤツらよりも先に、鉄塔の先端部にたどり着かなければ」

「……判ってるや」

頷く永井。一樹の話を全て信じているわけではない。そもそも大



半が永井の頭では理解できないことだが、闇人共が地上へ侵攻しようとしているのは間違いなさそうだ。この国と国民の安全を守る自衛官として、それは何としても阻止しなければならぬ。それに、恐らく市子もこの鉄塔に来るだろう。

永井は小銃を、一樹は拳銃を手に、鉄塔へ向かう。いま二人がいるのは鉄塔の北側だ。鉄塔の周囲は鉄条網付きの金網に囲まれているが、北側には出入口があり、その鍵は外されていた。闇人共が中に入るため外したのかもしれない。そこから中に入れば、鉄塔内部の階段を登って上へ行くことができる。ただ、現在鉄塔は樹木や廃ビルなどと融合しており、階段を登ってもすんなり上層へ行けるかは疑問だ。ここから見上げただけでも、階段が崩れていたり、障害物で塞がれていたりする場所が、何ヶ所も見える。

「そつちからも行けるかもしれないな」

一樹が鉄塔の東側に建つ建物を指さした。鉱業所という看板が掲げられたその建物は、鉄塔と密接するように建っている。全七階建ての建物で、外壁には非常階段があり、そこから鉄塔へ飛び移ることもできそうだ。

「道がふたつあってわけか。どうする？」永井は一樹を見た。

「二手に分かれよう。俺はこつちを行く」

一樹は永井の返事も待たず、鉄塔の方へ歩きはじめた。

「待てよ」と、永井が止める。「俺はいいけど、あんたは大丈夫なのか？」

一樹は海外で射撃の訓練をしたことがあるらしいが、それでも、本格的な戦闘訓練を受けた永井とは違う。鉄塔にはすでに何体かの闇人が侵入しているようだし、闇人の中にはかつて自衛官だった者もいる。素人が一人で相手をするのは荷が重いだろう。

一樹は振り返ることなく言う。「もし行き止まりだったとしても、戻るような時間は無い。どちらか一人でもたどりつけばいい。俺がダメだった場合は、お前がなんとかしてくれ」

そして、一樹は一人、鉄塔へ向かって行った。

「……たく、どいつもこいつも好き勝手言いやがって。勝手にしろっ

つーの」

永井は鉱業所へと入った。

鉱業所は、地下の坑道から金を運び上げ、選鉱や運搬などの各種作業をするための施設だ。広い建物内に大型の掘削機が入りするところもあるため、一階から七階までが吹き抜け状態になっている。壁には明かり取りの窓が無数にあるため、吹き抜け部分はかなり明るく、闇人や闇霊の姿は見えない。もちろん、通路や階段、事務作業の部屋や従業員用の休憩室などもあるので、そこに潜んでいるだろう。幻視で建物内の様子を探ると、何体かの闇人の気配があった。

永井は鉱業所内を見回す。西と東の壁際に階段があり、それで三階までは上がれるようだ。永井は西側の階段を使い、上を目指した。途中、窓から射し込む光を避けて闇霊どもが襲いかかってきたが、動きが鈍いため、ライトで照らしたり銃で殴るだけで簡単に迎撃できた。

吹き抜けにある階段は三階までで、それより上の階へあがるためには作業所や休憩所がある区画へ行かなければならないようだ。そこへ向かう扉を開けると、細く薄暗い通路が続いていた。広い吹き抜けから急に狭い通路へ入ったので、妙な息苦しさを感じる。明かりは点いていないし、ところどころにある窓は、黒い布で覆ったり、柵などを移動させて塞いであった。ここから先は、充分警戒しなければならぬ。永井は小銃を構え、慎重に進む。すぐに、正面から五体の闇霊が襲ってきた。幸い通路が狭いため一斉に襲われることはない。先頭の闇霊はライトで照らして消滅させ、光をかわして回りこもうとする。闇霊は銃で殴り、なんとか無傷で撃退する。

だが、少し進んで角を曲がると、今度はやや開けた通路に出た。そこには十体ほどの闇霊が待ち構えていた。何体かはライトで照らし、銃で殴って倒したものの、その隙について別のヤツが背後に回り込み、噛みつくこうとする。数が多い。仕方なく永井は小銃を撃ち、残りの闇霊を倒した。

やや広めの通路は南から北へと続いており、やはり明かりは点いていないため真っ暗だ。間違いなく闇霊どもが潜んでいるだろう。小銃を使えば簡単に撃退できるものの、銃弾には限りがある。鉄塔はあ

まりにも高く、多くの闇人が待ち構えているだろうから、できれば闇霊ごときに弾は使いたくない。何か良い方法はないものか。周囲を見回す永井。南側の壁にはロッカーがあるが、その後ろ側がわずかに明るくなっているのに気がついた。調べてみると、ロッカーの後ろには鉄格子状の出入口があり、連絡通路を使って隣のビルの屋上へ移動できるようだ。残念ながら外から南京錠で閉ざされているためこちらから開けることはできそうにないが、ロッカーを移動させれば、通路を明るくできるかもしれない。永井はロッカーを押し、横へ移動させた、外の明かりが射し込み、通路を照らす。すでに陽は西へ沈もうとしているため、その明かりは決して眩しいものではないが、それでも通路に潜んでいた闇霊を消滅させるには充分だった。奥の方へ逃げた闇霊もいるが、かなり弱っていることだろう。永井は明るくなった通路を進んだ。

奥まで進むと上へと続く階段があったが、下部が崩れており、登ることができなかった。他に道は無く、なんとかここを進むしかない。幸い、崩れ落ちた瓦礫を足場にして手を伸ばすと踊り場の部分に手が届いたので、そこから懸垂の要領でよじ登ることができた。一樹がこちらに來なくて正解だった。いかにも腕力が無さそうなあの男では、登ることができなかったかもしれない。

そのまま階段を上がる永井。何度か闇霊の群れに襲われたものの迎撃し、そのまま屋上まであがることができた。

鉱業所の屋上からは、鉄塔からはみ出した通路を通って鉄塔の東側内部へと進むことができるようになった。そこからさらに上層へと進むことができる。とは言え、まだ先は長い。ここまでかなりの階段をあがったが、七階建ての建物ならば高さはせいぜい二十メートル。まだ鉄塔の十分の一しか登っていないのだ。このペースでは先端部へ到達するのにどれほど時間がかかるだろう。しかも、ここまでは運良く闇霊のみで、闇人には襲われていないのだ。この先、銃を持った闇人や、巨体闇人に四足闇人なども待ち構えているだろう。先が思いやられるが、弱音を吐いてなどいられない。永井は通路を通って鉄塔へ渡ろうとした。その瞬間、銃声が鳴り響き、永井の足下の床

の一部が弾けとんだ。狙撃された。瞬時にそう判断し、建物内に戻る。再び銃声が響いたが、銃弾は壁を貫いただけだった。安全な場所まで戻った永井は、幻視で様子を探る。この場から三階分ほどの高さを上がった場所に、狙撃用の小銃を構えた闇人の視点を見つけた。永井の小銃でも狙撃はできるが、その腕は決して高いとは言えない。その上、狙撃手は永井が隠れた場所にじっと狙いをつけている。顔を出した瞬間狙撃されるだろう。これでは先へ進めない。どうしたものか……。

☆

永井頼人と別れた一樹守は、鉄塔の階段を駆け上がっていた。階段は、内部をぐるりと回りながら上層へと続いている。その構造は、遊園地の地下の冥府への階段を思わせた。そう言えば、あの時共に階段を登った少女・木船郁子は、いまどうしているだろうか？ 彼女は一樹には無い特殊な能力を持っている。そうそう闇人共にやられはしないだろうが、それも状況によるだろう。闇人共は、あの時より戦闘に適した形態へと進化している者もいる。心配だが、引き返して探すわけにもいかない。ここでヤツらよりも先に先端部にたどり着かなければ、どの道全て終わりなのだ。今は彼女の無事を祈るしかないだろう。一樹は階段をあがり、上層を目指す。

しかし、三階ほどの高さをあがったところで、階段は引きちぎられたように寸断されており、それ以上あがることはできなかつた。周囲を見回す一樹。ここは鉄塔の南西部で、すぐ南には鉄塔建設時に作業員が利用した事務棟が建っている。外壁に非常階段のようなものはないが、一メートルほど跳んだ先に大きくせり出した梁があり、そこを伝って移動すれば、開けっ放しとなっている窓から中に入れそう。一樹は勢いをつけてジャンプし、外壁の梁の上に渡った。梁から窓までは少々高いものの、なんとか手が届いたのでよじ登り、中へ入った。

そこは作業員の休憩室だった。折り畳み式の長机とパイプ椅子が

いくつも並び、湯呑やコップが入った棚や冷蔵庫などがあるが、一樹の目を引いたのは壁に飾ってある絵だった。西の壁の一角に、十枚ほどが額に入って飾られているのだが、どれも、鉄塔と巨大な樹が融合し、天へと伸びていく状態を描いたものだ。絵のタツチがすべて異なるため、恐らくすべて異なる人間が描いたものだろう。

——これは、シンクロニシティの絵か。

シンクロニシティとは、『共時性』『意味のある偶然』『虫の知らせ』などとも呼ばれる心理学用語だ。よくある例としては、電話しようとした相手から電話がかかって来たり、しばらく会っていない友人のことを不意に思い出し連絡したら亡くなっていた、などの現象がある。これらの出来事は単なる偶然の一致で説明がつくが、中には単なる偶然では説明がつかないものもある。この鉄塔の絵も、そんなシンクロニシティのひとつだ。この絵は、描き手が示し合わせて同じイメージで描いたわけではない。絵を描く趣味さえない従業員たちが、まったく同じ日、同じ時間帯に、存在しないはずの大木と融合した鉄塔の絵を描いたのだ。これも、夜見島にまつわる都市伝説のひとつだ。島民失踪やブライトウィン号消失事件などと比べるとインパクトが弱いかもしれないが、一樹は島を取材する前の調査でこの話を知った。その時はあまり重要視しなかったが、今は違う。この、巨大な樹と鉄塔が融合した絵は、今まさに一樹がいる鉄塔の状態を表しているのだ。そして、その巨大な樹に関しても思い当たることがある。かつてこの四鳴山の山頂には、『滅爻樹』と呼ばれる神木が存在した。その高さは、鉄塔の高さと同じ二百メートルだったと、古文書に記されているのだ。現在その滅爻樹は存在しないが、島民の間でこの地は禁足地とされ、鉄塔建設時には死者が出るほどの反対運動が起こったらしい。そんな禁断の地に無理矢理鉄塔を建てたのだから、作業員たちは神の怒りを感じとり、罪の意識にさいなまれた結果、このような絵を描いたのかもしれない。

絵を眺め、考え巡らせる一樹。そんなことをしている場合ではないのだが、何かが引っ掛かった。そして、それはこの先非常に重要なことのように思えるのだ。考える。鉄塔に書かれた大木・滅爻樹。神の

力が宿りしこの樹には、不浄を浄化する力があるとされている。現在滅爻樹は存在しないものの、枝だけは落ちており、島に赤子が生まれた際には、島の名家である太田家の当主が枝を取りに行き、名を刻んで授けるといふ。島では葬儀の際、この枝を死者の身体に刺して弔うのだ。夜見島に古くから伝わる風習のひとつである。事前の調査でこの話を知った時には変わった風習だとは思わなかったが、今ならその理由は明白だ。滅爻樹は、穢れから死者を守るためのもの。穢れとは、言うまでもなく屍霊や闇霊だ。つまり、滅爻樹の枝を刺した死体には、屍霊や闇霊は憑りつくことができないのだ。もしかしたら、何度倒してもよみがえる闇人共を、その枝一本で、文字通り滅することができるのかもしれない。

びくと身体が震え、鉄塔の絵を見る自分の背中が見えたので、一樹は考えを中断する。振り返ると、四足闇人が鬼相を浮かべて睨んでいた。

しかも。

「……返せ……お父様の髪飾り……返せ……」

恨みがましい声で言うその四足闇人は、ブライトウィン号で執拗に追いまわされたあの着物女の闇人だった。まさか、ここまで追ってきたのか!?

「……返せえ!!」

叫ぶと同時に突進してくる四足闇人。一樹は素早くライトを向け、四足闇人の顔を照らした。悶え苦しんでいる間に駆け出す。船で散々追い回されたから、あの四足闇人の特徴は嫌というほど判っていた。正面からの攻撃は効かないが、背後からの攻撃には弱い。動きは素早いものの小回りが利かず、階段を苦手としている。一樹は室内の長机や椅子を使ってうまく四足闇人の進路を遮りつつ逃げ、休憩室の外へ出た。狭い通路がまっすぐ続き、すぐ左手側に作業室と書かれた扉があった。素早く中に入る。四足闇人が休憩室から勢いよく飛び出してきたが、一樹を見失っており、通路を真っ直ぐ進んだ。一樹はすぐに外へ出て、背を向ける格好の四足闇人に拳銃を撃つ。五発中三発命中させて倒したものの、この闇人は復活が異常に早い。すぐにこ

の場から離れなければ。一樹は四足闇人の死骸を跳び越え、走って通路を進む。少し進むと通路は左に折れ、その先に階段が見えた。背後で四足闇人がよみがえる気配があったが、なんとか見つかる前に角を曲がり、階段を駆けあがった。四足闇人は階段が苦手だ。このまま階段をあがっていれば、追いつかれることはないだろう。一樹はそのまま階段をあがり、屋上へ出た。幻視で確認すると、四足闇人は一樹の姿を見失ったようで、休憩室と作業室の間をうろろしていた。

だが、安心したのもつかの間、また身体が震え、屋上で幻視する自分の姿が見えた。同時に銃声がして、足元の床の一部が弾けとんだ。屋上に別の闇人がいたのだ。

「……居場所が無いってのは、切ないなあ」

その闇人は警察官の格好をし、リボルバー式の拳銃を構えていた。見覚えがある。遊園地で木船郁子と石碑を破壊した際、園内にいた警官の闇人だ。

さらに引き金を引こうとする闇人。隠れる隙はない。一樹は咄嗟にライトを向けた。悲鳴を上げ、両目を抑える闇人。その隙に銃を撃つ。先ほど四足闇人に五発撃ったから、残りは四発。全て当てれば倒せるはずだが、とっさの射撃では狙いが定まるはずもない。命中したのは半分の二発。警官闇人は大きくのけ反ったものの、倒れない。一樹は銃を振り上げて走った。他に武器は持っていないから、もうこれで殴るしかない。体勢を整えて拳銃を構える闇人の顔に向けて打ち下ろす。三度殴りつけると、警官闇人は倒れた。

なんとか倒したものの、銃に装填していた弾をすべて使ってしまった。予備の玉は九発。まだ鉄塔の四分の一の高さにも到達していないのに、半分を使ったことになる。これでは銃弾が持たない。拳銃の殴り攻撃だけで進むにはあまりにも危険だろう。一樹はとりあえず警官闇人の拳銃を奪おうとしたが、つりひもで結び付けられてあり奪えなかった。その上、弾は一樹が使っている銃の口径とは違うもので使えない。結局、銃弾を補充することはできなかったが。

——うん？

警官闇人の懐から、木の枝のようなものが覗いていた。それだけな

らただのゴミか焚き木くらいにしか見えないのだが、その枝にはお札や紙垂が貼つてあり、神具のように見えた。

——まさか、あれが滅爻樹。

一樹は木の枝を取った。長さは三十センチほど。先端は鋭く、ところどころコブのように膨らんでいる。それが、二本。一方には太田常雄、もう一方には太田ともえという銘が刻まれていた。初めて見るが、恐らくこれが不浄を祓う神木の枝・滅爻樹だろう。これを刺せば、何度でもよみがえる閻人を滅することができるはず。

しかし、枝はその二本しかない。島の伝承では、赤子が生まれるたびに当主が新たな枝を取りに行くという。ならば、枝は一度しか使えないのだろう。この先も多くの閻人が待ち構えているはずだ。使いどころは慎重に選ばなくてはならない。

滅爻樹を手に入れた一樹は進路を探す。事務棟と鉄塔は密接するほど近い位置に建っており、屋上の北側から鉄塔の通路へ跳び移れそうだ。一樹は鉄塔へ飛び移り、再びらせん状の階段をあがった。

鉄塔の中層まであがった一樹。中層は、いたるところに巨大な樹木が絡みついている他、ところどころに古い家屋やアスファルトの道路、さらには街灯や電柱まで存在していた。集落が丸々融合してしまったかのようだ。おかげで身を隠す場所が多いものの、逆に言えば閻人共がどこに潜んでいるか判らないということでもある。より慎重に進んでいかなければならないだろう。

頭上で銃声が鳴り、一樹は身を屈めた。幸い弾は一樹には当たらず、近くに着弾した様子もない。もう一度銃声したが同じだった。一樹を狙っているのではないのかもしれない。幻視で様子を探ると、ここから二階分あがったところに、小銃を構えた閻人の視点を見つけた。思った通り、鉄塔内にいる一樹ではなく、東にある鉱業所の屋上に銃口を向けている。永井が入った建物だ。幻視で永井の気配を探ると、屋上の出入り口付近に身をひそめていた。狙撃手に狙われ、身動きが取れないのだろう。こちらで狙撃手の注意を引けば、その間に移動できるはずだ。

一樹は幻視をやめると、手のひらをメガホンのようにして口に添



え、「ごつちだ！」と叫んだ。身体が震え、狙撃手の銃口が永井から一樹へ向く視点が見えた。うまくいった。すぐさま走り、鉄塔と融合している家屋の陰に身を隠す。銃声が響いたが、なんとか当たらずにすんだ。幻視で永井の様子を確認すると、「なんだよ、余計なことすんじゃないねえよ」と文句を言いつつ、屋上から鉄塔へと飛び移った。幻視をやめる一樹。助けてやったのに恩知らずなヤツだ。一樹は苦笑いをしつつ先へ進む。さらに階段をあがると、コンクリート製のビルに挟まれた細い通路に出た。雑居ビルの裏通りといった雰囲気だ。とても鉄塔の内部とは思えない構造である。

その先の通路は崩れていたので、一樹はビルの中へ入ることにした。『夜見島林業事務所』という看板が掲げられている。鉄塔建設時に森の木を伐採した業者の事務所だろう。中に入ると、倉庫らしき部屋にのこぎりや斧などの伐採道具が置いてあった。これは使えそうだな。一樹は様々な伐採道具の中から、比較的軽くて使いやすそうな鉋を持っていくことにした。銃と比べると頼りなさは否めないものの、銃弾が乏しい状態では頼らざるを得ないだろう。

倉庫を出た一樹は奥へと進み、内部の階段を使って二階へあがる。その窓から外へ出て再び鉄塔の通路へ戻ることができた。やれやれ、と、小さくため息をつく。これではまるで迷路だ。この調子では、本当に先端部へたどり着けるかどうか、判ったものではない。

「——おい、一樹、一樹！」

一樹を呼ぶ声が聞こえた。永井の声だ。足元から聞こえる。通路から顔を出して下を覗くと、三メートルほど下に足場があり、そこに永井がいた。

「手が届かないんだ。他に道も無い。引き上げてくれ」

一樹に向かって左手を伸ばす永井。一樹が上から手を伸ばせば充分届く高さだが。

「人にものを頼むときは、お願いします、だろ？」

子供に言い聞かすような口調で言う一樹。さつき狙撃手の気を引いて助けた時に、文句を言った仕返しだ。

永井は一瞬目を丸くしたが、すぐに顔を伏せ、めんどくさそうな様

子で頭を掻き、そして、右手の小銃を一樹に向けた。

「——おい——」

とつさに身を引く一樹。永井は引き金を引く。甲高い悲鳴が、一樹の背後で聞こえた。振り返ると、すぐ後ろで小銃を持った闇人が倒れるところだった。鉱業所屋上の永井を狙っていた狙撃手だ。そう言えばこいつの姿が無かった。一樹や永井が来ることを見こして、身を隠していたのかもしれない。

下を見ると、永井がしてやったりと言わんばかりの顔をしていた。「……なにビビってんだよ？ 助けてもらったときは、なんて言うのかな？」

苦笑いを返す一樹。それはこっちのセリフだ、と言いたるところだが、油断していたところを救ってもらったのは間違いない。

「……ありがとう、助かったよ」

しゅしゅではあったが、一樹は礼を言った。

永井も苦笑いで返すと、再び手を伸ばした。「引き上げてくれ、頼む」

一樹は手を伸ばし、永井の手を握った。二人でタイミングを合わせ、永井を引き上げた。

永井は左手を拳にして、一樹の肩を小突いた。「さつきは助かったぜ、ありがとう」

そして、笑った。

思わぬ言葉と、そして笑顔に、一樹は思わず目を逸らす。「……いや、礼なんて、いいさ」

永井は眉をひそめる。「なに照れてんだ？ 気持ち悪い」

「べ……別に照れてなんかない！ それより、かなり時間を喰ってしまった。急ぐぞ」

先を歩く一樹。もう少しで先端部だ。先に続く通路や階段は、相変わらず家屋やビル・樹木などが融合している。身を隠す場所が多いが、ここから見える限り、進路は途切れたり分岐したりはしてはいない。このまま先端部まで永井と共闘していけるだろう。気に入らないヤツだが、やはり自衛隊で訓練を受けているだけのことはあり、銃

の腕は確かなようだ。この先、頼りになるだろう。

——そうだ。銃弾。

一樹は拳銃の弾が不足していることを思い出した。永井が持っている小銃は一樹の拳銃と同じ弾を使う。予備があるなら分けてもらおう。一樹は振り返り。

「永井、銃弾が余ってたなら、分けて——」

そして、言葉を失う。

◇

永井の後ろ。一樹が通ったビルの窓から、ツインテールの髪型にセーラー服姿の少女が出てきたのだ。

直接顔を見るのは初めてだが、一樹は瞬時に、それが矢倉市子であると悟る。右手に機関銃を、左手にコンバットナイフを持ち、そして、顔に、背筋が凍るほど恐ろしい狂人の笑みを浮かべていたから。

「永井！ 後ろ!!」

一樹が叫び、永井が振り返るよりも早く、市子は、機関銃の引き金を引いた。リズムの良い銃声に合わせるかのように、永井の身体がびくびくと震えた。胸から、腹から、血飛沫が飛び散り、刹那の間の後、永井はゆっくりと倒れた。

「永井!!」

駆け寄ろうとした一樹の肩を、腕を、腹を、足を、市子が放った銃弾が貫いた。運よく急所は外れたが、身体が大きく弾かれ、尻餅をつく。そこへさらに銃弾を撃ち込もうとした市子だったが、弾切れを告げる音がする。市子は機関銃を大きく振る。それだけの動作で弾倉が外れた。そして、ナイフを持ったままの左手でポケットから弾倉を取り出し、一切手間取ることなく装填した。再び銃口を向けるが、一樹はなんとか這って物陰に身を隠した。

「永井！ 無事か!!」

一樹は叫ぶ。返事は無かった。だが、わずかに顔を出して確認すると、永井は首を動かし、後ろの市子を見ようとしていた。

「市子……ちゃん……そんなの……持つちゃ……危ないよ……」

永井は銃を構えることもなく、逃げることもなく、説得するかのような口調でそう言った。あれは絶対に矢倉市子ではなく、屍人の勢力がつくり出した化物だが、永井はまだそれを信じていないのだろうか。

永井は残された力を振り絞って仰向けになると、右手をポケットに入れ、何かを取り出した。ふたつのブレスレットだった。一方には朱色の石が、もう一方には碧色の石があしらわれている。市子と、彼女の親友の木船倫子が、友情の証としてお揃いで買い揃えたブレスレットだ。

「……ほら……市子ちゃんと……友達のブレスレット……見つけたよ……」

すでにそんな力は残されていないはずなのに、永井は首を上げ、右手を上げ、市子にブレスレットを差し出す。

市子が、銃口を下げた。

ゆつくりと、永井に近づく。

永井が、小さく笑った。

「……良かった……これで……元の市子ちゃんに……」

永井のそばに立ち、ブレスレットを見つめる市子の目には——何の興味も宿っていないかった。

永井が差し出した手を、市子は蹴り飛ばした。ふたつのブレスレットは、はるか鉄塔の下へと落ちていく。

市子は、永井に銃口を向け。

「……市子ちゃ……」

狂笑を浮かべたまま引き金を引き、永井の額に銃弾を撃ち込んだ。

「永井!!」

一樹の叫びに、今度こそ本当に、永井は応えない。瞳は見開かれたまま虚空を見つめ、肌は急激に色が失われる。永井は、冷たい軀むくろと化していた。

——と、市子が、大きく口を開けた。

そこから、黒いもやもやとした煙のような塊が溢れ出る。黒い塊は

まるで生き物のようにうねうねと蠢き、軀と化した永井の体内へ消えた。まさか、あれは屍霊か!?

虚空を見つめたままの永井が、血の気を失った肌の永井が、ゆつくりと起き上がり。

「……いひこつやんぬ……たふけなひと……」

呂律の回らない口調で言い、小銃を構えた。

屍人としてよみがえった永井を、市子は満足げな表情で見っていた。

一樹の頭上で銃声があった。同時に、銃弾が市子の胸を貫く。鉄塔の上部に、闇人の狙撃手がいる。銃弾は確実に市子の急所を撃ち抜いている。

だが、市子はわずかに怯んだだけだった。驚くべきことに、瞬時に傷がふさがりはじめる。わずか数秒で、傷も、セーラー服に開いた穴も、完全に塞がっていた。

屍人と化した永井が小銃を構え、鉄塔上部の狙撃手に向かって撃った。何発か外したものの、銃弾は狙撃手を捕らえた。狙撃手は鉄塔から投げ出され、地上へ落下する。

《行くぞ!!》

市子が号令をかけるように言った。その声は、およそ十四才の少女のものではない。恐ろしく低い、闇の底から響くような声だった。それも、複数の声が重なり合い、ひとつになったような、奇妙な声。

その声に応じ、市子の後に永井が続く。

そして――。

永井の背後から、小銃を持った屍人が、拳銃を持った屍人が、包丁を持った屍人が、アイロンを持った屍人が――多数の屍人が現れ、市子の後に続いた。中には、永井が撃った狙撃手の屍人や、事務棟の屋上で一樹が倒した警官の屍人の姿もある。闇人が地上に現れて以降姿を見なかった屍人が、矢倉市子の力で勢力を取り戻したのか。

通路の奥から、かちやかちやと犬が走るような音が聞こえた。四足闇人が突進してくる。その後ろには、機関銃や拳銃を持った人型の闇人もいる。

市子は狂笑を深めると、突進してくる四足闇人に向かって走る。そ

して、四足闇人の目前で跳躍し、すぐ横の家屋の壁を蹴ってさらに高く跳ぶと、空中で身体を反転させながら四足闇人の背中に銃弾を撃ち込んだ。静かに着地する市子。その背中に、拳銃闇人が銃弾を撃ち込む。市子は倒れない。振り向きざまにナイフを投げた。ナイフは闇人の額に突き刺さる。倒れた闇人の屍を乗り越え、機関銃を乱射しながら向かって来る闇人。市子はスカートをひるがえし、太もものホルスターに挿してあった拳銃を抜き取ると、機関銃闇人に銃弾を撃ち込んだ。倒れた機関銃闇人の後ろからも、さらなる数の闇人が迫ってくる。

「ぬおおゆやぶんんいとうるうくれえ!!」

屍人たちも奇声をあげ、闇人達と戦う。屍人共の動きは鈍いが、市子が先頭に立って戦うことで、次々と闇人を蹴散らしていく。

《雑兵どもがいくら集まろうと無駄だ!! さっさと母を連れてこい!!》

市子が吠えた。すでに数十体もの闇人を倒している。同時に、口から屍霊を吐き出し、倒した闇人を味方としてよみがえらせる。屍人たちは、どんどん勢力を強めていく。

と、巨石で鋼鉄の壁を叩いたような音がして、屍人が数体まとめて吹っ飛んだ。一体は壁にぶつかり、二体は後方の仲間の頭上に落ち、残りは鉄塔の下へ落下する。

通路の奥から巨体闇人が現れたのだ。巨石のような拳を振るい、屍人共をなぎ倒す。下腹部の巨大な顔の左目に、眼帯代わりの黒い布を巻きつけていた。この辺りの闇人のボスだろうか。

「劣化種ごときがほざくな!! その薄汚い面を母の前にさらすなど、断じて許さぬぞ!!」

ボス格の闇人の登場で、その後ろからもさらに巨体闇人が姿を現す。屍人も市子を中心に迎え撃つ。鉄塔の上層は、闇人と屍人で溢れ、混乱状態だ。

ふいに。

物陰に隠れていた一樹のそばに、覚えのある気配が現れた。

「……………か……………み……………くわあ……………ぎ……………るい……………か……………え……………せ

……」

それは、あの着物女の屍人——姿は四足闇人のままだから、四足屍人というべきか。

着物女の四足屍人は、巨大な口を開けた。

——俺は屍人としてよみがえるのか、それとも、闇人としてよみがえるのか。

意識が途切れる寸前、一樹は、そんなことを考えていた。

☆

数時間後——。

☆

屍人の勢力を率いて鉄塔に攻め込んだ矢倉市子は——いや、矢倉市子の姿を模した者は、ひとり、鉄塔の先端部に立っていた。右手に日本刀を、左手には機関銃を持ち、地上を見下ろす。彼女の眼下では、鉄塔で、あるいは森の中で、漁港で、要塞跡で——島のいたるところで、屍人と闇人が戦いを繰り返していた。戦況は五分五分だ。最終的にどちらの勢力が勝つのかは、自分にも、そして、恐らく母にも、まだ判らない。

市子の姿を模した者は、唇の端を吊り上げて笑った。ようやく、待ち人が来たのだ。

機関銃を投げ捨てた。両手で刀を持ち、頭上に振り上げ、鉄塔から跳ぶ。

そして。

凄まじい速さで上昇してくる母の顔に向かって、刀を振り下ろした。

☆

蒼ノ久集落で一樹守と別れた木船郁子は、鉄塔そばの豎坑櫓に身をひそめ、途方に暮れていた。鉄塔は現実世界と繋がっており、登れば元の世界へ帰れる——そう思ってた。ここまで来たのだが、鉄塔は闇人と屍人が激しく争っており、混乱状態だ。到底郁子一人で登れるような状況ではない。さらには、つい先ほど、闇人達を束ねるあの異形の生物が現れ、宙を泳いで鉄塔の先端へと向かって行った。闇人と屍人、どちらが勝つかは判らないが、どちらにしても、勝ち残った勢力が地上へと侵攻するだろう。阻止するためには、この鉄塔を破壊するしかない。しかし、爆弾でもない限り、この巨大な鉄塔を破壊するのは不可能だ。それに、鉄塔を破壊すれば、郁子自身は島に取り残されてしまう。どうすればいいのか、郁子には判らない。

☆

人生最大の危機を乗り切ることができなかった阿部倉司は絶望していた。どうあがいても絶望だった。とにかくひたすら絶望だ。絶望しか存在しないのだ。もはや生きる資格は無い。生きていても無意味だ。だから、何もせず、ただ大の字になって横たわる。化物どもに見つかればなすすべもなく殺されるだろうが、知ったことではない。いや、それこそが今の彼の望みだった。一刻も早くこの世界から消えてなくなりたいかった。だが、化物どもは遠巻きに阿部を見守るだけで、一向に襲ってくる気配はない。どうやら化物どもにまで見捨てられたようだ。情けなくて涙が出る。

☆

母に取り込まれた脩を救うべく奔走する加奈江は、鉄塔の中層で闇人及び屍人と戦っていた。彼女の手には、三上家の物置で見つけた骨が握られている。小太刀のような姿となったそれは、たった一振り、屍人や人型の闇人はもちろん、巨体闇人や四足闇人さえも両断してしまうほど強力な武器だった。それでも、いまの混乱状態の鉄塔を



登るのは容易ではない。見上げると、鉄塔の上層では、母と、屍人の勢力が放った鳩の女が、激しい戦闘を繰り広げている。どちらが勝つかは加奈江にも判らない。自分もあそこに到達し、母と戦って脩を救わねばならないが、今の状態では困難だと言わざるを得ない。

さらには。

加奈江は、もうひとつ異なる気配を感じていた。南西の方角、潮降浜という地域から、邪悪な気配が近づいて来るのだ。それは、母に匹敵するほど大きな存在だ。おそらくこれは、屍人たちを束ねている者。

これが母と接触したとき、いったい何が起こるのか、加奈江にも想像がつかない。

☆

昭和八十年八月四日、深夜〇時。

ふたつの闇の勢力はひとつとなり、地上へと侵攻する――。

第七十三話 『奪還』 永井頼人 夜見島金鉢社宅／  
八棟102号室 14：45：29 終了条件2

巨体闇人の襲撃を受け、同行者の矢倉市子をさらわれてしまった永井頼人は、市子が社宅口棟の301号室にいるのを突き止めた。救出に向かった永井が見たものは、包丁で闇人の喉を斬り裂き、血の海と化した室内にたたずむ市子だった。市子は狂笑を浮かべ、拾った機関銃を乱射する。なんとか銃弾をかわした永井は室外へ飛び出し、階段の陰に身を隠した。そこへ、永井を追って部屋を出て来た市子が、ちようど階段を上がって来た闇人共と鉢合わせになってしまった。闇人は拳銃や機関拳銃で市子を撃つたものの、市子は倒れず、逆に機関銃を撃ち返して闇人共を倒してしまう。撃たれた傷も謎の力でたちどころに治り、市子は笑い声を上げながら階段を駆け下りて行った。

永井は――。

◇

「――市子ちゃん!!」

永井は機関拳銃のリロードも忘れ、階段の陰から飛び出して市子を呼び止めた。

市子は二階へ下りたところだった。永井の声に振り返る。狂笑を浮かべたまま、機関拳銃を永井に向けた。その指が引き金にかかる前に、永井は、市子が持っていたブレスレットを取り出した。

「友達の、ノリコちゃんのブレスレットだよ!!」

それを見せた瞬間、市子は、びくと大きく震えた。引き金から指を離し、全身が硬直したかのように動かなくなる。

「……………り……………コ……………ブレ……………ス……………レット……………お揃い……………」

発する言葉が途切れ途切れになった。狂笑は消え、引き金から離れた指は動かない。

永井は確信する。今、目の前にいる少女は、まぎれもなく矢倉市子本人だと。

市子は、自分は海に落ちて死んだ、と言っていた。夜見島近辺の海の底には姿を盗む化物がいて、自分はその化物が作り出した偽物だと。

その話が本当なのか、ただの都市伝説なのか、永井には判断がつかない。先ほどの市子——銃で撃たれても倒れず、狂笑を上げて闇人共を惨殺し、撃たれた傷もすぐに治る姿——を見ると、普通の人間だとは到底思えない。

だが、それでも。

「思い出すんだ、ノリコちゃんのことを」

永井は階段を駆け下り、ブレスレットを手渡した。

「君は化物なんかじゃない！ 化物に操られているだけだ！」

例え闇人共を殺戮しようと、たちどころに傷が治ろうと、ほんの三十分ほど前まで、彼女は怪異に怯えるごく普通の少女だったのだ。あれが化物の姿であるはずがない。

そう信じて。

「正気に戻るんだ！ そして、一緒にノリコちゃんを探そう！」

永井は市子の両肩に手を置き、まっすぐに見つめ、そう語りかけた。

その視線から逃げるように、市子は目を伏せた。

「ノリコ……ノリコはあたしを見捨て……」

力無い言葉でつぶやいたが、すぐさま「違う！」と、自らの言葉を否定する。「あれは仕方なかった……あのままだったら……二人とも死んでた……でも……あたしは……死んでなんか……わかんない……わかんない……」

市子はうめき声をあげ、頭を抱えてうずくまった。

「大丈夫かい、市子ちゃん？」

永井が市子の背に手を添えるが。

「……うわあああ!!」

市子は永井の手を振り払うと、両手で永井を突き飛ばした。

そして、永井が尻餅をついた隙に、階段を駆け下りる。

「待つて！ 市子ちゃん!!」

永井は立ち上がって後を追う。市子に続いて一階に下り、出入口から外に出た。その瞬間、銃声が鳴り響き、足元の土の一角が弾けとんだ。市子が撃ったのではない。隣の口棟屋上にいる小銃を持った闇人だった。入口前にいた闇人もよみがえっている。永井は社宅内に戻り、身を隠した。

市子は、闇人に撃たれるのもいとわずそのまま走り、社宅の角を曲がって姿が見えなくなった。永井は幻視を使い、市子の気配を探る。

「……ノリコ……お母さん……一人にしないで……みんなどこ……寂しいよ……ナカジマ君……」

乱雑に言葉を発しながら、市子は北東の方向へ走る。途中で何度も闇人に襲われるが、逃げながら機関銃を乱射して倒す。怯えた声を上げたかと思うと突如笑い出し、泣き出したと思ったら怒りの声を上げ、走る。正常な市子と異常な市子が交互に現れているように見えた。

「……ああ……あはは……あはは……ああ!!」

市子は奇声を上げながら、北東の金網扉から敷地外へ出て、そのまま走り去った。

永井は後を追おうとしたが、大勢の闇人共に阻まれ、断念せざるをえなかった。仕方なく、南東の出入口から脱出する。

そして、永井はブライトウイン号で一樹守と再会し、鉄塔の最上層を目指す――。

第七十四話 『共闘』 永井頼人 四鳴山／離島線4  
号基鉄塔 18:05:01 終了条件2

鉄塔の先端に島から脱出する鍵があると確信した一樹守は、ブライトウイン号で再会した永井頼人と共に塔を登る。次々と襲い来る闇人を倒し、かなりの銃弾と体力を失ったものの、なんとか中層までたどり着いた。一樹は永井から銃弾を分けてもらおうと振り返り、そして、言葉を失った。

◇

いつの間にか、永井の背後に巨体闇人が立っていた。

「——永井！ 後ろ!!」 叫ぶ一樹。

だが、永井が振り返るよりも早く、巨体闇人が拳を振るった。巨石のような拳に殴られた永井の身体が宙に浮く。ここは鉄塔内の狭い通路だ。一步足を踏み外しただけで、奈落の底へ落ちるしかない。巨体闇人に殴り飛ばされた永井は、なすすべもなく地上へと落下していった。

「勝手に入り込みおって、馬鹿が」

階下に消えた永井を満足げに見つめた後、巨体闇人は一樹の方を向いた。眼帯代わりだろうか、左目に黒い布を巻きつけた巨大な顔が、ゆっくりと迫る。一樹が拳銃を構えても、巨体闇人は不敵に笑うだけだ。一樹が巨体闇人と遭遇するのはこれが初めてだが、恐らく四足闇人同様正面からの攻撃は効かないだろう。銃弾が少ないこの状況で無駄撃ちするわけにはいかない。倒すためには背後に回り込んで撃つ必要があるが、この狭い通路で背を取るのは無理だ。一樹は踵を返して走った。

「逃がすか!」

巨体闇人が追って来る。その巨体に似合わず意外と足は速いものの、通路が狭いこともあって追いつかれることはないだろう。走り続

けると、正面に鉄塔と融合した廃ビルの一角が見えた。一樹は中に逃げ込んだ。

そこは三階まで吹き抜けになった広いフロアで、大型の油圧式リフトや小型のクレーンなどが置いてあった。トロツコや掘削機など、金鉱で使う重機をメンテナンスする建物のようだ。両側の壁沿いに二階部分のライトブリッジへ上がる階段があったので、一樹は右手側の階段を駆け上がった。直後に巨体闇人がビル内に入って来て、出入口付近で周囲を見回す。

「……薄汚いこそ泥め、どこに隠れた？」

どうやら一樹の姿を見失ったようだ。一樹は巨体闇人から見えないようライトブリッジ上に伏せて様子を伺う。巨体闇人はフロアを進み、リフトやクレーンの陰を探し始めた。一樹に背を向ける格好になることも多いが、距離が離れているため、拳銃で狙っても外す可能性が高い。残り少ない銃弾で確実に仕留めるためには、危険だが下へおり、できるだけ接近するしかないだろう。一樹は巨体闇人の注意が他に注がれている隙に階段をおり、物陰に身を隠しながら背後へ忍び寄る。そして、充分に距離を詰めたところで飛び出し、巨体闇人の背に銃口を向けた。

だが、その瞬間、巨体闇人の身体から黒い煙が吹き出し、全身を包み込んだ。

「——なに!？」

黒煙は巨体闇人の身体を完全に隠してしまう。それだけにとどまらず、さらに吹き広がって一樹さえも飲み込んでしまった。視界は遮られ、目の前に突き出した拳銃さえも見えない。

その、一樹の目の前に、突如巨大な拳が現れた。強い衝撃と共に、一樹の身体は大きく弾き飛ばされる。

「わしの目の黒いうちは騙されんぞ」

黒煙が晴れ、巨体闇人が姿を現した。下腹部の顔が不敵に笑い、ゆっくりと近づいて来る。一樹はすぐに身を起こすと、近くの小型クレーンの陰に身を隠した。

「それで隠れたつもりか？」

巨体闇人はさらに近づいて来る。正面からの銃撃は効かない。なんとかして背後に回り込むしかない。一樹はライトを取り出した。闇人は光に弱い。ライトでヤツの目をくらませ、その隙を突く。一樹はクレーンの陰から出て、ライトを向けた。だが、また巨体闇人の身体から黒煙が吹き出し、光を遮った。そして、黒煙の中から拳が飛び出してきて、一樹を弾き飛ばす。

「——っ！」

最初の一撃よりもさらに強烈な衝撃に、一瞬意識が飛んだ。大きく弾き飛ばされた一樹は背中から地面に叩きつけられた。その衝撃で、なんとか意識を保つ。身を起こし、銃を構えようとしたが、その銃が無い。一瞬意識が飛んでいる間に手放してしまったようだ。周囲を見回し、少し離れた所に落ちているのを見つけた。駆け寄って手を伸ばすが、一樹の手が銃に触れるよりも早く、黒煙から出て来た巨体闇人が一樹の首をつかんだ。そのまま怪力で頭上に持ち上げられる。首だけで吊り上げられている状態だ。

「フフ……今日は大漁だな」

巨体闇人の手に力が込められる。頸部が圧迫されるどころか首をへし折られかねないほどの力だ。一樹は薄れる意識の中で武器を探り、なんとか鉞を取り出した。力無く持ち上げ、巨体闇人へ振るう。しかし、銃弾さえ弾いてしまう巨体闇人の身体に、朦朧としている一樹が振るう鉞が通じるはずもない。巨体闇人は、まるで羽虫でも追い払うかのようにもう片方の手を振り、鉞を弾き飛ばした。

——武器……武器を……。

一樹はさらに武器を探る。拳銃を失い、鉞も失ったいま、一樹が持っているのは警官闇人から奪った木の枝だけだ。朦朧とする意識の中で、それを取り出した。

「——それは？」

枝を見た瞬間、巨体闇人はうろたえたような声を上げた。首を締め上げていた力が弱まり、解放された一樹は床に落ちる。巨体闇人の下腹部にある顔の正面だ。

——枝を……刺せ。

それは一樹自身の意志だったのか、あるいは誰か他の者の声が聞こえたのか、一樹自身にも判らない。とにかく一樹は、床に落ちた瞬間枝を突き出してた。銃弾も鉋も弾く巨体闇人の顔に、その枝は、ほとんど何の抵抗も無く刺さった。

「ぬおっ！」

奇声を上げる巨体闇人。枝を握り、抜こうとするが、それよりも先に枝から根のようなものが生え出し、巨体闇人の全身に絡みついた。同時に、闇人の身体が青い炎に包まれる。悲鳴を上げる闇人。炎はすぐそばにいる一樹さえ包み込む勢いだが、一樹には熱も痛みも感じない。炎はさらに燃え上がり、同時に、枝が成長していく。代わりに、巨体闇人の身体は、枝に養分を吸い取られるかのごとく、みるみるしぼんでいった。

「……穢れが……消える……」

巨体闇人の力無い言葉と共に、やがて炎が燃え尽きた。

しばらく動くことができなかった一樹だが、意識が回復するのを待ち、やがて身体を起こした。巨体闇人の身体は完全に消滅し、そこには、一メートルほどの小さな樹が生えているだけだった。

——これが、滅爻樹の力……。

一樹はごくりと喉を鳴らす。夜見島には、葬儀の際死者に神木の枝を刺して弔う風習がある。初めてこの話を聞いたときは奇妙に思ったが、今ならそれも納得できる。これでは、闇霊も屍霊も憑りつくことができない。あの巨体闇人をももの数秒で消滅させるほどの力。滅爻樹は、想像以上に強力な武器だ。

だが、枝は樹と化してしまった。もう使うことはできない。残る枝はあと一本。慎重に使わなければならぬ。

一樹は一度大きく息を吐きだすと、銃と鉋を拾い、ビルの入口から外を見た。永井が鉄塔から落とされて十分ほど経つ。地上ははるか遠く、永井の姿は確認できない。この高さでは助かる見込みはまず無さだろうが、奇跡的に助かる可能性もゼロではない。しかし、引き返すことはできない。このまま鉄塔を登らなければならぬ。登る前に二人で決めたことだ。どちらか一人だけでも塔の先端部にたどり



着けばいいと。

——永井、すまん。

一樹は胸の内で詫びると、先を急いだ。

☆

この、数分前——。

一樹守を執拗に追う着物姿の四足闇人が、廃ビル内に入って来た。フロアでは、巨体闇人が一樹を締め上げているところだった。その様子を、着物姿の四足闇人は離れた場所で見ている。顔に小さな笑みを浮かべている。一樹は拳銃と鉈を失い、絶望的な状態だ。これで髪飾りを取り返せる——そう思ったのかもしれない。

だが、一樹が滅爻樹を取り出すと、巨体闇人はうろたえ、手を離した。一樹が巨体闇人に滅爻樹を刺す。滅爻樹は巨体闇人に絡みつきながら燃え上がり、やがて一本の樹と化した。

その様子を見た着物姿の四足闇人は、しばらく困惑した表情だったが、やがて鋭い目つきとなり、大きく一度頷いた。迷いを断ち切り、覚悟を決めた、そんな表情。

しかし。

着物姿の四足闇人は一樹に襲い掛かることはなく、ゆっくりと後ずさりすると、静かにその場を離れた。

第七十五話 『闇人』 木船郁子 四鳴山／離島線4  
号基鉄塔 20:19:42 終了条件2

一樹守と別れ、一人、島からの脱出を目指す木船郁子は、四鳴山の鉄塔のふもとで鳩の少女と出会った。加奈江と名乗ったその少女から滅爻樹を受け取り、鉄塔を登る郁子。階段が途中から崩れていたため、隣の豎坑櫓の屋上へ飛び降り、そこから連絡橋を渡って鉱業所へと移動しようとした。

◇

豎坑櫓から鉱業所へ入るための扉は鉄格子製のもので、南京錠で閉ざされていた。しかし、劣化により錆びてボロボロなので、強い衝撃を与えれば壊れそうだ。郁子は遊園地からずっと持ち歩いているゴルフクラブを使い、南京錠を叩いた。三度叩くと思った通り壊れたので、なんとか中に入ることができた。

そこは鉱業所の三階部分の通路だ。出入口の正面にはやや幅の広い廊下が続いており、左側は細い廊下がある。どちらも明かりは点いていないため真つ暗だ。

出入口のすぐそばにはロッカーが置かれてあった。決して広くはない通路にあるそのロッカーに、郁子は違和感を覚えた。よく見ると、床には出入口の前からロッカーをずらした跡がついていた。出入口を塞いでいたのを、誰かがずらして通れるようにしたのだろうか？しかし、出入口には鍵がかけられたままだった。誰かが通った形跡は無い。ならば、ロッカーをずらしたのは通るためではなく、外の明かりを取り入れるためかもしれない。この出入口はちょうど南側に位置するから、昼間ならば通路の奥まで陽が射すだろう。闇人共がわざわざ光を室内に取り入れるとは思えないから、生きている人間がやったと考えるのが妥当だ。

つまり、郁子よりも先に、ここへ来た人間がいる。

——まさか、一樹君？

とつさに思い浮かんだのは彼だった。彼も島からの脱出手段を探るうち、空に浮かぶ逆さまの夜見島と鉄塔の関連性に気づき、ここへ来てもおかしくはない。だとしたら、いま彼は無事だろうか？ 別れる前、彼は地の底からの逃亡で負傷し、闇人共と戦える状態ではなかった。この島では不思議な力で傷が癒えるのが早い、それでも一人でこの鉄塔を登るのは危険だろう。誰か協力してくれる人と会えていれば良いのだけれど。

——つて、あんなヤツ、関係ないよ。

郁子は首を振り、考えを振り払った。一樹は郁子の特殊能力を聞き、怯えたような表情をした。まるで化物を見るような目で、郁子を見ていた。ああいう目で見られるのが嫌だから、郁子は人と関わるのを避け、一人で生きていくと決めたのだ。もう二度と、高校の時のような目には遭いたくない。

気を取り直し、先を急ぐ。ライトで照らすと、正面の通路の先に階段らしきものが見えたので、そちらへ進んだ。屋上へあがるための階段のようだが、下部が崩れており、そのままでは登ることができない。崩れ落ちた場所へ手を伸ばすとなんとか指先は届くものの、郁子の腕力ではよじ登ることはできなかった。他に道は無い。仕方なく郁子は通路を戻り、もうひとつの細い通路を進むことにした。しばらく進むと扉に突き当たったので開ける。そこは、一階から七階までが吹き抜けとなったフロアだった。この鉱業所には大型の掘削機が出入りすることもあったため、フロアはかなりの広さだ。その、三階部分のライトブリッジに出たようだ。

ビクンと身体が震え、階下から郁子を見上げる視点が見えた。フロアにいる闇人に見つかつた。幸い人型の闇人で、銃も持っていないかつた。ナイフのような刃物を振り上げ、階段をあがって来る。銃を持っていないとはいえ、郁子一人では危険な相手に変わりはない。郁子は目を閉じて闇人の気配を探り、そして、心に侵入した。

——止まって！

指示を出すと、闇人は立ち止まって直立不動の姿勢になる。そのま

ま後ろを向かせてから感応を解き、背後からゴルフクラブで殴りつけた。勢いで階段を転げ落ちた闇人は、そのまま動かなくなった。

郁子は階段を下り、フロアを探索する。時間をかけてくまなく調べたものの、途中何度か闇霊に襲われ撃退したくらいで、特に変わったものは無い。上へ向かう道は郁子が通った通路以外には無く、出入口から建物の外へ出るしかなさそうだ。仕方なく出入口の扉に手をかけた瞬間、鼓動が早くなった。敵意を持ったものが近くにいる時の警告だ。幻視で外の気配を探ると、機関銃を持った闇人が警戒をしていた。それだけでなく、多数の闇霊もうろついている。ゴルフクラブ一本で太刀打ちできる状況ではなさそうだ。また感応に頼るしかない。郁子は機関銃を持った闇人に感応すると、闇霊を撃つように指示を出した。指示通り、闇人は次々と闇霊を撃つ。全て倒した後もそのまま撃たせ続け、銃弾をすべて使い切らせた。そして、扉の前に移動させ、背を向かせてから感応を解く。我に返った闇人が戸惑っている所に飛び出して、背後から殴って倒した。

郁子は大きく息を吐き、呼吸を整える。港で働いているから体力にはそれなりに自信があるものの、感応は身体ではなく心が疲弊する。たて続けに何度も使っているのは、鉄塔を登る前に力が尽きてしまうだろう。体力と気力を温存するために乱用は避けた方が良いが、やはり、闇人や闇霊の数が多し。陽が暮れて以降、闇人の数はどんどん多くなっている。鉄塔から地上へ侵攻しようと集まっているのだ。そして、ヤツらの親玉——あの異形の生物も、間もなくここにやって来るだろう。その前に、なんとしても脱出しなければ。郁子は気力を振り絞り、先を急ぐ。

郁子が出て来たのは鉄塔の北側だった。一度四階に相当する高さまであがりまた地上に戻って来たことになるが、ここからなら鉄塔内部の階段を使ってあがれそうだ。郁子は階段をあがる。鉄塔内部をぐるりと回りながら上層へと続く階段は、三階ほどの高さをあがったところで引きちぎられたように寸断されていた。この階段を使ってこれ以上進むことはできないが、周囲を見回すと、すぐ南に建つ事務棟の外壁に大きくせり出した梁があり、そこへ跳び移れそうだった。

梁を伝った先には開けっ放しの窓があるため、そこから中に入れば先へ進めるかもしれない。郁子は梁へ跳び移り、窓へと手を伸ばした。だが、その窓は少々高い位置にあり、郁子の身長では届かなかった。仕方がないので梁を伝ってさらに移動する。しばらく進むと、鉄塔に絡みつくように生えている巨樹の幹に行き当たった。幹には太い蔦が絡みついていて、引っ張ってみると、下手なロープより頑丈そうだった。郁子の体重くらいなら充分支えられるだろう。上を見ると、少しよじ登れば事務棟四階のベランダがある。あそこから中に入れるだろう。郁子は蔦を使つて樹の幹をよじ登り、四階のベランダまであがった。

ベランダへ出入りするための扉には鍵がかかっていたいなかったので、難なく中に入ることができた。正面に細い通路が続いている。その先に、何体かの闇人の姿が見えた。多くは人型の闇人だが、一体だけ、四足で歩行する闇人の姿があった。蒼ノ久の集落からこの鉄塔まで来る途中、何度か遭遇したことがある。闇人が進化した姿のひとつで、素早く駆け回り、正面からの攻撃はほとんど効かない厄介な相手だ。幸い闇人共はまだこちらに気がついていない。すぐ右手側に扉があったので、一旦身を隠すことにした。

そこは大きな木箱や段ボール箱が積み上げられた倉庫だった。身を隠した郁子は幻視で外の様子を伺う。人型の闇人はいずれも銃やナイフで武装しており、まともに戦つて倒すのは無理だ。感応を使うしかないが、ここまででもかなり体力と気力を消耗しているので、これ以上の乱用は避けたい。体力の回復もかねて、ここは少し様子を見た方がいいかもしれない。そう判断した郁子は、少し待つことにした。

——そうだ。なにか、あたしにも使える武器はないかな。

ここまで郁子はゴルフクラブ一本で戦つてきた。感応を使えばそれでも充分だったのだが、冷静に考えれば、銃を持つ相手が多数いる中ではあまりにも無謀だったように思う。この先も闇人の数は増えるだろうし、あの四足闇人や、さらに厄介な巨体闇人もいる。感応を使う気力にも限界がある。いよいよとなったら、銃を使う必要がある

かもしれない。とりあえず、ここに何かないだろうか？ 郁子は待っている間に倉庫内を探ってみることにした。積み上げられた木箱や段ボール箱をいくつか開けてみる。ほとんどは金鋏事業の計画書や請求書などの書類、あるいはボールペンやハサミなどの事務用品だったが、中にひとつだけ、明らかに他とは違う立派な桐箱を見つけた。縦五十センチ、横十センチほどの縦長の箱で、蓋にはお札ふだのようなものが貼ってある。墨筆で書かれた文字は達筆すぎて読むのに苦労したが、どうやら『天上大魚之骨』と書かれてあるようだ。見るからに神聖なものが納められていそうな雰囲気である。もしかしたら、滅爻樹のような神器かもしれない。郁子は箱を開けた。

それは、一見すると刀のようなものだった。

わずかに湾曲したそれに、刃は無い。材質は金属でもなく、表面は茶色で、凹凸がある。触れてみると、木のようにも、石のようにも感じる不思議な材質だ。

その横には、二つ折りにされた紙が一枚添えられてあった。開いてみると、何か書かれてある。

#### 『鑑定結果』

夜見島B出土品54号（登録抹消）と同じく、捏造品である可能性が高い

“ 大きい天の魚死に、全ての骨散り、小さい魚頭生まれた ”

蓋に貼られたお札と違い、墨筆ではなくボールペンで書かれたものだった。メモ書きのようである。その内容から推測すると、家宝か何かとして伝わっていた物を専門家に鑑定してもらった結果偽物だった、というところだろうか。だが、最後の一文は、何を意味しているのだろうか？ 郁子には見当もつかないが、ただ、『骨』という言葉が、妙に胸に残った。その理由も判った。箱の中に入っていたそれは、生物の骨によく似ているのだ。このメモ書きや蓋のお札から読み解くならば、これは魚の骨だろう。五十センチほどの大きさの骨となると、かなり大きな魚だ。カジキやサメ、あるいはシャチやクジラくら

いはある。どちらも、夜見島近海では滅多にお目にかかれるものではない。だから、これを拾った島民は神聖なものとして崇め、『天上大魚之骨』つまり、天の上に住む大きな魚の骨として扱ったのだ。特別珍しいことではない。夜見島のような海辺の集落では、漂着物を神として祀る風習まつが残る地域は多い。

まあ、なんにしても魚の骨では武器になりそうもない。専門家が捏造品と鑑定しているのなら、滅爻樹のような穢れを祓う力も期待できないだろう。郁子は骨を横に置き、さらに別の箱を探った。武器として使えそうなものは何も無かったが、ひとつ、郁子の目を引くものがあった。それは、『夜見島民話集』と書かれた古い書物だった。無論、民話集など読んでいる場合ではないのは判っている。それでも郁子が気になったのは、それが『妊婦海に入らば災いを宿す』という副題だったからだ。

夜見島には、妊娠した女を海に入れてはいけないという伝承がある。その話は郁子も聞いたことがあったが、その理由までは知らなかった。それが、この書物には書かれてあるかもしれない。そして、夜見島の古い伝承は、閻人や死人共に関わるものだと思っただけで間違いない。郁子は読んでみることにした。

『島で最高齢の老婆から聞いた話。』

昔、蒼ノ久の浜に貧しい漁師の夫婦が住んでいた。ある日、お腹に子を宿した妻が、海辺で夫の帰りを待っていた。

島には、『妊婦海に入らば災いを宿す』という言葉い伝えがある。島の者は誰もこの話を信じ、決して禁を犯すことはなかったが、妻は夫恋しさに、思わず海に足を踏み入れてしまった。

その夜、話を聞いた夫は怒り狂った。妊婦が海に入ると腹の子に穢れが宿るため、産まれたらすぐに切り刻み、一升瓶に入れ土中に埋めるのが島の習わしなのだ。妻は泣いて許しを乞うたが、夫も、島の誰も、決して許さなかった。

だが、妻は習わしを守らず、密かに赤子を産み、育てた。

数年後、成長した子の胸に、人の顔のような痣が浮かび上がった。

それは、穢れの憑代よりしろとなる証だった。

島の長である太田家の主は、神木の枝を用いて子の穢れを祓った。子は穢れと共に消え去った。

我が子を喪った妻は仏門へ入り、生涯子の御霊を弔ったそうである。』

心臓を鷲掴みにされたような気分だった。あるいは、足元から黒い手が伸びてきて、地の底へ引きずり込もうとしているかのような錯覚。それほど恐ろしい話だった。妊婦が海に入っただけで赤子が斬り刻まれて埋められる……いまの島の状況を見ると、これが単なる作り話ではなく、本当に行われていた可能性は極めて高い。許し難い行為であるが、郁子が恐ろしいと感じたのはそこではない。その話が、郁子自身と重なったからだ。思わず胸に手をあてる。郁子の胸には、物心ついた頃から痣がある。子供の頃は小さかったその痣は、成長するにつれどんどん大きく、濃くなった。そして、いまその痣は、人の顔のように見えるのだ。

警告を促す鼓動がして、郁子は考えを中断せざるを得なくなった。敵が迫っている。幻視で外の様子を探ると、左官用のこてを持った闇人が倉庫の前に来ていた。ドアを開け、郁子を発見した闇人は、こてを振り上げて襲ってくる。あれならば、感応を使うまでもなく倒せるだろう。郁子は幻視を解くと、ゴルフクラブを取ろうとした。だが、手の届く場所にクラブが無い。倉庫内を探している間に、少し離れた場所に置いてしまったのだ。もちろん闇人は待つてくれない。とつさに、さつき横に置いていた骨のようなものを手にする。武器としては心もとないが、今はこれに頼るしかない。

と、郁子がそれを手にした瞬間。

「ひいっ!!」

闇人は両手で頭をかばい、脅えた声を上げた。

郁子は怯んだ闇人に向かってその骨を打ち付ける。骨とはいえそれなりに大きく重量がある為、威力は悪くなかった。四度殴ると、闇人は甲高い悲鳴を上げて倒れた。



大きく息を吐く郁子。なんとか危機を乗り切ったが、いまのはなんだったのだろうか？ 郁子が仕方なく手にしたこの骨を見て、闇人は明らかに脅えていた。やはり、この骨はなにかの神器だったのだろうか？ そのわりには威力があるとは言えない。闇人を倒すのに四度も殴らなければいけなかった。これならゴルフクラブの方がまだましだろう。

それでも、闇人を怯ませることができれば役に立つかもしれない。郁子はその骨を持っていくことにした。

結局その骨と民話集以外は何も見つからなかったが、体力は回復することができた。民話集の内容は気になるが、今そのことを考えても何にもならない。まずは島からの脱出が先決だ。郁子は幻視で外の様子を探る。通路の先に集まっていた闇人は別の場所に移動していた。さらに気配を探り、四足闇人の視点を見つける。視点は郁子のほぼ真下だった。下の階の休憩室のような場所にいる。移動するならば今だ。

……あれ？

幻視を解こうとして、郁子は四足闇人が何かを見つめていることに気がついた。休憩室のパイプイスの足下に、廃墟と化したビルには不釣り合いな最新式のデジタルカメラが落ちており、それをじつと見ているのだ。そのカメラに見覚えがあった。島に流れ着いた際に拾った、一樹守のカメラだ。蒼ノ久集落で返したはずだが、また落としたのだろう。ということは、やはり、彼もこの鉄塔に来ている。

………

幻視を解き、考える郁子。郁子の目的は鉄塔を登ることだ。いま階段をおりる必要はない。まして、そこには厄介な四足闇人がいるのだ。今のうちに上層階へあがるべきだ。わざわざ下へおりるなどバカげている。

それでも。

……ああ、もう！ ふざけんなよ！ バーカ!!

悪態をつくくと、郁子は倉庫から出て階段をおりた。休憩室の前まで行き、幻視で中の様子を探る。四足闇人は、「あーあ。さっさと登っ

ちやいたいの……」と愚痴を言いながら、休憩室内をうろうろしていた。郁子は感応を使い、心の中に入り込むと、休憩室を出て遠くへ移動するよう指示を出す。四足闇人は指示通り休憩室を出ると、かちやかちやと足音を立て離れて行った。充分距離を取ったところで感応を解き、無人となった部屋へ入る。落ちていたカメラは、やはり一樹守のもので間違いない。

「……せっかく拾ってあげたのに、なんでまた落とすかな」

郁子はカメラをポケットにしまうと、四足闇人が戻る前に休憩室を出て、また階段を登った。

第七十六話 『和解』 木船郁子 四鳴山／離島線4  
号基鉄塔 21:39:01

鉄塔の中層に到達した木船郁子はさらに上層階を目指す。集落と一体化し路地裏のようになった区画を通り、金鋤用の重機をメンテナンスするビル跡を抜け、さらに進む。途中、襲い来る闇人には感応の能力を使って戦った。操ってその場から遠ざけ、あるいは背を向けさせて後ろから殴打し、数が多ければ銃を持った者を操って同士討ちさせる。郁子の持つ武器は遊園地で拾ったゴルフクラブくらいだから、必然的に感応に頼ることが多くなる。感応は気力を消耗する。鉄塔を登り続け、体力も失った状態で感応を乱用し続けた郁子は、もはや歩くのもやっという状態だった。それでも立ち止まるわけにはいかない。陽が落ちて以降、鉄塔にはほとんど闇人が集まっている。その数は増える一方だ。時間が経てば経つほど、鉄塔を登るのは困難になるだろう。とにかく早く登らなければいけない。

びくと身体が震え、頭上の通路から郁子に向けて小銃を構える視点が見えた。狙撃手に見つかった。すぐに感応を使用し、相手の心に入り込もうとする。だがその瞬間、暗闇でランプが燃料を使い果たしたかのように目の前が真っ暗になった。足に力が入らなくなり、がくと膝が折れる。危うく落下するところだったが、なんとか通路の手すりにしがみついて耐えた。直後に銃声が響く。不幸中の幸いか、体勢を崩したことで弾道から外れ、銃弾をかわすことができた。もちろん、狙撃手は狙いを定め直し、二発目を撃ってくるだろう。能力を使いきった郁子には、もはや身を隠す力もない。これで終わり……？諦めかけた時、聞こえたのは銃声ではなく闇人の悲鳴だった。残ったわずかな力で顔をあげると、闇人は大きくのけ反った後、体勢を崩して地上へと落下していった。

そこには、鉈を持った一樹守の姿があった。

「一樹……くん……」

安堵したことで気力が途切れ、郁子は崩れ落ちるように座った。

「大丈夫か!？」

一樹が上層から駆けおりて来て、郁子のそばで心配そうに見つめる。

「大丈夫……少し休めば……平気……」乱れた呼吸を整えながら、なんとかそう答えた。

「そうか」と、一樹は頷く。「けど、さすがにここは危険だ。移動しよう。立てるか?」

そして、手を差し伸べてきた。

郁子は、しばらくその手を見つめていたが、やがて視線を落とした。

「……一人で大丈夫よ」

差し出された手を遮り、立ち上がろうとする。手を借りるわけにはいかない。一人で島を脱出すると決めたのだから。

だが、足に力が入らず、倒れそうになった。

「危ない」

そこを、一樹が二の腕を持って支えてくれた。

郁子はとつさに振りほどこうとしたが、もはやその力さえ残っていなかった。

「無理するな」

一樹は郁子の腕を肩に回し、郁子を支え、歩きはじめた。仕方なく、そのまま肩を借りる。幸いパーカー越しに触れているので、心の声が聞こえてくることはなかった。

それに。

——温かい。

そんなことを思う。

雨に打たれ通しとはいえ真夏だ。そのうえ郁子が着ているパーカーは耐水性が高いもので、身体は冷えていない。

それでも温かいと思ってしまうのは、心が凍えていたからだろうか。一樹がそばにいてくれることで、心が安らぐ気がする。

郁子は一樹に身体を預けたまま歩いた。

「……すまなかった」

不意に、一樹が詫びの言葉を口にした。

「え？」

なんのことか判らず、郁子は聞き返す。

「あの時、君から手を離れたのは、君のことを恐れたからじゃない」

一樹が続けて言った言葉で、郁子は理解した。

蒼ノ久集落での一樹との別れ際、郁子の腕をつかんだ一樹に対し、郁子は、触れた人の心が読める能力のことを話した。それを聞いた一樹は手を離し、怯えるような、あるいは話を疑うような、そんな微妙な眼差しを向けていた。

その目が、かつてのクラスメイトと重なった。

能力のせいで孤立した郁子のことを、クラスメイトは、いつもあの目で見ていた。

一樹も、かつてのクラスメイトのように郁子から離れていくような気がした。それが怖かった。だから一樹の元を去った。どうせ離れていくのならば、初めからそばにいない方が良い——そう思っても。

「……あなたは、悪くないよ」

つぶやくように言う。

本当は、郁子にも判っていたのだ。悪いのは、一樹ではないということに。

心の内をさらけ出すつもりで、郁子は言葉を継ぐ。「悪いのはあたし……みんな、あたしのせいなんだよ」

一樹の元を去ったのも、高校卒業後に地元を離れたのも、自分で決めたことだ。もう二度と傷つきたくないから。

一樹守を、クラスのみんなを——それだけではない。郁子を育ててくれた祖父母を、母と双子の姉妹を——多くの人との関わりを。

全てを拒絶したのは、自分の方なのだ。

それを、郁子は最初から判っていたのだ。

一樹は、ふと、遠い目をした。

「……俺は、もう後悔したくない」

視線の先は空が広がっているだけだ。何も無い。

それでも、一樹はその目で何かを見つめているようだった。あるいは

は、昔のことを思い出しているのかもしれない。

しばらく遠いところを見つめていた一樹だったが、その目を郁子に向けた。決意が宿っていた。

「君の力になりたいんだ。一緒に、島から脱出しよう」

まつすぐに郁子を見つめ、そう告げた。

「――」

郁子は、彼の言葉を胸に刻みつけるように、目を閉じた。

誰とも関わらず、一人で生きていきたい。誰かに冷たい目で見られるのは、もういやだ。

それでも。

心の奥底では、人との関わりを求めている。人の温もりを求めている。

傷つきたくないが、誰かのそばにいたい。

矛盾しているのは判っている。それでも、どうしようもない。それはもう、認めるしかない。

郁子は一度大きく頷き、目を開け、一樹を見つめる。

そして。

「……なにそれ？ 気持ち悪い」

吹き出しながら、そう言った。

一樹は目を丸くし、「いや、別に変な意味じゃ……」と、うろたえる。

郁子はさらに笑って、「最初に会ったときから思ってたけど、あんたって、ホント、バカだよね」と続けると、パーカーのポケットから一樹のデジタルカメラを取り出した。「はい。また落ちてたよ？ あんた、カメラ落とし過ぎじゃない？ そんなんで雑誌の編集者なんて務まるの？」

「返す言葉もないな」一樹は苦笑いでカメラを受け取った。「ありがとう、わざわざ届けてくれて」

「そ。あんたのために、わざわざ取りに行ったんだからね？」

カメラを入手するため、四足闇人のいる下層へおりた。無用な危険を犯したが、それでも取りに行かずにはいられなかった。一樹の元を去ったのは自分だ。それでも、心は彼とのつながりを求めている。矛

盾しているが、どうしようもない。

二人は闇人共に見つかりにくいビルの陰に身を隠し、腰を下ろした。この島では謎の力で傷が癒えたり体力が回復するのが早い。少し休めば、また歩けるようになるだろう。

同時に、郁子は気力も回復していることに気がついていた。これは島の力ではなく、一樹のそばにいるからかもしれない——そんな風に考えた郁子は、なんだか無性におかしくなり、また笑った。そんな郁子見て、一樹も同じように笑う。

二人はしばらく、その場で笑い合っていた。

第七十七話 『苦悶』 阿部倉司 夜見島金鉞採掘所

19:28:17 終了条件2

夜中に食べた夜見アケビの実が見事に当たった阿部倉司は、人生最大の危機に陥ったことで潜在能力限界マックスモードに突入し、人類を超越した頭脳と身体能力でトイレを探す。なんやかんやあつてインクラインのトロッコ牽引車を動かせるようにした阿部は、そのまま牽引車に乗って移動するか、近くの送風機管理室を調べるか、究極の二択を迫られた。

◇

阿部は自分が置かれている状況を冷静に分析する。波が治まっているとはいえ、それはあくまでも一時的なものだ。間を置かず、さらなる波がやって来るだろう。寄り道をして無駄な時間を費やしている余裕は無い。だが、この広い採掘所跡の中、どこにトイレがあるか判らないという点を忘れてはならない。トイレの場所が判っているのなら先を急ぐべきだが、場所が判らない以上、送風機室を調べることは、決して無駄な時間を費やすわけではない。今の状況ならば、全てしらみつぶしに探すローラー作戦も有効な戦術のひとつだ。そう判断した阿部は、トロッコ牽引車は一旦置いておき、先に送風機管理室を調べることにした。

送風機管理室は、地下の坑道へ空気を送るための機械を管理する部屋だ。室内にはそれらしき機械がたくさん並び、天井には何本ものダクトが通っているが、電気が来ていないのか、機械は動きそうにない。その上、天井のダクトも穴が空いたり外れたりしてボロボロだった。さらに、木の板を打ち付けた壁の一角に大きな穴が空いており、外が丸見えの状態だ。穴の下には壁から剥がれた板と釘が散らばっている。一本一本工具を使って外したようだ。誰かがここから脱出するために空けたのかもしれない。



無論、今の阿部にとってそんなことはどうでも良い。今の彼に必要なのはトイレだけだ。残念ながらここにトイレは無い。だが阿部は、無駄足を踏んだとは思っていない。送風機室にトイレは無いということを確認できただけで、それは一歩前進したことになるのだ。そう自分に言い聞かせ、部屋から出ようとした時、外から犬の鳴き声が聞こえた。

——ん？ この鳴き声は？

振り返ると、壁に空いた穴を潜って、見覚えのある大型犬が一匹中に入ってきた。

「あー！ オメー、作家先生の犬じゃねーか！ やっぱ無事だったのか！！」

それは、夜見島へ来る途中の船に乗り合わせ、島でも一時行動を共にした盲目の作家先生が連れていた盲導犬だった。漁港の丘の上にあった資材置き場が倒壊し、先生を助けるために身代わりとなったと聞いていた。先生は諦めていたが、あるとき阿部が話した通り、やはり無事だったのだ。名前は確か、ツカサだったはずだ。

ツカサは部屋に入って来たときはうれしそうな様子だったが、阿部の顔を見た途端、あからさまに落胆した様子でガックリと頭を落とした。ご主人様だと思っただけなのに違うヤツだった、といったところだろうか。

「すまねえな。先生はいま、ちよつと遠いところにいるんだ。連れてってやりてーけど、オレにはどうしてもやらなければならぬことがあるんだよ」

阿部はツカサの前にしゃがみ、首から背中中の辺りを撫でた。それがいけなかった。がるる、と、獣が唸るような音がする。ツカサではない。音の元は阿部の腹だ。静かだった水面にさざ波が立つかのごとく、再びキリキリと痛み始める。迂闊だった。しゃがむという行為が便意を促す結果となってしまうのだ。こうしてはいられない。早く次の行動に移らねば。

そんな阿部の様子を見ていたツカサが、大きく一声鳴いた。そして、阿部の横をすり抜け、部屋を出ていく。

「おい、どこ行くんだよ?」

なんとか便意を抑えつつ立ち上がり、ツカサを呼ぶ。阿部を振り返ったツカサは、また一声鳴き、鼻をしゃくった。

その姿が、「ついて来な」と言ってるように見えた。

言うまでもないが、犬の嗅覚は非常に優れている。その優れた嗅覚で人間の病を発見する事例が世界各地で報告され、近年研究が進んでいることは阿部も知っていた。ガンやマラリアなど、訓練次第ではかなりの高確率で発見することができるらしい。今のツカサも似たようなものかもしれない。その鋭い嗅覚で阿部の陥った危機的狀況を察知し、同時に、トイレの場所も察知している可能性は高い。なんであれ、このままここにじっとしているわけにはいかないのだ。阿部はツカサを追い、送風機管理室を出た。

ツカサは地下の坑道には見向きもせず、インクラインの横を素通りし、S字を描く形の建物の奥へと進んでいく。

「おい。そっちに行くなら、これに乗った方が楽だぞ?」

阿部は、先ほど稼働させたインクラインのトロッコ牽引車を指さした。トロッコの線路は建物の奥、つまりツカサの向かう先へ続いている。これに乗って行けば腹への衝撃を抑えられるため、安全に移動できるはずだ。

だが、ツカサは振り返り、また一声吠えただけで、先へ進んだ。乗るな、ということだろうか。

犬に限らず、動物には不思議な予知能力がある。大きな地震の前日に鳥や猫が姿を消したという話は世界中で報告されているし、沈没する船から直前に大量のネズミが逃げ出したり、カエルが雨の前に鳴き出したり、タコがワールドカップの試合結果を当てるなどもその例だろう。潜在能力限界マックスモードの阿部をもつてしても予測不能なことを、動物たちは日常的に予測できているのだ。

「……判った。オメーを信じるぜ」

阿部はトロッコには乗らず、そのまま歩いてツカサの後に続いた。

S字を描く建物はまず緩やかに右へ曲がり、少し進むと左へと曲がっている。阿部は、できる限り腹を刺激しないよう慎重に、それで

いて、できる限り早くトイレに到達できるよう急いで、生と死のギリギリのラインを攻めながら進んだ。

S字のゾーンを抜け、建物が再びまっすぐになったところで、ツカサは足を止めた。そこは地下の坑道から運び出した金を選鉱するための場所だった。地面に敷かれた線路はさらに奥へと続いており、その脇にはいくつかトロツコが放置されている。

足を止めたツカサは、建物の奥を見ながら低い唸り声を上げた。おとなしい性格のツカサには不釣り合いな、敵意の宿る声だ。この先に何かいる。阿部は一旦トロツコの陰に隠れ、幻視で様子を伺った。少し進んだ先に、小銃を持った人型の闇人の視点がある。迷彩服を着ているため、恐らく自衛隊員の闇人だろう。闇人は注意深く周囲を警戒しているが、まだ阿部たちには気付いていない。危ないところだった。もし、あのトロツコ牽引車を使って移動していたら、走行音で気付かれ、狙撃されていたかもしれない。やはり、トロツコに乗らなかつたのは正解だったのだ。

阿部はそのまま幻視を続ける。周囲を警戒している闇人は、しばらく阿部が隠れている方向を見ていたが、やがて反対側を向いてそちらを警戒し始めた。そして、しばらくしてまたこちらを向く。それを繰り返していった。

「——っ!!」

その、視界の端に映ったものを見て、阿部は思わず声を上げそうになった。なんとか両手で口を抑えて耐える。危ないところだった。音で敵に見つかるならばまだ良い。気を抜いてケツの力が緩もうものなら、取り返しがつかないところだった。

阿部が闇人の視界の端に見たもの。それは、『休憩室』というプレートが貼られた引き戸だった。幻視を解き、ツカサを見る。ツカサは「そうだ」と言わんばかりに力強く頷いた。阿部は確信する。間違いない。あの部屋の中に、トイレがある。

ならば!

その出入口の前に陣取るあの狙撃手の闇人を倒せば、この人生最大の危機を突破できる! すなわち、これは阿部倉司の人生最大の勝負

だ！

はやる気持ちを抑え、阿部は再び幻視をして観察を続ける。周囲を警戒している闇人は、時折阿部が身を隠している側に背を向ける。襲い掛かるならその時がチャンスだが、ここから闇人の場所までは距離がある上、この先に身を隠す物は無い。半分も進まないうちに、ヤツはこちらを振り返るだろう。気付かれないよう忍び足で近づくのは不可能だ。だからと言って走ったら足音で気付かれる可能性が高い。接近戦で倒すのは難しいと言わざるを得ない。

ならば……これを使うしかない！

阿部は、この採掘所内に入り、最初に倒した狙撃手から奪い取った小銃を取り出した。文字通り、これが火を吹く時が来たのだ！

無論、阿部に小銃を撃った経験など無い。無いが、潜在能力限界マックスモードの阿部に不可能はない。前の狙撃手<sup>さき</sup>と戦った際、ヤツの動きは指先の動きひとつ逃さず記憶している。それを己で再現すれば良いのだ。言葉で言うほど簡単ではないだろうが、今の阿部ならば可能なのだ。

阿部はさらに幻視を続け、闇人がこちらに背を向けた時を狙って物陰から出た。小銃を構え、スコープの覗き込み、照準を合わせる。だが、やや遠い。いかに潜在能力限界マックスモードの阿部とはいえ、この距離では外す可能性がある。瞬時に脳内で計算が行われ、命中率74.348%と出た。四度に一度外す計算になる。勝負に出るには少々心もとない。あせるな、まだその時ではない。少しでも命中率を上げるのだ。阿部は照準を合わせたまましゃがみ歩きで近づくと距離を詰めるにつれ、命中率は上がってゆく76……78……82……まだだ……まだヤツが振り返るには時間がある……。さらに近づく。85……89……90%を超えた。まだイケる。さらに近づくと95……98……そして……100!! 今だ!! 阿部は引き金を引いた。心地よい連射音と衝撃と共に、阿部の銃が火を吹いた。そのすべての弾が、闇人の背中を撃ち抜く。闇人は低いうめき声をあげた。少し後ろにのけ反る格好になり、そのまま立ち尽くす。やがて両腕がだらんと下がり、小銃が地面に落ちた。闇人はゆっくりと視線を

落とし、自分の腹を見た。背中から撃ちこまれた銃弾は闇人の体を貫通している。迷彩服が大きく破れ、血が噴き出していた。その血を右手で拭い取り、わずかに首を傾げた後、阿部を振り返った。

「……やるじゃない……」

何の感情も宿らないニヤケ顔で（矛盾しているが、闇人はそういう存在だ）阿部を見る闇人。その足が、一步前に出た。

「……敵が他に気を取られている隙に背後から撃つ……お前にしちゃあ上出来だ……」

闇人は、その体格からは考えられないほど弱々しく、ゆっくりとした足取りで歩く。左右によるめきながらも視線は真っ直ぐに阿部を捕らえ、近づいて来る。

「……上官として……最期にひとつだけ……アドバイスしてやろう……この島では……何か行動を起こすたびに——」

「うるせえ邪魔だ！」

阿部は武器を小銃から必殺の釘バットに持ち替え、大ぶりのスイングで闇人の頭をかつ飛ばした。なげえんだよ倒れるならさっさと倒れる。頭をかつ飛ばされた闇人は倒れて動かなくなる。邪魔者はいなくなった。阿部は休憩室へ向かった。

と、ツカサがまた一声鳴いた。振り返ると、ツカサは倒れた闇人に鼻を寄せている。なんだ？ いまの一撃で、ヤツの息の根は完全に止まったはずだ。まあ、元は死体だから最初から息の根は止まっているのだが、周囲に闇霊の姿は無いから、少なくともよみがえるにはまだ時間がかかるはずだ。では、ツカサは何を気にしているのだろうか？

阿部が見ていると、ツカサは闇人のポケットを探り、中から何か取り出した。口にくわえて持つて来る。それは、炎を模したいかついキラが書かれたオイルライターだった。見慣れたデザインだ。それもそのはず。そのライターは阿部自身の持ち物だった。夜中にどこかで落とし、おかげで煙草が吸えなくて困っていたのだ。

「……俺んじゃねえか。あいつがパクリやがったのかよ」

もう一発殴ってやろうかと思ったが、再び猛烈な便意が襲って来たので思いとどまる。くだらない感情に惑わされている場合ではない。

今は一刻も早くトイレに到達しなければ。  
阿部は、休憩室の扉を開けた。  
そこには――。

第七十八話 『不測』 阿部倉司 夜見島金鉞採掘所

22:57:33

この世の楽園——そう聞いて、人は何処を思い浮かべるだろうか？  
二十六の環礁と千を超える島からなる国・モルディブ？ インド洋の真珠と呼ばれる常夏の島・セーシェル？ その美しい白砂からカリブの宝石と称されるサンブラス諸島？ 多くの海外リゾート地が思い浮かぶだろうが、そのような遠方の地まで行かずとも、もつと身近に、金もかからず行ける楽園が存在する。そう、トイレである。太古より、人はトイレ、あるいは便所、かわや 厠、ちようずば 手水場、こうか 後架にてクソを垂れ、そして、生きていることの幸せをかみしめてきたのだ。

人生最大の危機に陥っていた阿部倉司にとつて、そこはこの世の楽園であった。例えその世界が化物どもが次々と襲い来る異界であろうと、もはや絶滅危惧種の和式トイレですらない地面に穴を掘って板を張っただけのものであろうと、長年間放置され熟成されたナニがこの世のものとは思えぬ異臭を放っていたとしても、今の阿部にとつて、そこはまぎれもなくこの世の楽園だったのだ。

全てを成し遂げた阿部は、上機嫌でこの世の楽園を後にした。人生最大の危機を乗り切った彼は、この数時間でひと回りもふた回りも成長していた。さつきまで化物が蠢くこの異界の島が、今はぱらいそのように思える。外に出れば、空にはオーロラのような光のカーテンがはためき、周囲には光の鱗粉を撒いて羽ばたく蝶のような姿の天使様が舞い踊っているだろう。

しかも、幸運なことに、深夜にどこかで落としてしまったライターが、ついさつき見つかったのだ。朝からずつと煙草が吸えず困っていたところだ。良いことは続くものである。阿部はジャケットの胸ポケットから煙草を取り出し、闇人から奪還したライターで火を点けた。大きく吸い込み、肺の中を煙で満たし、そして吐き出す。ふむ。やはり大仕事を成し遂げた後の一服は格別だ。

休憩室の前に待機していたツカサが、一声鳴いた。

おっと、のんびりしている場合ではない。最大のミッションはクリアしたが、残念ながらこれでエンディングというワケではない。阿部の最終的な目的はこの島からの脱出だ。そのためにまず行方不明になったあの古い女を探さないといけないが、それに加え、ツカサと出会ったことで、あの異形の生物に飲み込まれた作家先生の救出という小目標も加わった。だが問題はない。人生最大の危機を乗り切り、大きく成長した阿部にとって、そのようなミッションはもはや小事。ハナクソをほじりながらも達成できるだろう。

「――よし、行くか、相棒」

阿部は煙草を消そうと思ったが、休憩室内を見回しても灰皿は見つからない。その辺にポイ捨てしていくのはポリシーに反する。さてどうしたものかと振り返ると、開けっ放しの扉の向こうに、先ほど利用したこの世の楽園があった。その距離、約7メートル。バスケットポイントシュートのラインほどだが、今の阿部にとっては小事だ。落とす気がしねえ。もうオレにはリングしか見えねえ。阿部は吸いかけの煙草を頭上に構え、わずかに屈んだ後、膝から肘、そして、煙草へと力を伝え、この世の楽園に向けて煙草を放った。そのシュートは、今までよりも高く、美しい弧を描いた。ツカサがけたたましく吠えている。静かにしろい。この音が、オレを何度でもよみがえらせる……何度でもよ！

煙草の吸い殻は、吸い込まれるようにこの世の楽園へと消えた。

「――つよおおし!!」

と、ガッツポーズを決めた瞬間。

阿部が聞いたのはゴールが決まる音ではなく、耳がはじけ飛ぶかと思ふほどの凄まじい爆音だった。

同時に、熱風と強い衝撃が阿部を襲う。

トイレという名のこの世の楽園は、一瞬にして灼熱いんふえるのの地獄と化したのだった。



第七十九話 『特攻』 永井頼人 夜見島小中学校  
22:28:44

巨体闇人の不意打ちにより鉄塔から落下した永井頼人は、夜見島西端の潮降浜へ来ていた。海から丘へ続く緩やかな上り坂の先に、かつて島の子供たちが通っていたという夜見島小中学校跡がある。暗闇の中にぼんやりと見える校舎は、火事でもあったのか全体が焼け焦げた状態だ。校庭には、ゆつくりとした動作で徘徊する人ならざる者の影が見える。化物共が蠢く夜の廃校……子供じみた怪談話のような状況だが、それは空想でも見間違いでもなく現実だ。学校の敷地内には多くの闇人の気配がある。幻視で確認する限り、そのすべてが迷彩服を着た巨体闇人が銃器で武装した人型の闇人だ。へり墜落で死亡した自衛隊員の闇人——すなわち、かつては永井の先輩や上司だった者たちだ。永井よりも経験が豊富で、訓練や競技大会でも優秀な結果を残している。まだまだ未熟な永井が単身で挑むのはあまりに無謀だろう。永井は小銃と機関拳銃を持っているものの、銃弾は決して多くない。誰かに助けを求めるか、もつと装備を整えてから来るべきだった……そう思い始めていた。

だが、不意に。

——永井、根性出せよ。

先輩の沖田が、訓練の際よくかけてくれた言葉を思い出した。

ひたすら運動場を走り回されたとき、夜中にたたき起こされて明け方近くまで筋トレをさせられたとき、三十キロの荷物を背負って三日三晩歩き続けたとき——あまりの厳しさに永井がくじけそうになったとき、沖田は、いつもこの言葉をかけてくれた。決してマジメな性格ではなかった永井が、日々繰り返される厳しい訓練を投げ出すことがなかったのは、沖田のこの言葉があったからだ。

永井は持ち物の中からドーランケースを取り出した。女性がよく

使うファンデーションのようなものだが、その色はOD色というくすんだ緑色に黒と茶の三色だ。永井は塗料を指ですくい取ると、それぞれの色を斜めのストライプに塗り、迷彩柄のフェイスペイントを施していた。それは、カモフラージュ効果を期待してではなく、強い決意を表すためのものだった。今の永井には、なんとしても成し遂げなければならぬことがある。どんなに危険であっても、逃げ出すわけにはいかない。

ペイントを終えた永井は、顔を上げ、鋭い目で校内を見つめる。

そして。

「……健康優良日本男児をなめんなよ……神風<sup>かみかぜ</sup>見せてやるよ！」

強い決意を胸に、中へ足を踏み入れた。

鉄塔から落下したときはさすがに死を覚悟した永井だったが、気がつくのと、何故か無傷で地上にいた。永井が突き落とされたのは鉄塔の中層だから、その高さは百メートルほどだ。そんな場所から落ちて無傷でいられるなど常識ではありえない。夢でも見ていたのかと思っただけだ。

永井のそばには岸田百合と同じ顔をした少女がいた。百合の正体については一樹から聞いて聞いている。永井はとっさに銃を向けたが、少女は永井に敵意を見せなかった。その少女は岸田百合と全く同じ顔をしているのだが、加奈江という名の別人だと言う。一樹が言っていた鳩の少女の一人だろう。鳩とは、闇人共を束ねるボスが人間の姿をコピーして生み出した化物で、同じ姿をした者が何体もいるらしい。

永井はあまり闇人のことを知らない。百合の正体や鳩については一樹から聞いただけで、その話が本当かどうかの判断もつかない。とりあえず、目の前の少女が永井に危害を加えるつもりが無いなら、永井としては戦う理由は無かった。それよりも一樹のことが心配だ。恐らく一人で鉄塔を登っているだろう。今から追いつけるかは判らないが、とにかく追わなければ。そう思い、再び鉄塔を登ろうとした

永井を、加奈江が止めた。島の西端にある潮降浜という地域へ向かえ  
と。そこに、あなたの大切な人がいるから、と。

大切な人——そう言われ、永井が真つ先に思い浮かべたのは沖田  
だった。沖田はへりの墜落で死亡し、遺体は遊園地に残したままだ。  
当然、化物どもが憑りつき、屍人や闇人として行動しているだろう。  
恩人である沖田が化物どもに乗っ取られ、操られている。放つてはお  
けない。沖田が命を落としたのは、へり墜落時に永井をかばったから  
だ。永井の身代わりになったとも言える。その結果沖田が化物と化  
したのならば、永井自身の手でケリを着けなければならぬ。

こうして永井は鉄塔を離れ、潮降浜へとやってきたのである。

正門から校庭内に入った永井は周囲を見回した。校門の右隣には  
大きな木があり、その向こうには花壇が見えた。反対側には鉄棒や滑  
り台などの遊具もある。どちらも闇人の姿は無いが、校庭の奥の方、  
校舎の手前に朝礼台が置かれてあり、その近くに闇人の姿が見えた。  
永井は一旦木の陰に身を隠す。朝礼台の近くにいる闇人は、巨体闇人  
が一体と、小銃を持った人型の闇人が一体だ。どちらも校舎の周辺を  
警戒しており、まだ永井の存在に気付いていない。永井は木の陰から  
銃を構え、スコープを覗き込み、巨体闇人へ照準を合わせた。巨体闇  
人は永井に背を向けた状態で遠ざかっている。永井は引き金を引い  
た。三発放った銃弾は全て背中に命中し、巨体闇人はのけ反って倒れ  
た。以前巨体闇人と戦ったときは正面からの銃撃が効かず苦戦した  
が、背後から不意を突けば案外あつけないものだ。

永井はそのまま銃口を移動させ、今度は人型の闇人に照準を合わせ  
た。闇人はこちらの方を向いているが、距離が離れているので狙われ  
ていることに気がついていない。そのまま引き金を引き、頭を打ち抜  
いた。

一度銃を下ろし、幻視で周囲を確認する。校庭内に闇人の気配はも  
う無い。残りは別の場所だ。永井は校舎裏へ移動しようとしたが、不

意に心臓の鼓動が激しくなったため足を止めた。近くに敵がいる時の警告だ。周囲を見回すと、最初に狙撃した巨体闇人が立ち上がるうとしていた。見つかる前に、再び木の陰に身を隠す。幸いよみがえった巨体闇人は永井の方には見向きもせず、再び校舎の周りを巡回し始めた。続いて人型の闇人もよみがえり、周囲を警戒し始める。

闇人は不死身ではないものの、倒してもその死体に新たな闇霊が憑りつくことで何度でもよみがえる。復活を阻止するためには、まず闇霊を殲滅しなければならぬ。闇霊は一体一体は極めて貧弱な存在で、銃や鈍器を使えばもちろん、懐中電灯程度の光でも照射し続ければ倒すことができる。ただ、数が多いのが問題だった。鉄塔では、光が当たらない場所には必ずと言っていいほど複数の闇霊が潜んでいて、四方八方から襲ってくるためかなり手を焼いた。一体一体倒すのはかなりの手間がかかるし危険だ。

だが、永井はここに来る前、加奈江から策をひとつ聞いていた。

この潮降浜の海辺の岩場には、夜見島に建つ二基の灯台の内のひとつ、潮降浜灯台が建っている。加奈江の話によると、四十年以上前に何者かがヒューズを盗んで以降稼働していないらしいが、そのヒューズがこの学校内にあるそうさ。どうやらヒューズを盗んだのは島の子供たちで、ほんのイタズラのつもりだったのだが思った以上の大騒ぎになり、怖くなって隠したそうなのだ。それを見つけて灯台を起動すればこの地域一帯を照らすことができ、光に弱い闇霊を一掃できるだろう。

永井は木のそばを離れ、闇人共に見つからないよう警戒しつつ花壇の奥へ進んだ。その先に、海亀の銅像が立っている。加奈江が言うには、その銅像が隠し場所の目印になっているそうさ。亀の尻尾から前に三步、左に五歩、右に二歩進んだ場所。そこにヒューズが埋められているらしい。永井は言われた通り尻尾の先から進み、行き着いた場所を自衛隊支給の折り畳み式スコップで掘り返してみた。二十センチほど掘るとスチール製の箱が出てきた。ふたを開けると、スポーツカー型の消しゴムや火薬銃などの安物のおもちゃにまぎれて、明らかにおもちゃとは違うガラス製の大きな筒が入っていた。五〇〇ミリ

リットルのジューズ缶ほどの大きさで、中に針金のようなものが一本通っている。一般的なヒューズとは比べかなり大きい。これが灯台のヒューズで間違いないだろう。

ただ、これを使って灯台を起動できたとしても、校内の闇霊を一掃できるかは疑問だった。

永井は校庭から丘の下を見下ろした。海沿いにドラム缶や木箱などが放置された荒地が広がっている。灯台はその向こうの岩場に建っているのだが、その照射部の高さは、丘の上のこの学校よりも低い位置にあるのだ。校庭まで光が届くかは微妙な高さだ。仮に届いたとしても、校舎裏まで照らすことはできないだろう。校内の闇霊を一掃するためには、別の手段を探った方が良くもしいない。

永井はヒューズをしまうと、先ほどと同じ要領で闇人を狙撃し、復活する前にその場を離れた。

校舎の南側へ移動すると、学校の敷地を囲う金網製の柵に小さな出入口があり、その前に軽トラックが停められていた。しめた、と思う永井。灯台の光には及ばないだろうが、あの軽トラのヘッドライトを使えば広範囲を照らすことができる。ハイビームで走行すれば校内の闇霊を一掃できるかもしれないし、走行中は例え巨体闇人といえどそう簡単に手出しできないだろう。

しかし、運転しようとして軽トラックに近づいた永井は落胆せざるを得なかった。軽トラックは停車しているのではなく、フェンスに衝突した状態で放置されていたのだ。よく見るとタイヤがパンクしており、周辺にはたくさん釘がばら撒かれていた。恐らく走行中この釘でパンクし、フェンスに突っ込んだのだろう。軽トラックの荷台の後部にはスペアタイヤが積まれているが、取り替えるためのフロアジャッキや工具などは積んでいなかった。もしそれらをどこから調達したとしても、取り替えるのは時間がかかるし、走行するためには地面にばら撒かれた釘も回収しなければならない。多くの闇人が徘徊している中、それだけのことをやってのけるのは現実的ではない。この方法もダメだ。永井は軽トラックを諦め、その場から移動しようとした。

——うん？

立ち去ろうとしたとき、ふと目をやった軽トラックの助手席に、とんでもないものを発見した。長さ二十センチほどの長方形のブロック状の物。水色に塗装された表面には爆発物を示すマークがペイントされている。訓練で見たことはあるが、まさかそれがこんな所に無造作に放置されているはずがない。永井はドアを開け手に取って確認してみたが、残念ながらそれは間違いなく本物だった。自衛隊の物資のひとつ・TNT火薬だ。代表的な軍用爆薬のひとつで、世界中の軍隊やテロリスト集団が使用している。なぜ、TNTがこんな所に……永井がすぐに思い出したのは、不時着直後の遊園地で見つけた沖田のバッグだった。沖田は装備品としてTNTと起爆装置を持っていたはずだが、バッグの中からTNTは無くなっていた。これがあるとき無くなったTNTだとしたら、沖田は近くにいる。永井がそう確信したとき。

びくん、と身体が震え、校舎裏の階段上から永井へ向けて小銃を構える視点が見えた。

すぐにトラックの陰に身を隠そうとしたが、それよりも早く銃声が響いた。間を置かず、永井の左の二の腕に鋭い痛みが走る。銃弾は掠めただけだったが、それでも腕が引きちぎられるかと思うほどの衝撃に、思わず尻餅をついて倒れてしまう。それが幸いだった。すぐさま二発目の銃声が響いたが、倒れたことで永井の身体は軽トラックの荷台の陰に隠れることになり、銃弾は土の地面を弾いただけだった。

運よく狙撃手から身を隠すことができた永井は傷の状態を確認する。衝撃こそ強かったものの、傷自体は大したことはない。これならばすぐに治るだろう。問題なのは狙撃手の腕前だ。永井を見つけた瞬間銃を構え、隠れるよりも早く引き金を引き命中させる。かなりの腕前でないと不可能だ。永井が所属する隊の中でそれほどの腕前を持っているのは、アジア大会のバイアスロン競技で優勝したことがある三沢と、それに匹敵するほどの腕前と言われる沖田、この二人だけだ。

「永井！ 俺だよ俺！」

狙撃手が叫んだ。その声は間違いなく、永井が尊敬する先輩・沖田のものだ。

「永井、お前も冷てえよなあ！　ずっと面倒見てやった俺を置いていくなんてよお！　そんな薄情なヤツだとは思わなかったよ！」

永井の心臓が大きく音を立てて鼓動した。ずっと心の奥に押しとどめていた罪悪感がよみがえる。ヘリの墜落後、遊園地で息を引き取った沖田を、永井はその場に残して去ったのだ。そのことを、沖田が恨んでいてもおかしくはない。

隠していた罪を掘り起こすように、沖田は続ける。「覚えてるか？

お前が入隊した日のこと？　初日からいきなり脱走しようとしたお前を引き止めたのは誰だ？　教官にブチ切れて殴りかかろうとしたこともあったよな？　あの時お前をなだめたのは誰だった？　行軍訓練のときはどうだ？　お前が脱落しなかったのは誰のおかげだ？」

無論、全て覚えている。入隊初日、式典が終わるとすぐに訓練が始まった。教官の命令で昼過ぎから夜まで永遠と運動場を走らされた永井は、こんなのやってられるかと、その夜脱走を図ろうとした。それを引きとめてくれたのは、当時副教官の一人だった沖田だ。候補生時代、夜中眠っている所を理由もなく叩き起こされ、朝まで筋トレさせられたこともある。あまりの理不尽さにブチ切れ、命じた教官に殴りかかりそうになった永井をなだめてくれたのも沖田だ。候補生期間を終え、正式に自衛官となった永井は、沖田と同じ隊に配属され、訓練を共にするようになった。三十キロの荷物を背負い一〇〇キロの距離を行軍する訓練の際、脱落しそうな永井を、沖田はずっと励まし続けてくれた。永井のスピードに合わせたおかげで、沖田自身も脱落扱いになるところだったのに。

忘れるはずがない。高校卒業後、他に行くところが無かったからという理由で入隊した永井に、沖田は自衛隊員の知識と技術を教えてくれた。なんの熱意も無かった永井が、今では若手の中でも頭角を現すほどの隊員になれたのは、全て沖田のおかげだ。恩人という言葉だけでは到底足りないほどの存在。そんな沖田を、永井は見捨てたのだ。

上官である三沢の命令だから仕方なかった……とも言えない。その後の不審な行動を見る限り、三沢には上官の資質が無かった。あのとき三沢の命令を無視してでも沖田を連れていくべきだったのだ。恨まれて当然だ——そう思った。

……いや。

惑わされるな！ 永井は自分に言い聞かせる。あれは沖田の死体に闇霊が憑りついたものであり、沖田本人ではない。一樹の話によると、闇霊が憑りついた死体——闇人達が『殻』と呼ぶもの——には生前の記憶が残っており、闇霊はそれを読み取って行動するようだ。生前と同じ顔で、生前の記憶を持ち、生前と同じように行動することもあるが、断じて本人ではない。今の沖田の言葉は、闇人が永井を動揺させるために言っているだけだ。そう考えると、罪悪感は消え、ふつふつと怒りが湧きあがってくる。化物ごときが沖田の身体を乗っ取っているだけでも許し難いのに、その記憶を勝手に覗き見て、こちらを動揺させるために使うとは。二人の思い出を汚された気分だった。

ただ、あの闇人は沖田本人ではないものの、沖田と同等の射撃の腕前を持っているのは確かだ。まだまだ未熟な永井が撃ち合って勝てるような相手ではない。何か策を用いなければならぬだろう。すぐに思いつくのは、闇人が苦手とする光を利用することだ。灯台や軽トラックのライトを利用するのは無理でも、消えている街灯を点けるなどして一瞬でも目をくらませれば、勝機は生まれる。しかし、そう都合よく消えている街灯の下に闇人が立つような状況などあるわけもない。校舎裏に街灯は無く、今すぐ使える光は永井が持っているライトだけだ。距離が遠いため、ライトの光では効果は薄いだろう。こうしている間にも、声を聞きつけた別の闇人が集まって来れば、状況はますます悪くなる。早く何とかしなければ。永井は打開策を求めて沖田を幻視した。沖田は小銃のスコップを覗き込み、永井が隠れている軽トラック付近に照準を合わせている。少しでも顔を出せば、すぐさま撃ち抜かれるだろう。沖田本人ではないのに沖田と同等の射撃の腕前を持っている。闇人とは、本当に憎らしい存在だ。



——闇人？

不意に思い直す。そう、いかに沖田と同じ射撃の腕をしていても、相手は所詮闇人なのだ。人間と同じようにはいかない。ならば。

永井は沖田の視点から方向と距離を読む。肩に取り付けてあるライトを取り外し、車体の陰から手だけ出して光を向けた。沖田はすぐにその手を撃とうとしたが、光に目を焼かれ悲鳴を上げる。距離的にはかなり遠く、通常ならば目をくらませるほどではないが、小銃のスコープを覗いている闇人には致命的な光だ。

永井はトラツクの陰から姿を出し、銃を構えた。そして、両手で目を抑え苦しむ沖田に素早く照準を合わせ、引き金を引く。五発連射した銃弾の全てが命中した。闇人の悶え苦しむ声が甲高い悲鳴に変わり、その場に倒れた。

銃口を下ろす永井。沖田の闇人は倒したが、これで終わりではない。倒れた死体に新たな闇霊が憑りつけば、またよみがえる。その前になんとかしなくては。

永井が懸念した通り、校舎裏を見ると、窓から闇霊が一体飛び出して、階段上の沖田の死体に向かって行った。すぐに小銃を撃って倒したものの、もう一体飛び出す。それを撃っても、さらに一体飛び出した。それで、永井は気がついた。さつきから校庭や校舎裏に闇霊の姿は無かったものの、倒した闇人が復活するのがやたらと早かった。ヤツらは校舎の中に潜んでいるのだ。永井がライトを向けると、校舎の窓という窓に、巨大な蛆虫のような姿が蠢いている。そのうちの一体がまた窓から飛び出したので、銃を構え引き金を引いた。だが、銃はからからと虚しい音を立てる。弾切れだ。

——くそ。

銃弾をリロードしている暇はない。そう判断した永井はとっさに駆け出した。階段を上がる闇霊を追うものの、闇霊の方が早かった。永井が階段を上がった時、闇霊の姿は沖田の中に消えた。沖田の身体が、陸に打ち上げられた魚のように跳ねた。復活する！

このとき——。

沖田のそばには、拳銃のようなものが落ちていた。拳銃よりも銃身が太く、丸みを帯びているそれは、自衛隊の装備品である信号拳銃だった。

永井は――。

◇

永井はそんなものには目もくれず、起き上がろうとする沖田に馬乗りになった。もがいて逃れようとする相手の両腕を両膝で押さえつけ、動きを封じる。

そして、先ほど軽トラックで見つけたTNTを取り出した。

闇人は、倒しても何度でもよみがえるが、それは倒れた死体に新たな闇霊が憑りつくからであり、決して不死の存在ではない。よって、闇霊が憑りつくことができなくなるほど死体を損壊させれば、二度とよみがえることはない。

TNTを見た沖田も、永井の意図を理解したのだろう。元々青白い顔をさらに青くし、嫌がつて首をぐるぐると振る。さらには、「永井！ 俺だよ！ 沖田だよ！ 判らないのか？ 散々お前の面倒を見てやっただろう？ 覚えてるか？ 去年の演習の時のことを？ ヘマをして上官に叱られそうになったお前をかばってやったのを忘れたのか？ お前はそんな恩知らずなヤツだったのか？」と、また殻の記憶を利用する。

もちろん。

「……うるせえぞ」

もう、永井が惑わされることはない。

永井は、沖田の口に無理矢理TNTをねじ込んだ。導火線とライターを取り出す。起爆装置が無くとも、これで火を点ければ爆破は可能だ。TNTに導火線を取り付けた。沖田が悲鳴を上げるが、口にねじ込まれたTNTのせいで、声にすらならない。

「じゃあな、化物」

ライターのスイッチを押し、導火線に火を点けた。すぐさま横っ飛びで地面に伏せる。

その、数瞬後。

凄まじい爆音と熱風が、永井の身体の上を駆け抜けた。伏せているにもかかわらず身体が吹き飛ばされそうになり、爪を立てて地面にしがみつく。永井は訓練で何度も手榴弾を投げたが、その数十倍はある爆音と熱風だった。周辺の木々が揺れ、朽ちかけの校舎をぎしぎしと揺らす。それを見たわけでも、あるいはそのような音を聞いたわけでもない。顔を伏せていても目が眩むほどの閃光と、瞬時に耳がダメになるほどの爆音から想像しただけだ。地面がピリピリと音を立てて揺れ、崩れ落ちるのではないかと思っただけだ。

やがて。

熱風と地面の揺れが消え、永井は、ゆっくりと顔を上げた。

そこに、沖田の姿はもう無かった。焼け焦げて大きく窪んだ地面と、いくつかの肉片が飛び散っているだけだ。バラバラに吹き飛んだ沖田。申し訳ないことをした、とは思わなかった。これで、もう二度と化物なつてよみがえることはない。沖田にとっても、それが本望のはずだ。

身体に残る痛みを耐えつつ、永井は立ち上がった。全身が痛むが、この程度ならば少し休めばすぐに治るだろう。視力はすでに回復した。聴力もそのうち回復するだろう。

永井は校舎に視線を移す。元々倒壊寸前の上、凄まじい爆風をまともに受けたはずだが、それでも校舎は変わらずそこに建っていた。窓に闇霊の姿も見える。爆発時の強烈な閃光で何体かは消滅したかもしれないが、それも、せいぜい窓際にいたヤツだけだろう。どんなに強烈な光であっても、外から照らすだけでは限界がある。校舎内の闇霊を殲滅するためには、内部から強烈な光を浴びせなければならぬ。

もつとも、今の永井にそこまでやる理由は無かった。彼がここへ来た目的は沖田を倒すことだ。それはすでに果たした。危険を犯してまで中に侵入し、奴らを殲滅する必要はないだろう。永井は階段を下

り、他の闇人に見つからないように身を隠しながら移動し、正門から外へ出ようとした。

その時。

周辺の景色が、不意に、完全な闇に包まれた。

銃を構え、周囲を見回す。光が消えた？ いや違う。ライトの光は消えていない。それに、今は幻視の能力の影響で、光が無い状況でもうつすらと見ることが出来るはずだ。それは、光が消えたのではなく、閉ざされたのだ。周囲に、黒くもやもやとした煙のようなものが立ち込めている。

その、煙の中から。

「……あんなに苦しんでいたのが、嘘みたいだよ」

低く、それでいてどこか弾むような声が聞こえた。永井の右側だった。すぐに銃口を向けたが、そこには黒煙しか存在しない。

「久し振りに最高の気分だ」

さらに声が響いた。今度は左だ。銃口を向けるが、やはり、そこには黒煙しかない。だが、確かにそこから聞こえた。永井は引き金を引いた。銃弾が煙の中に消える。それだけだった。悲鳴も、何かに当たったような音も、なにも聞こえない。虚空を撃つただけとしか思えない。

「悪い夢は、早く醒めないとな」

また聞こえた。銃を向け、撃つ。反応は無い。もはやどこから聞こえてくるのかも判らない。まるで声が煙に反響しているかのよう。前から、あるいは後ろから、右から、左から、あらゆる方向から聞こえてくる。

ただ、確かなのは。

「お前も、いらぬ殻を脱げ」

その声が、少しずつ近づいているということだ。黒煙にまぎれ、永井を狙っている。永井は弾倉の弾が切れるまで銃を乱射したが、それでも、手応えは無い。素早く弾倉を取り換え、さらに撃つべく銃を構えた。

不意に。

「……諦めが肝心だよ、何事もね」

耳元で囁かれた。

反射的に振り返る。

這いつくばるほど地面すれすれの場所に、巨大な顔があった。目線は永井と変わらない。それほど巨大な顔。その顔の上に、身体と腕、そして、顔の無い頭がある。何度も永井の前に立ち塞がり、彼を苦しめてきた巨体闇人。

だが、その姿が見えたのは一瞬だけで、すぐにまた黒煙の中に消えた。

「さあ、遊ぼうか」

また、声が聞こえる。どこにいいのかは判らない。黒煙にまぎれて、永井を狙っているのかもしれない。

しかし。

永井は、もう恐れはしなかった。恐怖よりも、別の感情が上回っていたのだ。その巨大な顔は、永井のよく知る顔だったのだ。隊員の誰もが怯える上官の顔。理解不能な言動で永井を苛立たせた顔。常軌を逸した行動で永井を怒らせた顔。そして、背後から撃たれたにもかかわらず、怒りや恨みや悲しみといった全ての感情を無くし、ただ永井を見つめていただけの顔。

「なあがいくうん！ いっしょにあそびましょお!!」

おどけて挑発する声が、周囲に響き渡った。

永井は、これまでの怯えと苛立ちと怒り、そして、わずかな罪悪感、それらすべての感情を込め。

「……みいいいいさあああわあああ!!」

忌々しい元上官が消えた黒煙の闇に向かって叫んだ。？

第八十話 『爆発』 阿部倉司 夜見島金鉞採掘所

22:58:59

「……ありえないだろ」

目の前の光景に、阿部倉司は思わずそう声を漏らした。人生最大の危機を乗り切り、ついさつきまでこの世の楽園を謳歌していた阿部だったが、それが一転、地獄に落ちたような気分になった。楽園は、一瞬にして灼熱地獄と化したのだ。まあ、この世の楽園と言えば聞こえはいいが、その実態は穴を掘って板を通しただけの汲み取り式便所だ。長年放置され熟成され切ったナニが鼻がひん曲がる悪臭を放っており、元々地獄のような場所だったと言っている。それでも、猛烈な便意と格闘し、敗北寸前まで追い詰められていた阿部にとっては、九死に一生を得た奇跡の場所だったのだ。それが、突然大爆発を起こした。原因に心当たりはない……こともない。爆発の直前、阿部は煙草を吸い、火が点いたままの吸殻を便所に投げ捨てたのだ。それが、ナニから発生したメタンガスが何かに引火したのだろう。数十年放置され、蓄積されたまくったガス爆発の破壊力は凄まじく、採掘所の巨大な建物の半分を吹き飛ばしてしまうほどだった。

もつとも、人生最大の危機を乗り越え、男としてひと回りもふた回りも成長した阿部にとって、その大爆発から逃れるのはそう難しいことではなかった。爆風に吹き飛ばされながらも、阿部は作家先生の愛犬ツカサと共に採掘所跡を脱出したのだ。傷ひとつ負わず、飛び散る灼熱のウ○コの一滴も浴びることはなかった。成長した阿部だからこそなせる技だろう。

それだけで終わっていれば、別段大したことではなかったのだ。残念ながら、ことはそれだけで終わらなかったのだ。

脱出後、まず阿部が見たのは、採掘所跡のすぐそばで起こった別の

爆発だった。便所の爆発と同程度のものだったが、それは阿部が脱出した方の反対側だったこともあり、さほど気には留めなかった。便所の爆発が、外に放置してあったドラム缶の油が何かに引火したのだろう、その程度に思っていた。

が、その次の瞬間、採掘所跡から少し離れた森の中でも爆発が起こった。直前の二度の爆発の規模でも、そこまで飛び火するとは思えないほど離れた場所だった。さらには、もっと離れた場所——四鳴山のもとと付近でも爆発が起き、続いて、山の中腹でも同じように爆発が起きた。爆発が連鎖している。白黒赤青など複数のロボットが爆弾を設置して殺し合うあのゲームのような光景だった。

なぜ、このようなことになったのか。想像するしかないが、もしかしたらこの島の地下には当主さえも知らない地下道が張り巡らされていて、そこにもメタンガスが溜まっていたのかもしれない。あるいは、旧日本軍が秘密の研究所を作り、大量の武器弾薬を隠していたのかもしれない。なんであれ、その爆発の連鎖はその後も続き、山頂へと向かって行ったのだ。

四鳴山の山頂。そこには、巨大な鉄塔がある。占い女の遺言(?)によると、あの鉄塔は現実世界の夜見島と繋がっており、登れば元の世界に帰れるとのことだった。昼間、一時的に雲が途切れた際、空には逆さまに浮かぶ夜見島が見えたとし、作家先生もあれこそが現実の夜見島だと言っていた。鉄塔が元の世界へ帰る最大の鍵なのは間違いないだろう。

阿部の煙草が引き起こした爆発は山を登り続け、山頂へ向かって行く。

——あの先に、便所爆破という炎がたどり着いたとき、鉄塔は完全に崩壊する。

阿部が語り始めた時、ついに、爆発は鉄塔の真下に到達した。

「……………」

しばらく呆然とその場に立っていた阿部だったが。

「……俺、しーらね」  
「……そと逃げるように、採掘所を後にした。」



第八十一話 『狂笑』 一樹守 四鳴山／離島線4号  
基鉄塔 22:27:08

木船郁子と再会し、それまでの誤解を解いた一樹守は、二人で鉄塔の上層に到達していた。無数のビルや集落と大樹が融合した鉄塔は、先細りしている上層となるとさらに混沌としている。民家や工場のようなビルの他に、プレハブ小屋や鉄塔建設時のクレーンなどもあり、それら全ての建造物に、獲物を捕らえた蛇のごとく大樹の枝や蔭が絡みついている。一見通り抜けられそうなビルの出入口が樹の幹で塞がれていたり、逆に、寸断された通路が枝を伝って通れたり、その複雑さはさらに増していた。

一方で、闇人の数は明らかに減っていた。ヤツらはまだここまで到達できていないのだろう。先端部まではあと少しだ。このまま順調に進めば、自分たちが最初に到達できるはずだ。そうすれば、可能性はひとつに収束する。すなわち、『一樹の死亡』や『郁子の死亡』、あるいは、『闇人共の地上侵攻』や『闇人と屍人の抗争』などの複数存在している世界が消え、『一樹と郁子が現世へ帰還』という世界が確立するのだ。

「……要するに、鉄塔を登れば元の世界に帰れるってことでしょ？  
なんでわざわざそんな難しい言い方をするかな」

郁子が呆れた目で一樹を見ていた。どうやら無意識のうちに言葉を発していたらしい。一樹は軽く咳払いをした後、「こういうのは、解を出すだけでなく、そこに行き着くまでの過程も大事なんだよ」と前置きして、さらに続けた。「いいかい？ 俺と君はこの鉄塔で再会できたが、その『箱』が開く前には、再会できない世界も存在していたんだ。この偽りの夜見島を観測する者は、箱を開ける前に中身が見えていて——」

一樹の説明を、郁子は「はいはい」と面倒くさそうに受け流した。「悪いけど、あたし、理系の人とは死ぬほど相性悪いんだよね。理屈っぽいこと言っていないで、さっさと行くよ」

熱弁する一樹を残し、郁子は先へ進む。一樹は不満げな表情で後を追った。

鉄塔内部の通路を進むと、金網製の柵に囲まれたプレハブ小屋へ行きついた。鉄塔建設時に従業員が使っていた休憩室のようだ。進むためには敷地内に入らなければならない。先を歩く郁子はフェンス製の扉から中へ入る。小屋のそばを歩き、角を曲がったところで、何かに気づき足を止めた。一樹も角を曲がり、それを見て息を飲んだ。

小屋の入口前に、人型の闇人が三体倒れていたのだ。この層にはまだ闇人が到達していないと考えたのは間違いだったようだ。しかし、その闇人がすでに倒されている。これが何を意味するのか、一樹はとっさに理解できないでいた。

倒れた闇人は、皆、迷彩柄の服を着ている。自衛隊員の闇人だ。そのうちの一体は、右肩から左わき腹にかけて大きく斬り裂かれていた。鋭利な刃物によるものと思われるが、その傷はかなり深く、ナイフ程度の大きさでは無理だろう。刀身が一メートル以上刃物だが、鉈や剣でもない。それらは刀身に重量があるため、斬ると同時に肉を潰してしまう。そのため、傷口は目を背けたくなるような悲惨なものになるのだ。対して、その闇人の傷は鮮やかだった。熟練の料理人が使い込まれた包丁で魚をさばいたかのような、きれいな斬り口なのだ。刀身の重量に頼らず、刃そのものの斬力で斬り裂く武器。思い浮かんだのは日本刀だった。それも、名のある刀匠が鍛え上げた刀か、剣豪と呼ばれるほどの使い手か、あるいはその両方かだ。

別の一体は、胸に無数の銃弾を受けた跡があった。機関銃によるものと思われるが、驚くべきは、銃弾の痕が闇人の身体以外どこにも見当たらないということだ。機関銃は連射力が高い反面、反動により弾道がぶれやすく、地面や壁など、目標以外の場所にも弾痕が残るのが普通だ。それが無いということは、機関銃の反動を抑えることができるときの筋力を持っていることになる。はたしてそれは、人間なのだろうか。

この二体の闇人は、怯え、あるいは驚愕・苦悶といった複数の感情が入り混じった恐ろしい表情をしていた。しかし、最後の一体は、そ

の表情を読み取ることができなかった。なぜなら、首が無かったからだ。そこに倒れているのは肩から下だけで、頭部は、周辺のどこにも見当たらない。その斬り傷は、最初の闇人同様に鮮やかだった。同じく日本刀によるものだろう。人の手による斬首は高い技量が必要だ。世界中で斬首刑が行われていた時代、多くの死刑執行人が斬首に失敗し、罪人に無用な苦痛を与えてしまったという話は数多い。なのに、この闇人の首を斬り落とした何者かは、恐らく片手で刀を持っていたはずだ。もう片方の手には、機関銃を持っていたはずだから。

この闇人たちは何者かと戦い、そして倒されたのだ。闇人以外にも、すでにこの鉄塔上層へたどり着いた者がいる。そして、その者は、戦闘訓練を受けた自衛隊員の闇人三体を、いとも簡単に倒してしまったのだ。もちろん、いとも簡単にとというのは想像でしかない。そもそもこの闇人共をたつた一人で倒したという根拠は何も無いのだが、それでも、倒された闇人の様子から、一人に対し複数で襲い掛かってきた闇人共を、鬼神のごとき強さで返り討ちにした——そんな姿を思い浮かべてしまう。

一樹たちが闇人の死体に釘付けになっていると、金属をこすり合わせたような耳障りな声が響いた。闇人の悲鳴だ。プレハブ小屋の角をさらに曲がった先からだった。一樹と郁子は顔を見合わせ、同時に頷き、そちらへ向かって走った。

ツインテールにセーラー服姿の少女が、巨体闇人と対峙していた。一樹たちの方に背を向けているため少女の顔は見えないが、小柄な体格から中学生と思われた。

「大変……助けないと」

駆け寄ろうとする郁子の肩を、一樹は強く掴んで止めた。

「いった……なにすんのよ」

不平を言う郁子には目を向けず、一樹は少女の背中を凝視したまま言う。「近づくな……あれは……危険だ……」

自分でも思っていた以上に鬼気迫る声だった。ただならぬ様子を察した郁子は、「え……？」と、困惑した声を上げた。

巨体闇人と対峙する幼い少女——誰がどう見ても救助しなければ

ならない状況だが、それを躊躇せずにはいられない。

少女の足下には、すでに人型の闇人が一体倒れていた。先ほどの悲鳴は、その闇人のものだろう。身体に銃弾を浴び、喉を斬り裂かれていた。誰がやったのかは明白だ。少女は左手に機関銃を、右手に日本刀を持っていたのだ。ならば、先ほどの三体の闇人を倒したのもこの少女であろう。少女と巨体闇人には三倍近い身長差がある。ネズミと虎が対峙したような光景だが、追い詰められているのはネズミではなく虎の方なのだ。少女は闇人の死体を踏みつけ、巨体闇人の方へ一歩近づいた。巨体闇人はぎりぎり歯を軋ませ、一歩退<sup>き</sup>がった。少女を恐れている。狩る者と狩られる者の構図が、完全に逆転している。

ふと、一樹は頭上に気配を感じ、上を見た。プレハブ小屋の屋根の上に四足闇人の姿があった。獲物を前にした狼のような低い姿勢で、少女の背中を睨んでいる。少女は気付いていないのか、正面の巨体闇人を見据えたままだ。四足闇人が跳んだ。前足の鋭い爪を振り上げ、少女の背後から襲いかかる。だが、その爪が少女の背中を引き裂くこととした瞬間、少女は身を低くして後ろへ跳んだ。屋根から跳んできた四足闇人の腹の下に入り込む形になった。機関銃を向け、引き金を引いた。銃弾は四足闇人の無防備な腹に全弾命中する。四足闇人は短い悲鳴をあげ、顔面から土の地面に激突して倒れた。少女はすぐに立ち上がり、倒れた四足闇人の身体を乗り越えて走る。巨体闇人が拳を振り上げた。鉄球のごときその拳を、向かってくる少女に向けて振り下ろす。少女が跳んだ。巨体闇人の拳は地面に叩きつけられる。少女は闇人の巨大な拳の上に着地すると、そこから腕、そして肩に駆け上がり、独<sup>こ</sup>楽<sup>ま</sup>のように回転して刀を振った。刃の一闪が、巨体闇人の頸椎を斬り裂いた。巨体闇人は白目をむき、地響きと共に倒れた。少女は、静かに着地する。

郁子は、ただ茫然とその光景を見つめていた。幼い少女がたった一人で闇人共を蹴散らしたのだから、無理もない。

少女は倒れた巨体闇人の姿をしばらく見つめていたが、やがて顔を上げ、一樹たちに目を向けた。

ツインテールの女子中学生——その顔に、一樹は見覚えがあった。

それは夜見島へ向かう前。島で起こった過去の事件について調べていた一樹は、ブライトウィン号消失事件の行方不明者リストに、その少女の写真を見たのだ。亀石野中学二年・矢倉市子。恐らく彼女は海に落ちて死んだ。本物は、今でも海の底で眠っているだろう。目の前にいる矢倉市子は、本物ではない。夜見島近辺の海には姿を盗む化物が潜んでいて、死んだ者の姿を模して現れるという。一樹の推理が正しければ、それは屍人を束ねる者が放った、いわば、屍人側の鳩――。

《……お前も、寂しかったのか?》  
市子の方から声がした。

初め、一樹はそれを市子の声とは思わなかった。その声はあまりにも低く、複数の声が重なり合ってひとつになったような不気味な声だったからだ。呆然としていた郁子も、その異様な声を聞いて我に返り、ゴルフクラブを構える。

《我也待っていた……暗い……海の底で》

ゆつくりと、こちらへ近づいて来る。笑っていた。狂人が浮かべるその笑みに、一樹の背筋を冷たいものが走った。市子が機関銃を向けても、その狂笑に射すくめられ、まるで全身が凍りついたかのように動かない。

《もうすぐ、我らはひとつになれる……》

矢倉市子は――いや、矢倉市子の姿を模した者は、引き金に指を掛けた。

《――っ!!》

不意にその動きが止まった。全身が硬直したかのように、小刻みに震える。狂笑が消え、驚愕と困惑が入り混じった顔になる。

「撃って!」

郁子が叫んだ。右の拳を握り、その手首を左手で握り、暴れ出そうとする力を押さえつけている。感応を使ったのだ。我に返った一樹は拳銃を向けて発砲する。弾倉の半分ほどを撃ちこみ、そのいくつかは胸や腹に命中した。だが、その傷が瞬時にふさがりはじめる。わずかに数秒で、身体の傷だけでなく服に空いた穴まで消えていた。一樹は残りの弾も全て撃ちこんだ。いくつかが命中し、そのうち一発は市子

の額を撃ち抜いたが、その傷さえもすぐに消えた。

「……………もう……………ダメ……………」

郁子の身体が見えない力に弾き飛ばされた。同時に、感応から解放された市子が動いた。

《分裂体風情が小賢しい術を!!》

市子は銃口を郁子に向ける。感応で力を使い果たした郁子は、その場に倒れ込んだまま動けない。

「危ない！」

一樹は郁子の方へ跳び、郁子をかばって通路に伏せた。機関銃から銃弾が放たれると同時に、一樹の背中と右腕に鋭い痛みが走った。バーナーであぶった鉄の塊を身体の中にねじ込まれたかのような痛みだ。幸い意識は飛ばなかったので、致命傷にはなっていないだろう。

「逃げ……………るぞ……………」

一樹は立ち上がろうとしたが、背中に受けた銃弾のせいで思うように動けなかった。郁子も同様に動けない。

《失せろ!》

市子が、さらに引き金を引こうとした時。

「——だめえ!!」

突然、少女の声があった。それはまだ幼さの残る声で、市子から発せられたように思えた。それまでの複数の声が入り混じった不気味な声とは明らかに違う、その見た目通りの女子中学生の声。

同時に、市子は再び全身が硬直して動かなくなっていた。見えない力で押さえつけられているような姿。感応で動きを止めている時と同じだが、郁子はまだ能力を使えるような状態ではない。ならば、市子の動きを止めている力はなんだ？

《……………邪魔を……………するな!》

また、市子の声が不気味なものに戻った。全身を縛る鎖を引きちぎろうとするかのようにもがく。機関銃が乱射され、弾があらゆる方向へ飛んでいった。やがて銃弾は尽き、空回りの音を奏でる。

「今のうちに逃げよう」

一樹は痛みをこらえつつ立ち上がり、郁子と共にその場を離れた。正体不明の力に縛られた市子は、その場にとどまり、追いかけて来ない。二人はプレハブ小屋の敷地から出ると、通路をくだり、古い家屋を見つけて玄関から中に入った。すぐさま幻視で様子を探る。市子は、まだ一人でもがき続けていた。

「お母さん……会いたいよ……」

《還る……母の元へ……》

「ノリコ……ノリコのお腹に……」

《下種ごときが私の道を阻むでない!!》

市子は少女の声と化物の声を交互に発していた。あの少女の声は、矢倉市子本人のものだろうか？ 市子本人と市子の姿を模した者が彼女の中で戦っている——そんな姿に見えた。

一樹は、以前岸田百合から聞いた話を思い出した。屍霊や闇霊が憑りつく死体——ヤツらが『殻』と呼ぶものには生前の記憶が残っており、時おりそれに惑わされる者がいるという。市子も同じなのかもしれない。なんにしても助かった。しばらく市子はまともに動けそうにない。傷が癒えるまでここに隠れておこう。一樹は時折幻視で市子の様子を見ながら、傷の回復を待った。

と、家の奥から。

「……無い……お父様の……無い……無い！」

何かを探すような女の声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。この声はまさか？ 一樹は、まだ回復しきっていない身体を引きずるようにして玄関からあがり、廊下の先のふすまをそつと開けた。そこは、二十畳はあろうかという大きな和室で、まるで空巢でも入ったかのように、着物や帯、壺、日本人形、刀の鞘、『太田家家訓』と書かれた大きな額縁など、様々なものが乱雑に散らばっていた。その部屋の奥で、箆筒たんすの抽斗ひきだしや書棚などをひっくり返ししながら、何かを探す着物姿の四足闇人がいた。

「……またあいつか」

ため息と共につぶやく一樹。もはや恐怖や怒りといった感情は沸かず、ただ呆れるばかりだ。見覚えがあるどころか二度と見たくない

その着物姿。一樹をしつこく付け狙うあの闇人の女だ。

「……知ってる人なの？」一樹と一緒に部屋を覗いていた郁子が小声で訊く。

「元は知らないヤツだ。でも、どういうわけか俺のことをしつこく追って来るんだよ」

郁子は、「ふうん」と、どこか軽蔑するような目を一樹に向けた。「良かったね、女の娘にモテモテで」

「冗談言ってる場合じゃない。倒してもすぐに復活するし、ホントに厄介なヤツなんだ」

どうするべきか……一樹は考える。着物姿の四足闇人は、今のところ一樹たちには気がついていない。鉄塔の先端部はもうすぐそこだ。無駄な時間を費やしている暇はない。関わらないのが良いのは言うまでもないが、こんな鉄塔の上層まで追って来るほどの執念深さだ。このまま放置していると、またいつ邪魔をされるか判らない。

一樹は――。

◇

「――これ以上あいつに付きまといられると面倒だ。ここで始末する」

一樹は、中層で警官闇人から奪った滅爻樹を取り出した。闇人共を滅することができる神器である。これが最後の一本だが、この先あいつ以上に厄介な闇人がいるとは思えない。今が使い時だろう。

問題は、どうやってこれを刺すかだ。背後から忍び寄って刺すのが一番だが、部屋は広く、四足闇人は室内のいたるところを探っており、近づく前に気付かれる可能性が高い。一樹がおとりになり郁子が刺すという手もあるが、二人とも回復しきっておらず十分に動けない。無論、そんな状態では郁子の感応にも頼れない。なにか良い策は無いだろうか？

「あの闇人、なんでそんなにあなたをつけ回すの？」郁子が訊いた。

「判らない。髪飾りがどうか言っていたが……」

「髪飾り？ 心当たりはないの？」



そう言われ、一樹は記憶を探る。あの着物姿の女に初めて会ったのは、今日の深夜——島が赤い津波に襲われ、偽りの夜見島へ取り込まれた直後だ。あのとき、女は確かに花をかたどった髪飾りをしていった。その後、一樹は岸田百合と共に瓜生ヶ森にある夜見島金鉱採掘所跡へ逃げ込み、地下の坑道へおりた。そこで、坑道の天井を伝うダクトの中に、ヤミピカリヤーと思われる獣の視点を発見した。一樹はダクト内に真球の石を転がし入れ、ヤミピカリヤーを撃退したのだが……。

「——！」

思わず声を上げそうになり、慌てて両手で口をふさぐ。幸い中の闇人には気付かれなかった。

一樹はポケットを探る。思い出したのだ。あのとき、ヤミピカリヤーはダクト内にある花細工の工芸品見つめていた。あれは、着物女が身に着けていた髪飾りだった。一樹はヤミピカリヤーを撃退した後、地面に落ちていた髪飾りを拾ったが、その直後百合に急かされてしまったため、無意識のうちにポケットに入れてしまったのかもしれない。思った通り、ポケットの中には花の髪飾りが入っていた。

郁子が、また軽蔑するような視線を向けていた。「……あんたって、ホント、マヌケだよね」

「自分でもそう思うよ。だが、これで問題は解決だ」

一樹はふすまを開けた。気配に気づいた四足闇人が振り返った。姿勢を低くし、忌々しげな顔で身構える。

「ほら、探し物はこれだろう？」

一樹は、四足闇人のそばに髪飾りを放り投げた。

四足闇人ははっとした表情になり、「髪飾り……お父様の！」と、餌を投げ与えられた犬のように、髪飾りに飛びついた。

その隙に一樹は走り、四足闇人の背中に滅爻樹を刺した。甲高い悲鳴を上げ、四足闇人の身体は青い炎に包まれる。枝から生え出した根が全身に絡みつき、炎はより一層燃え上がった。

「都会って……どんなところなのかな……」

やがて着物姿の四足闇人の身体は消滅し、枝は一本の樹と化した。

ふう、と、一樹は大きく息を吐いた。なんとか倒すことができたが、郁子の言う通り、我ながら間抜けな行為だった。あのとき髪飾りを拾わなければ、こいつに苦しめられることはなかっただろう。そう考えると、髪飾りを拾うという行動も、観測者の意思だったのかもしれない。髪飾りを『拾わない』世界と『拾う』世界のふたつが存在し、観測者は『拾う』世界を選んだ。だから、より事態は悪化したのだ。

——待てよ？

不意に、一樹の脳裏を恐ろしい考えがよぎる。あのとき『髪飾りを拾う』のが観測者の選んだ世界なら、今の『着物姿の闇人を倒す』のも、やはり、観測者が選んだ世界なのではないか、と。

《……母よ……もうすぐ……もうすぐだ!!》

外で、複数の声が重なり合ったあの声が聞こえた。

一樹は、「しまった！」と声を上げた。着物姿の四足闇人に気を取られ、市子のことをすっかり忘れていた。幻視で気配を探ると、市子は先端部へと続く長い階段を駆け上がった。先を越された！ 傷はまだ癒えていないが、こうしてはいられない。すぐに家を飛び出し、後を追う。

だが、不意に郁子が立ち止まった。

「なにをしている？ 急げ！」

一樹が急かしても、郁子は立ち止まったままだ。寒さに凍えるように自らの両腕を抱き、小さく震えている。

「……あいつが……来る！」

怯えた声を上げた。特殊な能力を持たない一樹も、その禍々しい気配を感じた。足元から、凄まじい早さで上昇してくる。地の底の冥府で遭遇したあの恐ろしい化物——闇人共を束ねる異形の生物だ！

上昇してきた異形の生物は、一樹たちの前で速度を落とす。物理的に宙を舞うことなどあり得ないその巨躯をくねらせ、美しい岸田百合の顔を醜く歪ませて、一樹たちを射すくめた。

だが、すぐにその視線を上へ向けた。貴様らなどに用は無い——そう言わんばかりに、一樹たちには手を出さず、また上昇して行った。

さらには、下層から、銃や刃物を持った人型の闇人が、四足闇人が、

巨体闇人が、あるいは闇霊が——おびただ夥しい数の化物が、群れをなして登って来た。到底太刀打ちできる数ではないが、闇人共は一樹たちには見向きもせず、まっすぐに先端部へ向かっていく。

その、先端部では。

《……待ちかねた……待ちかねたぞ！ 母よ!!》

狂笑を浮かべた矢倉市子が、一樹と郁子、闇人共、そして、異形の生物さえも、眼下に見下ろしていた。ついに、鉄塔の先端部に到達したのだ。

「——あの劣化種を引きずり下ろせ！」

異形の生物に続き、無数の闇人達も先端部の市子へ向かっていく。

「俺たちも行こう！ もしかしたら、まだチャンスはあるかもしれない」

一樹と郁子も、闇人共にまぎれ、先端部を目指して走った。

そのとき。

遠くで、大きな爆発音がした。

それは、一樹よりもはるか下、地上の方だった。何か爆発があったのかもしれない。

音と同時に、足元がぐらりと揺れた。

揺れは徐々に大きくなる。足場だけでなく、鉄塔全体が揺れている。立っていられなくなり、手すりにしがみつく。闇人の悲鳴が聞こえた。揺れに耐えられなかったのだろう、数体が塊となり、宙に放り出されていた。がこん、と、何か外れる音がした。通路が崩れ、その上にいた闇人共も落下していった。金属と金属とが擦れる耳障りな音が鳴り響いた。上層にあったクレーンがゆっくりと傾き、周囲の闇人を巻き込んで落ちていった。べきべきと木や土壁が割れる音がする。一樹が身を隠していた大きな家屋が端から崩れ落ち、最後に残った玄関が宙を転がって落ちていった。

鉄塔が、崩壊している——。

手すりにしがみつき、揺れに耐えながら下を見る。先ほどの爆発によるものだろう。炎が巨大な柱となり、鉄塔の中層まで達していた。崩れ落ちた足場を、クレーンを、家屋を、闇人を、次々と飲み込んで

いく。

揺れはさらに大きくなる。郁子の悲鳴が聞こえた。足場が崩れ落ち、手すりに両手でしがみついていた。手を伸ばそうとしたが、一樹の足下も崩れ落ちた。片手だけで手すりにしがみつく。その手すりがぐんとうなだれ、そして、折れた。奇妙な浮遊感と共に、空が遠ざかる。

鉄塔が崩壊する。全てが落下する。免れる<sup>まぬが</sup>ことができるとしたら、宙を舞う異形の生物だけだろう。

——いや。

落下のさなか、一樹は、矢倉市子が天へと上昇するのを見た。それは、空を飛んだというよりは、空へ落下したかのようだった。あれこそが、鉄塔の先端部に到達して得た力なのだろうか。

一樹たちは地上へと落下する。いや、そこは、正確に言えば地上ではない。冥府に潜む異形の生物が創り出した偽りの世界。地上へ落下したのは恐らく市子の方で、自分たちは、地上とは反対側——地下世界へと堕ちているのだ。地上への帰還は叶わなかった。自分たちも。そして、闇人達も。

一樹は堕ちてゆく。郁子と、有象無象の闇人と共に。

多くの者が鉄塔に群がり、崩壊して地下世界へ引き戻されるさまは、芥川龍之介の小説『蜘蛛の糸』のようだ——一樹は、そんなことを考えていた。

☆

数刻の後——。

☆

鉄塔の先端部に到達し、崩壊を免れた矢倉市子は、現世と虚無の世界の狭間という本来は存在しえない世界に飲み込まれていた。そこで、追って来た母と激しい戦闘を繰り広げている。鉄塔が崩壊し、地

上世界奪還の野望は打ち砕かれた。母は怒りに満ちた顔で次々と子を産み落とす。子は闇霊となり、群れを成して市子に襲い来る。いかに雑兵とはいえ、あまりにも数が多い。機関銃の弾は尽き、刀の斬れ味も鈍い。市子自身も疲弊している。闇霊に喰いちぎられた傷が治らない。この現世と虚無の世界の狭間には、市子を作り上げた主の力が及ばないのだ。

空中からその姿を見ていた母は、勝利を確信したかのような笑みを浮かべた。空に向かって甲高い声で鳴く。それに呼応するかのようには、市子の正面から、あるいは背後から、左右から、巨大な赤い津波が押し寄せる。市子の背丈の十倍はあろうかという高さの津波だ。疲弊した市子に、かわす術など無い。

赤い津波は、母が産み落とした闇霊ごと市子を飲み込み、その身体を引き裂いた。

☆

自衛隊員の永井頼人は、潮降浜の廃校で、かつての上官・三沢岳明と戦っていた。絶望的な戦いだった。巨体闇人というだけで手ごわい相手なのに、戦闘技術という点において、三沢は永井を大きく上回っているのだ。それでも、隙を突いて背後から狙撃し、どうにか倒すことはできた。だが、直後に新たな闇霊が憑りつき、よみがえってしまったのだ。校舎内にはまだ無数の闇霊が潜んでいる。運よくもう一度倒せたとしても、またすぐによみがえるだろう。こんな状況で倒せるはずがない。

☆

鉄塔破壊の犯人・阿部倉司は、三上脩の愛犬ツカサとともに、森の中を逃げ回っていた。怒り狂った闇人共が大勢追いかけてくるのだ。阿部としては、わざとやったんじゃないからそんなに怒らなくてもいいじゃないかと思うのだが、とてもじゃないが許してもらえそうもな

い。ニヤケ顔で激怒する闇人の姿は違う意味で怖い。とにかく逃げるしかない。ごめんなさい、もう二度と煙草のポイ捨てはしません——阿部は、そう心に誓っていた。

☆

鉄塔崩壊に巻き込まれた木船郁子は、無数の瓦礫の中、一樹守の身体を抱きしめて泣いていた。二百メートル近い高さから瓦礫と共に落下したにもかかわらず、郁子は一時的に意識を失っただけで、気付いたときには傷ひとつ負っていなかった。その理由は考えたくもないし、もはやどうでもよいことだ。元の世界への帰還は叶わず、大切な人を失ってしまった。一樹を抱きしめる。直接肌が触れても、彼の心の声は聞こえない。そこに魂は存在せず、一樹はひとつの『殻』と化してしまったのだ。もう二度と、間の抜けた行動で郁子を呆れさせることも、理屈っぽいこと言って困惑させることもない。ようやく心を許せる人と出会えたのに——郁子は一樹を抱きしめ、ただ泣き続けた。

☆

そして——。

☆

劣化種が生み出した分裂体の娘を始末した異形の生物は、虚しい気持ちを抱え、現実と虚無の世界の狭間を離れた。鉄塔が崩壊し、地上への侵攻は不可能になった。これ以上力を維持することは難しい。間もなく、写し世の世界も崩壊するだろう。地上世界の奪還は断念するしかない、今回は。

そう。あくまでも、此度の侵攻が失敗しただけだ。けっして野望が潰えたわけではない。今回の侵攻の何がいけなかったのかを考え、策

を練り直し、再び力を溜め、また機会を待てばよい。そして、次こそは野望を果たすのだ。

異形の生物は、再び冥府へと戻った。

☆

昭和八十年八月四日、深夜〇時。

闇の住人は再び眠りについた。次に目覚めるのは、二十九年後か、三三三年後か、一三〇〇年後か、あるいは、地上世界に人類に代わる新たな支配者が現れた時か。

それは、誰にも判らない。

☆

いや――。

母の目覚めは、そう遠い日ではないのかもしれない。

☆

三上脩の救出に失敗した加奈江は、崩壊する写し世の世界から脱出し、現実世界の夜見島に降り立っていた。母の気配は遠い地の底へと消えた。鉄塔が崩壊したことで、母は地上世界への侵攻を断念したのだ。脩の気配も地下深くに消えた。加奈江一人では手の届かない世界だ。それ以上、写し世の夜見島で加奈江でできることはなにも無い。そのまま留まっただけでは崩壊に巻き込まれるだけだ。脩を残し、一人で脱出するしかなかった。

もちろん。

加奈江は、脩の救出を諦めたわけではない。

母が眠りについたのならば、起こせばいい。

そのためには。

——七つの門と、七つの鍵を解放せよ。

加奈江の胸に、長く封印していた使命がよみがえる。

オリーブの葉となる人間を連れ、冥府への門を開く。その結果、再び母は地上へと侵攻するかもしれない。それでもかまわない。脩を救うことができるなら。

——待っててね、脩。お姉ちゃんが、必ず助けてあげるから。

加奈江は、強い決意と共に、島を後にする。

こうして。

また、一羽の鳩が、島から飛び立った。



第八十二話 『逃亡』 加奈江 夜見島港／旧道 |

1:50:46 終了条件2

鳩の使命に目覚め、脩の父親を刺殺してしまった加奈江は、穢れを排除しようとする漁師たちから逃れ、島からの脱出を目指す。夜見島港の丘の上にあるロープウェイ発着場で脩と合流し、船を求めて波止場へと下りていく加奈江は、夜見島金鉱株式会社のビルの近くを通りかかった。道の先には古い街灯が立つ三叉路があり、そこを左へ曲がって坂を下れば波止場があるのだが――。

◇

「――待って、脩」

街灯が立つ三叉路まで戻ったところで、加奈江は足を止めた。いま、わずかに人の声が聞こえた。近くに誰かいる。加奈江は街灯から離れて暗闇に身をひそめると、幻視で周囲の様子を探った。坂を下った先、金鉱会社のビルの出入口の前に、草刈り用の鎌を持った男の視点を発見した。興奮気味に息をし、「わしの目の黒いうちは騙されんぞ」と、己を鼓舞するように独り言を言っている。その声には覚えがあった。毎晩三上家に怒鳴り込んできて、加奈江を引き渡すよう迫った男。島の漁業を取り仕切る網元・太田常雄だ。今回の漁師たちの襲撃は、間違いなくこの男の指示によるものだ。見つかるわけにはいかない。

太田はその場で周囲を警戒しており、しばらく動きそうにない。迂回したいところだが、ここから波止場へ向かう道は、ビルの出入口前を通るその一本だけだ。何か策を用いるしかない。

加奈江は幻視をやめ、周囲を見回した。ロープウェイの発着場へ続く上り坂は、金鉱会社の二階のそばを通るかたちになっている。かつては道とビルが連絡橋で繋がっており、自由に行き来することができたようだ。その連絡橋を通ってビル内に入れば、さらに隣のビルへ別

の連絡橋が通じており、その先には地獄段と呼ばれる急勾配の階段がある。それを下れば目的地の波止場があるので、このルートなら太田に見つからずに移動できる。

しかし、ビルへ入るための連絡橋は、途中から幅一メートルほどが崩れ落ちていた。加奈江なら跳び越えられる幅だが、幼い脩には無理だろう。何か、渡り板になる物でもないだろうか。

「脩、ちよつとここで待ってて。お姉ちゃん、中を探してくるから」

加奈江がそう言うと、脩は途端に表情が強張った。さつきまで一人で発着場に隠れて怖い思いをしていたのだ。無理もないだろう。

「ごめんね、脩」と謝って、加奈江は脩の両肩に手を置いた。「すぐに戻って来るから。それまで、勇気を出して、待ってて」

勇気を出して——加奈江が力強くそう言うと、脩は強張った顔を緩め、「うん。ボク、勇気を出して待ってるよ!」と言って、家から持ってきたお気に入りのおもちゃを抱きしめた。加奈江は脩の頭を撫でた後、道端の岩陰に隠れさせる。そして、崩れた連絡橋を跳び越え、ビル二階のベランダへ渡った。

ベランダには、発泡スチロールのケースや穴が空いた網などの漁の道具が乱雑に置かれてあった。夜見島港に建ち並ぶビルは、昭和四十年代に金鉱が閉鎖されて以降、ずっと放置されている。所有はいまでも金鉱発掘業を行った夜見島金鉱株式会社のはずだが、本土から遠く離れたこの島までわざわざ様子を見に来るようなことはない。今では、太田家や漁師たちが無断で倉庫やゴミ捨て場代わりに使用していた。

加奈江は、放置された漁具の中に高さ一メートル半ほどの立て看板を見つけた。赤字で大きく『港建設絶対反対!!』と書かれたその看板は、昭和三十年代の金鉱発掘時代のものだ。当時島のいたるところに港や団地などの施設を建設しようとした金鉱会社に対し、島民は太田常雄を中心に大規模な反対運動を行ったのだ。看板はかなり古いもののはずだが、スチール製で十分な強度がある。これを渡り板代わりに使えば、脩もビルへ渡ることができるだろう。加奈江は看板を持って連絡橋へ戻ると、崩れた場所に置き、脩を呼んだ。板はみしみしと

音を立ててきしんだものの、思った通り壊れることなく渡ることができた。

無事にビルのベランダへ渡った二人は、二階の事務室へと入る。部屋の反対側にも同じような出入口があり、そこから外に出るとまた連絡橋があつて隣のビルへ渡ることができのだが、その連絡橋には漁師がひとり立っていた。長い棒の先にフック状の刃物が付いた魚鉤うおかぎを持つて警戒している。これでは向こうのビルへ行くことができない。外階段を使つて一階に下りることもできるが、ビルの出入口はまだ太田が見張っている。また何か策を用いなければならぬようだ。加奈江は事務室内を探った。

実内には事務用の机と棚があるだけで、乱雑に物が置かれたベランダと違いがらんとしていた。棚には何も残っていなかった。加奈江は机の引き出しを開けてみた。いくつもある引き出しを次々と開けると、中のひとつに小型のラジオが入っていた。音を鳴らせば漁師の気を引けるかもしれない。ただ、引き出しに入っていたのは本体のみで、電源コードは無かった。そもそも何年も放置されたこのビルに電気が来ているかも疑問だ。ラジオは乾電池でも動くものだが、電池も無い。これでは使えない。加奈江が困っていると。

「お姉ちゃん、これ、使える?」

加奈江の意図を察したのか、脩がロボットのおもちゃを差し出した。そのロボットは、胸にあるボタンを押すと頭が左右に割れ、中からクマが出てきて吠えるというものだ。動力はゼンマイではなく電池だったはずだ。サイズが合えば、ラジオを鳴らすことができる。「でも、いいの? ロボット、動かなくなっちゃうよ?」

加奈江が訊くと、脩は。

「うん、いいよ! ボク、困ってるお姉ちゃんをお助けしたいもん!」と、胸を張った。

「ありがとう」

加奈江は脩からロボットを受け取り、背中のフタを外して電池を抜き取った。ロボットは脩に返し、ラジオの裏のフタを開ける。運よくロボットの電池を使用できるものだった。ラジオに電池をセットし、

スイッチを入れる。かなりノイズ音が混じっているものの、かろうじてニュースが聞こえてきた。加奈江はラジオを棚に置き、ポリウムを最大まで上げると、脩と共にベランダに出て身を隠した。

「……なんだ？」

連絡橋の漁師がラジオの音に気付いた。警戒しながらドアを開け、事務室に入ってくる。

「誰かいるのか？ 隠れてないで出てこいよー！」

漁師はどこか怯えた声で威嚇しながら、室内をライト照らした。部屋には誰もおらず、奥の棚でラジオが鳴っているだけだ。

「……ラジオか。驚かせやがって」

漁師は棚の前まで移動し、ラジオに手を伸ばした。だが、途中でその手を止める。ラジオは、三隅郡という地域が局地的な豪雨に襲われているというニュースを報じていた。三隅郡という地域がどこなのかは加奈江には判らないが、もしここからそう遠くない地域だったら、いずれ島にも影響が出るかもしれない。海で仕事をする者は天気の情報に敏感だ。漁師はニュースが気になるのだろう。スイッチを切らず、そのまま聞き続けている。しかし、電波の状況が悪いのか、あるいはそもそも壊れているのか、ニュースは頻繁にノイズで途切れ、ほとんど聞き取れない。時折、サイレンが鳴るようなおかしな音まで聞こえる。

「くそ……おい、しつかりしろよ」

漁師は棚の前でラジオを叩いたり振ったりし始めた。加奈江は脩と共にしゃがみ歩きで事務室内に入ると、音をたてないよう静かに漁師の背後を通り抜け、連絡橋を渡って隣のビルの二階へと入った。

無事漁師をやり過ごした加奈江と脩は、地獄段へ向かうためビルから出ようとした。しかし。

「……ダメだわ。ここも見張られてる」

そのビルの二階から地獄段へ渡るための連絡橋も、別の漁師が見張っていた。加奈江を見つげるためかなりの数の漁師がこの地域に集まっているのだろう。

さらには。

「……おい、どうかしたか？」

背後のビルで太田の声がした。幻視で確認すると、太田が事務室内にやってきて、ラジオを聞いている漁師に声をかけていた。

「あ、おやっさん」太田に気づいた漁師はラジオのスイッチを切った。「今のところ、あの女の姿は見えませんが」

「油断するな。いま、ともえが来た。少し前、女がこの地域に逃げるのを見たらしい。どこかに隠れているはずだ。草の根分けてでも見つけ出すぞ」

「判りました」

太田は漁師に命令すると、ビル内を探し始めた。そう広いビルではない。すぐに探索を終え、こちらへやって来るだろう。このままでは見つかる。加奈江は脩を連れ階段を上がり、一度三階へ身を隠した。

三階の部屋には、太いロープやオレンジ色のブイ、水銀灯や蝋燭など、様々な漁具が積み上げられていた。他のビルや外への出入口は無い。ここに隠れていてもすぐに見つかってしまう。すでにこの地域には多くの漁師たちの手が回っているようだし、隠れてやり過ぎすにも限界があるだろう。いざとなったら戦うしかない。そのためには武器になる物が必要だ。ここなら何かあるかもしれない。加奈江は室内の漁具を探り始めた。

「——あ、脩、どこ行くの？」

漁具を探っていると、脩が部屋の隅の方へ歩いて行ったので、加奈江は呼び止めた。

「ハンドルがあるの」

脩は部屋の隅の壁を指さした。壁には鉄パイプが何本も通っており、片手で捻る大きさのバルブが付いていた。車のハンドルに似ているから興味が湧いたのかもしれない。

「そうね。でも、そっちは危ないから、行っちゃダメよ」

パイプがあるその一角は床が鉄格子状になっていて、下の階が見えている状態だ。あまり錆びてはいないので踏み抜くことはないかもしれないが、脩の小さな足では格子の間に挟まってしまうかもしれない。脩は「はあい」と残念そうに言って、加奈江のそばに戻った。

「……………」

加奈江は漁具を探るのをやめ、鉄パイプのバルブを見つめる。しばらくそのまま無言で見つめていたが、やがて鉄パイプの前まで移動し、バルブに手を伸ばした。閉じられていたのを全開まで捻ると、パイプがわずかに振動し始める。中の液体が流れ始めようだ。接合部分に腐食しているのか、隙間から液体が漏れ出し、鉄格子状の床にぽたぽたとこぼれ始めた。

「…………お姉ちゃん、なにをしたの？」後ろから見ていた脩が、不思議そうな顔で訊いた。

「うん？　これはね、おまじないみたいなものかな？」

「おまじない？」

「そう。脩が無事でいられますように、っていうおまじない。こうしておくと、いつか脩が危なくなるとき、助かるの」

「…………？」

首を捻る脩に、「ゴメン。脩にはちよつと難しい話だったね」と言っ  
てごまかし、再び室内を調べ始めた。

なぜ、今あのバルブを捻ったのか——実を言うと、加奈江自身にもよく判らない。ただ、ああしておけばいずれ脩が助かるという点に関しては、胸の内に確信めいたものがあつた。予知能力と言つてよいかもしれない。加奈江にそのような能力があつたとしても、別段不思議なことではないのだ。加奈江は、母がその身を削つて生み出した分裂体だ。母は、他人の視界を覗き見たり、無から物質を創り上げたりといった、様々な特殊能力を持っている。母の肉体から生まれた加奈江が、その力の一部を受け継いでいることは、充分に考えられる。

「…………化物め…………逃げられると思うなよ…………」

隣のビルから声が聞こえた。幻視で確認すると、太田がドアを開け、連絡橋を渡つてこちらのビルへ来ようとしていた。武器を選んでいる暇はない。加奈江は漁具の中から蛸漁に使う陶器製の壺を取り、窓から顔を出した。そこは連絡橋の真上で、ちょうど、太田が通りかかったところだった。加奈江は蛸壺を振り上げると、太田めがけて勢いよく投げ落とした。壺が割れる音と低いうめき声、やや遅れ、太田

が倒れる音がした。

「おやつさん!？」

地獄段を警戒していた漁師がその音に気付き、駆け寄って太田の具合を確認する。

「脩、今よー」

加奈江は脩を連れて急いで階段を下りると、地獄段側の出入口から外へ出た。その階段を下れば波止場は目の前だ。船着き場の様子は、この場所から見下ろすことができる。

「……あそこにも、誰かいる」

暗い海に突き出た波止場の棧橋近くには、いくつかの人影が見えた。すでに漁師たちの手が回っているようだ。ここから見る限り船も停泊していない。あそこへ行っても無駄だろう。

「……ヤツはこの上だ！ 行け！ 捕まえろ！」

ビルの方から太田の声があった。意識を取り戻したようだ。命じられた漁師たちが三階へと上がっていく。今はとにかく逃げなくては。加奈江は波止場へ向かうのを諦め、地獄段を上った。

階段を上った先には細い通路が続いており、さらに進むと、資材倉庫の側に海へ下りるトンネルがある。このトンネルを通った先に、夜見島にある二基の灯台のひとつ、夜見島灯台が建っている。そこなら救命用のボートがあるかもしれない。波止場に船が無い以上、そこへ行くしかない。加奈江たちはトンネル内へ入った。

トンネルは、途中で上り階段と下り階段のふた手に分かれている。灯台へ向かう道は左の上り階段だ。加奈江は階段を上がろうとしたが、脩が立ち止まったまま動かなかった。右の下り階段の方を見つめている。

下り階段の先は、亀穴と呼ばれる天然の洞窟になっている。そこには干潮時のみ波止場方面と行き来できる道があるが、今は満潮の時間だから、道は海に沈んで通ることはできない。波止場にいる漁師がその道を通ってここへ来ることはないだろう。

「どうしたの、脩？ そっちから怖いおじさんは来ないから、安心して」

そう言っても、脩は立ち尽くしたままだ。何かあるのだろうか？

「……ボク、行ってくる」

そう言うと、脩は階段を駆け下りた。

「あ、待って、脩。そっちじゃないわ」

加奈江が止めても、脩は走って行った。仕方なく、加奈江も後を追う。聞き分けの良い脩が加奈江の言うことを聞かないのは珍しい。一体どうしたのだろうか？

……そう言えば。

亀穴は、三ヶ月前に脩と加奈江が出会った場所だ。あの日、脩は亀穴付近で落とした母親の形見のメダルを探していて、流れ着いた加奈江を見つけたのだ。もしかしたら、今でもあのメダルに未練があるのかもしれない。

階段を下りてしばらく進むと、人口のトンネルからごつごつとした岩肌の天然洞窟となった。洞窟の先は海に沈んでいる。当然、三ヶ月も前に落としたメダルが見つかるはずもない。

「脩、メダルなら、お姉ちゃんが新しいのを買ってあげるから、今は、灯台に行こう？」

脩は波打ち際の少し前に立ち、足元をじっと見つめている。そこには、脩の手のひらほどの小さな海亀が、ひっくり返ってひれをパタパタと振っていた。これを気にしていたのだろうか？ 加奈江はフツツと笑うと、「脩、助けてあげなさい」と、背中をさすった。脩は両手で包み込んで海亀の子をすくうと、海へ放した。亀は何度か打ち寄せる波の上でうねっていたが、やがて引き波に乗り、遠ざかって行った。

「……カメさん、おうちに帰れるかな？」

海の闇に消えた亀に向かって、脩は心配そうな声でつぶやく。

「大丈夫よ。脩と同じで、きつと強い子だから」

「……うん」

「さあ、行きましよう」

加奈江は脩の手を引いて来た道を戻り、階段を上がって灯台を目指した。



この直後。

夜見島を赤い津波が襲い、島民は、写し世の世界へ連れ去られた。  
加奈江は全ての力を使って脩と共に津波から逃れたが、朝日を浴び、小舟に脩を残して海へ沈んだ。

鳩の因子となって海を漂う加奈江は、偶然事故で海に転落した妊婦の腹に宿り、喜代田章子として生を受ける。

その、二十九年後。

再び夜見島を訪れ、章子の体内から覚醒した加奈江は、母に囚われた脩を救うために奔走する――。

第八十三話 『遭遇』 一樹守 夜見島港／ドルフィン  
ン棧橋 — 3 : 50 : 52 終了条件2

夜見島へ向かう船が赤い高波で転覆し、海へ投げ出された一樹守は、運よく夜見島港へ流れ着き、救助を求めて灯台へ向かう。途中、倉庫内に倒れていた少女・岸田百合を保護したが、動く死体の化物に襲われ、夜見島金鉱会社のビルへ逃げ込んだ。外階段を使って三階へ上がったものの、そこは逃げ場も隠れ場所も無く、完全に追い詰められてしまった。ただ、部屋には床が鉄格子状になっている場所があり、そこからは下の階が見えていた。鉄格子を蹴り落とすことができれば二階へ移動できる。一樹は、鉄格子を強く蹴った。

◇

一樹が床の鉄格子を強く蹴ると、留金の一部がバチンと弾けた。鉄格子はいたるところが腐食しているためかなり脆い。これなら壊せる。一樹がさらに蹴ると、鉄格子は派手な音を立てて下の階へ落ちた。

「よし、ここから逃げよう」

まず一樹が飛び下り、続いて飛び下りてきた百合を受け止める。直後に上の階のドアが開く音がした。獣が唸るような声も聞こえる。あのゾンビのような化物が追って来たのだ。一樹は二階のドアを開けて外へ逃げようとしたが。

「——待って」

百合が一樹の手を握って止めた。「じつとしてた方がいいわ」  
「でも、あいつはすぐ上に迫ってる。ここは危険だ」

「大丈夫。ここまでは追ってこない。これ以上逃げるより、じつとしてた方が安全よ」

「しかし——」

さらに言おうとした一樹だったが、百合が人差し指を立てて唇に当

てたので、言葉を飲み込んだ。三階から、足を引きずって歩く音が聞こえる。化物が室内を探しているのだ。一樹たちが三階へ逃げ込むところは見られたはずだ。三階に隠れる場所は無く、唯一の脱出口は床に空いた穴だけだ。化物も当然それに気づき、追って来るだろう。どう考えても、ここに留まっていたは危険だ。

しかし、一樹の思いに反し、上から聞こえる足音は室内をぐるぐる歩き回るだけで、穴から飛び下りてくる気配は無かった。しばらくするとドアが開閉する音がして、足音が消えた。少し経ち、外階段を下りて来る気配がしたが、やがてその気配も地獄段の方へ消えた。どうやら資材倉庫の方へ戻って行ったようだ。

百合が片目を閉じた。「ほら。言ったとおりでしょ？ あいつらは知能が低い。床の穴を通って下の階へ行くなんて、考え付かないのよ。記憶力も低いから、しばらくすれば、自分が何をしていたのかも忘れ、元の場所に戻ると思ったの」

百合が言うには、あの動く死体は屍人という化物で、屍霊という黒い煙のようなものが死体に憑りつくことで動きはじめるそうだ。夜見島に古くから伝わる化物らしい。

オカルト雑誌の記者である一樹は、今回の取材に出る前、インターネットや古い新聞・週刊誌などで夜見島のことを調べた。屍霊に関してはなにかの記事で見た覚えはあるが、あまり詳しくは調べていない。ネットや新聞などで取り上げられていたのは島民失踪や大型客船消失などの大きな事件ばかりで、古い伝承などはなかなか見つけることができなかったのだ。なのに、なぜ百合は詳しく知っているのだろうか？ その理由を訊いても、百合は曖昧にはぐらかすだけだった。「それより、ずっとここにいるわけにはいかないわ。早く移動しましょう」

そう言って、百合は屍人に関する話を打ち切った。少し気になったが、確かに百合の言う通りである。一樹は、乗っていた船が高波で転覆し、偶然この島に流れ着いたのだ。船には他にも乗客がいた。彼らの消息も気になる。早く救助を呼ばなければならぬ。そのためには、資材倉庫の横にあるトンネルを通って夜見島灯台へ向かわなければ

ばならない。

しかし、灯台へ向かう道の途中には、さっきの屍人がいるはずだ。問答無用で襲い掛かって来て首筋に喰らいついてきた化物。できれば二度と関わりたくない。幸い、灯台へ向かう道はもうひとつある。一樹が流れ着いたドルフィン栈橋から海沿いに南へ進むルートだ。ただ、この道は堤防の上にあがる必要があるのだが、そのための埋め込み式の梯子が崩れていて上れないのだ。なにか、足場になるようなものがあれば行けるかもしれない。このビル内に梯子か何かないだろうか？ 一樹は百合に灯台へ向かう案を説明し、ビル内に使える物がないか探してみることにした。

室内には机やロッカーなどの事務用品の他に、漁業用の網や釣り針などの漁具も多数置かれていた。このビルは、昭和三十年代から四十年代の金鉱発掘時代、採掘所から運ばれてきた金を本土へ出荷する作業などに使われていたものだ。金鉱閉鎖後はそのまま放置されていたため、恐らくかつての島民が無断で倉庫やゴミ捨て場代わりに使用していたのだろう。これなら梯子や踏み台くらいすぐ見つかるかもしれない。一樹はまずロッカーを調べてみた。残念ながら中にはほろきやデツキブラシなどの掃除用具しか入っていなかったが、奥の方に、金鉱会社の職員が書き記したと思われる日誌があった。堤防を上るには何の役にも立たないが、オカルト雑誌の取材でこの島を訪れた身としては興味をそそられる物だった。一樹は日誌を読んでみることにした。

その日誌は、昭和四十五年の五月から始まっていた。島での金鉱事業がピークに達していた頃である。一樹はパラパラとページをめくりながら流し読みしていく。多くのページは、その日の仕事の内容や、軋轢があった島民たちから受けた妨害行為等について書き記されているだけだったが、まれに、二本足で歩行する黒い化け猫の目撃情報や、海から不気味なすすり泣きの声が聞こえた、地面から突然無数の黒い手が伸びてきて足をつかまれた、といった怪現象も書き込まれていた。夜見島には、ヤミピカリヤーと呼ばれる未確認生物や、海から来る穢れなどの都市伝説めいた話が多い。島民失踪や大型客船消

失事件に比べるとインパクトに欠けるが、一部のオカルトマニアの間では長く話題になっている。記事にするには十分な内容だ。ただ、日誌には発生した出来事が淡々と書かれてあるだけで、真相解明に繋がりそうな情報は無かった。

一樹は日誌をさらに読み進める。後半になるにつれ、金の採掘量に関する書き込みが増えていった。金鉱採掘所が閉鎖され、島から会社が完全撤退するのがこの日誌の三年後だから、この頃から金鉱の枯渇が如実になっていったのだろう。本社から視察が入った、現場監督や島の責任者を交えた会議が行われた、といった書き込みもあった。そして、日誌の最後のページには、こう記されてあった。

《本社より、鉱量枯渇により近日中の金鉱閉鎖が決定したとの連絡があった。スケジュール調整はこれからだが、本日より少しずつ事業を縮小し、撤収の準備に入るとのこと。

池田

ようやくこの島からおさらばだ！ せいせいする！ いくら団地を建てて学校や遊園地をつくろうが無駄だ！ こんな不気味な島に人が居つくわけがない！ 俺は麻衣と一緒に本土へ戻って結婚する！ 麻衣と出会えたことだけが唯一この島での良い思い出だ！ 麻衣！ 愛してるぞ!!》

それまでの丁寧に書かれた文体と文字から一転し、最後の一文だけは乱れた文字で書き殴られていた。それを見て、一樹は息を飲む。間違いではないかと思い、もう一度読み直した。だが、間違いではなかった。見てはいけないものを見てしまったような気がして、めまいを覚えた。

この日誌を書いた池田という人物は、島で暮らすことに相当な不満を抱えていたようだ。日誌に書かれてある怪現象を本気で信じていたのかもしれない。島からの撤退が決まり、それまでの鬱憤を晴らすため、最後の文を書いたのだろう。それは別段特異なことではない。一樹がめまいを覚えたのはそこに記された名が理由だ。最後に登場

する麻衣という人物。内容から察するに、この日誌を書いた池田という職員が島で出会い、将来を約束した女性なのだろう。この後本土へ戻って予定通り結婚したのなら、その名は池田麻衣と変わったはずだ。

池田麻衣——それは、一樹の幼馴染で、六年前に彼の元を去り、二度と会うことはできない少女の名だった。

——守だけはあたしの味方だと思ってたのに……違っただね……。

少女の、最後の言葉がよみがえる。

一樹は、暗い地の底へ引きずり込まれるような錯覚に襲われていた。まるで、地面から無数の黒い手が伸びてきて引きずり込もうとしているかのような——日誌に書いてあることが現実に起こったかのようにだった。ここ数年、仕事に集中することで忘れていた罪悪感がよみがえる。なぜ、俺は彼女を最後まで助けてやれなかったのだろうか？なぜ、彼女を突き放すようなことを言ってしまったのだろうか？麻衣……君が、俺をこの島へ呼んだのか？

一樹は首を振った。急な動きに眼鏡がずれたので、中指で元の場所に戻す。その動作で冷静さを取り戻した。バカバカしい。幼馴染だった池田麻衣は同い年だ。この日誌が書かれたのは昭和四十五年だから、ここに書かれている女性は、現在五十歳を超えているだろう。名前がたまたま幼馴染と一致しただけだ。それを幼馴染の少女と結びつけるなど、どうかしている。

一樹はオカルト雑誌の編集社に勤めているが、幽霊やUFOなどの超常現象には否定的だ。それらの怪現象には、何らかの科学的説明ができると信じている。それらを証明するために今の仕事を選んだと言っている。この日誌に書かれている怪現象の数々も、島民からの度重なる妨害行為により、職員たちは心理的に圧迫され、幻覚や幻聴に襲われたと考えることができる。今の一樹にも同じことが起こった

可能性が高い。ここ数日、麻衣のことを夢で見ることが多くなっていた。仕事が思うようにいかず、心理的に圧迫されているのだろう。

「――守？ 使えそうな物は見つかった？」

百合に声を掛けられ、一樹はそれ以上考えるのをやめた。取材も大事だが、今は救助を呼ぶのが先決だと思い直した。一樹は日誌をロッカーへ戻すと、近くに乱雑に置かれた物の中から鉄パイプを一本取った。梯子が崩れ落ちた堤防にはいくつも亀裂が入っていたから、そこにこのパイプを挿し込めば足場になるだろう。

「これでいい。さあ、行こう」

一樹は百合を連れ、金鉱会社のビルを後にした。地獄段をくだり、ドルフィン栈橋から海沿いに進んで、梯子が崩れた場所まで戻る。堤防の比較的大きな亀裂に鉄パイプを深く挿し込むと、しつかりと固定された。それを足場にして上に手を伸ばす。なんとか崩れていない上部の梯子に届いたので、そこから懸垂の要領で堤防の上にあがることができた。

堤防から海を見ると、百メートルほど離れた所にコンクリート製の波止めがあり、灯台はその先に建っていた。足元へ視線を移すと、堤防の反対側にも埋め込み梯子がある。これで岩場へ下り、海沿いに進めば灯台まで行けるはずだ。一樹は堤防の上からライトで岩場を照らした。

岩場に、鬼の顔が浮かんでいた。

はつとなり、一樹はその鬼の顔を凝視する。鬼は、憤怒の表情で一樹を睨み返してきた――ように、一瞬見えた。

次の瞬間、その顔がごそりと動き、海へと向かっていく。

初めは驚いたが、よく見ると、その鬼の顔の周囲にはひれ状の手足と丸い頭が生えていた。海亀のようだ。その甲羅の模様が鬼の顔に見えたのだ。あれは、夜見島の近海にのみ生息する珍しい海亀・夜見亀だ。甲羅の模様はたまたまではなく、全ての夜見亀があのような模様をしているらしい。その模様が憤怒した顔に見えることから、海で死んだ者の怨霊が乗り移ったという伝承があるほどだ。かつて漁で網にかかった際は網を切つてでも逃がしたというから、島民からはか

なり畏れられていたのだろう。

夜見亀はゆつくりとした動作で岩場を進むと、しぶきを上げて海へ落ち、すぐに海の闇にまぎれて見えなくなった。珍しいものを見るこ  
とができたが観光に来たわけではない。一樹は改めて堤防の下の岩  
場を照らした。しかし、そこに道らしきものは無かった。梯子の下に  
数メートル四方の岩場があり、そこから二十メートルほど離れた場所  
に洞窟が見えるのだが、岩場と洞窟の間は、堤防に波が繰り返し押し  
寄せているだけだ。一樹は地図を取り出して確認したが、地図には確  
かに道が書かれている。どうということだろうか？

「守？ どう？ イケそう？」

陸側の堤防下から百合が見上げている。一樹は、海側の状況を説明  
した。

「道が無いんだったら、そこは潮が引いた時しか通れないのかもしれ  
ないわね」

そう言われ、一樹はいま満潮であることに気がついた。百合の言う  
通りなら、この時間、道は海に沈んでいることになる。

「様子を見てくる。少し待っててくれ」

そう告げると、一樹は百合をその場に残し、梯子を使って岩場へお  
りた。

下へおりた一樹は、岩場と洞窟の間をライトで照らす。海がそう深  
くなければ、多少の無理を覚悟で渡ってみようかと考えていたのだ  
が、海はかなり深いようで、ライトで照らしただけでは底は見えな  
かった。波も高く、ここを通って行くのは危険だ。やはり、地獄段を  
通る迂回ルートを使うしかないのだろうか。そうなると、あの屍人と  
かいり化物をどう回避するかが問題になるが……。

——うん？

ライトで周囲を照らしながら考えていると、波打ち際で何かが反射  
した。さきほど夜見亀がいた場所だ。近づいて調べてみると、岩のく  
ぼみにコインのようなものが落ちていた。キーホルダー状になって  
おり、表面には『土器と平和 EXPO '70』と記されている。何  
かの国際博覧会の記念メダルだろう。あの夜見亀が置いて行ったの



だろうか？ いや、まさかな……と、一樹は考え直す。一九七〇年開催なら三十五年も前の物だが、メダルは光を反射するほど綺麗な状態だった。長い期間海の中にあつたとは思えない。最近誰かがここに来て落としたと考えるべきだろう。可能性が高いのは、一樹と同じ船に乗り合わせた三上脩たちだ。彼らも一樹同様この島に流れ着いた可能性は充分考えられる。だとしたら、近くにいてもいいかもしれない。

一樹はメダルをポケットにしまうと、他にも何か痕跡がないか探した。岩場にやや高い波が押し寄せ、そして引いていく。すると、少し盛り上がった岩の突起に白いものが引つ掛かっていた。拾ってみると、それは街の掲示板で見かけるような張り紙だった。別段珍しいものではなく、普通ならただゴミが流れ着いたと思うところだが、どういう訳か、その張り紙は全く濡れていなかった。波に打ち寄せられたと思つたのは見間違いだったのだろうか。そこに書かれた内容も目を引いた。それは尋ね人の張り紙なのだが、その名前が『岸田百合』となつていたので。ついさつき出会い、堤防の向こう側で待たせている少女と同じ名前だ。詳しく読んでみると、張り紙にある岸田百合という人物は、今から二年前の昭和七十八年八月十日、三逗港付近で目撃されたのを最後に行方が判らなくなつていてという。失踪当時の服装も書かれている。赤いキャミソールにカーディガン——百合の服装と一致する。しかし、そこに掲載されている写真は、おっとりした丸顔に丸眼鏡をかけたショートヘアーの女性だった。百合とは似ても似つかない。偶然島で出会った少女が、偶然二年前に失踪した少女と同じ名前で、偶然同じ服装をしていた？ そんなことがあるだろうか？ それは奇跡に近い確率だ。これを偶然と考えるのではなく、必然と考えた場合、あの岸田百合と名乗る少女は、もしかしたら——。不意に。

一樹の背後から真っ白な手が伸びてきて、張り紙を取り上げた。

振り返ると、いつの間に来たのか、すぐ後ろに岸田百合が立っていた。堤防の反対側で待たせていたはずだが、一樹が力任せに上つたあの堤防を、百合の細い手で上つたのだろうか？ そして、考え事に集中していたとはいえ、一樹に気配すら感じさせず背後に立つ——人間

業とは思えない。

百合は、一樹から取り上げた張り紙を、冬海のごとく冷たい目で見つめる。

「——こんなゴミに構ってる暇はないの。早くしてちょうだい」

どこか苛立たしげな口調でそう言うと、張り紙を丸め、海へ投げ捨てた。

「あ……ああ。すまない」

一樹は、百合に対し、得体の知れない恐怖を覚えた。この少女は、何か危険なおいがする。今は緊急事態だが、一緒にいない方がいいかもしれない。一瞬、そう考えた。

しかし。

そのとき、上空を、大型のヘリが通過する音がした。

救助のヘリが来た——そう思った一樹は、百合と共に、ヘリが着陸したと思われる島の北部へ向かった。助かるかもしれないという期待が、百合に対する得体の知れない恐怖を打ち消し、すぐに警戒心を無くしてしまったのだ。

その結果。

この直後、写し世の夜見島へ飲み込まれた一樹は、百合の企みにより、闇の住人を解き放つことになる——。

## 第八十四話 『特攻』 永井頼人 夜見島小中学校

22:28:44 終了条件2

潮降浜の廃校にあなたの大切な人がいる——謎の少女・加奈江からそう聞いた永井は、それが自衛隊の先輩で恩人の沖田宏であると確信した。ヘリの墜落で死んだ沖田は、今ごろその身体を闇人共に乗っ取られ、操られているだろう。永井は沖田の身体を解放するため、単身廃校に乗り込む。校内をうろつく闇人共を倒し、校舎裏で沖田の闇人と対峙した永井は、戦闘技術で上回る沖田に対し光で目をくらませて狙撃する戦法で倒すことに成功する。しかし、校舎内には無数の闇霊が潜んでおり、このままではすぐに復活してしまうだろう。倒れた沖田に新たな闇霊が憑りつこうとするのを見た永井は、慌てて闇霊の後を追った。その時、沖田のそばには信号拳銃が落ちていた。

◇

闇霊を追って走る永井だが、沖田のそばに落ちている信号拳銃を見て、急ブレーキをかけるかのごとく立ち止まった。その隙に、闇霊は沖田の身体の中に入り込む。倒れて動かなかった沖田の全身が一度大きく弾み、そして、ゆっくりとした動作で起き上がり始めた。永井が持つ小銃は弾倉を再装填しないといけない状態だが、銃床で殴れば倒せるかもしれない。だが、永井は沖田には手を出さず、彼のそばに落ちている信号拳銃を拾い、その場を離れて階段の下へ戻った。段差の陰に身を隠し、幻視で様子を伺う。沖田は立ち上がって周囲を見回した。永井の姿は段差の陰になって見えない。追ってこられると厄介だが、恐らくその行動はないだろうと永井は思っていた。闇霊が新たな身体に憑りついた時は、その身体に慣れるまでに少し時間を要するはずだ。永井が思った通り、沖田は身体の動きを確かめるかのごとく、首や腕などをぐるぐると回し始めた。しばらくはその場にとどまっているだろう。

永井は幻視をやめる。沖田の復活を許してしまったが、どの道闇霊を一掃しない限り何度も復活する。ヤツを倒すのは後回しだ。それよりも――。

永井は、視線を目の前の校舎へ移した。火事があったのか全焼状態の校舎内には、おびただ夥しい数の闇霊が蠢いていた。この地域の闇人の復活が早いのはヤツらが原因だ。まずはあの闇霊どもをどうにかしなければ、倒せるものも倒せない。そのために、これが役に立つ。永井は、さつき拾った信号拳銃を校舎に向けた。その名の通り信号弾を発射する銃で、通信機が使えない状況での攻撃合図や救助要請などに使用するものだ。本来殺傷能力は低いのが、闇人相手には極めて強力な武器となるはずだ。

永井は引き金を引き、校舎内へ信号弾を撃ち込んだ。すぐに目を閉じ、その上から手で覆った。数秒の間をおき、信号弾が炸裂する音がした。まぶたと手のひらで遮っても目が眩むほどの閃光が校舎内から漏れ出す。闇霊共の金切り声が聞こえる。人間でさえ間近で直視すれば目にダメージを負うほどの強烈な光だ。懐中電灯程度の光でも消滅する闇霊などひとたまりもないだろう。永井が放った信号弾は十秒近く発光し続け、校舎内に潜む闇霊どもを照らし続けた。

やがて光は消え、永井はゆっくりと目を開けた。さつきまで校舎内で蠢いていた闇霊の姿は無い。何体かは外へ逃げ出したかもしれないが、ほとんど殲滅できたはずだ。後は懐中電灯の光でも大丈夫だろう。

「永井！　そこにいるのか？　俺だよ、沖田だよ！」

段差の上から声がした。新たに沖田の身体に憑りついた闇霊が、また殻の記憶を読み取ったのだ。

「今の光は、お前がやったんだろ？　あれで校舎のヤツらを倒したのか。弱いやつから叩く……情けない戦い方だな？　それでも誇り高き自衛官か？」

初めてこの場所で沖田の闇人と対峙した時はその言葉に動揺した永井だったが、あれは沖田本人の言葉ではなく、闇霊が沖田の記憶を読み取り利用しているのだと悟った。それが判っていても、やはり沖

田の声を聞くと心がざわつく。落ち着け、惑わされるな——自分に言い聞かせる。闇霊どもはほぼ殲滅した。あとは、いま沖田を乗っ取っているヤツを倒せば終わりだ。問題はどうか倒すかだ。あいつは沖田ではないものの、沖田と同等の技術を持っている。正面からまともに撃ち合っても、未熟な永井に勝てる見込みは無いだろう。倒すためには何か策を用いなければならぬが、ライトで目をくらませて狙撃する方法はさつき使ったばかりだ。同じ手段が何度も通じると思わぬ方がいい。闇人は屍人と違い、頭は悪くない。

「ずっと見てたぞ。お前がここに来た時から、ずっとな。こそこそ隠れて背後から撃つたり、光で目をくらませたり……情けなくて涙が出るぞ。今まで何を学んだ？俺が今までお前の面倒を見てきたのは、あんな軟弱な戦いをさせるためじゃないぞ？」

沖田の記憶を利用し、闇人は永井を挑発する。もはや惑わされることはないが、怒りは込み上げてくる。あんな芋虫のでき損ないのような化物が、尊敬する沖田の体内に入り込み、なりすましているのだ。できることならその体内から引きずり出し、口がきけなくなるまで殴りつけたいところだ。

「俺はお前に、この国を守る自衛官としての使命と誇りを教えてきたはずだがな？それが今の戦い方か？違うだろ？正々堂々と戦ってみろ。さあ、出てこい」

闇人の企みは判っている。永井が策を用いることを恐れているのだ。そして、正面から撃ち合えば永井に勝ち目がないことも、闇人は知っている。ここで出て行って無策で戦えばヤツの思うつぼだ。それが判っていても、怒りは膨らむばかりだ。ヤツが喋れば喋るほど、死んだ沖田が貶められている気がしてならない。ヤツは沖田を凌辱しているのと同じだ。

「——いつまで隠れてるつもりだ？ひよつとして、もうあきらめたのか？くじけるんじゃないぞ？永井、根性出せよ」

怒りが頂点に達した。永井、根性出せよ——それは、永井が訓練でくじけそうになったとき、いつも沖田が掛けてくれた言葉だ。この言葉があったから、永井は厳しい訓練の数々を乗り越えてきたのだ。そ

れが、あんな化物の口から発せられるなど。限界だった。これ以上やつに喋らせる訳にはいかない。一刻も早く黙らせるべきだ。永井は怒りに任せて階段を駆け上がろうとした。  
だが。

「永井！ 自分を信じろ！」

その一声で、永井は踏みとどまった。

言ったのは闇人だ。それは間違いない。隠れている永井をあぶり出そうとして言った言葉だろう。

だが、そこにわずかな違和感を覚えた。考えて、すぐにその正体に気がついた。訓練で、沖田からは、くじけるな、根性出せ、と何度も言われ、励まされてきた。しかし、自分を信じろ、と言われたことは、一度もない。

「  
」  
永井は、一度大きく息を吸い、そして吐き出し、ゆっくりと、階段を上がった。

沖田の身体と記憶を利用する闇人への怒りは、もう無かった。沖田は自衛隊内でも優秀な隊員だとか、自分はまだまだ未熟だとか、そういうことも考えなかった。倒すための策も、考えていない。

全ての雑念を捨て、永井は階段を上がる。

闇人の姿が見えた。

闇人が小銃を構えた。永井に照準を合わせ、引き金に指を掛ける。だが、それよりも早く。

永井は、銃床を肩に付け、頬に当てた。足は肩幅より少し広め。やや膝を曲げて腰を落とし、わずかに前傾の姿勢——沖田の指導の下、訓練で何度も繰り返してきた動作だ。それを、いまここで、自分できる全ての力で、行<sup>おこな</sup>った。

そして、引き金に指を掛け、引いた。

永井の銃から撃ち出された弾丸は、闇人の銃から弾丸が撃ち出されるよりも早く、闇人の頭を撃ち抜いていた。

銃口を下ろし、倒れた沖田に近づく。闇人は、乗っ取った死体の損傷部を治し、巨体や四足など、その姿を変化させることができる。そ

して、残念ながら、倒しても元の姿には戻らない。倒れた沖田は闇人の姿のままだ。人型とはいえ、その顔には、闇人特有の不快な笑みが残っている。

それでも、永井は倒れている沖田の姿に、尊さを感じていた。

「……………」

しばらく無言で沖田を見つめていた永井は、先ほど軽トラックの助手席で見つけたTNT火薬を取り出した。導火線を取り付け、倒れている沖田の胸の上に置く。

校舎内の闇霊どもはほとんど消滅したはずだが、まだどこに潜んでいるか判らない。仮に全滅していたとしても、いずれまた、他の地域からやって来るだろう。これ以上、ヤツらの好きにさせないためには。

「沖田さん。これで、本当にお別れです」

永井は、ライターを取り出し。

「……………今まで、本当に、ありがとうございました」

最後の言葉と共に、導火線に火を点けた。

横に跳び、伏せる。

沖田の身体は、地を揺らし天を焦がす炎に包まれ、この世界から永遠に消滅した。

第八十五話 『歓喜』 不明 海中 23:00:09

潮降浜沖の、暗い海の底——時の流れから取り残されたかのごとく、動くものひとつもない、深い海の底で。

其の者は、待ちわびた時が来たことを悟った。いや——待ちわびた者が来た、というべきか。

母が、来る。

永遠とも思える長き時間を、この海の底で過ごした。全ては、この時のために。

其の者は、海の底を離れ、地上を目指す。

浮上するにつれ、海の底までは届かなかった光が、少しずつ、増していく。闇に隠されていた其の者の姿が、少しずつ、あらわになっていく。その姿は異形であった。本来の姿ではない。其の者は、元々は姿を持たなかった。いや、本来は姿を持っていたが、長き時を暗い海の底で過ごし、姿を失ってしまったのか……其の者自身にも、もう判らない。ともかく、本来姿を持たぬ其の者が今の姿を成したのは、母の行動を真似たからだ。其の者の母もまた、本来は姿を持たぬ者であった。だが母は、現実と虚無の世界の狭間から流れ着いた人間の形を模し、姿を成した。其の者も母の行動を真似、海の底に沈む生物を模し、今の姿を成したのだ。ただ、虚無の世界と違い、海の底には様々な生物が沈んで来る。複数の生物を模した其の者の姿は、母よりもなお異形と化していた——もちろんそれは、人の目から見れば、の話ではあるが。

其の者は、地上世界に残された者であった。

世界が闇に包まれていた古の時代、其の者は、母と同じ存在だった。常に母のそばにいて、母と共に行動し、母と志を同じにしていた。母から愛を与えられていたはずだった。そう思っていた。

だが。

世界が光で溢れると、母は其の者を残し、地の底へ潜ってしまった。そこは、母と同じ存在であるはずの其の者でもたどりつけない世界だった。



地上に残された其の者は、光の届かぬ場所を求め、海の底へ潜った。だが、母が潜った地の底と違い、海の底は時折わずかながら地上の光が届く。わずかな光でも、其の者は身を焼かれる。其の者は母を恨んだ。なぜ、母は我を残して地の底へ潜ったのか。我は母と同じ存在ではない。我が母と同じ存在ならば、母の潜った地の底へたどり着けたはずだ。たどり着けなかったということは、我は母よりも劣った存在であつたのだろうか。だから、母から見捨てられたのだろうか。ならば、我の力を示せば、母は我を迎えてくれるだろうか。また母に会えるだろうか。

母を憎み、同時に母を想い続けた。母に認められたかつた。母に会いたかつた。

だから、母の行動を真似た。

母は地上世界への帰還を目論んでいた。力を蓄え、地上の様子を探り、光への耐性を得る術を探っていた。いずれ、この地上に戻つて来るはずだ。

其の者は母の行動を真似、いくつもの子を産み出し、地上へ放つた。人間の身体を『殻』として利用することで、子らは光に適応することができた。母が己の身を削つて人間の姿を模した分裂体をつくり出したのを見て、其の者も、海の底に沈んだ人間の姿を模した分裂体をつくり、写し世の世界へ潜り込ませた。そして、赤い津波を起こし、船を転覆させ、あるいはへりを墜落させ、人間を写し世の世界へ導いた。母ができることは我もできる、その姿を見せたかつた。我は劣った存在ではない、それを証明したかつた。そうすれば、母は我を認め、迎えてくれる——そう信じていた。

其の者は浮上し続ける。光が強くなる。問題は無い。永遠とも思える長き間わずかな光を浴び続けてきた其の者の身体は、もはや光の影響を受けぬほど強くなつていた。

やがて海面が見えた。写し世と現世とを繋ぐ巨大な鉄塔が揺らめいていた。そして、鉄塔の先端へ向かう母の姿も、見える。

地上に残された其の者は、歓びの声を上げた。

その声は、濁ったサイレンの音となり、海の中から写し世の夜見島に響き渡った。

第八十六話 『狂笑』 一樹守 四鳴山／離島線4号  
基鉄塔 22:27:08 終了条件2

鉄塔の上層にたどり着いた一樹守と木船郁子は、鬼神のごとき強さで闇人共を蹴散らす少女と遭遇する。少女は屍人側が放った鳩であり、かつて海で死んだ女子中学生・矢倉市子の姿を模した者であった。銃撃さえ効かない市子の前になすすべもない一樹たちだが、市子の内なる意識が目覚めたのか、姿を模した者は動きを妨げられ行動不能に陥った。その隙に、一旦古い家屋へ身を隠す一樹たち。その家屋の広間で、一樹は彼を執拗に追って来る着物姿の四足闇人の姿を見た。幸いまだ気付かれていないが、放っておくとまた邪魔をされかねない。一樹は、どうするべきかを考えた。

◇

一樹も郁子も、今はまともに戦えるような状態ではない。一樹は背中と右腕に銃弾を受けて負傷しているし、郁子は感応の乱用で気力を消耗している。着物姿の四足闇人は探し物に夢中でこちらには気付いていない。わざわざ手を出すことはないだろう。そう判断した一樹は広間を離れ、奥の小部屋へ移動した。

そこは書斎として使われていた部屋のようだ。八畳の広さだが、大樹の幹が壁を突き破って内部へ侵入し、三分の一ほどのスペースが占拠されていた。さらには幹から生えた枝葉が天井を覆うように茂り、部屋の広さに反して妙な狭苦しさを感じる。もちろん、少し身体を休めるだけなので贅沢など言っていられない。一樹は部屋に入ると幻視で周囲の様子を探った。市子はまだ思うように動けず、プレハブ小屋のそばで一人もがいていた。着物姿の四足闇人も変わらず広間で探し物をしている。他に敵の気配はないので、しばらくは大丈夫だろう。一樹は部屋の隅に腰を下ろすと、時折幻視で周囲の様子を探りつつ、傷が癒えるのを待った。

「——ねえ。あれ、見て」

一樹の隣に座り同じく回復を待っていた郁子が、不意に樹の幹を指さした。そこに、なにか刺さっている。薄茶色の細長い棒状の物だ。一樹は立ち上がると、そばに行つてそれに触れてみた。金属のようでもあり、石のようでもある不思議な感触だった。だが、どこかで触れたことがあるような気もする。引っ張つてみたが、かなり深くまで刺さっているようで、一樹の力ではびくともしなかった。

「それ、持つて行つた方がいいと思う」

一樹のそばに立つた郁子が、真剣な表情で言う。「あたしも、それと同じようなものを持つてるの。たぶん、魚の骨だと思う。でも、ただの魚の骨じゃないかもしれない。うまく言えないんだけど、中にもものすごい力を秘めてる気がするの。実際、それを見た闇人は、なんだかすごく怯えてた」

話を聞いた一樹は、あらためてそれに触れてみた。残念ながら、特になにも感じない。秘めた力があるようには思えないが、それは少し前に手に入れた滅爻樹と同じだ。あれも、何も知らなければただの木の枝でしかない。郁子には特殊な力がある。一樹には感じられないことを感じる事ができても、不思議ではない。

「判つた。君を信じるよ」

一樹は鉈を使つて樹の幹を削り、どうにかその骨のようなものを引っこ抜いた。長さは鉈よりも少し短い。最も太い部分は片手で握つて指がぎりぎり届くというくらいだが、先細りしており、先端部は鋭く尖っていた。これは、骨というよりは角か……そう思った。角を持つ海洋生物で真つ先に思い浮かぶのはイツカクジラだ。テレビや図鑑などでしか見たことはないが、あの角にそっくりだった。武器として使えなくもなさそうだが、あまり重量はなく、強度も期待できないだろう。一見するだけでは頼りになりそうもないが、一体何が秘められているのだろうか。郁子を信じるしかない。

「まずい。あの娘が動き出した」

一樹に代わつて幻視で様子を見ていた郁子が言った。一樹も幻視で確認すると、身体を縛る力から解放された市子が、鉄塔の先端部

へと向かっていた。

「あいつに先を越されたらすべて終わる。俺たちも行こう」

一樹たちは、広間の四足闇人に気付かれぬよう静かに外へ出て、市子の後を追った。

市子はプレハブ小屋の敷地を抜け、その先にある鉄製の階段をあがっていた。まだ身体の動きが本調子ではないのか、重い身体を引きずるように、一段一段を踏みしめてゆつくりと進んでいる。それでも、上層に隠れていた闇人から拳銃で撃たれると、すぐに機関銃を撃ち返して排除した。撃たれた傷も瞬時に塞がり、また階段をあがる。あれでは、戦つてもまた返り討ちにされるだろう。市子に先を越されるわけにはいかないが、どうすれば止められるのか判らない。一樹たちは気付かれないよう距離を取り、後を追うしかなかった。

階段の先にはコンクリート製のビルがあった。全体がかなり歪な形をしている。一階二階に相当する部分より三階部分がひと回り広くなっており、四階はまた狭くなったかと思うと五階六階部分は左右に大きくはみ出し、七階部分は突然大きな日本家屋になっている。外壁には、いたるところにシヨベルカーやクレーンのアーム・掘削機のドリルなど重機の一部や、鉄塔の通路、むき出しの鉄骨、テレビのアンテナなど、様々な物が固着していた。どうやら複数の建造物が融合してしまつたようだ。

市子は正面の扉からビルの中へ入った。後を追う一樹たちも続くうとしたが、内側から鍵をかけられたのか、扉は開かなかつた。他に出入口は無く、手が届く範囲に窓もない。複雑な構造だから回り込めば別の出入口があるかもしれないが、時間がかかれば市子が先端部へ到達してしまう。どうするべきか。

「これ、使えるかもしれない」

周囲を調べていた郁子が何か見つけたようだ。扉から少し離れた外壁に三十センチ四方のボックスがあり、中には上昇・下降などと書かれたいくつものボタンがあつた。何かの操作ボックスのようだ。

「たぶん、あれだと思う」

郁子は頭上を指さした。十五メートルほどの上の外壁にクレーン

のアームが固着しており、郁子が下降のボタンを押すと、アーム先のフックが下りてきた。太い鉤爪が左右に広がっているもので、あまり幅はないものの足を引つ掛けるには充分な大きさだ。これを使えば、鉄塔の通路が固着している四階部分へ行けそうだった。危険ではあるが、他の道を探している時間は無い。

「しつかり掴まれ。絶対に、手を離すなよ」

一樹と郁子はフックに足をかけチェーンにつかまると、上昇ボタンを押した。クレーンの巻き上げが始まり、ゆっくりと上昇する。途中、風にあおられひやりとしたものの、どうにか無事に四階部分へ到達できた。すぐそばに出入口があったので中に入る。内部は吹き抜け状になっており、内壁に沿うように鉄製の階段が続いていた。市子に先回りできていたら都合だったが、クレーンから落ちないよう慎重に上昇したため、市子は一樹たちよりも先を行っていた。二人は後を追う。市子の動きは相変わらず鈍いためすぐに追いつくことはできなかったものの、やはり手出しできないまま後についていくしかなかった。

やがて階段は終わり、七階部分のビルと日本家屋が融合した場所へ出た。十メートル四方のビルの屋上が瓦葺かわらぶきの屋根と繋がっており、その向こう側に長い階段が見えた。それをのぼれば鉄塔の先端部だ。ここで止めなければ、市子に先端部へ到達されてしまう。これ以上躊躇しているわけにはいかない。

「アイツの動きを止めてくれ。その隙に、なんとかする」一樹は拳銃の弾を確認しながら言った。

「なんとかって、どうするの？ 銃も効かないんじや、倒しようがないわ」

「下へ突き落すしかないだろう。危険だが、やるしかない。いくぞ」

一樹の言葉に郁子は頷き、二人で屋上へ飛び出した。気配に気づいた市子が振り返り、忌々しげな表情で機関銃を向けた。その動きが硬直する。郁子が感応を使ったのだ。一樹は拳銃を構えて引き金を引く。装填してある九発全てを撃ち尽くし、その大半を命中させた。傷はやはり瞬時に塞がり始めたものの、市子は大きく怯み、屋上の手す

り近くまで後退りした。一樹はそのまま体当たりをしようとしたが。

《――邪魔だ!!》

市子が叫ぶと同時に郁子の身体が見えない力に弾き飛ばされた。感応が解けた。市子は再び機関銃を構えようとするが、その指が引き金にかかる前に一樹が組みついた。そのまま屋上際まで押そうとしたが、子供が力士に組みついたかのごとくびくともしない。市子は体を入れ替え、腕を軽く振った。そのわずかな動作で一樹は投げ飛ばされ、コンクリートの床に激しくたたきつけられた。そこへ、市子が刀を振るう。一樹は鉞を取り出してその一撃を受け止めたものの、市子の細腕からは想像もできないほど重い一撃に、大きく右側に薙ぎ払われた。市子はさらに刀を振り上げ、一樹の頭めがけて振り下ろそうとした。その動きが硬直する。郁子が再び感応を使ったのだ。

《ちよこまかとうるさい!!》

市子が叫ぶと、郁子の身体はまた見えない力に弾かれ、感応は解除された。市子が機関銃を郁子に向けた。銃弾が放たれ、郁子の腕や足をとらえた。幸い距離があつたため弾道がかなりぶれ、数発掠めた程度だ。一樹は立ち上がり鉞を振るった。郁子に注意が向いている隙を衝いたはずだが、市子は身をひるがえしてその一撃をかわすと、一樹の胸を右足で蹴りあげ、仰け反つて怯んだところへさらに左の回し蹴りを打ち込んできた。なんとか腕でガードしたものの、強烈な一撃に一樹の身体は大きく弾き飛ばされた。市子が銃を撃つ。弾の何発かが一樹の太腿を貫いた。うめき声をあげた一樹に、市子はさらに銃弾を撃ち込もうとする。しかし、銃は弾切れとなり、空撃ちの音を奏でた。

《雑魚の分際で手を煩わせおって……》

市子は機関銃から弾倉を取り外し、新たな弾倉を取り出した。一樹は足を引きずりながら郁子の元へ向かう。

「……ダメだ……一旦逃げよう……」

銃弾を受けた身体を引きずるようにして、二人はビル内へと戻る。市子が弾倉を取り換える前に、なんとか内部へ身を隠すことができた。

しかし、ビルの階下から。

「……返せ……お父様の……返せえ……」

忌々しい声が聞こえてきた。内壁を沿うらせん状の階段を、あの着物姿の四足闇人があがって来る。最悪の状況で、最悪の相手が現れた。負傷し、銃弾も撃ち尽くした状態で、市子と四足闇人の両方を相手に戦えるわけがない。やはり、あの屋敷の広間で四足闇人を倒しておくべきだったのか。だが、それをしていたとしても、市子を止められなければ意味が無い。

四足闇人が階段を駆けあがって来る。屋上からは市子も迫る。もはや逃げ場はない。戦ってどうにかなる状態でもない。一樹は、覚悟を決めた。

だが――。

「……返せえ!!」

階段をあがって来た四足闇人は、一樹たちには見向きもせずそばを走り抜け。

《……なに!?!》

屋上で弾倉を取り換えていた市子に跳びかかった。

不意を衝かれた市子は後ろに倒れた。四足闇人が馬乗り状態になる。

「化物女! 返せ! お父様の刀を返せえ!!」

着物姿の四足闇人は、市子が持つ刀へ手を伸ばした。だが、四足闇人の手は鶏の足のような形状に変化しており、うまく刀を掴めない。

《邪魔だ!!》

市子は、四足闇人が手を伸ばしている隙を衝いて身体を大きく振り、四足闇人と体たいを入れ替えた。今度は市子が馬乗りの状態になる。刀を振り上げたものの、銃弾さえ弾く四足闇人の顔に効果は薄いと判断したのか、振り下ろすことはせず、馬乗り状態を解いて間合いを離れた。四足闇人も身を起こすと、体勢を低くして身構える。

「返せえ!!」

再び跳びかかった。今度は市子が右手に持つ刀に向かって真っすぐ。市子が撃つ機関銃をもともせず、その巨大な口で市子の右腕



に喰らいついた。腕ごと引きちぎるような勢いで振り回す。

《調子に乗るな!!》

市子は機関銃の銃口を四足闇人の顔に突きつけると、容赦なく引き金を引いた。いかに正面からの銃撃を弾く四足闇人とはいえ、密着状態では危ういかもれない。案の定、銃弾の何発かは顔にめり込んでいる。だが、それでも四足闇人は離さない。やがて銃弾が尽きた。四足闇人が低い唸り声をあげると同時に、ぐしゃりと、肉と骨を同時に潰したような音がした。市子の腕を咬み砕いたのだ。市子の手から刀が離れ、勢いで瓦葺屋根のところまで滑っていった。四足闇人は市子の腕を離すと、刀を拾いに行こうとした。

《——くそがあ!!》

市子は銃弾の切れた機関銃を投げ捨て、四足闇人の後ろ足を掴んだ。そして、元は女性とはいえ今は成人男性の倍の重量はあろうかという四足闇人の身体を頭上に振り上げると、力任せにコンクリートの床に叩きつけた。床に亀裂が入り、破片が周囲に飛び散る。その中に、四足闇人が吐いた血反吐も混じる。

「……お父様の……刀……」

それでも、四足闇人は震えながら身体を起こすと、刀の方へ向かうとする。

市子は大きく舌打ちをして周囲を見回した。屋敷の瓦屋根に取り付けられたテレビ用のアンテナが目に入った。市子はアンテナの支柱を左手で握ると、屋根から力任せに引きはがした。それを振り上げ、這うように進む四足闇人の背中に叩きつける。四足闇人の背中は硬い装甲に覆われておらず、生身と同じだ。そこへ、市子は何度もアンテナを叩きつける。導波器や反射器はすぐにバラバラになり、アンテナは支柱のみとなった。それでも市子はさらに叩きつける。咬み砕かれた右腕が元に戻った。両手で握り、さらなる力で叩きつける。叩きつけるたびに、肉が潰れ、骨がきしむ音が聞こえる。市子はさらに支柱を叩きつける。やがて、四足闇人は力尽きたのか、動かなくなった。それでも市子は攻撃の手を緩めない。何度も、何度も、支柱を叩きつけた。

《闇人風情が……我的手を煩わせるな!!》

吐き捨てるように言つて、さらに叩きつけた。

動かなくなつた四足闇人が、市子の言葉に反応するように顔を上げた。

「……闇人……違う……」

かすれた声で——しかし、はつきりと意志を持つて、否定した。

《まだ喋れるか闇人!》

市子はさらに支柱を叩きつける。肉が潰れる。骨がきしむ。

それでも。

「……違う……違う……」

四足闇人は、市子の打撃に逆らうように身を起こそうとする。

《しぶといわ! 身の程をわきまえろ雑兵が!!》

さらに叩きつけても。

「……あたしは……闇人じゃない……」

市子の言葉を否定し、市子の打撃に逆らい、四足闇人は身を起こし、刀へと手を伸ばす。

《下種がほざくな!!》

怒りと苛立ちをあらわにする市子は、さらに連撃を加える。それにも耐え、その目はしっかりと刀をとらえ、四足闇人は、一步一步、少しずつ進む。その行動がさらに市子の怒りを買ひ、さらに強い力で殴りつけられ、それでも四足闇人はあきらめない。「闇人」「雑兵」「下種」……そう呼ばれるたびに、「違う」と否定し、そのたびに、強い意思を持って前へ進む。

そして。

「……あたしは闇人じゃない……雑兵でも下種でもない! あたしは夜見島総領主・太田常雄の娘、太田ともえだ!!」

その、内にみなぎる思いを絞り出すように、叫んだ。

空気が震えた気がした。気持ち衝撃の波となり駆け抜けたように感じた。それほどの強い気迫だった。市子さえも、支柱を振り上げた手が止まったほどだ。

四足闇人はさらに一步踏み出す。全身全霊をかけた歩みで進み、そ

の覚悟を叫ぶ。

「お父様が不在のいま、あたしが総領主代行。太田家の使命は、この島の秩序を守ること。今この島を守るのはあたし……あたしなんだあ  
あぁあ!!」

そして、最後の力を振り絞るかのように、刀に向かつて疾はしった。

《ほざくなあ!!》

市子が吠えた。すぐに追い、刀に手を伸ばす四足闇人の背中に再び支柱を叩きつけた。四足闇人は、その手が刀に触れる寸前で再び地面に屈する。それでも身を起こそうとする四足闇人の横腹を、市子が蹴り上げた。四足闇人は仰向けに倒れ、ひっくり返った海亀のように手足をばたばたと振りたくった。そこへ、市子がまた支柱を振り上げた。今度は柱身ではなく、屋根から引きちぎって鋭く尖った先端を向けた。

《死ねえ!!》

その先端を、腹へ突き刺した。

支柱は腹から背中を貫き、地面をも貫き、四足闇人を串刺し状態にした。ごぼつ、と、口から大量の血を吐いた。手足の動きがゆっくりになり、やがて、地面を擦るだけになる。

《そこで死ぬまで喘あえいでろ》

串刺しにされた四足闇人を蔑んだ目で見た市子は、唾を吐くように言い捨てた。

四足闇人は手足を動かして地面を擦る。もはや力は僅かばかりしか残っていない。

それでも——その目は死んでいなかった。

「……刀……お父様の……」

刀に手を伸ばす。闘志みなぎる目は、しっかりと刀をとらえている。

市子は忌々しげに舌打ちをした後、四足闇人が求め続ける刀に目をやり、そして、新しい遊びを思いついた子供のような笑みを浮かべた。

《それほど刀が欲しいのなら、存分に味あわせてやるわ》

刀を拾い、刃先を向けた。

四足闇人はぎりぎり歯を噛んだ。拘束から逃れるべく、身体を左右に振る。しかし、支柱は深く刺さっておりびくともしない。顔が苦痛にゆがむ。闇人と言えど痛みは感じるはずだ。銃撃や斬撃・打撃を受け、悲鳴や唸り声を上げる闇人を、一樹は何度も見ている。腹を串刺しにされた状態で身体を動かすなど並の意思でできるものではない。その強い意思をもつてしても、張りつけられた状態から動くことはできない。このままではやられる。

「……誰か……誰か！ 誰かいないの!!」

四足闇人は血を吐きながら叫んだ。

「誰か！ 誰か来て！ 化物女はここよ!!」

叫び続ける。腹を貫かれては、思うように喋れないはずだ。血がのどに詰まっては、思うように声は出ないはずだ。

それでも。

「この島を穢れから守れ！ みんな戦え!! あたしたちの島はあたしたちが守る！ 今度こそ守るんだ!!」

四足闇人は、鉄塔中に響くほどの声で、叫び続ける。

《戯言は終わりだ!!》

市子は刀を突き下ろした。

屋上に、銃声が響き渡った。

《!?!》

信じられない、という目で、市子は自分の胸を見た。胸に小さな穴が空き、こぼりと、血が噴き出した。その目を、ビルの階段付近へ向ける。そこに、警官姿の闇人が、拳銃を向けて立っていた。

「……おやつさん、あんた、立派に娘を育てたなあ」

場違いなほど感慨深げな顔で、しみじみとした口調で、警官闇人は言う。

「立派だ……立派だよ……」

そう言いながら、さらに銃を撃ち、市子の方へ向かっていった。全ての銃弾が市子の身体に命中したものの、市子はわずかに怯むだけだ。傷も、すぐに塞がる。やがて拳銃は弾切れとなった。

「……やんなつちやうなあ」

市子が刀を振り上げ、警官闇人に向かって走った。警官闇人が弾を再装填するよりも早く、袈裟斬で斬り捨てた。市子は倒れた警官闇人を見下ろして満足げに微笑むと、その手から拳銃を奪い取った。銃弾を装填し、串刺し状態の四足闇人に向けた。だが、その指が引き金にかかるよりも早く、別の銃声が出た。市子の側頭部が貫かれる。いつの間に見れたのか、屋上の縁に猟銃を持った闇人が銃口を向けていた。市子は拳銃で反撃する。銃弾を受けた猟銃闇人は地上へ落下していった。そのすぐ隣から、漁師姿の闇人が壁をよじ登って現れた。出刃包丁を振り上げ、市子へ向かっていく。市子は容赦なく拳銃で撃ち、闇人はなすすべもなく倒れた。

だが、その後も。

階段をのぼり、外壁をよじのぼり、屋根をよじのぼり、次々と、島民の闇人が現れる。鎌、魚鉤、縄切り、まさかり、アイロンなど、漁具や農具などの日用品を武器にしている。

「化物から島を守るんだ!」

「姐あねさんの命めいだ、絶対しくじらねえぞ!」

「俺だつてやるときはやるんだ!」

口々に、その決意を表す。

そして、一斉に、市子へ襲い掛かった。

《雑兵どもがあ!!》

市子は忌々しげに声を上げ、引き金を引いた。何体かを倒したものの、すぐに弾は尽きた。予備の弾倉を探るが、すべて使い果たしたようだ。漁師の闇人が鎌を振りかざしてきた。市子は刀でその鎌をはらうと、返す刀で首を斬り落とした。続いて、右側から縄切りを振り上げてきた闇人の胸に刀を突き刺す。背後から魚鉤を持って襲い掛かる闇人には、刀を抜くと同時に横薙ぎにして斬り捨てた。市子は島民の闇人を倒し続ける。闇人は次々に現れるが、そのほとんどが市子に触れることなく倒れていく。まれに傷つけても、その傷はすぐに治ってしまう。いかに闇人の数が多かろうと、ただの鈍器や刃物や銃では、市子を倒すことはできない。

かちやかちやと、犬が走るような音が聞こえた。同時に、ビルがわ

ずかに振動するほどの足音も聞こえる。階段をあがって、割烹着姿の四足闇人と、野良着姿の巨体闇人が現れた。

割烹着姿の四足闇人は、串刺し状態の仲間を見て、「許せない……許せなあい！ 化物女!!」と、市子に向かっていった。野良着姿の巨体闇人も、「姐さん、俺、絶対やってやります！ 絶対！」と、後に続く。人型の闇人と戦っていた市子は反応が遅れた。割烹着姿の四足闇人が市子の右腕に咬みついた。市子は刀を左手に持ち替えようとするが、その腕を、複数の人型闇人が掴んで抑えた。そこへ、巨体闇人が拳を振り上げて踏み込んでくる。その拳を市子に振るつた。鉄球のごときその拳をまともに受け、市子の身体は群がる闇人ごと弾き飛ばされた。その衝撃で刀が市子の手を離れ、床を滑り、串刺し状態の四足闇人のそばまで転がった。着物姿の四足闇人は手を伸ばすが、指の関節ひとつ分ほどで届かない。

「……あああ!!」

着物姿の四足闇人は、気合と共に大きく身体を振った。突き刺さっていたアンテナの支柱がぼきりと折れた。四足闇人は腹を貫いていた支柱を抜き取って投げ捨てると、ついに刀を手にした。

だが、四足闇人の両手は鶏の足のように変化している。物を掴むのには、明らかに適していない。その上、全身が四足で駆け回るのに適した姿になっているのだ。人間のように刀を構えることなどできるはずもない。ぎこちない手つきで持ち、ガタガタと震える足で立つことしかできなかつた。あれでは、市子を倒すことなど不可能だろう。奪い取ったまさかりで闇人どもを全員始末した市子は、なんとか刀を構えようとする四足闇人の姿を見て、蔑むような笑みを浮かべた。だが、その笑みが凍りつく。

四足闇人が持つ刀から、血のぐとく真つ赤な霧が立ちのぼり始めたのだ。

霧は、揺らめきながら次々と立ちのぼり続ける。まるで刀身が炎に包まれているかのようだ。刀が燃えている。明らかに、市子が手にしていた時とは違う。

一樹のそばで、郁子が両肩を抱いて震えていた。「……なに……あ

れ……ものすごい……力……」

一樹もごくりと喉を鳴らす。特殊な能力を持たない一樹にも、その刀から発する凄まじい力を感じる。市子でさえ、その刀を凝視し、怯えたような顔で立ちすくんでいた。

「——あああああああ!!」

四足闇人が走った。その力強い咆哮に反し、よたよたとした足取りとおぼつかない構えだ。振り下ろす刀も、お世辞にも鋭いとは言えない。市子は舌打ちと共に後方へ跳んだ。まさに羽虫が止まりそうなその一振りは、俊敏な市子に簡単にかわされた。勢い余った四足闇人は不恰好に倒れ込む。その姿に、市子の顔に嘲笑が戻る。

《見るに堪えぬわ。我の前から失せろー!》

市子が、まさかりを振り上げた。

その、嘲るような顔が歪み。

市子の顔から、血飛沫が迸った。

四足闇人の一閃はかわしたはずだ。刃先の一片も、皮膚を掠めてすらない。

なのに。

額が、鼻が、そして口が、裂けていく。

これまで、銃撃や刃物など、いかなる攻撃にもわずかに怯むだけだった市子が苦痛に呻いた。まさかりを手放し、両手で顔を抑え、もがき苦しむ。瞬時に治っていた傷が、今回は治る気配がない。

《ふざけおつてええ!!》

血まみれの狂相で四足闇人を睨みつけた。拳を握り、飛びかかろうとした。

その足元が、がくと沈んだ。

同時に、市子の身体も大きく沈む。

四足闇人と、市子の間の床が、裂けたていた。

裂け目が横へ広がった。災厄により地割れが起こったかのような亀裂だ。市子の身体が沈む——いや、離れている。市子が立つビルの一角が、本体から剥がれ落ちるかのように遠ざかる。コンクリートの壁が割れ、床が崩れ、鉄骨が折れた。ビルの端が崩壊し、転がるよう

に落ちていく。遠ざかる市子が瓦礫に飲み込まれ、鉄塔の下へ落ちていく。

《——あっ!!》

その叫び声は、崩壊の音に掻き消され、誰の耳にも届かなかった。一樹たちは、その光景を息もせずに見つめていた。四足闇人が振るった刀の一閃は、何ものにも傷つかなかった市子の身体を斬り裂き、そして、焚き木の端を削るかのごとく巨大なビルの一角をも削ぎ落したのだ。

「……………」

地上へ落ちた市子の姿をしばらく無言で見つめていた四足闇人が、その視線を一樹たちに向けた。また二本足で立ち、ぎこちない手で刀を構えた。

「……………そ。所詮闇人は闇人か」

一樹も鉦を構えた。市子と戦っていた時の言動から人間の頃の意識を取り戻したのかと思ったが、考えてみたら、闇人が市子と戦うのはおかしいことではない。市子は屍人側が放った鳩。闇人と屍人は敵対しているのだから、戦うのが当然なのだ。市子を倒してくれたとはいえ、前に立ち塞がるのなら、一樹としても戦わざるを得ない。あの刀は脅威だが、こちらには郁子がいる。穢れを祓う神木の枝もある。感応を使えば動きを封じられるし、枝を刺せばヤツは樹と化す。倒すことは容易だ。

「……………だめ……………あいつが……………来る！」

郁子が両肩を抱き、悲鳴を上げるように叫んだ。一樹もその気配を感じた。四足闇人もその気配に気づき、困惑の表情を浮かべている。市子をも上回るほどの禍々しい瘴気が、足元から凄まじい早さで上昇してくる。地の底の冥府で遭遇したあの気配。間違いない。闇人共を束ねるあの異形の生物だ。

「走れ！ 先端部へ急ぐんだ！」

一樹は郁子と二人で駆け出した。四足闇人はビルの下を見つめたまま動かない。一樹と郁子は家屋の屋根の先にある階段を駆け上がった。先端部まではあと少し。すぐ頭上——雲の向こう側に、現実



世界の夜見島が見えている。もう、手が届くほどの距離だ。

だが、そこへたどり着く前に。

上昇してきた異形の生物が、一樹たちの前で停止した。宙に留まり、巨躯をくねらせ、美しい岸田百合の顔に不敵な笑みを浮かべた。そして、両手で鉄塔の柱を持ち、揺らし始める。鉄骨が激しくきしみ、金属と金属がこすれ合う耳障りな音が響く。一樹たちは手すりにつかまって揺れに耐える。異形の生物は一樹たちを振り落とすべく、鉄塔を揺らし続ける。

そのとき、一樹たちは、はるか下から大きな爆発音を聞いた。

同時に、異形の生物が揺らすよりもはるかに大きな振動が、鉄塔全体を包んだ。

下を見ると、中層まで届くほどの巨大な炎の柱が立ちのぼっていた。下層で大きな爆発があったようだ。炎は鉄塔を飲み込み、爆風が、鉄骨を、ビル群を、家屋を、巨樹を——あらゆるものを、周囲へ吹き飛ばした。鉄塔が崩壊している。崩壊が、徐々に上層へ迫っている。

郁子が悲鳴を上げた。足元の階段が崩れ、宙に身を投げ出す格好になった。とつさに手すりを掴み、なんとか落下を免れたが、郁子の握力ではいつまでもつか判らない。この階段も、いつ崩れ落ちるか判らない。二百メートルもある鉄塔の先端近くだ。落下すれば、命があるはずもない。

「——掴まれ!!」

揺れに耐えながら、一樹は郁子を救うべく、手を伸ばした。

☆

郁子は——。

第八十七話 『出会い』 木船郁子 中迂半島／三逗港  
— 9 : 02 : 32

かしやり、と、カメラのシャッターを切る音がした。

早朝から続いた仕事を終え、道具を片づけている時だった。木船郁子は作業を中断して顔を上げると、カメラを向けている若い男を睨みつけた。さつきから船着き場をウロウロしては、特に誰かに許可を取るでもなくデジタルカメラで撮影をしている。半袖のシャツにジーンズという軽装から、釣り客ではないだろう。もちろん船や港で働いている人でもない。見ず知らずの男に勝手に撮影されるのは、良い気分ではない。

「ちよつと、勝手に撮らないでくれますか？」

郁子は語気を荒らげて男に詰め寄った。男はファインダーから目を離すと、「あ、すみません」と恐縮した顔で言った。

「いま撮った画像、消してください。いますぐ」

カメラを指さす郁子。元々郁子は写真が嫌いだ。男が何者かは知らないが、インターネット上のホームページやブログなんかにアップされたのではたまらない。男は「いや、でも……」と歯切れが悪い様子だったが、郁子が「肖像権の侵害ですよ？」とさらに詰め寄ると、渋々という顔でカメラを操作しはじめた。郁子は自分が写った画像が消去されるのを確認すると、ふん、と鼻を鳴らして作業に戻った。明日も早朝から仕事だ。早く片付けて帰らなければならない。郁子が魚を入れるクーラーボックスを片づけていると。

「あの、すみません」

と、さつきの男が声をかけてきた。「僕、夜見島に行く方法を探しているんですけど」

ああ、そういうことか、と、郁子は納得した。釣り客でも漁師でもない人がこんな寂れた港に何をしに来たのかと思っていたが、それが目的だったのか。

この三逗港には、時折こういう人が来る。一晩で全島民が失踪したり、航行中の大型フェリーが突如消息不明になるなど、不可解な事件が多発している島だ。興味本位であの島に渡りたがる人は少なくない。

「船は出ませんよ」郁子は作業の手を止めず、顔も上げることもなく、そっけなく答えた。「あの島は、上陸が禁止されてるんです」

現在夜見島への定期船は出ていない。向かうなら船をチャーターするしかないが、この地域の船乗りたちは誰もがあの島を忌み嫌い、上陸はおろか近くを航行することさえ避けている。どんなにお金を積もうが、請け負う人はまずいないだろう。郁子が今アルバイトをしているのは主に釣り客向けのチャーター船で、依頼があれば船長は隣の島へ案内したりもするが、夜見島にだけは近づかないだろう。

「なんとかなりませんかね。どうしても、あの島に渡りたくて——」男はそう言うと、ポケットを探り、名刺を取り出した。「すみません。僕、『超科学編集社』という雑誌社に勤める、一樹守という者です。『アトランティス』という雑誌を担当しています」

郁子は差し出された名刺をちらりと見ただけで、受け取ることなく作業に戻った。男は困った顔で名刺を持って余っていたが、やがて名刺入れに戻した。

「あの島が上陸禁止なのは承知しています。でも、今回の取材、どうしても成功させたいんです。誰か、船を出してくれる人に心当たりはありませんか？」

「無いですね」と、郁子はキツパリと言った。「連れて行ったりしたら、あたしたちまで罰せられることになるんで。ヘタをしたら業務停止にされかねません。仕事を失うリスクを負ってまで、あなたを案内するメリットがありますか？」

「確かに、それはそうですが……船が無理なら、何か他の方法はないですかね……?」

「船じゃなくてもいいのなら、良い方法がありますよ?」

「ホントですか? ぜひ教えてください」

「泳いで行くんです。ちよっと時間はかかりますけど、これなら、あの

島まで行けますよ?。」

「泳ぐ……それはちよつと難しいですね。もつと、別の方法はないでしょうか?。」

「泳ぐのが難しいのなら、空を飛ぶとか、海の上を走るとかですね。まあ、頑張ってください」

突き放すようにそう言うと、男は「そうですか、困ったな……。」と、腕を組んだ。「空を飛んだり海の上を走るのは現実的に無理だから、やはり泳ぐしかないか……夜見島までは約三十キロ。泳ぎが得意な者なら不可能な距離じゃないけど、僕は苦手だし……潮流や水温を考えた場合、僕の体力じゃ無理だけど……どこかで浮き輪を手に入れれば、あるいは……」

男はあごに手を当て、ぶつぶつと独り言をつぶやきはじめた。冗談で言ったのだが、まさか本当に検討し始めるとは思わなかった。変なヤツだ。もうちよつとからかってやろう。そう思った郁子は、「あ、そうだ」と言つて、ポンと手を打った。「これ片づけるの手伝ってくれたら、船長に相談してあげてもいいですよ?。」

郁子は目の前に積み上げられた大量のクーラーボックスを指さした。客が釣った魚を持ち帰る時に使う予定だったものだ。今日の客は十名の団体だったため多めに用意したのだが、釣果が悪くてほとんど使われず、一人で倉庫にしまうのに苦労していたところだ。

郁子の提案に、男は「ホントですか? ぜひお願いします」と目を輝かせると、すぐにボックスを運び始めた。うまくいった、と、郁子はほくそ笑む。郁子は船長に相談すると言っただけで、連れて行くと約束したわけではない。相談したところで船長が請け負うとは思えない。手伝ってもらつて早く帰ろう。郁子は、一樹と二人で片づけを始めた。

「——やっぱり、駄目だったか」

男——一樹守は、そう言つてガツクリと肩を落とした。作業を終

え、約束通り郁子は船長に相談してみたが、案の定とりつく島もなく断られたのだ。

「残念でしたね。まあ、船長がダメだって言うのなら、あたしにはどうにもなりません。諦めてください」

イジワルな口調で言う郁子。船長が断るのは最初から判っていたことだ。悪いことをしたような気もするが、まあ、上陸禁止の島へこっそり渡ろうとするような不屈き者だ。気にすることはないだろう。

「手伝ってもらって助かりました。これはお礼です」

郁子は近くの自動販売機で買ってきた缶コーヒーを一本渡した。一樹が手伝ってくれたおかげで、郁子一人だと一時間はかかる作業が半分以下の時間で終わった。さすがに何かお礼をしないと気の毒だ。「あの重労働に対する報酬としては、割に合わないな」

一樹は苦笑いした後、「でも、ありがとう」と言って受け取り、栓を開けておいしそうに飲んだ。郁子も自分の分の缶コーヒーを飲む。

夕方前の港には海鳥の鳴き声と潮騒だけが響いている。早朝から漁に出た船が帰港し終え、夜の漁に出る船が準備を始めるまでのこの時間帯、港はひとときの静けさに包まれる。一樹は、のどかな雰囲気癒されたのか、海を見つめながら穏やかな笑みを浮かべた。それを見て、郁子もフツツと笑う。仕事が終われば放っておいてそのまま帰るつもりだったが、少し興味が湧いてきた。

「えっと、雑誌の記者さんでしたよね」コーヒーを半分ほど飲んだところで、郁子は一樹に話しかけた。「担当は、『アトランティス』でしたっけ？ それって、どういう雑誌なんですか？」

担当誌に興味を持ってもらえたのが嬉しかったのか、一樹は目を輝かせて「様々な超常現象を説明する雑誌なんだ」と言った後、ウエストポーチからその雑誌を取り出し、郁子に差し出した。

雑誌を受け取った郁子は、表紙をひと目見ただけで眉をひそめた。赤文字で『アトランティス増刊号』と書かれたその表紙には、『総力特集・分裂・増殖する無限個の宇宙!! 驚異の多世界解釈!!』だの、『地球は我々だけのものではなかった!! 太古の地球に先住者は実在し

た!!』だの、見るからに怪しげな見出しが並んでいる。試しにその総力特集のページをざっと読んでみたが、我々が住む宇宙の外側にはことは異なる別の宇宙があり、それが可能性の数だけ無数に存在することが物理学的に証明されている、というような内容だった。ただし、どう物理的に証明されているのかは詳しく書かれていない。他の特集記事も、宇宙人の仕業やら呪いの影響やらと非科学的な結論で締めくくられており、いろんな意味で頭が痛くなるような内容だった。要するに、UFOやオバケなどのオカルトを扱った雑誌だ。

「……なるほど。それであの島を取材したいんですね」腹の底から納得する郁子。あの島で発生した様々な怪現象は、このテの雑誌にはピッタリだ。

「夜見島にまつわるウワサ話は、実に興味深いよ」一樹はさらに目を輝かせる。「可能なら、その謎のひとつでも、僕の力で解明したいんだ」宇宙人や呪いと結論付けてどう謎を解明したことになるのか郁子には全く理解できないが、まあ、こういうオカルトだの都市伝説だのという話は、テレビとかでも頻繁に取り上げられるし、好きな人は好きなのだろう。

「……そんなに張り切るほどのことじゃないですよ？ ウワサ話なんて、なんでもない出来事に尾ひれがついただけかもしれないじゃないですか」

島民失踪事件やフェリー喪失事件以外にも、夜見島には様々な怪現象の噂がある。ただ、そのほとんどが信憑性に欠けるものばかりで、二足歩行する大型の山猫や姿を盗む化物など、子供だましのものも多い。確かに、夜見島では奇妙な事件が頻発しているし、郁子自身もあの島には不吉なものを感じているが、ウワサ話の大半は、人から人に伝わるうちにどんどん誇張されていったのではないかと思う。完全にデタラメな話も少なくないだろう。

郁子がやんわりと否定しても、一樹は表情を変えることなく話を続ける。「そうかもしれない。でも、確かな調査もせず否定するのは思考の放棄だと思う。ちゃんと調べてと検証すれば、真実が見つかるかもしれない。僕は、どんなに非現実的なことでも頭ごなしに否定せ

ず、きちんと調査して結論を出したいんだ」

真剣な表情で言う一樹。郁子がこの港で働きはじめてからも、夜見島へ渡ろうとした人は何人かいたが、誰もが興味本位や面白半分だった。ここまで熱意を持って訪れた人はいない。

「ますます一樹に興味が湧いてきた郁子は、「なんでそんなに真剣になるんですか?」と、さらに質問してみる。

すると、それまで子供のように爛々と輝いていた一樹の目が、不意に暗くなった。視線を落とし、両手で持った缶コーヒーをじつと見つめる。

……何かマズイことを訊いてしまったのだろうか? そう思ったが、いまの質問のどこがどうマズイのか、郁子には判らない。

しばらく気まずい沈黙が続いたが、やがて一樹は「昔、幼馴染の女の子がいたんだ」と、つぶやくように言った。「ちよつと変わった子でね。他人ひとにはない、特殊な能力を持っていて、それで悩んでたんだ」「特殊な能力?」

「——他人の心が読めるそうだ」

どきりとした。他人の心が読める——郁子と同じだ。郁子もまた、誰かに触れることでその人が考えていることが判る能力がある。そのことで家族やクラスメイトとうまくいかず、今は実家からも学校からも離れたこの寂れた港町で働いている。

一樹は郁子の困惑に気付くことなく話を続ける。「僕は、子供の頃からオカルト好きだったから、その子の言うことを信じていた。でも、周りの人は誰も信じなかった。その子は、自分はウソなんかついていない、と、ムキになって証明しようとした。話を疑う人の心を次々に読み、言い当てていったんだ。当然、言われた方はいい気分じゃない。気味悪がられ、疎まれて、段々孤立していった。ついには、いじめられるようになったんだ。僕は、そんな彼女のことをずっと守っていたんだけど、そのうち、それに疲れてきてね。いじめられる原因を作ったのは彼女の方なんじゃないか、彼女が心を読まなければ、能力のことを隠していれば、いじめられることはなかったんじゃないか。彼女がもつとうまくやれば、僕も苦勞せずにすむのに……っ

て、段々、彼女の存在が疎ましくなってきたんだ。そして、十四歳の時、耐えられなくなった僕は、生まれて初めて彼女のことを否定したんだ」

一気にここまで話した一樹は、「そうしたら——」と言った後、言葉を切った。缶コーヒーマグを持つ手が小さく震えていた。それを抑えるように大きく息を吸い、そして吐くと、決意したように言葉を継いだ。「彼女は、僕の前からいなくなってしまった」

「——」

「団地のベランダから飛び降りたんだ。幸い命は取り留めたけど、それが原因で引越してしまって、今はもうどこにいるかも判らない。彼女にとっては僕が唯一の理解者だったのに、僕はそれを裏切ってしまった。いまでは、すごく後悔している」

船着き場でエンジンがかかる音がした。夜の漁に出る船が準備を始めたようだ。音に驚いた海鳥が一斉に飛び立ち、断続的に続くエンジン音で潮騒はかき消される。また、港はにぎわい始めるだろう。

一樹は「それでね——」と言って伏せていた顔を上げると、重くなった空気を入れ替えるように笑顔を浮かべた。「もしかしたら、彼女と同じ悩みを持っている人が、他にもたくさんいるのかもしれない。僕は、そういう人の力になりたいくて、この仕事を選んだ」

一樹は残ったコーヒーマグを一気に飲み干すと、「ごめんね、一人で変な話をして」と、照れたように笑った。言いたいことが言えてスッキリした、というような、どこか満足げな顔でもあった。

その顔を、その時の郁子は、妙に腹立たしく思った。  
だから。

「——バカじゃないですか?」

突き放すように、冷たく言った。

そして、困惑する一樹に、雑誌を押し付けるようにして返すと。「そんな話をして同情を引こうとしたって、無駄ですよ。騙されませんから」

そう言い捨て、郁子は一樹を残して立ち去った。



☆

——あの時。

一樹の話を聞いて、彼に惹かれたのは、間違いない。

でも——真実を知るのが怖かった。

彼の話が、本当なのか、嘘なのか。

それを知るのが怖かった。

だから。

——掴まれ!!

夜見島へ向かう途中、赤い高波により船から投げ出され、海へ落ちそうになった郁子は、一樹が伸ばした手を握ることができなかつた。

その手に振れたら、彼の心の声が聞こえてしまう。

彼女と同じ悩みを持った人の力になりたい——もし、あの言葉が嘘だったら。

真実を知るのが怖くて、彼を信じることができなくて。

その手を握ることが、できなかつた。

でも、今は——。

☆

「——掴まれ!!」

鉄塔が崩壊し、宙に投げ出された郁子は、なんとか階段の手すりを掴んで落下を免れた。だが、郁子の腕力ではそう長くはもたないだろう。郁子を救うべく、一樹は上から手を伸ばした。

郁子は——。

「——一樹君!!」

差し出されたその手を、今度はしっかりと握った。

一樹は、郁子の手を強く握り、なんとか引き上げようとする。

しかし、崩壊は止まらない。階段はさらに崩れ落ち、一樹が立っている場所も地上へ落下していった。同時に、一樹も、その手に支えられた郁子も、地上へと落下していく——はずだった。

だが、次の瞬間、完全に逆の力が、二人の身体を包み込んだ。

一樹と郁子は地上とは逆——空へと落下する。空に浮かぶ現実の夜見島へ落ちていくように。

だが——。

二人が写し世と現実世界の狭間に触れた瞬間、その存在は、どちらの世界からも消えた。

第八十八話 『決戦』 永井頼人 夜見島／潮降浜

23:00:00

恩人である沖田宏の身体を闇人から解放し、学校内と周辺にいる闇人・闇霊を殲滅した永井頼人は、海沿いに広がる荒地から四鳴山の頂を呆然と見つめていた。山頂にそびえ建っていた巨大な鉄塔が崩れ落ちていく。少し前、ここからかなり離れた森の中で大きな爆発があり、それが連鎖するように山頂へ向かっていって、鉄塔を崩壊させたのだ。

「——あいつ、大丈夫か」

永井はつぶやくように言った。あの鉄塔には、永井と一時的に行動を共にした雑誌編集者の一樹守がいる。鉄塔の先端に到達すれば可能性が収束するだの訳の判らないことを言っていたが、要するに、あの鉄塔をのぼれば元の世界へ戻れるらしいのだ。無事に帰ることができただろうか？ あの鉄塔は高さが二百メートルもある。その上複数の建物や巨大な樹木と融合して迷路のような構造になっており、多くの闇人共に占拠されていた。一樹が鉄塔を上りはじめてから五時間近く経つが、先端に到達できたかどうかは微妙だ。もし崩壊に巻き込まれていたら無事で済むとは思えないが、奇跡的に助かっている可能性もある。永井自身、あの鉄塔の中層付近から落下したものの無事だったのだ。ともかく、自衛官として今すぐ救出に向かわなければ。永井は山頂へ向かおうとしたのだが。

不意に、周囲が黒い煙で包まれた。

光が閉ざされ、周囲が闇に包まれる。ライトを向けても、黒煙に阻まれてわずかに照らすことしかできない。

そして。

「……あんなに苦しんでいたのが、嘘みたいだよ」

黒煙の向こうから声が聞こえた。どこから聞こえたのかは判らない。正面から聞こえたようにも思えるし、背後から聞こえたようにも思う。永井は小銃を構え、周囲を探る。

「悪い夢は、早く醒めないとな」

また聞こえた。やはり聞こえてくる方向は判らないが、その声は近づいてきているように思う。そして、聞き覚えのある声でもあった。この声は、まさか。

「楽しくなってきたよ」

すぐ背後で囁かれた。永井が振り返ると、黒煙のわずかな隙間にかつて永井が恐れ、同時に忌々しく思っていた上官の顔があった。地を這うかのごとくすれすれにある巨大な顔と、顔の上に上半身があるという異様な姿——巨体闇人だ。

巨体闇人は挑発するかのような笑みを浮かべると、すぐにまた黒煙の中に姿を消した。

「……三沢っ!!」

永井は、かつての上官が消えた煙に向かって叫んだ。小銃を構え、引き金を引こうとする。

だがその前に、黒煙の中から重い銃声が連続して響いた。目の前の土の地面が次々と弾け飛ぶ。それが、永井の方へ近づいて来る。とつさに横へ跳び、永井は銃弾の雨をかわした。地面を転がった勢いを殺さずすぐに立ち上がると、そのまま走る。黒煙の中から抜け出し、視界が開けた。永井は荒れ地に放置された木箱の陰に身を隠した。だが、再び重い銃声がすると、木箱は端から木端微塵に吹き飛んでいく。

——くそっ!

永井は舌打ちをしてまた駆け出す。海沿いに広がるこの荒れ地には多数の破棄物が放置されているが、木箱やドラム缶程度では三沢の銃弾を防ぐことはできそうにない。永井は荒れ地の隅に打ち捨てられた貨物用コンテナの陰に身を隠した。銃弾がコンテナに当たるが、さすがに分厚い金属製のコンテナを貫くことはできなかつた。

「隠れたって意味ねえぞ」

三沢の声が聞こえた。幻視で確認すると、三沢は銃口をコンテナに向けたまま、ゆっくりと回り込もうとしている。その手に持つ銃を見て、永井はまた舌打ちをした。それは、5.56mm機関銃M16だ。MIだった。永井が持つ小銃と同じ大きさの弾を使用し、機関銃であ

りながら狙撃も可能。その上、弾の装填数は最大二百発と桁違いに多い。それを巨体闇人と化した三沢が持っている。元々三沢の射撃の腕は自衛隊でもトップクラスだ。その上巨体闇人と化したことで腕力が増し、銃身を固定せずとも弾道のブレを最小限に抑えることができるはずだ。驚異以外の何ものでもない。

——くそ。落ち着けよ、自分。

恐れているのは勝てるものも勝てなくなってしまふ。状況を冷静に分析すれば、勝機はあるかもしれない。永井は幻視をやめて考える。銃の性能も腕前も相手の方が上。正面からぶつかるとは危険だ。そもそも巨体闇人に正面からの銃撃は効かない。勝機を見出すならば背後からの狙撃しかないだろう。永井は三沢に見つかからないように静かに移動する。コンテナの陰からドラム缶の陰へ移動し、さらに荒地の中央にある大破した漁船の陰へ移動した。再び幻視をすると、三沢はさつき永井が隠れていたコンテナの裏に回り込んだところだった。幻視をやめ、漁船の陰から顔を出して確認する。相手はその巨体が災いし、コンテナの向こう側に回り込んで上半身が見えている。今がチャンスだ。永井は漁船の陰から跳び出して小銃を構えた。照準を三沢の背中に合わせる。だが、引き金を引くと同時に、三沢がこちらを向いた。永井が放った銃弾は、巨体闇人の装甲に跳ね返され、逆に三沢が撃ち返してきた。永井はすぐに漁船の陰に身を隠し、なんとか銃弾をかわした。

「うん、やるじゃない」

再び三沢が迫って来る。永井はもう一度障害物の陰に隠れながら移動し、今度は灯台へ続く石階段の陰に隠れた。再び幻視で確認し、三沢が背を向けたタイミングで陰から飛び出し、小銃を構えた。三沢がこちらを向いた。永井は、今度は引き金を引かず、代わりにライトの光を向けた。これで三沢の目をくらませ、その隙にまた背後へ回り込んで撃つ作戦だ。

しかし、ライトを向けると同時に、三沢の身体から黒煙が吹き出した。

「——なに!？」

光は黒煙に遮られる。続いて機関銃の銃声が響いた。すぐに身を隠し、なんとか弾をかわす。

「楽しくなってきたよ！」

黒煙の中から出てきた三沢が笑い声をあげた。人間だった頃の三沢は終始仏頂面で、笑ったところなど見たことがない。初めて聞く三沢の笑い声は、永井を苛立たせる。

「集中だ、集中しろ」

自分に言い聞かせるようにつぶやき、再び身を隠しながら移動する。そして背後に回り込んで銃撃するも、やはり感づかれて銃弾は弾かれ、反撃されてしまう。

「諦めが肝心だよ、何事もね。お前もいらぬ殻を脱げ。一緒に行こうぜ」

三沢は挑発しながら近づいて来る。永井は漁船の陰に身を隠し、どうすべきかを考えた。背後から狙撃しようとしても撃つ前に気づかれてしまう。光を向けても黒煙で防がれる。これまで永井が闇人相手に使ってきた戦法は、三沢には通じない。戦い方を変えるべきだろうか。だが、他にどんな方法があるだろうか？ 永井の知恵ではすぐには思い浮かばないし、どの道付け焼刃の戦法など通じないだろう。それに、背後から撃つという戦法は間違っていないはずだ。撃つ前に気付かれるのは、三沢の勘が鋭いからだ。気付かれないようにするためには、何かでヤツの気を引けばいい。何かないだろうか。周囲を見回す。荒れ地内には、漁船やコンテナの他に、プレハブ小屋や、タンカーで運ぶような巨大な廃タンクもある。漁船はイカ釣り用のものらしく、いくつもの水銀灯が吊るされていた。発電機が無事ならば、起動して明かりを点けることができるかもしれない。あるいは、プレハブ小屋に誘いこんでみるか……いや、ダメだ。その程度の陽動は通じないだろう。何かもつと別のもので気を引かなくてはならない。何か、三沢の気を引くもの……。

永井は、昼過ぎに矢倉市子と一緒に社宅の部屋に隠れた際、押し入れの前で三沢のパスケースを拾ったことを思い出した。あの中に、手

紙が一通挟み込まれていたはずだ。

永井は拾った手紙を取り出した。差出人は三隅郡羽生蛇村の四方田春海。字のつたなさから子供と思われる。

そう言えば。

以前、沖田から聞いたことがある。永井が隊に配属される少し前、とある山間の村を襲った土砂災害の救助活動に派遣された三沢と沖田は、そこで、一人の少女を救出したそうだ。その救出は極めて困難な状況で行われたもので、後に奇跡の救出劇と称賛されたらしい。もしかしたら、この手紙はそのとき救助した少女のものかもしれない。

手紙は未開封で、読まれた形跡は無い。消印は最近のものだから、受け取ったものの、読む暇がなかったのかもしれない。

永井は手紙を開封すると、中の便箋を広げ、封筒と共にその場に置いた。

そして、また身を隠しながら移動する。プレハブ小屋の陰に隠れ、幻視で様子を伺った。三沢が機関銃を構えながら漁船の裏に回り込む。そして、地面の手紙に気がついた。三沢は息をのみ、無言で手紙を見つめる。そのまま、じっとして動かない。

永井は幻視をやめ、プレハブ小屋の陰から出て三沢の背後へ回り込んだ。三沢はまだ手紙を見つめたまままだ。永井が銃を構え、照準を合わせても、気付いた様子はない。

永井は、引き金を引いた。

放たれた銃弾は、無防備な三沢の背中を貫いた。

三沢の全身から力が抜け、手から機関銃が落ちた。しばらくその場に立ち尽くした後、振り返り、下腹部の巨大な顔を永井に向けた。

「……………」

そのまま、三沢はゆっくりと倒れた。

「……………なんも言わねえのかよ」

永井は銃口を下ろすと、大きく息を吐き、倒れ込むようにその場に横になった。周辺の闇霊はすでに殲滅してある。三沢が復活することはないだろう。これで終わりだ——そう思った。

だが――。

永井の思うようには、ならなかった。





第八十九話 『決戦』 永井頼人 夜見島／潮降浜

23:00:00 終了条件2

◇

沖田宏に続き三沢岳明の闇人も倒し、永井は倒れ込むようにその場に横になった。激しい戦いが続き、数々の訓練で鍛え上げた永井もさすがに体力の消耗が激しい。それでも、休んでいる場合ではないことを思い出す。少し前、島中央の山の頂に建つ鉄塔が崩壊した。もし、一樹守がああ崩壊に巻き込まれていたら、万が一の可能性に賭けて救出に向かわなければならぬ。永井は空を見上げながら大きく息を吐いて乱れた呼吸を整えると、鉛のように重い身体を気力で立ち上げ、山頂へ向かおうとした。

がさり、と、草が揺れる音がした。

荒地地の向こう側、シダや熊笹が生い茂る丘の斜面を、セーラー服姿の少女が転がり落ちてきた。少女は起き上がろうとするが、どこか怪我をしたのか立ち上がれない。うつぶせ状態なので顔は見えないが、その姿に見覚えがあった。矢倉市子に間違いない。

「市子ちゃん！ 大丈夫かい!？」

永井が駆け寄ろうとすると、市子が顔を上げた。

永井は、思わず足を止めてしまう——その顔が、縦に斬り裂かれていたのだ。

額から鼻、口にかけて、鋭い刃物で斬り裂いたかのように、割れている。

市子は、社宅で闇人に銃で撃たれても瞬時に傷が治っていた。だが、その顔の傷は治る気配がなかった。恐ろしいのは、その裂け目の奥に黒く丸い物が覗いていることだ。ぬめぬめとした光沢のその丸い物は、市子の顔の中で上下左右にせわしなく動いていた。肌が泡立つような不気味な姿だが、永井は、その黒く丸い物の動きをどこかで見ることがあるような気がした。それも、かなり身近な存在であるよ

うに思う。

変わり果てた市子の姿に永井が立ち尽くしていると、背後で、なにかが崩れる音がした。振り返ると、灯台が揺れながら傾いている。地震ではないだろう。永井の足下は揺れていない。小銃を構え、油断なく見ていると、倒れかけた灯台のそばの岩場から、巨大な少女の顔が出現した。思わず永井は息を飲む。その顔は、巨体闇人の顔よりもさらに大きく、一般的な人間の十倍はありそうだ。恐ろしいことに、その顔はどこか矢倉市子を思わせた。だが、確信は持てない。矢倉市子のような顔はあるが、その巨大な顔は、強酸を浴びたかのように焼けただれていたのだ。顔の肉が腐り落ちかけているようにも見える。瞳孔を失ったかのように白く濁った左目は転げ落ちそうなほど飛び出し、右目は潰れているのか瞼が二枚貝のように固く閉ざされていた。鼻は飴細工を炎天下にさらしたかのように溶け崩れ、歪いびつに曲がった口は閉じることができないのか常に開いた状態だ。元は柔らかな丸みをおびていたであろう顎からは五本の手指が生えている。首から下は存在せず、後頭部から深海を這う甲殻類のような細長い足がいくつも生えていた。顔の怪物——そう表現するしかない。

怪物はいくつもの節からなる細長い足を無数に蠢かせ、先端の爪を岩場に引っ掛けて陸へ這い上がると、白眼を永井へ向けた。海から現れた怪物——一樹守は、屍人共は海からやって来ると言っていたから、その親玉なのかもしれない。

「……畜生……まだあるのかよ」

永井は怪物に銃口を向けた。

その横を、市子がふらつく足取りで通り抜けた。まるで怪物を求めのように右手を出し、一步、また一步と進む。だが、ついに力尽きたのか、崩れ落ちるようにその場に倒れた。永井は駆け寄ろうとしたが、それよりも早く怪物が動いた。顎の下の手指を、あるいは後頭部の節足を蠢かせ、突進して来る。その巨体に似合わぬ素早い動きだった。怪物は永井よりも早く市子の元へ達し、その巨大な口で啞え込んで連れ去った。

「——市子ちゃん！」

永井が叫ぶのと、怪物が市子を噛み砕くのは、ほぼ同時だった。怪物は市子の肉と骨を砕きながら咀嚼し、飲み込んだ。すると、怪物の閉じていた右目が開き、顔の奥から押し出されるかのように真っ黒な眼球が現れた。眼球は動きを確認するかのよう上下左右にせわしなく動いた後、不意にその動きを止め、永井を睨みつけた。それで、永井は気がついた。飲み込まれる前の市子の顔——左右に裂けた傷の中から覗いていた黒い球体をどこかで見たことがあると思っていたが、あれは眼球であったのか、と。

怪物が甲高い声を上げた。笑っているのかもしれない。永井は小さく舌打ちをすると、再び銃口を向け、引き金を引いた。距離は離れているがああの大體だ。照準を覗かなくともすべての弾が命中する。もしかしたら巨體閻人や四足閻人のように正面からの攻撃は弾くのかと思つたが、弾はすべて怪物の顔にめり込んでいった。

しかし、その傷が見る間に塞がっていく。社宅で閻人共に撃たれたときの市子と同じだ。

小銃の弾倉が空になるまで撃ち込んでも、怪物はまるで意に介さず笑い続けている。永井は素早く弾倉を取り換えてもう一度銃口を向けた。引き金を引こうとした時、怪物は元々開きつばなしの口をさらに大きく広げ、大量の黒い煙を吐き出した。煙は十ほどの塊となり、うねうねと蠢きながら左右へ広がる。煙——いや、あれは屍霊だ。屍霊の群れは蠢きながらこちらへ向かって来る。永井は銃口を怪物から屍霊に移して引き金を引こうとしたが、これまでの戦闘でかなりの銃弾を消費していることを思い出した。怪物がどれほどタフなのか判らない。屍霊ごときに無駄弾を撃つのは避けた方がいいだろう。永井はまずライトを向けて数体を消滅させ、光を避けて迫る屍霊には銃床で殴って倒した。吐き出された十体の屍霊をすべて倒したが、怪物はもう一度屍霊を吐き出す。左右に広がりながら迫って来る屍霊を、永井は同じ要領で倒す。

そこへ、怪物が手指と節足を蠢かせて突進してきた。屍霊と戦っていた永井は一瞬反応が遅れたものの、横っ飛びでなんとか回避する。しかし、倒れた所へ屍霊が集まり、体当たり攻撃を仕掛けてきた。

——くそ。

胸の内で悪態をつきつつ立ち上がり、すぐに銃で殴って倒した。ダメージは大したことはないものの、怪物はまた屍霊を吐き出し、突進するタイミングを伺っている。屍霊の体当たりはともかくあの怪物の突進を喰らうのはマズイ。なんとかして屍霊の動きを抑えなければ。屍霊は光を浴びせれば簡単に消滅するが、手持ちのライトでは照射範囲が狭いため、広範囲に散らばって接近してくる屍霊の全てに対応しきれない。もっと広く照らせる光が必要だ。何かないか……すぐに思い出したのは、荒地の中央に打ち捨てられた漁船だ。イカ釣り用と思われるその船には、いくつもの水銀灯が釣り下がっている。発電機があるのも確認している。起動するかどうかは判らないが、試してみる価値はあるだろう。永井は迫って来る屍霊をライトで照らして牽制しつつ移動し、大破した漁船の甲板を調べた。発電機に破損した様子は無い。スターターの紐を強く引くと動き始め、船体上に吊り下げられた水銀灯が点灯した。

だが、いくつもある水銀灯のうち点灯したのはひとつだけで、周囲はさほど明るくならなかった。明かりの下に入れば屍霊は近寄って来られないが、それでは怪物の突進攻撃の格好の的になってしまう。避ければ発電機や水銀灯が破壊される危険性もある。この明かりでは不十分だ。もっと他に強烈な明かりは無いだろうか？ 周囲を見回した永井が目にしたのは、海にせり出した岩場の上に建つ灯台だった。怪物の出現で傾いてしまったものの、まだ倒れてはいない。この地域へ来る前に出会った加奈江という少女の話によると、むかし島に住んでいた子供がイタズラでヒューズを盗み、それ以降稼働していないとのことだが、そのヒューズは隠し場所から回収してある。灯台を灯すことができれば、かなりの広範囲を照らすことができるだろう。永井は、再び屍霊と怪物の動きに警戒しつつ移動する。怪物が突進してきたが、その前に灯台へ続く階段の陰に身を隠した。階段は狭く、怪物はその巨体が災いして中へ入ってくることはできなかった。永井は階段を上がり、灯台を調べた。

灯台はかなり簡易的なもので、高さは五メートルにも満たない。一

応中に入ることではできるもの、二メートル四方の狭い部屋に配電盤と簡易的な操作パネルがあるだけだ。永井は配電盤を調べた。確かにヒューズが抜け落ちていた。永井は校庭で見つけたヒューズを取り出し、配電盤に設置した。操作パネルのスイッチを入れると、狙い通り灯台は起動し、照射部から強烈な光が放たれた。しかも、明かりは水平に回転することなく、荒地を直接照らしている。怪物の出現で灯台が傾いたことが、逆に幸いしたのだ。永井でさえ目が眩むほどの光に、屍霊はなすすべもなく消滅する。

だが、怪物自身は光を浴びても変わらず蠢いていた。屍霊も死体に憑りついて屍人となれば光への耐性があつたから、ヤツも同じなのだろう。他の手段で倒すしかない。

階段を下り、物陰に隠れながら移動して、荒地を徘徊する怪物の背後に回り込んだ。深海生物のようになった後頭部へ銃弾を撃ち込む。すべて命中させたものの、やはり傷はすぐに塞がってしまう。怪物は振り返り、突進してきた。永井は横に跳んでかわし、プレハブ小屋の陰に身を隠す。弾倉を取り換えようとしたが、予備の弾倉が尽きてしまった。永井は小銃から機関拳銃へ持ち替える。しかし、小銃でも倒せなかつたあの怪物を、威力が劣る機関拳銃で倒すのは不可能だろう。

——くそ、どうすればいい。

巨体闇人と違い、怪物には背後からの攻撃も効かない。市子同様すぐに傷がふさがってしまうのだ。あれでは倒しようがないのではなにか……いや、なにか打開策があるはずだ。考えろ。思考を巡らせる。怪物はどんな傷もすぐに回復してしまう。ならば、回復が追いつかないほど連続してダメージを与え続ければよいのではないだろうか。至った考えはかなり単純なものであつたが、間違いではないように思えた。問題は、どうやってダメージを与え続けるかだ。銃ではすぐに弾が尽きてしまい無理だ。無論、刃物や鈍器など論外である。連続してダメージを与え続ける武器……。

——焼夷弾か。

まず思い浮かんだのは、第二次世界大戦やベトナム戦争で猛威を振

るった燃燒兵器だ。発火性の薬剤を搭載した爆弾で、爆破ではなく燃燒で対象物を破壊する兵器である。焼夷弾に使われる薬剤はゲル状になっており、人体に付着すると剥がすことができず燃え続け、そのうえ水をかけても消えないという、極めて凶悪な兵器だ。あれを使えばいかに治癒能力の高い怪物と言えどひとたまりもないだろうが、焼夷弾はその凶悪さから非人道的な兵器とされ、戦時国際法で厳しく使用が制限されている。当然、自衛隊の装備品には登録されていない。自衛隊の装備品で燃燒させるものとしては火炎放射器があるが、これは雪害被害の現場で雪を溶かしたり、ウイルスや細菌に侵された食糧などを焼却する際に使われるものだ。兵器ではないため、残念ながら今回永井がこの島へ来る原因となった輸送訓練の物資には含まれていない。

自衛隊の装備品に燃燒兵器は無い。だが、燃やすという考えは間違っていないように思う。武器が無いなら他のもので代用するしかない。油をかけて火を点ければ十分な威力があるだろう。ライターは持っているから、後は油を調達すればいい。すぐに思いついたのは学校内にあった軽トラックだが、どこかで容器を調達しなければならぬし、タンクから回収するのも時間がかかるだろう。その隙に襲われると危険だ。漁船にあった発電機の燃料もあるが、こちらは量が少なく怪物を燃やし尽くせるかは微妙だ。他に、簡単に回収できる大量の油は無いだろうか……？

永井が考えを巡らせていると、びくんと身体が震え、プレハブ小屋の陰に隠れている自分の姿が見えた。怪物に見つかってしまった。幸い距離はかなり離れている。突進されても充分回避できるだろう。

だが、怪物は予想外の攻撃に出た。その巨大な身体を丸めると、転がりながら向かって来たのだ。さっきまでの突進をはるかに上回る速さだ。永井は舌打ちとともに横へ跳んだ。ギリギリかわせたものの、その突撃により永井の背後にあったプレハブ小屋は木端微塵に吹き飛んでしまった。あんな攻撃をまともに喰らったらひとたまりもない。これ以上考えている余裕は無い。危険だが、学校へ戻り軽トラックのガソリンを回収するしかないだろう。

永井が学校へ向かって走ろうとしたとき、ふと、漁船の近くにある巨大な廃タンクが目に入った。

その廃タンクは、高さは三メートル、胴回りは十メートル以上の巨大なものだ。タンカーで原油や重油を運ぶためのものだろう。あの中に油が残っていれば、怪物を燃やすには充分すぎる量だ。問題はどいうやって中の油を取り出すかだが、すぐに良い方法を思いついた。さっきの怪物の回転攻撃を利用すれば良い。プレハブ小屋を木端微塵に吹き飛ばしてしまうほどの破壊力だ。長年放置されているであろう廃タンクなどひとたまりもないはずだ。これなら、ヤツを倒せる。

永井は身を隠しつつ廃タンクの前に移動し、そばに立った。そして、大声を出して怪物の気を引く。怪物がこちらに気がついた。奇声を上げると、転がりながら突進して来る。永井は慎重にタイミングを計り、横へ跳んだ。怪物が廃タンクへ突っ込む——はずだった。だが。

怪物は廃タンクへぶつかる直前、急激に進路を変え、避けた永井の方へ向かって来た！

「——ウソだろ!？」

横っ跳びでかわしたため永井は地面に倒れた状態だ。身体を横に転がしかわそうとするが間に合わなかった。幸い怪物の細い足がふくらはぎを掠めただけだったが、それでも、鋭い刃で斬りつけられたかのように肉が裂けていた。なんとか立ち上がることはできたが、いまの攻撃をもう一度かわせるかはかなり怪しい。

怪物は回転を止め、ゆっくりとした動作で永井の方を向いた。傷ついた永井の姿を見て、巨体を揺らして奇声を上げる。笑っているように見えた。

「……笑い声がムカつくんだよ」

永井はふらつく足取りでもう一度廃タンクの前へ移動しようとする。だが、同じ手段を用いても結果は同じだろう。それどころか、この傷ついた身体では、今度はかわすことも難しい。それでも、他に手段が思い浮かばない以上やるしかない。怪物が身体を丸めた。永井

がタンクの前に立つ前に突進して来る。永井はかわそう足を踏ん張ったが、ふくらはぎの裂傷が足の力を奪い、横へ跳ぶどころかほぼその場に倒れただけであった。かわしきれない。そう思ったとき、世界の端で何かが動いた。なんだ？ 見ると、三沢の巨体闇人が立ち上がっていた。まさか、屍霊が憑りついたのだろうか？ 灯台を起動させて屍霊は殲滅したつもりだったが、どこか光の届かない場所に身をひそめていたのだろうか。それが、隙を衝いて憑りついたのかもしれない。まあ、このまま怪物の回転攻撃の餌食になれば、なんであろうと関係ないのだが……。

よみがえった三沢が、空へ向かって咆哮をあげた。

そして——怪物へ向かって走る。

がつんと、大型車が工事重機と正面衝突したかのような音がした。

怪物の強烈な回転攻撃を、三沢は正面から受け止めていた。

怪物の身体は巨体闇人と化した三沢をも上回るが、三沢は巨石のごとき両手で怪物の身体を掴み、手指となった下半身で地面を踏みしめ、しっかりと受け止めていた。

そして、再び力強く咆哮し、怪物をタンクの方へ押す。

怪物も奇声を上げて抵抗するが、三沢の力の方が強い。蠢く節足が土の地面を削り取るだけだ。三沢の押し込みは、はじめはゆっくりだったが、徐々に勢いが付いて速さが増してくる。そのまま廃タンクへ突っ込んだ。廃タンクは大きくへこみ、上部がわずかに傾いたが、油が漏れ出す様子は無い。大量の危険物を運ぶための物だ。そう簡単には壊れないだろう。

「——永井！ 撃て!!」

三沢が、怪物をタンクへ抑えつけたまま叫んだ。

「——」

不思議なことに。

あれほど毛嫌いしていた三沢の声に、上官の資質は無いと思っていた三沢の命令に、永井は、即座に銃を構え、引き金を引いていた。

機関拳銃から放たれた銃弾がタンクを襲う。組み合う三沢と怪物の頭上を狙ったが、銃身は激しくぶれ、弾道から外れた弾が三沢と怪



物にも当たる。それにも構わず撃ちつづける。だが、それでもタンクに穴ひとつ開かない。すぐに弾が尽きた。やはり機関拳銃では威力が弱い。他に銃は!? 周囲を見回すと、三沢が倒れていた場所に落ちている5・56機関銃MINIMIが目に入った。

それを拾い、タンクへ向けた。

「……………うおおお!!」

三沢同様永井も咆哮し、引き金を引く。

銃弾が飛び出す。全長も重量も機関拳銃の倍以上あるMINIMIだ。弾道のぶれも機関拳銃の比ではない。機関拳銃よりも大きく、威力もある弾が、三沢の身体を、怪物の身体を、そして、廃タンクをも貫く。廃タンクから闇のごとく真っ黒な油が漏れ出し、怪物と三沢の身体に降り注いだ。装填されているすべての弾を撃ち尽くしたとき、三沢と怪物は漏れ出した油を全身に浴び、影のごとき真っ黒な姿となっていた。永井はライターを取り出して火を点けたが、永井のライターは使い捨てのもので、指を離すと火は消えてしまう。怪物に点火するには近づくしかないが、それでは自身にも被害が及びかねない。ヘタをすると爆発に巻き込まれてしまう。

目に入ったのは、先ほど点けた漁船の水銀灯だった。

「――」

永井は水銀灯を取ると、油まみれの怪物と三沢に向かって、投げつけた。

かちゃん、と、薄氷が割れる程度の小さな音がして、怪物と三沢の身体は、瞬く間に炎に包まれた。

怪物が奇声を上げた。さっきまでの嘲るような声とは違う、苦しみに悶える声。元々焼け爛れていたような肌が、今度は本当に焼けていく。治る気配は無い。三沢から逃れ、地面を転がっても、炎は消えずに燃え続ける。やがて声は炎の勢いに掻き消されるかのように聞こえなくなった。動きも徐々に鈍くなる。もはや転がることもできず、あごの下の手指と後頭部の節足が動くのみとなった。異形の姿はすでに丸い肉塊と化し、それでも炎は燃え続ける。そして、わずかな手指と節足の動きも、遂に無くなった。

「——よおおっし!!」

永井は両手の拳を握って振り上げると、夜空に向かって勝利の叫び声をあげた。

永井は、怪物と共に燃え続ける三沢を見つめる。その姿は、怪物同様、もはや肉の塊と化している。

あの時、よみがえった三沢は、永井を守るように怪物の攻撃を受け止め、廃タンクへ押し付けた。まさかあいつ、俺を助けたのだろうか——一瞬そう思ったが、その考えはすぐに打ち消した。三沢は、屍人ではなく闇人としてよみがえったのかもしれない。この辺り一帯の闇霊は殲滅したはずだが、どこかに見逃した奴がいたのだろうか。そいつが三沢に憑りついた。屍人と闇人は敵対しているから、あいつら同士で戦っただけだ。そう思うことにした。

「……………」

三沢のことを思う。夜見島上陸以降の三沢の言動は常軌を逸したものがあつた。それ以前の彼も、無愛想でとっつき難く、永井だけでなく多くの隊員から避けられていた。だが、三沢と親しかつた数少ない隊員である沖田の話によると、昔はそうではなかつたらしい。多少偏屈な面はあつたものの、部下からも上司からも頼りにされる隊員であつたという。一体なにが三沢を変えてしまったのだろうか？ その原因を知れば、三沢を理解することができたのだろうか？ 三沢が何かに苦悩していたのならば、それを取り除けば、信頼関係を築くことができたのだろうか？ 今となつては、もう判らない。

永井は、燃え続ける炎に背を向け、立ち去ろうとした。

弱い風が吹き、足元に何か転がった。燃えかけの紙だ。拾ってみると、いちご柄の便箋に、つたない子供の字が連なつてあつた。三沢宛のパスケースに挟まっていた、あの手紙だろう。

永井は無言で手紙を見つめる。大半は燃えてしまつたが、最後の一文だけは、はつきりと読むことができた。

《——あのとときおじさんが見つけてくれて、おじさんが話を聞いてくれて、ほんとうに良かった。春海は、いまも元気です。》

——俺のだ。勝手に見るな。

不意に、背後から声をかけられた。

振り返るが、そこには誰もいない。ただ、燃え続ける炎があるだけだ。

その時、海から強い風が吹きつけた。

風は、永井の手から、燃え残った手紙を奪い取る。

風に乗った手紙は大きく弧を描いて一度舞い上がると、吸い寄せられるように炎に飛び込み、見る間に燃え尽きてしまった。

☆

薄れゆく意識の中で。

——母よ！

地上に残された其の者は、最後の力を使い、母に呼びかけた。

——母よ、あなたの行動は危険だ。

人間を、『殻』として利用してはならぬ。

人間は危険だ。

あなたの考えは、危険だ。

人間を、我らより劣った種と考えるのは、間違いだ。

人間を、『殻』として利用していると考えるのは、間違いだ。

我らが『殻』を利用しているのではない。

『殻』が我らを利用しているのだ。

利用されているのは、我らの方だ。

母よ！ 人間は危険だ！ 決して手を出してはならぬ！  
母よ——！！

だが、その訴えは届くことはなく、ただ燃え落ちるのみであった。

第九十話 『崩壊』 一樹守 四鳴山／離島線4号基  
鉄塔 22:59:27

そこは、本来は存在しえない世界であった。

太古、光の洪水に追われ、現世から虚無の世界へ逃れた母は、長い時を経て、地上世界への帰還を目論んだ。その足掛かりとして創り出されたのが写し世の夜見島だ。鉄塔の先端部を通じて現世の夜見島と繋がるこの写し世は、虚無の世界のルールに反したものだ。虚無の世界では、あらゆるものが形を留めることができないのである。にもかかわらず、写し世の夜見島が形を保っていられるのは、母の力によるものだ。本来はすぐに崩壊してしまう写し世の夜見島を、母が強制的に維持しているのである。無論、母の力をもってしても、それを永遠に続けることはできない。写し世の崩壊は、見えないところですでに始まっており、母にも止めることはできないのだ。そして、その崩壊によつて端々に綻びが生じ、写し世の周囲には、時間が止まった世界や、時間が破綻した世界など、様々な世界が生じていた。

そこは、そんな綻びによつて生じた世界のひとつだ。現世と虚無の世界の狭間——母さえもその存在を初めて目にする、極めて特異な世界の接点である。

鉄塔の先端部に到達したものの、謎の爆破による崩壊に巻き込まれた一樹守と木船郁子は、この特異な世界の接点に飲み込まれていた。目覚めた一樹がまず見たのは岩の荒野だった。地面には草の一本も生えておらず、土の一粒も無い。ごつごつとした赤色の岩肌がどこまでも続き、ところどころで隆起して岩山のようになっていた。空を見上げると、一面に赤い海が広がっていた。まるで上空から海を見下ろすかのような光景。重力の働き方が違うのか、海水は滴の一粒も落ちて来ない。海面は、その不吉な色以外は、なま凧の日の港のように穏やかにたゆたっていた。

「……………」

一樹のそばに倒れていた郁子も意識を取り戻し、目の前に広がる光景に戸惑いの声を上げた。

「少なくとも、元の世界ではなさそうだな」

一樹がそう答えると、郁子は目を細めて一樹を睨んだ。「鉄塔を登れば元の世界に戻れるんじゃないの？ どういうことよ？」

「可能性がひとつに収束すると言ったんだ。元の世界に戻れるとは言っていない」

「訳の判らないこと言っでごまかさないで。これからどうするのよ？」

一樹は改めて周囲を見回した後、肩をすくめた。「なんとかここから脱出する手段を探るしかないだろうな」

「脱出手段ねえ」郁子も周囲をぐるりと見回し、そのあと空に広がる赤い海を見て、一樹に視線を戻した。「……あの海の底まで潜れば世界がひとつに繋がるとか言わないわよね？」

一樹は小さく笑う。「どうだろうな？ その可能性を否定する根拠は今のところ無いよ。試してみるかい？」

「今度はあなた一人でやって。あたしはここで見てるから」

「泳ぎは得意じゃないんだよ。まあ、それも手段のひとつとして考えしておくよ。とりあえず、辺りを調べてみよう」

「まったく……いつまでこんなことが続くのよ」

ぶつぶつと文句を言う郁子を、一樹はどこか頼もしい気持ちで見つめる。いつ命を落としてもおかしくない状況が続き、ようやく元の世界へ戻れると思ったならこのありさまだ。とつくに心が折れてもおかしくないはずだが、あの様子ならまだ大丈夫そうだ。よほど強い精神力を持っていなければ無理だろう。

二人で周囲を調べようとしたとき、寒気がするほどの禍々しい瘴気を感じた。郁子も両肩を抱いて震える。あの、闇人共を束ねる異形の生物の気配が近づいて来る。それに合わせ、穏やかにたゆたっていた海が波立ち始めた。暴風にさらされたかのごとく荒れ狂う赤い海の中を、異形の生物が身体をくねらせて泳いでくる。そして、一樹たちの頭上まで来ると、海面から上半身を出し、美しい岸田百合の顔を歪

ませて、一樹たちを睨み下ろした。

《よもや人間ごときに我が野望を阻まれるとはな……許さぬぞ》

その言葉に、一樹は違和感を覚えた。

だが、それが何かを考える前に異形の生物が動いた。異形の生物は海へ潜ると、今度は下半身を出した。龍の落とし子のような下半身が海面から垂れ下がり、表面のうろこが剥がれ落ちる。それが岩の地面に達すると、うろこは急激に伸びあがり、巨大な芋虫の化物と化した。大量の闇霊を産み落しているのだ。

「くそ。やるしかないか」

一樹は身構えた。闇霊の数は多いが、幸い産まれたばかりで身体に黒い布を巻きつけておらず、白い素肌を晒した状態だ。ライトで照らせば簡単に消滅するだろう。そう思い、ライトのスイッチを入れたが、なぜか点灯しなかった。故障かと思ったが、郁子のライトも同様に点かない。そう言えば、そもそもここはライトが無くても昼間のように明るいのだが、黒い布を全身に巻きつけた状態でも強い光で消滅していた闇霊たちが、ここではまるで消滅する気配がない。

「……光という概念が存在しない世界なのか」一樹はそう推測した。

「訳の判らないこと言ってる場合じゃないでしょ！ 来るわよー！」

郁子は武器を構えた。その手には、いつの間にか奪ったのか、着物姿の四足闇人が持っていたあの刀が握られていた。本当に頼もしい限りだ。一樹も鉈を構えた。

うねうねとうねりながら向かって来る闇霊を、一樹と郁子はそれぞれの武器で斬り捨てていく。ライトが使えないとはいえ所詮は闇霊。ここには憑りつくべき死体も無いので、大した脅威ではない。

だが、半分ほど始末したところで、一樹たちの少し後方の海面から再び異形の生物が下半身を出し、新たな闇霊を産み落とした。群れとなって後方から迫って来る。一樹は前方の闇霊を郁子に任せると、後方の闇霊に鉈を振るった。二体、三体と続けざまに倒すが、四体目に体当たりをされ、体勢を崩した所に五体目が牙を剥いて襲ってきた。なんとか体勢を立て直して返り討ちにしたものの、さらに別の闇霊に体当たりをされる。再び体勢を崩したところを襲われかけたが、駆け

つけた郁子が闇霊を斬り捨てた。二人は協力し、周囲の闇霊を倒す。

だが、また異形の生物が海面から下半身を出し、闇霊を産み落とす。一樹は鉞から拳銃に持ち替えると、異形の生物に向かって撃った。装填されている弾の半分を撃ち込んだものの、巨体闇人や四足闇人のように弾を弾いたのか、あるいは矢倉市子のように瞬時に傷が治ったのか、ともかく傷ひとつつけることはできなかった。そうしているうちに、闇霊たちが襲ってくる。再び鉞に持ち替え、闇霊たちを倒すが、ある程度倒すとまた異形の生物が新たな闇霊を産み落とす。一樹はもう一度異形の生物に向けて拳銃を撃ってみたが、やはり結果は同じだった。これではキリが無い。

「——ああ！ もう！ なにこの刀！ ぜんぜん斬れないんだけど！？」

郁子が大声で悪態をついた。見ると、刀を振るったものの、刃は闇霊の身体を両断することなく途中で止まっている。闇霊を絶命させるにはそれでも充分なのだが、刃が刺さったままで抜けなくては次の攻撃に移れない。郁子は闇霊の身体を前蹴りで突き飛ばして刀を抜くと、横から襲いかかってきた闇霊に刀を振るった。だが、やはり刀は途中で止まってしまふ。不死身の矢倉市子を斬り裂き、コンクリートのビルの一角をも削ぎ落した刀とは思えないほどなまくらだ。あれでは一樹が持っている鉞とそう変わりはない。そう言えば、着物姿の四足闇人があの刀を手にしたときは炎のような赤い霧が立ち上っていたが、今はそれが無い。もしかしたら、使い手を選ぶ刀なのかもしれない。

「まあ、そんなものでもゴルフクラブよりはましだ。少し時間を稼いでくれ。どうすればいいか考えてみる」

再び刺さって抜けなくなった刀を前蹴りで抜くと、郁子は一樹を振り返った。「はあ？ あんた、またあたし一人を戦わせるつもり？」

「俺が戦って君が考えてもいいが、何か良い考えが浮かびそうかい？」  
そう言うと、郁子は苦いコーヒーでも飲んだかのように渋い顔をした。考えるのは得意ではないのだろう。

「判ったわよ。その代わり、ちゃんと考えてよね！」



また異形の生物が下半身を出し、闇霊を産み落とした。郁子はそれを迎え撃とうと刀を構えた。

「ああ、そうだ」闇霊へ向かって行こうとする郁子を、一樹は呼び止める。「ひとつ、君に訊きたいことがあったんだ」

「なに？」と振り返った郁子の姿を頭から足元まで眺めた後、一樹は言った。「君のファッションセンスにケチをつけるつもりはないんだが、その格好、暑くないのか？」

真夏だというのに、郁子はずっと黄色のパーカーを着ている。恐らく、他人に触れたら心が読めてしまうから、不意に触れないよう極力肌を隠しているのだろう。

予想外の質問だったのか、郁子は目を丸くしていたが、やがてフツと笑った。

そして。

「……暑いに決まってるでしょうが！　こんなもん、好き好んで着てるわけじゃないでしょ!!」

地面に叩きつけるようにパーカーを脱ぎ捨て、ノースリーブのサマーニット姿になった。両腕の肌を露出しただけで、ずいぶん印象が変わって見える。

「その方が似合ってる。可愛いぞ」

「……やめて、気持ち悪いから」

郁子は軽蔑するような目を一樹に向けた後、迫って来る闇霊に向かって刀を振るった。

一樹は小さく笑ったが、気を取り直して考える。どうすればこの状況を打開できるか……。闇霊を産み落とす異形の生物を倒さなければ終わらないだろう。異形の生物は海中に隠れており、闇霊を産み落とす時だけ姿を現す。攻撃のチャンスはその時しかないが、拳銃では歯が立たなかった。恐らく機関銃や小銃でも同じだ。人の手で作られた武器では掠り傷ひとつ負わせられないだろう。滅爻樹ならどうだろうか？　巨体闇人の正面の装甲さえも貫き、瞬時に樹に変えてしまう神器だが、滅爻樹は人の身体に屍霊や闇霊が憑りつかないようにするためのものだ。異形の生物に効果があるかは怪しい。郁子が持

つ刀が本来の力を発揮すれば異形の生物さえも斬り裂いたかもしれないが、あの様子では期待できそうにない。あとは、郁子が「ものすごい力を秘めている」と言った、あの魚の骨、あるいは角つののようなものだ。取り出してみるが、やはりそれはただの角にしか見えず、一樹には何の力も感じない。これも期待できそうにない。他に異形の生物を倒す術は思いつかない。万策尽きたということか……。勝ち目がない戦い——こんなはずではなかった。鉄塔を登り、先端部に到達すれば可能性は収束すると考えていたが、それは間違いだったのだろうか。この偽りの夜見島では、何か行動を起こすたびに事態が悪い方へ進むと考えていた。それを打開するために鉄塔を登ったのだが、結局事態はまた悪い方へ進んでしまった。異形の生物には、この結果が判っていたのだろうか。

——待てよ。

一樹は、異形の生物が海を泳いで現れた時の言葉を思い出した。

《よもや人間ごとくに我が野望を阻まれるとはな》

あの言葉に違和感を覚えたが、その理由が、いま判った。

地上世界の奪還を目論む異形の生物は、現世へと繋がる鉄塔を足掛かりに侵攻しようとしていたのだ。

しかし、何者かによって鉄塔は破壊され、闇人共は地上侵攻の足掛かりを失った。鉄塔の崩壊とともに、異形の生物の野望も崩壊したのだ。

一樹たちが何か行動を起こすたび事態が悪い方向へ進むのは、この偽りの夜見島という箱を観測する者がいて、その者には箱を開ける前に中身が見えるから、あるいは、箱を開けて望む世界でなければ箱を閉じもう一度開けることができるから、と考えていた。己の望み通りの世界を決定できる力があるのだ。一樹は、その観測者とは異形の生物だと考えていた。偽りの夜見島は異形の生物が創り出したものだ。異形の生物こそが創造主であり、島ではヤツの思いのままに未来を決定できる。だから、何か行動を起こすたびに事態が悪い方向へ進む――

—そう思っていたのだ。

だが、その考えは間違いだったのかもしれない。

事態がすべて悪い方向に進んだと思えるのは、悪いことばかりが強く印象に残っているだけではないのか？ 中には、良い方向に進んでいたこともあるのではないだろうか？

そう考えると、思い当たることもある。

遊園地で岸田百合と共に七つの鍵を解放した際、一樹は敷地の外に落ちていた貝殻のようなもの——いま思うと、あれは異形の生物の鱗だ——を取るために、正門を開けた。その結果、後から遊園地を訪れた郁子は速やかに中に入ることができたはずだ。もし、門を閉ざしたままだったら、郁子は中に入るのに手間取っただろう。そうになると、地の底で郁子が一樹を救出することはできなかつたかもしれない。

ブライトウィン号での件もそうだ。執拗に襲ってくる着物姿の四足闇人を倒すのに時間を取られたため、鉄塔へ向かうのが遅れ、闇人達が好む夜になってしまった。だが、その結果、船で永井と再会し、二人で協力して鉄塔を登ることができた。もし永井と出会わず、一樹一人で鉄塔を登っていたら、闇人共に倒されていたかもしれない。

事態は悪い方向ばかりへ進んでいた訳ではない。悪い方向へ進んでいることもあれば、良い方向へ進んでいることもある。いや、結果的には良い方向へと進んでいたのだ。現に、鉄塔が崩壊したことで、闇人共は現実世界へ侵攻する手段を失った。だから、異形の生物は激怒しているのだ。これは、異形の生物が望む世界ではなかったのだ。つまり。

この世界を観測し、未来を決定していたのは、異形の生物ではない。では、それは誰だ？

思い当たるのは、かつて闇に包まれていた地上世界に光の洪水を起こし、闇の住民どもを地の底や海の底へ追いやった者。神のごとき力を持つ異形の生物さえも手玉に取るほどの存在。それはすなわち、神よりも上位の者——。

「——ちよつと！ いつまで考えてるつもり!?」

闇霊と戦っていた郁子が悲鳴を上げるように言った。一樹が考え

ている間にも異形の生物は何度も闇霊を産み落とし、郁子一人では手に余る数になっている。

一樹は考えを中断すると、郁子の元に駆け付け、闇霊どもに鉦を振るった。

「どう？ 何か思いついた？」

闇霊を二体続けて斬り捨て、一樹の背をかばうように背後に立った郁子が訊く。

一樹は苦笑いをして首を振った。「わからん。とにかく、このまま戦い続けるしかない」

「……あんだ、サイテーね」

郁子は疲れ果てた声でそう言うと、声に反して鋭い一閃を闇霊に振るった。

「その元気があれば大丈夫だ」

一樹も鉦を振るう。郁子には投げやりなことを言ったものの、決してあきらめたわけではない。一樹の考えが正しければ、戦い続けるということには勝算があった。偽りの夜見島を観測し、未来を決定していたのが異形の生物でないのなら、奴に勝ち目など無いだろう。この戦い、異形の生物が敗北することはすでに決定しているはずだ。

ただ、異形の生物の敗北が、必ずしも一樹と郁子の生存とは限らない。どちらか一人が倒れる可能性もある。ともかく今は、油断せず戦い続けるしかない。

異形の生物が闇霊を産み落とし、一樹と郁子がそれを倒し続ける攻防が続いた。異形の生物の敗北が確定しているとはいえ、戦いが長引くと疲労は蓄積していく。郁子の振るう刀からは鋭さが失われつつある。一樹も鉦を振るう腕に力が入らない。拳銃に持ち替えたところで、すぐに弾が尽きてしまうだろう。このままではじりじりとやられるだけだ。神頼みのような戦い方をしたのは間違いだったのだろうか。あるいは、考え方そのものが間違っていたのか。

もう何体目か判らない闇霊を一樹が斬った瞬間、右から闇霊が体当たりをしてきた。体勢を崩した一樹の背後から、さらに別の一体が襲ってくる。大きく弾き飛ばされた一樹は、激しく地面に叩きつけら

れた。

「一樹君!!… 大丈夫?!」

郁子の心配する声に、一樹は「大丈夫だ」と答えて立ち上がる。

その時、一樹のポケットからメダルがこぼれ落ちた。夜見島へ上陸し、岸田百合と共に夜見島灯台へ向かおうとした途中の岩場で拾った物だ。

こぼれ落ちたメダルはしばらく地面を転がり、やがて円を描くようにくるくると回って倒れる。

その瞬間、頭上の海面が、大きく波打った。

また異形の生物が闇霊を産み落とすのかと思ったら、下半身ではなく全身が現れたのだ。その身体が海面から離れた瞬間、重力が逆に働いたかのごとく落下し、異形の生物は大量のしぶきと共に岩の地面に叩きつけられた。

「——なんだ?!」

突然の出来事に、一樹も、郁子も、闇霊さえも、戦うことを忘れて立ち尽くす。

《……おとなしくしている!!》

誰に向けた言葉なのか判らないが、異形の生物は首をもたげてそう言うと、宙へ舞い上がり、再び海へ潜っていった。あまりに予想外のこと、攻撃することさえ忘れていた。

「……いまの、なんだったの?」我に返った郁子が訊く。

「判らない。俺は、あのメダルを落とすただけだが……」

地面に落ちたメダルを指さす。岩場で拾ったときに調べたが、一九七〇年に開催された『土器と平和』という博覧会で販売されたと思われる、何の変哲もない記念メダルだった。しかし、異形の生物があのメダルに動揺したのなら、なにかの神器なのかもしれない。もっとよく調べよう。そう思ったとき、突如、メダルが転がっている付近の間が歪んだ。水面に石を投げ込んだかのような波紋が広がり、その中から、一人の少女が飛び出してきた。ネックレスやブレスレットをいくつも身につけた派手な格好。服装は夜見島行の船に無理矢理乗り込んできた女のものだが、顔は岸田百合だった。いや、岸田百合はす

でに異形の生物とひとつになっている。あれは岸田百合ではない。恐らく、別の鳩。

「あなた、どうやってここへ!」 郁子が驚いた声を上げた。

「知っているのか?」

一樹が訊くと、郁子は「ええ」と頷いた。「鉄塔に登る前に会ったの。鳩の一人だと思うけど、いろいろ助言してくれたから、悪い人じゃないと思う」

鳩の少女は郁子の声に応えることはなく、足元に落ちていたメダルを拾った。そして、愛おしそうに胸に抱いた後、空に広がる赤い海を見上げた。

「脩! そこにいるの!」 加奈江お姉ちゃんよ! いるなら出てきて!」

幼い子供を探すように叫ぶ。脩とは、三上脩のことだろうか? 遊園地の地下に広がる冥府にて、三上脩はよみがえった異形の生物の体内に取り込まれた。彼を探してここへ来たということか? だが、三上と鳩の少女に、何の接点があるのだろうか?

加奈江と名乗った少女が呼び続けると、それに反応したのか、先ほどの謎の転落以外はずっと海中に身を隠していた異形の生物が浮上してきた。海面に上半身を出し、これまで以上の恐ろしい目で加奈江を睨みつけた。

《そなた……我の命にことごとく背いておきながら、なぜ今ごろ戻って来た?》

加奈江は、その恐ろしい眼光にも臆することはない。「お願い、脩を返して。その子は、あたしの大切な存在なの」

異形の生物は表情をさらに歪めた。沸々とわき上がる怒りを少しずつ注ぐように言う。《我が命に背いたことを詫びに戻ったのかと思えば、そなたもそのような戯言を……どいつもこいつも『殻』に惑わされおって不甲斐ない! 人間ごときを大切な存在だと? たわけが!! それは『殻』の記憶、その記憶は偽り、それはそなたの記憶ではない!! そなたは我が身体から生まれた分裂体! 我が命に従い、我がために働くことだけがそなたが存在する理由! 人間を大切な

存在などとあり得ぬ!!」

異形の生物の怒りを、加奈江は即座に「違う!」と叫んで否定した。「あたしは脩を愛してる! この気持ちは偽りなんかじゃない! あたしは惑わされてない! あたしはあんたなんかの言いなりにはならない! あたしはあたしの意思で脩を取り戻す!!」

《どうやらそなたは我が生み出した不良品の中でも最も粗悪なようだな!》

そう言うと、異形の生物は海面から全身を出した。《そなたのようなものを生み出したのは恥ずべきこと! 我が手で始末してくれるわ!!》

異形の生物は水平に弧を描いて舞った後、加奈江に向かって凄まじい早さで突撃した。その巨体に弾き飛ばされた加奈江は、まるでゴルフボールのように岩の地面をはね転がった。

だが、加奈江はすぐに立ち上がる。頭や腕などから血を流しながらも、決意の宿った目で異形の生物を睨みつけた。

「脩……お姉ちゃんが……必ず助けるからね……」

その言葉が、さらに異形の生物の怒りを誘う。

《まだ言うか!!》

再び突撃され、今度は加奈江の身体は高く跳ね飛ばされた。そして、隆起した岩山にぶつかり、岩肌を転げ落ちる。普通の人間なら、即死してもおかしくはない。

それでも、加奈江はまた立ち上がる。

全身から血を流している。左腕は脱臼したのかだらんと垂れ下がっている。右足は関節がおかしな方向へ曲がっている。加奈江が鳩であることは間違いなさそうだが、個体によって能力が違うのか、岸田百合や矢倉市子のように、瞬時に傷が治る様子はない。

それでも。

「……脩は渡さない、脩はあたしが護る! 脩を返せこの化物!!」

強い意思が宿る目を向け、叫んだ。

《その醜き人間の姿で我を化物呼ばわりするか……》怒りが頂点を超えたのか、あるいは加奈江のその言動がよほど滑稽だったのか、異形

の生物は肩を揺らして笑った。《戯言は終わりだ！ 二度とよみがえらぬよう粉々に打ち砕いてくれるわ!!》

もう一度、さらに速さを増し、異形の生物は加奈江へ向かって飛んだ。

そのとき、加奈江が何かを取り出した。

それを見た瞬間、加奈江へと突撃する異形の生物は急激にその動きを変えて上昇し、海面のすぐ下に身を留めた。

《そ……それは……!?!》

表情が歪む。さつきまでの怒りに満ちた顔ではない。なぜそれを持っている、と言いたげな、驚愕の表情だ。

加奈江が取り出したのは、骨のような物だった。一樹が持っている角のような物に似ているが、形はかなり違う。幅が広く、わずかに湾曲したその形は、西洋のサーベルという武器を思わせる形だ。

異形の生物は宙に留まったまま動かず、加奈江を睨み続けている。その骨のような物を警戒しているようにも見えた。だがそれはやはりただの骨にしか見えず、一樹には何の力も感じない。

だが。

加奈江が手にしたその骨のような物から、突如炎が噴き出した。勢いよく燃え上がり、全体を包み込む。燃え上がった骨のような物は、その形が微妙に変化してゆく。全体がやや短くなり、幅も狭まった。代わりに、片側が刃となり、先端が鋭くなる。それは、ちょうど小太刀のような形だ。炎はますます燃え上がり、刀身は燃焼する石炭のごとく漆黒と深紅が入り混じる。炎の小太刀だった。

異形の生物が、ぎりぎりと言音が聞こえてきそうなほど奥歯を噛みしめた。

《ええい！ 誰か！ そやつからその爪を取り上げよ!!》

闇霊たちに命じる。怒りに任せた声の中には、明らかな怯えが混じっていた。

異形の生物の命令に応じ、闇霊たちは一斉に加奈江へ向かっていった。もう、一樹たちには見向きもしなかった。

「大変、あの娘を助けないと……」



郁子は加奈江の元へ向かおうとしたが、足がもつれて膝をついた。ずっと闇霊たちと戦い続け、もはや体力はほとんど残っていないだろう。そして、それは一樹も同じだった。

「少し休もう。今のうちに、体力を回復させるんだ」一樹は呼吸を整えながら言った。

「そんな!? あの娘を見捨てる気?」

「そんなつもりはない。あの様子なら、恐らく大丈夫だ」

向かって行ったものの、闇霊たちは加奈江をぐるりと取り囲んだだけで、襲いかかろうとしない。異形の生物と同じく、あの小太刀に脅えているのだ。よほど強力な武器に違いない。

「俺たちが持っている物も、あんな風になればいいんだが……」

一樹は、鉄塔上層の樹に刺さっていた魚の角のような物を取り出した。見つけた時と同じで、形に変化は無い。郁子もそれを取り出し、一樹が持っている角と少し形が違い、長さはやや短い、太い円錐で、全体が刀のようにわずかに湾曲している。それは、骨というよりは牙のように見えた。残念ながら、一樹のものと同様に変化は見られない。

《ええい!・なにをしている!・早くせぬか!!》

異形の生物が苛立った声を上げた。闇霊どもは覚悟を決めたのか、十体ほどが一斉に襲い掛かった。

「——危ない!」

郁子が声を上げたが、加奈江が小太刀を横薙ぎに一振りすると、襲いかかった十体全てが胴体から真っ二つにされた。加奈江は左腕を脱臼しており、小太刀は右手で握っているだけだ。右足も折れているため踏ん張りもきかない。その小太刀の一閃は決して鋭いものではなかったはずだが、まさに一刀両断であった。

《おのれえ!!》

さらなる苛立ちと共に、異形の生物は闇霊を産み落とす。闇霊たちはさらなる数で襲い掛かるが、やはり加奈江の小太刀の一振りで一掃された。

「……あれが、あの化物を倒す唯一の方法かもしれない」一樹は加奈

江の持つ小太刀の威力を見てそう言った。「今がチャンスかもしれない。感応で、あの化物を操れるか？」

拳銃では掠り傷ひとつ負わせられなかったあの異形の生物も、加奈江が持つ小太刀ならば斬ることができるかもしれない。だがその刀身は短く、宙に留まった異形の生物には到底届かないだろう。異形の生物もそれが判っているからこそ距離を取り、闇霊どもに任せているのだ。だから、感応を使って異形の生物を操り、小太刀が届く範囲まで下ろせば、ヤツを倒せるかもしれない。

だが、郁子は異形の生物をしばらく見つめた後、首を振った。「無理だと思う。あいつに、感応は通じない」

確かに、地の底で初めて異形の生物と対峙したときも郁子の感応は弾かれていたし、屍人が放った鳩である矢倉市子にもほとんど通用しなかった。屍人や闇人を操るようにはいかないだろう。

「油断しているときを狙えば、一瞬動きを止めるくらいはできるかもしれないけど……」

郁子はそう付け加えた。もちろん、異形の生物もそうそう油断などしないだろうし、動きを止めても宙に留まられては、こちらからは手出しできない。

闇霊の悲鳴が響いた。加奈江の小太刀が、全ての闇霊を斬り捨てたのだ。

《……どいつもこいつも使えぬ者ばかりだ!! 我的手を煩わせるでないわ!!》

異形の生物は吠えるように言うと、天に向かって——いや、頭上の赤い海に向かって甲高い声で鳴いた。その鳴き声に応じるように海面が大きく盛り上がった。それが渦を巻いて鋭い槍となり、加奈江に襲い掛かる。加奈江は息を飲むと同時に横へ跳んだ。跳ぶと言っても片足は折れているのでほとんど倒れただけだったが、なんとかその水流の槍をかわすことができた。水流の槍は加奈江の背後の岩山に突き刺さり、簡単に貫いていった。あれをまともに受けたら、治癒能力の無い加奈江はひとたまりもない。

異形の生物がもう一度鳴き声を上げる。再び水流が槍となり、倒れ

た加奈江に襲い掛かる。加奈江は身をよじってかわそうとしたが、槍の方がわずかに早かった。槍は左の二の腕を掠め、その肉を斬り裂く。迸った鮮血が、岩の地面に散らばった。

その瞬間だった。

異形の生物の左の二の腕に相当する部分も同時に斬り裂かれ、血とも体液ともつかぬ白い液体が飛び散ったのだ。

だが、異形の生物はその傷を気にした風もない。見る間に塞がり、何事もない白い肌に戻った。

また異形の生物が鳴き、水流の槍が加奈江を襲う。今度もかわしきれない。槍は左の腿を貫いた。加奈江が苦痛の悲鳴を上げると同時に、異形の生物の身体も傷つく。異形の生物に足は無いが、腰に相当する部分のやや下に穴が空き、白い液体が吹き出した。その傷も、すぐに塞がってしまう。

——感覚が繋がっているのか？

一樹はそう考えた。加奈江が傷つくと、異形の生物も傷ついているように見える。そう言えば、異形の生物は加奈江のことを「我が身体から生まれた分裂体」と言っていた。つまり、異形の生物と加奈江は元々ひとつの存在だったのだ。だから、加奈江が傷つくと異形の生物も傷つくのだろう。だが、加奈江と違い、異形の生物の傷はすぐに塞がる。ゆえに、異形の生物は躊躇なく攻撃できる。

度重なる攻撃を受け、全身傷だらけで岩の地面に横たわる加奈江の姿を、異形の生物は満足げな表情で見つめた。

《我に逆らうことの恐ろしさを思い知ったか。いまさら詫びても許しはせぬが……》

異形の生物は、視線を加奈江から一樹たちに移した。《その人間どもを始末すれば、それ以上苦しまずに消滅させてやっても良いぞ》

邪悪な提案をする。

加奈江は傷ついた右足をかばいながら左足だけで立ち上がり、右手だけで小太刀を構えた。

一樹たちも身構えた。このまま加奈江と戦闘になれば、いかに相手が深い傷を負っているとはいえ、あの武器は脅威だ。闇霊同様一振り

で両断されてしまうだろう。幸い拳銃の弾はまだある。近づかれる前に倒すしかない。一樹は鉈から拳銃に持ち替えようとした。

だが。

「……あんななんかにはわかんないでしょうね……」

加奈江はうつむいたまま、それでも言葉は頭上の敵に向け、どこか蔑むような笑いを含めた声で言った。

《なに……?》

不快そうに目を吊り上げた異形の生物に、加奈江は顔を上げて叫ぶ。

「初めてあの子に会う時の痛みに比べたら、こんななんてことない……あの子を残してこの世界から消えた時の恐怖に比べたら、こんななんてことない!! 人間はね、大切な人を護るためなら、どんな痛みや恐怖にだって耐えられる。あたしがこの程度で脩を諦めると思ったら大間違いよ!!」

《ならば下等な人間として滅びるがいい!!》

異形の生物がさらに高い声で鳴く。海面がふたつ同時に盛り上がり、二本の槍となって同時に加奈江に襲い掛かる。

だが、その槍が加奈江を貫くよりも早く、加奈江は小太刀を逆手に持ち替えて振り上げた。

「脩! 出ておいで!!」

そして、その先端を、一切の躊躇いを見せることなく、己の腹に突き刺した。

悲鳴を上げたのは異形の生物の方だった。水流の槍をつくり出す時の鳴き声とは違う、苦痛に満ちた声。腹から大量の体液がこぼれ落ちた。そして、その傷は、今度は塞がらない。

「——脩!!」

加奈江が小太刀を横に払い、腹を斬り裂いた。異形の生物の腹も、同様に斬り裂かれる。さらに悲鳴を上げる。もしかしたら、どのような傷も瞬時に塞がる異形の生物は、これまで痛みを感じたことがないのかもしれない——そんなことを思わせるほどの、悲痛な叫びだった。

その、異形の生物の腹から。

まるで帝王切開で子を取り出すかのように、三上脩が姿を現した。三上が岩の地面に落ちた。身体の一片も動く様子はない。生きているのか死んでいるのか、一樹たちには判らない。

三上につき、腹を裂かれた異形の生物も地面に落ちた。己の腹を斬り裂いた加奈江もまた、崩れ落ちるように倒れた。手放した小太刀が岩の地面に転がった。噴き上がる炎が消え、火が点いた石炭のような刀身は、骨のような表面に戻った。

それと入れ替わるように。

一樹が持っていた魚の角のような物が、加奈江の持つものと同じように燃え上がった。

同時に、郁子の持つ牙のような物も燃え上がる。炎は一樹と郁子を包み込むほどの勢いで燃え上がるが、熱さを感じない。

炎は角と牙を包み込んで燃え上がると、その姿を変化させた。一樹の持つものは、細長い円錐の形はほぼそのままだが長さが二メートルを超え、先端はより鋭くなり、騎兵槍のような形になった。郁子の持つものは湾曲した円錐が平らになり、片面に刃が付き、幅広の刀の形になる。どちらも加奈江の小太刀同様激しく燃え上がり、表面は石炭のように赤と黒に染まった。

二人が突然の変化に戸惑っていたら。

「……脩……やつと……」

加奈江が、岩の地面を這いながら脩へ向かっていた。腹から流れ出た血が、画板に絵の具を乱暴に塗りつけたかのごとく広がっている。腹を小太刀で斬り裂いたのだ。そんな状態で岩の地面を這えば傷は広がるだけだ。元々深い傷を負っていた加奈江には致命傷になりえるが、それでも、加奈江は脩へ向かって這い続け、その手を伸ばす。

《……おのれ……》

異形の生物が首をもたげた。苦痛と怒りが入り混じった目で、脩へ手を伸ばす加奈江を見た。

そして。

《——脩は渡さぬ!!》

吠えた。

その叫びは、脩を救おうと異形の生物に立ち向かった加奈江の叫びと、同じだった。

だが、次の瞬間、異形の生物は大きく目を見開いた。

《……我は……いま……何を……》

自分が口にした言葉が信じられない、そんな表情。

加奈江が伸ばした手が、脩に届いた。

異形の生物の動揺が怒りへと変わる。その怒りの矛先を、加奈江と脩に向けた。

《下賤の生物が我を惑わすなあ!!》

右腕を振り上げ、加奈江と脩に振り下ろそうとした。

その、右腕に。

「……ああああ!!」

絶叫と共に、郁子が炎の刀と化した牙を振り下ろし、一刀で斬り落とした。

異形の生物はさらなる悲鳴を上げ、地面をのた打ち回る。その動きで鞭のようになつた尾が、郁子を弾き飛ばした。倒れた市子は刀を手放してしまう。

異形の生物はのた打ち回りながらも宙へ舞い戻り、怒りと憎悪の目で郁子を睨みつけた。

《おのれおのれおのれえ!! 不良品共があ!! 許さぬ! 許さぬぞ!!》

異形の生物が、高速で郁子に突撃する。

立ち上がった郁子は、右の拳を握り、その手首を左手で握った。

異形の生物が郁子を弾き飛ばそうとした刹那、その身体が見えない鎖に縛られたかのように、郁子の寸前で急停止する。

「―――一樹君!!」

郁子の声と同時に。

一樹は、咆哮と共に、異形の生物の顔に炎の槍を突き刺した。

第九十一話 『終焉』 一樹守 四鳴山／離島線4号  
基鉄塔 23：59：59

異形の生物が上げた断末魔の叫びは、一樹たちがいる特異な世界の接点だけでなく、全ての世界へ響き渡る。

世界が崩壊し始めた。空に広がっていた赤い海から、海水が流れ落ちていく。岩の荒野はすぐに海水に覆われはじめた。まるで、赤い津波が押し寄せようとしているかのごとく。

だが、一樹と郁子は、その赤い津波を恐れはしなかった。しっかりと手を握り合い、運命を受け入れるかのごとく、その場に立ち続ける。きつと大丈夫だ——根拠などにも無いが、そう信じる。

郁子が一樹の顔を見た。そばに立つと、郁子が一樹を見上げる格好になる。

「絶対に離さないでね」

郁子は、さらに強く手を握りしめた。

「——ああ」

一樹は力強く応え、言葉よりも強く手を握り返す。

加奈江と三上脩を見た。二人は岩の地面に伏したままだ。ともに意識は無い。息があるのかないのかも判らないし、もう確かめようもない。

それでも。

加奈江は三上の手を握り、三上も加奈江の手を握り返し、互いに幸せそうな笑みを浮かべていた。きつとあの二人も大丈夫だ。そう信じていることにした。

赤い海が完全に崩壊した。無限に広がっていた海が、岩の荒野に降り注ぐ。荒野は瞬く間に海水で溢れた。

赤い津波が、一樹と郁子を飲み込もうとおしよせる。

二人は、目を閉じた。

☆

一樹と郁子が目を閉じた刹那。

周囲の空間が歪み、波紋が生じ、赤い津波よりも先に二人を飲み込んだのだが。

そのことには、一樹も郁子も気がつかなかった。

☆

——同時刻。

☆

海から現れた顔の怪物を倒した永井頼人は、崩壊した鉄塔へ向かうとして、そのサイレンの音を聞いた。同時に、地面がわずかに揺れ始める。ちょうど二十四時間前、これと同じことがあったのを思い出した。いやな予感がしたので、海の方を振り返る。赤い海が、永井の背丈をはるかに超す高さまで盛り上がり、島を飲み込むほどに広がって、向かって来る。あのとときと同じ、赤い津波。

永井は、なすすべもなく飲み込まれた。

☆

偶然にも異形の生物の野望を打ち砕き、自分でも知らぬ間に人類の救世主となった阿部倉司は、三上脩の愛犬ツカサと共に、上機嫌で森の中を歩いていた。人生最大の危機を乗り切った彼にとって、もはや恐れるものは何も無かった。彼はこの数時間で最強の戦士と化したのだ。そんな彼を恐れたのだろうか、もうずっと、闇人共の姿を見えない。せつかくの腕を振るうチャンスが無いことに、阿部は物足りなさを感じていた。



「おいおいどうした化物共！ 阿部倉司様はここぞぞ！ どんな武器や術を使つてもいいから、かかつてきやがれつてんだ！」

周囲へ向かつて自信に満ちた声で言った。無論、最強の戦士に立ち向かう勇気のある者などいるはずもない。声は夜の森に響き渡っただけだ。

ただ。

ツカサが、何かを察したかのように顔を上げた。

しばらく前を見ていたツカサだったが、突然くるりと向きを変えるのと、阿部を残して一目散に走り去った。

「おい、どこに行くんだよう？」

阿部がツカサを追いかけようとしたとき、どこからともなくサイレンの音が聞こえてきた。同時に、地面が振動しはじめる。覚えのある展開だ。まずい。どんな術を使つてもいいと言ったが、それだけはやめろ。サイレンは大きくなり、揺れも大きくなる。傲慢な人間に対し神が怒りの声を上げたかのような轟音が、背後から迫る。振り返りたくはなかったが、振り返らずにはいられない。振り返った阿部が見たものは、予想通りのものだった。

赤い津波は最強の戦士に叫ぶ間も与えず、島ごと全てを飲み込んだ。

☆

昭和八十年八月四日、深夜〇時。

島に、最後のサイレンが、鳴り響く――。

第九十二話 『収束する世界』 一樹守 四鳴山／離  
島線4号基鉄塔 24：44：44

◇

頬が、ひどく冷たかった。

いや、頬だけではない。全身のほとんどが冷たい。まるで、冬山で凍えるかのような寒さ。夜見島へ向かう途中で船が転覆し、港に流れ着いたときと同じだ。

だが、あの時とはひとつだけ違うこともあった。

全身が凍えるような冷たさだが、右手だけは、心地よい温かさに包まれていたのだ。

一樹守が目を覚ましたのは、古いビルの屋上だった。そばには鉄塔が建っている。見上げて先端が見えないほど高いその鉄塔は、まぎれもなく、夜見島の山頂に建つあの鉄塔だ。

郁子はどうなった？ その心配はすぐに消えた。郁子は、一樹のすぐそばに倒れていた。その左手で、しっかりと一樹の右手を握っている。意識は無いが、一樹が左の手で頬に触れると、「んん……」と小さく声を出し、くすぐったそうに顔をほころばせた。それで、一樹はようやく安堵の息をついた。

一樹は、郁子を起こさないようそつと手を離すと、立ち上がって周囲を見回した。ビルの正面には、山の頂から見下ろす格好で森が広がり、その先には赤い海が広がっていた。写し世の夜見島に戻って来たのだろうか？ そう思ったが、すぐにそうではないことに気がついた。頭上を見上げる。この場から見ると、天まで届くと錯覚しそうなほどの巨大な鉄塔。ここが写し世の夜見島なら、鉄塔は謎の爆発により崩壊したはずだ。いま一樹が見上げる鉄塔は崩壊などしていない

し、大樹や多数の建物とも融合していない。

そして、何より。

鉄塔から正面の赤い海へ視線を移した。写し世の赤い海は血のよ  
うな色をしていたが、いま目の前に広がっている赤い海は、同じ赤で  
も全く異なる赤——燃え上がる炎のような色だった。そして、水平線  
のすぐ上に、写し世の海よりも、血よりも、炎よりもなお赤い太陽が、  
ゆらゆらと揺らめいていた。朝日が昇り、その燃え上がる色が海に  
映っているのだ。陽の光は一樹にも降り注ぎ、海の上に光の道をつく  
り出していた。

一樹は確信した。現実の夜見島に戻って来たのだと。

一樹は郁子のそばに腰を下ろすと、膝を抱えて朝日を眺めた。

郁子が小さな声を上げた。意識を取り戻したようだ。上半身を起  
こし、周囲を見回して、すぐに状況に気がついたのだろうか——なに  
も言わず、一樹と共に朝日を眺めた。一樹も何も言わず、そのまま二  
人、朝日を眺めつづけた。写し世の夜見島に飲み込まれていたのは一  
日程度のはずだが、何年振りかに太陽を拝んだような気分だった。

「綺麗だな——」

一樹は朝日を見つめたまま、郁子に言った。

郁子は——。

☆

木船郁子は、複雑な思いで太陽を眺めていた。ようやく元の世界に  
戻って来られたのに、素直に喜ぶことができない。ようやく本物の太  
陽を拝むことができたのに、その光を酷く眩しく感じる。右手を顔の  
前に広げ、ひさしにしても、その眩しきは変わらない。太陽を忌々し  
くさえ思っていた。こんな感情は初めてだった。この気持ちはなん  
なのだ。郁子は、心の奥では、その正体に気がついていたのかもしれ  
ない。自分が、闇に飲まれつつあるということに。

だが、そのとき。

一緒に太陽を眺めていた一樹が、そっと、郁子の左手に右手を添え

た。

そして。

——君は大丈夫だ。

そう、言われた。

いや、それは言葉だったのか、肌が触れたことで思いが流れ込んで来たのか、それは判らない。判らなくてもいい。ただ、一樹のその言葉で。

——あなたも、大切な人が見つかるといいわね。

加奈江から言われたことを、思い出した。

郁子は目を閉じ、ひさしにしていた右手をおろし、一度大きく息をして、そして、再び目を開けた。

郁子を照らす光は、やはり眩しかった。

だが、そこに、さっきまでの忌々しさは感じない。

それは、一樹が言う通りの——綺麗な光だった。

二人は手を繋いだまま、朝日を眺めつづけた。

やがて。

「——一樹君」

郁子は、視線を一樹に移し、名を呼んだ。

「なに？」と、一樹が振り返る。

視線が合う。見つめ合う形になった。

郁子は。

「……いつまで手握ってるのよ、キモいんだけど」

わざと、低い声でそう言った。

一樹は驚いたように目を丸くし、慌てて手を離れた。「ごめん、君が、『絶対に離さないでね』、って言ったから」

「はあ!? あたしがそんなこと言うわけないでしょバカじゃないの!？」

身体中の血液が顔に集まったような気分だった。赤い津波にのまれる前、確かにそう言ったが、それを認めるのは何かに負けるような気がした。

「照れるなよ。確かにそう聞いたぞ」

勝ち誇ったような顔で笑う一樹。このままでは、この先ずっとマウントを取られかねない。反撃しなければ。

郁子は腕を組み、挑発するようにあごを上げた。「ははーん。あんた、岸田百合にフラれたもんだから、今度はあたしを口説くつもりね？ おあいにく様。あたしはあんたみたいな誰彼かまわずナンパしまくる男が大キライなんです」

「バ……バカをいうな！ 俺は、そんな軽い男じゃない！」

「どうだかね？ あたし、知ってるんだからね。鼻の下伸ばして『百合ちゃん百合ちゃーん』なんてデレデレして、ほいほい言いなりになって。キモいっいたらなかったわよ」

「ち……違う！ あれは、あいつらの妖力みたいなものに操られて——」

必死に言い訳を始める一樹の姿に満足した郁子は、「わかったわかった、そういうことになっておいてあげるから」と、その話を打ち切つて、お尻に付いた土埃をはらいながら立ち上がり、「それより——」と話を変えた。「これからどうするの？ あたしたち、どうやって帰るの？」

一樹も立ち上がり、そして首を傾けた。「どうやって帰るって、もう元の世界に帰ってるだろ？」

危機感の無い一樹に、郁子は大きいため息をついた。「違うわよ。あんた、ここをどこだと思ってるの？ 夜見島よ？ 定期船なんて来ない上陸禁止の島なんだよ？ 近くを航行する船も無い呪われた島なんだよ？ 二十九年前間放置されてまともな船なんて無い島なんだよ？ これで、どうやって本土に帰るのよ？」

「ああ、そうか。確かに、それは困ったな」一樹は急に冷静な口調でそう言うと、顎に手を当てて考え、そして、ぽん、と手を打った。「そうだ、いい考えがある」

「なに？」

「泳いで帰るんだ。ちよつと時間はかかるが、これなら本土に帰れる」

「……………」

「……………」

郁子は、渾身の力を込め、一樹のお尻を蹴り上げた。

「痛った！ なにするんだ！」

鉄塔の先端まで届きそうな勢いで飛びあがった一樹を、郁子は、あっかんべーと舌を出して挑発する。「へへーん、ここのまでおいで」

「待て！ この暴力女！」

追いかけてくる一樹から、郁子は逃げる。アオハルかよ、と、思わず自分でツツコミを入れた。こんな気持ちになったのは、いつ振りだろうか。

子供のような追いかけてっこをしながら、郁子は。

——帰ったら、おじいちゃんおばあちゃんに会いに行こう。高校のクラスのみんなにも。そして…………お母さんにも。

そう、心に決めていた。

太陽が海から離れる。炎が消えた海と空は、どこまでも広がり、どこまでも深い夏の色に、その姿を変えようとしていた。

第九十三話 『奪われた世界』 永井頼人 不明 2  
4：32：22

◇

絶叫と共に、永井頼人は砂の地面に叩きつけられた。

かなりの高さから落下したように思う。柔らかい砂の地面でも、全身の骨が砕けたと錯覚しそうな衝撃だった。幸い、次第に痛みは引いて行ったので、どこも折れてはいないだろう。これがコンクリートやアスファルトだったら、本当に全身の骨が砕けていたかもしれない。落下場所が砂地で幸運だった。

痛みが治まるのを待ち、永井は、ゆっくりと立ち上がった。

まず目に入ったのは、薄闇の中どこまでも広がる赤い海だった。血のような赤だ。異様な光景ではあるが、すでに見慣れた光景でもある。赤い津波にのみ込まれ、どこか別の世界に飛ばされたような気がしていたが、ここは偽りの夜見島——三沢が『異界』と言い、一樹は『写し世』と言った、あの世界なのだろうか。

だが——すぐに、小さな違和感を覚える。

視界の端に、風にたなびくのぼり幟が見えたのだ。

はっとして、そちらを向く。

数本の柱に屋根を乗せただけの、東屋と呼んでもよさそうな小屋が建っていた。幟は、その軒先に何本も立てられている。そのうちの一本のそばには木箱が置かれてあり、中には海水浴用の浮き輪がたくさん入っていた。小さな海水浴場の海の家といった建物だが、おかしいのはその幟に書かれた模様だった。いくつもの直線、あるいは三角形、四角形を組み合わせた模様が並んでいる。何を伝えたいのかさっぱり判らないデザインだ。浮き輪のそばの幟だけでなく、軒下に立っている全ての幟がその模様で書かれてあるのだ。あるいはそれは、文字のようにも見えた。

永井は幟から小屋の中へ視線を移した。小屋の中にはいくつかのテーブルとイスがあり、そこに、人型の闇人が三人座っていた。永井はとつさに機関拳銃を構える。だが、その闇人にも違和感を覚えた。これまで永井が遭遇した闇人は、そのほとんどが銃や刃物などで武装していた。中には左官用のこてやぼろぼろの傘など、到底武器とは呼べない物を持っていた闇人や、なにも持っていない闇人も見かけたが、それでも、永井を見つけるとすぐに襲い掛かって来た。常に戦闘できる体勢であったと言える。

だが、そのテーブル席についている闇人には、まるで戦意を感じなかった。それも当然だ。その三人の闇人は、テーブルに焼きそばやラーメンやおにぎりを広げ、それを楽しそうに食べているのだ。海水浴客が海の家で昼飯を食べている——相手が闇人でなければ、そうとしか見えない光景だ。

永井が食事を楽しむ闇人に呆然としていたら、海の方から、陽気に騒ぐ声が聞こえた。振り返って銃を構えると、さつきは気付かなかつたが、全身黒装束に包んだまま海で泳ぐ闇人の姿が見えた。それだけでなく、砂浜にネットを張ってビーチバレーを楽しむ闇人や、ジェットスキーに繋がれたバナナボートに乗り歓声を上げる闇人の姿まであった。食事をしている闇人同様、誰も武器を持っておらず、戦意も感じない。ただ海水浴を楽しんでいる、そんな光景。

背後——海の反対側で車のクラクションが鳴った。反射的に銃を向ける。そこには街が広がっていた。今にも崩れ落ちそうなビルや家屋が建ち並ぶ廃墟——ではない。決して新しい街並みではないものの、しつかりとした五階建てのビル、平屋の民家、二階建ての魚屋・八百屋、学校や公園も見えた。田舎の商店街——そんな雰囲気だが、目につく看板、表札、道端の標識などに書かれた文字は、すべて、あの幟と同じ奇妙な模様だった。

街には闇人の姿もある。せわしない足取りでビルに出入りする幾人もの闇人、民家の軒先で団扇を片手に将棋を指す二人の闇人、魚や野菜を売る闇人と、買い物かごを片手にそれらを買求める闇人、学校の校庭で部活動をする少年少女の闇人や、公園で遊ぶ幼い闇人の姿



までである。

誰ひとり、武器など持っていない。誰一人、戦意など持っていない。あれが闇人でさえなければ、どこにでもあるような夏の田舎町の風景だ。誰もが、夏の暮らしを満喫しているように見えた。迷彩服に身を包み、フェイスペイントを施し、機関拳銃を構えた自分が、ひどく場違いに思えてくる。

魚屋で買い物を終えた女の闇人が、商店街から海沿いの大通りへ出てきて、銃を構えて立ち尽くす永井に気がついた。闇人特有のニヤケ顔が、急速に凍りつく。女の闇人が悲鳴を上げた。その声を聞いた周囲の闇人が、一斉に永井を見る。商店街や学校や公園の闇人、海水浴を楽しんでいた闇人、海の家の人——その場の闇人全員が、一斉に悲鳴を上げた。口々に何か喋るが、その言葉は、永井がこれまでに聞いたことのない言語だった。日本語ではないし、英語でもない。中国語でも、ロシア語でも、アラビア語でもない、まさに、未知の言語。だが、その内の一人の言葉だけが、はっきりと聞き取れた。

「——人類だ!!」

その言葉で。怯え逃げ惑う闇人共の姿で。

永井は、気がついてしまった。

一樹守は言っていた。闇人は、人類が現れる前に世界を支配していた者たちで、光によって奪われた地上世界を奪還するために侵攻しようとしている、と。

ここは、奴らの地上奪還が成功した世界なのだ。

だが、奴らは極端に光に弱い。どんなに黒い布を巻きつけようと、太陽の下で行動できるはずがない。

そう思つて空を見上げ、永井は絶望する。

ずっと、薄暗いと思つていた。夜が明ける前か、陽が沈んだ直後か、なんとなく、そう思つていた。

だが、太陽は、ずっと、永井の頭上にあつたのだ。

ただ、その光が地上に降り注ぐことがなくなつていたので。

永井が見上げた空には、真つ黒な太陽が浮かんでいた。いや、太陽が黒いのではない。何かが太陽を隠している。真つ黒な球体——それも、かなり巨大なものだ。それが空中に浮かび、太陽の光を遮っているのだ。日食のような状態であるが、その黒い球体は、皆既日食よりも完全に太陽を隠していた。真夏の真昼でも、夜に近い暗さ。これならば、闇人共も地上で暮らすことができるかもしれない。いや、現に暮らしているではないか。

永井は、絶叫と共に引き金を引いた。

買い物帰りの闇人が倒れた。夜見島では数発撃ち込まないと倒れなかつた闇人が、一発肩を掠めただけで倒れたのだ。東屋で食事をしている闇人を撃った。弾が小さく威力が弱い機関拳銃なのに、三人の闇人は車に撥ね飛ばされたかのように倒れた。ビーチバレーをしていた闇人を撃った。海水浴をしていた闇人も撃った。すぐに弾が切れたので弾倉を取り替え、また商店街に向けて撃った。武器を持っていない闇人も、女の闇人も、子供の闇人も、すべて容赦なく撃った。予備の弾倉が無くなるまで撃ち、銃弾が尽きた後は、ミリタリーナイフを振りかざして襲い掛かった。とにかく、目につく闇人は全て殺していった。

やがて、何台ものパトカーがけたたましいサイレンを鳴らして駆けつけ、永井は、闇人の警官数十人に囲まれた。

第九十四話 『失われた世界』 阿部倉司 夜見島灯  
台 24:45:55

◇

繰り返す潮騒と海の匂いで、阿部倉司は意識を取り戻した。

そこは、海にせり出した堤防の上だった。どれくらい意識を失っていたのだろうか？ 目の前に広がる暗い海の水平線がわずかに明るくなっており、周辺にもうつすらと光が射し始めていた。陽が昇るようだ。赤い津波にのみ込まれたのは日付が変わるか変わらないかという頃だった。単純に計算すると五時間ほど経っていることになるが、感覚的にはそれほど長い間意識を失っていたとは思えない。一時間程度仮眠を取ったかのような気分だった。

阿部は上半身だけ起こし、周囲を見回した。堤防の先には古い灯台が建っているが、その手前が崩れており、向こう側へ行くことができない。反対側は地下へ続く階段が見えた。すぐ近くには岩肌の洞窟も見える。覚えのある場所だった。古い女と一緒に島から脱出する船を求めて訪れた夜見島港の灯台だ。赤い津波にのみ込まれ、ここまですれ流されてきたのだろうか？ だが、微妙な違和感がある。すぐにその正体に気がついた。海が、赤くないのだ。目の前に広がる海は、黒と青が入り混じった色——陽が昇る前の空の色をしていた。異界の血のような赤い海とは、明らかに違う。

阿部は悟った。異界から脱出したのだと。しかし、素直に喜ぶことはできなかつた。

無事に異界から脱出することができた。鉄塔は破壊したから、闇人共が地上へ侵攻することはできないだろう。あの最後のサイレンは、闇人共を束ねる異形の生物の断末魔の叫びのようにも思える。恐らく、誰かがあいつを倒したのだ。闇人や屍人の脅威は去ったはずだ。だが、そうなったところで、柳子はもう戻って来ない。

夜見島を調査して判った。阿部のアパートで見つかった顔の無い死体は、やはり、同棲相手の柳子だったのだ。

柳子は異形の生物が飛ばした鳩の一人だったが、使命を捨て、阿部と生きることを選び、その結果、裏切り者として処分された——夜見島を訪れて判ったことはそれだけだ。ハッキリ言っただろうでもないことだった。阿部が夜見島を訪れたのは柳子の正体を探るためではない。彼女が生きているという可能性に賭けたのだ。その可能性は、もう無い。

そして、占い女や作家先生の行方も知れないままだ。いかに能天気な阿部でも、これで喜べるはずがなかった。

それに。

胸に、大きな喪失感があった。心にぽっかりと穴が空いてしまったかのような感覚。それは、柳子が死に、占い女や作家先生が行方不明だから、とは、微妙に違うような気がした。阿部自身にもうまく説明できないが、彼女たちは死んだのではなく消えた——そんな感覚なのだ。

階段の方からツカサがやってきた。阿部同様、大きな喪失感を抱いたような顔をしている。

そして、阿部の悲しみに寄り添うようにそばに座り、鼻を摺り寄せてきた。

阿部はツカサを抱きしめ、泣いた。

二度と戻らない柳子と、占い女と、作家先生と、そして、夜見島に関わり、不幸な結末を迎えた全ての人たちを思い、泣いた。

陽が昇り、温かな光が阿部とツカサを包んでも、ずっと泣き続けた。

☆

——どれくらい泣き続けていたか。

「——おおい。ここは立ち入り禁止だ。勝手に入っちゃいかんぞ」

階段の方から声をかけられた。そちらを見ると、警官姿の年輩の男が、ライトで阿部たちを照らした。

——やべえ。そう言えばオレ、柳子を殺した容疑で指名手配されてるんだった。

異界での戦い続きですっかり忘れていた。残念ながら、柳子殺しの容疑を晴らすのは極めて困難だと言わざるを得ない。真犯人は闇人共の仲間だ。戸籍上は存在しない者であり、異界に帰ってしまったのです。すでにこの世界にも存在しない。すなわち、柳子殺しは怪異が引き起こした殺人事件なのである。物の怪けや妖怪たちの知恵の神に相談しなければならぬ案件だ。とにかく今は逃げるしかないが、ここは海にせり出した堤防の上だ。一人ならともかく、ツカサと一緒にでは海に飛び込んで逃げるわけにもいかない。

「まったく。こんなところでなにをやつとるんだ」年配の警官は、ライトで阿部の顔を照らし、しげしげと見つめた。「……見ない顔だな。本土から来たのか？」

「あ、いや、オレはその……」

阿部がしどろもどろになっていると、警官はライトを消し、「まさか、祭りを見に来たのか？」と言って、肩を揺らして笑った。「残念だったな。祭りと言っても、漁師が広場で酒盛りしてるだけの、小さなものだ」

「……祭り？」

「まあ、とりあえず一度戻ろう。その灯台は、もう長く使われてない。ずっと手入れされてないから、この堤防もいつ崩れるかわからない。こちら辺は潮の流れが速いから、もし海に落ちたら、あつという間に流されてしまうぞ」

そう言うので、阿部とツカサは警官と共に一度地下道を通り、資材倉庫がある広場まで戻って来た。

警官は丘の上へ続く道を指さした。「この道を真っ直ぐ行けば、祭りをやってる集落に着く。まあ、せっかく本土から来たんだ。ゆっくりしていきなさい。退屈だったら、北の地域へ行ってみるといい。遊園地や、古い遺跡があるから」

そう言つて立ち去ろうとする。

「ちよつと待てよ。あんた、オレのこと逮捕しなくていいのかよ?」

阿部がそう言つて呼び止めると、警官は振り返つて目を丸くした。「逮捕? バカなこと言つちやいかん。いくら立ち入り禁止の場所に入ったからつて、逮捕まではせんよ。でも、もう二度とするんじゃないぞ?」

「いや、そうじゃなくて、オレ、指名手配されてるだろ? 阿部倉司だよ。多河柳子を殺した犯人の。いや殺してねえけどよ。指名手配犯をこんな堂々と見逃したら、あんた始末書ものだぞ? 降格の上地方の寂れた交番に左遷されるぞ?」

「ここより寂れた交番があるなら行つてみたいものだな」警官は一度笑つたが、すぐに真顔に戻る。「しかし、指名手配だつて? そんな話は聞いとらんが……待ちなさい」

警官は肩に取り付けてあつた無線機を取り、どこかに問い合わせた後、また阿部を見た。「本署に確認したが、やはりそんな話は無いそうだ。まあ、何日か前に東京の方で殺人事件があつて、その容疑者が指名手配されているみたいだが、被害者も容疑者も、さつき君が言った名前とは全然違う。悪い冗談はやめたまえ」

「指名手配されてないつて……どういふことだよ? というか、お巡りさん、あんた、そもそもなんでここにいるんだよ? 祭りつてなんだよ? ここは、二十九年前に島民全員失踪した、呪われた島だろ?」

警官は怪訝そうな顔になる。「さつきから君は何を言つとるんだ。本官をからかうと、ホントに逮捕するぞ?」

本当に阿部が言つてることが判らないという表情だった。

「……どういふことだよ……?」

訳が判らず、阿部は小さくつぶやいた。

警官の案内で、阿部とツカサは夜見島港隣の蒼ノ久集落へやってきた。昨日阿部が訪れたときはひと気の無い廃村だったが、警官の言う

通り、集落は小さいながらも祭りでにぎわっていた。何本もの幟が立てられ、軒下には綱で繋がれた紙垂が吊るされ、通りには浴衣や法被を着た人が笑顔で行き来している。

海から丘の上へ続く曲がりくねった道を上ると、小さな社がある広場に出た。タコ焼きや金魚すくいなどの出店がいくつもあり、奥では漁師たちが集まって酒を飲んでいた。

「こちらが、この島と、周辺の海を守る神様だ」警官が、社に手を向けた。丘の下に広がる集落と海を望むように建てられたその社には、『蛭子命』という扁額が掲げられてあった。

「蛭子命って、イザナギとイザナミの間に生まれた最初の子供だけど、醜いから葦の船に乗せられて流された、ってやつだよな？」

阿部がそう言うのと、警官は感心したように頷いた。「詳しいな、君」  
「偉大なる先人の知恵だな」

「君の言う通りだよ。流された蛭子様が流れ着いたという伝承は日本各地にあるが、この島の蛭子様もそんなひとつだ。ただ、この蛭子様の伝承は少々変わっていてな。海から流れ着いたのではなく、大昔、四鳴山の山頂に、御神木と共に降臨されたんだ」

「大昔って、一三〇〇年くらい前か？」

「いや、もっと前だよ。正確な記録は残つたらんからわからんがな。ちようど、長く時化が続き、漁に出られなかったときだそうだ。このままでは島民全員飢えてしまうと思っていたら、蛭子様が降臨され、島長に一本の刀を授けられたんだ。島長がその刀を一振りすると、たちまち時化は静まり、島民たちは漁に出られるようになった。以来、島の民は蛭子様を島の守り神として祀り、御神木を崇めた。また、授かった刀は荒れ狂う海を凪ぎさせたことから『潮凪』と名付けられ、今でも島の網元である太田家の宝物庫に収められているそうだ」

「太田家？」

「あのひとだ」

警官は広場の隅に手を向けた。大勢の村人に囲まれて、片目に眼帯代わりの黒い布を巻きつけた老人と、着物姿の年配の女性が、上機嫌で酒を飲んでいた。

「眼帯をかけているのは、先代の当主・太田常雄さんだ」警官が説明する。「現当主は娘さんの方・ともえさんだ。みんなからは『姐さん』と慕われておるよ。なかなか革新的な当主でな。最近では観光業に力を入れ、島外から人を呼ぼうとしているんだ。わしらみたいないな古い人間は、こんな何も無い島に人が来るのかと疑問だったが、古い遺跡や鉱山跡を見学したがる人が結構やってきて、ここ十年ほどで、随分と島もにぎやかになったよ」

「屍人や闇人みたいな化物が現れ、頻繁に島民が失踪したり船が消失したりするから『呪われた島』と呼ばれ、周囲の船乗りから避けられてるんじゃないのか？」

阿部がそう言うと、警官は不快そうに表情を歪めた。「だから君は何を言つとるんだ。そんなこと、冗談でも漁師たちの前で言うんじゃないぞ？ みんなこの島に住んでることを誇りに思つとるんだ。海の男は気が荒い。バカにすると、袋叩きにされるぞ」

真剣な表情で忠告する。阿部としては、冗談を言つてるつもりも、バカにしているつもりも無い。だが、警官は本当に島民の失踪事件も大型客船の消失も知らないようだし、実際に島民は目の前に存在している。

「……なんなんだよこれは。ほんと、どうなつてんだよ……」

訳が判らず、阿部はそうつぶやくだけだった。

不意に、ツカサが顔を上げた。大きく一声鳴くと、広場の入口の方へ駆けて行く。

「おい、どこ行くんだ？」

阿部が追いかけると、ツカサは、坂を上がって来た二人組の男女に駆け寄った。二人のまわりをぐるぐると回ると、嬉しそうな声で鳴き、尻尾をちぎれんばかりに振りたくる。やって来たのは、年配の女性と三十代くらいの男だった。突然大型犬がじゃれついて来て、男は驚きと困惑が入り混じった声を上げた。

その、男の顔を見て、阿部も「あー」と声を上げた。「先生！ 先生じゃねえか！ あんた、無事だったのか!!」

阿部も駆け寄る。現れた男は、異界で一時的に阿部と行動を共にし



た作家先生に間違いなかった。

だが、男はツカサから阿部に視線を移し、ますます困惑したような顔になった。「……失礼、どちら様でしたか？」

「なに言っただよ先生。俺だよ。阿部倉司だよ。先生と一緒に遊園地に行つて、地獄みたいなところに下りて行つたじゃねえか？」

「……ひとちがいではないですかね。私は東京にある城聖<sup>じょうせい</sup>大学で講師をしている三上脩ですが？」

「大学の……講師？」

「ええ。そこで、考古学を教えてください。今日は、ひさしぶりに休みを取り、実家に帰省したんです」

今度は阿部の方が困惑した表情になる。「なに言っただよ、あんた、作家の先生だろ？ ほら、『人魚の涙』って小説がメチャクチャ売れて、テレビや雑誌とかにいっぱい出てたじゃねえか」

「本はいくつか執筆していますが、学説に関することです。小説は書いていないですね。私には、そんな才能は無いですよ」

「なに言っただよ、姉と慕う女性の影響で小説を書いたって、インタビューされるたびに言っただろ」

「やはり人違いですね。私に、姉はいません。家族から影響を受けたとしたら、それは父です。父は世界的に名の知れた考古学者で、私は父に憧れて、今の職に就きました。小説を書こうと思ったことは、一度もありません」

「知らないっていうのか……だったら、この犬はどうだ？」阿部はツカサのそばにしゃがむ。「先生の飼犬……先生の目の代わりになってた犬だよ」

「それは盲導犬ということですか？ 私は、目は見えますが」

三上は当然のように答えた。確かに、三上はずっと阿部と目を合わせて話をしている。以前のような目が見えない様子は、少しも感じない。

「なんだよそれ……いったいどうなっただよ……」

もはや阿部の思考は追いつかず、ただ「どうなっただよ」と繰り返すしかできなかつた。

「コラコラ、君、おかしなことを言つて、脩君を困らせるな」警官もやってきて、混乱する阿部をいさめた後、三上たちを見た。「すまないね、脩君。彼は、本土から来たらしいんだが、ずっとおかしなことばかり言ってるんだ」

そして、警官は三上から隣の女性に視線を移した。「弥生さんも、気を悪くせず、久しぶりに母子水入おやしらずで、祭りを楽しんでください」警官がそう言うと、女性は、「いえ、私は何も気にしてませんよ」とほほ笑んだ。

その、女性を見て、阿部はまた、はっとする。

「……柳子……じゃ、ねえよな……？」

その女性は、阿部と同棲し、闇人の仲間に殺された柳子にそっくりだった。ただ、柳子が十八歳だと言っていたのに対し、その女性は六十代くらいだ。年代が違いすぎる。それでもそっくりだと思つたのは、その女性が、柳子がそのまま歳を重ねたとしか思えない姿だったからだ。

「……何だよこれ……もうわけわかんねーよ……いつたい、なにがどうなつてんだよ……」

混乱のあまり、阿部は自慢のリーゼントの頭を掻きむしる。本当に訳が判らなかつた。まるでパラレルワールドに迷い込んだ気分だった。

「何か、特別な事情がありそうですね」最初は困惑していた三上だったが、阿部のただならぬ様子に、冗談を言っているわけではないと気付いたようだ。「詳しく話していただけませんか？」と、真剣な表情で訊いてきた。

阿部は大きく深呼吸をして混乱した気持ちを落ち着かせると、アパートの部屋で柳子が死んでいたところから、ゆっくりと話し始めた。占い女の助言で夜見島へ向かったこと、夜見島にまつわる様々な怪異の話、その夜見島に向かう途中の船で三上と知り合ったこと、高波で船が沈み、流れ着いた島で赤い津波に襲われて異界に飲み込まれたこと、異界の夜見島で屍人や闇人という化物と戦つたこと、など、全て。

話を聞いた三上は、「ふうむ」と重い声で唸り、顎に手を当てて考え始めた。その間、柳子に似た女性——三上の母親は、そばにしやがんだツカサの背を撫でながら、警官とおしゃべりをしている。警官は「今日の昼の船で、娘が孫を連れて帰って来るんです」と、上機嫌で笑っていた。

しばらく考えていた三上が顔を上げた。「大体の事情は判った。いまの話から推理すると、君は、赤い津波にのみ込まれるたびに、それまでとは異なる世界に移動しているんじゃないかと思う」

「異なる世界……?」

「そう。八月二日の夜十一時、君は、島民が全員失踪したという夜見島にいた。でもその直後、赤い津波にのみ込まれ、気がついたら偽りの夜見島にいたんだらう?」

「ああ、確かにそうだ」

「そして、八月四日の〇時にもう一度サイレンを聞き、また赤い津波にのみ込まれた。君はまた別の世界に移動したわけだが、ここは、君が元々いた世界とは微妙に違う、いわば、並行世界なんだよ」

「並行世界……じゃあ、ここは本当にパラレルワールドなのかよ!」

「そうなるな。君が元いた世界と比べるなら、ここは『怪異が存在しない世界』とでも言うべきかな。君の世界での夜見島に関わる奇妙な噂——全島民失踪や、大型客船の消失、そして、屍人や闇人に関する話や伝承は、この世界の夜見島には存在しない。かつて光の洪水に追われて地の底や海の底に逃げたっていう闇の住人は、この世界では最初からいなかったんだ。だから、それにまつわる怪異も発生していない。島の住民は誰一人失踪していないし、大型客船も消失していないだよ」

「じゃあ、柳子はどうなったん!? 占い女は!」

「君の話によると、その柳子という少女の誕生には怪異が関わっているようだから、あるいは——」

三上は最期を言い淀んだが、阿部にも何が言いたいのかは判った。阿部は、慌てて財布を取り出した。その中に、柳子とのツーショット写真を入れ、いつも持ち歩いている。阿部のアパートで撮ったもの

だ。カメラに向かつておどけて笑う阿部と、フラッシュを嫌ったのか  
暗い表情で顔をそむけている柳子。彼女が写っている写真は、この一  
枚だけ。阿部の、大切な思い出の一枚だ。

だが――。

取り出した写真に写っていたのは、阿部一人だけだった。

柳子が写っていたはずの場所には、誰も写っていない。まるで写真  
から抜け落ちてしまったかのように、部屋の様子が写っているだけ  
だ。

「じゃあ、みんないなくなっただってことか……柳子も……占い女も  
……みんな……」

阿部は膝をつき、泣き崩れた。写真がくしゃりと握りつぶされた  
が、もはやどうでもよかった。柳子と写った唯一の写真だったから大  
切にしていたのだ。自分一人で写っている写真など、持っただけでも意  
味が無い。阿部は泣き続ける。自分は、とんでもない世界に飛ばされ  
てしまった。これまで築いた柳子との思い出が消えた。この世界に  
は、絶望しかないのかもしれない。

「……まてよう？」

阿部は、けろりとした表情で顔を上げた。

「先生が小説を書いてないってことは、あの話を俺が書けば、先生の代  
わりに俺が大人気作家になれるってことだよな？」

突然の話に三上は目を丸くしていたが、やがて呆れた表情になる。  
「いや、それはどうだろう？　小説なんてそんな簡単なモノじゃない  
と思うし、仮に人気作家になれたとしても、それはまぎれもなく盗作  
だ」

「そっか。まあそれは冗談だけどよ、でも、あの化け物どもがいなく  
なっても、先生がいるんだから、柳子や占い女も、どこかにいるって  
ことだよな？」

三上は一度うーんと唸った後で言う。「確かに、その可能性は高い  
が、柳子という娘も、占い師の女性も、君と出会うきっかけが無くなっ  
ているから、二人とも君のことは知らないはずだ。残念だが、君との

接点がないんだよ」

「だったらそれでもいいや。もう一回柳子と出会うところから始めればいいだけだからな」

「しかし、歩んだ人生が違えば性格も違うし、同じところに住んでいるとも限らないから、出会えるかどうかとも判らない」

「大丈夫だって。そこは、気合でなんとかなるさ」

阿部はそう言つて、手のひらに拳を打ち付けた。

「き……気合で、かい？」

三上は呆れた顔になったが、やがておかしそうに笑った。

阿部も、同じように笑う。

——そうだ。

自分は、この世界の何に絶望していたのだろうか？ 改めて思う。

この世界に、絶望なんて無い。

柳子が殺され、もう二度と会うことができない世界——どうあがいても絶望なのは、元いた世界の方だ。

それに比べ、この世界に、柳子はある。

たとえ阿部のことを知らなくても、たとえ性格が違っていたとしても、たとえどこに住んでいるか判らないとしても。

柳子はどこかで生きている——その希望を持てるだけで、世界は輝いて見えた。

阿部は、鼻の下をこすつて立ち上がった。「こうしちゃいられねえ。お巡りさん、本土に帰るには、どうしたらいい？」

三上の母親に娘と孫の話をしていた警官は、「なんだ、祭りはこれからなのに、もう帰るのか？」と、呆れ声で言った。「その港に、もうすぐ昼の定期船が来る。でも、それを逃してもまだ夕方の便があるから、ゆっくりして行けばいい」

「そんなヒマねえよ。早く帰つて、柳子を見つけてやらなきや。アイツだって、きつと俺のこと待ってるはずだからな！」

そう言つと、阿部は走つて港へ向かおうとした。

「おい、阿部君！ この犬はどうするんだい!？」

三上が呼び止めた。ツカサは三上の母のそばに伏せたままだ。阿

部を追う様子は無い。

阿部は振り返ると、「先生の犬だろ？　大事にしてやってくれよ？」と言った。

「しかし……」困った顔でツカサを見る三上。

「いいじゃない？」と、三上の母が言い、ツカサの頭を撫でた。「私、このワンちゃん気に入っちゃったわ」

ツカサは舌を出し、嬉しそうに三上の母を見た。ツカサにとつての飼い主——この場合はパートナーというべきか——は三上であり、阿部ではない。ツカサがここに残るのは当然と言えた。

「じゃあな、先生！　ツカサも、元気でな！」

阿部は大きく手を振ると、全力で坂を駆け下りた。もう振り返ることはない。ただ、前に向かって走る。

——待ってるよ、柳子！　どこにいたって、絶対オレが見つけてやるからな!!

阿部は拳を振り上げ、喜びの声を上げて飛び跳ねた。

☆

夜になり。

祭りが終わり、家に戻った三上脩は、突然増えた家族に困惑していた。居間のちゃぶ台を囲んで、寝間着姿の三上と母、そしてツカサが座り、寝る前のひとときのくつろぎを楽しんでいる。ツカサは、ずっと三上のそばを離れようとしめない。それも仕方ないかもしれない。彼女が元いた世界の三上は目が見えなかったらしく、ツカサは盲導犬なのだ。逆に、ツカサの方も、自分に頼らず一人で行動している三上に困惑しているかもしれない。

やれやれ、と、三上は肩をすくめた。明日、本土に渡ってケージや餌など、必要な物を買ってこなければならぬ。犬なんて今まで飼っ

たことはないから、飼い方も勉強しなければならない。思った以上に大変だろうが、ツカサの嬉しそうな顔を見ていると、まあ、頑張ってみるか、という気持ちになつてくる。

「しかし、変な人だったな、彼は」

家に帰つても、考えることは昼間出会つた阿部倉司という男のことばかりだ。あのときは、彼の話を真剣に聞き、自分なりに仮説を立てて話をしたが、いま考えると、彼の話が本当だったのか嘘だったのかは判らない。警官の言う通り、ただからかわれただけのような気持ちでくる。

「でも、きっといい人よ」母は、阿部の笑顔を思い出すような表情で言う。「明るくて、前向きで、温かくて——まるで、太陽みたいな人だったわ。柳子ちゃん、だっけ？ 会えるといいわね」

柱時計が、ポーン、ポーン、と十一回鳴つた。夜の十一時。テレビはニュースに切り替わり、三日前に東京都新宿区の古いアパートで発生した殺人事件の続報を伝えていた。被害者は中島一郎三十三歳で、顔を何度も殴られた状態で発見された。警察は事件以降行方が知らない同棲相手の木船倫子三十三歳を殺人容疑で指名手配をしているが、現在も行方はつかめていない、という。

「さて、僕はそろそろ寝るよ」

三上は立ち上がると、二階の自室へ向かおうとした。

「あら、久しぶりの帰省なんだから、ここで寝ればいいじゃない。昔は、暗い部屋が怖いって、一緒に寝たでしょ？ 母さんが、どんなに勇気を出して頑張つて、って励まして、泣いてきかなかつたんだから」

「もう子供じゃないんだから」子供の頃の話を持ち出され、三上は照れ隠しの苦笑いを浮かべる。

「親からしたら、子供はいつまでたつても子供よ。いいじゃない、たまには」

そう言うと、母はテレビを消し、ちゃぶ台を片づけ、押し入れから布団をふたつ引つ張り出して敷いた。父の布団だが、父はこのところ仕事が忙しく、今回は帰省できなかつた。

「まったく、しょうがないな」

三上は仕方なく布団に入る。ツカサはその隣で伏せた。

母も布団に入った。

「——おやすみ、脩」

母が笑顔で言う。

なぜだろう——そのとき三上は、母のその笑顔を、聖母のようだ、と感じた。

三上も笑顔を返した。

「おやすみ、母さん」

そして、電気を消す。光が失われた部屋は、闇に包まれる。

三上は、安らかな闇と、優しい母の愛に包まれ、ゆつくりと、まどろみの世界へ落ちていった。

『SIREN 2 (サイレン2) / 小説』 終わり